

第百九年(通卷一六七号)

山

岳

二〇一四年



# 山岳 二〇一四年 目次

## 〔記録〕

アウトライアー（ジャナク・チュリ）東峰初登頂……………2013青山学院大学山岳部アウトライアー登山隊……………7  
 中国四川省・横断山脈登攀隊報告……………慶應義塾大学体育会山岳部プロジェクト100……………33

## 〔調査・研究〕

富士山におけるスラッシュ（融雪）雪崩と積雪のスラッシュ化に起因する山岳遭難事故……………安間 莊……………55  
 東チベット・四川青海4500km——2013年6月……………中村 保……………84  
 木暮理太郎と『山岳』編集……………児玉 茂……………130

## 〔読物〕

憧憬のヒマラヤ登山——定年退職後に挑んだ私のふみあと……………南井英弘……………201  
 京大土山岳会・高橋健治と妻ローゼ・レッサの生涯……………緑爽会シンポジウム……………231  
 若き茨木猪之吉の肉筆絵葉書発見……………関塚 貞亨……………257  
 スイス人岳友の自然回帰——その生涯……………岡澤 祐吉……………273

図書紹介

- 山岳科学ブックレット①～⑩(信州大学山岳科学総合研究所)……松澤節夫…293  
 /富士山に登った外国人(山本秀峰)……布川欣一…295 / 銀嶺に向かつて歌え  
 (深野稔生)……熊崎和宏…298 / 世界の山岳大百科(英国山岳会、英国王立地理  
 学協会)……飯田年穂…301 / 登山の哲学 登頂 竹内洋岳 頂へ、そしてその  
 先へ(竹内洋岳)……絹川祥夫…305 / 山の本をつくる(中西健夫)……節田重節  
 ……308 / 立山ガイド史(五十嶋一晃)……磯野剛太…310 / アルプの時代(山口耀久)  
 ……近藤雅幸…312 / 紫岳13号(静岡大学山岳部紫岳会)……田村俊介…316 / 我が  
 山と南極の生涯(平山善吉)……平井一正…318 / Chronik der Erschliessung des  
 NANGA PARBAT(W・ハイヒェル)……平井吉夫…320 / The K2 Man(C・ム  
 アーヘッド)……児玉 茂…322

追悼

- 羽田栄治さん(川嶋新太郎)…329 / 平野 明さん(滝本幸夫)…333 / 山下康成さ  
 ん(孤田 快)…337 / 室賀輝男さん(土田幸雄)…341 / 早川瑠璃子さん(山口節  
 子)…344 / 大野栄二さん(小林 敏)…345 / 阿部和行さん(金井良碩)…347 / 湯口  
 康雄さん(佐伯郁夫)…349 / 五百澤智也さん(清水長正)…351 / 一力英夫さん(宮  
 下秀樹)…358 / 藤井 信さん(橋本正巳)…361 / 小野健さん(山田智子)…365

会務報告	369
支部の活動報告	404
委員会の活動報告	457
山岳図書目録(2013年)	A16

表紙デザイン 小泉 弘  
表紙版画 「菜種搾りの風景」 塚本晴雄



## アウトライアー（ジャナク・チュリ）東峰初登頂

### 2013青山学院大学山岳部アウトライアー登山隊

アウトライアーはネパール・ヒマラヤの東の外れ、中国との国境に位置する標高7090mの峻峰である。そのユニークな山名は、「探検登山の陰の巨人」と謳われた英国の探検家、アレクサンダー・ケラスによって命名された。

1911年、ケラスはシツキムとチベット、ネパールの国境にそびえるジョンサン・ピークの周回を試みた際、行く手をさえぎるかのようにそびえ立つ山を前にして引き返した。そして、これは「登る対象の外存在」という意味を込めて、英語のOuter（「外れ値」や「局外者」、転じて「離れ島」の意味）と名付けたと伝えられている。

ネパール政府は長い間、未解禁峰としてこの山への入山を制限していたが、2002年にジャナク・チュリの山名

で登山を解禁。2004年にはルーマニア隊が、2005年にはスロベニア隊が、それぞれ南西面から登頂を試みたが、いずれも6500、6650m地点で敗退していた。そして2006年になってようやく、アンドレイ・シユトレムフェリとロツク・ザロカルのスロベニア隊が南西ピラーをたどり、本峰（西峰）の初登頂に成功する。しかし、南西壁から東峰へのルートはその後、挑む者もなく、未踏のまま残されていた。

そこで、かねてよりこの地域の山を研究していた青山学院大学山岳部は、アウトライアー東峰の初登頂を目指して2010年秋に登山隊を送り込んだ。同大学は1965年にアウトライアーの西にそびえるラシャールI峰の登山計

画を進めていたものの、シッキムとチベット間の紛争のために入国が許されず、断念したという過去がある。その後、ラシャールI峰が2000年にスロベニア隊によって登頂されたことを受け、近隣にそびえる未踏峰を探した結果、アウトライアー東峰を新たな目標に定めたわけである。

2010年の登山隊は天候にも恵まれ、南西壁を6700m地点まで登ったものの、国境稜線直下の不安定な雪壁に阻まれて登頂を断念していた。今回の登山隊は、そのリベンジを目的に再結成されたものである。

アウトライアー東峰第2次登山隊は、山岳部OB会会長の萩原浩司を総隊長に、OB3人、現役学生3人の計6人で組織された。2回連続での挑戦となるのは、前回の遠征でただ一人南西壁の6700m地点まで到達している山岳部監督の村上正幸、そして、ベースキャンプ手前のローナクまで同行した主将の本田優城(4年)。ここに山岳部コーチの古城海太が加わって、現役部員の真下孝典(2年)と、4月に入部したばかりの中西謙(1年)をフォローする計画であった。

ただし、経験の浅い1・2年生部員を南西壁から上に上げる予定はなかったので、「現役学生によるヒマラヤ未踏峰の初登頂」という目標は、本田隊員の肩に懸かっていた。

## ベースキャンプへの長い道程

9月8日に日本を出国、カトマンズで装備と食料を整えた4人の先発隊(古城・本田・真下・中西)は、陸路で2日をかけてタプレジュンに到着。ここで50人のポーターを雇い、11日、トレッキング・ルートの最終目的地、ローナクに向けて出発した。7日間のキャラバンを経て標高3595mのグンサに到着すると、そこに後発隊の2人(萩原・村上)が、カトマンズからヘリコプターを使って入山(チャーター費用は1万\$)。18日に全隊員が揃ってベースキャンプを目指した。

高度を上げるたびに宿泊地の裏山に登るといふ高所順応を繰り返しつつ、トレッキング・コース最後の宿泊地、ローナクに着いたのは22日のことだった。ここまではカンチェンジュンガ北面BCへの一般トレッキング・コースとなっているため道はよく整備されているが、私たちが分け入るブロークン氷河に道はない。ポーターから聞くと、ここによると、3年前の第1次登山隊が入谷して以来、この谷に足を踏み入れた者は誰もいないとのことだった。

カンチェンジュンガ氷河と別れ、北に向かうローナク氷

河をしばらく廻り、北東から流入するブローケン氷河に分け入る。ブローケン氷河の入口は、兩岸を200m以上の断崖に囲まれたゴルジュ帯となっていた。ここが一つの関門となって、これまであまり多くの登山者を迎え入れることがなかったのだろう。

左岸側壁の危険箇所にはフィックス・ロープを張り、下級生やポーターたちの安全を確保して危険地帯を通過すると、谷は明るく広がりを見せる。アイガー北壁に似た岩壁の裾を巻くように谷を廻ると、目の前にはヒマラヤ巒をまとったドローム（6881m）の鋭い山容が見えてきた。

ゴルジュ帯の先で谷底に下りると、そこはブローケン氷河の舌端部分。氷河の末端から流れ出る川を飛び石で渡り、斜面を登ると台地状になっていて、3年前に挑戦したときに利用したベースキャンプ跡地だった。標高5200m。今回もここにベースキャンプを設営する。

翌日からは、次のキャンプ1（C1）に向けての荷上げと高所順応を繰り返した。そして、先発隊が日本を発つてから実に19日目、9月26日になってようやく、目標のアウトライアーの姿を目にすることができた。

初めて見たときの印象は、「雪が多い」ということだった。前回、越えられなかった南西壁上部の斜面にクレバスは

見当たらず、そこに至る雪壁もスムーズな斜面となっている。ただし、懸垂氷河左のクローアールには雪崩の跡が顕著に見てとれるため、ルート選択と雪質の確認には慎重さが必要なことがよく分かった。この状況が好ましいものなのか、そうでないかと問われれば前者である。ただの勘ではないが、このとき、これから大量の降雪でもない限り、上部の雪壁は問題なくクリアできるものと感じていた。

その後、氷河手前の標高5600m地点にC1を設営。そこからさらにブローケン氷河源頭の氷原に足を踏み入れ、複雑なクレバス帯を越えた先の雪原上にC2（標高5800m）を設営し、南西壁の登攀に備える。ブローケン氷河は思っていたほどクレバスの発達が少なく、前回、参加したことのあるネパール人スタッフにより、迷路の中のルート設定はスムーズに行なわれた。

10月5日、頂上アタック態勢を整えて、萩原隊長以下4人の登頂メンバーがC2に入った。

ところが、翌日から暴風雪のために停滞を強いられてしまう。2013年のネパールはモンスーン明けが例年になく遅れていて、朝、天気が悪くても午後には雲に覆われ、小雪が舞うといった不安定な天気が続いていた。前回の経験から、10月に入ればモンスーン明け後の安定した晴天が

続くものと信じていたのだが、ここまで不順な天候は誤算であった。雪原に張られたテントは風に翻弄され、2日間、壁に近づくことさえ許されなかった。

ようやく青空を目にしたのは10月8日のことだった。この日、体調の優れない古城隊員が登頂をあきらめ、大事をとってC1に下山する。先発隊のリーダーとして現役部員たちを引き連れて入山し、高所対策も万全と見られていたのだが、実に残念な結果となってしまった。

この日は南西壁の下部雪壁にフィックス工作に向かう。前日までに降った雪の量はC2で5〜10cm程度で、急傾斜の南西壁ではほとんどが落ちてしまったようであり、壁そのものは堅雪となっていて、快適に登ることができた。主にスノーバーを使って懸垂氷河直下までロープを固定し、翌日の頂上アタックに備える。

そして10月9日、萩原・村上・本田の3人に、ネパール人スタッフ3人を加えた6人が頂上を目指すことになった。

## 南西壁登攀

南西壁の登攀は、傾斜50〜60度の雪壁から始まった。

今回の登山は、隊員たちの力量と、安全・確実な登頂計画を考えて、固定ロープを使った登山スタイルを採用している。また、1回のビバークで頂上に届かなかった前回の教訓を生かし、壁の上部にC3を設けて、2日間をフルに使って南西壁を攻略する予定である。

登攀ルートは、南西壁中央の雪壁から上部岩壁帯とのコインタクト・ラインに沿って右上するラインを選んだ。懸垂氷河に直接突き上げる正面のクローアルには雪崩の跡が残っており、上部からの落石、落水などが集中すると見ても判断である。

下部の雪壁は雪質も安定しており、既知のルートであることも手伝ってスムーズに登ることができた。途中、頭上を岩壁帯に阻まれると、岩に支点を取りながら右へ右へとトラバースし、計画どおり懸垂氷河上の斜面に到達。雪の急斜面を切り崩し、テント2張分のスペースを確保してC3とする。高度計は6500mを示していた。

テントは急斜面の狭いスペースに設営したため、トイレに出るのにもセルフビレイが欠かせない。また、上部斜面から落ちる雪が常にテントの側面を圧迫し、快適とは言い難い状況ではあったが、クレバス内でビバークした前回よりはまだまだマシだろう。高度と疲労の影響で食欲が全く湧か

ないなか、インスタント雑炊を無理やり胃に流し込み、水分をたっぷりとってシユラフに潜り込んだ。

翌朝6時、頭上を圧するようにそびえる上部ミックス壁に向かう。ここが南西壁の核心部。前回、越えることのできなかつたポイントだ。標高7000m近い高所で、日の当たらない早朝の登攀は寒く、厳しい。ただし、前回と違って雪は安定しており、その下の氷の層にアックスがよく決まる。薄い酸素にあえぎつつ、チムニー状の岩場を2時間近くかけて突破し、傾斜の緩んだ雪壁を登りつめると中国との国境稜線に飛び出した。

そこで私たちを待ち受けていたのが、チベット高原から吹きつける烈風だった。雪煙が舞い、フードの隙間から入り込む風が容赦なく肌を刺す。さらに頂上へと延びる尾根は、岩を露出させていて予想以上に悪かった。全員が安全に頂上を踏んで帰ってくるには、どうやら時間もロープも足りそうにない。この日まで3日連続の快晴が続いており、翌日の好天は全く保証できないという状況が気になったが、後1日だけ、奇跡の晴天を祈ってC3に引き返すことにした。

10月11日。我々の祈りが通じたのか、4日連続の快晴の朝を迎えた。テントの外を見下ろすと、インド国境の稜線

から昇った朝日が眼下の氷河を黄色に染めていた。空は昨日と同様に、この上なく青い。そして、見上げる南西壁のミックス地帯は、日陰の中で青白く不機嫌そうな表情を見せていた。

高所での連泊で疲れているはずだが、気力がそれをカバーして、メンバー全員の調子は悪くなかった。それに、私たちには前日に残しておいたフィックス・ロープがある。核心部の登攀はそれを使い、前日とは比較にならないくらい簡単に、日の当たる国境稜線へと這い上がることができた。

幸運なことに、前日の身を切るような強風は収まっていた。どうやら一番晴れて欲しい日に、一番の天気を引き当てたようだ。おかげで前日、引き返した先の岩場もスムーズに乗り越えることができた。

鋭い岩混じりの雪稜が傾斜を落とし、頂上ドームに続く穏やかな雪面の中に吸収されてしまうと、後は最高点に向けてひたすら雪の斜面を歩くだけだった。下界の40%と言われる酸素濃度も、蓄積されているはずの疲労も、世界の屋根の一部を、世界で初めて歩いているという高揚感が忘れさせてくれる。踏み出す一歩一歩は重く、小さく、ゆっくりにしたものであったが、頂上は確実に近づいていた。

傾斜がさらに緩むと、ヒマラヤン・ブルーの空の下に、これまで誰にも踏まれたことのない頂が見えた。小広い雪原となった頂上ドームを南の端まで歩き、それ以上高い所がないことを確認して、ピッケルを深々と突き立てる。

2013年10月11日、12時30分、登頂成功。

視界の先には、エベレストをはじめとするヒマラヤの高峰が、振り返ればチベット高原の茶褐色の大地が、地球の弧を描いて広がっていた。

少し遅れて本田隊員、最後に村上登攀隊長が到着する。二人にとっては3年越し、青山学院大学山岳部にとっては、このエリアに注目してから実に40年の時を経て、夢がかなった瞬間であった。

## 試練と忍耐の下山

登頂後は一気にC2まで下ることに決めていた。さすがに5日連続の快晴はあり得ないだろうという天気を読みと、高所に長く滞在する危険を避けるための、厳しいが当然の選択であったと思う。もしC3で雪に降り込められた場合には脱出不可能、雪崩の餌食になること間違いなし、なのだから。

午後2時、下降を始めると、それまで微風快晴だった穏やかな天気が一転、いきなり雲に覆われてしまう。この天気の急変には驚いた。四方、どこにも雲の存在を気にしていなかったのに、我々が下るのを待っていたかのように、周囲は完全に雲に覆われてしまったのだから……。

先頭を下っていた私は、国境稜線のプラトリーへと下る途中で固定ロープの支点が抜け、雪の斜面にたたきつけられた。浅くねじ込んだアイス・スクリューが日射で緩んでいたようだった。幸いバックアップの支点のおかげで落下距離は数mで済み、また、ハーネスから取っておいたブルージックのおかげでケガもなく、最悪のケースは免れることができた。

C3を撤収するころには日が暮れて視界が利かなくなっていた。懸垂氷河から岩壁沿いのトラバースを終え雪壁に入ると、所々埋もれたフィックス・ロープを掘り出しながらの下降となる。

今度は突然、頭に強い衝撃を受けた。後から下りるメンバーが落とした雪の塊がヘルメットを直撃し、ヘッドランプが吹き飛んでしまった。首が少し痛んだが、下るのに問題は無い。遥か下の闇の中に小さく、落ちていったヘッドランプの光が見える。雪壁のため予備のライトを出す余裕

もないので、仕方なく雪明かりの中、手探りでロープを掘り起こしながら下降を続けた。南西壁の基部に降り立つと、ランプはずっと右下の斜面にとどまって空を照らしていた。

後続のメンバーたちも、フィックス・ロープを可能な限り回収しながら下降を続け、全員がC2に帰還したのは20時を回っていた。一人一人握手を交わし、登頂成功の喜びを分かち合う。予備のライトに浮かび上がった仲間たちの顔は、やつれているものの、実に満ち足りた表情をしていた。

\*

とりあえず初登頂は果たした。南西壁も全員が無事に下ることができた。後はC1とベースキャンプを撤収して下るだけ……と思っていたら、ヒマラヤの神は最後の試練を我々に突き付けてきた。

登頂翌日は、南西壁最下部のフィックス・ロープを回収した上で、C2からC1を経由して一気にBCまで下山することにした。朝は一瞬、晴れ間が見えたものの、昼ごろから周囲は厚い雲に覆われ、小雪が舞い始めた。登頂隊員たちは高所でのダメージを全身に感じつつ、ゆっくりとベースキャンプへの道をたどった。

翌日は雪が降ったりやんだりの天気で、終日、登攀用具や残った食糧の整理をして過ごす。昼ごろにローナクからポーターが上がってきたので、使わなかった食料や燃料、あるいは氷河から上で使った装備を降ろさせる。そして、明日はテントを撤収して全員でローナクへ、と考えていたのだが、これが甘かった。

昼ごろから本格的に降り始めた雪は勢いを増し、やがて吹雪となってBCに襲いかかった。夜中に風は収まったものの、深々と降る雪はテントを埋め、周囲を真っ白に染めてゆく。一晚の積雪は優に50cmを超えた。

空は黒褐色の雲に覆われて視界も利かず、対岸ではときおり雪崩の音が轟いている。とても下山できるような状況ではなくなっていた。さらに困ったことに、アイゼンやピッケル、ハーネス、高所靴などの装備は、すべて前日にポーターが降ろしてしまっていた。この状況で、雪に不慣れな1・2年生を連れての下山、なかでも氷河入口のゴルジュ帯の通過はかなりの危険と困難が予想された。

この大雪は極めて異例のもので、サーダーのツルも、過去20年のヒマラヤ登山経験の中で、この季節にこれほどの雪を経験するのは初めてのことだった。後で知ることになるのだが、異例の大雪は、ベンガル湾に発生した巨大タ

イフーンの影響によるものだった。

とにかく視界が確保できるまでは絶対に下山しないことを明言し、停滞を続ける。この深刻な状況においても、平然とテント生活を楽しんでいる現役学生たちの神経の図太さが心強かった。

食料・燃料も乏しくなるなか、3日目になってようやく雲の間に切れ目が広がり、薄日を見ることができた。視界も氷河の対岸が見えるまで回復してきたため、下山を決意する。

トレッキング・シューズに雨具の裾をガムテープで固定してスパッツ代わりとし、腰までのラッセルに挑む。ゴルジュ帯の岩場では、スリングを使った簡易ハーネスを作って1・2年生に与え、固定ロープを掘り起こして通過させた。ゴルジュ帯を抜け、河原に下りてからは、今度は雪原での腰までのラッセルに苦勞させられる。

月明かりが照らす雪原の奥にローナクの明かりが見え、やたらと煙いが、とても暖かい小屋に入ったのは20時を過ぎていた。そして、大雪のために足止めされていた多国籍のトレッカーに混じって熱い紅茶を口にしたとき、ようやく本当の意味で、無事に下山できたことを実感したのであった。

#### 〈登山隊データ〉

登山隊名…2013青山学院大学山岳部アウトライアー登

#### 山隊

登山期間…2013年9月11日～10月21日

メンバー…萩原浩司(総隊長・53)、村上正幸(登攀隊長・

38)、古城海太(コーチ・35)、本田優城(4年・

23)、真下孝典(2年・19)、中西謙(1年・19)

#### 行動概要…

9月8日 先発隊(古城・本田・真下・中西)出国

9月13日 先発隊、タプレジュンよりキャラバン開始

9月15日 後発隊(萩原・村上)出国

9月18日 後発隊はヘリコプターでカトマンズ発。

ゲンサにて全隊員合流

9月24日 ベースキャンプ設営(5200m)

10月1日 キャンプ1(C1 5600m)入り

10月5日 C2(5800m)入り

10月9日 南西壁登攀。C3(6500m)設営

10月10日 頂上を目指すも6800mで断念。C3帰幕

10月11日 アウトライアー東峰登頂。C2まで下山

10月12日 B Cに帰還するが、季節外れの大雪のために停

滞

10月15日 晴れ間を衝いてローナクへ下山

10月17日 バック・キャラバンでグンサへ

10月21日 タプレジュンに下山

10月23日 ジープとバスを乗り継いでカトマンズ着

協力…味の素、天野実業、オリンピックパスイメージング、カシ

オ計算機、サーモス（五十音順）

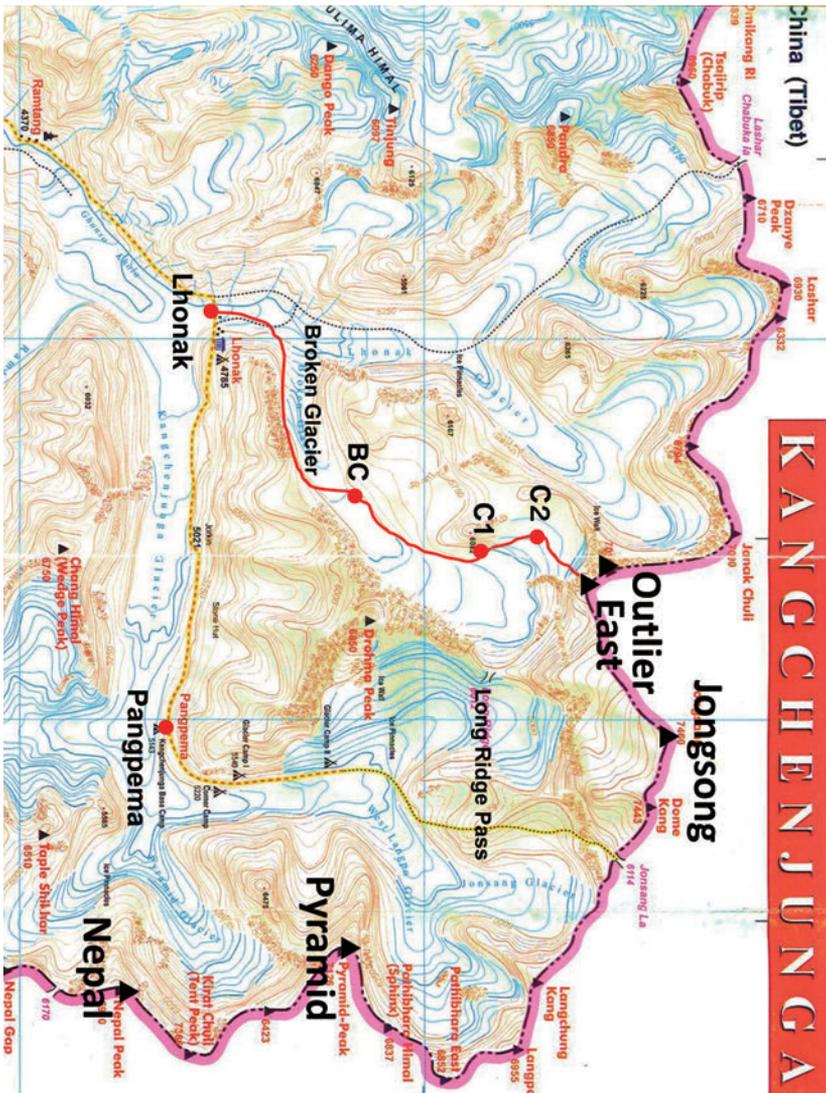
（萩原 浩司）



アウトライアー東峰初登頂



南西壁のチムニー状核心部をルート工作する隊員たち





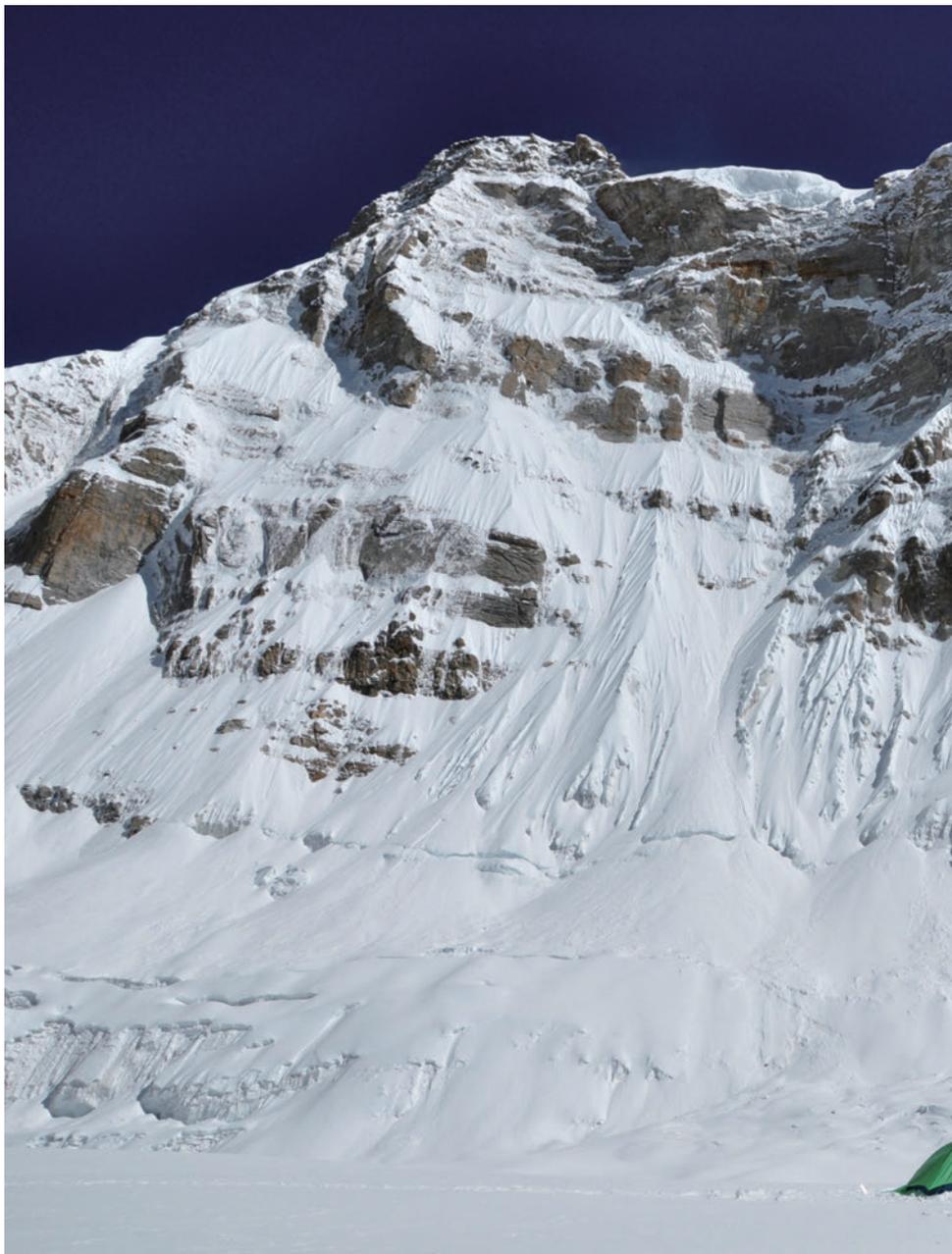
5200 mに設けられたベースキャンプとアウトライアー



ブローケン氷河のサイドモレーンをC1に向かう

# Janak Chuli East





C2 から見上げた南西壁の登攀ルート



南西壁下部にルートを拓く



懸垂氷河上に辛うじて建設された C3



雪面をトラバースし、懸垂氷河上の C3 予定地を目指す



南西壁中間部を登る萩原隊長。足元遥か下に C2 が豆粒のよう



垂直に近い核心部を越えて、傾斜が緩んだ南西壁最上部を登る



南西壁を抜けて国境稜線に飛び出す。背景はカンチェンジュンガ山群



念願の頂上に部旗を掲げる。左から萩原隊長、本田、村上隊員

中国四川省・横断山脈登攀隊



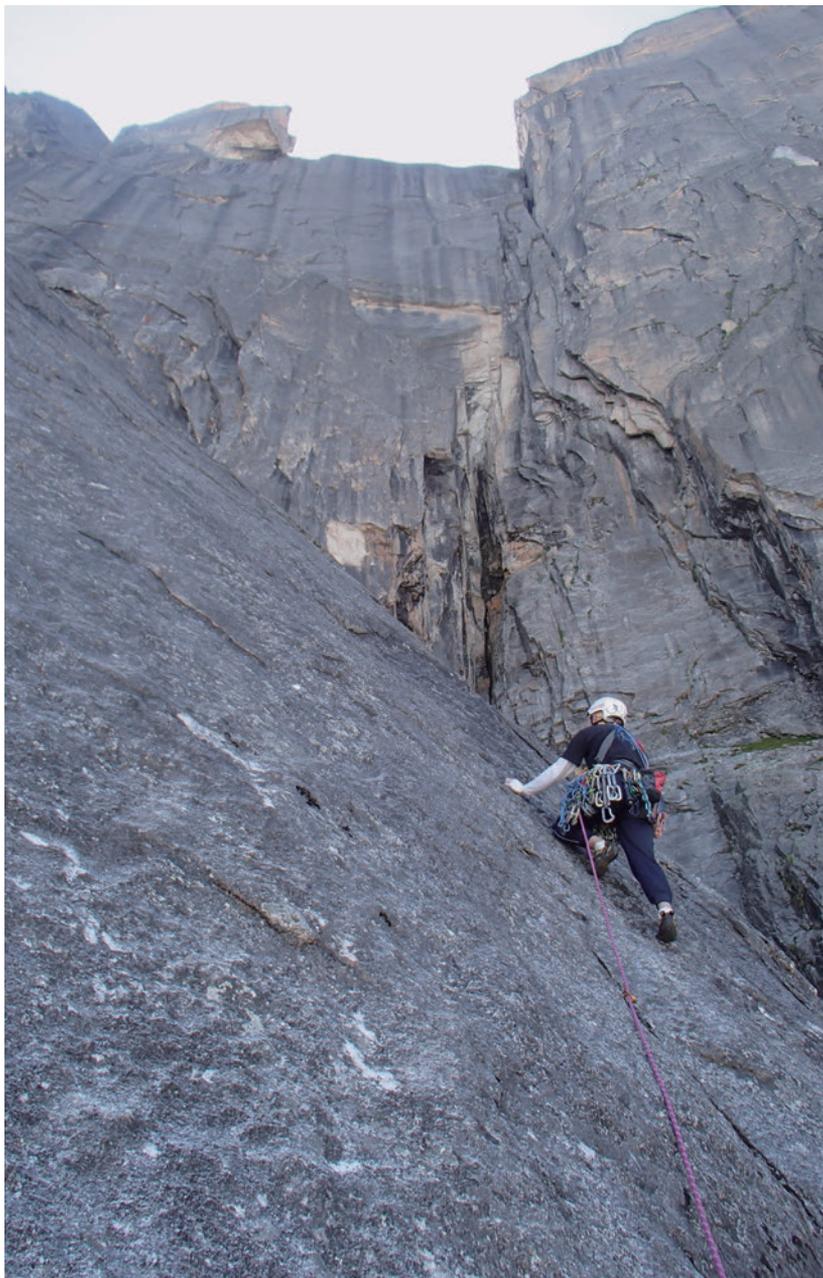
好棒啊峰へのアプローチ



好棒啊峰の4ピッチ目のコーナーを登る長野隊員



好棒啊峰の頂上に立った長野隊員



好棒啊峰の3ピッチ目をリードする森上隊長



牛心山東面に登攀する小野寺隊員



老鷹岩上部岩壁ヘッドウォールを登攀する兼原隊員



ベースキャンプ帰着後、老鷹岩上部岩壁をバックに



観光道路から見上げた老鷹岩下部岩壁



老鷹岩下部岩壁 3 ピッチ目、凹角のコーナーのクラックを登る



老鷹岩下部岩壁 6 ピッチ目、振り子トラバースの後の登攀

# 中国四川省・横断山脈登攀隊報告

## 慶應義塾大学体育会山岳部プロジェクト100

### I. 経緯

山岳部創立100周年にあたって、乗れそうな計画があれば乗りたいと漠然と考えていたが、そうした計画はとんと聞こえてこなかった。一方、自分自身「100周年にあたって、おれは何もしないのか？」と理由もなく自己問答し出し、出した答えは「自分が起点になろう」だった。

私自身、ルームを卒業して20年とちよつと。卒業してから、濃淡はあるもののクライミングを継続してきた。先輩にも後輩にも少なからずクライミングを継続しているメンバーがおり、これらのメンバーを集めたら、どんな山になるだろうかという好奇心もあった。

2011年7月のこと、我が家でバーベキューをすると

の口実の下、こうしたメンバーを集め、ルーム100周年に何かしてみないかと声をかけてみると、意外に皆喰いついてきたので、内心しめたと思った。対象も時期も何も具体的に決まっていなかったが、とにかくどこかの壁を皆で登ろうという話でまとまった。以降、定期的にミーティングを実施しながら時期や対象を決めていくこととなった。中心となったのは森上さん、千葉、小野寺、互井、そして私。皆40前後のいわゆるアラフォー（Around 40の略）世代。しかも、森上さん、千葉と私の3名はトランゴ・タワーにも行ったメンバーで、小野寺、互井に関してはルームに在籍した期間が重なっており、お馴染みのメンバーという感じで今回のプロジェクトが始動した。

ミーティングと並行してトレーニングも開始した。トレーニングの担当は小野寺。彼が合宿をアレンジする係となり、無雪期に何度か合同で合宿を実施した。久しぶりにこれだけのルームのメンバーで合宿するのは楽しく、そして、各人がそれぞれ卒業後に継続してきたクライミングをどう発展させたかを確認できる機会となり、刺激的であった。

対象に関しては、ミーティングを継続していく中で小野寺が、今回の中国四川省・横断山脈はどうかとの話を持ち出してきた。もともと対象の候補とはなっていたが、登山許可や現地でのアクセスが不透明なことから対象から外した経緯があり、彼はその課題を克服できるプランを持ってきた。この山域に10年以上にわたって毎年、通っておられる大内氏の伝手つてを頼るといった。さっそく大内氏とコンタクトをとり、どのように現地までアクセスしているか話を伺いに行くと、BCまでポーターが荷上げしてくれ、テント、シュラフ、BCでの食事も現地を用意してくれるという、夢のようなスタイルで登らせてくれる、現地のエージェント李慶氏という方がいるとの情報を得ることができた。料金は1日当たり1万5000円。休暇が制約されているサラリーマンとしてはあまりにもありがたい

話なので、逆に懐疑的にすらなつたが、大内氏と李慶氏の信頼関係で成り立っているシステムとのことで、大内氏に李慶氏をご紹介いただくこととした。遠征前から中国の得体的てきてきのしれない奥深さを感じた。

遠征時期は、森上さんが長期に休める2013年8月を中心に調整することとしたものの、小野寺は当初から都合が悪いことが分かっていた。そのため、彼は独自の隊を組織すべくパートナーを探し、その結果、雲表クラブの兼原君と9月にB隊として遠征することとなった。私自身も8月に2週間の休暇取得は業務上困難であることが判明し、会社からは10月ならと打診され、幸運なことに千葉が10月でも大丈夫だということ、我々2名はC隊として10月に出ることとなった。一方、A隊は森上さんが1ヶ月も滞在できるのに、互井は2週間滞在が限度であるため、メンバーを補強する必要が生じた。もともと隊に若手がいないため、後に繋がりにくい遠征になってしまふことを懸念していたので、若手の木村、学生の長野に参加を要請することにした。こうしてA隊の4名が組織され、A隊、B隊、C隊という3隊構成となった。2013年春から隊ごとのトレーニングが開始され、それぞれ中国四川省・横断山脈へと向かった。

Ⅱ. 行動概要・結果  
A 隊

〈メンバー〉森上 和哲(リーダー) 平成2年卒・45歳 ※先発隊  
 互井 健悟 平成8年卒・39歳 ※後発隊  
 木村 友輔 平成21年卒・26歳 ※後発隊  
 長野 健吾 現役2年・20歳 ※先発隊

(濱田 豪)

8/8	8/7	8/6	8/5	8/4	8/3	8/2	8/1	日付	天候	行動	森上	長野	互井	木村
晴	雨	晴	晴後雨	曇後雨		晴	晴			成都↓大溝BC	出国	出国		
偵察	双橋溝↓大溝BC、	小金↓双橋溝	双橋溝↓小金	海子方面テポ、下山	海子方面偵察	双橋溝↓大溝BC	成都↓双橋溝	成田↓成都	成田↓成都		森上	長野	互井	木村
	入山			下山	←	入山		出国	出国					
	入山			下山	←	入山		出国	出国					

※入山期間

8/25	8/24	8/23	8/22	8/21	8/20	8/19	8/18	8/17	8/16	8/15	8/14	8/13	8/12	8/11	8/10	8/9	
曇	晴	晴	晴	晴後曇	曇時々雨	晴後曇	晴後曇	晴後曇	晴後曇	曇後晴	晴後曇	晴	晴	曇後雨	晴	晴	
成都↓成田	成都観光	双橋溝↓成都	BC↓双橋溝下山	小峰登頂	レスト	鳳凰峰登頂、獅子峰フリー化	ピーク偵察	海子、5120m	レスト	獅子峰登攀(下降)	ビバーク	獅子峰登攀(登頂)	レスト	荷上げ、支点整備	獅子峰登攀(3Pまで)	レスト	好棒啊峰登頂
帰国			下山	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←
										帰国		下山	←	←	←	←	←
帰国			下山	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←
				帰国		下山	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←

〈対象〉 中国横断山脈・双橋溝大溝周辺の未踏峰

〈結果〉 好棒啊峰（ハオバンガー・フォン）初登頂

4 8 7 0 m 8ピッチ、2 7 5 m、5・8

獅子峰（スーズー・フォン）初登頂

5 0 5 7 m 13ピッチ、5 7 0 m、5・10 c

鳳凰峰（フォンファン・フォン）初登頂

4 9 8 4 m 7ピッチ、3 4 0 m、5・10 a

小峰（シャオ・フォン）初登頂

4 7 8 5 m（クラス4、ロープは使用せず）

#### 〈行動概要〉

8月3日、森上、長野が双橋溝大溝に入山し、およそ4 0 0 0 mの地点にベースキャンプを設営。周辺の山を観察した結果、主たる目標としてきた5 1 2 0 m峰は落石の危険が大きいため、ほかの目標を探すこととする。森上の高山病のため一時下山を強いられたが、その後、大溝と長坪溝との間にそびえるピーク（好棒啊峰）を長野と登攀し、8月9日に登頂することができた。

次に5 1 2 0 m峰から続く稜線上のピーク、獅子峰を狙

い、3回目のアタックで8月15日に森上、互井、木村が登頂することができた。また、獅子峰から大内ピーク（仮称）に連なる稜線上の鳳凰峰は、ワンプッシュで8月19日に森上、互井が完登した。さらに長坪溝側を偵察に行った際、小さなピーク、小峰を8月21日に登頂した。

以下、ロープを使用した3つのピークで、登攀中の中間支点にはカム、ナッツ、ピトン、スリングを使用し、前進用ボルトの設置は行なっていない。

下降用支点も同様にカム、ナッツ、ピトン、スリングを用いた。ただし、獅子峰のみ持参した電動ドリルを用いての下降支点用ボルトを、13ピッチ中10ピッチで設置した。また、獅子峰のみフィックス・ロープを使用した。

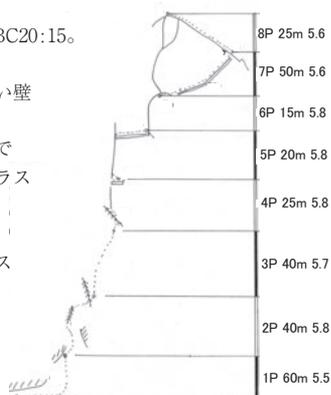
好棒啊峰 (ハオバンガー・フォン)

4870m 8ピッチ、275m、5.8

8月9日 森上、長野でベースキャンプの東に位置し、双橋溝と長坪溝の間にあるピークに登る。

09:30BC — 取付 12:00 — 頂上 16:05 — 取付 18:45 — BC20:15。

- Pitch 1 — 60m, 5.5, 長野、ザレのトラバース～もろい壁
- Pitch 2 — 40m, 5.8, 森上、もろい壁～リッジへ
- Pitch 3 — 40m, 5.7, 森上、フェース～リッジ手前まで
- Pitch 4 — 25m, 5.8, 森上、リッジ右のコーナー～テラス
- Pitch 5 — 20m, 5.8, 森上、コーナー～テラス
- Pitch 6 — 15m, 5.8, 森上、テラス右のコーナー
- Pitch 7 — 50m, 5.6, 森上、右のリッジまでトラバース
- Pitch 8 — 25m, 5.6, 長野、リッジ沿いに頂上へ



鳳凰峰 (フォンファン・フォン)

4984m 7ピッチ、340m、5.10a

8月19日、森上、互井で獅子峰、大内ピーク (仮称) につらなるピークに登攀。

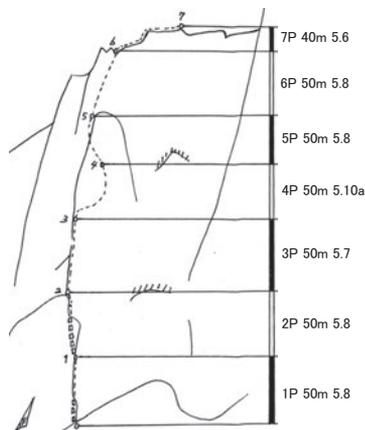
BC08:20 — 取付 10:10 — 頂上 15:50 — 取付 17:40 — 獅子峰 1P フリー化 — BC19:55

- Pitch 1 — 50m, 5.8, 互井、ルンゼ
- Pitch 2 — 50m, 5.8, 森上、ルンゼ～コル
- Pitch 3 — 50m, 5.7, 互井、ガリーを直上
- Pitch 4 — 50m, 5.10a, 森上、カンテを右に越え、フェースを右上
- Pitch 5 — 50m, 5.8, 互井、コーナーを直上
- Pitch 6 — 50m, 5.8, 森上、フェース
- Pitch 7 — 40m, 5.6, 互井、リッジ

小峰 (シャオ・フォン) 4785m (クラス4、ロープは使用せず)

8月21日、森上、互井で長坪溝側を見に行こうと、5170m 峰側の谷間を詰めていき、コルから小ピークに登頂。

BC08:55 — 小峰 11:55 — BC14:05



獅子峰 (スズー・フォン)

5057m 13ピッチ、570m、5.10c

8月11日、森上、長野で登攀するが、雨のため3Pで下降する。1、2Pにロープをフィックスする。

BC07:30—取付 09:40—3P 終了点 13:10  
—取付 14:50—BC17:10

13日、森上、互井、木村で7Pまで。到達点まで6本のロープをフィックスして下降。

BC07:50—取付 09:50—7P 終了点 17:15  
—取付 18:20—BC19:35

15日同メンバーで完登後、9P目テラスにてビバーク。BC07:05—取付 08:50—登頂 19:05—9P ビバーク地点 20:15

16日BC帰着。ビバーク地点 07:15—取付 10:20—BC12:20

19日鳳凰峰登攀後、互井が1P目をフリー化。

Pitch 1—60m、5.10b、森上 (互井フリー化)、大フレックから右のクラックへトラバース

Pitch 2—60m、5.5、森上、ルンゼ

Pitch 3—60m、5.5、森上、ルンゼ

Pitch 4—20m、5.10a、互井、ルンゼの左側壁

Pitch 5—30m、5.10c、森上、逆層のスラブ

Pitch 6—50m、5.10c、互井、スラブのトラバース

Pitch 7—60m、5.5、森上、ガレ場を直上

Pitch 8—30m、5.5、互井、ガレ場

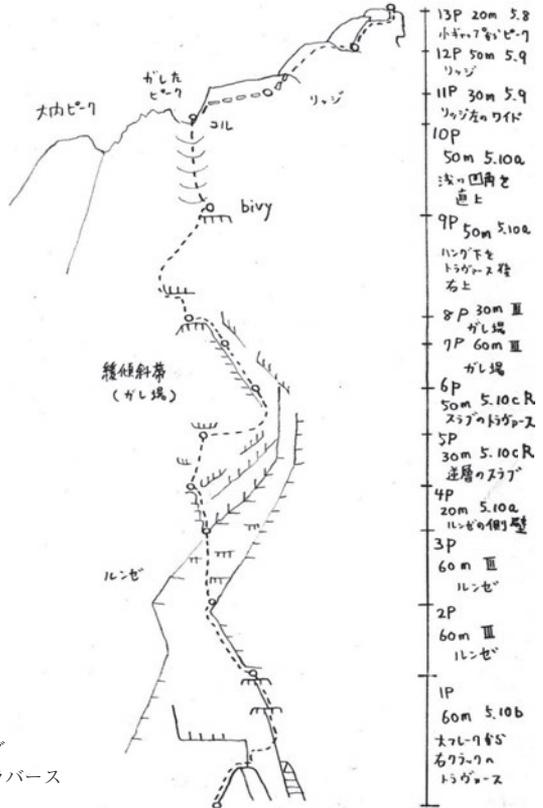
Pitch 9—50m、5.10a、森上、ハンク下を左トラバース後右上シテラスへ

Pitch 10—50m、5.10a、互井、浅い凹角を直上しコルへ

Pitch 11—30m、5.9、森上、リッジ左のクラック

Pitch 12—50m、5.9、互井、リッジ

Pitch 13—20m、5.8、森上、小ギャップからピーク



隊 用 登 攀														〔装備〕				
ドリルビット	ボルトハンガー	ボルトアンカー(手打ち)	ボルトアンカー(電動用)	タイオフスリング	カラビナ(フリー)	スカイフック	ピトン	ピトン	トライカム	キヤメロット	ストッパー	エイリアン	キヤメロット	FIX用スリング	FIX用環付きカラビナ	FIX用カラビナ	リードロープ	
	ペツルアルミハンガー	ペツルM8			ワイヤーゲート		KB#1、2、3、#2	軟鉄横型	#7	#5	#4、#10	3/8(青)、1/2(緑)、3/4(黄)、1(赤)	#0・5、#4	60cm			φ10m×50m	φ10m×60m
5	20	30	50	10	20	3	20	20	2	2	4	4	4	6	6	12	4	2

個 人 登 攀														電動ドリル				
捨てピナ	ナツスキー	ハンマー	スリング	スリング	クイックドロ	ヘルメット	タイプロック+環付きピナ	ユマール	アプミ	チョークバッグ	クライミングシューズ	ルベルソ+環付きピナ	ハーネス	ダクトテープ	ZIPライン	捨て縄(φ6mmロープ)	捨て縄(φ6mmロープ)	バッテリー
			ダブル120cm	シングル60cm										φ6×40m	ダブル120cm	シングル60cm		
8	1	1	3	8	10	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	20	20	5
																		1

個人就寝			個人行動																
防寒具	マット	シユラフカバー	アップローチシユーズ	服(着替え)	上、下、パンツ、ズボン、靴	服(ロンゲTシャツ、FT)	ライター	笛、ナイフ	筆記具	カメラ、充電器	トイレットペーパー	水筒	予備電池	ヘッドランプ	手袋(防水用)	手袋(防寒用)	手袋(ビレー用)	雨具	
	壁でのビバーク用	壁でのビバーク用							小ノート+ペン			1L ナルゲン1Lポトル	単4×3本	BDスポーツ			革手袋		
1	1	1					2	1	1	1	1	2	3	1	1	1	1	1	1

壁用食料				隊用就寝			
柿の種	カロリーメイト	ソイジョイ	お茶	尾西五日ご飯ほか	折りたたみ水筒	紙袋	ツエルト
亀田小袋3袋	@80g	@30g×3	フリーズドライ紅茶・コーヒ	7 kcal	2L		壁でのビバーク用
0	132	88	88	5	40	1	

### 隊員所感

森上 和哲

様々な好条件により、事前には予想しなかったほどの成果が残せたと感じている。事故なく全員が無事下山すること、これが達成できたことは隊長として素直に嬉しい。

入山時、未登の岩壁をトライする覚悟に欠けている自分がいた。焦りなどから高山病による一時下山という事態に繋がり、長野には迷惑をかけてしまった。幸い余裕ある日程で、徐々に心身共に調整していくことができた。

3つの登攀が完遂できたこと——すなわち、学生の長野

との好棒啊峰への登頂、A隊4名それぞれの持つ力を結集しての獅子峰への完登、互井と2人で肩肘張らずに登った鳳凰峰——それぞれに嬉しくありがたいことだ。ただ、3プッシュでの完登、フィックス・ロープの使用、ボルトキツトの持参および下降用ボルトの設置など、獅子峰への登攀スタイルについては、パーティとしての実力を反映している。

いずれにしても、山の中で余裕を持って判断、行動し、充実したクライミングを實踐できたのは、目的意識の明確なメンバーに支えられたおかげで、互井、木村、長野の3人には感謝したい。

#### 互井 健悟

人跡稀な荒野に入り、誰も触れたことのない大岩壁を攀じて未踏の頂に立つ。それは心の奥にずっとしまっておいた夢だった。落石の危険から目指す主峰に近付けなかったこと、調整の失敗から身体を壊してしまったことなど、理想と現実の懸隔が生じたことも否めないが、現在の生活の中で精一杯努力し、合理的な登路から美しい頂に立てたことは、生涯の誇りとした。この間、体調を崩していた妻には迷惑をかけた。

未曾有の大災害から4年を経て迎える100周年の意義、厄介な隣国関係、世界的な異常気象など、今回の遠征が提示する論考の材料はおそらく無限に存在する。自己の思考がそうした水準にまで至らず、個人的な二十年余の回想の域を出なかつたことは遺憾だが、尊敬する先輩同期諸兄と再び同じ目標を目指し、優秀な後輩たちと山行を共にする機会が持てたことには、心から感謝している。分隊せざるを得なかつた憾みはあるが、錫杖岳や瑞牆山での事前合宿の楽しさは、それを補って余りあるものだった。彼らに囲まれて山を始めることができた自分は、つくづく幸せだったと感じている。

#### 木村 友輔

学生時代、何度か海外でクライミングをした経験がある。行きの飛行機では、いつもトポを見ながら、早く登りたいという気持ちでワクワクしていた。

しかし、今回は全く逆だった。とにかく怖い、行きたくないという気持ちが大部分を占めていた。社会人になって海外に行くのも初めて、大きな壁を登るのも初めて、標高5000mという高所も初めて。絶対に無事に帰ってこなければならぬというプレッシャーの中で、これだけの未

知の領域に入っていくのは、本当に怖かった。何か言い訳がないか、どうやって逃げ出そうか、常に考えていた。

そんな気持ちを持ちながらも、いざ壁を目の前にすると「登りたい」という気持ちが大きくなっていった。登り切って3人で抱き合ったときは、泣きそうなくらい嬉しかった。

終わってみれば、天候にも恵まれ、高度障害もほとんどなく、目指したピークにも登ることができ、本当に充実した、上出来過ぎる12日間だった。

もちろん、自分の力でこれだけの成果を出すことはできず、一緒に登った森上さん、互井さんをはじめ、本当に多くの方に支えていただき、今回の成果につながったのだと思う。本当にありがとうございます。

長野 健吾

この計画を聞いたとき、恥ずかしながら、私にはまだショートルト・クライミングやボルダリングをかじった程度の経験しかなかった。それから3ヶ月の間、小川山、瑞牆山のマルチピッチ・クライミング合宿や1週間の南アルプス縦走、高所順応・歩荷目的の富士登山と、私の山行計画は矢継ぎ早に立てられていった。計画に埋もれるというような経験はこれまでになかったため、これは本当に

楽しく、快感だった。

双橋溝に入ってから2週間は、経験の浅い私には勿体ないほど濃厚な毎日だった。アバチベツト族の家族と、筆談で他愛のないやり取りをしたこと。コックの姜さんと辛い白酒を啜ったこと。踏み跡のないガレ場を、息を荒げながら登ったこと。ピークから見た大溝の描く美しいカーブ。すべてが身体に沁み入ってくる感覚は、今までに味わったことのないものだった。

残された2年半の大学山岳部生活で、自分の目指すものが見つかかった。この地に再び赴き、現役部員と共に登りたい。そして、今よりさらに山を好きになりたい。

チームのメンバーには、大変お世話になりました。どうもありがとうございます。

**B隊**

〈メンバー〉小野寺 賢治（リーダー）平成9年卒・40歳

兼原 慶太

38歳

		〔日程〕	
9/22			日付 天候
9/21	曇	成都↓東京	
9/20	曇のち雨	双橋溝↓成都	
9/19	雨	ボルダリング	
9/18	曇	下山	
9/17	曇時々晴	白海子BCレスト	
9/16	曇のち雨	老鷹岩登頂	
9/15	晴	老鷹岩下部～上部中間(ピバーク)	
9/13	晴	牛心山東壁登頂9～14晴ボルダリング	
9/12	晴	ポタラ西壁アプローチ偵察、ボルダリング	
9/11	曇時々雨	宿停泊	
9/10	曇のち雨	ポタラ西壁へ荷揚げ失敗	
9/9	雨	宿停泊	
9/8	曇のち雨	牛心山北面順応(4200mまで)	
9/7	曇時々晴	ボルダリング、山観察	
9/6	雨	日隆へ散歩	
9/5	雨	宿停泊	
9/4	雨	宿停泊	
9/3	雨	小溝順応(4550mまで)	
9/2	雨	双橋溝散歩	
9/1	雨	成都↓双橋溝	
8/31	雨	東京↓成都	
		行動	※入山期間

〔対象〕 牛心山、老鷹岩

〔結果〕

牛心山 ― 東壁より登頂(宿よりワンデイ往復)

中国入国以来続く悪天周期(4500m以上は雪)にもようやく終わりの兆しが見え始め、第1目標にしていたポタラ峰西壁の雪が解けるのを待つ間、高所順応とクライミングのウォームアップを兼ねて比較的雪の影響の少ない牛心山を登ることにした。

〔行程とスタイル〕

朝5:30 紅杉林出発

東壁の肩 9:00着

9:10 登攀開始。かなりの部分コンテで登攀

11:50 登頂。ストッパーやカメラロケットを残置しながら下降

16:00 紅杉林着

ボルト、ピバーク装備は携帯せず

グレードは最高でも5・10前半

老鷹岩 ― 下部岩壁から上部岩壁へ継続登攀の末、登頂(1ピバーク、オンサイト)

目標と考えていたポタラ峰西壁は3日間の晴天でも融雪  
わずかで、残り期間で登攀可能な状態となる見込みが立た  
なかつたため、急遽、目標を雪の影響の少ない老鷹岩に変  
更し、未登の下部岩壁から上部岩壁へ継続登攀することと  
した(夜、ボルダリングから宿に戻り、翌朝には白海子B  
Cへ上がる旨伝えたため、大慌てでの出発準備となった)。

〔行程とスタイル〕

6・00 B C 出発

7・00 過ぎ 取付着(暗かつたため少し迷った)

下部4Pを兼原、上部4P半を小野寺が担当

16・00 下部岩壁を抜ける

偵察時、トータル4ピッチ200m弱と見積もっていた下  
部岩壁のスケールだが、実際には9ピッチ400m強のス  
ケールがあった。

高さ1100m(下部岩壁400m、上部岩壁700m)

最高ピッチグレード5・11程度

下部岩壁は初登、上部は中国隊ルート(2013年9月上  
旬初登)をトレース

ルート名「羽衣」(下部、上部通したルートとしての名称)

## 行動概要

A隊が帰国した直後から悪天周期に入り、9月11日まで  
2週間以上不安定な天気が続く。気温も低く、夜の降雪で  
は雪線が4000m近くまで下がる日もあった。

12日から好天周期に入って気温も上がり、融雪が進む。  
13日には高所順応を兼ねて牛心山東面を登攀した。しか  
し、第1候補としたポタラ峰西壁は壁の雪が十分溶けず断  
念。南面で雪の影響が少なく、壁のスケール、傾斜もある  
老鷹岩に焦点を定める。

15日に白海子B C入りし、翌日からアタック。双橋溝の  
車道からB Cまでは2時間半の行程。悪天期間はかなりの  
積雪があったが、我々がB C入りしたときは完全に溶けて  
いた。好天周期とはいえ、我々がアタックした16、17日は  
若干天候が不安定で、ビバーク時に雷雨に遭遇。19日、ベ  
スキャンP撤収時も雨に見舞われた。

老鷹岩下部岩壁は高さ400m、8ピッチ。登攀ライン  
は壁のほぼ中央で、逆くの字状にコーナー、フレック、ク  
ラックが続く弱点を衝いたライン。上部からの落石、降雨  
時は流水が集中するが、傾斜が強いため、登攀ラインに直  
接は当たらない。

中間部は快適だが、下部のコーナーは濡れており、また

上部スラブ帯のクラックも草付で埋まっているため、ランナウトを強いられる。当初よりボルトは打たないこととしており、実際、アンカーを含めてボルトは打たなかった。

上部岩壁は標高差700m。緩傾斜とバンドを経由し上部岩壁の中間地点へ、そこからヘッドウォールを登る。ヘッドウォールは数日前、中国ペアに登られていたが、そのことを承知していなかったため、結果として同ラインをとった。なお、ブレイク点にボルトが打たれており、使用した。

下降はヘッドウォールを同ルート、中間地点からリッジおよびリッジの右側を下降。ピークから上部岩壁基部まで計11ピッチのラッセル。

下部岩壁は初登、したがって、下部岩壁から上部岩壁への継続も初登。所要時間は以下のとおり。

9月16日 BC 6:00 ~ 下部岩壁登攀 7:00 ~ 16:00 ~  
 中間バンド・ピバークポイント 17:30  
 9月17日 ピバークポイント 7:30 ~ 上部岩壁登攀 10:30 ~ 14:30 (老鷹岩ピーク) ~ BC 18:00

〔装備〕

〔登攀具〕

ロープ (9・1mm\*60m / 1本、8・6mm\*60m / 1本)、  
 下降用捨て縄 (6mm\*20m)

カム 2 set (エイリアン黒、キヤメ#5、#6は各1個)、  
 ナッツ 1 set、ピトン 6枚、クイックドロ 8本、各自  
 最低限の個人登攀具

〔ピバーク装備〕

2人用ツエルト (ナイロン製)、3シーズンシユラフ、ダウン  
 ジャケット

〔食糧〕

行動食 (シリアルバーほか) 800 cal / 1人1日分 ×  
 2名 × 2日

夕食 (アルファ米1袋 + 味噌汁) / 1人1食 × 2名 × 1食  
 朝食 (モチ1個 + 味噌汁) / 1人1食 × 2名 × 1食

隊員所感

小野寺 賢治

ここ数年、アルパイン・クライミングから離れていた。未登のビッグウォールへの希求は、いつしか淡い夢になりかけていた。ところが、思いがけずルム100周年の遠征計画が持ち上がり、夢を叶えるチャンスがやって来た。遠征メンバーが決まり、ミーティングを重ね、トレーニング

グに精を出すうちに、着々と現実の目標となっていた。

現地に到着すると予想以上に素晴らしい壁とラインに巡り会い、一方、天気は想定外の悪天続きで、目前にした目標が日々遠ざかることに焦りを感じた。

日程も終盤に差しかかったところでようやくやって来た好天を捉え、理想的なスタイルで完登し、自己のクライミング歴の中で最も印象に残るものとなった。

そして今、自分の中にビッグウォールへの情熱を再び感じている。

兼原 慶太

2012年の夏ごろ、大きな山でロッククライミングをしたいと思い、パタゴニアか中国の横断山脈近辺の事情を調べ始めました。どちらもあまり天気が良くないエリアではありますが、3週間ほどの休暇でも登れる可能性が高いのは中国であり、適度な標高とそのエリアの未知な部分や初登攀の可能性に魅力を感じました。それからパートナーを探すべくいろいろな友人に声をかけたなかで、本命であり旧知の小野寺さんも、なんと山岳部として同じ山域への遠征を企画しているというではありませんか。偶然にしてはでき過ぎな話ですが、すぐに私がプロジェクト100に

加わるという形でまともりました。

互いのことは知り尽くしてましたので、クライミング・スタイルのすり合わせに時間はかかりませんでした。春から始めた毎週末のトレイニングでは、毎回課題を設け、少しずつ本番に近い登りを実践していきました。そのため、出発時には不思議なほど不安はなく、自信と楽しみたいという思いに満ちていたことを覚えています。

実際に山の麓に着いてからは、2週間ほど続く悪天候に身動きが取れませんでした。意欲をそがれないよう、偵察や順応、トレイニングを継続していきました。

ようやく訪れた登攀のチャンスは、好天周期といえるほど良い天気が長続きしませんでした。まずは牛心山を東壁から登頂してウォームアップとしました。目標としていた山は、降り積もった雪のため好条件にはならないと判断しました。その後の速やかな目標変更は、まさに阿吽の呼吸とも言えるものでした。

いつ崩れ始めるとも知れない天候の中、標高5300mの老鷹岩(Eagle Peak)を、未登の下部岩壁から継続して上部岩壁をピークまで登りました。登攀は、春から毎週繰り返し返した日本でのトレイニングの延長にあり、ピバークも普段どおり。トレイニングで登り込んだそのままのスタイ

10/12	晴	下部岩壁5Pまで		濱田	千葉
10/11	晴	下部岩壁3Pまで			
10/10	晴	双橋溝↓老鷹岩下部岩壁B C	入山		
10/9	晴	レスト(登攀具整理)			
10/8	晴	双橋溝↓老鷹岩基部へ偵察	偵察		
10/7	晴	觀光道路上から老鷹岩偵察			
10/6	晴一時雨	成都↓双橋溝			
10/5	晴	成田↓成都	成田	濱田	千葉
日付	天候	行動			

〈日程〉

※入山期間

**C隊**

〈メンバー〉濱田 豪(リーダー)

平成7年卒・43歳

千葉 明夫

平成7年卒・42歳

ルで、ピークまで到達することができました。  
5300mの頂上まで続いた春からのクライミングは、登山の枠にとどまらず、成長のためのプロセスを教えてくださいましたように思っています。  
ご協力感謝申し上げます。ありがとうございました。

10/13	晴	レスト		
10/14	曇後雪	下部岩壁6Pまで		
10/15	雪	停滞		
10/16	雪時々曇	残置装備の回収		
10/17	雪	B C↓双橋溝下山	下山	
10/18	晴後雪	双橋溝↓成都		
10/19	晴	成都↓成田	帰国	

〈対象〉

中国横断山脈・老鷹岩下部岩壁

〈結果〉

老鷹岩下部岩壁(6P目まで)(2P強を残し撤退)

**行動概要**

10月5日(土) 日本出発

8・30発のフライトで成田を発ち、北京を経由し成都には16時過ぎに到着した。C隊のガイド兼コックをしていただくジャンさんの出迎えを受け、李慶さんが経営するという中華レストランでご馳走になったが、「10年近くガイドをやっているが、10月に登山隊を迎えるのは初めて」という話を聞き、C隊は隊員の仕事の都合により出発が10月となったのだが、改めて厳しい時期に来てしまったことを実

感した。

10月6日(日) 双橋溝入り

中国は国慶節に入っており、成都市内の道路は激しく渋滞するということから、朝4時半には成都を出発した。最近開通したという道路を使ったが、道の崩壊や通行止めなどに遭うことは一度もなかったため、13時過ぎには双橋溝に到着した。双橋溝は想像以上に観光地化しており、双橋溝の入口から観光道路の終点となる紅杉林までは、シャトルバスが定期的に走っている。ベースキャンプに入る前の宿となる王さんの民宿に入り、荷物の整理をした後は、早速、このシャトルバスで紅杉林まで行ってみたが、周囲の山を見回すとほとんどの山が雪を被っており、A隊やB隊から見せてもらった写真の様子とは一変していた。唯一、老鷹岩の下部岩壁だけは雪がほとんど着いていなかったため、C隊の登攀対象は早々にこの老鷹岩の下部岩壁に決まった。心配していた高度の影響だが、濱田、千葉とも若干の頭痛を感じた。

10月7日(月) 観光道路からの下部岩壁観察

この日は高所順応のため、ベースキャンプとなる白海子まで上がろうと考えていたが、昨日は少し頭痛が出て、ジャンさんから、いきなり白海子までは上がらない方がいいと

のアドバイスもあったため、観光道路上から老鷹岩の下部岩壁を観察することにした。双眼鏡とデジカメラを持ち、観察地点を何度も変えながら、じっくり壁を観察したが、B隊の初登ルートの右側の垂壁には雪がほとんど残っており、途中で何度か途切れるものの、終了点に向かってほぼまっすぐ続くクラックも確認できたため、もつと近くで見たと上で、初登ルート右の垂壁をルートにとるか決定することにした。

10月8日(火) 下部岩壁の基部への偵察

対象をより間近で見えるため、王さんに案内してもらい老鷹岩下部岩壁の基部まで偵察に行った。観光道路沿いの川に架けられた丸太橋を対岸に渡るとすぐに急登となるが、ゆっくり歩き、3時間ほどで下部岩壁の基部に到達した。近くから壁の様子をじっくり観察したが、初登ルート右の垂壁には魅力的なクラックが延びているものの、上まで到達できるか疑問を残したまま下りてくることになった。

10月9日(水) 休養と登攀具の整理

この日は、ベースキャンプに上げる登攀具などの選定と休養にあてた。A隊とB隊がかなりの装備を残置してくれたが、C隊はリードできるのが濱田だけであり、カプセル・スタイルで登ることにしたため、残置してもらったロープ

5本はすべて利用することにした。下部岩壁を登り切るまでは、ほぼ8ピッチであるが、昨日の偵察により、岩壁の中間地点を越えた少し先にビバークできそうなレッジを確認できた。このレッジをビバーク地点にすることとし、ビバーク地点までロープ4〜5本をフィックスし、ここからアタックをかけ、下部岩壁の完登後はここまで戻ってきてワン・ビバークするという登攀計画にした。

10月10日（木） ベースキャンプ入り

荷上げは7人の地元ポーターにお願いしたが、空身に近い我々が上がっていくところには、すでにベースキャンプの設営まで終わっていた。ベースキャンプは、岩壁から15分ほど下った所の樹林帯の中となり、多少鬱蒼としているため快適とまでは言えないが、すぐ脇には水場があり、テントから顔を出せば、真正面に下部岩壁が見えるため、ベースとしては最適の場所であった。翌日からの登攀ルートを改めて観察したところ、初登ルート右の垂壁は、クラックが途切れた一部の箇所でポルトラダーになることが避けられないと判断した。一方、初登ルートは、双橋溝入りしたときに残っていた雪がほとんど消えたため、取付から数ピッチは初登ルートをたどり、初登ルートは途中から左上しているところ、我々はそれをほぼ直上するルートをとる

ことにした。

10月11日（金） 登攀1日目

朝夕の冷え込みは厳しく、7時には明るくなるのだが、壁に陽が当たり始める10時ごろまでは登攀できる状態ではない。8時に朝食をとり、9時過ぎにベースを出て、岩壁の基部で登攀の準備をし、10時半に壁に取り付いた。取付からの1ピッチ目は、傾斜こそないものの壁は完全に濡れており、最初からいやらしい登攀となった。カムやピトンでランニングを取りながら30mほどで切ったが、2ピッチ目の出だしは濡れどころではなく、流水となっていた。3ピッチ目は凹角のコーナーのクラックを登っていくが、やはり濡れており、騙し騙し慎重にロープを延ばしていくが、出発直前に購入したカメラロットの#5や#6が大活躍であった。フォローはすべてユマールリングであるが、ビバーク用の水6ℓや食料、ガスコンロなどザックに目一杯積み込んだユマールリングだったため、こちらも1ピッチ上がるだけでも時間を要し、この日は3ピッチをフィックスし、ベースへ戻った。

10月12日（土） 登攀2日目

ドリルとバッテリー4個をザックに詰め、昨日の3ピッチ目終了点までユマールリングし、11時から4ピッチ目の登

攀開始となった。やはり凹角のコーナーのクラックを登っていくが、ピバーク地点までの直上ルートは傾斜がきついため、いったんクラック沿いに右に回り込み、そこから左上してピバーク地点に到達するルートをとった。相変わらず濡れており、冷や冷やしながらの登攀であった。5ピッチでピバーク地点に到達したが、予想よりも狭く、横になれるほどのスペースはなかったが、なんとか一晩は過ごせるようなスペースだったため、ここをピバーク地点に決めた。このピバーク地点まで上がってくると、下部岩壁の終了点も見えてきた。壁は相変わらず濡れており、終了点を抜ける所は180度近いオーバーハングとなっており、決して楽に抜けられそうにはないが、完登の感触はつかめてきた。

10月13日（日） 休養日

登攀と荷上げにより疲労が溜まっていたため、当初の予定どおり丸一日を休養にあてることにした。これまでジャンさんに見せてもらっていた米国発の山岳地域の天気予報はことごとく当たっており、その天気予報では14日は多少雪が降るものの、15日からは再び回復するということだった。この時点では、仮に14日に登れなかったとしても、残り日数を考えれば、1ピバークを含めて2日あれば完登し、ベースキャンプまで戻れる計算だった。

10月14日（月） 登攀3日目

天気予報が的中したのか、今にも雪が降り出しそうな空模様であったため、しばらくは様子見をしていたが、一向に降り出さず、青空が見えるときもあったので、この日はアタックせず、ピバーク地点から1ピッチだけロープを延ばそうと壁に向かった。ピバーク地点からの1ピッチは、フレークを10mほど右上した所でボルトを打ち、5mほど右にある顕著なクラックまで振り子トラバースとなった。この顕著なクラックは、キャメロットの#2と3のサイズがまっすぐ上に続く見事なものだった。60mのロープを一杯に延ばした所でピッチを切り、フィックスして、この日の行動は打ち切った。下降している途中から雪が降り始め、あつという間に視界を閉ざすほどになり、夕食後には雪も強くなってきた。夜間、ジャンさんが食事テントに積もった雪を払うため、何度もテントから出る音が聞こえてきた。

10月15日（火） 停滞

天気予報では回復するということであったが、夜半から降り続いていた雪はやみそうになく、我々が登ろうとしていたルート上にも雪が着いていたため、停滞とした。

10月16日（水） 撤収

悪天の周期に入ったようで、この日も雪は降りやまず、登攀できる状態になるまでには数日を要し、残り日数を考えると完登は不可能と判断したため、撤退を決定した。登攀具のほとんどを壁に残していたため、雪の合間を縫って6ピッチ目までユマールリングで上がり、登攀具を回収してきた。

10月17日(木) 下山

ベースキャンプを撤収し、王さんの宿へ戻ってきた。ベースキャンプの周辺は冬山と言ってもいいような積雪だったが、ベースまで上がってきたもった地元のポーターは、重い荷物を背負い、革靴やスニーカーのような靴で駆け下りていった。王さんの宿で飲む、12日ぶりのビールは喉に沁みだ。

10月18日(金)～19日(土) 双橋溝～成都、帰国

李慶さんが運転する成都からの迎えの車は夜に到着したが、週明けからの仕事を考えると19日には帰国したかったため、無理をお願いし、夜通しで成都まで車を走らせてもらった。途中の街で交通規制につかまり、数時間、車中で仮眠せざるを得なかったが、李慶さんは、それ以外は一切休憩を取らず運転してくれた。成都でフライトの変更手続をし、空港に着いたのは出発のちょうど1時間前であった。

空港のケンタッキー・フライドチキンで食事をし、費用の精算をし、慌ただしく飛行機に乗り込んだ。

〔装備〕

〔登攀具〕

ロープ 5本(10mm\*60/2、9・1mm\*60m/1、8・6mm\*60m/1、10mm\*50m/1)、キャメロット(#0・3/6) 3セット、ロックス 2セット、ハーケン(ナイフブレード、アングル、軟鉄横型 計10枚、ボルト60本、ハンガー30個、電動ドリル 1、バッテリー 5個、カラビナ 50個以上、スリング(シングル・ロング) 40本以上、捨て縄 40本以上 ほか各自個人用登攀具

〔ビバーク用装備・食料〕 \*使用せず

2人用ツェルト(ナイロン製)、EPIカートリッジ 1個、EPIガス 大1本・小1本、水 6ℓ、山菜おこわ(尾西食品) など4食分、即席ラーメン4食分

〔BC滞在時の生活用具〕

テント、シュラフ、炊事道具などはすべて現地エージェン  
トにて手配

## 隊員所感

濱田 豪

現地に着するとすでに山は雪化粧をしており、登攀可能なラインが限定されている状況であったため、B隊が登攀した下部岩壁を登攀対象とした。登攀期間の天候についてはジャンさんが入手した天気予報を過度に信用してしまい、楽観的な展望でスケジュールを組み立ててしまった。天候が読みにくいこの山域で勝負するには、好天時にスピードを持つて登攀を完了させる必要があるが、選んだ対象に対してそうしたスピードを持ち合わせていなかったことが、残念な結果に終わった要因であろう。

今回の遠征で、ルームで大学1年のときから一緒であった千葉と8日間、山の中で久しぶりに寒い思いをして山と取っ組み合えたのは楽しく、ルームで過ごした日々を思い出すいい機会にもなった。

千葉 明夫

A隊やB隊からの報告を聞き、時期的に厳しいことは覚悟していましたが、悪天にかままるまでは順調にルートを延ばしていただけに、後2ピッチという所で撤退せざるを得なかったのが非常に残念です。

ビッグウォールをリードする力がなく、私は荷上げ要員としての参加でしたが、高所で20〜30kgのザックを背負い、ゼーゼーハアハア言いながらもユマリーニングは、酸欠のせいか、目の前が真っ白になることもありましたが、未登のルートに荷上げしているのだと思うと、楽しいと思えました。寒さには参りましたが、この時期にしか見られない紅葉と雪景色を見ることができただけでも、来た甲斐があると思えました。

完登できれば最高でしたが、遠征中の2週間は仕事のことを完全に忘れ、どっぷり山に浸ることができたので、幸福な時間でした。

## II 総括

今回の遠征（プロジェクト）を事故なく成功裏に終えることができ、安堵している。様々な社会的制約などを受け入れた結果、過去、ルームが送り出した遠征隊とは少々趣が異なる形となったが、今後ルームで出す遠征の一つの形を示せたのではないかと考えている。3隊に分隊することを余儀なくされたが、そのことでより隊員の個人的趣向を尊重できる形となり、各隊員が満足度の高いクライミングを展開することができた。本隊ともいえるA隊が4峰の未

踏峰を征服し、しかもその中で若手が活躍したことは、今後のルーム活動の発展に寄与するものと信じている。また、B隊においてはその実力を存分に発揮し、ワールド・クラスのクライミングを展開してきたことは、今回のプロジェクトに大きな花を添えるものであった。

これだけの成果が出た背景には、ルームでの4年間で培った基礎的な技術や知識、それに理念がその礎にあることは疑う余地がない。A隊の最年長者である森上さんと最年少である長野の年齢差は30歳近い。これだけの年齢差があると通常の社会生活においてですら、違和感なくチームワークを構築することは困難であろうが、リスクを伴う山の中であれば、なおさら難しいと考えるのが自然であろう。しかしながら、こうした環境の中でもチームワークが機能し、多くの成果が生まれたことを鑑みると、ルームでの4年間の重みというものを再認識せずにはいられない。B隊におけるクライムは、ルームで培った基礎的なものが世界基準でも通用することを示した。また、C隊において山岳部同期が組んだことは単なる偶然ではなく、登攀に向かない10月に余儀なく休暇を取らざるを得ない私に快く付き合い、中国に行くチャンスをくれたのが千葉であった。

様々な場面において、ルームでの4年間の重みを感じた

遠征であり、個人的には100周年に相応しいものになったと自負している。ルームで過ごす4年間でこれから10年、20年、50年と、我々と同様に世代を超えて理解し合えるだけの重みあるものであり続けて欲しい、と願わずにはいられない。また、そうするために、今回の遠征を機に各隊員がルームに回帰し、各々努力していくことが求められていることを認識したい。

最後に今回の遠征には登高会、日本山岳会をはじめ多くの方にご協力をいただきました。誠にありがとうございます。

（プロジェクト・オーナー 濱田 豪）

（ご協力者一覧（順不同、敬称略））

登高会、日本山岳会、宮下秀樹、大内尚樹、李慶、ケイラ  
イントラベル、北野俊信



## 富士山におけるスラッシュ（融雪）雪崩と 積雪のスラッシュ化に起因する山岳遭難事故

——富士山に特徴的な雪氷気象と遭難の特異性——

安間 荘

本稿の主題は、四十数年前の1972年3月20日に富士山南東斜面で発生した日本近現代史上最大の山岳遭難事故を、雪氷気象の視点から検証し、遭難の原因究明を行なったことである。この遭難は、江戸時代中期、富士山側火山噴火により形成された宝永山（標高2693m）付近で、雪上訓練キャンプ中の社会人山岳会5団体1個人計24人が、発達した低気圧の日本海通過に伴う荒天に遭遇し、撤退下山の途中に低体温症あるいは雪崩に浚われて埋没、死亡したものである。

この遭難事故に関しては多くの新聞やテレビによる報道、あるいは山岳雑誌などの特報で社会に広く知られ、遭

難した山岳会内部の事故報告書も公表されている。しかし、中立的な第三者機関による原因究明と再発防止策の検討などを行なった、事故評価報告書が作られた形跡はない。

若い読者の理解を助けるために、当時の登山界を含めた一般社会の情勢を簡単に述べておく。

1960年代からの高度経済成長の波に乗り、日本各地で大規模な観光開発事業が行なわれるようになった。富士山周辺でもこの例に漏れず、富士スバルラインや表富士周遊道路が建設され、拠点観光施設が造られた。東富士地区では御殿場市による太郎坊駐車場（1971年完成）を核

として、太郎坊スキー場や双子山展望台などの施設が計画されていた。富士山麓は古来、地元で雪代ゆきしろと呼ばれる融雪土石流の危険性が高く、現に1961年春に富士吉田を襲った雪代の例もあり、防災上の観点から疑問視する意見もあったが、地元の大勢は開発に傾き、実行に動き出していた。

1972年春、杞憂が現実のものとなった。想定外の規模の雪代、起きて欲しくないことが起きての、この大遭難事故の発生である。

観光開発に冷や水を浴びせかけることになりかねない。できるだけ事実を知って欲しくないという開発推進派の暗黙の願いが、事故は荒天に対処できなかった、山を甘く見た無謀登山、すなわち登山者の自己責任に帰せられる問題である、という世間の雰囲気を作っていた。

その後、太郎坊から双子山にかけてスキーリフト1基が建設され、市営スキー場が開設された。しかし、スキー可能期間が短く、度重なる融雪雪崩による施設の破損により、20年足らずでスキー場は廃止に追い込まれた（写真③）。

遭難の2年後、筆者は郷里静岡県に戻って富士山の雪崩、砂防、土石流災害防止の仕事に関わるようになった。1976年3月の表富士表層雪崩の調査や富士大沢の土石流の

調査研究を進めているなか、古来、富士山麓で「雪代」と呼ばれる現象は、地盤凍結と融解、積雪層の厚さ、降水量、融雪水量などに関係した雪氷気象災害である、という仮説にたどり着いた。

この仮説を実証するための現地試験を始めてすぐの1981年3月、富士山全周斜面で多数の融雪雪崩が発生し、土石流災害が山麓部に広く及んだ。この災害イベントの総合的調査と実証的研究から、古来、富士山麓で「雪代」と呼ばれていた災害の実態が少しずつ明らかにようになってきた。すなわち「雪代」とは、富士山の上部から山麓にかけてスラッシュ・アバランチ（融雪雪崩）→スラッシュ・フロー（融雪流）→スラッシュ・ラホール（融雪土石流）と変化しつつ流下する、一連の流動体を包括的に示すものではないかということである。

この現象は富士山の持つ地形、地質、雪氷気象などと密接に結びついており、世界的にも稀な現象であることが明らかになってきた。要点は次の4つである。

(1) 富士山が暖温帯に立地しながら上部は亜寒帯環境下にあり、凍結していない本来の火山体斜面の透水性は極めて高いが、冬期には地盤凍結によって地表面が難透水化する。

(2) 降雪量が冬（12～2月）少なく、春（3～4月）に多くなり、積雪量も風（特に偏西風）の影響を受け、尾根部で浅く、谷状凹地に厚い吹き溜まりとして偏在する。

(3) 春も深まって気温が上がり、降水量が増大するようになると、富士山斜面上の積雪層に雨水、融雪水が溜め込まれ、水の飽和度が高まる。

(4) 移動性低気圧が本州北側を通り、南側（太平洋側）から暖かい湿気を含んだ風が吹き込み豪雨などがあると、多量の水が供給され、積雪層中に水位（飽和層の上面）が発生する。時間の経過とともに水位が上昇して、斜面下向きの滑り力が増大する。これがスラッシュ（融雪）雪崩の契機となる。

富士山においては、(1)の条件が整えられなければ、(4)の状態には至らない。したがって、通常のスラッシュ雪崩は凍結した地盤上の積雪層全層が崩れるので、全層雪崩の一種といえる（写真①②）。もし積雪層中に連続した水板（＝難透水層）が形成されておれば、水板より上の積雪層が崩れ、流下する。この場合は全層雪崩とはいえないが、スラッシュ雪崩であることに変わりない。大陸氷床上で夏に表面の雪が融けて、2～6度の緩傾斜面でも流動するといわれる、スラッシュ・フローと似た現象が起きる（写真④）

⑤。

また、積雪層に多量の水が溜め込まれた状態（雪のスラッシュ化）に伴う積雪の力学特性の変化について検討し、スラッシュ雪崩として動き出す前の飽和積雪層の持つ危険性（雪粒子間接触に依存する支持力の低下）を解明した。この知見を基に、低体温症による大量遭難事故の一つである1972年3月20日の富士山御殿場口大量遭難事故を検証した。

2013年6月、念願かなって富士山は世界文化遺産に登録された。今後、国内のみならず海外から多くの観光客や登山愛好家が富士山を訪れることになる。富士山は活火山で、噴火のみならず崩壊落石、表層雪崩、融雪雪崩、突風、水雨、水面滑落などの様々な雪氷気象に関係した危険性について、森林限界以上に立ち入る登山者に対して、衆知徹底させておかなければならない。

### 1. はじめに

富士山は日本一の高峰名山であり、首都圏に近く標高2000～2400m付近まで車で行けるため、無積雪期（7～8月）に年間約30万人の参拝登山者があり、最盛期の7月下旬～8月中旬には、登山道に行列ができて渋滞する。

山森欣一(2010)によれば、西暦1945〜2009年の65年間に日本で発生した10人以上の山岳遭難死亡事故8件のうち、4件が富士山で起きている。古いものから順に並べると次のようになる。

- (1) 1954年11月28日 吉田大沢 日大(8人)、東大(5人)、慶応大(2人)の3パーティ15人、表層雪崩により埋没死亡。
- (2) 1960年11月19日 吉田大沢 アルピニスト教室(5人)、早大(4人)、東京理科大(1人)の3パーティ10人、表層雪崩により埋没死亡。
- (3) 1972年3月20日 宝永山東斜面 清水勤労者山岳会(11人)、静岡頂山岳会(7人)など5パーティ1個人、計24人、低体温症およびスラッシュ雪崩により死亡。
- (4) 1980年8月14日 吉田大沢 全国各地からの一般登山者12人、吉田大沢・砂走り下山道を下山中に崩壊落石に遭い死亡。

前出(1)(2)および(3)は、11月〜3月の積雪期における、山岳人の登山または登山訓練中の事故であり、低気圧の通過に伴う荒天、雪崩などの異常気象と関係した遭難である。細かく見れば54、60年の事故は、初冬の表層雪

崩によるものであり、72年の事故は、春の暴風雨雪による疲労凍死とスラッシュ雪崩に遭遇して圧死したものである。80年の事故は、地盤の融解が進んだ晩夏に起きた、岩盤崩壊に起因する参拝登山者の落石遭難事故である。

富士山は太平洋側の暖温帯に立地するが、上部は高山帯環境にあり、様々なタイプの雪崩が、様々な場所で、様々な時期に発生し、思わざる大規模災害や大量山岳遭難事故が起きている。

富士山麓で「雪代」と呼ばれる融雪期の洪水土砂災害は、極めて特異な雪氷気象と関係した災害で、世界的にも「Yukishiro Tada」として認められつつある。富士山における山岳遭難事故のいくつかは、この雪代現象と深く関係しており、1972年の宝永山東斜面の大量遭難死亡事故はこの典型である。

1972年3月20日の遭難事故については、戦前戦後を通じて日本最大の山岳遭難事故でありながら、その原因究明がなおざりにされ、今日に至るまでその実態は曖昧模糊としたままである。何故そうなってしまったのか。これには当時の社会的状況も深く絡んでいたと思われる。

当時の気象情報、新聞報道記事、山岳雑誌の特報記事、山岳団体の遭難事故報告書などの記録や遭難パーティの生

存者、救援捜索活動の参加者からの聞き取りなどにより遭難の経過と実態の解明を行ない、遭難原因の究明を試みた。

## 2. 背景

1953年春、J・ハントに率いられたイギリス隊によってエベレスト（8848m）が初登頂され、ヒマラヤにおける8000m峰初登頂時代が幕開いた。1950年代、日本においても日本山岳会はマナスル（8163m）を目標に、総力を結集して取り組みつつあった。全国の大学山岳部もそれぞれヒマラヤやカラコルムの7000～8000m峰をターゲットに戦術研究、装備開発、高所訓練に余念なく、大学山岳部の意気が最も高揚した時代でもあった。日本における数少ない高所訓練の場として、富士山が選ばれたのは当然の成り行きであった。

しかしながら、冬の富士山の雪氷環境、特に雪崩の危険性に対する認識は、経験の少ない大学山岳部員に浅く、先輩たちからの経験の伝承も敗戦の混乱で十分できていなかった。初めの2つの表層雪崩による遭難事故は、この時期に起きたものである。若者の意気の高揚とは裏腹に、たゞ重なる大量遭難事故はマスコミや世論の響響を買い、無謀登山の誇りを受けることもしばしばであった。

1960年代に入ると、大学山岳部に替わって社会人山岳会の活躍が目立つようになる。ヒマラヤ登山も極地法による8000m峰初登頂の時代から、より困難なヴァリエーション・ルートをラッシュ・アタック法で登頂するという、ヒマラヤ鉄の時代へと変わってゆく。社会人山岳会の多くは第2次世界大戦後に設立されており、先鋭的な登山を目指すグループ、低山ハイキングや近郊登山を目指すグループなど様々な山岳愛好団体が結成されたが、指導者となるべき戦前からの経験者は戦争で死亡した者も多く、指導者不足は否めなかった。

富士山において1954年11月、1960年11月の2つの雪崩による大学山岳部員の大量遭難事故を経験していたにもかかわらず、なぜ1972年3月20日に、再び24人の死者を出す山岳遭難事故を起こしてしまったのであるのか？

問題はこのような大量遭難死亡事故が、登頂を目的とした登攀活動の際ではなく、経験の浅い山岳部員や山岳会員を含めたパーティの登降訓練中に起きたことである。ヒマラヤ遠征のための訓練とはいえ、本番の場ではなく稽古中に重大事故を起こせば、本来の目的を達成できず、本末転倒になってしまう。訓練に安全と慎重さを求められる所以

である。

### 3. 遭難の概要

1972年3月19～20日は連休で、太郎坊駐車場を基地にして富士山域に入っていた登山者の総数は60人程度と思われるが、正確には明らかでない。20日の荒天に際し東斜面御殿場口登山道付近におり、途中の山小屋に退避停滞、あるいは辛うじて脱出し、救助を求めに下山した数少ない生き残った人たちがいる。このうちの一人、杉本実氏はスラッシュ雪崩の数少ない貴重な目撃者、体験者である。数十年前のこととはいえ目に焼き付けられた印象は鮮明で、容易に消し去ることのできない記憶として脳に刻み込まれているに相違なからう。生き残った人たちも現在齢70近くになり、歯の歯が抜けるように亡くなっていく人もある。聞き取りや証言を得られる機会はだんだん少なくなっている。

今回、1972年のこの遭難事故の当事者、静岡頂山岳会の三ツ井孝氏および清水勤労者山岳会（以下、清水労山と略称する）の牧田文利氏、救援捜索に加わった八木功氏、杉本宣明氏、河合俊男氏ら多くの関係者に面会して、当時の生々しい証言を得ることができた。特に三ツ井孝氏の証

言は、永年の私たちの疑問を一挙に解き明かしてくれた。八合目の山小屋に避難して、嵐をやり過ごした牧田文利氏の体験を聞かせてもらったのも貴重であった。残念ながら杉本実氏の証言は、所在不明で得られなかった。

この遭難事故は、富士山東斜面の宝永山付近で雪上登降訓練キャンプ中に、天候急変に遭遇して撤退下山の途中、寒さと疲労および雪崩で24人が命を失ったものである。その所属の内訳は静岡頂山岳会7人、清水労山11人、平塚登高会3人、平塚日産車体山岳会2人、個人山行1人である。当時、御殿場口ルートには60人弱の登山者がいたが、早期に下山したか、あるいは山小屋などに避難して天候が回復してから下山するなどで生還した人は約30人、遭難パーティと同行しながら生還できた人は5人だけであった。

4. 遭難に至るまでの気象の変化と登山行動（静岡頂山岳会と清水労山を中心に）

3月19日9時、揚子江河口付近に発生した低気圧は発達しながら同日21時には済州島付近に進み、日本海を東北東進しながら速度を増し、20日9時には台風並み（中心気圧994ヘクトパスカル）に成長し、輪島沖に達した。さらに速度を上げ（52km/時）青森県を横断し、21時には北海

道東方沖にまで進んだ（飯田陸治郎・1972）。

低気圧が山陰沖にあった20日5時、静岡地方気象台は静岡県全域に暴風波浪注意報を発令（ラジオ放送は6時10分ごろ）している。両パーティはこの注意報を得ていなかったようであるが、仮に得たにしても、現場では零時ごろより暴風雪の真つ只中にあり、暗闇の中での避難行動は実質的に不可能であった。

清水旁山の登頂パーティ（リーダー・池田利裕氏）7人は、19日夜、御殿場口八合目にキャンプしていたが、あまりの暴風雪に山小屋（見晴館か？）に避難し、20日は停滞した（サブリーダーであった牧田文利氏によれば、あまりの暴風雪に当日下山の選択肢は全くなかったという）。翌21日に天候が回復してから全員で下山、途中、遭難救助隊と遭遇し、直ちに遭難した訓練パーティの捜索に加わった（登頂パーティと訓練パーティとの通信連絡はとれていなかった）。

清水旁山の訓練パーティ（リーダー・杉本実氏）12人は、御殿場口下り六合（標高2750m）にキャンプしたが、夜半からのミゾレ混じりの暴風雪でずぶ濡れになり、テントで除雪しながら夜明けを待つしかなかった。20日早朝には近くの六合目避難小屋に移った。ここにはすでに平塚日

産車体山岳会ほか数パーティが避難していた。風は防げたらが雨漏りが激しく、安全な避難所とはいえなかった。他パーティが下山した後、午前10時ごろ暴風雨の中、2つのザイルパーティに分かれて下山を始めた。直線距離で約5km、どんなに悪くても2〜3時間で車を置いてある新二合目太郎坊駐車場に行き着ける、という判断があったという。

しかし、強い南西の暴風雨と深い湿雪に足を取られ下山は遅々として進まず、1時間もしない内に7人が次々に意識障害を起こし、低体温症で倒れていった。仮死状態の7人を1ヶ所に収容した後、残った5人は救援を求めて空身で下山を始めたが、2人を霧で見失い2人を雪崩に浚われ、リーダー1人のみが2度の雪崩に流されたものの奇跡的に脱出して、20日23時30分ごろ捜索隊と出会い、急を告げた（出発後13時間半）。後日の捜索で11人が遺体で発見された。

静岡頂山岳会パーティ（リーダー・三ツ井孝氏）9人は、19日正午前に宝永山肩（標高2700m）の火口側緩斜面にテントを張り、同日午後は宝永火口の正面火口壁で登高訓練を行なった。この日は天気が良く、隊員2人は午前中に七合五勺から頂上往復を行なっている。

夕方には風が強まり、雪もちらつき始めた。20日零時ご

ろから暴風雪となり、やがてミズレに変わった。夜が明けても嵐はやまず、8時ごろ撤収下山を決断、宝永山肩の風下側に一時避難用の雪穴を掘り、女性、新人隊員を収容し、古参隊員でテントを撤収する。

9時30分、2つのザイルパーティに分かれて下山開始する。10時10分ごろ、四合目付近に達したところで隊員3人が次々に倒れ、甦生介護に努めるが功を奏しなかった。強い風雨の中、残った6人は12時ごろ下山を再開したが、さらに1人が弱り出したので3人が介助にあたり、リーダーと新人の2人が救助を求めて先行下山した(12時50分ごろ)。2人は数時間の彷徨の末、15時半ごろ新二合目太郎坊駐車場にたどり着いた(出発後5時間半)。駐車場の車は雪崩に浚われ、道路は雪崩のデブリで塞がれており、歩いて表富士有料道路に出て、折から通過した車に便乗して17時50分、御殿場警察署に救助を求めた。

翌21日の捜索で、倒れた3人は四合目付近で、途中で別れた4人は宝永沢およびその下流の雪崩デブリ中で遺体として発見された。

以上のほか平塚日産車体山岳会2人、平塚登高会3人、個人山行1人を加えた合計24人の死亡が確認された。雪崩に浚われた人は8人(生存者の証言)いるが、清水労山の

杉本実氏のみ生還している。凍死した後に雪崩で流されたか、雪崩に浚われて死亡したか不明の人もいる。

今日の雪氷学の知見からすれば、この遭難の原因は次のように解釈されよう。積雪層に多量の雨水が加わって(水で)飽和状態になることにより、積雪層自身の持つ内部摩擦角が低下する。この状態になった斜面上の積雪層が不安定化し、崩れ出すとスラッシュ雪崩(粘性の大きな液状体の雪崩)になる。崩れないまでも、多量の水を含んだ雪はシャーベット状になり、靴底面の接地圧を支えられなくなる。腰高より深い積雪の所では実質的に歩行できず、0℃の氷水の中でもがくことになる。装備が適切でなければ、数十分で低体温症で死に至る恐れが高まる。1972年当時、この斜面積雪層のスラッシュ(雪解け)雪崩とスラッシュ化に伴う雪の力学性の変化について十分認識されていなかった。また、こうした危険性を感覚的に察知する能力を持った、場数を踏んだ経験者も少なかった。

古来(少なくとも戦国時代以後記録された)、富士山麓で「雪代」と呼ばれ恐れられていた融雪期の土石流は、雪のスラッシュ化とスラッシュ雪崩を源とする雪、水、土砂の混合流体の段波洪水であることが近年明らかになってきた。しかし、この混合流体の動態はよく分かっておらず、実見

した人もほとんどいなかった（写真③⑨）。

最近の2007年3月25日、富士大沢源頭部に設置されたテレビカメラ（国交省富士砂防事務所のDVD動画）で、映像として捉えられたのが初めてであった。それはスラッシュ雪崩の動態の多面性（様々な高い粘性を持つ流れ体）を改めて示すものであった。

1972年3月20日の富士山御殿場口の大量遭難事故は、リーダー、メンバーを含めて登山者個々人が、雪のスラッシュ化現象とスラッシュ雪崩についての知識を持っていなかったから起きたというより、もともと学会、山岳界、マスコミ、社会一般のなかにスラッシュ化現象と、それがもたらす災害についての知識をほとんど持つていなかったからである、といった方が正しいであろう。

春の嵐による天候の急変、甘く見た山の気象、無謀登山といった言葉で括られるほど、この遭難は単純ではない。亡くなった24人のほとんどが10代、20代の前途ある若者たちであることを思うと、悼みて余りある。

## 5. 遭難事故の残響

3月20日夕刻から深夜にかけて、富士山御殿場口を中心に大量山岳遭難の可能性が報じられたとき、多くの人は半

信半疑であった。遭難場所が宝永山東緩斜面で、登山基地である新二合目太郎坊駐車場とは指呼の間にあり、積雪期富士登山ではなく訓練を目的とした山行であったので、相応な荒天でも遭難するはずはないと思っただからである。

最初の通報を受けた御殿場警察署は署長の交代時期で、新任の署長は赴任しておらず対応にもたついた。また、大規模な山岳遭難に対する救助体制も救助装備も用意されていなかったため、県警本部に応援を求め対処した。

捜索救助の実行部隊になったのは、地元消防団、各種山岳団体会員などで、陸上自衛隊が輸送、通信などの支援を担当した。3月21日から3日間の捜索で18人の遺体を収容できたが、残る6人の行方不明者については雪崩デブリに埋没している可能性が高く、天候も悪化し二重遭難の恐れも高まったため、以後の捜索は各山岳団体に任されることになった。その後の捜索で、4月10日までに行方不明者すべての遺体が収容された。

この遭難に対する地元民の反響は、多くの若い人たちの無念の死を痛ましく思う素直な気持ちと同時に、地元の夢である将来計画（前年完成した太郎坊駐車場を核とした双子山観光開発、スキー場計画）に水を差し、計画をフイにするものだという強い反発もあった。

この大量山岳遭難事故を報じるマスコミの論調は、当初の事実関係中心の報道から遭難の大きさが明らかになるにつれ次第に「甘く見た山の気象」「地元の山という慣れ」「無謀登山」と厳しくなる。また、数ヶ月前に起きた全学連浅間山荘事件と「3人寄れば山岳会」という社会現象を結びつけ、若者たちの無謀な行動に警鐘を鳴らすという記事もあった。

静岡地方気象台の暴風雨注意報が、富士山地域が実質的に暴風雨圏に入ってから発令されたことに対し、遅かったという非難の声もあった。当時は深刻な東西冷戦時代であり、日本の西側にある中国、ロシアの気象情報を得にくかったという事情があったにせよ、低気圧のあまりに急速な移動、発達深化に予報体制がついていけなかったのは事実である。

また、気象官署の雪崩に関する分類は表層雪崩と全層(底)雪崩の2つだけで、富士山でしばしば起きるスラッシュ雪崩(雪代)は、全層雪崩に含まれるとされていた。日本海側山地で春に一般的に見られる全層雪崩と富士山で見られるスラッシュ雪崩とは、発生メカニズムにおいて大きく異なっており、雪崩注意報・警報を出す手法も違って当然である。

「全層雪崩がどのような場所でのようなときに起きやすいか、また、悪天の中を強行下山したらどうなるか、経験のある登山家であればよく知っているはずで、これを無視して多数の遭難者を出したのは、無謀と言うほかはない」というのがマスコミを含めた世間一般の論調で、遭難パターンのリーダーに対する誹謗中傷も多々あったという。また、リーダーの刑事責任を問う動きもあったと聞かすが、不問となった。

## 6. 富士山での大量山岳遭難を避けるために

富士山での大量山岳遭難事故は表層雪崩、スラッシュ雪崩、崩壊落石(素因は岩盤割れ目の氷の融解)、暴風雨雪による低体温症、突風による滑落など、雪氷気象と深く関係している。積雪期登山や登山訓練を目的とする山岳人にとって、富士山の雪氷気象の特性を熟知しておくことは必須である。積雪期の富士山は極めて危険な山であると認識すべきである。

1940年、日本山岳会の広瀬潔氏は、雑誌『山小屋』昭和15年2月号に「富士山の雪崩につきて」と題する論文を寄稿している。この中で氏は、春先の底雪崩(雪代)の起きる条件として、(1)発達した低気圧が富士山の北側を

通過し、暖かい南風が吹き込んで山頂で0℃付近まで上昇する。(2)多量の降雨がある、などを挙げている(広瀬潔・1940)。これは当を得た言である。

富士山の雪氷気象学的調査研究の成果によれば、西高東低の冬型気圧配置の下では降雪(雨)量は少ないが、気圧配置が乱れて発達した低気圧が日本海を通過する春(ときに初冬も)には大量の降雪、降雨があり、表層雪崩やスラッシュ雪崩がしばしば発生する。そのとき、その場所の気温により表層雪崩になったり、スラッシュ雪崩になったり、あるいは両者が混在したりする(写真⑥⑦)。

春に南岸低気圧、あるいは本州をまたぐ二つ玉低気圧が通過する場合、本州太平洋側で大雪になることがある(昭和11年の2・26事件当日など)。このような気象条件下では、富士山麓ではかなりの降雪があるものの、表層雪崩はあっても大きなスラッシュ雪崩が発生することは稀である。本2014年2月14～15日の南岸低気圧の通過に伴う関東甲信越地方での大雪で、富士吉田や河口湖で観測史上最大の140cm以上の降雪量を記録した。また、同年3月14日の南岸低気圧の通過に際しては、吉田口五合目で連続雨量160mm・時間最大29mmが記録されている。このときの雨と雪の境界高度は2500m前後と考えられ、富士山

の六合目～八合目で大雪となり、積雪深の増加が見られた。この大雪イベントで、富士山北斜面を横断する富士スバルラインの3ヶ所で表層雪崩による施設災害が発生した。有料道路は閉鎖中で、幸い人身事故にはならなかった。

初冬あるいは春の低気圧の移動速度、発達速度はしばしば急速に変化し、「爆弾低気圧」などと呼ばれる。天気予報が現実の気象変化に遅れる場合(1972年3月20日のケースなど)、いかに気象予報の技術が発達しても、登山者自身の衛星写真動画解析や局地気象特性を把握した経験的な判断は欠かせない。

1972年3月20日の遭難事故のケースで見れば、御殿場測候所の降雨量記録(20日20:00～22日03:00の総雨量212mm)によれば、20日早朝から降水量が多くなり、時間10～20mmの雨が夕方まで続く(標高1400mの太郎坊付近ではこれを相当上回っていると思われる)。当該地域の積雪層中の含水量をみれば、時間が遅くなればなるほど、また斜面の下方ほど多くなる。すなわち、スラッシュ化が進み雪上歩行を困難にする。また、スラッシュ雪崩の危険性も高まり、よりリスクの高い場に晒されることになる。清水労山雪上訓練パーテイ、静岡頂山岳会パーテイはいずれもこの悪天に遭遇して、山小屋に避難停滞して嵐をや



頂点で、標高 2200~2400m 付近にある)。本稿 1972 年 3 月 20 日の大量遭難事故は、宝永山(左



写真① 1981年3月20日の富士山東斜面のスラッシュ雪崩群（発生点は地肌の出た黒い部分の突起）に繋がる吊尾根の下方斜面で起きた



写真② 写真①の左手、宝永山直下で発生したスラッシュ雪崩の頂部。点発生の全層雪崩で、雪崩れた跡には凍結した地盤が露出している



写真③ 写真②のスラッシュ雪崩のデブリで破壊された御殿場太郎坊スキー場のリフト機械棟と支柱



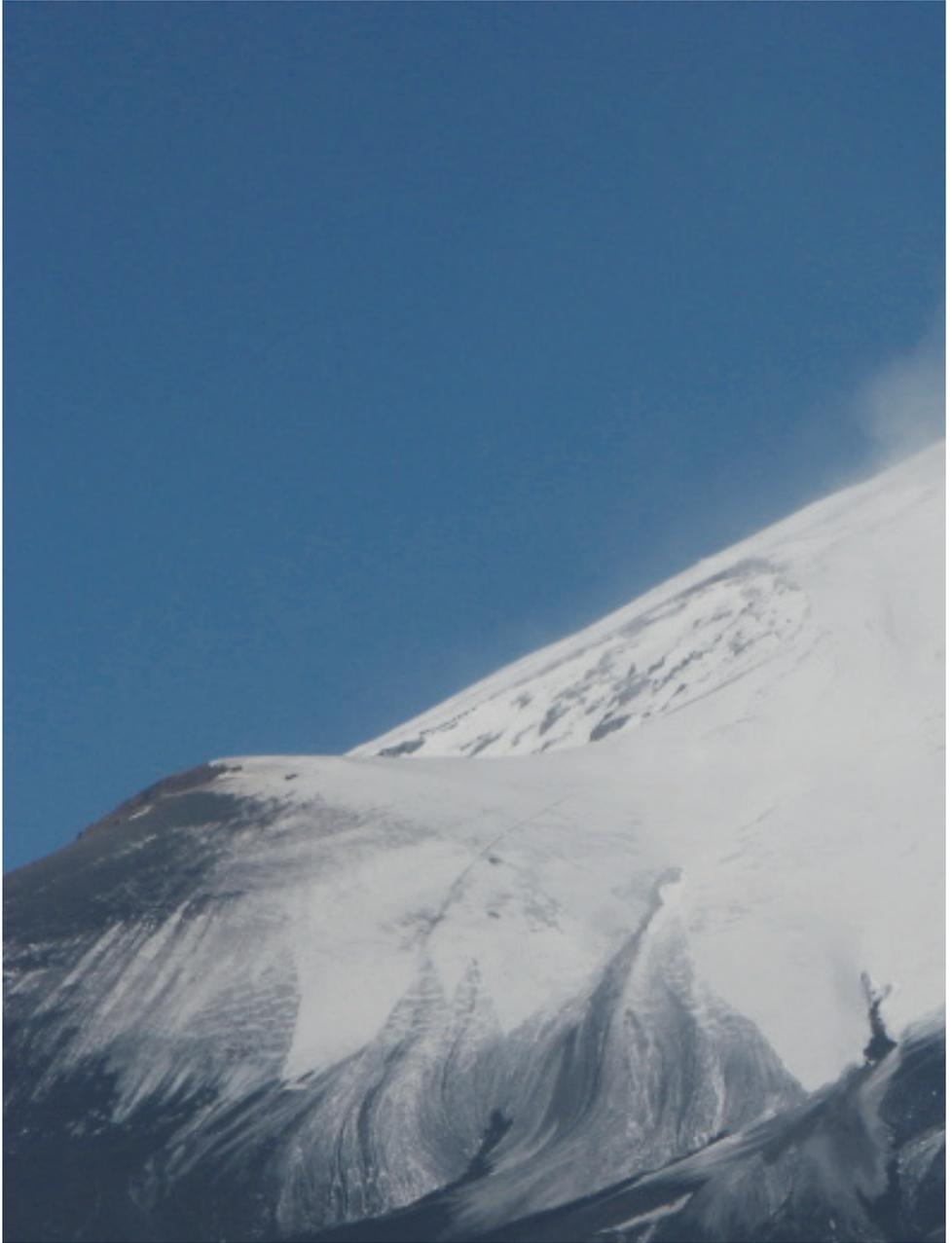
写真⑤ 写真④の左側、宝永山東斜面のスラッシュ雪崩跡。1972年3月20日の大量遭難事故は、宝永山の吊尾根下部、四合目付近で起きた



写真⑥ 富士山南斜面、富士宮口五合目上方の谷状凹地に吹き溜まってできた雪庇。その先端部が崩落して、表層雪崩やスラッシュ雪崩の引き金となる



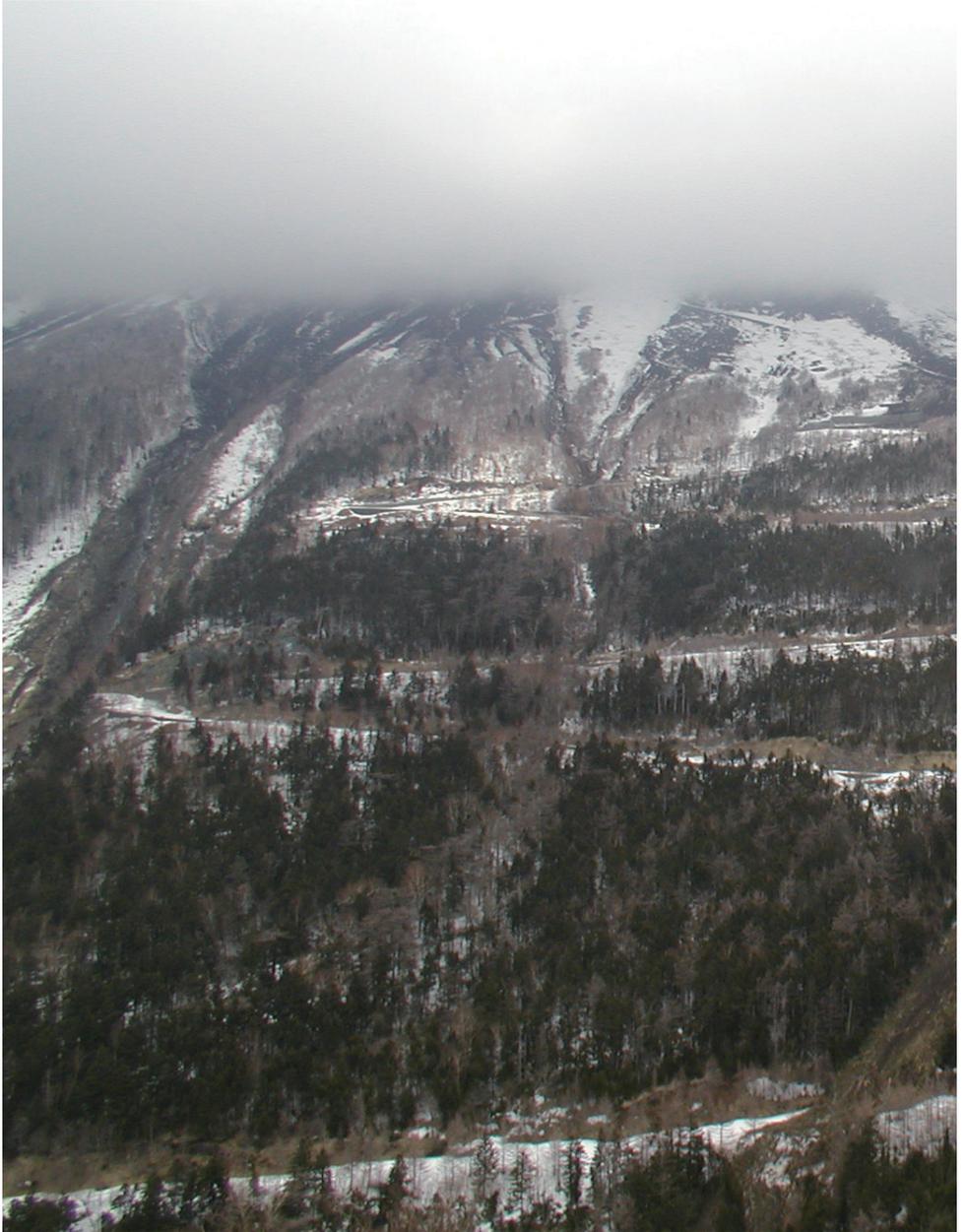
落ちており、発生点は 2400~2500m である



写真④ 2007年2月14日の富士山東斜面のスラッシュ雪崩群。難透水性の氷盤より上部が雪崩



の雪崩跡(高木林帯が消滅している)。2007年3月25日にスラッシュ雪崩が発生し、左側を通



写真⑦ 1976年3月25日ごろ、雪庇の崩落(写真⑥)によって発生した表層雪崩(高速煙型雪崩) 過した。発生源はほぼ同一地点である

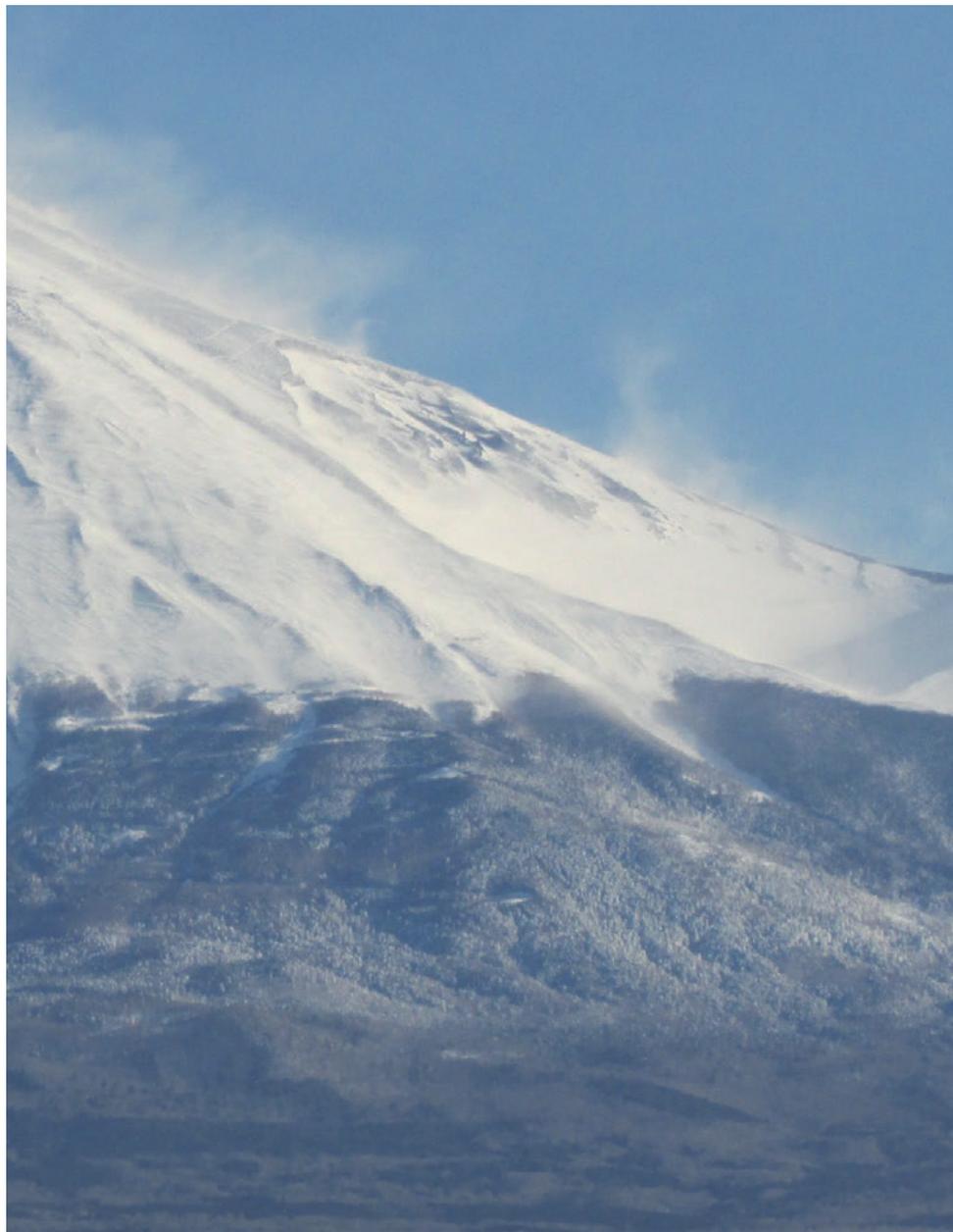




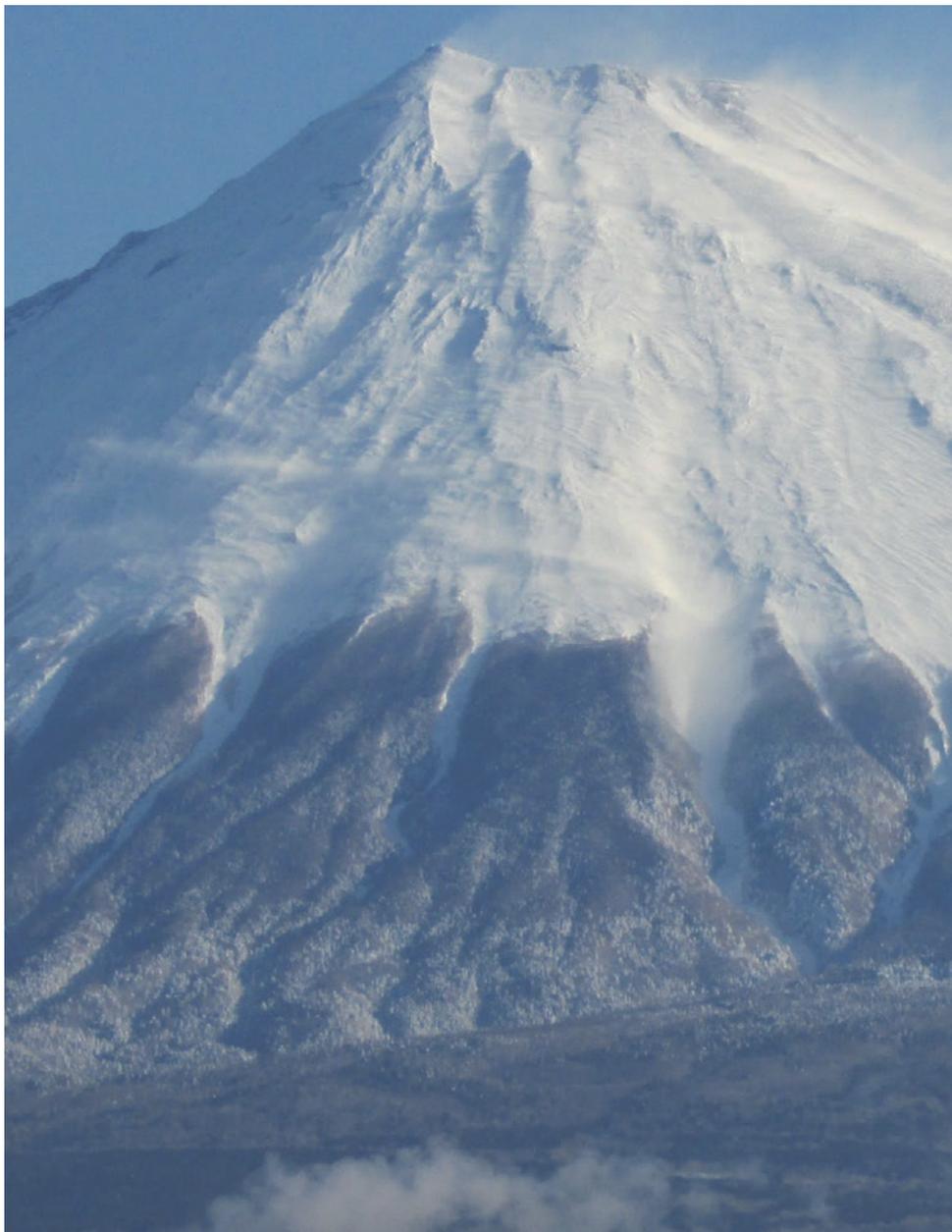
写真⑧〈右上〉 スラッシュ雪崩のデブリは、流下するにしたがって水分量が多くなり、流速を増す。斜面下方の凍結地盤層が薄くなる（20～30cm）所でこれを突き破り、下位のルーズな非凍結層を深くえぐって大きな滝状地を造る

写真⑨〈右〉 斜面下部に堆積したスラッシュ雪崩のデブリ堆積物と表面地形。表面はスコリア（破片状の火山噴出物の一つ。岩滓）の薄い層で覆われている

写真⑩〈上〉 スラッシュ雪崩のデブリの断面。ごま塩状のデブリで、5～15%のスコリア粒を含むため、雪デブリが全部融解すると10%程度の厚みのスコリア礫層を残す。富士山東斜面はスラッシュ雪崩の常襲地帯で、いったん森林植生が破壊され裸地化すると、自然回復が難しい。富士山東斜面のみ森林限界の高さが1300～1500mまで押し下げられているのは、これが原因と思われる



積もった雪は一気に飛雪となって移動し、最終的に谷状凹地あるいは風陰にあたる東斜面に落  
沢、市兵衛沢の源頭部の状況



写真⑪ 降雪をもたらした低気圧の通過後、強い北西風～西風になると、富士山上部の裸地にち着く。この時期には表層雪崩が起きやすい。2014年3月5日の富士山南西斜面の箱荒



写真⑫ 富士山西斜面を深く刻む富士大沢。源頭部の急崖は不安定で、夏期には絶えず落石崩壊があり、谷底に岩礫が堆積している。冬期には急斜面に積もった雪も安定せず、すぐに谷底に落ち込む。何年か経つと岩礫と崩雪の龐大な堆積物が、谷底を埋めて形成される。これがスラッシュ雪崩を契機として、山麓扇状地に大量の土砂を排出する。左側に滑沢・仏石流しの表層雪崩が見られる



写真⑬ 富士山北東斜面の吉田大沢。源頭部は急ではあるが広く斉一な長大斜面で、大量の雪を溜めやすい。天保5年旧4月8日に上吉田，下吉田を襲った雪代は、吉田大沢八合目付近から発したといわれる。1956年11月、1960年11月の遭難事故も、八合目～九合目付近から発生した表層雪崩によるといわれる。表層雪崩もスラッシュ雪崩も規模が大きければ、デブリは吉田口登山道の六合目と七合目の間で、吉田大沢本流とツバクロ沢に分流する

り過ごすという選択はしなかった。それは、両パーティのリーダーたちは富士山の経験が豊富で、悪条件の下でも宝永山肩から新二合目太郎坊駐車場まで2〜3時間で下山できると確信していた。また、隊員の大半は若い勤労者で、翌21日は出勤日となっており、停滞による欠勤を避けたいという気持ちは共通して持っていたようである。下山を開始した9時30分〜10時の時点では、深刻な危機感を持っていなかったという。下山開始後1〜2時間のうちに低体温症で次々に倒れるということは、想像もできなかったであろう。叩きつけるような暴風雨とスラッシュ化した積雪が、短時間のうちに行動の自由を奪っていったのである。

両パーティ計21人のうち、生還した3人（清水労山訓練パーティのリーダー・杉本実氏、静岡頂山岳会パーティのリーダー三ツ井孝氏と新人の立山昌氏）は、下山時の先頭または2番目にいた。通常、トップはラッセルで重労働を強いられ、最も消耗が激しい。三ツ井氏の証言によれば積雪深は1m程度あったが、ラッセルの深さは膝または膝よりやや上までであったという。三ツ井氏の後に続いた立山氏は、初めての積雪期登山であり経験も乏しかったが、リーダーに密着して追っていた。

先頭または先頭グループが生き残って、ラッセルの少な

い後続グループが全員死亡したのは、単に個人装備、経験の差と言い切れない何かがあるに違いない。平塚日産車体グループのリーダー三田幸治氏によれば、20日正午過ぎ、同じ地域で下山中、ラッセル跡の溝に水が集まって川のようになり、恐ろしくなまって少し登り直し、ツエルトを張ってビバークすることにしたという。

これらの事実は、ある重要な示唆を与える。すなわち先頭ラッセル者の靴底面は積雪層上半の不飽和層にあり、雪の内部摩擦による支持力を利用できたのに、後続者は不飽和層を踏み抜き、下半の水で飽和された積雪層（粒子間接触が減少し、支持力が低下した）にさらに積雪層下の凍結した地表面まで潜り込むことになる。ラッセル跡には周辺の雪粒子間水が流れ込み、冷水で満たされた壕となる。後続者は下半身をほぼ0℃の氷水に漬かり、1時間もしないうちに低体温症で意識を失い、仮死に至ったのである。低体温症は雨具や防寒服を浸透した雨水、冷気だけで起きるのではなく、下半身が冷水に漬かった状態で体温が奪われれば、同様に起きる。

先頭者の生き残った原因は、斜面上方では積雪層上部の不飽和層を利用できたことによるが、斜面下方では積雪層全層がほぼ飽和されており、低体温症リスクとともにス

ラッシュ雪崩のリスクに晒されることになる。スラッシュ雪崩に浚われ、デブリに埋まって圧死した人は7名である。生還した三ツ井孝氏の証言によれば、積雪層の下底部に轟々と水が流れ、斜面下部の雪崩の通った谷状地に滝を造って激しく濁流が流れ、渡るのが困難であったとのことであった（写真⑧）。

1972年3月の本件のケースで考えれば、結果論であるが、積雪層中に水（融雪水や雨水）が十分溜め込まれる前の20日早朝に下山を始めていたら（荒天の予測にもよるが）、別の状況になっていたかもしれない。いずれにしろ、正確な情報の把握とリーダーの冷静な判断による早めの対応が大事である。

積雪期の富士山で山岳遭難を避けるには、極めて常識的な言い方であるが、(1)悪天が予想されたら入山を控える。(2)入山中に悪天が予想されたら迅速に下山する。(3)入山中に悪天に遭遇したら近くの山小屋などに避難し、天候の回復を待つ。ただし、六合目以下の山小屋はスラッシュ雪崩で破壊される恐れがあり、早めの下山退出が得策である。(4)天候回復直後は、風向が変わり風速も増して雪は飛雪となって移動（写真⑩）し、谷状窪地に急速に吹き溜まり大きな雪庇を造る。この雪庇の先端が崩れると表

層雪崩の起因（写真⑥）となることが多い。この種の表層雪崩の発生場所はほぼ決まっている（写真⑦⑩⑪⑬など）が、好天になったからといって、すぐに行動するのは慎重でなければならない。

積雪期における富士登山で、大雨が予想される場合には入山の可否を含めて検討すべきであろう。論語にいう「鬼神は敬してこれを遠ざく。知と謂うべし」である。余裕のある日程、退く勇氣を持つこと、意地を張らないことなども、生き残るために重要な事柄である。耐水性の高い防寒具の使用は言うまでもないが、下半身も防護する完全なものはない。

〈参考文献〉

- Anna,S.,Fukue,M. and Yamashita,K.(1988) Deforestation by slush avalanches and vegetation recovery on the eastern slope of Mt.Fuji. *Proc. 6<sup>th</sup> Interpraevent*, 1,133-156. Graz.
- Anna,S.,Fukue,M. and Yamashita,K.(1997) Slush lahar hazards on the flank of Mt. Fuji. *1<sup>st</sup> Int. Conf. Debris flowhazards mitigation. Proc. 299-308*, Water Resources Engeneering Division/ASCE, San Francisco.



- 安間 荘(2002)スラッシュフローと雪代災害 『月刊地球』22、544～551
- 安間 荘(2007)富士山で発生するラハールとスラッシュ・ラハール 『富士火山』(荒巻重雄ほか編) 285～301 山梨県環境科学研究所
- 飯田睦治郎(1972)気象面から解明する 『岳人』1972年5月号、43～45
- 頂会(1972)富士山遭難報告書
- 頂会(1973)春幻 富士山遭難追悼号
- 清水勤労者山岳会(1972)富士山遭難報告書
- 広瀬 潔(1940)富士山の雪崩につきて 『山小屋』昭和15年2月号
- 広瀬 潔(1972)御殿場口の春雪崩 『岳人』1972年5月号、45～47
- 藤井理行・樋口敬二(1972)富士山の永久凍土 『雪氷』34、9～22
- Fukue, M., Anma, S. and Okusa, S. (1983) Slope erosion related to soil freezing and thawing on Mt.Fuji. *Spec. Pub. on geological environment and soil properties* 405-432 ASCE/ geotechnical engineering division. Houston. ( Shashim
- 山森欣一(2010)登山死亡遭難事故事例集(2010年版) 283～290 山森欣一自家版
- (本稿は、2013年10月20日、静岡支部主催「公益社団法人 日本山岳会第29回全国支部懇談会静岡大会」で行なわれた特別講演録に加筆訂正したものである。)

## 東チベット・四川青海4500km——2013年6月

### 幻のメコン川源頭未踏の水河

中村 保

「画竜点睛を欠く」失敗談と豊穡の旅。2013年6月6日に成田を発った老年隊中村・新谷は予定より1週間早く6月27日に帰国した。常連の永井剛さんは、医者のアドバイスにより参加を見合わせた。

2013年前半もチベット自治区の東チベットへは外国人はオフリミットだったので、入域許可は要らない青海省に的を絞ったが、探査の目標であったメコン川源頭の未踏の水河には近くまで行きながら到達できなかった。当てにしていた馬のキャラバンの編成ができなかったためである。「冬虫夏草」採りの最盛期で、標高4600〜4800mの高所に離れて点在する遊牧民の住居を2日間探し回ったが、ほとんど出払っていて、馬と馬方の段取りがつかない

かった。来年の8月に再挙を期す。

メコン川源頭の未知の水河と山は幻に終わったが、四川青海の長駆4500kmは雨季にもかかわらず天気にも恵まれ、内容の濃い多様な旅を楽しむことができた。たどった行程を順に要約する。

- (1) 四川西部高地、雀兒山 (Chola Shan) 東部山塊の未踏のピーク
- (2) メコン川上流部、雜多 (Zadoi) 付近の岩峰群
- (3) メコン川源頭 (Headwaters) の未踏の水河と山の探査 (不成功)
- (4) 巴顏喀拉山 (Bayan Har Shan 5267m) と黄河源頭鄂

陵湖 (Lake Ngoring)

(5) かつての「謎の山」アムネマチン阿尼瑪卿北面と東面

(6) 鋸の歯のような果洛山・年保玉則連山

(7) 20000人を擁する四川省色達喇榮五明仏学院

メコン源流部については、論考を拙書『アルプスのチベット』(山と溪谷社、2005年)に掲載した。「メコン川(瀾滄江)の水源探査・源頭への第一到達者」の章で探検史、論争を検証し、1994年9月12日に東京農大探検部と中国科学院の日中合同隊が、地理的に最長の水源(英語で true source、中国語では「正源」と呼ぶ)に初めて到達して、初下降した記録を詳しく紹介した。農大探検部のプロモーターはメコン川下りの第一人者、北村昌之さんである。登山に関していえば、メコン源流域の最高峰・曲阿加吉瑪 (Qajajima 5930m) は、2004年に新潟県山岳協会の隊により初登頂されている。どういう訳か、このピークの周辺は氷河が発達していないが、曲阿加吉瑪の東側には知られざる未踏の氷河と5800mクラスのピークがたくさん存在する。この事実を旧ソ連地形図20万分の1図と中国人民解放軍地図局地形図10万分の1図(極秘)で知った。

衛星画像のグーグルマップにも同じ位置に大きな氷河がたくさん映し出されている。まだ誰も知らず、写真もないことを北村昌之さんは確認してくれた。それ以来、次のプロジェクトとして心に温めていたが、念青唐古拉山東部の易貢蔵布と東南チベットのゴルジュの国、四川の未踏峰踏査に取り組んだため、メコン源流は今年、2013年までお預けとなっていた。以下、メンバー・日程のまとめの後、東チベットの最新情報も交えて紀行風に記述を進める。

メンバー：中村 保(78)、新谷忠男(69)

チベット族ガイド アワン (Awang 36)

チベット族コック ツェリン (Tshering 43)

漢族ドライバー 游紅偉 (You hong wei 45)

張启軍 (Zhang qi jun 40)

日程(総走行距離 4500 km)

6月6日 東京―北京―成都 600 m 珉山飯店泊

6月7日 成都(曇) 08:00発―石棉―瀘定―康定 250

0 m、15:30着 康定情歌大酒店泊 三菱パジェ

ロ2台

6月8日 康定(曇 07:00 15℃) 07:35発―折多山峠―康

6月16日	玉樹(快晴07:00 7℃) 07:30発—三江自然公	6月17日	園—巴顏喀拉山峠4824 m—瑪多4220 m、16:00着 瑪多賓館泊
6月15日	雑多(曇/晴07:00 7℃) 07:50発—長拉山峠 4712 m—文成公主記念館—玉樹、15:30着	6月18日	瑪多(快晴07:00 9℃) 08:00発—黃河源頭鄂 陵湖4250 m—瑪多、14:45着
6月14日	紅色(曇07:00 2℃) 07:30発—觀光用メコン 水源(雪が道路を遮断)—扎青4260 m—雑 多、16:00着	6月19日	瑪多(晴/曇07:00 7℃) 07:30発—石花峽4 240 m—アムネマチン展望—雪山郷3780 m—瑪沁3780 m、17:45着 商務賓館泊
6月13日	紅色(高曇07:00 -2℃) —遊牧民より馬・馬方 調達4800 m(断念)	6月20日	瑪沁(雨/晴/曇/雨07:00 9℃) 07:30発— 青珍山峠4382 m—甘徳4040 m—達日3 980 m—白玉3830 m—隆格山峠4398 m(年保玉則連山パノラマ)—年保玉則コテ ジ4100 m、16:00着
6月12日	雑多(快晴07:00 0℃) 08:00発—11の450 0—4800 mの峠—メコン源流・紅色470 0 m、15:30着 紅色村遊牧民テント泊	6月21日	年保玉則コテージ(曇07:00 5℃) 07:30発— 白玉—班瑪3560 m、13:30着 永興賓館泊
6月11日	玉樹(快晴07:00 2℃) 08:30発—雜多県境4 250 m—長拉山峠4712 m—雑多4020 m、15:00着 瀾滄江商務賓館泊	6月22日	班瑪(雨/曇07:00 13℃) 07:30発—峠451 0 m—知欽(四川青海省境) 3750 m—色達 3860 m—色達喇榮五明仏学院3800—4 200 m、14:00着 色達喇榮賓館3925 m泊
6月10日	玉樹(快晴07:00 1℃) 再建中の結古寺、キャ ラバン用食料調達		色達喇榮賓館(雨/曇/雨07:00 6℃) 07:00 発—馬尔康2630 m、15:15着 馬尔康飯店
6月9日	甘孜(雨/曇/晴07:00 8℃) 07:30発—馬尼 干戈—石渠—省境峠4700 m—玉樹3650 m、20:10着 財富賓館泊		
	定新空港4250 m—塔公草原—甘孜3400 m、16:30着 康巴賓館泊		

6月23日 馬尔康(曇07:00 13℃) 08:00発—甘堡藏寨1  
840m—汶川1420m—都江堰—成都、  
14:00着  
6月26日 成都—北京—東京

## 西部大開発と不穏な辺境——僧院建設ラッシュ

中国の経済発展は沿海から内陸へ軸足を移しており、その象徴が人口1300万人のグレート成都である。現代都市への変貌には目を見張る。アジア最大の総合複合ビル“Global Center”の完成は真近である。折しも外国企業誘致のため“Fortune Global Forum”(国際財富フォーラム)開催を控えて、街の整備が進められていた。

6月7日、三菱パジェロ2台で長駆の旅に成都を出発した。私が最も信頼するチベット族ガイドのアワンは、コックとともにラサカから先に来ていて成都から同行した。準備はいつもどおり四川大地探検の張継躍さんが行なった。メコン源流域を2週間、馬で踏査するため重装備となった。

2ヶ月前の雅安地震はすっかり復旧されていた。成都—西昌高速道路を石綿で降り、大渡河を北上するルートを行く。川沿いに2つのダムが完成し、瀘定のダム工事も終わ

りダム湖ができています。石綿から康定までの高速道路建設が着手されており、大渡河峡谷の山肌を容赦なく削る、強引な突貫工事が行なわれている。西部大開発による、恐るべき自然破壊の槌音が響く。康定からは川蔵公路の新都橋をバイパスして、康定新空港から塔公寺への新道を初めて体験した。新しい村が建設されつつある。ヤクの多い、美しい牧草地帯を通過する。

僧侶の焼身自殺が頻発した四川省西部高地の甘孜・阿壩両州での外国人旅行者の通行規制はどうか。制限は緩みつつあるとはいえ、不安材料であったが、特に大きな問題にはならなかった。外国人規制より厄介なのは道路事情である。幹線道路はいつでもどこかで舗装工事をしており、交通止めが多い。その上、チュック・ポストが多く、甘孜と馬尼干戈の中間のチュック・ポストで不快な思いをさせられた。「なんでもありの中国」である。ガイドと運転手が公安に呼び込まれ、埒が明かない。積荷が規定より多過ぎると文句を言われ、1台2000元の罰金を要求された。訳の分からないクレームを値切って、1台につき2000元を払って通してもらった。泣く子と公安には勝てない。

チベット仏教徒の面従腹背か、信仰心の篤さの証左か、ここ数年、四川西部高地カンバの生活圏と青海省アムド地

方は僧院の建設ラッシュである。康定から玉樹に至る街道の随所で新築なった壮麗な僧院、大規模な建設工事を目の当たりにした。塔公寺、瀘霍の大僧院、馬尼干戈のユニークな様式、竹慶寺の拡大、石渠 (Shigu) の新築工事などなど枚挙に暇がない。建設資金はどこから出たのか。多分、信者の寄贈と僧院自身のビジネスの収益によるとアワンは言う。後の項でアワンのチベット族に関する見識を披露する。中国政府により、数年前からチベット族の定住化はチベット自治区、青海省、四川西部高地の全域で進められている。至る所で政府指導による「新村」を目にする。「新村」は公道に近い場所に造られる。政府による監視を容易にするためらしい。遊牧民は夏には放牧に出かけ、従来のようにテント暮らしをする。そのテントも、従来のヤクの毛で作った黒テントから既製の白テントに変わっている。

### 玉樹と将来のアルパイン・パラダイス

四川經由青海に入るルートを利用して、メコン源流に入る前の一つのテーマとして雀兒山 (Chola Shan) の川蔵北路北側山塊の未踏峰の解明を企てた。馬尼干戈で幹線道路は2つに分かれる。左が中国の公募登山で賑わう、雀兒山

主峰を望む新路海を経て徳格から昌都に通じる川蔵北路、右が竹慶寺、石渠を経て青海省玉樹に至る康蔵公路(別名:石馬公路)である。その川蔵北路と康蔵公路の間に連なるのが5200~5500mの岩峰群である。標高は低い、岷々たる岩のピークが連なる。プロフィールはまだ紹介されていない。

6月9日雨の中、甘孜を出発。天気は快方に向かう。馬尼干戈3810mから康蔵公路をたどる。4480mの峠までは緩やかな放牧地の登りで、左手に岩峰群の東面が次々と現われる。それぞれ個性あるピークで登攀欲をそそる。一つ一つは地図の上で同定できないし、山容は写真を見ていただく以外表現のしようがない。峠からのパノラマも素晴らしい。将来のアルパイン・パラダイスと言いたい所以である。公路は峠から急な下りとなり、歴史的名刹、竹慶寺を過ぎて4000mの放牧地の丘陵を石渠4130mへと続く。理塘高原に匹敵するほど雄大である。石渠もすっかり変わっていた。ここでも大僧院の建設が進んでいる。豊かな放牧地帯で、遊牧民と立派なチベット僧院の世界である。13年前は何もなかったここにも、今はダムと発電所が造られ、近くに「新村」ができている。プロトタイプ規格化された家屋で、家の造りはどの地方でも大同小

異である。こういう傾向は、チベット族の住む四川青海全域に面が広がっている。

四川青海省境の峠 4700 m を越える。青海省に入ると道路は良くなる。夕闇迫るなか青藏公路とのジャンクションを通過し、通天河 (Tongtian Ho 揚子江/金沙江の上流) を渡って玉樹に着いたのは午後 8 時を回っていた。長い一日だった。玉樹は街全体が 2010 年の大地震から復興の最中である。名利、結古寺も再建中である。

### 探検史の舞台・玉樹

チベット—青海—四川へ通じる交通の要衝、玉樹 (Yushu, Jyekundo) は歴史に名を残した探検家たちの十字路である。年代順に列挙する。

- 1881年12月—1882年1月——パンデイト A-K (英国・インド)
- 1889年5月——ロックヒル (アメリカ)
- 1892年11月、1893年1月——ミス・アニー・テラー (英国)
- 1894年5—6月——ド・ラン、グレナール (フランス)
- 1898年——リジンハルト夫人 (オランダ)
- 1900年8月——コズロフ (ロシア)

1918年4月——タイクマン  
1922年5月——ペレイラ (英国)、D・ニール (フランス)

それぞれが個性豊かで、東チベット探検に大きな足跡を残している。メコン源流に初めて到達した探検家ド・ランとグレナール、宣教師アニー・テラー、リジンハルトの旅は想像を絶する苦難の連続であった。ド・ランは玉樹で殺害された。アニー・テラーはラサに向かった最初の女性である。中国内地会 (China Inland Mission) の宣教師として福音を広めるために、ゆるぎない使命感を持ってチベットへ奥深く入っていった。イギリスに帰国したときには、リビングストンのときと同じように、熱狂的な歓迎を受けた。アメリカの外交官 W・W・ロックヒルは、東チベットの探検についての学術的なレベルの紀行を残した、初めての旅行者である。

### メコン上流の山、冬虫夏草——玉樹から雑多へ

快晴が続く。6月11日、玉樹から西へ、メコン源頭への根拠地となる雑多に向かう。玉樹の北30分ぐらいの所に新空港 3800 m ができており、西寧まで定期便が飛んでい

る。道路は部分的に舗装されていて悪くはない。空港付近までは2000年の秋に来ているが、そこから先は初めての土地である。メコン上流の山々は5200〜5500m、標高はさほどでないが放牧地の奥に魅力的なピークが断続的に連なる。岩峰が多い。時間をかけて調べないと地図の上では特定が難しいが、もう一つのアルパイン・パラダイスと言えよう。雑多県に入ってから通過する、色とりどりのタルチョがはためく長拉山峠4712mからの360度の展望、岩峰群のパノラマは、山のスケールこそ小さいが見る者を惹きつけてやまない景観である。雑多の町付近にも顕著なピークが数多くある。

空港から1時間ほどで朶拉朶山峠4504mを越え、婁謙 (Mangcheng) への分岐点4250mを通過して、さらに1時間半で玉樹・雑多の県境の食宿站 (Shisu Station) のチェック・ポストに着く。アワンが玉樹で集めた情報では、冬虫夏草を巡る争いが過熱しており、雑多県に入ることは厳しく規制されていると言う。はたして、食宿站のチェック・ポストで1時間半も待たされる。他県の者を冬虫夏草採りに入れないためである。公安、警察と縄張りを守る村の自警団らしき連中が、通る車を厳しく検査している。6月から7月の冬虫夏草採りのシーズン中、チベット自治区

でも同じだが、縄張り争いで血を見る抗争が頻発している背景がある。

薬効が今一つ分らないので日本人の関心は薄れているが、中国人は華僑も含め冬虫夏草を大変珍重している。値段は鰻登りに高騰しているため、遊牧民の貴重な現金収入になっている。20年前1匹1元だった良質のもが、今は50元で売られている。村人が血眼になる所以である。チェック・ポストは合計4ヶ所あるが、県境が一番厳しかった。ここで検査済みの通行票をもらうことによって、ほかのチェック・ポストは問題なく通れた。

午後3時に雑多に着く。中央をメコンが流れている。恐ろしく不潔な町である。居るだけで病気になるような汚い町である。しかし、周囲のメコン上流の景観は素晴らしい。開発の植音はこの辺境にも及んでいる。早速出版物を探したが、新華社書店はクローズされている。町の住人も冬虫夏草採りに出かけて、多くの店はシャッターが降りている。学校の先生も採りに行く。チベット自治区の那曲と同じように、小学校は6〜7月の2ヶ月間、休校となる。アワンによると、雑多の住人はほとんどカンバで非友好的で、アムド人の方が友好的だと言う。ちなみに玉樹県はほとんどアムド人である。

## メコン源頭へ——幻の未踏の氷河

雑多の町から北村昌之さんがアドバイスしてくれたキャラバン編成基地となる源流部の紅色 4700 m (Hogse) までは、唯一の集落、扎青郷を経て約 200 km である。紅色村から馬で 2〜3 日あれば未踏の氷河地帯にアクセスできるだろうとの情報をもらっていた。雨季にもかかわらず、快晴は 3 日続いている。6 月 12 日朝 8 時に早発ちする。道はメコン川（扎曲）をすぐ離れて北側に一気に 4745 m の峠を越える。朝まだきのメコン川の蛇行と南側の岩峰の連なりは絵画的で美しい。扎青を過ぎてからも 4400 m から 4700 m の 9 つもの峠を越えた。道は途中でときどき二股になるので分かりづらいし、ときどき轍が消える。緩やかで広大な源流域を進む。北側には雪峰が見え隠れする。源頭が近いことを実感する。高揚感が高まる。

午後 3 時半に迷いながらも目的地の紅色 4700 m (N33° 24.887' E 94° 36.433') に間違わずに着く。村といっても、使われていない「紅色村党员活動所」と看板が掛かる集会所と遊牧民の家が 1 軒と白テントが 1 つあるだけである。こんな僻地まで共産党の管理が及んでいる。主は遊牧

民の裁縫師である。白テントに泊めてもらうことにする。ホンダ製の小型発電機がある。扎青郷は 4 つの村だけで、人口は少なく送電線は敷かれてない。紅色は扎青郷の遊牧民の村の一つであり、人家は数 km 離れて 1 軒ずつ点在するだけである。北村昌之さんの情報「紅色から支流の一つ昂納涌曲を遡って氷河にアプローチするのが良いだろう」は正しかった。

しかし、裁縫師によると村人と馬はほとんど冬虫夏草採りに出払っていると言う。懸念が的中する。6 月の日は長い。アワンが裁縫師に案内してもらい、馬と馬方の手配のため源流の丘陵帯 4700〜4800 m に散らばる遊牧民の人家を探す。1 軒目はチベット犬以外には誰もいない。2 軒目も同じだった。成果なしに 2 時間ほど戻ってきた。不吉な予感に変わり不安が募る。雲が出て風も吹き始めて天気が変わる。夜は雨になる。

翌 6 月 13 日は曇りで、薄日が射す。午前と午後の 2 回に分けて、中村も同乗して車で源流の 4800 m 辺り、昂納涌曲の雪解けの流れを避けつつ行ける所まで、人家を探してキャラバンの手配をしようとしたが成功しなかった。ようやく馬が 5 頭いる遊牧民を見つけたが、馬方が一人もいないので諦めざるを得なかった。まだ所々残雪の層があ

る。未踏の水河地帯の手前の5400～5500mの雪峰、岩峰の雄大な連なりの南西側を、山麓に沿ってパジェ口で移動した。その先に夢にまで見た知られざる大水河と、5800mクラスの未踏峰が存在するはずである。しかし、断腸の思いで今回は断念せざるを得なかった。2週間のキャラバンができなくなり、コックと食料が余ってしまい、車も1台要らなくなった。大変な無駄遣いをしてしまったことになる。不成功に終わったが、源流域の移動で野生動物の宝庫であることを知ったのは収穫だった。たくさん野生の鹿と水鳥が生息している。

遊牧民によると、水河に行くなら8月がベストだと言う。雨季の6～7月の冬虫夏草採りのシーズが終わわり、8月になれば天気は安定、暖かく、馬と馬方の調達は問題ないと言う。"I shall return" 2014年8月の再挙をアワンと話し合う。次回は重装備ではなく、コックは連れてこず、ライト・エクスペディションで臨む。

6月14日、時々雨、寒い。雑多に戻る前に源流西側の観光用のメコン川源頭（水源）へ行こうとしたが、途中、残雪が幅広く川沿いの道路を塞いでいたため諦めた。往路を戻って午後4時、雑多に帰着した。改めて荒ぶれた街の汚さを感じる。モスレムの女性が目につく。大規模な新住宅や

新県庁舎屋を建設中で、西部大開発がここにも及んでいる。

## 巴顔喀拉山から黄河源頭

6月15日、雑多から玉樹に戻る。7世紀半ばに唐の都・長安（西安）からチベットの王様に嫁いだ文成公主の記念館を訪れる。翌日から旅の第2ラウンドが始まる。テーマは5つである。

- ① 巴顔喀拉山主峰の写真
- ② 観光地化進む黄河源頭
- ③ 幻の山、アムネマチン
- ④ 果洛山・年保玉則山群
- ⑤ 色達県喇荣五明寺仏教学院

6月16日、玉樹を出発する。天気は良い。揚子江上流の通天河に架かる橋3550mを渡り、三江自然記念公園（長江／揚子江・メコン・黄河）に立ち寄り、玉樹西寧公路を北東の瑪多へ向かう。公路は舗装されているが、平行して高速道路の建設が急ピッチで進められている。玉樹から100kmほどで、雁山峠4458mを過ぎる前後から広大な牧草地帯となる。ときおり遊牧民がヨーグルトを売っている。アワンは、青海高原のヨーグルトはラサ近郊より上質

で美味いと言う。見渡す限りの豊かな草原である。草原の要衝、清水河鎮4390mを過ぎて、午後1時半に巴顏喀拉山峠4824mに立つ。

巴顏喀拉山は、長江（揚子江）と黄河の分水嶺を形成する長大な山系である。西は崑崙山脈の東端に近い、黄河の流域の雅拉達澤山5214m（Yagradagze Shan）から東は四川省に隣接する年保玉則山群まで連なる。しかし、高くても5200〜5300m程度で、年保玉則の岩峰群を除いて山容は穏やかで変化に乏しく、クライミングの対象としては興味が湧かない。山系の名前を冠する主峰5267mは、峠から北北東14kmに位置する。特徴のない山の連なりである。1985年7月上旬に、日中合同黄河源流探検隊に参加した日本ヒマラヤ協会のメンバー4人が、雪の降る悪天候のなか苦勞して登頂しているが、頂上には木の櫓が建っていた。遊牧民がすでに来っていた。彼らは写真を残せなかったが、私は主峰山塊の写真を撮ることができた。資料としての価値はあろう。

黄河源流に関心のある方には、この探検隊に参加した江本嘉伸さんの『ルポ 黄河源流行』読売新聞社1986年）をぜひ薦めたい。黄河源頭（正しい水源）策定を含め、地理的歴史的考察と風土の描写は一読に値する。

瑪多4220mは青海省果洛藏族自治州の州都で、果洛地方の開発拠点として造られた新興の町である。13年前に永井剛さんと訪れたときは西部の町のように殺風景で、10月末なのに恐ろしく寒く、気温はマイナス15℃まで下がった。6月は気候温暖である。瑪多是黄河源頭への玄関口でもある。現在では市街地は発展しており、人口は増え、町らしく整備されつつある。紫外線は強烈で、町の人気は少ない。軍隊が駐留しており、共産党のプロパガンダ一色である。

6月17日、黄河の水源の湖を往復する。真の水源は扎陵湖に流れ込む川の源頭である。トルコ石色の美しい2つの湖（弱塩湖）、扎陵湖（西）と鄂陵湖（東）である。東の湖の端まで瑪多から直線距離で約30kmあり、観光用の道路ができ上がっている。2つの湖の間の小高い尾根の上4610mに、ヤクの頭を模った「黄河源頭」の記念碑が建てられている。観光客が来ており、鄂陵湖の西岸には観光用施設の建設が進められている。湖、水鳥と背景に巴顏喀拉山を収めた秀逸な写真が撮れた。野生の馬も見た。中国人観光客の辺境志向は強まっており、これから夏の季節、益々賑わうだろう。今回の旅で外国人グループに会ったのは、瑪多付近で1回だけである。チベット自治区は規制が厳し

いし、青海省でもチベット族の玉樹州や果洛州は敬遠されているのかもしれない。

## 「謎の山」だったアムネマチン阿尼瑪卿

6月18日、雲はあるが天気は安定している。公路を瑪多から東へ、4530mの峠を越え、石花峡4240mを過ぎた所のジャンクシヨン4200mで、アムネマチン山塊の北東側の谷への道路に入る。午前9時半ごろ、アムネマチン北面のパノラマが視界に現れる。幸運である。4000mの緩やかな谷筋の放牧地を行くと、もう一度パノラマを写真に収めることができた。下大武郷4000mで昼食、午後1時ごろ、4500mの峠を越えてアムネマチン東北面を仰ぐ唯格勒(Welgela)の谷を下る。東面の写真を次々と撮る。ピークの同定は帰国してからの楽しみであるが、差当りは最高峰の瑪卿崗日6282mとⅡ峰の東面のプロフィールを確認した。谷をさらに下り、雪山郷3780mを通過して瑪沁(Maqen)3780mの町まで行ってここで泊まる。途中、アムネマチン南面の展望台があるが、雨となり視界は利かなかった。県都である瑪沁は、区画整理された大きな街である。

すでにポピュラーになっているアムネマチンは、半世紀前までは「謎の山」であった。一時、エベレストより高い山が中国の奥地に存在するとして話題となった。この山を外界に知らせたのが、悲劇の英国人探検家ジョージ・ペレイラ将軍である。1922年、北京からラサへの途上(現在の玉樹西寧公路)、雪の高峰の西面を望見し、7500mと推定する。ペレイラの情報を基に探検家・植物採集家のジョセフ・ロックが、ナショナル・ジオグラフィックの後援を得て1929年に遠征隊を組織する。その詳細の記録は「National Geographic Magazine—February 1930」に発表された。題して「神秘の山群探査—中国・チベット辺境のアムネマチン遠征、エベレストのライバル」。ロックの記述を引用する。

「(黄河上流のアムネマチンに向かわせたのは)1923年、英国の探検家ペレイラ将軍に雲南省の騰越で偶然邂逅したことが契機となった。彼は歴史的な北京—ラサ大旅行(東からラサに到達した初の英国人)を終えたところだった。その旅行で大アムネマチン山脈を望んだことを話してくれた。彼は実測すればエベレストより高いかもしれないと言っていた。果洛族のこと、女王のこと、自分の探検行のことを話してくれた。

……ペレイラ將軍は第3回目 of 中国大陸横断のゴールに近いところ、中国・チベット国境付近で客死した（中村註：四川省甘孜の少し南で病死）。私に莊嚴なアムネマチンへの神秘の扉を開くよう鼓舞してくれたのは、彼の遙かなる辺境での望見であり、未解決の謎の物語であった。」

ロックの遠征隊は甘肅省の卓尼 (Jone) からラブラン僧院を経て、現在の青海省、瑪沁 (Magen) まで行き、そこからアムネマチン南東面を望見した。そのとき撮った写真が唯一地図とともに上記の Magazine に載っている。ご参照いただきたい。結局、ロックは遙か遠くから見ただけだったにもかかわらず、アムネマチンの標高を 28000 ft、8500 m 以上と誤った推定をした。

1949年、アメリカのL・クラークが接近したが、正確な高度は得られなかった。ペールが剥がされたのは、新中国になってからである。1960年6月に、中国の白進效を隊長とする北京地質学院隊が第II峰 6268 m を初登頂した。中国隊は2ヶ月にわたって測量を行ない、山群の標高を確定し、主峰を同定した。この結果は今も使われている。地図に示すとおり（ ）内は現在の名称である。

主峰—I峰・6282 m (瑪卿崗日 Magen Kangri)

II峰…6268 m  
III峰…6090 m (Amnye Machen)  
IV峰…6070 m  
V峰…5966 m

本格的な登山が解禁されたのは、改革開放政策が始まってからである。1981年春に、上越山岳協会隊が主峰 6282 m を初登頂した。東面のハーロン川にBC、5月22日に3名が頂上を踏んだ。同じ年にドイツ隊も入山、夏には別の日本隊が登った。1984年秋には、長野県山岳協会隊がII峰を北西稜經由で登頂した。1993年夏には、鳥取大学隊がIII峰 6090 m (Amnye Machen、1984年に武漢地質大隊が初登頂) を登頂した。かくして、山群は解明され、アプローチの至近、登攀が容易で、なだらかな山容の雪峰アムネマチンは、多くの登山隊とトレッカーを迎えるようになった。

### 悪名高かった果洛地方

果洛藏族自治州は、アムネマチン(阿尼瑪卿II積石山脈)と巴顏喀拉山の二大山脈に挟まれた地域である。平均の標高が3500〜4000 mの緩やかな高原が続き、地表面

の開析は黄河本流が顕著に認められるに過ぎない。障壁のような山脈はアムネマチンなどに限られ、氷河を抱える山嶺がこれにあたる。そのほかは山地と盆地が交互に続く、比較的高度差の少ない高原地帯である。ところが、巴顏喀拉山東部の南面は、溪谷が入り込んで四川省側に流出し、横断山脈に繋がる地形的特徴を具えている。

ヒマラヤ山脈の北側という地理的条件から、気候は世界でも特異な冷温乾燥地帯となっている。年平均気温は氷点下4℃、年降水量は500〜700mmである。年間降水量は170日にも達する。瑪多における観測史上(1984年現在)の最高温度は22℃、最低温度は氷点下48℃を記録した。以上は『青海高原 西寧から成都へ』(果洛 TRAVELER TEAM「京都山の会」ナカニシヤ出版 1990年)の竹内康之さんの記述を引用した。

2000年の秋、10月下旬にもかかわらず巴顏喀拉山峠で日中でも寒風が吹きマイナス8℃、瑪多の朝はマイナス15℃で震え上がり、予期しなかった寒さを経験したことが納得できる。黄河源頭の湖は冬にはマイナス45℃にも下がり、湖面がトラックの道となる。

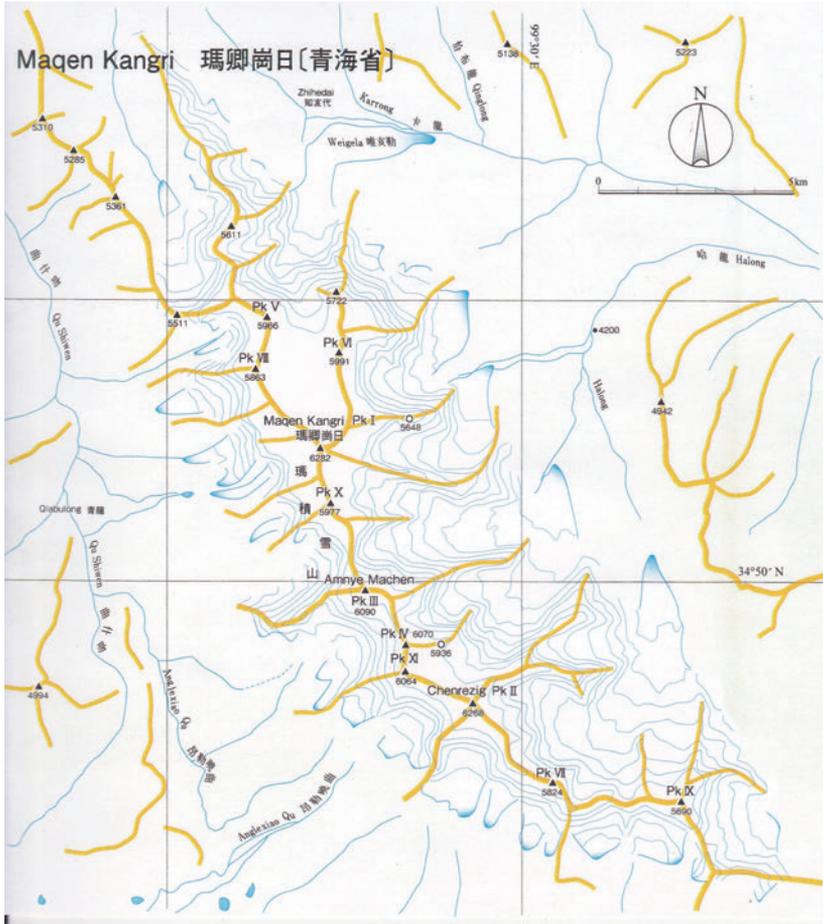
果洛(GOLOK)地方のもう一つの側面は、ここに住むチベット族は凶暴で、好戦的だったということである。往

時の探検隊や隊商は、往々にして彼らの襲撃の危険に曝された。探検記によく出てくる。しかし、今ではヤクや羊が群れる豊かな放牧地のチベット族や、都会化する町の人たちからは危険は感じられない。それより印象深いのは、果洛でもチベット僧院の建設が目立つことである。ガイドのアワンによると、チベット仏教の活動は青海省と甘粛省が最も盛んであるという。両省とも黄帽派(ゲルク派)が主流であり、紅帽派(ニンマ派)が主流の四川省より活発だと言う。玉樹や果洛での、黄金色に輝く大きな僧院の新築・改修ラッシュは頷ける。

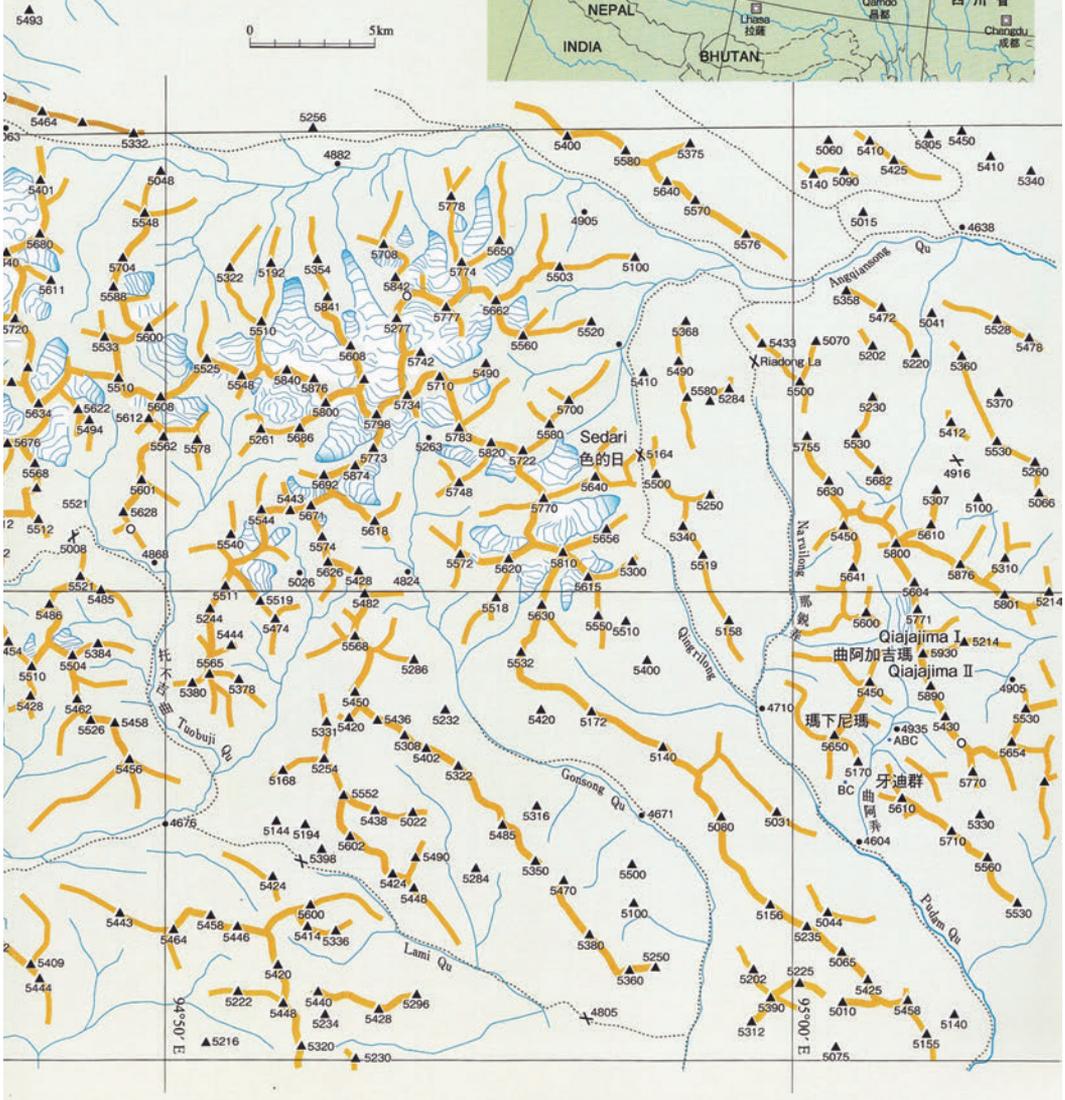
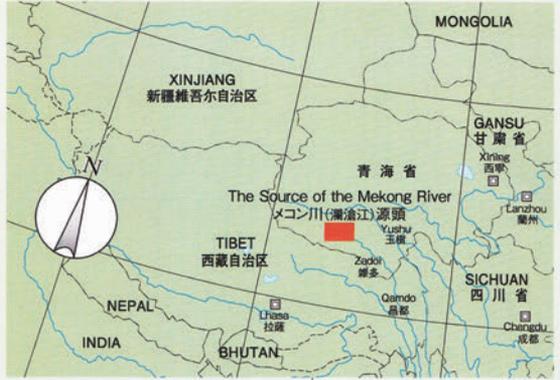
6月19日、長丁場のドライブなので、瑪沁を早発ちして東に向かう。道は舗装されている。青珍山峠4380m、安拉山峠4223mの2つの峠を過ぎ、甘徳4040mを通過する。甘徳から年保玉則まで307kmの道程は長い。広大で緩やかな起伏の放牧地が続く。午前10時に達日3980mに着く。壮麗な僧院が建設中である。開けた土地の大きな街である。莫霸東山峠(Moadongshan Pass)4450mの辺りもなだらかな隆起の大草原で、黄色いケシの花(Meconopsis)が群生して見事である。ここでも四川の理塘高原よりスケールが大きく感じられる。ジャンクシヨンの満掌(Manteng)4200mを過ぎ、多貢麻郷の

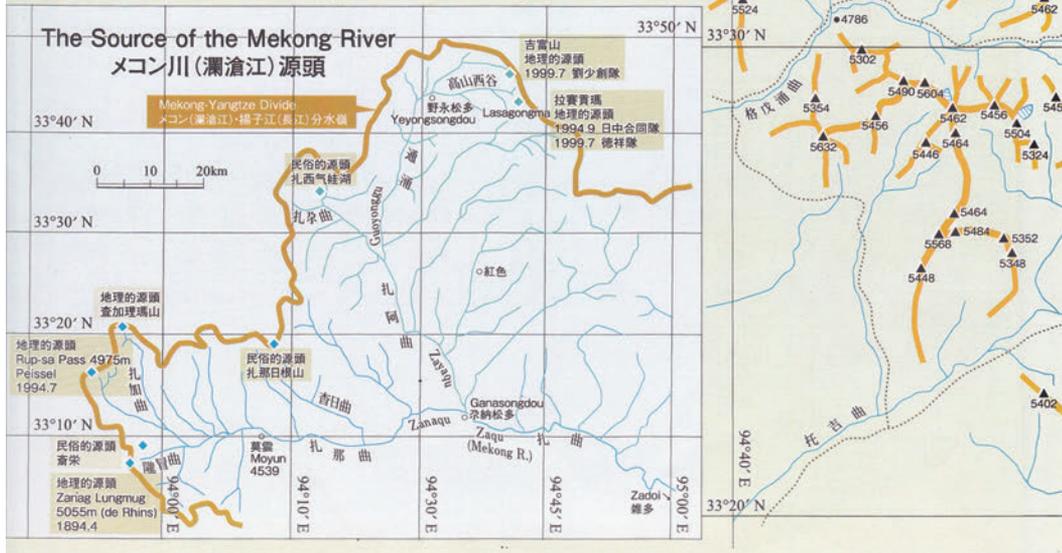
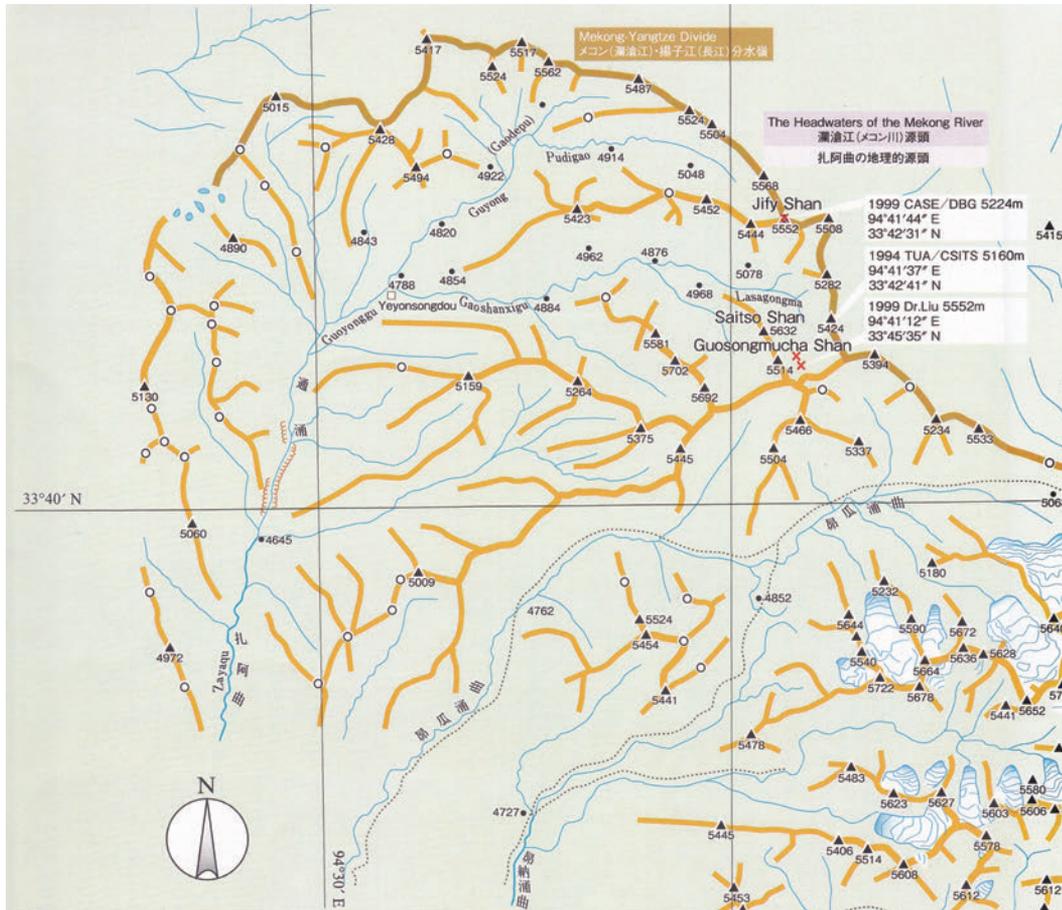


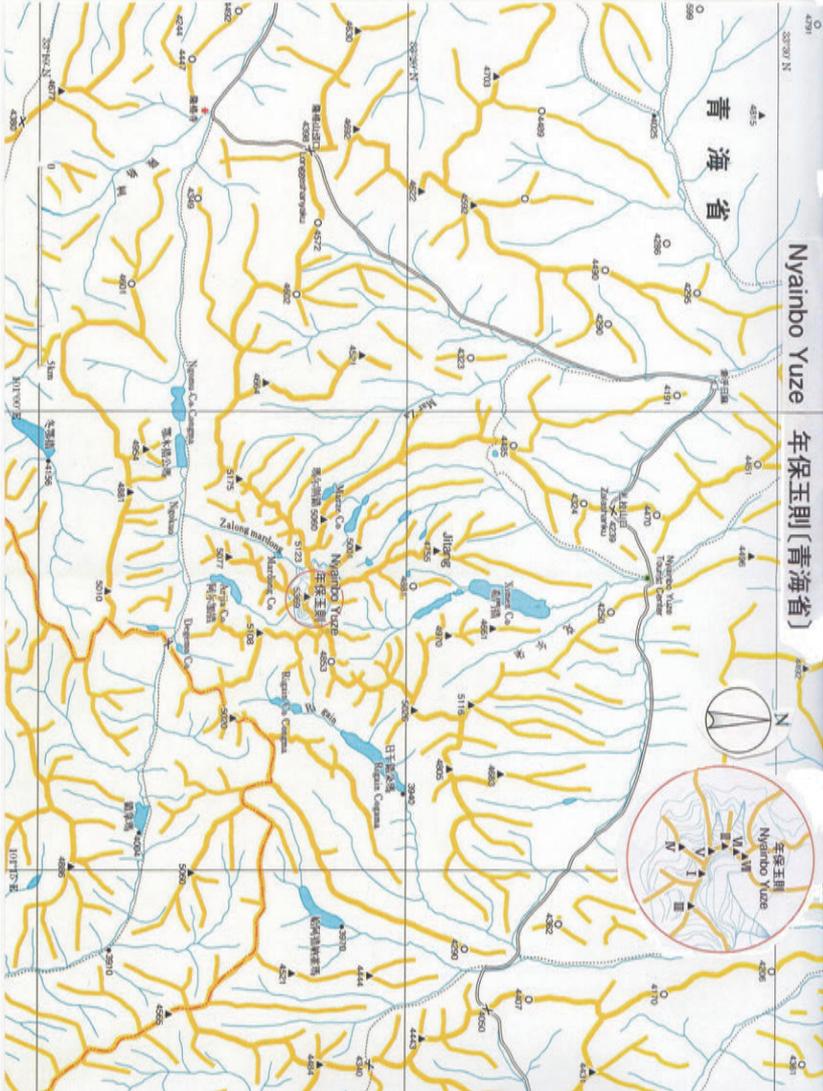




# Mekong River Headwaters 澜滄江(メコン川)源頭









川蔵北路の北側にそびえる ca. 5300~5400m の雀兒山



ca. 5300~5400m の雀兒山の山々。川蔵北路の北、4500m の峠より



川蔵北路の北側、雀兒山北部の ca. 5500m 峰東面



雀兒山東部の ca. 5400m 峰東面



玉樹の北、ca.5600m 峰北面



ca.5300m の岩峰群。玉樹から雜多への中点より



メコン川上流、雑多の東にある ca.5300m 岩峰



メコン川上流、雑多の東にある ca.5300m 岩峰



メコン川源頭の ca.5400m 峰



メコン川源頭付近の ca.5500m 峰





メコン川源頭 4700m から見た 5400~5500m の山々



メコン川上流、雑多付近の流れ (4000m)



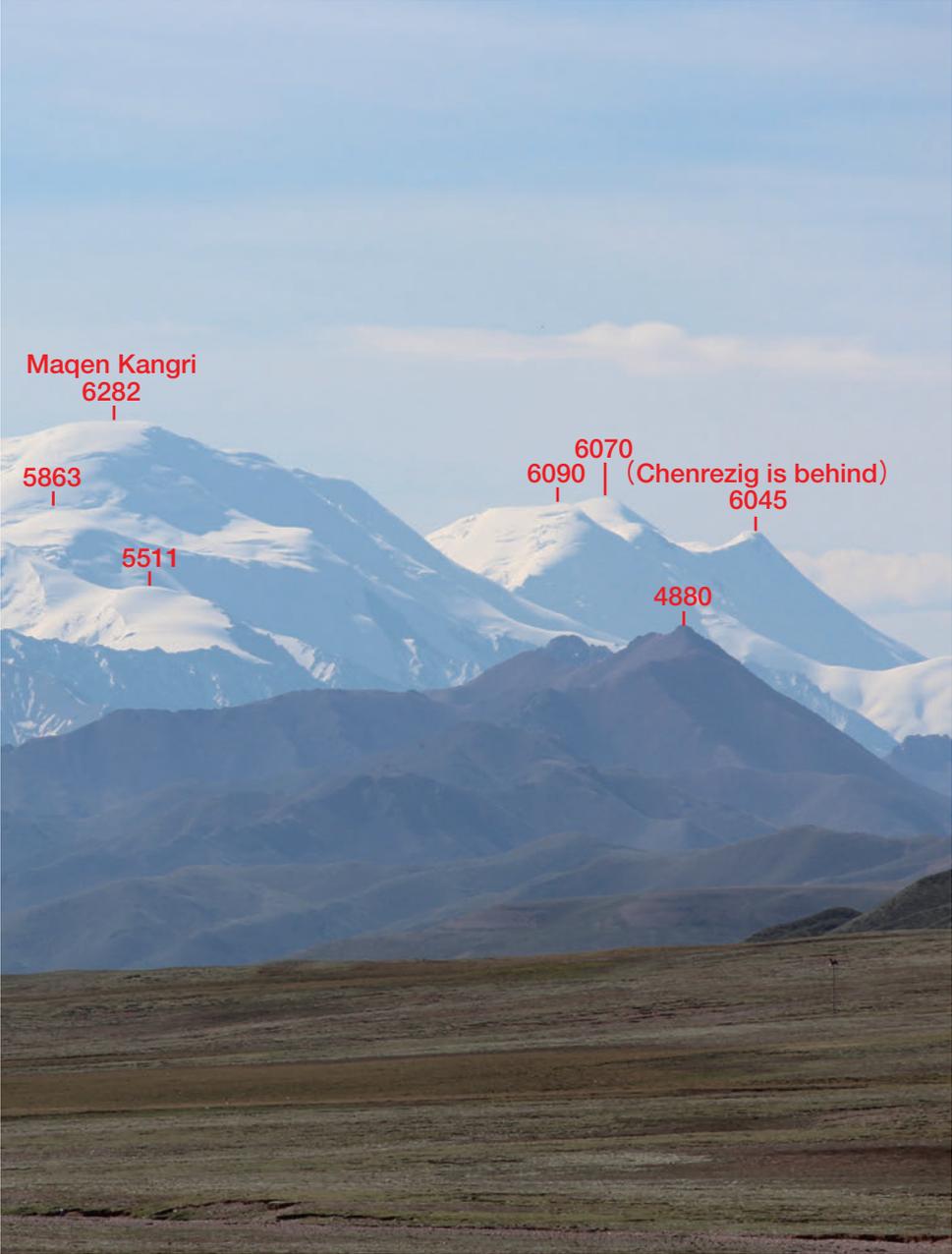
メコン川源頭、野生のチベタン・ガゼル群れ

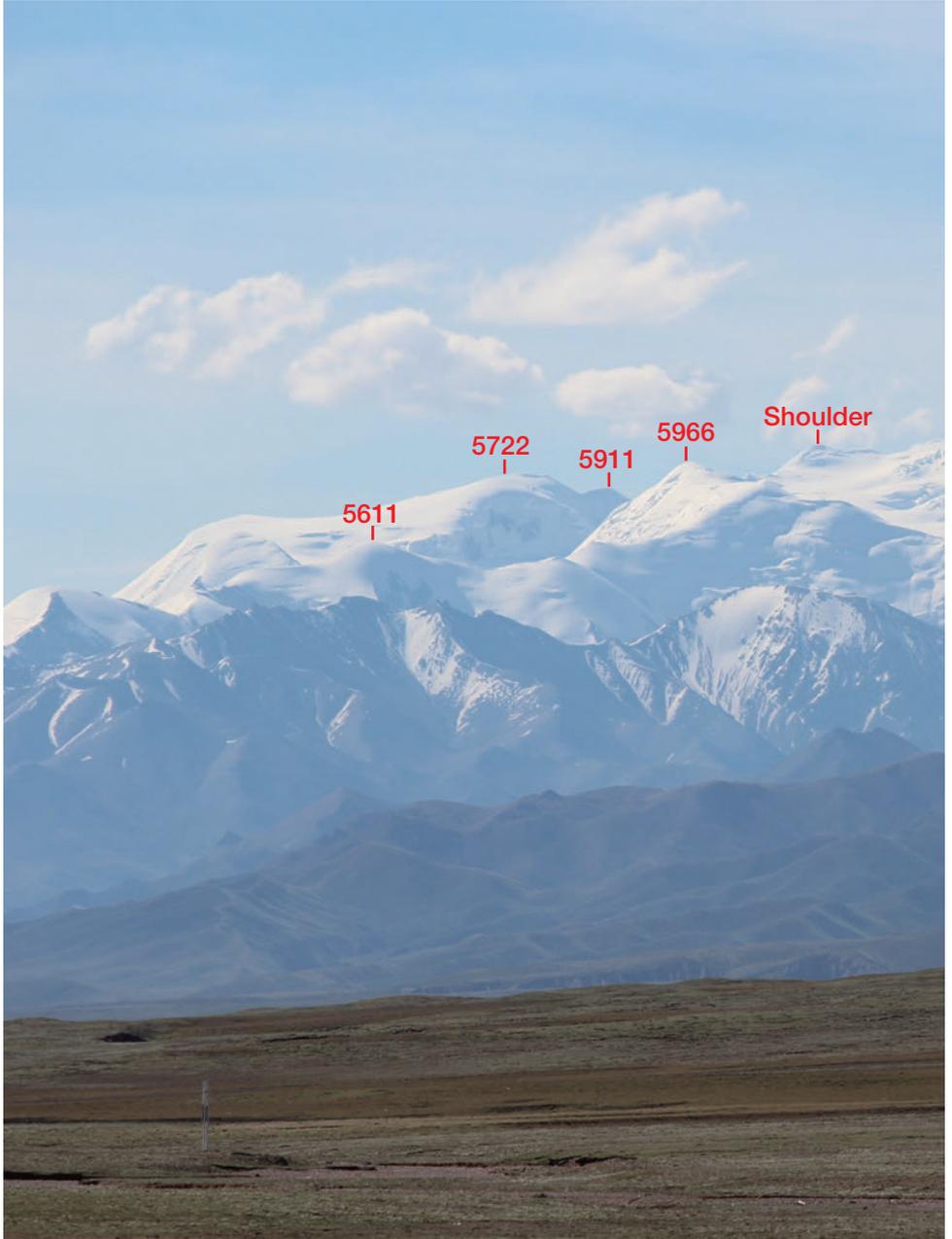


巴顏喀拉山 (5287m) と黄河源頭のノリン湖 (4250m)



黄河源頭の記念碑 (4610m)





アムネマチン山塊東面



瑪卿崗日Ⅱ峰(6268m)東面 攝影=酒井国光



瑪卿崗日Ⅲ峰(6090m)東面 攝影=酒井国光



瑪卿崗日 I 峰 (6282m) の肩東面



アムネマチン山塊東面。5966m 峰(右)と 5722m 峰



黄色いケシの花、メコノプシス



タルバガン(リス科マーモット属)



年保玉則の北西面。中央左の鋭峰が主峰(5369m)



年保玉則の北面と希門湖(年保湖)





年保玉則 (ca. 5300m) 北面と希門湖 (年保湖)。左端が主峰 (5369m) 撮影＝竹内康之



色達喇榮五明仏学院の中心



僧侶や学生たちが集う色達喇榮五明仏学院の内部

チェック・ポストで昼食。果洛州のチェック・ポストでは、雑多県と違い、なんの検査もなくフリーに通れる。地域によって取締りの程度が異なる。雑多県や四川の甘孜県のように緊張させられることはない。白玉 3830m を過ぎて午後 2 時半に、待望の隆格山峠 (Longgeshan Pass) 4398m に立つ。

### 鋸のような針峰の連山——年保玉則

「オイラソー」神様に幸運を感謝する。隆格山峠の東側に展開する、年保玉則岩峰群西面の大パノラマに息を呑む。予期しなかった眺望である。強烈なインパクトを受ける。雲の動きに山稜の陰影が変化する。シャッターを押し続ける。年保玉則が、ほぼ南北に連なる鋸の歯のような岩峰の連山であることは知らなかった。パノラマの写真を見たこともなかった。次の峠 4239m にさしかかったときに、天気は雨模様に変わっていた。

夕方、登山の基地となる希門措への入口 4100m に着き、観光用のコテージに泊まる。案内標識が立ち、来訪者受け入れの案内所、テント、コテージ、チケット販売所ができていく。博物館が建設中である。激しい夕立になる。

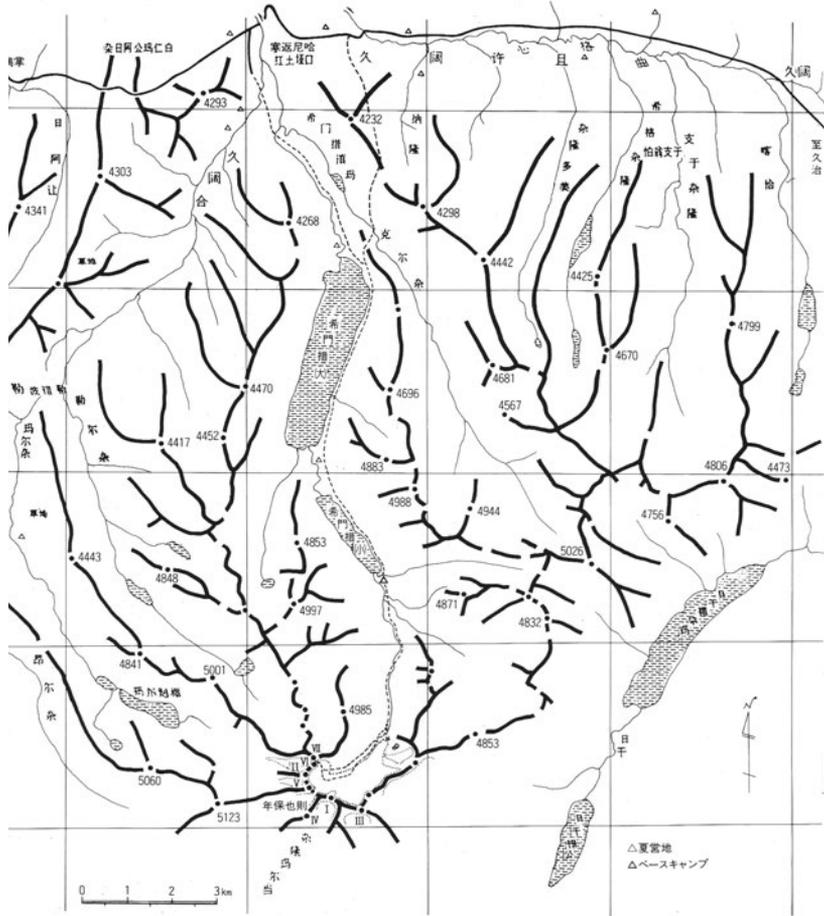
夕食は町のレストランで消化の良い火鍋を定番としてきたが、ここでは「モモ」というチベット餃子と茹でたマトンのリブを食べる。モモに入っているヤクの肉のミンチは美味しい。アワンによると、生活が現代化しつつあるラサのヤクの肉は冷凍なので不味いが、この肉は新鮮だから旨いという。

6月20日、希門措を往復する。入場ゲートから4kmの舗装道路を行けば希門措湖畔に着く。展望台から湖面まで木製の遊歩道が完備している。雲が垂れ込めたが徐々に上がってゆき、正面の山塊北面の4900m前後の2つの岩峰と右奥に5001m峰、左の奥に主峰5369mの上部がわずかに見える。人民解放軍兵士と僧侶が観光に来ていた。奇妙な取合せである。

巴顏喀拉山山脈東端の支脈が果洛山で、土地のチベット族は年保玉則と呼ぶ。5000m前後の岩塔が林立する花崗岩質の山群である。谷は深く切れ込み、多くの湖が点在している。隆格山峠からの大パノラマとグーグルの地図を照らし合わせると、山群全体は大まかに測ると南北40km、東西20kmの山域と理解できる。標高は低いが数え切れないほどの尖峰、多彩で個性的な岩峰群は、数において、ユニークな針峰において、四川のチョンライ山系四姑娘山山塊の

# 果洛山(年保玉則)・希門措-青海省

## 竹内康之 作図



岩峰群を凌ぐだろう。

1989年、前項の『青海高原 西寧から成都へ』を著した京都山の会の竹内康之さんのチームは、年保玉則の主峰に挑んだ。南北に細長い希門措絡南東の谷にある、小希門措の上部にBCを置いた。その南に延びる谷の奥に主峰グループへの氷河が懸かる。竹内さんの記録を引用する。

「第一の難関は氷河の下部にある4段150mの滝を越せるかどうかだ。……これを登路とする。カール上の斜面に出ると、一面のスラブ帯と氷河が目の前に覆いかぶさるようであった。……高度4500m。霧が晴れ上がり天に突き立つ無数の針峰が気持ちを高めてくれ、すばらしいの一語に尽きる。……プラトーの左上部に向け、クレバスを避けながら水上を右に左にと渡って行く。13時20分、4950m地点で主峰を確認したが、400mの高度差と岩稜を回り込みながら頂上へ達するルートの高さを考えれば、とても時間不足で到達できそうにもない。……そこで氷河の右側にあるⅡ峰へ変更することを速断して登り始める。……15時、やっと白い花崗岩のピークに立つことができた。下からはⅡ峰だと思って登ってきたが、ここに立つとさらに奥の方が高く、また同高度の峰が

いくつもある。結局、年保玉則は複数のピークの総称であると結論づけた。目測では、このピークはⅥ峰のように思われる。周囲に陥没湖が多数望まれ、高原の緑と岩場にシルエットが対照的で、その景観の美しさに、しばし我を忘れて見とれていた。」

これから竹内さんと、旧ソ連製地形図20万分の1図をベースにして山群全体の地図を作り、可能な限りピークの同定をしてゆく楽しい作業が残っている。

### 青海省から再び四川省へ

6月20日朝方、希門湖（年保湖）を散策した後往路を引き返して、次の目的地である四川省の色達県に向かう。途中の白玉（Peyu）の白玉達唐寺は世界的に有名で、ネットで配信されている。「風の馬（Wind horse）」の大きな布のタルチヨを買う。青海のタルチヨが一番多彩で色鮮やかという。風に乗って馬が幸運を運ぶと言われ、オリジナルはボン教で、チベット仏教に伝わった。この日は半日の行程で班瑪（Pema）3560mに泊まる。高度が下がり暖かく、空気が軟らかく感じられる。ホテルは県政府役人の会議でほとんど満杯、やっと空き部屋を探す。本格的な雨季の天

気になる。TVニュースの予報では、西寧、蘭州、成都の全域は雨である。我々はタイミング良くアムネマチンと年保玉則を写真に収めることができた。

6月21日、雨降りしきるなか、果洛地方に別れを告げて四川省に向かう。省境に近い峠4500mは巴顏喀拉山脈東端に位置する。黄河と揚子江の分水嶺上にある。峠から高原を下って南西に流れる谷を行くと省境の町、知欽郷3750m（青海）―年戈3650m（四川）である。四川省に入る。谷は美しい針葉樹林帯の景観に一変する。道は再び高原に登る。周囲が肥沃そうな草原の峠4450mを越えて、広々した豊かな放牧地の谷を色達の県都3860mに下る。

色達県の開けた草原の豊かさに驚く。大きな僧院が遙か山裾に燦然と輝く。町の郊外は洒落たピクニックの場所と施設が整備されている。市街は現代風で、今まで見た四川高原のどの町よりモダンである。チベット族の若い女性はファッションブルである。禁断の地、閉鎖された場所と想っていただけに、意外な印象を受けた。広場の「風の馬」の黄金色の像は一際目を惹いた。

当初の予定では、年保玉則から四川省の阿壩經由成都に戻るつもりだったが、アワンが気を利かしてくれた。色達

喇榮五明仏学院について、私の強い関心を知っていたアワンが現況を調べてくれて、今年は観光客が入れるようになったことを確かめてから、「色達に行きましよう」と進言してくれたお陰である。2012年まではかなり難しかった。2013年の3月に入ってから、習近平政権の安定とともに規制地域への統制が緩んできている背景があるようだ。

色達の町から30分のほどの所に色達喇榮五明仏学院はある。ゲートを潜って内院に入ると、学院全容の壮大さに圧倒される。車道を上って頂上付近にある立派なホテル「喇榮賓館」3960mに午後2時に着く。中国人観光客が目につき、外国人ツーリストも2組いる。

## 色達喇榮五明仏学院

### 政府筋の説明

色達喇榮五明仏学院は、中国最大の官製チベット仏教学院である。中国政府関係当局の公式の見解を要約しておく。

### 宗旨

伝統あるチベット文化の高揚、チベット族が住む地方の

人民の文化的資質の向上、各民族同士の団結の強化、仏教の文化と芸術の発展を図ることを学院の宗旨とする。

## 沿革

色達喇榮五明仏学院は、海拔3700～4000mの四川省甘孜藏族自治州色達県内にある。学院は中国共産党の宗教政策の実施に伴い、自力更生と刻苦奮闘の精神に基づいて、チベット学の大小十明と仏教の伝統文化を継承し、発展させるために創立された。

1978年、共産党第11回中全会以降、老齡の晋美彭措上師が1980年に県内の不毛な喇榮溝にやって来た。厳しい環境のなか、学生がわずか32名の小さい經典学習所が造られた。

1982年、中央政府の発令により、宗教団体による学校設立や人材育成が奨励されるようになり、晋美彭措上師は、色達県共産党委員会と県政府の協力で学校を充実させていった。

1985年、県政府は「喇榮經典學習所」の設立を認可した。

1987年、パンチェン副委員長は「色達喇榮五明仏学院」と命名した。

1992～1993年、全国人民代表大会の副委員長や

全国政治協商会副主席兼中国仏教学会会長などの要人が、学院創立を積極的に支援した。

1997年、四川省宗教管理事務局は「色達喇榮五明仏学院」設立の正式の許可を与えた。

設立後順調に発展し、学院はチベット族、漢族、蒙古族の5000人の学生と100人以上の教師と中国語、チベット語に精通する4人の講師を揃え、教学の設備も整っている。チベット族の伝統的な教育方式に従いながら、近代的な大学や専門学校の管理方式を導入している。文化教養が高く、仏教に造詣の深い人材を輩出している。識字教育も盛んである。

(中村註：アワンによると2013年現在、2万人の規模になっていると推定。)

## 学院にて

喇榮賓館にチェックインして、まず全景を俯瞰するため小高い丘に登る。若い学僧や尼さんたちがピクニックに來ている。のどかな光景である。若い尼さんから自分のiPhoneで写真を撮ってくれと頼まれ、驚く。丘から見渡す規模の大きさは言葉では表現し難い。谷に沿って大きな2つの僧院、1つの学院があり、それらを取り巻く

ように、緩やかな馬蹄形に広がる尾根の斜面に無数の僧坊が張り付いている。男女の僧坊は区画が分かれている。写真をご覧いただくしかない。ホテルの横には大きなマニ車の塔があり、夜間は色鮮やかで綺麗にライトアップされる。学院は大勢が紅帽派（ニンマ派）であるが、西寧のタール寺と甘肅のラブラン寺は黄帽派（ゲルク派）である。僧と尼はアムド、カンバが多い。カンバは甘孜、道孚、瀘霍から、アムドは果洛の各地からが多い。漢族もモンゴル族も少数いるが、大方は学習に来ている短期滞在者である。

案内のパンフレットを求めたが、經典以外はなかった。仏学院全体の人数をアワンに調べてもらった。いろいろ訊いて回ったが、具体的な数字を返事してくれない。緘口令が布かれているのか、背景に何かがあるのか訝る。それでも、話の節々から院内外で合計2万人はいるだろう、院内（ゲートの中）には1万人はいるだろうとアワンは推定する。しかし、正確な数値は公表されていないので分からない。学僧・尼さんの日常生活についても訊いてくれた。登録されている長期滞在者には、学院が食材を提供する。各地の僧院から学習に来ている未登録の短期滞在者は、自分で持参、購入する。料理は自室（1から数人でシェア）で

行なう。簡単なキッチンがあり、燃料は灯油、水道は外で共用。院内のマーケットでは、酒と肉は売っていない。夕食は喇荣賓館のレストランで、定番メニューの精進料理を食べる。ここは当然ながら禁酒である。

#### 帰路につく。一路成都へ

6月22日、帰りがけに鳥葬場を見に行く。立派な施設が建設中である。おどろおどろしい鬼面の塔がある。院外にあるが、資金は学院から出ているので、実質は学院に属する。雨の中、阿壩州藏族羌族自治州の州都、馬尔康城区に向かう。午後5時過ぎに馬尔康飯店に到着く。馬尔康は大都会になっている。康定より大きい。町の中心には現代的な美食街ができており、洋風のファスト・フードのレストランもある。最早、辺境どころではない。ホテルでは金持ちの豪華な結婚披露宴が催され、爆竹が新郎新婦を祝福する。

6月23日、最後の行程である。甘堡藏寨など羌族の石塔を観光用に整備した2つの村で写真を撮る。四川大地震の被災地、暴れ川・珉江沿いの汶川から成都までは、震災から復興なった衛星都市・都江堰経由で138kmの高速道路ができていて、道は捗る。この高速道路は遠からず世界

自然遺産の天下の美溪、九寨溝（九寨溝）まで通じるだろう。午後14時、成都に着く。メコンの氷河が幻に終わったため、10日ほど早く終わった。まずは成都風上海風呂で垢を取り、汗を流す。

四川大地探検公司以費用の精算をする。いつものやり方だが、出発前に前払いをしておく。今回は1人60万円払っておいた。終わってみると高い遠征費用になった。3人の予定が2人に減ったこと、無駄となった2週間の馬のキャラバンのための重装備と食料、コックをラサから呼んだこと、2台のパジェロの走行距離が合わせて8000km、ガイド/コック/2人の運転手へのかなりのチップ、などなどの現地支払いと成都までの往復の運賃をすべて含めて、1人当たり約100万円かかってしまった。東チベット圏の旅は金がかかる。

四川大地探検公司是経営が難しくなっている、と張継躍は言う。日本からの客が少なくなっているためである。外国人相手から中国人相手に、内需シフトの営業戦略を真剣に検討し始めている。チベットだけでなく、日本の業者とタイアップして、ネパールへの中国人観光客の送り込みも視野に入れているという。時代の流れである。

## チベット事情——アワンの四方山話

アワンは私が最も信頼する優秀なチベット族ガイドである。ラサ近くのヤムドム湖畔の出身、36歳、今は家族とラサのポタラ宮の近くに住んでいる。2009年以来、面倒で厄介な公安との交渉を何度となく上手に切り抜けてきた。僧侶になるための修行をしたが、一念発起、英語学校に通いガイドになった。インドにも2回行き、英語力がほかのガイドに比べて抜群であるだけでなく、チベット仏教、政情、地域情報に精通している。学僧であっただけに、チベット僧院とのネットワークと人脈は、辺境での困難な旅には大いに役立つ。彼に教えられることは多い。車の中で、あるいは食事中に、チベット事情について勉強させてもらった。そのいくつかを紹介したい。

### チベット族の人口分布

チベット族全体の人口分布の統計は確かなものは見当たらないので、アワンが調べた大雑把な推定の数字を下記する。

チベット自治区

260万人

その他合計

320万人

(1) 青海省

120万人

(2) 四川省

100万人

(3) 甘肅省

30万人

(4) 雲南省

10万人

(5) インド他

60万人

合計

約580万人

上記のように、チベット族の全人口約580万人の半数以上がチベット自治区の外にいる。チベット仏教の信仰心は、焼身自殺が頻発した青海・甘肅が最も敬虔で、四川がそれに次ぐ。僧院建設の盛んさも同じである。規制、締め付けの厳しいチベット自治区、特にラサ付近では下俗する僧侶が多くて、僧院が空になっている所もあるとアワンは言う。チベット自治区では、チベット族人口の5〜10%が僧侶であるのに対し、青海省では10〜20%、例えば青海省の果洛藏族自治州では1家族に1人は僧侶がいるが、チベット自治区では80%が僧侶のいない家族である。

規制の状況、学校教育など

中 村：「なぜチベット自治区、特にラサとその周辺の規制・コントロールがほかの4省(四川・青海・

甘肅・雲南)と比べて厳しいのか。」

アワン：「ほかの4省は漢族とほかの少数民族が多く、当局

は公平を旨とする建前から、チベット族のみを差別的に統制することは表立ってできない。しかし、個別に水面下で対応している。」

中 村：「外国からのBBCやFree Asiaなどの衛星通信ニュースの受信はどうか。」

アワン：「最近禁止され、すべての家からアンテナが撤去された。」

中 村：「インド訪問についての規制は?」

アワン：「現在はパスポートの発行・有効期間延長をしない。一時、規制が緩んで数千人の規模で各地からインドのブツダガヤやダラムサラやほかの場所に

仏教教育を受けに行ったが、今は厳しく管理されている。帰国時に入国管理事務所をチェック

され、パスポートは取り上げられて、出身地の県政府に通報される。当人は県/郷政府から出頭

を命じられ、3ヶ月間、再教育を受けさせられ

る。」

中 村：「ラサでの学校教育はどうか。」

アワン：「私の息子は7歳で小学校2年生。小学校では中国語化が進んでいる。授業は2つのカリキュラムを除いて、ほかの科目はすべて中国語による。チベット語は週2回の授業だけある。息子は家でも中国語を話す。幼稚園ではチベット語のアルファベットを30教えるだけで、ほかはすべて中国語である。」

中 村：「話は飛ぶが、鳥葬の現状はどうか。」

アワン：「地方については画一的には言えない。昔はラサ周辺だけで鳥葬場は600ほどあったが、今は100ヶ所ぐらいに減っている。理由は住宅と工場の進出で、ハゲワシ(vultures)が空気汚染を嫌って来なくなつたためである。ちなみに、南チベットではハゲワシが少ないため水葬が多い。」

中 村：「チベット仏教の教義は難し過ぎる。」

アワン：「チベット人が書いた本は説明が難解で、外国人には理解してもらえない。一方、西側諸国の研究家の解説は分かりやすいので、理解普及に役立つ。」

ている。」

中 村：「ラマ(Lama)と普通の僧侶との数の比率は？」

アワン：「5・95くらいである。ラマは教義を教える先生の資格を持つ。」

道々のアワンの話は勉強になるし、次の旅が楽しみである。

帰国する前々日、6月24日、アワンに成都のチベット人を案内してもらった。繁華街の一角、武侯洞東路にかなりの範囲でチベット土産店がたくさん軒を並べている。ラサと同じようにチベット産品はすべて揃っている。成都市内に不動産投資をしているチベット人は少なくないと言ふ。そのなかにはチベット自治区体育局(中国チベット登山協会の上級機構)の者もいるようだ。したたかに漢族と折り合いをつけている、クレバーなチベット族も少なくない。

## 木暮理太郎と『山岳』編集

児玉 茂

はじめに

日本山岳会の長い歴史の中でも重要な位置を占めているのは機関誌『山岳』の発行であり、その一冊一冊の内容であらう。会の規則にも、主旨遂行のために『山岳』が発行される、と明記されている。『山岳』は本年で第百九年となり、通算で167号となる。それは日本山岳会創立以来の年月そのものを示している。

『山岳』の各号を手に取り繕ひもといてゆくと、日本山岳会のそれぞれ違った時代の様子や、日本の登山界の動向が良く見えてくる。一方で『山岳』そのものにも幾多の変更が加えられている。試みにその表紙を並べて見比べてみると、現在の『山岳』が、歴代の『山岳』といかに違っているかが

視覚的に理解できるとともに、まとまった時代ごとに大きな違いのあることも見えてくるだろう（カラーページ参照）。

表紙にはつきり現われたこの違いを頼りに、いくつかの時代に分けることができそうに思える。それは編集人の交代を現わしている場合もあるだろう、あるいは時代の影響が強く出ている場合もあるだろう。視覚的に誰が見ても大まかな区分ができるように、次の4つの異なる時期に分けることができるが、それはこれまでに試みられた、いくつかの日本山岳会史の区分ともほぼ一致するようである。

第1期は山岳会創成期であり、何事につけても張り切っている時代である。5年間続けられるだろうかという危惧

も乗り越えて勢いは続き、10周年記念号も発刊された。

第2期は、登山への認識と理解が10年前とは大きく異なるとともに、対象となる山域の範囲が広がり、登山の方法も多様化して一層盛んになった。ところが、『山岳』は逆に唯一性を失いつつあり、記録的な登山の数が減り、表紙からは派手さが失われた。

第3期になると雑誌全体のデザインが一新された。これは日本山岳会の担い手たちが、初期世代から第2世代に移行したことを顕著に表わしている。日本の山という条件の中にあつて、欧米に伍して世界の高峰を目指す登山が展開される。

第4期は戦後期から始まる。物資欠乏時代を経て、日本山岳会の主導するマナスル登山が行なわれ、これを機に『山岳』は再び日本の登山界の中心的位置を占めることになった。現在まで続く表紙のデザインも、1950年代から始まっている。しかし、1970年ごろからは、再び『山岳』の唯一性が失われるとともに、国内、国外での登山の大衆化が一気に進んで、今度は日本山岳会の存在感そのものが薄れつつある時代になった。

歴代『山岳』の書誌的な解説は今までに行なわれていな

いので、創刊号から最新号までその変遷をたどっておきたい。ちなみに『山岳』の発行回数は上の区分とは重ならず、創刊から第二十九年までは年に3冊ずつ発行され、第三十年からは2冊となったが、戦争末期と戦後すぐの時期は未発行も含めて変則的になり、戦後の第四十五年からは年1冊の発行に変わった。

以前に日本アルプス登山と「登山者の作った地図」をテーマに、創成期の日本山岳会の歴史の一端を見たので、それに続く時代を、『山岳』を中心テーマにたどってみたい。上記の時代区分で言えば第2期、すなわち木暮理太郎が編集者となった時代を中心として見ていきたい。

#### 『山岳』の表紙、判型、装丁などの変遷

小島鳥水は、創刊号から第十一年号までの『山岳』の表紙について、「およそ世界の山岳雑誌中、この時代の『山岳』ほど芸術的のほひ高く、薫ゆらしたものは、比類があるまひとおもふ。」と書いており、この実現には写真、印刷、用紙など専門家の域に達していた凝り性の高野鷹蔵や、芸術家たる茨木猪之吉、中村清太郎の考案が大いに与って力があったという。以下の〆内は『アルピニストの手記』にある説明である。

第一年号の表紙画は、武内桂舟画伯の「尖峯に鷹の羽と雲のアルプスの意匠」

第二年号は、小杉未醒氏の「アルペン・ストックを手にした三人の登山者と峡間の月」

第三年号は、大下藤次郎氏の「森林に残雪の山、上河内から見た穂高」

第四年号は、丸山晚霞氏の「雪溪に雷鳥」

各年とも3冊ずつ、号名部分だけを変えて発行された。

第一年から第四年の各号12冊は、四六の2倍の大型の判型で、少し薄手のツヤのある用紙が使われ、第三年号まで本文頁に罫線が施されている。第四年号からはこの罫線がなくなる。背には各号とも「山岳 第〇年 第〇号」と記される。第四年号の裏表紙には英文の目次が付けられている。

第五年号からは判型が変わり、菊判となるとともに少し厚手のガラ紙に変わる。以後、この判型は第三十五年号まで続く。第五年号は、織田一麿氏の意匠で、画面の右半分は鋭角三角形が描かれ、「植物帯」を示す水平の区切りの中に抽象化された葉や花や雪の結晶などが収まっている。左半分は三角形に象られた「山」「岳」と「第五年 第〇号」が配されている。この意匠はそのまま配色を変えて各号に用

いられ、第一号は水色とエンジ、第二号は橙色と青、第三号は薄緑と赤茶色である。第1号のみ裏表紙両面を使った英文目次が付けられている。

第六年号からは1冊ごとに表紙の意匠が異なるようになり、「山岳」という誌名が表紙のどこかにあるという以外は、自由な意匠が凝らされている。また、第九年号までは表紙の後には巻頭絵または写真、地図が挟まれ、扉（タイトルページ）には茨木猪之吉のコミカルな版画が施されるという、凝ったものになっている。もちろん印刷写真にもこだわりがあり、発刊を遅らせてまで完璧を期し、なお不出来の場合は削除するなどした。

第六年は茨木猪之吉氏の意匠で、第一号は白い表紙の下半に縦書きで黒く「山岳」の文字。説明文には、「柱状の白木は、高山の喬木にして、美術木の称ある白樺、下部にある、彎曲せる白き線は、水にして、上部のは雲なり、裸形の偶像は、湖水の女神を表象し、中央の巨像は、パンの神なり、背景の雪山は、日本北アルプスの実写スケッチを引用したり」。第二号と第三号は一転して風景を切り取った単色のポスター調のもので、第二号は前景に大きな葉の付いた木を配した山麓風景、第三号は崩壊しつつある崖の姿を大写しにしたもので、太く描かれた象り線が印象的。

第七年は中村清太郎氏の意匠で、第一号は白い表紙の上  
半に黄土色の窓、山と樹木のすっきりと抽象化された意匠。  
第二号は薄茶の地に青の単色のペン画で、中央に大きく一  
本の木、その上に帯を通して「山岳」のタイトル、幹の部  
分に年と号が縦に入る。第三号は白い地の下半分を使い、  
前景の赤い4本のカラマツを通して雪を戴いた連峰をプ  
ールと白で表現した。「山岳」の文字は小さく左上に赤で  
書かれている。

第八年は、石崎光瑠氏が得意の草花（高山植物）で清婉  
な表装を凝らしたもの。特に第一号は鮮やかな朱色地に  
ハクサンイチゲとキンググルマを配して特別に人目を惹く。  
第九年は最も変化多く、第一号は平幅百穂氏の壺の木版、  
第二号は茨木猪之吉氏自筆自刻の原型彫を、銀色の凹版に  
した。第三号は、三枝驥逸氏の双六谷入口の風景をペン  
画で描き、緑色に製版したものである。

第十一年一号は「十周年記念号」で、茨木猪之吉氏の意匠。  
チヨコレート地に緑の活字で「十周年記念号 山岳 第十  
年第壹號」と小さめに横に印字され、右上に切手を象った  
絵が傾けて貼られている。切手には斜面を登るマントを着  
たアルピニスト、赤く日本山岳会の文字も読める。第二号  
は春の山の風景、画面の大半を白い雪の斜面が占めており、

中央右隅に「山岳」の文字。第三号は白地の上半分に黒枠  
を作り、水色の湖面に波紋ができ、傍らに女神が立ってい  
るというもの。扉は単純に「山岳」と横書きの活字を配し  
たものに変わる。ちなみに、第十年第三号の巻末には、E.  
Dauntの寄稿したAkashisanが載せられている。

第十一年号は富田溪仙氏が各号とも、靈筆を揮はれ、  
第一号、黒部川鐘釣（水墨）、第二号、大日岳（淡彩スケッ  
チ）、第三号、枯木群巒の上に聳えた山岳（彩色刷）など異  
彩を放ったものである。ちなみに、第一号は「秩父號」で  
あり、表紙には表記がないが扉に横書きされている。

第十二号はまた一段と印象の違うものとなっている。  
第一号は中村清太郎氏の意匠で、黄色地の中央に大きな砲  
弾型の窓があり、周りにツタ模様を配してある。窓の中は  
ペン画タッチで前景にハイマツ、背景にグラデーシヨンの  
夕空が望める。第二号、三号は合併号で、全編「北海道中  
央高地の地学的研究」にあてられている。茨木猪之吉氏の  
意匠は、白地に「山岳」と号数の文字をペンで左側に縦に  
細く記され、右側上半分には牧草の緑を地に、白樺と白黒  
まだらの牛が描かれている。

第十二号の2冊には、メッセージの書かれた特別な扉  
が付けられていて、扉がないはずの第十三年第三号までこ

の特別な扉が続いている。これはある種のキャンペーンのようにであり、増加した登山者たちの安全登山のために、日本山岳会が啓蒙を行なったのである。

\*

表紙で区分すれば、次の第十三年号からは全く別様式のものに変わる。すなわち、茶褐色の薄紙の表紙は、茶色の活字で右から左に横書きで「山岳」とタイトルを表記するための「おもて紙」にすぎなくなり、飾りになるようなものは省かれた。扉も付けられなくなった。烏水の表現を借りれば、その後、長く表紙に美術考案を施すことは、閑却されてきたが、第二十五年の第一号には、スケッチされた墨絵を、表紙に使ってある<sup>レ</sup>となる。一般の同好者の会誌の多くは、この程度の表紙は珍しくなろうし、先輩格の東京地学協会の『地学雑誌』、そして英国山岳会の『The Alpine Journal』の場合も、素気ない薄緑色一枚の薄い表紙で通している。

第十三年号、第十四号、第十五号の各3冊は、各号表紙の上下部分に中村清太郎氏によるシンプルな線文様が施されている。第十三年第一号の文様の色はエンジ、二号は紺、三号は黄色となっているが、第十四年は第一号と三号がエンジ、二号が紺である。第十五号では各号とも

エンジである。

第十二号号までにはなくて、第十三年号から始まったものは、裏表紙の英字表記である。The Journal of the Japan Alpine Club SANGAKU Vol. XIII 1918 No. 1より行に分けて、同じく茶色で書かれている。この裏表紙の英字表記は、現在までほぼ同様が続いている。第十三年号からこの表記が始まった理由は、本文に外国人会員の英文寄稿を載せ、英文で目次と会務報告を付けているからである。巻を裏から開く外国文欄の形式は、現在の『山岳』でも踏襲されている。

第十四号号からは本文頁に罫線が復活し、第二十三号号まで続く。用紙も少し薄くなり、第四号号までのものに近くなる。ページ数の方も、従前の各号に比べ薄くなる。また、第十四号号から「山岳 第十四年第〇号」と書かれた茶色の背文字が復活して付けられるようになり、これも現在まで続いている（第五号号から第十三年号は背文字がない）。

第十六号号の第一号と二号の表紙の中央には、茨木猪之吉氏の茶色の線画が描かれている。曲がりくねった幹と枝とが交錯し枝先には小鳥が止まっている。第三号には絵はなく、代わりに「奥上州」と茶色で大きく行書が書かれてい

る。関連地域の記録を集めた特集号である。

第十七年号と第十八年号の6冊は、茶褐色の表紙に「山岳」の茶色いロゴと年と号以外に一切なく、きわめてシンプルである。ちなみに第十三年号から続いていた英文欄は、第十七年第一号までで中止された。その主なる理由は、関東大震災で印刷所が被災したためである。

表紙のシンプルさが中断するのは、第十九年号と第二十年号の6冊で、表紙の上半部に細長い枠を描き、その中に図案が施されている。第十九年号の絵はキンポウゲの群落で、3冊とも共通である。第二十年号の方は、それを1冊ごとに変えている。第一号は農村の風景、第二号は斜面上シカの群れ、第三号は雌雄のキジである。第十九年第一号には「山岳」のロゴと年と号の下に行書体で「尾瀬」とあり、第二号には「朝鮮 金剛山」と活字の縦書きで書かれている。第二十年第一号の場合も同様で、「山岳」のロゴと年と号の下に活字縦書きで「秩父號」と書かれ、第三号も縦書きで「奥羽號」と書かれている。

第二十一年号は再び図案はなくなり、シンプルに戻るが、第二号には中央に「黒部號」と大きな活字が縦に書かれる。第二十二年各号には中央に図案化された花の絵が描かれる。第一号は武田久吉氏によって円形に描かれたミチノク

コザクラ、そして、絵の下に横書きで「奥羽號第二」の活字。第二号は松井幹雄氏による三角に描かれたチョウノスケソウ、第三号も同じく松井による四角い枠内にツバメオモトである。

第二十三年号は三度<sup>みたび</sup>シンプルに戻り、3冊とも「山岳」のロゴと年と号以外に何も表紙には書かれないが、第三号は特別号であり、目次の後に扉が付き「台湾の山旅」とある。ちなみに「奥上州」と「金剛山」を除く特別号5冊には扉ページが付いて、そこに縦の活字で〇〇号と記されている。第二号の巻末には、第一号から第二十年号までの「山岳総目録」が付録として付いている。

\*

第二十四年号からは、また『山岳』は大きな変化を示す。まず用紙がツヤのある少し重い用紙に変えられる。罫線もなくなつて、ページが大きく感じられる。表紙はチャコールグレーとなり、縦に黒で「山岳」の活字が入り、年と号の活字は少し大きめに2行で入る。扉にあたるページがあり(裏側ページは目次)、表紙と同じ大きさの活字で表記されている。第二十四年号のうち第一号は「黒部號第二」、第二号は「黒部號第三」であるが、それぞれ扉に表記されている。

この一連の様式変更については、「一、雑誌紙質改善の件、一、雑誌の見本刷出来につき、様式を決定し、山岳第二十四年第一号より実行すること、」とあり、昭和4年9月29日の幹事会で検討され、10月12日決定された。

第二十五年号は、烏水の言うごとく表紙に墨で「群猿」が描かれる。地は薄いグレーに変わり、「山岳」のタイトルと年と号は、右から左の横書きに戻り、扉ページは縦書きで第二十四年号と同様である。石井鶴三氏が描いたこの墨絵は、烏水が言う第一号のみではなく、3冊とも同じ絵が使われている。第三号は「二十五周年記念号」と絵の下に記されているため、絵は上側にずれている。この号は特別号であるため、巻末にはウェストンの Now and Then と、マレー・ウォルトンの The Ascent of T'sugitaka と、本欄の英文要約が2本載せてある。

第二十六年号は、再び第一期の「山岳」に戻ったような印象がある。白の表紙には茨木猪之吉氏が3冊それぞれに違ったタッチの絵を描いている。第一号は縦構図のペン画で薄墨が塗られる。第二号は表紙の上半分に墨書きに淡彩。第三号は上半分に鉛筆で描き淡彩、空のブルーが鮮やかである。「山岳」の文字と年と号は横の描文字である。表紙は白い紙で裏打ちされて（第三十四号まで同様の形が

続く）、書体の違う縦の描文字のある扉が付き、さらに口絵がそれぞれに付けられている。

第二十七年号になると、表紙は再びシンプルに戻され、第二十四年号の表紙と同じ活字で縦に「山岳」と入るが、地は薄いグレーである。表紙に比べ扉は凝っていて、3冊それぞれ用紙が異なり、和紙に石版印刷された石崎光瑶氏の描いた高山植物の絵（キヌガサソウ、チシマギキョウ、クロユリ）が貼られている。ちなみに第一号には、第一号第一号から第二十五年第三号までの「山岳総索引」が付録として付いている。

第二十八年号の表紙は地がクリーム色に変わり、茨木猪之吉氏の高山植物（アオノツガザクラ、トウヤクリンドウ、シヤクナゲ）の線画が中央に描かれる。第一号と第二号は茶色で文字と絵が描かれているが、第三号はそれが黒に変わる。「山岳」の文字も、第一号が縦書きなのに、第二号、第三号は横になっている。年と号の活字は小さくなり、いずれも縦書きである。活字でタイトルを印字した扉が付き、口絵が第一号と第二号にはある。

第二十九年号からは装丁が固定される。薄いグレー地の表紙に黒で縦に「山岳」と入り、年と号の活字は小さい。第三十年号からは発行冊数が年に3冊から2冊に変わる



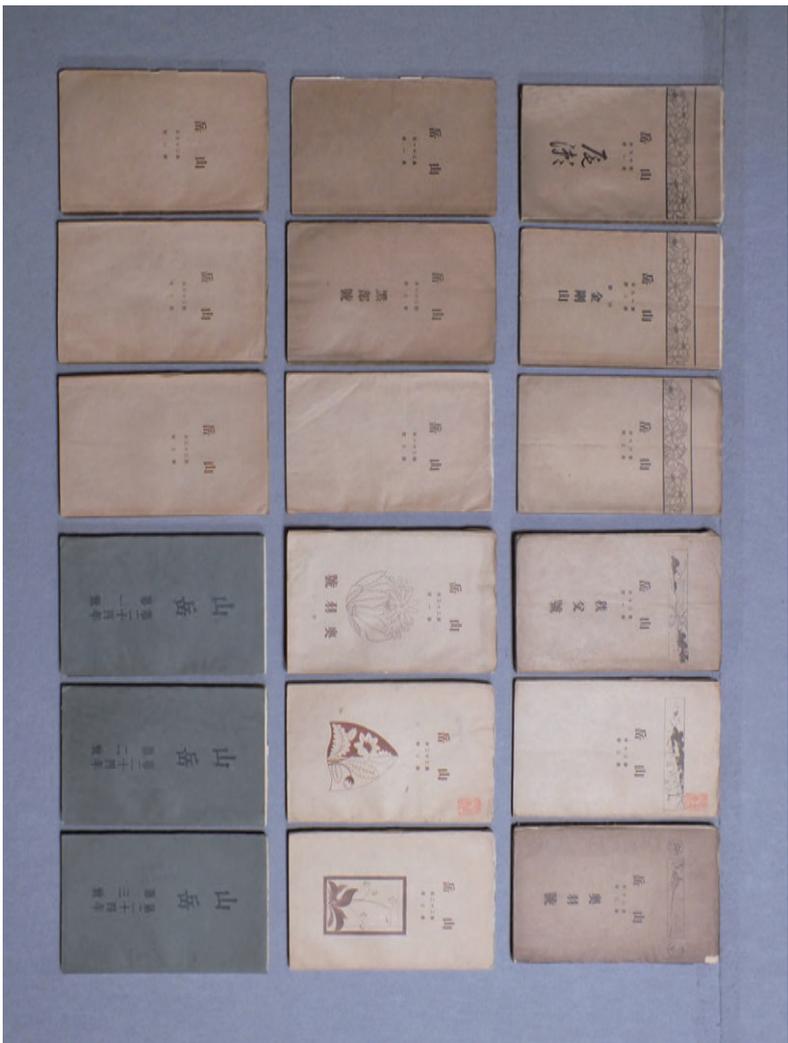
創刊号(第1年1号)～第6年3号



第7年1号~第12年2・3号



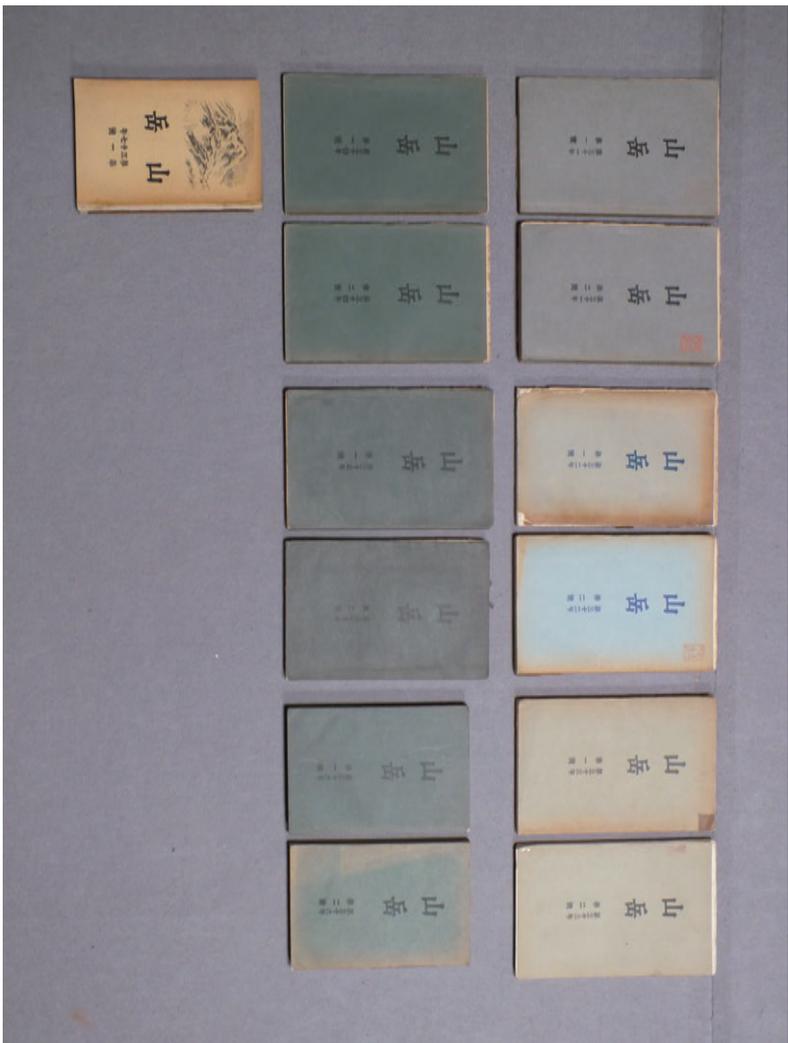
13年1号～第18年3号



第19年1号~第24年3号



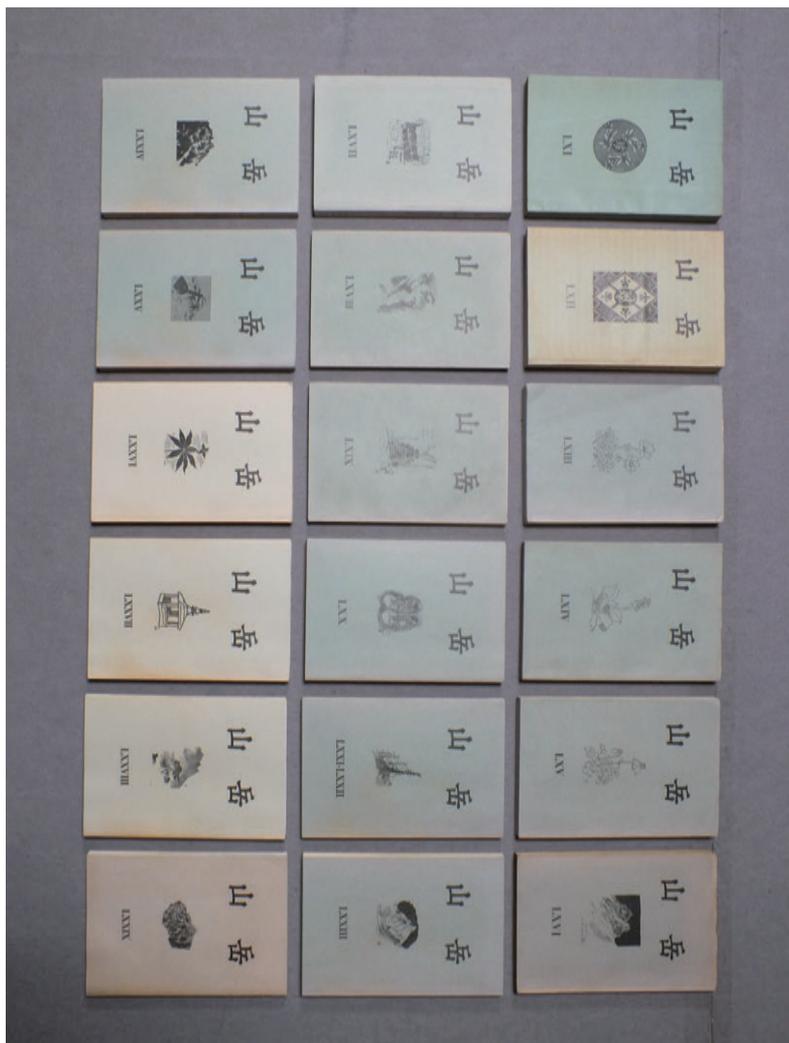
第25年1号～第30年2号



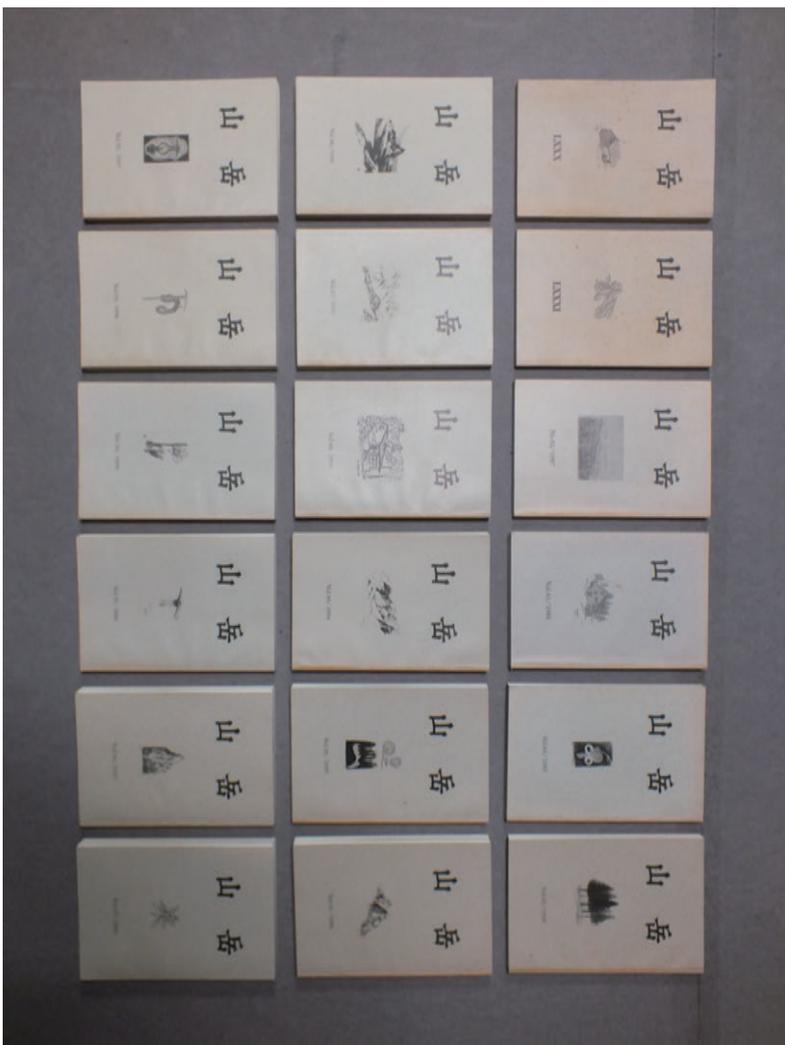
第31年1号~第37年1号



第43年1号～第60年



第61年～第79年



第80年～第97年



第98年～第108年

が、装丁は踏襲される。第三十一年号の地色は、少し濃くなるほかはすべて同じ。第三十二年号の地色は明るいブルーとなるが、装丁は同じである。

第三十三年号は再び薄いグレーに戻るが、装丁は変わらない。第三十四年号から第三十六年号までは、地色がダークグリーンに変わる。そして、第三十四年の第二号からは表紙の裏打ちがなくなる。第三十六年号の発行は昭和16年9月であるが、物資乏しき折となり、用紙の質が悪くなるとともに、菊判から一回り小さいA5判に変わる。ちなみに表紙地の変更は必ずしも依頼者の意向ではなく、同色の用紙が切れたために変更になった場合もあったと思われる。

戦前最後の第三十七年号は、判型と用紙の質は第三十六年号と同じである。第一号の表紙はクリーム色の厚紙が使われている。黒で横書きされた「山岳」の文字は中央に置かれ、その上に茨木猪之吉氏の絵、「レンゲより針ノ木岳」が描かれている。第二号は校正刷りまで完了していたが、空襲で焼けて消滅してしまった。

\*

戦後の『山岳』は、昭和23年11月に第四十三年第一号が発刊される。戦前最後の号は第三十七年であるが、戦争に

よる空白を挟んで年数をそのまま数えて、復刊された最初の『山岳』を第四十三年とした。混乱期の中、出版社河出書房の協力を得て発行されたもので、特異な『山岳』の一つである。版型はA5判、ごく薄い表紙の茶色地は横に三分され、上に左から右の横書きで「山岳」、中央に残雪のある立山の写真、下に年と号数をローマ数字でXLIII-1と記し、その下に1948とあり、右に会員章の意匠を入れている。裏を返すと同じく三分され、中央に大きく「The Journal of the Japanese Alpine Club SANGAKU Vol. XLIII No. 1 1948」とある。背文字は上に「山岳」、中央にローマ数字の年と号数、下に日本山岳会とある。目次は表紙の裏を使い、口絵写真が入っている。裏表紙の内側に英文の目次と奥付がある。この号から後に続く『山岳』各号は、号数にローマ数字を使うようになった。なお、第二号は河出書房が潰れてしまったために、刊行されずに終わった。

第四十四年号(XLIV)は判が少し大きい菊判で、第一号、第二号とも佐藤久一朗氏の意匠である。地色にそれぞれ茶と紺が使われ、「山岳」と中央の模様と年、号数のローマ数字は白抜きされている。背文字も同様である。花をモチーフにした中央の模様には、会員章が組み込まれている。佐藤のこのモチーフは、形を変えて次の第四十五年号に引

き継がれる。茶色の第一号は全編が「小島烏水記念」の特集号であり、紺色の第二号が通常号である。ともに扉ページがある。なお、第四十三年号とこの第四十四年号の計3冊は、物価高騰と出版事情の困難から、会費とは別途に『山岳』を予約販売するという形で製作された。

第四十五年号 (XLV) から『山岳』は年に1回の発行に変わった。戦後も戦前同様に年に2冊を目指したが、上記のごとく諸般の事情で実現できなかった。年に1回とすれば余裕が生まれるが、当時はまだ原稿も少なく、戦前期の1冊分よりも薄い。この号の判型はA5判である。扉が付いている。薄いブルー地にブルーで文字、ローマ数字の号数。中央の佐藤久一朗氏の意匠は、この号に続くXLVI-XLVII、XLVIII、XLIXの3冊に共通である。ただし、判型はXLVI号以外は一回り大きな変形判である。

現在の『山岳』の表紙は、上に「山岳」と横書きされ、中央に意匠ないし絵が配され、下にローマ数字で号数が表示される。背文字があり、裏表紙の英文表記があるという形であるが、この形はほぼ第四十五年号で固まった。第四十八年号 (XLVIII) からは英文欄が復活する。ただし、英文欄のない号もときどきある。

第五十年号 (L) の中央の意匠は石井鶴三氏の描くホシ

ガラスで、第五十一年号 (LI) も同じものが使われている。第五十二年号 (LII) の中央にはラカポシのスケッチが使われているが、次の第五十三年号 (LIII) から第五十八年号 (LVIII) までは、挿絵画家の牧野四子吉氏の細密画が使われている。第六十年号 (LX) からは、再び佐藤久一朗氏の意匠が第六十二年号 (LXII) まで使われる。この間の第五十九年号 (LXI) と第六十三年号 (LXIII) から第六十六年号 (LXVI) までは、山下一夫氏の花のスケッチとなり、第六十七年号 (LXVII) からは、画家山里寿男氏のスケッチに代って第七十三年号 (LXXXIII) まで続き、以後、中央にスケッチを載せたスタイルが続いてゆく。

第六十三年号から第七十二年号までの38年間の表紙は、ほとんど見分けが付かないほどに変化の乏しいものになる。第七十年号 (LXX) だけは創立70周年ということで、マナスル三山の写真がカバーとして巻かれている。この期間には日本人による海外遠征の最盛期でもあり、折込の地図や長いパノラマ写真が挟み込まれたものも多い。この『山岳』のスタイルにすっかり慣れてしまい、かつての『山岳』の表紙が様々な変転を繰り返したということすら忘れられた。この間の変化といえば、第七十一年号が発行されず、第七十二年号との合併号になったことと、第八十二年号か

ら号数表記をローマ数字からアラビア数字に改めたことである。

第二百二号からは、本文の用紙をクリーム地から白地に換え、写真を本文中に入れるようにし、カラー写真を積極的に使うようになった。そして、第百三年号からは表紙の用紙をツヤ消しビニール掛けとし、中央にカラー写真を配した意匠に大きく変えた。号ごとに色の変化を加えて、第百三年号は薄茶の地色で、秋の穂高のツヤのある写真を入れた。第百四年号から第百六年号まで地色をそれぞれグレー、ブルー、クリームに変えて、槍ヶ岳・北鎌尾根、剣岳西面、富士山の写真を同様に配した。そして、第百七年号と第百八年号は表紙に白い加工紙を使い、中央に色刷りで版画を入れている。

### 第1期の山岳会と『山岳』

初期の日本山岳会の活動のうちの最大の目標は、まだ一般には知られていない「日本アルプス」に最初の足跡を印すことであった。『山岳』はその登山を記録し、集積する場であった。登山活動以外の、山岳会としての事業や行事は追いついて企画されることになるが、当面は発起人が運営幹事となって会計経理や事務連絡を行ない、規則に掲げられ

た目的の一つとして『山岳』を編集して年に3冊ずつ発行した。

『山岳』創刊号の巻頭には、「山岳會設立の主旨書」が掲げられ、発起人たちがそれぞれの登山記と、著名な学者の解説的論考や文人の著述を内容として、発会の翌年4月に発行された。会報欄には「本会の成立」と題した発会までのいきさつが記され、会員名簿と山岳會規則を載せてある。続いて6月に発行された第二号の本欄も創刊号と同様の執筆陣容で、雑録欄にいくらか登山の啓蒙的な文が載せられている。第三号は11月に発行された。「日本アルプスの巻」と題して6編の日本アルプス登山記を載せ、未知の日本アルプスがここで紹介された。この第一年号の3冊によって『山岳』の位置付けと役割は、登山の記録を残すことのほかに、登山というものの一般への啓蒙普及、そして、会員数を増やすことだったと分かる。

創設間もないこの不確定な状況をなんとか支えたのが、小島烏水の人脈と高頭仁兵衛の拠出金であり、各幹事の奉仕精神であった。「明治三十八年秋に、山岳会が結成されはしたが、一番困ったのは事務所をどこに置くかの問題であった」とあり、当初は日本橋室町にある城教馬の法律事務所の一角に置いてもらったが、城は間もなく朝鮮に赴任

することになり、その後は高野鷹蔵の自宅が山岳会事務所となった。「明治四十一年一月に、高野君の横浜の家に移したまま、大正八年十月十五日に私の家に移るまで、この長年月高野君の監督下に、会が成長して行ったのである」とあり、「いろいろの会合や所用で、よく君の家へ通ったものだ。君の家は先代以来船舶運送業で、荷主の旅宿も兼ねた広い構えであった」と、高野への追悼文中に武田久吉と中村清太郎が説明している。

当初は発起人の7人だけが幹事を務めたが、城の渡朝の後すぐに辻本満丸が加わり、その3年後には中村清太郎と三枝威之介が加わった。武田久吉が英国に留学すると、代わりに辻村伊助が幹事となり、大正に入って会務がさらに繁多になると木暮理太郎が幹事として加わり、10名の体制となった。しかし、間もなく小島烏水が渡米することになるが、その翌年（大正5年）には武田が帰朝し、幹事の仕事に復帰した。

ごく初期の『山岳』の編集は著述家として、また雑誌編集者としてもすでに名のあつた小島烏水が中心となつて行なつた。烏水は理想とする専門雑誌を目指して、創刊号から第九年第一号までの25冊に関わつて、烏水好みの様々な工夫を凝らした雑誌として制作した。内容は山岳会の主旨

に添つて幅広く自然科学から文芸に及び、自らの著作『日本アルプス』各巻を思わせる多彩さがある。表紙についても、烏水は前述のごとく非常な思い入れがあつた。

例えば第八年第三号を手にとると、表紙には日本画家・石崎光瑠の描く淡い花（ツマトリソウ）の文様。その上に黄色い短冊を中央に貼つて行書で「山岳第八年第三号」と書かれている。登山記録としては地味なものばかりだが、「謡曲に現はれたる山岳」とか、烏水の筆になる「風景画家歌川廣重傳」が巻末に加えられている。一見すると文芸雑誌のようでもあり、珍しい写真や版画写真なども挿まれている、総合雑誌のようでもあり、登山を知らない人たちも思わず手に取つたかもしれない。

『山岳』の構成を見ると、「本欄」、「雑録」、「雑報」、「会報」という形をとっている。このような構成は、『山岳』の前身である『博物之友』と同様でもあるが、英国山岳会の当時の Alpine Journal にも範を取つたものと思われる。記録的な登山や重要な論考などを本欄とし、一段組みをあて、それ以外の登山記録は Various Expeditions に相当、これを「雑録」として二段組みにした。各地の山岳情報を集めた Alpine Notes は「雑報」となつた。Proceedings of the Alpine Club は文字どおり日本山岳会の「会報」を対応させ

たと思われる。ちなみにこの内容構成が変えられて本欄と雑録の区別がなくなり、現行の構成に近いものになるのは、第三十年第一号からである。

日本山岳会の存在を示す看板としての『山岳』は、号を追って様々な興味の進展を示したが、一般の会員に対する交流の機会が持たれたのは、創立から3年後のことである。その第1回大会は明治41年5月に開催された。「本会創立以来、茲に第三年を迎へ、今や基礎漸く固まり、同好諸氏の入会者殆んど五百名に垂んとし、今後の発展亦た期待すべきの盛況を見るに至りたると同時に、雑誌発行もさることながら、大会を開くも亦宜しからずやといふ、希望を寄せらるゝ向きも多く、従来創業の際とて、暫時見合わせ置きたる本会規則第四条の集会を実行するの機運に達したるを信じ、即ち本年五月十七日を期して、我山岳会第一回大会を、東京市日本橋区西紺屋町東京地学協会会館に於いて開催せり。」と同年6月発行の『山岳』第三年第二号に詳しい解説と写真や出品物のリストが載っている。このとき行なわれた講演の抄録も載せられ、そのときの盛会ぶりを想像することができる。

会員はその後も順調に増えていき、潜在的登山者の掘り起こしが進んで、すでに500人に達しようとしている。

創立から3年目の明治42年6月より、会の名称が「山岳会」から「日本山岳会」に変更された(第四年第二号会報欄)。そして、会員の要望もあり武井真澄氏意匠による会員章が鑄造されることになった。この会員章には4種あって、名誉会員、特別会員、正会員、役員の別が色で区別されている。

創刊号には、「アルプス山中一萬三千尺以上の高峰」などの「日本アルプス」に関する、当時知られていた情報が載せてあり、『山岳』は日本アルプスが中心の雑誌になるかと思われた。そして、3冊目の第一年第三号を「日本アルプスの巻」として最初の特集が載るが、日本アルプスの登山は始まったばかりであり、奥深い山にはまだ誰一人登っていないなかった。未踏の日本アルプスの本格的な登山記録が登場するのは、明治43年3月の「山岳発刊第五周年記念号」であり、その間の10冊近くは、日本各地の著名な山々の紀行が掲載されるばかりで、目を見張るような記録がなかなか載らない。

ちなみに第四年第一号巻末には、参謀本部陸地測量部より提供された5万分の1地形図「富士山」と多色刷りの「小林」、および「陸地測量部要覧」が付録となって付けられている。これは地形図利用者としての山岳会会員を見越して

のもので、続いて第四年第二号の巻末に明治42年3月の陸地測量部「二万分の一地形図発行区域一覽図」と「五万分の一地形図及二十万分の一帝國図発行区域一覽図」が付いている。ただし、日本アルプスを含む中部山岳は未刊行で、空白となっている。さらに第五年第一号の巻末には、農商務省地質調査所発行の「二十万分の一大日本地形詳図および四十万分の一大日本豫察地形図」「二十万分の一北海道庁編成北海道地形図」の発行一覽図が付いている。陸地測量部地形図未刊行のこの時期に、唯一の実測図として登山者が利用したものが、日本アルプスはまだ部分的にしか発行されていなかった。

第五年第一号は判型が一回り小さくなったが、3 cmを超える厚さがある「日本アルプスの巻」である。表紙を開くと、扉の前に石崎光瑤が描いた剣岳の絵が多色刷りで掲げられ、巻頭に誇りに満ちた記念號發刊の辞と、この機会に名譽会員となったウエストンの *My Swiss and Japanese Mountaineerings* の寄稿と肖像が載っている。本欄には日本アルプスの主要山岳である薬師岳、剣岳、大蓮華山、槍・穂高岳、信州駒ヶ岳などの記録と、発起人／幹事たち自身による白峰および赤石山脈縦横記が載り、さらに白頭山や阿利山の記録も載せている。登山者自らが作った地図や、

山名の付けられた山の姿のスケッチも添えられて、今までにない充実した号となった。巻末には前記のように20万分の1実測地形図の一覽図広告も付けられている。

この後の号にも、各号未踏の日本アルプス各所の記録が1つ2つ載ることになるが、そういつまでもこの傾向は続かず、残された山々は年々絞られていく。第六年第三号になると、登山記録よりも日本アルプスの氷河や氷河地形をテーマとする学術的な考察が本欄を作っており、山に登ることから、山に登って何を見るかという視点が加えられた。実測地形図を基にして、登山者自身が作った「臆測図」もこのころから作られるようになり、第五年第二号に「白峰山脈臆測図」、第六年第一号に「日本北アルプス一部臆測図」、第七年第三号には再び「白峰山脈臆測図改訂版」、第八年第二号には「大井川奥山地図」、さらに第九年第三号には「飛騨国双六谷流域概念図」が付録として付けられた。

ここまで登山が進展してきて、次に続くのは『山岳』の記事に触発されて日本アルプスを目指す登山者の増加である。獵師たちはすでに山案内人となって登山者の要望を満たしており、登山の出発地には旅館などの施設もかなり早い段階から整い始めている。日本アルプスを目指す登山者は、年を追うごとに増えていくのは必然的傾向であった。

このことから『山岳』の一つの使命は果たされたとと言えるが、先進性を求める登山者たちは新たな対象を求め、ある者は未知の谷を廻り、ある者はヨーロッパに渡ってアルプス登山を試み、あるいは台湾の山に、朝鮮の山にと領域を広げていった。『山岳』もその流れを取り込み、大正4年9月発行の「十周年記念号」では、本欄に「台湾の山岳」、「白頭山に登る」、「スウイス日記」などを並べ、この5年の間の様変わりを示している。

『山岳』創刊当時は類似の雑誌もなく、初期会員たちによる山岳情報がまだ珍しく、また烏水の努力もあつて書き手となる文化人会員がたくさんおり、原稿集めの苦労は少なかったと思われる。しかし、数年の内に依頼原稿の割合は次第に下がり、投稿原稿が中心になって筆者が次第に絞られてきた。志村烏嶺、大平晟、辻本満丸、鶴殿正雄、榎谷輒蔵、少し遅れて中村清太郎、関口泰、辻村伊助などの名が多く登場する。しかし、なんといつても最も多い筆名は編集人／幹事たちであり、烏水、うめもどき、蝶郎などが、『山岳』の内容を確保するための苦心を重ねることになる。そして、これまでは複数人で協議し分担していたものが、少数あるいは一人が中心になって、一冊の『山岳』を組み上げていくような形になっていくように見える。

一冊の中に同じ筆者の名が複数回現われる場合は、その回数が多いほど編集の中心人物と見なせるから、号ごとにその中心が変わっていくのが分かる。すなわち、第六年第一号から第三号は辻本満丸、第七年の第一号と第二号は中村清太郎が中心であり、第八年各号は高野鷹蔵と小島烏水の影が濃い。そして、第八年号以降は高野が中心となり、梅沢親光がそれを助けているように見える。また、中村清太郎は巻頭画や表紙のデザイン、地図製作などでも『山岳』の内容を豊かにする手助けを続けている。写真については、高野鷹蔵をはじめとして辻本満丸、辻村伊助、石崎光瑤、榎谷徹蔵、三枝威之介らが提供者となっている。烏水は江戸期の山岳画、版画のコレクションを提供している。さらに高野鷹蔵は『山岳』の発刊と並行して写真集『高山深谷』の第一輯（明治43年）から第八輯（大正6年）まで、写真の選択はもとより焼付けも、初めの一輯以外は全部自分が手がけ、装丁も会員の画家たちを動員するなど、いかなれば「凝り性の道楽氣を、自由奔放に発散した産物」<sup>1</sup>藤島敏男『山岳』第六十年・高野鷹蔵氏追悼）を、山岳会の名で8年間に8冊編集制作している。

東京以外の会員のための集会が大阪で初めて開かれたのは大正3年になってからで、榎谷徹蔵らの働きかけで烏水

らが講演に駆けつけている。その後、名古屋でも開かれるようになったが、会員同志の交流の機会が年に1回の大会のみという時代は、大正7年9月に始まる年4回の小集會が恒例化するまで永らく続いた。日本山岳会の趣旨に賛同して会員となる人が次々に現われたが、会員相互の連絡の役割も、まだ『山岳』が果たすほかなかった。

登山の最新情報である「本欄」や「雑録」もさることながら、会員にとって日本山岳会の動向を伺い知ることのできる「会報」は関心の的であったと思われる。この「会報」の中には「会員登山報」があり、編集者に宛てて情報提供や自身の登山の報告を載せることができた。その後、第十四年第2号からは「雑報」の中にこの項は移され、「会員通信」となつてほぼ毎号載るが、次第に内容が純粹な登山報告に変わった。

山岳会員の意識が変わり始めたのは、明治から大正に変わるころであろうか。志村烏嶺は高頭仁兵衛の東北各地の山に登る計画に同行し、次のような感想を述べている。「日本アルプス地方の登山が、最も趣味の多かつたのは、今より約十年程の昔であった。日本山嶽志の著者高頭氏が、大天井岳の所在登路等に就いて、山麓の村役場に照会されたが、充分に要領を得られなかつたと云ふ話は、今から考へ

て見れば殆んど事実とは思はれない。…其の後約十年間に、我が山岳会員の登山運動は、日本アルプス地方のどんな山でもいかなる谷でも、其の登路や名前を、一々吾人に暗記せしめる程になつた。時に參謀本部の五萬分の一の地図が出来てからは、日本アルプス地方の形勢は、掌上の文様を見る様に明らかになつた。併し日本の他の地方の高山は、まだ暗黒な部分が多い。東北地方の中央山系の部分には、記録などに載つた事のないものが沢山ある。御神楽岳とか狸々森とか平ヶ岳とか云ふ様な山になると、随分日本の山岳通と云はるゝ人々でも、一寸様子を知つて居る人は少ないと思ふ。」(第十年第三号)

このようにして日本国内の地域的展開が始まつたが、ほぼ同時に登山方法の新しい展開も始まつており、それを『山岳』はしっかりと捉えている。それは登山の季節的展開である。冬季の積雪のある時期に山に登ることは、山に生活の糧を求める猟師にとつては当たり前のことであるが、このころから積雪期にも山に向かい、登山を試みることが始まつた。明治44年4月、辻村伊助は馴染みの嘉門次を案内に雪の上高地に入った(第六年第一号、会員登山報告)。続いて大正3年12月には、名古屋の八木是峰が上高地に入り、中尾峠から蒲田へ抜けた記録が「雪の日本アルプス越え」

と題して第九年第二号に載った。

外国人によって日本にもたらされたスキーは、雪山を自由に歩き滑る技術としてすぐに受け入れられた。その担い手はごく初期には軍人たちであったが、すぐに民間にも伝えられた。明治44年に日本にスキー術をもたらした、オーストリア人レルヒ少佐の教えを受けた高田歩兵連隊の鶴見宜信<sup>よしのぶ</sup>大尉は、翌大正元年暮れに、富士山スキー登山を挙行した。世間で話題になった富士登山のその報告が、翌年の『山岳』第八年第一号に取り上げられた。レルヒは翌45年、旭川第七師団に駐留しここでもスキー術を伝え、札幌の東北帝大農科大学(後の北大)にも伝授されて間もなくスキー部が創設された。当時、北海道の山々は未開のままであったが、スキーを使って雪のある季節に登山が始められることとなった。スキー部員・角倉邦彦らは、早くも翌大正2年1月に、富士山スキー登山を行なっている(第九年第一号)。

同じ号には高田の日本スキー倶楽部による「雪艇富士登山報告」も載っているが、こちらは滑落事故を起こして、日本スキー界で最初の犠牲者が出た。それにもかかわらずスキーの普及は進み、新しいスポーツとして学生たちに受け入れられ、さらには冬山登山の技術としても研究されて

いく。ただし、スキーの練習地と指導者は極めて限られており、積雪量が多いという条件から、レルヒが最初に開いた高田の周辺と札幌を中心として展開していくこととなる。

創立から10年ほど経った大正5年4月に、改めて当時を振り返り、パトロンの高頭仁兵衛と事務処理の中心となつて奮闘した高野鷹蔵に対する感謝の気持ちを込めた慰労会が持たれた。「十数年前、少数の会員を以つて組織せられたる当時を回想すれば、本会発起者の先見と努力とに対して、多大の敬意を表せざるを得ず。…又、高頭、高野両幹事に負ふこと至大なるを断言す。則、高頭、高野氏は会務全般の経営者として、両氏なかりせば今日の盛運は、殆んど期し難かりしことを信ぜんとす。」と第十一年第三号の会報欄にある。同じ欄には、「石崎光瑠氏印度より帰る」という記事と、「幹事中村清太郎会員加賀正太郎両氏の外遊」として、「両氏は登山の希望を以つて、ジャバ、スマトラ、ニュギニア等の熱帯圏に行けり」が載っている。日本国内から外国の山にまで、確実に視野が広まってきたということであろう。

## 『山岳』各号の発行年月について

月刊誌の場合は、早ければ翌月の雑誌に記録が載ることもあるが、年刊雑誌では前年の記録が紙面に載るのが普通である。初期の『山岳』の場合、年に3回、2〜3ヶ月置きに1冊ずつ発行されたが、それらは一連のものであり、最初に全体3冊分の目次が決められる。記録として載るものは、前年かそれ以前のものである。ただし、間に合えば付録という形で当年の原稿を載せることができたこともある。また、「雑録」欄に短くまとめた記録が載ることもあったし、「会員通信」の形で短報が載っていることもある。しかし、その場合多くは翌年の「本欄」には載らず、結局短い記録だけで終わってしまうことも多い。また、大会や小集会の講演記録が改めて本欄に載ることも少なからずある。

以上の話は、確実に年刊雑誌が期間内に発行された場合であり、発行が遅れて翌年にずれ込めば、少なくとも当面の記録性は失われるであろう。『山岳』の発行年月を確認しておくことは、いろいろな意味で重要であり、発行が遅れた故に載らなくなった記録もありそうであり、結果としてその年度の3冊が揃っていることを確認すれば良い、というものではないのである。

ここでは、木暮理太郎が『山岳』に関わり始めた第九年第一号から第二十五年号までの、各号の発行年月を表によって確認しておきたい（太字は特別号を示す）。

第八年各号までは3冊が年内に発行されたが、上表に示すように第九年号からは、それが果たせなくなっていく。年に3冊が2冊になり、1冊のときや全く発行されない年も出てくる。その一方で、遅れを取り戻すべく合併号したり、年に4冊あるいは5冊が発行されることもあった。発行の遅れには様々な事由があり、それはその当時の山岳会の運営状況を反映したものである。それぞれの事由については、以下の章で述べていくことにしたい。

### 木暮理太郎という存在

木暮理太郎が日本山岳会に入会するはるか以前に、『山岳』に出会っていた話は有名である。「明治三十九年に、『山岳』が本屋の店頭に現れたのを見て、世の中に山好きの人間が自分以外にもあるのを知って驚いても、別段入会しようとは思わず、大正二年の秋に至って、慥か南日君の紹介で入会したかと思う。」とは武田久吉の回想（第四十三年第一号）である。それより少し前から、南日重治を通して山

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
大正3年 9年号							9-I			9-II		
4年 10年号			9-III							10-I	10-II	
5年 11年号					10-III					11-I	11-II	
6年 12年号										11-III		
7年 13年号		12-I							12-II/III			13-I
8年 14年号					13-II						13-III	
9年 15年号		14-I			14-II			14-III	15-I			15-II
10年 16年号					15-III			16-I				16-II
11年 17年号												
12年 18年号					16-III				17-I			
13年 19年号		17-II			17-III					18-I		18-II
14年 20年号					18-III					19-II		
15年 21年号		19-III			19-I			20-I	20-II			
昭和2年 22年号	20-III		21-I				21-II		21-III	22-I		
3年 23年号		22-II			22-III						23-I	
4年 24年号			23-II							23-III		24-I-II-III
5年 25年号				25-I		25-II					25-III	

岳会の幹事たち、辻本満丸、高野鷹蔵、中村清太郎、小島鳥水、三枝威之介、梅沢親光らとは知り合いになっていた。木暮の年齢は鳥水と同じで、登山に関しては10歳も若い幹事たちとは異なる経験や見識を持っており、入会早々から一目を置かれる存在となった。

木暮理太郎の登山は仲間もなく、情報もないままに、若いころからほとんど一人で各地の山を登り歩いてきた。出身地の上州の山、当時まだ盛んであった信仰登山の対象の山、仙台の二高時代には仙台近郊の山にも良く登った。日本山岳会が発会する10年前の23〜24歳のころには御嶽、乗鞍、木曾駒、甲斐駒、鳳凰にも登り、白峰山や槍ヶ岳も試みていた。木暮が『山岳』の存在を知ったその明治39年に、東京帝国大学の英文科に入学した南日（田部）重治と本郷の大学近くで知り合い、意気投合した。南日とは11歳も年が離れていたが、同じ下宿で過ごすなど深い縁で結ばれ、秩父の山を二人で登り出した。日本山岳会の会員たちが盛んに日本アルプスを登っているころ、木暮と南日は秩父の山にのめり込んでいた。木暮が再び日本アルプスに足を向けたのは、日本山岳会の幹事たちと近づきになり、交流が始まった大正2年である。

当時の北アルプスは、日本山岳会員を中心とする登山者

で賑わい始めていた。大正2年の夏、南日重治とたった二人で大荷物を担いで、槍ヶ岳から薬師岳を通って劔岳、立山川を下って伊折まで出た。上高地では絵を描きに来ていた茨木猪之吉に会い、槍ヶ岳まで同道した。途中で釣りをする嘉門次にも行き逢った。その翌朝には、槍ヶ岳を登りにきた大木操ら一高旅行部の一行とも出会っている。これから向かう遥か先の五色ヶ原には、中村清太郎がテントを張り、絵を描いて待っている。中村は近藤茂吉と一緒に立山温泉にやって来た。近藤は別れて劔岳に登った後、五色ヶ原、黒部五郎を経て、三俣蓮華から鷲羽岳へ向かった。木暮と南日が三俣蓮華に達すると近藤の置手紙があり、鷲羽乗越にいるから遊びに来い、というものだった。中村とはその後の行を共にし、長次郎を伴って現在の別山尾根経由で劔岳に登った。その劔岳に登る前日、一行が別山の麓でキャンプをしていると、劔岳から登山者が降りてきた。大阪から来た榎谷徹蔵だった。

一高旅行部時代に木暮を見知った日高信六郎は、山岳会のお歴々の集まりに推参して、「長い足を屈けて膝をかかえている人と、和服を着て始終微笑をたたへている髯のひとが眼につきました。田部さんと木暮さんとは其の場で伺ったのでした。丁度お二人で槍から立山迄、当時として

は破天荒な縦走を遂げられた後のことかと思えます。」と記している。木暮が高野鷹蔵と辻村伊助の推薦で日本山岳会に入会するのは、この直後の9月のことで、『山岳』第八年第三号の会報欄、新入会員の中にその名が見つかる。

木暮の本格的な日本アルプス登山は、槍ヶ岳から日本海への大縦走を皮切りに遅いスタートを切る。次の登山は南アルプス南部の大縦走、翌大正4年は、再び南日とともに毛勝山から赤谷尾根、大窓、小黒部谷を下って、改めて三ノ窓から劔岳に登り、長次郎雪渓を下る。さらに刈安峠から黒部川に下り、東沢を遡って赤牛岳、野口五郎岳、烏帽子岳と大縦走。大正6年にも、小川谷から朝日岳、白馬岳から針ノ木峠まで縦走した。五竜岳、鹿島槍間の八峰キレットも越えている。大正7年には、武田久吉とともに北岳から白河内岳に南下、大井川へ下って蝙蝠岳に登って北上し、仙丈ヶ岳、甲斐駒ヶ岳に登った。

日本アルプスを広く深く歩いた木暮であるが、槍・穂高岳や上高地のような人の多い場所を意識的に避けているようで、木暮の書いた文中に、この名前はほとんど登場してこない。それに対し、未開の山域であった劔岳や黒部には深いこだわりを持っていた。そして、当時の奥秩父も未開の山域であったし、大正8～9年の奥上州もまた同様であ

る。木暮の目指す山の条件は、地味であり未開の山ということのようである。後年、ヒマラヤの研究に打ち込んだ理由も、華やかなヨーロッパ・アルプスに比べ、ヒマラヤは絶対的に未開であり、何よりもアジアに位置することが、木暮の好みと一致したのかもしれない。

木暮の登山観と人柄を示すエピソードはたくさんある。「和服を着て大きな袋を背負ひ、案内も連れずに未だ地図もなく、殆んど通る人もなかった高山の頂から頂へとさまよって行かれたと云ふやうなことは、山にあこがれている若い書生の気分とピッタリくるので、何時の間にか木暮さんと私共との間には、特別の親しさが湧いた様です。」とは日高信六郎による追悼文中にあるが、続けて「随分屢々、夜分不意に押掛けて山の話をつたつたものでした。…此処で秩父の山や笛吹川、荒川の上流の話やら、黒部の遡行やら、劔の大窓小窓、さては、赤石の事やら、皇海山行での野宮等、所謂ピーク・ハンティングでないしじみじみした山登のお話を聞いたので、それも何処かの旅から帰られると直ぐ乗り込んで、封切り〴〵を伺うのが楽しみでした。」「又此処で上越の山や利根水源地方の旅の計画をしたものです。」とある。

「木暮さんが、東京から見える山々のことを調べられた

時代は、広からぬ御座敷一面に、五萬万分の一図をあげ、東京の処に針を打ってそこから糸を引き、悪澤が見えるか見えないか、白砂山はどうか等と、夢中になったものでした。冠さんに始めて御眼にかかったのも此処でした。」とあり、若い世代の人たちは、現役として登山を続ける木暮と、その登山姿勢に大いに惹かれていたようである。この時代になると、武田久吉を除いた発起人、幹事たちはすでに目立った登山をしておらず、世代の交代期に入っていた。

この点について藤島敏男は追悼文の中で、「創立当初の人々が一部を残して、多くは漸く山に足遠くならうとしつつある中で、木暮さんの山に対する淪らない情熱と闘志とが大きく物をいった。会の事務所と会誌『山岳』の編輯所とが、本郷蓬萊町の御宅に移されてからは、会の采配は全く木暮さんの手でふられたといってもよい。会の内部ではもとより、世間でも、山と言へば木暮さんを想ひ、山の先輩と言へば先づ木暮さんを思ひ浮かべるほどだった。」と書いている。さらに、「若い私達はそこで山に対する情熱を吹き込まれた。日本登山界の耆宿木暮さんの口から物語られた過去のかずかずの山旅の思い出や挿話を通じて、日本登山界に於ける先輩達の業績や伝統というものを私達は胸底に刻まれたのだ。短いというものの三十有余年に亘

る近代日本登山界の推移を、私が臆気ながら感知し得るのはこの時代の賜物に外ならない。」(上越閑話『山と溪谷』15号)

登山家として以外の木暮の日常は、東京市の囑託として明治40年に始まった『東京市史』編纂事業に携わり、郷里の先輩である塚越芳太郎の懇願を受けて、明治40年から昭和19年に亡くなるまで従事した。『東京市史』とは、明治10年の東京府時代から計画された史料編纂事業であるが、幾多の情況変化を経て、ようやく明治40年に活動が開始された。しかし、膨大な史料(先史時代から明治まで)の蒐集から始めて、細分された項目ごとに史料を選択し、まとめしていく気の遠くなるような作業を、ほとんど時間制限なしに継続しなければならぬ。とりあえずは『東京市史稿』という形で蒐集史料を刊行し、さらに蒐集、編集を行ない続けて、全体が整ったところで訂正補修を加えて『東京市史』としてまとめるというものである。編纂作業に従事する者は、木暮を含めて3名であったから、それぞれが40年を超える歳月をかけて作業を続けてもなお予定の『東京市史稿』は完成せず、戦局悪化に伴い昭和18年に刊行が中止されるまでに10篇75巻、付図8点などが刊行されただけであった。

昭和に入ってから人員が増加があり、木暮は河渠篇を担当した。資料は明治以前のところまで集め、3〜4冊分の原稿はできていたが刊行には至らなかった。また、昭和14年から得意の知識を生かして『御府内沿革図書』も担当し、訂正から校正、印刷の監督を行なった。「この出版には先生も非常な意気込みを以って当られ、役所ばかりでなく、自宅に帰ってまで仕事を続けて厳密な訂正を加えられた」とされている。「山岳思想を啓発することに就いては、常に骨身を惜しまれなかった。市関係の者も山岳部会の名譽部長になっていただいたり、講演をお願いしたりしたことが多かった。：我々編纂室の者は特に度々山に同伴させていただいて人から羨ましがられた」とのことである（『霧の旅』54号 木暮先生追悼号）。

「役所の仕事は家ですることが多かった。原稿を書いたり、校正したり、薄紙にカラスグチで線をひいて地図を作ったりするのであったが、白い皿にといた絵具を塗るのが、江戸の地図ではなくて山のスケッチであったり、たんねんに引いている線が山の高度比較図であったりすることがよくあった。」「たぶん一輪ぎしの花瓶なのであろうが、それにはいつも、ペン軸や、ていねいにけずったエンピツ、水彩画用の筆、定規、カラスグチなどがさしてあって、父の

机のそばの本棚の上ののつていた。」（木暮美枝子「父の若いころのことなど」日本山岳名著全集、月報）  
 なお、この編纂事業は戦後再開、継続されて、現在も覆刻版を含めた11篇177巻が『東京市史稿』として東京都公文書館から刊行中である。

#### 山岳会幹事としての木暮理太郎

木暮理太郎の登山経歴や豊富な知識と研究成果には一目置かれていて、「登山史上の人」の一人と誰もが認めているが、それに加えてここでは『山岳』の編集者としての木暮にも注目したい。望月達夫は、「：第十一年以降は木暮が編集の重任を負ったとみて差支えない。爾来第二十二年三号（昭和四年九月）まで約十四年間、木暮は独力で『山岳』編集という大任を双肩に担った。：」と『近代登山の先駆者たち』の『山岳』編集者としての烏水・理太郎』の中で端的に書いている。ここでは木暮が『山岳』編集を担った経緯と時期、その『山岳』各号の内容について、さらに詳しく検討していきたい。

大正4年7月、小島烏水は横浜正金銀行のロスアンゼルス支店に赴任するために渡米した。自らも関わったであろう第十年第一号「十周年記念号」は、前年の第九年号発刊

の遅れのあおりを受けて10月の発行となり、異国の地で手  
にすることになった。鳥水は当分の間、会の実務から離れ  
ることとなり、日本山岳会を支えてきた体制に大きな変化  
が生じ始めた。木暮は入会の翌年の大正3年9月に幹事と  
なっており、すぐに『山岳』の編集にも大きく関わった。  
鳥水渡米後には『山岳』編集部が木暮方に移転したことで、  
編集の責任の多くを木暮が担うことになった。

鳥水の去ったすぐ後の『山岳』の編集は、校正者として  
名前が記されていることから高野と梅沢が中心になって  
行なっていたと思われる。「第十周年記念号」には発行の  
辞があり、記名はないが高野が書いたものである。「過  
去九年間の有形的仕事は、僅かで御座いますが、山岳趣味  
の普及、登山趣味の勃興に就いては多少の自負なきにしも  
あらざる次第で御座います」とある。第八年号まではまず  
まず順調に発行されていた『山岳』であったが、この後か  
ら発行の遅延が目立ち始める。すなわち第九年第三号は、  
その年の内に発行されずに翌年3月にずれ込んでしまっ  
た。

そこで同号には、高野による「言ひわけ」が次のように  
書かれた。「本誌は年三回発行と云ふ御約束で御座います  
から、是非三号は大正三年中に御配布せねばならぬと云ふ

つもりで、やっておりますが、…本誌が最善最善なりと  
は、申されません、然し吾々としては、其絶頂に迄達する  
つもりでやって居るので御座います。…雑誌の発行が遅れ  
勝ちである事は、幾重にも御免しを願いたいので御座いま  
す。」

第十年の第二号は、第一号にすぐ続いて12月に発行され  
たが、第三号の発行はまた翌年の5月に延びてしまった。  
以後押せ押せとなり、各年の第三号発行は翌年というのが  
常態化してしまうようになる。そして第十二年第一号は、  
とうとう1年遅れで発行された。これは容易ならぬ事態  
と言わねばならない。木暮が新たに編集担当者として加  
わったのは、正にこのころである。大正5年12月発行の第  
十一年第二号の会報欄に、「本会幹事小島久太氏渡米不在  
中『山岳』編集部を左記幹事木暮理太郎氏方に設置せり、  
原稿に関する用務一切は編輯所に御申越を乞ふ」とあり、  
本郷駒込蓬萊町31の木暮理太郎方にて『山岳』は編集され  
る体制となった。

しかし木暮は、これ以前にもすでに『山岳』の多くの部  
分を担当していたようである。入会した後の次の号、すな  
わち木暮が幹事となる以前に発行された第九年第一号に、  
早速「東京より見ゆる山」のスケッチとその解説を載せて

おり、幹事になった月に発刊された第九年第二号には、南日重治とともに歩いた秩父の山岳誌を「秩父の奥山」という題で載せている。

続いて「十周年記念号」の巻頭には、赤羽台より望んだ展望図が折込で掲げられ、その解説文「再び、東京より見ゆる山々の補遺」が雑録欄に載っている。第八年第二号と第九年第一号の中で中村清太郎とともに、東京から見える山々の山座同定に一境地を開いた木暮は、その追加稿をここに載せた（さらに決定稿を第十一年第二号に載せている）。同じ雑録欄には、前記の第九年第二号本欄に載せた「秩父の奥山」に関する疑問質問に答える長文の見解を「鼯鼠談山」という木暮が作ったコラムに載せており、地元甲州在住の会員に対し、木暮の秩父の山々に関する理解の深さを示した。

次の第十年第二号には、付録欄に黒部川のパイオニアとして南日と歩いた同年（大正4年）夏の記録「黒部川奥の山旅（前編）」を載せた。さらに「登山地図第一輯」として「劔岳」が付録として付けられている。この登山地図は陸地測量部から地形図が発行された後の、「登山者が作る地図」として、登山コースのガイドを兼ねたもので、「本誌に附せる登山地図は、新しき考案に由り編纂せるものにして、

順次各主要なる山岳に及ぼすべき心組にして、其第一着手として越中劔岳を選出したり、本図編輯に就ては、成可く多数の資料を蒐集して正確なるを勉めたりと雖も、多少の誤謬なきを保せず、此等に就ては観者の忠告を希望す」とあり、冠松次郎、吉澤庄作、大木操、茨木猪之吉各氏より資料蒐集の助力を得た、とある。トレースされたルートは地図上に赤で示してあり、ピークや尾根に名を新たに付けている。二方向から眺めた劔岳のスケッチは茨木が描き、案内文は木暮がまとめている。この綴じ込み式のガイド地図を企画したのは、木暮自身に違いない。なんとすれば、劔岳周辺について木暮以上の精通者は、ほかには誰もいないからである。ただ残念なことに、第二輯以後は発刊されずに終わっている。

大正5年10月発行の第十一年第一号は、おそらく最初から木暮が内容を考え、編集に当たったものと思われる。これまでの『山岳』には大きく取り上げられたことのない、そして木暮にとって得意分野の秩父特集号となった。南日重治の「金峰山から雁坂峠まで」、木暮の「奥秩父の山旅日記」など4編の紀行と、史料として「武蔵通志」を本欄に載せ、雑録欄にも木暮と南日がそれぞれ2編を書いている。秩父の山々は、このころになると良く登られるようになって

たから、この「秩父號」はタイムリーな企画となったのだが、本誌編集集中に奥秩父・破風山で帝大生らの遭難が起こってしまった。日本山岳会はこの遭難を重大視し、「秩父號」と書かれた中扉の裏に「…私達一同は此『秩父號』一冊を秩父の天にかける方々の御霊に捧げまつりたいと存じます、日本山岳会 会員一同」という文を載せている。

第十一年第二号はその年の12月に発行されたが、同年7月に起きた破風山における帝大生らの遭難を雑録欄で詳しく報じている。すなわち、当事者・中村孝三による「遭難記」、木暮による「秩父遭難に就いて」、一高旅行部員の甲藤新による「秩父遭難の原因」を載せた。登山中に起きた遭難について、これだけ詳しい情報や原因分析が行なわれたのは、初めてのことであろう。そして、日本山岳会はこの遭難を深刻に受け止め、戒めとするため、後に一冊の冊子を制作した。それが『登山の注意』（大正6年7月刊）である。副題には「初登山者の心得」とあり、表紙の囲みに「青年子弟の為、登山の注意と準備を教へ、災害を未然に防ぎ、登山の気風の健全なる発達を得れば、本書を頒布したる徴意は足りるのである」と書かれた。

第二号の巻末には、高野が書いたと思われる「編輯係より」が載っている。「漸く本号を御送附致す事になりました

た。前号を発行致しましてより約二ヶ月かかなりの努力を致しました」とある。そして、前号「秩父號」を含めて、原稿の集まりが悪くなっていることを推察させる次の言葉が続く。「幸いにして会員諸君の御援助に由りまして内容外観共に茲に一冊とする事が出来ました。…山の幸多かるべき六年を次号を以って迎へんと致します」。この第二号には連載中であつた辻村伊助の「スウイス日記」の完結篇が載り、冠松次郎と沼井鐵太郎という新しい執筆者の発掘があり、加えて大正2年の南日と木暮の槍ヶ岳から日本海への縦走を南日が書き、同じ二人による大正4年の毛勝山から劔岳、黒部川を通つて赤牛岳の縦走を、第十年第二号の「前編」に続けて木暮が書いており、さらに武田が「日光遊行雑記」をまとめ、本欄の原稿はなんとか集まつた。

木暮は雑録欄にも「浅間山より男体山まで」を書き、東京から見える山の山座同定の決着をつけた。そして、前記の破風山の遭難記事が続く。登山の気風が盛んになってこの時期に、地方や各学校に山岳会が次々に誕生したが、『山岳』はこれら各山岳会からの情報連絡を雑録欄に「各地の山岳会彙報」として載せるようにした。一つは登山界発展のために、今一つは『山岳』の記事として、当分の間掲載されることになった。本欄に執筆した沼井は二高山岳会員

であるし、創部間もない慶応義塾山岳会は、横有恒が報告を寄せている。その末尾に、「いつぞや、『山岳』の雑報欄に、夏期登山の報告を出してはとのお詞のあった事を覚えてゐますが、私の怠慢から遂々、それも申し上げずに済んでしまったことは、如何にも慙愧に堪えませぬ」とあり、木暮は若い執筆者の掘り起こしも積極的にこなつていたことが分かる。

次の第十一年第三号は、高野の跋文が書かれた9ヶ月後の大正6年9月に発行された。本欄の紀行の内3編は、高生の日高信六郎と伴野清と守島伍郎によるもので、登山者も世代交代を遂げつつあることが分かる。さらに北海道在住の小泉秀雄が「大雪山登山記」を寄せている。従来の紀行文とは異なり、植生や地質、地形などの自然景観を詳細に記述した科学的調査報告のようである。木暮はおそらくこの報文が気に入り、小泉にさらなる学術的報告を依頼した。それが次の十二年の第二号、三号合併号となる。

この号の本欄と雑録欄には武田の寄稿が多い。雑報欄で目に付くのは、この時代が正にスキーの揺籃期であることを示す「信越線附近スキー練習地の主なるものに就いて」が載っており、これからスキーを始めたい者にとつて有益な情報である。信越沿線のスキー練習地は田口、関山、野

尻、高田の4ヶ所あり、高田がその源である。レルヒより高田連隊に伝えられたのは、スキー術とともにスキー板やスキー用の靴などで、その製造販売所が高田にあり、スキーを学ぼうとする者は高田へ行かねばならない。しかし、スキー練習地としては赤倉温泉や関温泉が良く、スキー倶楽部もできていて指導者がおり、貸しスキーも揃っている。関温泉では「冬期の休暇に学習院学生十数名が同地の笹屋に投宿して盛んなる練習を為し春期休暇にも再来するとの話を聞いた」とある。

会報欄には、先の『登山の注意』に関する説明があり、「登山趣味の普及は、登山の惨害を多からしめたり、本会は將に登山期の至らんとするに当り、『登山の注意』なる一編を著して、広く世に頒ちたり。」とあり、文部省が頒布の労を取つて各中学校（男女師範学校、中学校、高等女学校、甲乙種程度、実業学校）に配布した。『登山の注意』の目次は次のようである。「登山の危険に就いて」、「登山は何故に危険なる乎 一、気象上の激変に基く危険、二、山其者に固有なる危険」、「如何にして危険を避く可き乎」、「登山準備」、「注意事項」、「末記」となっている。登山趣味がよいよ若年層に及び、未熟な登山者の遭難を少しでも減らしたいという、社会的な自覚が顕著に現われたものであろ

う。

この年に発行された『山岳』は、結局この第十一年第三号だけであつたから、この号にもやはり高野による「雑誌の遅るゝ言ひわけ」が載っている。やや開き直つた感じで、「毎度の事ながら言ひわけも、此の様に度重つては申し悪くなる、前号に雑誌の遅るゝ御侘びをした所、御口言を頂きました、其れはほんとうの事で雑誌の発行などと云ふ事は、事務的にやればよいのです、が然しさう行かぬ所に真面目さがあるわけで、紙に活字で字が刷つてあればいいと云ふ程度の考へなれば、実は此んなに悩みも致しません：後世『山岳』が引用書目として書かれる位の充実したものとしたいのであります：『山岳』は売る為の雑誌ではありません、紙屑屋の手に渡る様な雑誌は作りたくないのです、此意味で努力をして居ります、然し此れは遅れる理由にはなりません、兎角其うなると遅れ勝ちです：終に臨んで孤軍奮闘して居ります我々の為めに何分のご援助を希ます、それは各方面からの報道原稿写真等を賜りたい事で御座います。一言御侘び傍々御願申上ます。(編輯係)」とある。

次の第十二号の2冊と第十三年号の3冊には、前述のようにある種のキャンペーンを示す、次のような文字の書

かれた扉が付いている。第十二年第一号には、「新年の辞」が載り、その末尾に「本会ハ総テノ方面ニ於テ山岳界ノ為メ努力ト奮闘ヲ惜ムモノニ非ズ、幸ニシテ会員及ビ同趣味者ノ援助ト鞭撻ヲ得テ、其向上発展ヲ期シツツアリ」と記されている。次の号には、「登山道徳ノ必要」が載り、次の第十三年第一号には「登山道徳」という四字句にまとめた登山道徳大綱が載つた。これら一連の扉を用いたキャンペーンは、高頭の意向も強く働いたように見える。「登山道徳」の句は、高頭宛に福地信也氏から届いた私信によるものであるからである。ちなみに第二号には「登山ノ注意」、第三号には「登山案内者ノ改善」が載るが、一般的な内容で、それ以前のものとは少し趣が異なるようである。

この時代に急激に増加した登山者に対応して、上述のような覚悟を持つて登山の啓蒙発展に努めた山岳会の幹事たちは、かなり忙しくなつた。全国各地で開かれる「山岳講演会」の講師として呼ばれ、手分けして回つてることが雑報欄や会報欄などに残されている。大正4年2月には高野、辻村が奈良と京都へ行き、同じ月に辻村、梅沢は高野旅行部へ行つてゐる。辻村は自ら撮影したアルプスの山々の幻燈映像を披露して、毎回好評を博した。当然ながら、幹事は会の行事である年に一度の大会や、有志晚餐会の準

備も行なわなければならぬ。

大正5年5月は木暮が一高で「劔岳登山に就いて」を講演、慶応でも「木暮さんの劔岳の幻燈講演は、夏期の劔岳登山隊の人員を急増した」とある。大正6年8月には秋田県小坂鉦山スキー倶楽部で、高野、武田、梅沢、近藤が講演、10月には学習院で「木暮、梅沢幹事講演をなし、高野幹事幻燈機器を携帯したり」。さらに同月「外人会員交歓会」に高野、武田、梅沢、近藤、辻村が出席して講演を行った。大正7年5月には名古屋で第3回山岳講演会が開かれ、高野と近藤が出席、高野は「登山の危険と其目の講演を行なっている。同月、木暮も「登山の危険と其注意」という題目で慶応山岳会で講演した。6月には小田原中学校で山岳幻燈講演会、辻村、近藤、高野が出席。同月行なわれた慶応山岳会での講演には梅沢が出席。さらに7月、東京基督教青年会での講演には近藤、高野、辻村、梅沢が出席、高野はここで「登山の注意」を講じた。

この年大正7年には、山岳会の行事として「小集会」が新たに開設された。第十二年第二、三号の会報欄に、「本会員相互の集会は、年一回の大会に過ぎず、此れとても会者各自の交歓に値する所少く、遺憾とする所多きを以て、本会は茲に左記の如く年四回小集会を開催する事とせり」。

「小集会は本会幹事順次司会者として、事務を処理する事とせり」。ここでまた幹事の事は増えたが、小集会で話された内容の多くが、後に『山岳』の原稿となって掲載されることになるので、『山岳』編集者にとっては都合が良いことになる。この小集会の主旨は有志晚餐会などとは大いに異なり、「会員各自の研究、意見を交換し、山岳の研究に資したく、多数会員の来会を希望す、何等の会費も要さず、又何等食事等の用意もなし、要するに山を談じ山を語るが本意たり」とある。

第十二年第一号の時点で、発行の遅れは1年のずれを生じていた。しかし、もはやどこにも遅れについての釈明はない。木暮は「登山の注意」を受ける形でここでも「登山者の徳義」を記しているが、これは一般登山者のモラルの低さに言及したものである。「近來漸く流行し来りたる登山熱は、独り都会のみに止まらず、弘く各地に亘りて伝播し、最近殆んど其高潮に達せんとするの勢いあり」、「流行に伴ふ必然的弊害が早くも登山者の心裡に蠹の如く侵入して、其害毒を違うせんとするを見、悵然として大息し、登山趣味普及の前途に対して不安の情を禁ずる能はず」とある。また、同号には上條嘉門次の訃報が載っており、辻村伊助が追悼文を寄せて、「曾つて醜悪な人間の手にかかっ

て、その美しい森林を失った神河内は、ガイドとして私達が尊敬しつつある、嘉門治翁も失ってしまった」と書いた。嘉門次は慶応の学生たちとの槍・穂高縦走の後体調を壊し、床に臥したが10月26日に亡くなった。ウェストンとの穂高登山以来、日本山岳会員とは深い縁があり、時代が容赦なく移っていったことを思わざるを得ない。

雑録欄の「各山岳会彙報」には慶応山岳会の報告が詳しく載っている。「私共の会の大正六年最初の事業は田口で行ひましたスキーの練習で御座います。梅沢先生初め多くの方のご指導を得て多少はものになった様ですが勿論未だ未だ上手の域にはいかない様に推察します。次は五月廿六日に塾の大講堂で開催致しました第三大会で御座います。木暮先生の「登山の危険と其注意」を劈頭に、河口慧海師のヒマラヤ跋渉談、鹿子木先生の「山岳と人格」などの講演と、武田先生の高山植物の幻燈講演がありました。聴衆も比較的多く私共の会としては全く成功で御座いました」とある。登山は10隊が出ており、嘉門次を伴った槍・穂高の縦走、劔岳では平蔵谷を登り、長次郎谷を下った隊と、別山尾根の隊、さらに別山尾根から小窓まで完全縦走を果たした部員もあり、学生登山の質はこの1年で一気に高まってきていた。

一方で大衆登山もますます盛んになり、白馬岳登山者の数は千余名に達した。「日本アルプス登山者は年々殖えて本年の如きは四ツ屋口、大町口、中房口、嶋々口とも何れ劣らぬ賑ひなりしが就中、北部の白馬嶽は信濃鉄道、自動車、林道などの便が登山口まであるを以って同山に登る者頗る多く、昨年は五百名位なりしが、本年は未だ閉山期にもあらざるに既に約千余名の多きに達し」とあり、登山を取り巻く状況は、年を追うごとに大きく変わってきたことが分かる。

第十二年第二号、三号は、前述のように小泉秀雄による「北海道中央高地の地学的研究（豫報）附 北海道の地體構造概論」（二十万分の一「北海道中央高地地方地形詳図」付き）という一論考に会報欄を加え、全冊をこれにあてた。巻頭に木暮は、次のようにその理由を説明している。「従来北海道の山岳にして、本誌上に記録を有するもの、其の数極めて乏しく、遺憾少なからざりしが、幸いに此篇によりて其缺を補ふを得たり。公職の余暇に成れる個人の事業としては、其労や誠に敬服に値す可く、北海道の大山岳は概ね網羅し尽して、残る所は其一部に過ぎざる也。吾人本篇によりて北海道山岳登攀の好指針を得たるを喜び、読者と共に著者に対して敬意を表するに吝ならざる也。」と最大

級の賛辞を贈っている。この原稿の校正は木暮一人で行なったようで、文章の不明や前後の相違など「止むを得ず独断を以て修正加削した」とあり、「若しこれが為に著者の意に悖るが如きことあらんか、これ予の責任なり」とした。

ここで改めて表紙から『山岳』の変化を確認すると、第十二号と改めて表紙から『山岳』の移行期に相当するらしく、表紙以外は装飾的な部分は何もなくなっている。第十二号の2冊の表紙は小島烏水の趣味、高野鷹蔵のこだわりによる芸術性のあるものである。そして、次の第十三号との落差は大きいが、おそらく第十二号までは、あらかじめ高野が中村と茨木の二人に表紙製作を依頼していたのであろう。そして、第十三号の分の表紙のことは、この時点ではまだ誰も考えていなかったのかもしれない。

第十三号第一号からは、それ以前の表紙とは一線を画した特徴的な表紙に変わった。というよりも、特徴がないという方がより正確である。そろそろ、表紙を含めた雑誌作りにこだわり抜くことも限界が来ていたのかもしれない。少なくとも表紙には経費を掛けないというやり方を、武田も梅沢も木暮も、そして高野も選んだわけである。第一期の表紙との落差は非常に大きく、『山岳』は性格までも変えたのかとさえ思えるような違いである。とはいえ、新しい

表紙は一般の同人雑誌の表紙並みのものであるばかりでなく、範と仰ぐ『The Alpine Journal』の表紙を見てもなんの飾りもない一枚表紙であるから、むしろ今までの表紙の方が特殊であったとも言えそうである。

第十二号第一号の雑録欄の「机上談山」を見ると、「近頃『山岳』が面白く無くなったといふ評判を聞く」と書いていて、「我々は注意と熟慮とをもって、評が正当ならば編輯者に計つて雑誌の面目を一新し、然らずば可なりと信ずる『山岳』の内容の取捨に関して弁明したいと思ふ」とある。発刊の遅ればかりでなく、内容に関しても登山者層が厚くなった分、読者の期待に応えられていない点が出てきたようである。それでは、どのように『山岳』を変えてゆくべきかを、高野を含む編輯者たちが大いに議論を戦わせたに違いない。上記の記事にまた次のようにも書かれている。「所で、日本に山の数は少し、その少い山も大抵登られてしまったし、と云つて同じ記事ばかりも載せられず、さればと申して外国へも出むけなないとすると、余程考へて貰はねばなるまい。先づ仕方がないから部分的に部門的に山を研究するより他に途はあるまい。」

第十三号第一号は、本来出るべき年内（大正7年）にぎりぎり間に合った。これは第十二号の第二号と第三号を合

併号とすることで余裕が生み出され、急いで第十三年の第一号がまとめられたからであろう。当然ながら、表紙に手間暇をかけている時間はもはやなかっただろう。必然的に単純な表紙に行き着いたのだろう。前述のように、第十三年号の表紙には線状の模様が付けられており、号ごとにその線の色を変えてある。これが素っ気ない表紙と、それ以前の凝った表紙との繋がりを示す名残であろうか。この模様は第十五号まで続く。

第十三年号にはもう一つ新しい企画があった。それは巻末に外国文欄を設けたことである。会報欄には、「外国文欄の創設」とあり、「本邦山岳を海外に紹介する点よりしても亦外人会員の為めにも不便少なからざりしが、今号より外国文欄を創設して時々外国文の記事のみを巻末に附録として上梓する事とせり」とある。裏表紙にはSANGAKUと英文表記が付けられるようにもなった。ちなみにこの号の校正者は、高野と梅沢である。

第十三年第二号は大正8年4月の発行で、校正者は木暮と高野となっているが、発行時には高野の体調は良くなかったのではないかと思われる。しかし、本欄には幹事辻村伊助の大正3年のスコットランド紀行「ハイランド」全文が載せられており、原稿集めの苦労は少なかつたかと思

われる。また、この号から会報欄に「会務報告」が載るようになり、幹事会で決定される事項が読めるようになった。巻末には「本会規則抜粋」が載っているが、ここではまだ「本会は第二条の主旨に基き毎年三回機関雑誌『山岳』を発行す」となっている。そして、改めて幹事のリストが掲げられたが、これは第1期の体制そのままである。

城数馬、(編輯)木暮理太郎、小島久太、

(図書、Foreign secretary)近藤茂吉、

(編輯)中村清太郎、三枝守博、(会計)高野鷹蔵、

(庶務)高頭仁兵衛、(編輯)武田久吉、辻本満丸、

(記録)辻村伊助、(編輯)梅沢親光、山川黙

発刊の遅れとずれ込みは山岳会の運営にとって大問題であるが、編集者に木暮を得たことで『山岳』については体制ができたと言えるだろう。ところが今度は、会の事務方、大番頭としてほとんど全部の会務を引き受けていた高野が病気で倒れてしまうのである。「大正八年初から病魔の犯す処となり、秋に入ってから医師に執務を禁じられるにいたった」(第十九年第三号・梅沢親光君の訃)とあり、高野はこの病によって永年携わった会務から離れざるを得なく

なった。小島烏水の渡米離脱に続いて、この高野の会務離脱は山岳会の屋台骨を大きく揺るがした。しかし、その一方登山の姿も以前とは大きく変わりつつあり、若い登山者たちによる登山がその中心を占めるようになって、日本山岳会もその形を変えてゆく時期に至ったと言えるのかも知れない。

この緊急事態を受け、会の事務所は横浜の高野宅から急遽、武田久吉宅に移され、事務作業が麹町区富士見町で行なわれるようになった。高野が抜けてしまった後、残った幹事たちはむしろ積極的に会運営に当たっている。特に武田と梅沢は、発起人としての自覚を持ってこの混乱期を懸命の努力で乗り切ろうとした。武田は庶務のほかに『山岳』の編集、執筆でも中心的な役割を果たした。梅沢は会費と会員管理の合理化を行なった。「梅沢君はこの時に方って、その天稟を発揮し、日夜執務に執掌され、驚く可き短時日内に、会費の改算を初め、基本金の整理等重要な事件を整理し、会員章の変更を断行する等寸暇もなく活動された。そして会務に一の簡明なシステムを設けて、何人にも容易に会務を執り得る様に制定された」(第十九年第三号・梅沢親光君の訃)。

第十三年第三号は大正8年10月の発行で、そのときに高

野にはドクター・ストップがかかっていた。巻頭には大文字で1ページを使った「本会事務所の移転」の通知があり、「大正八年十月十五日より本会事務所を左記に変更す」として武田の住所が指定してある。また、この号の会報欄には6月に行なった規則改正が載り、『山岳』の発行については、前述の「年三回」を改め、『山岳』ヲ発行ス」となっている。さらに特別会員の制度を廃し、会費と入会金を値上げした。新しく武田の意匠による会員章を作り、従来の会員章と引き換えることにした。特別会員章も廃止され、会員章は一本化された。また、会費の納入計算方法を改め、年度制として整理した。この部分は前記のとおり、梅沢が一人で行なった。

本欄の内容を見てみると、この第三号からはっきりと日本アルプス登山から脱したことが見て取れる。これは木暮の日本の山を広く扱うという姿勢と、武田の近郊の山の探索というテーマが重なったものであろう。本欄には、辻本満丸「信州岩菅山」、八代準「九州の山々」、戸沢英一、藤島敏男「丹沢山塊」、武田久吉「雁ヶ腹摺考」に加えて、雑録欄にも武田久吉の「北相の一角」が載っている。木暮は本号では、雑報や会報などの整理・執筆を行なったものが見られる。

武田はこのころの回想の中で、特に『山岳』について次のように書いている。「大正八年十月、日本山岳会の事務所が突然私の家に移り、遅刊に遅刊を重ねた『山岳』の発兌を取り戻さうと、全力をそれに傾倒した頃、相談相手は手近な所に住んでいた梅沢君と、本郷の木暮君とであった。梅沢君は専ら会計の方をやり、木暮君を編輯主任といふことにし、私は庶務を掌った。然し雑誌の発行が会の唯一の事業と言ってもよい程な当時としては、庶務だからといってその方の仕事のみ携はって居ただけは致し方がないので、編輯の仕事も半分以上は手伝はなくてはならない。そして原稿が集まらなければ、自然に集まるのに依存し許りも居られないので、自分で筆を執る必要に迫られる。そんな訳で、『山岳』第十四年第一号の如きは、雑録と雑報と会報の原稿五十余頁は、私一人で拵へ上げたのだし、第二号の雑録も半分は書いた程で、第一号が二月、第二号が四月、第三号が七月、又第十五年の一号が続いて八月、二号が十一月、それ迄一年にやっと二号位しか刊行できなかつたのに較べれば、立て続けと謂っても良い程の速さで発行することが出来た。その蔭に、木暮君の努力も亦少なくなかつたのであった」(第四十二年第一号)。

\*

大正9年2月発行の第十四年第一号のページを開くと、以前にはなかつた野線があり、本文はその中に納まるデザインとなつてゐる。大きな印象の違いである。同号の会務報告の内、大正8年10月16日に武田宅の新事務所が開かれた幹事会で、『山岳』第十四年第一号分の原稿を整理し、且雑誌印刷上の体裁及用紙変更を議定す」とあり、このときに変更が決められたことが分かる。出席の幹事は、木暮、中村、武田、梅沢である。判型は異なるが、創刊号から第三年号までの9冊がこのデザインを用いていた。用紙もざらついたものから滑らかなものに変えられていて、厚みは薄くなる。同年11月26日に開かれた評議員会で決定された「幹事改選に就いて」も載っており、選挙の結果次の7名が新幹事となつた。

(編輯)木暮理太郎、(編輯)中村清太郎、(図書)高野鷹蔵、  
(庶務)高頭仁兵衛、(庶務)武田久吉、(編輯)田部重治、  
(記録兼会計)梅沢親光

『山岳』編集は木暮と木暮に近い中村と田部の担当となり、高野は第一線から引いた。この時点で『山岳』の編集ばかりでなく出版に関しても重い責任が木暮にかかつてき

だが、前記のように武田が全面協力をして、遅れを取り戻して第十五号第二号まで手際よく発行した。一方、高野の体調はどうかというと、幹事会への出席で見ると、翌大正9年2月の幹事会には出席しているし、8月の幹事会にも名がある。9月の評議員会は委任しているが、幹事の役割分担では図書係となっている。それ以後も高野の出席率は下がっていないので、体調はほとんど回復したようである。ただし、登山からは次第に遠ざかり、代ってカナリアの飼育に懲り出した。後にその権威となって、カナリアに関する専門書を出版するようになる。

また、同号には「事務所の移転」に関する連絡が改めて載っており、事務処理への理解を次のように求めている。「本会は会員全般の団体にして、幹事が私利を計らんが為に経営するものに非ず、却て時間、労力、費用を提供し、劇務の傍ら無報酬にて我が山岳界の為に努力するものなれば、会員諸君は充分此点を了解されて、徒に幹事の手数を増加し（例へば会費滞納、無通知移転、又は無意味なる照会の如き）為に会務の渋滞を招き、却て一般会員の不利を来すが如きことなからしめんことを切望す」と。

そして、巻末には『山岳』の発行に関して、「会員各位に告ぐに」が載っている。「本誌の発行は、大正三年十月以後、

漸次に遅れて年度と伴はず、斯の如きは其の間已むを得ざりし事情の存するもの多かりしに因るも、顧て忸怩たらざるを得ず、今や会務の刷新と共に努めて此不體裁を除去せしむことを期せり、幸に諒恕を乞ふ。本誌は続て刊行す可き第二、第三號と共に大正八年度のものに係るを以て、以下事情の許す限り速に発行を継続し、以て大正九年度に及ぼさんとす、しかも原稿の多少は本誌発行の遅速に大關係あるが故に此際会員各位は勉めて原稿を寄せられむことを切望す。」おそらくこの2つの文は武田が草したもので、高野のやり方とは大分違っているように見える。

武田の自宅が事務所であった時代は、わずかに3年間であった。大正9年に、武田が北海道大学水産学科の植物学講師として札幌へ赴任してしまうからである。赴任後の1年間はまた武田宅を事務所として使い、事務員が雇われたが、その事務員が退職したため問題は再び再現され、以後、事務所は転々と所を変えることになる。

大正10年9月に、高頭の懇願により志村烏嶺に事務所を引き受けてもらうことになった。志村は幹事ではないため規則を一部改訂して、書記として委嘱した（第十六号第二号・会報欄）。東京市外下目黒にある志村宅に事務所が移ることとなったが、交通の不便と手不足のため長くは続か

なかった。そこで大正11年4月には、本郷区駒込にある高頭の妹宅に事務所は移された。高頭の使用人に事務を手伝わせるなどしたが、これも1年間続かずに終わる。万策尽きて翌12年2月からは、高頭が普通事務を新潟県三島郡深才村深沢の隠居所で取り扱うということとなり、会計事務の方は鳥山悌成が行なうことに決まった。鳥山は発起人には加わらなかったものの、武田、梅沢、河田とは同級で「日本博物学同志会」のメンバーであった。この落ち着きのない混沌とした経緯を、高頭が第十七年第一号（大正12年8月）の会報欄の「事務所の移轉に就いて」に詳しく書いている。

「今回事務所を越後へ移すことに致しました。会の事情を御承知になりません会員諸彦は、さぞかし御不審に思召すこととありませうし、またそれが当然の事と存じますから、差支のありません程度の内容を赤裸々に申し上げます」とある。高頭自身の事情により東京で事務を執ることができなくなり、名案も浮かばないことから、東京在住の会員に会務を預けることも考えた。しかし「旧幹部諸氏殊に発起人の方に私が事務所を去る位ならば寧ろ解散しては如何など、云ふ極端な説まで出まするので、兎に角やれるまでやって見まする意で及ばずながら事務所を御引き受け

致しましたのであります。」そして、新潟の高頭宅を山岳会の事務所とする変則的な状態が、昭和2年9月に鳥山の東京芝区高輪の自宅に事務所が移されるまでの4年半続いた。高頭自身は「一年の過半は東京に住し、且必要の際は電報に応じて何時にても出京し得るが如き自由」があったようである（第十六年第三号、会報欄）。

これらの問題を幹事会や評議員会で幾度も諮って、「旧幹事が東京に健在する中に新しい幹事を続々と御任務を願って、会の内容や執務のことを十二分に飲込んで戴かなくては、会の発達を見ることが到底できないと云ふことになりました」。そこで7名の新幹事を選出したが、会務の引継ぎもあり2名を留任することとし、発起人を代表して高頭が、旧幹事を代表して木暮が幹事として責任を果たすことになった。このとき（大正12年2月）の幹事、評議員の顔ぶれと分担は次のとおりで、大きく陣容が変わって若返っているし、木暮を慕う人たちが選ばれている。

幹事…（編輯）藤島敏男、（編輯）冠松次郎、

（編輯）木暮理太郎、（外交）榎有恒、

（記録）六鶴保、（図書）高田達也、

（庶務）高頭仁兵衛、（会計）鳥山悌成、

(編輯)辻村伊助

評議員・城数馬(在朝鮮)、小島久太(在桑港)、

武田久吉、梅沢親光、高野鷹蔵、近藤茂吉、

中村清太郎、三枝守博、辻本満丸、田部重治、

山川黙

この間の『山岳』の発行状況を改めて見てみると、大正10年には第十五号第三号が4月に、第十六号第一号が7月、第二号が12月に発行されている。しかし、大正11年になると、これまで1年遅れではあってもなんとか発行されていたものが、1冊も発行されないという事態となった。この異常な状態はちょうど事務所が定まらなくなった時期と重なり、山岳会存続の危機というようなこともあったかもしれない。とはいえ、『山岳』発行以外の会務、すなわち大会、小集会、有志懇談会、そして幹事会は例年のごとく行なわれている。

もう一つこの時期には登山界に大きな変化が起こっていたが、混乱の最中にあった山岳会は、その動きを充分には吸収できなかったようである。なにしろ発表媒体である『山岳』が全く機能しなかったからである。具体的には、日高信六郎のモンブラン登頂報告が第十六号第二号の「会員

通信」に間に合ったのに対し、その1ヶ月後の榎有恒によるアイガー東山稜初登攀という、登山史上より重大な活動を載せるべき『山岳』は発刊されないまま、結果的に無視される形になってしまったのである。この登攀に対する山岳会の反応がどうであったのかは何も分からないが、半年後の大正11年2月に開かれた第17回小集会の折に、梅沢幹事が「序に登山界の傾向、山岳研究の新方向、国立公園問題、気象上の事項、会員榎氏のアイガー新登路開拓、エヴェレスト探検隊の事業等に就いて報告やら感想やらを述べられた」という記事があるばかりである。

榎の「アイガー登山講演会」は三田登高会と山岳部との共催で、大正11年1月21日に慶応大学大講堂で開催された。「当日は入口に、Wielandのユングフラウ、メンヒ、アイガーの大山岳画を飾り、控室には榎氏の登山用具、スキー用具一切と山岳写真絵画地図、山岳模型其の他を展覧した。会場はすでに開会前に於いてさえ充滿する程の聴衆であった」。紹介を兼ねて鹿子木教授は、「私が榎君の講演のはしがきとして、緒論として、約三十分程此処に御話致しますことは、何処迄もその講演の緒論であり、講演の手引きであるに過ぎないものであります」と前置きして、「山岳の霊」について語った。「これに続いて榎氏は昨年九月十日に於

けるアイガーのオストグラートよりの初登攀に就いて、約二時間に亘り自ら撮影の幻燈画を以って説明して、興味と緊張に充ちた講演をなされた。…全く吾々はその話のうちに引き込まれてゐた。幻燈は話につゞいて映る。そのグラートの鋭く削げた物凄い姿、三千米突の高距に於いてのたゞ岩の間隙の Bivak、ジャンダルムから上の問題の二百米突の登攀。…」と記したのは庶務係の大島亮吉である。(『登高行』第四年)

### 木暮理太郎による『山岳』編集

高野が『山岳』編集の第一線から退いた後、巻末に記されていた校正者の名がなくなる。それは第十三年第三号から第二十四年第三号であるが、再び校正者の名が記される第二十五年第一号と第二号には木暮の名が載っている。この間の『山岳』を木暮が中心となって編集・出版したことは確かと思われる。記名がないのは、名を出すことを嫌った木暮らしいところである。

しかし、この場合にもすべてを木暮自身が受け持ったのではなく、前述のように、第十四年第一号から第十五年第二号の5冊については武田が大いに貢献した。武田の合理的な考え方を取り入れたと思われるが、第十四年号からは

写真や図版を減らし、本欄を3〜4篇に抑えてある。これによってページも薄くなり、原稿の不足に悩まされることもなくなつたかもしれない。さらに雑録や雑報の多くを自分たちで書いて埋めていけば、『山岳』の編集はルーティン・ワークに近づき、集中して作業を行なうことができ、遅れはすぐにも取り返せそうである。

木暮の編集のやり方については、「木暮君は何分綿密な性格なので、原稿が来てもザツと目を通して頁数を計算する程度では気が済まず、地図を展べ、それに照して旅程を詳しく調べて、左岸右岸の誤記を始め、訂正を要する箇所は克明に筆を入れたのであった。それが段々油が乗って来て、終にはそのためにひどく手間取れるので、『山岳』が再度の遅刊を来たすやうになつたのも、亦止むを得ないことであつた。その代り、木暮君の校訂を経てから印刷に付された文章は、大概は立派なものになつて、世の中に送り出されることであつた。」と武田は第四十三年第一号の木暮追悼文の中で回想している。

第十四年号以降の本欄を見ると、大正7年に始められた小集会の講演内容が、『山岳』の記事として生かされて原稿になつていくものが少なくないことが分かる。この方法も原稿集めをよりやりやすくしたのである。大正9年7月の

第8回小集会「丹沢山縦走談」（松本善二）は、第十四年第三号の会報に報告があるが、手際良く同じ号の雑録欄にも「焼山より丹沢山塊縦走」が載っている。本欄に載ったものとしては、大正8年9月の第5回小集会「多摩川相模川の分水山脈」（武田久吉）が、大正9年8月刊の第十五年第一号に載った。同様に年に一度の大会の講演が『山岳』の原稿となることは以前にもあったが、大正7年5月の第11回大会の「印度カシミヤ山地の旅」（石崎光瑤）は、第十五年第三号（10年4月）、大正9年5月の第13回大会「高層の気象現象」藤原咲平は、第十四年第三号に載っている。

このころになると、登山の傾向の変化を反映し『山岳』に載る登山の内容にも変化が見られる。年々登山は盛んになり、対象の山が地域的に広がるとともに、登山者層も広がって、学生登山や休日を利用して近郊の山を目指す同好者の会もできた。一方で日本山岳会のかつての中心メンバーは登山から遠ざかり、木暮と武田の2人の活躍だけが目立っている。武田の登山は地域的に広いが、植物探索を兼ねた登山が多く、丹沢や相武国境の山など東京近郊の山の開拓にも熱心である。武田によれば、「大正十年十二月に、『東京日々新聞』に数回にわたって記事を載せ、平凡な山でも、積雪期を選べば、存外面白い登山ができることを

紹介した。そんなことから、いわゆる低山趣味がかなり広く行われ始めたように思う。また『山岳』誌上に掲げた拙文、北相の一角<sup>々</sup>とか、多摩川相模川の分水山脈<sup>々</sup>などが、低山探勝に興味を持った人々の間には、熱心に読まれた」とある。（『学鑑』58-1）。

木暮は入会以来、ずっと日本の登山界をリードするような登山を続けていた。大正8年夏に、中村清太郎とともに宇治長次郎を伴い、黒部川・下ノ廊下を廻行した。この記録を第十四年第一号の「会員通信」に載せ、第5回的小集でも話していて、「連日天候思はしからず、道程また予期の如く困難にして、予定の半を進行したるに過ぎざるも、黒部谷の如何なるものかは大体を知り得たるやうに感じ申候。」と書いている。そして、この後の登山は舞台を未開の上越地方に移すとともに、木暮の家にはしばしば話を聞きにやって来た若者たちと行を共にした。同年11月の皇海山と翌9年7月の利根川源流域の登山に同行した藤島敏男は、「若さにはやる私を制しながら、重い荷も不自由な野営も意に介されなかったのを思出すが、いまその頃の木暮さんの年齢に自分が達してみると、故人の体力意力の非凡であつたことを沁々と感ずる。」とある。このときの木暮の年齢は47歳である。

その後、木暮も登山の第一線からは引いたようになり、武田との近郊の山歩きや、霧の旅会のメンバーとの小さな山旅が増えている。武田は、「(大正十年)の三月早々、霧の旅会の有志と共に、栗坂峠から三頭まで縦走した時、木暮君が同行することとなり、それが機縁となって、霧の旅会と密接な関係が出来たやうである。…大正十一年には、数度に互って私は木暮君と旅行したが、松本君の加わったこともあり、又木暮君の義兄の野田九浦画伯の同行されたこともあった。…木暮君は自分の役所の人達と、白馬とか尾瀬とか、奥秩父方面に出かけたらしい。又宮様の御供で南アルプスへも入ったやうである。」とあり、好きな登山はまだやめられないという印象である。

武田はまた、木暮の登山について次のようにも書いている。「…若し十年も若かったら、多分スキーにも相当熱心になってゐたことかと思われる。元来ガッチリと出来た体躯の持主であつた上に、老年になつても筋肉のしなやかであつたことは驚く可きものがある。あの体のこと故、山スキーには相当な頑張を見せたに相違ない」と。

第十四年第一号から第十六年第二号の各号の本欄と雑録に載つた記録や情報は、前述のような時代の変化と木暮自身の登山の傾向が『山岳』の編集に反映していると思われ

る。すなわち、印度ヒマラヤやジャワや樺太など海外登山も含めた広がりのある登山対象、一高、二高旅行部出身の若い登山者たちによる上越や黒部での登山や遡行、スキー登山を含めた新しい登山の波、それに東京近郊の登山情報というように、この時代の登山傾向を網羅している。この中でスキー登山という、真新しく次元の異なる形式の登山を進めたのは、日本山岳会ではなく新興の学校山岳部である。

「この頃のスキーの盛んな地域は、北大を中心とした北海道が群を抜いて進歩していた。本州の雪国も次第に青年の間に行われるようになったが、まだ一般化の域には行つていなかった。」(横有恒『私の山旅』)とあり、各学校山岳部ではスキーをいち早く取り入れ、関や赤倉、そして五色でスキー合宿を行なつて、スキーを使った登山を試み始めていた。さらなるスキー修行を行なうために、内地から北大に進学する加納一郎や板倉勝宣のような人も現われた。学校山岳部の中では鹿子木員信指導の下、慶応山岳部が大きく進展していた。

『山岳』では第十四年第二号(大正9年4月刊)に、板倉勝宣の「春の上高地へ」が本欄に載っている。板倉が北大へ進学する前の大正8年3月にスキーを使って上高地に入

り、槍ヶ岳登攀を試みた記録であり、日本アルプスでの本格的なスキー登山の記録としては、最も早い記録である。続いて第十五号第三号（大正10年4月刊）の本欄には、六鹿一彦の樺太でのスキー登山の記録「冬の鈴谷山」と、加納一郎による「森林とスキーと冬の登山」が雑誌欄に載っている。この論考は北海道でのスキー登山の本質を語ったものである。大正10年4月は、北大スキー部の有志が日本で最初の市販の山岳雑誌『山とスキー』を発行する目的で「山とスキーの会」を結成した時期にあたる。その中心にいたのが加納と板倉であり、その先輩にあたるのが六鹿である。『山岳』はスキー登山の最先端の情報を、いち早く載せることができた。

続いて第十六号第二号（大正10年12月刊）の本欄には、六鹿一彦が「スキー登山術」を書いている。これは第一人者による本格的なスキー登山の手引きである。文末には次のような句がある。「スキー登山は真冬に行へ。其の時に始めて登山用具としてのスキーが価値を発揮するのである。スキーランナーであると同時にアルピニストである人がスキー登山を行へ。其の時に始めてスキーによる登山が安全に発達するのである」と。

慶応の横有恒が卒業後、アメリカ、イギリスを経由して

スイスのグリンデルワルトに到着したのは、大正8年12月のことである。それから2シーズンをアルプス登山の修行に費やし、大正10年9月9日から10日に未登攀の課題として残されていたアイガー東山稜の初登攀に成功した。この成功は、9月11日ベルン発のニュースとして9月13日の新聞に載った。東京朝日新聞の記者は、このニュースの裏取りのため木暮を訪ねている。「横巻といふ人は知らないが二三週間前に横有恒君から、アルプス中のユングフラウの一支脈であるグレッグ・スウェールホルを突破して下山した。旨の端書が到着した、これに依って見ると横巻といふのは横君の事ではあるまいかと思ふ」と載っている。スイスから船便で届くハガキはどのくらいの日数を要するのか、とにかく木暮にも横から消息を知らせる連絡は届いていたし、この報道によって日本中で横によるアイガー登山は有名になった。

横有恒によるアルプス登山、とりわけアイガー東山稜の初登攀は、学生登山者の間に大きな刺激を与えることとなり、日本の登山界に一大転換をもたらした。横が持ち帰ったアマハの登山靴、シェンクのピッケル、キスリングのリュックサックはやがて日本において模倣され、登山用具として定着する。輸入品としてアイスアックスやリュック

サックは販売されてはいたが、大正12年発行の大学山岳部報の巻末を見ると、登山靴、スキー靴、リュックサックを製造販売する店の広告が早くも載っている。槇がもたらした登山技術、ロープを用いる岩登り技術、ピッケル、鉈を打った登山靴、スキーを使う冬季登山技術は、学生の行なうべき登山の頂点として真剣なトレーニングの対象になった。さらに槇は、アルプスにおける登山精神についても新しい考え方を導入した。後に松方三郎は槇の役割を遣唐使に例えたが、槇なかりせば、日本の近代登山の発展は、少なくともこの時期には起こり得なかつた。

この精神と技術と用具とを用いて、新しい形式の登山を試みることができたのは、主として慶応山岳部の後輩たちと、その仲間（学習院の板倉勝宣、松方三郎、伊集院席一ら）であつた。この中で板倉は一步先んじていて、大正10年4月には再度の槍ヶ岳スキー登山を試み、その経験を仲間である慶応の部員たちに語っていることが『登高行』第三年の年報にあり、「北大スキー部員板倉勝宣君の槍ヶ岳スキー登山談あり、又雪中スキー登山に關し、有益なる談ありて得る所多かりき」と載っている。板倉は自らが発刊した『山とスキー』の創刊号（大正10年6月刊）に、この登山で得られた経験を詳細に記し、次に生かすべく「春の

槍から帰つて」と題して載せた。

大正11年3月には、前年の板倉の経験も踏まえて槇をリーダーとし、大島、伊集院、松方、佐藤久一朗らによる槍ヶ岳、三田幸夫をリーダーとする劔岳、それぞれの積雪期初登攀に成功した。さらに青木勝リーダーによる薬師岳も試みられた。この年7月には板倉が松方、伊集院とともに槍の北鎌尾根を登り、さらに8月には鹿子木、槇、板倉、伊集院、三田、大島らによつて穂高・涸沢で放射状の岩登りが行なわれている。これら一連の登山記録は、慶応山岳部の部報『登高行』第四年（大正12年7月刊）に掲載された。

前記のように第十六年第二号までは、新しい形式の登山を捉えられていたのに、登山史上に重要な登山の行なわれたこの2年の間に、『山岳』が発刊されなかつたために、日本山岳会は登山界の新しい動きから取り残されることにもなつてしまつた。一体いかなる理由から『山岳』が発行されなかつたのだろうか。『山岳』編集だけが会混迷の中で別扱いで済むはずはなかつたとしても、『山岳』編輯所は変わらず木暮宅に置かれており、1冊も発刊されなかつたのはなぜであろうか。編集、出版の責任を負つた木暮の苦悩は、大きかつたものと推察する。

日本山岳会としても、この新しい形式の登山に無関心であつたわけではなく、当の横有恒を新しい幹事の一人に加え、外交係という担当に着けている。この役割は外国人と連絡を取り、新しい登山情報を得ようというものであろうか。しかし、大正12年2月の評議員会のこの決定は、まだ実質的なものではなかった。それは横、三田、板倉による同年1月の立山・松尾峠の遭難がまだ癒えていない時期であり、何より横は治療中であつたからである。

板倉を失つた松尾峠の遭難は、始まつたばかりの日本の新しい登山形式をリードする者たちによる試みで、登山界全体に与えた衝撃は大きかつた。新聞紙上ではアイガー登攀の寵児が一転して遭難を起こすという落差から非難も起こつたが、横は毅然としてこの遭難の顛末を、板倉にゆかりの雑誌『山とスキー』に「板倉勝宣君の死」と題して書いた。『山とスキー』第26号（大正12年5月刊）は加納一郎が編集して、この横による報告と、六鹿、大島、中野、加納による追悼文を集めて「板倉追悼号」とした。この遭難についても『山岳』は、雑録欄も含めて全く触れることなく過ぎた。

大震災を挟んで1年以上後の第十七年第三号（大正13年5月刊）の雑録欄に、加納が「板倉勝宣君を想ふ」を寄せ

て、板倉の行なつてきた登山の意義を語っている。横は後に自らの著書『山行』（大正12年7月刊）を、「アイガー東山稜の初登攀」と「板倉勝宣君の死」を中心に置いて著した。奢ることもなく、極めて冷静に綴られた各章は、新しい形式の登山の精神を格調高く読者に伝えるとともに、登山の新時代を確実に開いていったものと思われる。

2年間のブランクを経てようやく大正12年5月に発刊された『山岳』第十六年第三号は、通常号とは異なる特別号である。表紙に行書で「奥上州」と書かれたこの号は、第十一年第一号「秩父號」と同様に木暮の得意分野を扱つたもので、全冊をそれにあてている。大正8年秋の皇海山紀行、それに続く藤島敏男らの谷川連峰の記録、低山派・高畑棟材による神流川紀行、そして、木暮得意の山岳誌を兼ねた利根川水源地の山など本欄8篇、雑録には武田が4篇、木暮が3篇を載せている。

久しぶりに発行されたことから、何か言い訳めいた文があるかと思えば、逆に居直つたような言葉が「大正十二年度会費の払込に就いて」に載っている。すなわち、「本会の会費は元来雑誌代に非ず、それとこれとは全然性質の異なるものにして、既に会員となりたる以上は、雑誌の発行と否とに拘らず、会費は必ず規定の通り払込むべきものなり

とす。しかるに……。「勿論『山岳』は本会の機関雑誌として発行するものなれども、元より営利を目的としたる刊物にあらず、主として会員各自の山岳に関する研究資料を蒐めて之を發表し、之を会員に頒布して更に其研究に資する目的のものなれば、本会は会員に代りて単に此等資料の蒐集編纂及之を活版に附するに際し校正其他の勞を執らしむる為に、編輯者を置きて其任に当たらしむるものなれば材料の集ると否とによりて雑誌発行の遲速に大關係ある可き道理也」とある。

そして、「然れども本会は既往に於て年に三回『山岳』を発行し來りたる慣例あるを以て、今遂に之を破るに忍びず、亦必ずしも之を破る必要に迫られたるにもあらねば、雑誌発行の遲延を來せる大原因と稱す可き原稿難を当面に控へたる幹事殊に編輯員の苦痛は少なからざるものあるも、顧て心に疼き所なしとせず、今や新幹事の就任と共に鋭意努力して、大正十一年度第十七年第一号以下事情の許す限りに速に発行を継続し、以て大正十二年度第十八年に及ばざんとす」「同好の士を勧誘して幸に寄稿の勞を惜まる、なくば、十冊に足らぬ『山岳』の如きは立所にして成らん也。切に望む」と締めくくっている。

右の文はおそらく木暮が草したものであろう。久しく發

刊されなかつた第十六年第三号はなんとか木暮自身がまて、大正10年度分を終らせた。だから、それに続く各号は新幹事が鋭意努力して滞りなきように發刊せよ、と言っているようにも読める。遲延の原因はもっぱら原稿の不足であり、会員の協力を得られなかったことを悔しがっている。しかし、原因はまだほかにもあるに違いないが、それは包み隠されているのだろうか。

この号の会員通信に載せられたものは、これまでとは違い、ほとんどすべてが積雪期登山の記録であることが注目される。竹内亮による登別温泉周辺のスキー登山と樽前山のスキー登山、沼井鐵太郎による赤倉温泉周辺のスキー登山情報も載っている。赤倉には、帝大スキー部練習場があるらしい。高田スキークラブ部員によって妙高裏山越えが試みられたとか、スキー講師の小林達也氏と慶応山岳会員によって、小谷温泉より乙見山峠越えが行なわれたとある。これは大島が『登高行』第二年（大正9年6月刊）に寄せている記録で、情報は古い。沼井は、「愚考するにスキーを用ふる事によりて登山の範圍は更に大に擴張せられたるものと存候。大抵の谷は雪に埋れて徒渉の苦もなく、況や、下りが只なる事は一山に登りて頂上着が随分おそくともよろしき便有之候、只困る事は野營と吹雪に候」と

あり、山岳会の若手も積雪期とスキー登山の意味に気づき始めたことが分かる。そして、短く田中薫が槍ヶ岳積雪期初登頂を伝えているが、この手紙だけではなんのことやら分からない。すなわち、「榎有恒氏等に相伴して二十六日より三十一日まで常念、槍方面を歩き廻り申候。幸の好晴にて案内簡単にて槍を極め申候」。スキー登山以外の寄稿は、木暮による川乗山で、同行は武田である。残りの一つは藤島の箱根の旅である。

この号の会報欄で注目すべきは、新入会者である。大正11年4月、幹事会での入会申込者詮衝で、野口末延、書上喜太郎、6月の詮衝で舟田三郎、9月の詮衝で山崎金次郎が新たに会員になった。片やアルピニズムを標榜する早稲田大学山岳部員と、片や低山派の霧の旅会会員が加わってきたというのも、この時代の日本山岳会を象徴しているように見える。もう一つこの号の違った点は、広告が珍しく入っていることである。特集号でページ数が多い分広告を集めたのかもしれないが、初期の小集會会場となった保々近藤合名会社や、発行間もない『山とスキー』などが載っている。

同年7月に発行された第十七年第一号の本欄は、「神流川雑記」、「南国の山」、「北上山地の旅」であり、目新しい

登山記は載っていないが、前記のように高頭仁兵衛による「事務所の移転に就いて」が載る。改めてこの時代の運営の苦しかった姿が思い浮かぶ。それをなんとか乗り切った次の時代に進んだところであったが、第二号の編集作業中の9月1日、関東大地震が起こり、首都東京を中心に日本中が混乱に陥ることとなる。この大地震による被害については、翌13年2月に発行された第十七年第二号の「会告」に次のように載っている。「幸にして本会の直接に蒙りたる損害は、幻燈機及若干図書の焼失に止まり、今後の会務を整理するに何等の支障を来す可き憂なきを以て、会員諸君は安心せられて可也」とある。しかし、会員個人については取り返しのつかない被害を蒙っていた。編輯担当の辻村伊助幹事は、湯元中宿の自宅の裏山が崩れ一家もろとも土砂に押し流された。ほかに4名の会員が亡くなっている。辻村の訃報を伝えた高野鷹蔵自身は火災に遭い、自宅が全焼、大切に扱っていた写真乾板類もすべて失われて呆然自失、以後、登山から遠ざかることに繋がった。本郷にある木暮宅の『山岳』編輯所の被害は最小限であったらしいが、印刷所が被害を受けて英文欄が中止になっている。

第十七年第二号には、関東大地震に関する客観的な報告や原因分析などが載せられたが、ほかの記事はすでに通常

に戻っている。編輯担当の新幹事は木暮の編集方針に沿いつつ、新しい登山を取り込んでいくように努力した姿が見える。巻頭には大正12年3月の舟田三郎の「三月の劔岳へ」が載る。「……平蔵谷のクーロアールは頭の上に、雪の禿げたギザギザした岩稜の裾から、水沫のやうな雪の急斜面が注る。アイスアックスを短く握り、ロープは凍雪にその腹を擦って、一歩づつ高く高く迫り上った。反射する雪より黒い岩に移ってからも、手袋を外し、アックスを手首に吊げて懸命なチムニーの山岩登りが暫く続いた。」とあり、言葉も視点も従来のものとは随分と違っている。舟田は会員通信欄にも劔岳・八ツ峰初登攀のことを寄せており、「八峯より俯せし長次郎谷の壯觀と力強い岩壁、鋭き尖峰の群立は、深く印象に残り居り候。尚ほ学習院、慶応の八峯登山隊は一度は失敗し帰京いたし候ひしが天候快復と共に再び登山いたす由に候。」とある。

雑録欄の山岳図書紹介は木暮が書いており、『山行』、『登高行』第四年、『リュックサック』第二号の3冊を取り上げている。『山行』については、登山に対する著者の態度に注目し、これが読む者の心に強く働くとし、『登高行』第四年については、「孰れも興味と実益と研究とに充ちた記事である、珍しい冬の山の写真が多数挿入されてあるのも嬉し

い」とある。木暮は『登高行』第三年も第十六年第一号で紹介していて、「大島氏の石狩岳より石狩川に沿ふては深い興味を覚えた」と書いている。『リュックサック』第二号については感想はなく、内容紹介のみである。同じ雑録欄には三高生・今西錦司による「薬師岳の新登路」が載っている。後に金作谷と呼ばれる谷を下って黒部川を渡るルートを見出した。今西は山岳会に懂れて『山岳』に投稿した。

大正13年には第十七年第二号から第十八年第二号の4冊の『山岳』が発行されたが、まだ2年の遅れは取り戻せていない。しかし、載せられた記事の多くは、前年の記録ないしはその年のもので、情報として新しくなっている。引き続き5月に発行された第十七年第三号には、その年の1月に行なわれたスキー登山の記録「雪の上ノ岳へ」が載っている。筆者は大阪在住の初期会員、榎谷徹蔵である。初期会員の多くが登山からは遠ざかり、新しい形式の登山とは縁がないのに対し、榎谷は遥かに行動的であり、スキー登山も行ない、藤木九三らとともに同年6月のRCCの結成に参加するなど、現役として活動している。この登山の企画は、大阪朝日新聞社の神戸支局長として赴任してきた藤木によるものらしく、冬山の世界を一般に紹介するべく映画撮影の技師を伴い、新聞記事になったものである。

積雪期登山が学生たちの間で始まったころ、名古屋の資産家、伊藤孝一もカメラ、登山の趣味が高じて、「大正十一年、当時三十一歳の伊藤氏は厳冬の立山・針ノ木越えを、第二次として薬師・槍縦走計画を、信州大町の對山館主・百瀬慎太郎氏と、燕山莊主・赤沼千尋氏、映画技士・勝野銚四郎氏らの協力で立案し」（『山岳』第六十八年、「伊藤孝一氏の足跡」）それを実行した。第2次計画実現のための事前準備として、薬師岳山麓の有峰（水源開発のために買収されて村人はいない）の民家を整備して根拠地とし、真川と上ノ岳と黒部乗越に山小屋を建てて前進キャンプとした。榎谷ら一行は、伊藤の建てた小屋を利用させてもらい上ノ岳に登ったのである。その真川の小屋というのは、「：台所の中央に切った八尺に五尺の大囲炉裏の上には、暖房と換気を兼ねるために、径五尺に垂んとする鉄板製のフツドを吊るし：。下座敷には晴れやかなヴェランダがあり、大型ストープ三個を備へて、階上階下の座敷を華氏百十五度迄暖め得るやうにしてある：」というものである。

わずか1年前の榎有恒一行の松尾峠遭難は、根拠地となる小屋がなく、松尾峠のキャンプも撤収されてしまったために起きた遭難であったから、榎は登山用の山小屋の必要を何度も説いている。同じ号の会報欄、第23回小集会の演

者の一人は榎で、「登山用小舎の問題に就いて」と題して、その必要について説いている。大それた厳冬の北アルプスの大縦走というのも、金に糸目を付けなければ可能であることを彼らは示したが、これはアルピニズムとは似て異なるものであったことが分かる。ちなみに第2次隊についての東京朝日新聞の記事が、同じく同号の雑録欄にあり、「厳冬の日本アルプスに映画撮影の壮挙を敢行しつゝ、あつた名古屋山岳家伊藤孝一氏一行は最終の目的地たる薬師岳の絶頂を三度の遭難にも屈せず萬死を賭して四日遂に成功し、尚人跡未踏の黒部溪谷の源を探勝し全部之をフィルムに収めて八日午後六時無事下山した」と載っている。

木暮はこの号の雑録欄に、「第三回エヴェレスト山遠征」を載せている。雑報欄にも外電の形でエヴェレスト隊の情報を載せており、会としても関心が高いことを思わせる。木暮による前記エヴェレスト登山の解説は要を得たもので、これまでのヒマラヤ各所における登山の経過を追った後に自身の考えを述べるなど、通り一遍ではない見識を持つている。交換雑誌として送られてくる *Alpine Journal* や *Geographical Journal* を丹念に読んで、知識を得たものであろうと思われる。大正13年（1924年）3月、ダージリンを出発した登山隊であったが、6月にはマロリーと

アーヴィンが頂上攻撃に出たまま戻らないという事態となったことが、日本にもすぐに伝わってきた。同年12月発行の第十八年第二号の雑録欄に木暮は、「マロリー氏を悼む」を書いている。「…エヴェレストに就いては最も経験を積み、よしや今回は或は成功せざりしとするも生命を全うしてあらんか、更に第四回の探検隊を送るが如き場合には、エヴェレストの絶巔に初めて人の足跡を印するもの、恐らく氏ならんとは、衆人の等しく期待する所なりしに、今この訃報に接して悼惜の情に堪へざる也」と。さらに翌年4月に発行された第3号には、この第3次隊のより詳しい経過報告を、小さな活字で5ページにわたって書いており、木暮のエヴェレスト登山への関心の高さが分かる。

同号会報欄の末尾に、名誉会員城氏の訃報が載る。「本会発起人の一人にして名誉会員たる城数馬氏は、高等覆審法院長として朝鮮京城に在職中なりしが、病の為本年二月薨死されたる旨通知に接したり、…四十一年控訴院長として朝鮮京城に赴任するまで会務を取扱はれたり、大正十年名誉会員に推挙さる」とある。

同年9月の第十八年第一号の巻頭には、再び舟田三郎の「冬から春への槍ヶ岳」が載る。大正10年5月から13年3月まで、積雪期の槍ヶ岳に5度登った記録のレビューであ

る。「冬から春への積雪期に於ける山岳の知識と登山術を研究することによって登山の限界の拡張であり、アルピニズムのよき成長である。そして今や、積雪期に於ける山岳を知る為め必要なるスキー術は、日本に於いても登山術中有力なる部門の一つとなつて来た」とある。すでに日本でも積雪期の登山が位置付けを得て、さらに発展する段階に達したということであろう。

第二号は大正13年12月の発行で、1年に3冊以上発行されたのは大正9年以来である。本欄巻頭には加納一郎の「北海道に於ける積雪期の登山」が載った。加納ら北大スキー部員が登った山々の紹介で、ほとんどが初登山である。北海道の山には根拠地となる山小屋はないが、森林伐採のために建てられた伐木小屋があつて、板倉らと登った旭岳はこのような小屋を根拠地にした。

この時代にはほぼ毎号執筆しているのが沼井鐵太郎で、東北から黒部、東京近郊と日本中の山を巡り、低山歩きから沢登り、スキー登山とどんな形の登山も行なっている。後に台湾に赴任すると台湾の山に登って、その記録や解説を何度も書いている。第三号雑録欄には「三峠山の岩登りに就いて」を書いている。同行者は帝大の先輩、後輩の別宮貞俊、岩永信雄で、黒部廻行の仲間でもある。同じころに、

芦屋のロックガーデンを舞台にRCCの人たちが岩登りの練習を行っていたが、東京近郊にも岩登りの良いゲレンデが見つかった。

舟田は第三号（大正14年4月刊）にも「針ノ木冬季登山（スキー）」を寄稿している。積雪期の槍ヶ岳と劔岳を登攀した舟田は、次の対象を探して籠川谷を候補に上げた。そこには根拠地となる大沢小屋があるからである。当時の登山方法は、根拠地となる小屋からスキーを使ってなるべく山頂近くまで登り、アイゼンに履き替えて登頂を果たし、スキーで一気にと下るといふものである。まだ露営技術が確立しておらず、一日でなんとか往復できる距離にある頂しか狙えないので、次の対象として、試みた者がいない籠川谷周辺の山々を選んだ。ちなみに大正13年3月に、根拠地のない穂高を狙った慶応山岳部は、横尾谷にベースを作り、8人用テントを2張と人夫3人のために5人用テントを用意し、トナカイの毛皮のシュラフザックを各人が使った。さらにラッセルの効率を考えて人数を増やしている（『登高行』第五年）。

舟田が小笠原勇八、藤田信道、森田勝彦とともに行なった1回目の試みは成果を挙げた。そこで次の年の冬にも、大沢小屋を根拠地に周囲の山に登った。その記録と考察が

第二十年第二号（大正15年8月刊）の雑録欄に「籠川谷大沢小舎を中心として（冬）」として載った。「冬の飛騨高連山脈では殆んど毎日毎日と雪の日が続く許りで、天気の日は一週に一遍だつて恵まれない。：けれども山に向つて激しい感情をもつた連中にとつてはそんな理屈は抜きに、山は厳冬に於いても僕等をひき寄せて終ふ」と書いている。そして、次の冬に若い部員たちがやって来て経験を積み、喜びを味わつた。ところがその次の年、すなわち昭和2年の第4回大沢小舎生活は、不運にも雪崩に遭い壊滅した。その速報が昭和3年2月発行の第二十二年第二号の雑報に「北アルプス針木峠の惨事」として載せられた。

再び時間を戻して、第十八年第一号の木暮による雑録記事「可惜『郡村誌』の消失」に注目したい。木暮は『東京市史』のための史料に接する日々を送っているが、それらの史料の中には登山に関するものもないわけではない。明治の初年に内務省地理局で全国の各村に提出させた資料をまとめ、それを編んだものが『郡村誌』であるが、帝国大学図書館に保管されていたこの貴重な6400冊が、大震災で焼けてしまった。木暮の立場では惜しんで余りあることである。この一部は「秩父號」で武蔵通志山岳篇として公にされたし、第二十年第一号「秩父號第二」においても、

「多摩郡の山川」と題されてこの史料の一部が公表された。この文の末尾にある、「この『郡村誌』六千四百冊の中、東京市史編纂掛に貸してあった上野国利根吾妻の二郡約四十冊のみが、稀有にして災厄から免かれ、郡村誌の如何なるものであったかを示す標本として形見に残された観があるのも是非もない」とあるのは、すなわち、木暮が自宅に借り出したものに相違あるまい。

第三号の図書紹介も木暮が書いたものだが、発行直後の『登高行』第五年（大正13年12月刊）が取り上げられている。「十週年記念號であるが、この充実した内容を見ては、編輯者の労を想はずにはゐられない」とし、「其等の中の幾つかは内容に就て記したいと思ふたのであるが、今は単に項目を紹介するだけに止めて置かなければならぬのは遺憾である。」と書いている。もちろんこれは、編集者である大島亮吉への賛辞であろう。木暮は大島の文の優れていることを見抜いて、『山岳』への寄稿を促している。

大島と木暮との関係を、木暮自身が第二十七年第三号に載せた大島の遺稿「秩父の山村と山路と山小屋と」への前書きに書いている。その書き出しに、「大正十四年の春であつたと思ふ、郡村誌の多摩郡の山川の記事を抄出して置いたものが発見されたので、之を附録として秩父號第二を

発行することを計画したもの、相変らずの原稿難に悩んでみると、横君から話があつて、塾の大島君はよく秩父方面に出掛けてゐるから、何か書くやうに頼みませうとのことであつた。」とあり、また「昭和三年の三月十日に溜池の三会堂で開催した小集会は、私が大島君と面晤した最後であつた。此時の話は奥上州の山を主としたもので、私が第二の奥上州號を秩父號第二と同様に、纔に焼け残つた郡村誌から利根吾妻二郡の山川に関する簡略なる記事を抄出し、之を附録として発行したい希望があると述べた所、大島君は仲間を纏めてお送りませうと約束された。そして別れ際に莞爾やかな笑顔を一層嬉しそうに輝かして、自分は当分学校に留るやうになつた。それで山岳会に入会したいから申込用紙を送つて頂き度いと言はれた」とある。大島が前穂・北尾根で墜死したのは、この直後の3月25日のことである。

このころ大島自身も山岳会の状況を見ていて、「…また日本山岳会の前途についても真剣に考えていたひとりだつた。そのころの日本山岳会には若い会員は少なくて老化現象のきざしが見えていたが、大島さんは、日本山岳会にはやはりわれわれ若い世代が力を合せて盛りたてていかなければならないと、いつも仲間と話し合つていた。大正15

年だったと記憶するが、俺もこんど日本山岳会に入会することにした、君も入れ、という手紙をもらった。僕もそれから間もなく入会した」とは、伊藤秀五郎の証言である。  
 (『北の山』続篇)

大正14年の『山岳』発行は3冊である。第十八年第三号が4月で、第十九年第一号の「尾瀬号」が5月、第二号の「金剛山」は9月である。しかし、第十九年第三号はまた翌15年2月となって、依然として2年の遅れは解消できない。以前には1年に3冊を発行するということで、目次を立てて各号に内容を割り振っていく形だったが、それは遠い昔に崩れており、今は個別的に目次を作り、年度にはこだわらず新しい記録や情報をその年度盛り込んでいく形になっている。年度がずれ込んだとしても発行さえされていれば、会務報告はその年のものが載せられる状態になっている。

第十九年号では、なぜ2冊続けて特別号となっているのであろうか。これは従来の形式とは違う、別の方針を立てたかと思われない。第十九年第三号の会報欄に、大正14年12月に評議員会が開かれて、幹事改選の推薦が行なわれたことが載っている。新たに沼井鐵太郎が記録係として加わったが、ほかの幹事は重任である。この同じ評議員会で

「『山岳』特別号発行の件」が議題に取り上げられている。日時から考えると、この「特別号」というのは第二十年号の特別号のことであろうか。あるいは、この場で新たな編集方針が検討されたのかもしれない。その後も次々と「特別号」が発行されているからで、編集担当者が代わるまでの6年間に発行された18冊の内の9冊が「特別号」となっている。すなわち「尾瀬」、「金剛山」、「秩父第二」、「奥羽」、「黒部」、「奥羽第二」、「台湾の山旅」、「黒部第二」、「黒部第三」である。木暮の前述の文によれば、さらに「奥上州第二」の構想も立てられていたようである。

「特別号」が企画された背景としては、原稿の集まりがまた悪くなり、目次がなかなか立てられなくなったことが考えられる。このころの『山岳』寄稿者は常連が多く、あらかじめテーマ(山域)を決めて、早くから原稿を依頼できたのかもしれない。そして、「尾瀬」は武田、「秩父」は木暮、「奥羽」は沼井、「黒部」は冠、というように編集担当者も決めてあったのかもしれない。「特別号」を編集する目的は、まだ良く知られていない山域を選び、季節も目的も多様な登山情報を提供しようということである。最新の記録だけを集めるのではなく、地域の記録を集めた「特別号」を軸にしていけば、通常号はその都度集まった原稿を

中心に編集ができるだろう。原稿量が少なく、薄くなったとしても次の「特別号」に繋げられれば良い。

「特別号」の発行は、多くの会員にとって歓迎されたと思われる。「特別号」が発行された後は、かつての「秩父號」がそうであったように、その山域の人氣が高まる傾向がある。学校山岳部の年報などにもそれが現われているようだ。発行時期は相変わらず不定期であるから、記録的な登山は『山岳』には載らなくなり、それぞれの学校山岳部の「部報」により重要な記録が載ることにもなった。

以下に第二十四年号までの各号の、「特集」以外の欄の記録や報告を見ておきたい。この部分に木暮の考えや知識や方向が現われていると思うからである。しかし、それを越えて登山界は動いていることも見えてくる。

\*

第十九年第一号「尾瀬號」末尾の会報欄には、第27回小集会（大正14年3月）の報告が載っている。演題は「亜細亜に於ける高山に就て」で、演者は木暮である。24000ft以上の山87座について、「其山名若しくはシンボルを掲げ、其所在を明にし、且つヒマラーヤ山脈、ラダーク山脈、カイラス山脈、カラコラム山脈、崑崙及天山山脈の關係的位置を略説し、其の氷河及雪線の概略を述べ、次に各

山峯に就て、其発見、測定、命名の由来其他の興味ある挿話を紹介され、更に此等八十七座の高峰中、其の幾つが登攀されたりやと話題を一転して、ヒマラーヤ探検の歴史を語り、カプルー、ナンガパルバット、K2、グアラマンダータ、カメット及エヴェレストの登攀に就て説く所あり、約三時間に亘りての講演であつた」とある。インド測量局から1907年、08年に出版された、バラード、ヘイドンの共著 *A Sketch of the Geography and Geology of the Himalaya Mountains and Tibet* を手にしてから木暮のヒマラーヤ研究は本格的に始まったようである、この講演の内容は、構成も含めて昭和11年5月に刊行された共立社の『山岳講座』第7巻に木暮が載せた「中央亜細亜の山と人」と近い。誰よりも先駆けてヒマラーヤ概説をこのときに行なつていた。

第二号は「金剛山」で、大平晟が全冊を執筆している。大平は大正13年6月、金剛山探勝を目的に出かけた。金剛山は観光地でもあり、日本人も多く訪れているが、これほど詳しく紹介した案内書はなかった。大平の教え子が高頭仁兵衛で、慶応元年生まれであるから、金剛山を訪れたのは58歳である。創刊号以来『山岳』に多くの寄稿があり、合計38篇に及ぶ。訪れた山も北は樺太から北海道、東北、

本州、四国、九州、朝鮮（金剛山）、台湾（新高山、南湖大山、大屯山）と全国あらゆる地方を歩いた大旅行家であり、大正8年には名誉会員に推薦された（『山岳』第六十五年、大平晟メモ）。第二十二年第三号の「台湾の山旅」も同じく大平晟が全冊を執筆しており、内容構成も似ている。台湾行は昭和3年、年齢61歳のときで、高頭が同行している。

「金剛山」の末尾の会報欄には、唐突に「榎幹事のロッキード登山」が載っている。アルバータ山の説明の後に、「曾て加奈陀山岳会の連中が登攀を企て、成功しなかった。一行はこのアルバータに最初の登攀を試み更に二三の峯にも登る筈である。……孰れにしても其詳細は他日誌上で発表することにする。」とある。翌年5月に発行された第三号の会報欄には、アルバータ登山の報告会が第29回小集会和臨時大会で行なわれたことが載っているが、その登山記は書かずに終わった。『山岳』としては、『登高行』に発表されたものと同様の記事を載せるに忍びなかったのかもしれない。ちなみに昭和9年発行の『山岳』第二十九年第一号と10年発行の第三号に、「アルバータ遠征の追想」と題して三田幸夫が、9年遅れの理由とともにその報告を載せた。

アルバータ登山計画は大正13年の暮れ、「秩父宮殿下にお伴して赤倉の細川氏別荘にスキーに行った」ときに始

まった。バルマーとソリントンによるClimber's Guide to the Rocky Mountains of Canadaの巻頭写真に載っていたアルバータ山を、「細川氏は熱心に私に試みるように勧められた。殿下もまた側からは非試みよと励められた。」「汽車中で始まったこの遠征計画は、細川氏の奔走によって、東京日日新聞と大阪毎日新聞両社の後援の下に実現することになった。」「一行は橋本静一、早川種三、三田幸夫、岡部長量、波多野正信の諸君と私との六人であった。六人はみな日本山岳会員であったので、この登山隊は、日本山岳会登山隊の名の下に行われることになった。」（榎、『私の山旅』）とあるが、榎を除く5人の入会が許可されたのは出発の2日前であるから、この登山と組織としての日本山岳会は関わりがない。パリー丸で横浜港を出航した14年6月19日には、「日本山岳会の諸氏」も見送りに行ったことが記されている。

榎一行が出発した2日後、第28回小集会が開かれた。この会で木暮は「加奈陀ロッキードに就て」講演をしている。「幹事榎有恒氏が一行五名と共に加奈陀ロッキード登攀の為に出発したので、先づ其事に関し前後の事情を明にし、次に加奈陀ロッキードの位置、疆域、広袤、山群等に就て概略を述べ、其探検登攀の歴史を概略した」とある。木暮は会員

に対し、槇一行の登山のいきさつを説明するに留まらず、自身が関心を抱いてカナダの山についてきちんと調べ、基本的な知識を会員に伝授したのである。この会の出席者は多く、会員38名、会員外来会者23名であった。

アルバータ登山帰国歓迎会、報告会は10月11日に登高会および山岳部によって開催され、編集中の『登高行』第六年（大正14年12月刊）にも原稿を間に合わせて、その号をポリウムのあるものにした。槇の書いた「マウント・アルバータの印象」と三田の書いた「ベースキャンプの或る日」は、多忙な時間内にまとめたもので全般の報告ではない。早大山岳部は12月4日に研究会と講演会を企画して、槇の「アルバータ登攀（技術的方面より）」と、「穂高岳の一つの尾根に建設する早稲田のグループピヒュッテの基金募集の催し」のため、槇に講演を依頼した。このアルバータ登山に関心を寄せたのは、早大山岳部ばかりではなかった。三高山岳部の今西錦司は、大金を払ってGuidebookを買い込み研究した。海外遠征を先にやられて悔しかったというのだ（今西錦司・斎藤清明編『初登山』）。

『リユックサック』第5号の年報欄には、「私達の此の研究会に多忙な槇氏が有益な而も尚私達に耳新しいカナディアン・ロッキー登攀の技術上の見解を披瀝して下されたこ

とは全く感謝の外はない。改めて同氏に厚く謝する次第である。」さらに講演「山の印象」に対しては、「御忙しい槇さんに研究会が終るや直ぐ此処に来て頂いて、槇さんの何時もあの謙讓な風采―山男達の前に豊かな経験と耐えざる研究とから生れ出る心からなる叫びに接したとき、先づ私達は山歩く人々の世界に国境はないということを泌と感ずる。山に於ける板倉氏との数々の営み、そして今は此の現実の世界を遠く離れてゐる逝き板倉氏に対する霊の交響楽、魂を知り得る人間のメタフィジカルの力を感じさせられる」とある。

この『リユックサック』第5号の編集後記に四谷龍胤は、「読者の御存知の様に現在各方面の山岳雑誌が其の内容に於て既に行詰まりつゝある事は明かな事実だ。雑誌の原稿を書く為に山に行くのではない以上、夫れは当然でなければならぬ、登高の営みが内面的に充実して来ると共に単純な紀行が影をひそめて来るとも事実だ。将来はとも角現在既に変化を来しつゝあることは見逃し得ない。」とあって、『山岳』の魅力や権威が、少なくとも学生たちの間で失われてきたことを示している。

第二号の会報欄にもう一つ注目すべきことが載っている。大正14年5月の第18回大会で、名誉会員・志賀重昂の

講演が始まる前に、楨有恒が会員に向かつて行なった提案がある。「各地に大小無数ともいふ可き程山岳会やうのものが存在する……互いに聯絡をとりて或る一つの会の一部として又は其下に協力して働くやうにしたいものであると述べ」た。楨が考えていたのは山岳会の組織化ということであり、それはこのときから数年の内に実現される。

第三号は通常号であるが、大正15年2月に発行された。本欄4篇のうち3篇は準積雪期登山であるが、藤島敏男の守門岳、浅草岳のほかは新しい対象ではない。雑報欄には焼岳の小噴火が報じられている。そして、会報欄には発起人・梅沢親光の訃報が載る。「本会の会員並びに本誌の購読者にして、梅沢君の訃を聞いて、且つ驚き且つ悲まなひ者はなからう。…本会の発起人として、今は又評議員として重要な位置にあり、且つ会のために昔も今も努力を吝まなかつた君を喪ふことは、本会として哀惜に堪えない次第である」とある。

第二十年第一号は「秩父號第二」である。本欄4篇のうち最も分量の多いのは「多摩郡の山川」で、木暮が『郡村誌』から抄出したものである。「元より『山岳』誌上に掲載する目的で採録して置いた訳ではないから、記事の欠けてゐる所があるのも止むを得ない。然し多摩郡の著名な山嶽

は大抵網羅してゐるので、参考として重要な役目をなすことは言う迄もあるまいと思ふ。」と前書きが付けられている。雑録には大島亮吉の小倉山と瑞牆山を含む8篇が載っている。

第二号はやや原稿集めに苦労があつたのか、大平晟、竹内亮、武田久吉は2篇ずつ執筆している。竹内は仕事の関係で日本各地を訪れ、初期の北海道登山の開拓者でもあつたが、その後は九州の登山に関する情報一切を引き受けているかのである。雑録欄には前記した舟田三郎の「籠川谷大沢小舎を中心として」が載り、第32回小集会では冠松次郎の「黒部別山を中心として」と、渡辺漸の「三月の黒岳」の講演があつた。大正15年3月、今西、渡辺、西堀、奥ら三高山岳部員が平から黒部川を遡り、東沢をベースにして黒岳、赤牛岳、烏帽子岳などを登つたときの報告である。昭和2年6月発行の第二十一号第二号「黒部號」の雑録欄に、この山域のルートと雪崩の危険性および雪中幕営について、渡辺が詳しく書いてゐる。計画全体の記録は『三高山岳部報告』第五号（昭和2年1月刊）に載せられた。会務報告によれば、大正15年6月の幹事会で別宮貞俊が幹事として加わっている。沼井幹事の台湾赴任による増員である。

『三高山岳部報告』第四号(大正15年5月刊)に載った短い劔岳登攀の記録が、「劔岳新登路と八ッ峰」と題してより詳細に『山岳』第二十二年第一号の本欄に載っている。筆者は渡辺漸で、パートナーは今西錦司であった。「劔岳従来の登路に就ては今更云々する事も無いと思ふが、纏ったものとして『山岳』に現はれたのは十年二号の附録として出た登山地図第一輯『劔岳』位のものであるし、殊にそれから十年も経過して居るのであるから、此の機会に、極く大体を纏め、併せてその登攀史とでも言ふものをほんの概略記すのも無益では無いだらう。」と木暮以降の劔岳の登山と研究について述べている。三高から東大医科に進んだ渡辺は冠や岩永、別宮らと黒部川の探索に加わり、さらに『山岳』の編集を新しい世代の代表として担うことになる。

同号雑録欄には大島亮吉の論考「本邦に於ける雪崩の方言」が載っている。大島の雪崩研究としては『登高行』第五年と同第六年の「雪崩の知識についての一寄与」、「雪崩の知識に対する一寄与」に続くものである。雪山にスキーを走らせる登山者にとって雪崩に関する知識、経験の整理は不可欠となってきた。それを必要とし行ない得るのは、現役の登山者だけである。また、同号の雑報欄には木暮による「ヴィッサー探検隊の成功」が載っている。1925

年に西部カラコラムの主脈北側の氷河群を探検したときの、Geographical Journalの報告をまとめたものらしい。的確な要約は、カラコラムについても正確な知識を持つてゐることを伺わせる。

第二十三年第三号は「奥羽號」で飯豊、朝日連峰の記録が集められている。この号から第二十二年第一号「奥羽號第二」までの5冊は昭和2年の発行で、ずれていた年度が6年ぶりに(第一号のみであるが)追いついている。会報欄の最後には、ほぼ毎号交換および寄贈図書が目につくが、第二十二年第二号に載る新しい雑誌は『山想』(創刊号)、『台湾山岳』(創刊号)で、『リュックサック』は5号、『山とスキー』は70・71号、『ペデスツリヤン』も89・90号と順調に発行を重ねていることが分かる。ところで、『リュックサック』第6号(昭和3年12月刊)の「山・人・生活」を見ると、「雑誌『山とスキー』もそろそろ下り坂になった様だ。私は彼等の頭上に、没落の烙印を押すのに遠慮しない一人だ。：関西のRCCと云へば岩にばかりかちりつく人達だったのに最近冬期登山へも進出して来た。アルピニズムを把握した場合かくの如く全面的に展開しないではおられない必然性を持つてゐるのだ」とあり、また登山界に変化が現われていることを伺わせる。

第二十二年第三号の会報欄には、名誉会員・志賀重昂氏の

の計が載る。「名誉会員志賀重昂氏は、本年三月下旬頃から健康勝れずとの事であったが、終に四月六日を以つて逝去された。享年六十四」。また、同じページに小島烏水氏歓迎晩餐会の報告も載っている。「小島烏水氏帰る、我等は此報を得て久しく別れた同志と又相見の機会を鶴首して待った」とある。改めて烏水滞米期間中にあった出来事を思い起こすと、12年を経過した後の日本の登山界、日本山岳会の変容を思わずにはいられない。帰国後の烏水が『山岳』に健筆を振つたとしても、それは最新の登山を語るものではなからうし、この間にずっと『山岳』の編集方法に苦心を重ねてきた木暮にとつても、それは同じである。登山方法や方向が若い世代、さらに若い世代へと移りつつあり、初期世代はやはり登山界の中心ではなくなっている。

「奥羽號第二」は八甲田山、岩手山などが対象であるが、植物調査を目的とした登山が多い。「尾瀬號」でも長文を寄せた北大の館脇操が多くを書いている。この号の会報欄には、9月の幹事会で審議された事務所の移転が決まった。「本会事務所は都合上是迄新潟県三島郡深才村深澤に置き、事務を執り来つたが、不便が少なくないので、今回東京市芝区高輪南町三十番地に移して、会計取扱所と合併した」

とある。

昭和3年に発行された『山岳』は3冊で、すべて通常号である。第二十二年第二号は2月、第三号は4月に発行されたが、第二十二年第一号は少し間が開いて12月になった。第二十二年第二号の本欄は、法政の田中菅雄の「笠ヶ岳新登路と打込谷」など3篇だけである。会報欄には昭和2年10月9日の第20回大会の報告が載っている。小島烏水が「米国の太平洋岸に於ける山岳に就いて」を講演、「八十枚のスライドを使用し、二時間に亘りて縦横に快弁を振はれ、多大の感銘を聴衆に与えた」とある。その一方、雑報欄には「北アルプス針木峠の惨事」として、12月30日の早大山岳部の雪崩遭難を伝える各紙の記事が5ページにわたつて載せられ、合わせて「早大山岳部の声明書」も載せられた。「：我山岳部否全日本スキー登山史上最初の悲しむべき出来事をひき起したことに對し単に結果よりなせる軽率なる非難批判あるひは誤解を受くることは到底忍び得ない所である、故に慎重に徹底的に調査研究して登山界並に社会一般に公表することが我々の義務であり又貴き犠牲者の靈を慰むる根本的のものであることを信じて居る」としている。第二十二年第三号は原稿が従来になく多く、しかもバラエティーに富んでいる。本欄は6篇からなる。その内の3

篇が台湾の記録で、台北高校の鹿野忠雄が最初の寄稿をしている。台湾に赴任した沼井鐵太郎も雑録欄に「台湾登山界の概観」を寄せている。外国人会員マレー・ウォルトンが日本語で書いた「御嶽より乗鞍まで」があり、そして、渡辺八郎の「アイガー・東山稜の登攀」が載る。大正15年夏、秩父宮殿下を案内してアルプスの峰々を登った槇、松方と渡辺は、5年前に初登攀したアイガー・東山稜をより下部のヘルンリ稜より再登しようとした。そのときの模様を日記風に回想して載せたものである。この年には槇の初登攀を記念して狭い稜線上に小屋が建てられた。そのミツテルレギ小屋の前で腰を降ろす槇と松方の写真と、鋭い東山稜の写真が印象的である。

しかし、この号にも遭難の報道記事が載った。「慶大山岳部員遭難」という見出しで、大島亮吉の前穂・北尾根での墜死を伝えている。4月の段階で遺体は発見できず、同様に遺体の捜索を行なっている早大山岳部の様子を伝える記事も同じページに載っている。ほんのわずか前の登山のヒーローたちが相次いで遭難し、深い挫折感が広がった。この大きな遭難に対する日本山岳会の反応は、かつての奥秩父・破風山遭難とは違っていたようである。舟田三郎はこの点について、「新興スポーツ的登山には、絶対に無関係

の如く、いくら山での貴い犠牲が、登山史上に記されようとも、全く傍らを向ひて吾れ関せず焉として澄してゐる。JACCの意識的な部分を代表してゐる幹事達に至つては、更に新興登山には全然無経験であり、無能力者である。それでこそ、新しいスポーツ的登山等には働か掛けない、又指導は出来ないのだ」と批判している（『山と溪谷』3号）。

同じ雑報欄には藤木九三記者の記事で、北海道における秩父宮殿下のスキー登山が「秩父宮雪中御登山」として載っている。「ヒマラヤだより」は長谷川伝次郎によるガルワール踏査の便りであるが、木暮はこの簡単な書信に解説を加えて紹介している。「長谷川氏の通過した路は詳報がないので判然としないが、推察するにナイニタル若しくはアルモラから東北に向ひて所謂ガルワール・ヒマラヤ地方に入りて、カリ河に沿うたる貿易路を東北進して、アピ、ナンパの双児峯を右手に眺めつつ、…」と木暮はヒマラヤの峰々を思い描きながら随分詳しい説明をしている。後に木暮は、長谷川の著書『ヒマラヤの旅』に解説文を寄せることになる。会員通信を寄せた武田は今京大農学部に着を置き、関西地方の山に登り植物調査を行なっている。伊吹山に登って、「高さも、地質も、面白さもツマラナサも武甲山に伯仲せる位の事を知りたるが唯一の獲物とは吾乍ら

笑止に候」とある。

第二十三年第一号の本欄も6篇と多い。しかし、地域的には黒部2篇、飯豊、朝日が2篇あり、「特別号」に収まらなかった記事を集めたものようであり、別宮が編集を担ったものかもしれない。雑報には秩父宮殿下がアルパイン・クラブの名譽会員に推薦されたこと、浦松佐美太郎がヴェッターホルン西尾根の初登攀に成功した記事を見せている。そして、大島の遺体発見と早大山岳部の遭難者発見の記事も載せている。会報欄には昭和3年5月12日に開催された第21回大会の報告が載り、ロンドンから帰朝した、滞欧8年に及んだ松方三郎による「アルプスの二、三の山々に就て」を聞いて、400名の聴衆が喝采したことを伝えられている。松方は大島と親しく、大島の追悼文を『登高行』第七年（昭和4年7月刊）に寄稿した。その巻頭には大島の遺稿の中から「登山史上の人々・遊戯的登山派の闘将マメリイ」が載っている。大島がそうであったように、松方も日本山岳会の現状を憂いており、帰国早々から藤島敏男とともに山岳会の改革に動き始めた。

一方で山岳会をこれまで盛り立てた会員が、短期間の内に相次いで亡くなったことに対し、冥福を祈る追悼会を行なったという報告も載っている。「本会が過去二十三年の

努力によって我山岳界に重きをなすに至った事は、何と云つても亡くなられた幹部諸君は勿論会員の力に待つものが多かったのである。梅沢親光、辻村伊助、城 数馬、志賀重昂氏と数へると、未だに其面影が髣髴として記憶に新たななるものがある」とある。

木暮による図書紹介では、冠松次郎の『黒部谿谷』（昭和3年7月刊）が取り上げられている。「大正八九年頃から黒部の下廊下を目指す人が多くなり、それから根気よく引継いで今日まで毎年多き時は二三回も足を入れられた冠氏に依りて、本書の出版を見るに至ったことは、努力の結果とはいへ当然のこと……斬然頭角を抜いてゐる所為である」。木暮はこの本の序文も引き受けているし、冠は木暮宅に足繁く通った一人である。もう一つ注目すべき欄は退会者で、昭和3年3月9日付で舟田三郎が退会してしまつた。その理由の一つは、「年三回刊行の紀行文を編したものを戴くために、八円の大金を差出し、それも六ヶ敷い幹事とやらの紹介にあわよく手蔓があつた者のみが入会出来るのだ。」と期待とは違つてきた『山岳』を厳しく評している。

昭和4年、この年『山岳』は1年の内に5冊、第二十二年第二号から第二十四年第三号までが発行され、発行年と

発行年表示が16年ぶりに一致する。前年あたりから原稿の数が増えてきたことと、特別号を3冊としたことで、それが可能になったのであろう。3月発行の第二十二年第二号の本欄の2篇、「遠山川西沢を遡る」（黒田正夫）、「白萩川池ノ谷を遡る」（長谷川孝一）は、昭和3年9月の第41回小集会の講演が原稿になったもので、意欲的な記録である。「高山植物に関する研究は殆ど極点に達したと云はれるまで進んだ。然し高山蝶について今まで纏った記事を見た事がない」と写真入りで概説した「日本の高山蝶」も興味深い。雑録欄には小金沢連嶺、房総半島の山という近郊の山の情報も載っている。さらにこの号の末尾には、創刊号から第二十年第三号までの「山岳総目録」が付録として付けられている。

第二十二年第三号は9月の発行で、前述のように全冊が大平晟の「台湾の山旅」である。しかし、会報欄には次世代の活発な登山活動が示されている。麻生武治が欧州各地で修行したスキーとアルプス登山談、さらに選手として参加したサンモリッツ・オリンピックについて語った第22回大会と、翌昭和4年3月の第42回小集会の報告が載る。演者は3名で、松方はスイスでの登山談、別宮は「黒部川（新越沢より薬師沢）」について語り、これは同行の渡辺漸が第

二十四年第二号の「黒部號第三」に書いている。そして、黒田は「龍川谷に於ける積雪状態及びその他雪に関する二、三の考察」と題し、早大山岳部員と大沢小屋で共同に各種の現象を研究した結果を概説した。

会務報告には、5月4日に幹事会が開かれて岩永信雄の幹事推薦があり、6月20日には評議員会が開かれて以下の新幹事11名が決定されたと載っている。

（庶務）別宮貞俊、（図書）藤島敏男、（編輯）岩永信雄、  
（編輯）冠松次郎、（編輯）木暮理太郎、（外交）横有恒、  
（記録）松方儀三郎、（庶務）高頭仁兵衛、  
（編輯）田中菅雄、（会計）鳥山悌成、（編輯）渡辺漸  
「アルファベット順」

この流れを受けて、11月末に発行された第二十四年第一号からは雑誌のデザインに大きな変更が加えられた。それは同時に日本山岳会そのものの改革と軌を一にするもので、まずは『山岳』から手がつけられた。9月29日の幹事会で検討され、10月12日決定されて、第二十四年号の3冊は内容・構成を新たにし、ほぼ同時に発行された。木暮を中心に第二十二年第二号と第三号「台湾の山旅」の編集が

進められる一方で、新たに編集係に加わった岩永、田中、渡辺らによって第二十四年号の3冊の編集作業が同時に行なわれたということであろう。

第二十四年号の3冊に木暮は関わっていないように思われる。第一号と第二号は「黒部號第二」と「黒部號第三」の特別号で、本欄と雑録の執筆者は冠松次郎、別宮貞俊、岩永信雄、渡辺漸のほかには吉澤庄作、角田吉夫、高橋健治である。雑報欄には新たに「海外彙報」と「各学校山岳部消息」、「山岳図書及雑誌紹介」が設けられたが、ここにも木暮の影はない。

第一号の巻末に「附録『春の後立山』に就て」があり、付録を付けたことの説明として「…たとへ最初計画した黒部號第二の発行が、幹事改選、雑誌の改良其他の事情で遅れた為であるとはいへ、…さりながら之には相当の理由がある。即ち本会は年来の懸案であった雑誌発行の遅延を本年度に於て取り返すと共に、これも亦年来の懸案である会費滞納の件に就て、断然たる解決を下すことにしたい希望がある為に外ならないので、それには先づ雑誌の年度と会費の年度とを一致させることが必要である。それにしても僅に二、三ヶ月の間に三冊の雑誌を発行するのであるから、別に起稿して頂く程の余裕はないし、…附録として掲載し

たことを諒せられたのである」と書かれている。

また、「本会図書設置案」には次のように書いてある。「来年は日本山岳会が創立されてから既に二十五年になる。…ところがこの日本山岳会には創立以来今日に至るまで会の中心といふやうなものがない。…しかしいつのまにか歲月は流れた。そして時世も移り変わった。…会の空気といふか気分といふか色彩といふかとにかく、そういつたもの、醸成される機関も機会もない。…それには先づどこかに、日本山岳会の会室をもつことが必要である」。これが改革の第2弾である。ここから先の改革については、『山岳』第百二年に載せた「1930年代の学生登山と日本山岳会」を参照いただきたい。

改革を図った『山岳』の姿、形がようやく見え始めた第二十六年第一号巻末には、編集者の渡辺漸による「編輯後記」が載っている。「本號に掲載した記事は一二の例外を除けば他は悉く新進気鋭の士の手になるものであり、他の一面から観れば、この一二年の間に新たに会員となられた諸氏の筆になるものがその大部分を占めて居るのは注目すべき傾向である。幹事が執筆せねば兎角原稿が不足勝ちであったと伝へられるのを数年前までの状態とすれば寧ろ幹事たるが故に安じて筆を執らないで居られるといふ

のが今日の状態なのである。」

第二十五年第一号と第二号の校正者に木暮の名が挙がっているのは、編集の一部をまだ担っていることを示すものだとするれば、第三号から後にはもう木暮の名はどこにもない。第三号「二十五周年記念号」の中の「二十五周年回想録」に、会を支えた幹事の一人である木暮の名が並んでいないのは寂しいが、その後に置かれた雑録の中の3篇「上越境の山と其の地名」、「積雪期の仙ノ倉山及びその附近」、「谷川岳」は、木暮が「奥上州號第二」のために集めた原稿ではないかと思われる。

## 憧憬のヒマラヤ登山

——定年退職後に挑んだ私のふみあと——

南井英弘

はじめに

60年前、私は山岳部の新人だった。暁の星を見ながら米を洗い、薪をくべ、煙にむせびながら食事当番をしていた。そんなとき、戦前の英国ヒマラヤ遠征隊の報告書を読んで驚いた。

「グッド・モーニング・サーヒブ、ティー、サー」と言つてキッチン・ボーイが TENT を開け、熱い紅茶を持つてくる。しばらくすると「サーヒブ、ホット・ウォーター・サー」と言つて、TENT の前に洗面器になみなみと注がれたお湯が置かれ、これで顔を洗う。

なんと優雅な山行だ、こんな山登りもあるのだ。会社勤めを終えたら、なんとしてでもヒマラヤで登山を楽しもう

と決意した。とにかくヒマラヤ遠征には英語が必要だと考え、学生時代、そして会社生活中も A J、A A J など山の書籍と英会話に馴染むよう心がけた。

入社3年後に外貨規制の厳しいなか、1961年、ペルー・アンデス遠征隊員に選ばれ、海外登山の経験もできた。また、会社がアブダビに原油の掘削利権を獲得したので、早速、志願して1972年早々に現地に赴任した。ニュー・デリー経由でヒマラヤを遠望する魂胆だったが、ボンベイ経由で見えなかった。赴任6ヶ月後に2週間の現地休暇があり、まずはアルプス（グリンデルワルト、ツェルマット、シャモニ）を訪問し、家族帯同後は、1年ごとに1ヶ月の現地休暇を活用して、家族とともに2夏アルプ

スで過ごした。アブダジでの任期を終えての帰途、ネパールに立ち寄り、開業間もないホテル・エベレスト・ビュエを訪問した。偶然、親子三代でエベレストを滑り、下山中の三浦雄一郎氏と同宿した。宮原巍さんにシエルパを調達していただき、テント持参でゴキキョに向かった。早速、翌朝から「サーヒブ、ホット・ティ、サー」「ホット・ウオーター、サー」が始まった。嬉しかった。

第2次石油ショックが起き1979年、再度、産油国クエートに原油の買い付け役で赴任した。翌夏はアルプスで過ごし、前3回と併せてアルプスの名峰は大方登頂した。1981年夏は、1ヶ月の休暇を利用してカラコルム・フーシエ谷の奥、チャラクサ氷河まで入った。

**1997年夏、ブルダール・ピーク(5602m)** パキスタン、ナンガ・パルバット山塊

期間…7月11日～28日

同行者…7名、ガイド(以下、Gと略)…1名

会社定年退職後に備え、1981年にお世話になったニッパ・トラベルの督永さんに「氷河があり、ほかの登山隊があまり入っておらず、自分たちだけの手作りの山行ができる5000m峰」について推薦をお願いした。前回の



ラキオト氷河の右岸、木の葉の右に見えるのがブルダール・ピーク

訪問で土地勘もあるナンガ・バルバットの一角、ブルダール（5602m）に決め、JAC仲間7人で出かけた。

戦前、ドイツ隊が辛酸を舐めたナンガ・バルバットのラキオト側のメルヘン・ビーゼは、名前のとおり大きな森林に恵まれた、素晴らしい高原だった。ラキオト氷河を右岸に渡り、BC（3800m）を設営。全員が山岳部OBの一人は、BCまではポーターを使用するが、それ以降は自力でABCを建て、アタックをかけると意気込んだ。

自分たちだけで数日かけて荷上げし、ABC（4360m）を設営。翌日からブルダール・シャルテ（5250m）まで偵察、高所順応を兼ねて往復し、登頂の可能性を探った。ABCからナンガ・バルバットが目前にそびえ、8000mから落ちる雪崩は迫力があり、凄光景を提供してくれた。ABCを建設後、毎日正午ごろからブルダール方面に雷雲が湧き上がり、急速に雷雨となった。偵察時に8時間を要したシャルテまでアタックの日は4時間で達したが、稜線に出たところ膝や腰までのラッセルとなり、5400m付近までに1時間40分を要した。南峰（5520m）までも2時間ばかりそうだ。そんなことをしている間は雷雨の餌食になる。後ろ髪を引かれる思いで降ったが、ABC到着時に雷鳴が轟いた。

1998年夏、スコロ・ラの東峰（5670m）カラコルム、スコロ氷河

期間…6月19日～7月13日

同行者…6名、G…1名

3月末で退職のつもりが、兼任していた日本アラブ協会事務局長の仕事に専任することになった。バルトロ氷河に向かうアスコレからステステ村経由で、対岸にそびえるスコロ・ラの東峰を目指した。途中の河原で幕営1泊後、BC（4360m）を建設した。早速、BCからABC建設予定地を観察したが、目標のスコロ氷河上は白雪に覆われ、ヒドン・クレバスが無数に見受けられた。目前に見える東峰を、BCから直接アタックすることにした。事前に5000mまでルート工作をして、表面が蒼氷化した急傾斜を登ったが、5300m付近で我々のアイス・クライミング技術の限界に達し、登高を断念した。

1999年夏、ゴンドコロ・ピーク（5650m）カラコルム、フーシエ谷源流

期間…7月17日～8月5日

同行者…4名、G…1人

1981年訪問時はカプルーからザーク（羊の皮ででき

た後)でシャイヨーク川を渡り、その後、徒歩で3日かけてたどり着いた最奥のフォーシエ村に、今回はスカルドから車で6時間で到着した。サイチヨー、スペインセル、夏村、ダルサンパで幕営しながらフュースパンBC(4485m)入り。翌日、3年目の正直、マイナー・ピークといえども最後の氷の壁を登り切り、頂上に立った。ゴンドコロ峠越しにバルトロの巨峰群が見えたが、山頂はガスの中。残念ながらピークを同定できなかった。

**2000年夏、ディル・ゴル・ゾム(6778m)** パキスタン、ティリチ・ミール山塊

期間…7月11日～8月16日

同行者…5名、G…1名、クライミング・ガイド(以下、CGと略)…1名、リエゾン・オフィサー…1名

シニアが登れる6000m峰として、ヒンズー・クシユの主峰に派生したこの峰を選んだ。チトラルで準備を整え、ウトール村からキャラバン開始。シャグラム、シヤニヤック、ベイシン、イストル・オ・ナールBCに幕営しながら4800mにBC設営。13日かけてC1(5300m)、C2(5800m)、C3(6300m)を建設。8月4日、大小クレバスの間を上部ティリチ・ミール氷河の



アッパー・ティリチミール氷河の最奥に見えるディル・ゴル・ゾムを目指して荷上げ

源頭まで溯り、稜線に出て頂上に達した。1961年、関西学院大学山岳会ペルー・アンデス遠征隊に参加し、6400mに達しながら強烈なホワイト・アウトで登頂できなかった、ペルー・アンデスの最高峰、ワスカランより10m高い山だけに、長年の悔しさを晴らし、溜飲を下げるこ  
とができた。

**2001年夏、スペインテイク(7027m)** カラコルム、  
チヨゴルンマ氷河

期間…6月25日～7月20日

同行者…3名、G…1名、ハイ・ポーター(以下、HP  
と略)…2名、コック(以下、CKと略)…1名

スカルドからアランドウに車で入り。翌日からチヨゴルンマ氷河沿いに遡行、マンビホラ、ポロチヨ、チヨゴルンマ氷河屈曲点でそれぞれ幕営し、バズイン氷河上にBC(4500m)を設営した。連れて行った山羊を捌いて、馳走を前にしたときから急に腹が痛み、強烈な下痢が始まった。仲間2人はC1へのルート開拓を始めたが、下痢は回復せず、自力で下山するしかない。BC入り5日後に下山を始めた。初日10時間、2日目10時間半、3日目5時間半歩いて、疲労困憊しながらアランドウ村にたどり着いた。仲間

2人はC1、C2、C3(6200m)を設営し、頂上を狙おうとしたが、ハイ・ポーターの1人が高山病に罹り、連れ戻すことに専念し、登頂を諦めた。

**2002年夏、ムスターグ・アタ(7546m)** 中国・新  
疆ウイグル自治区

期間…6月28日～8月13日

同行者…2名、G…1名、HP…1名、CK…1名  
シニアでもひたすら歩けば登頂可能な7000m峰とのことで、中国・新疆ウイグル自治区のムスターグ・アタに池谷健氏と出かけた。ガイドは5月にムスターグ・アタに登頂していた。

5年連続通ったカラコルム、ヒンズー・クシュ山域をカラコルム・ハイウエイで通り抜け、クンジュエラブ峠を越え中国に入国。タシユクルガンで1泊後、ムスターグ・アタの山麓スバシ(3700m)まで入り、4泊して4100m峰やBCを往復し、高所順応に務めた。

7月9日、BC(4300m)入り。1日休養後、高所順応を兼ねて荷上げ。キャンプ予定地に荷上げ後いったんBCに下って休養し、その後それぞれのキャンプに入るといった、典型的な極地形式登山を実施した。



TBC スパシからムスターグ・アタ BC を目指してトレッキング開始

C1 (5300 m) を氷河末端部に設けた。C1 から上はすべて氷河上となり、人間を飲み込みそうな小型のクレバスが所々に口を開けていた。吹雪やホワイト・アウトの中での行動は危険だ。C1 と C2 (6000 m) の中間に大きなクレバス地帯が横切り、4ヶ所は底なしのクレバスだった。C2 と C3 (6700 m) 間は広大な雪原を登るのみ。

C3 に荷上げの後、BC で3日間の休養をとって、7月23日にアタックに出かけた。C1、C2、C3 にそれぞれ1泊後、7月26日早朝にC3 を出発。広い雪面の登りが続き、何度か幻の頂上に迷わされたが、14時30分に頂上に立つことができた。下山途中、ホワイト・アウトになることもあり、広大な雪面のためトレースを絶対に見失わないよう慎重に下る。こんなに登ったかな、と思うほど長い長い下降の末、19時30分にC3 に帰還した。

私は両足指に、池谷氏は手指に凍傷を負っていたので、翌日はBCまで一気に下山した。とにかく寒い山だった。C3 を出発後、太陽が照り出した8時過ぎの気温がマイナス21℃であったことから、C3 の早朝はマイナス25℃以下だったと想像された。

高所順応については、慎重に時間をかけて実行した。6

月8日、富士山の日帰り登山を実施。その後、新宿に開設されたばかりの旅行会社の低酸素室にも出向いた。中国入り前日に宿泊地のソストからクンジェラブ峠(4600m)まで車で往復し、無人の峠を散策して低酸素の高所に体を晒した。スバシとBCで高所順応山行後、バルス・オキシメーターによるSPO<sub>2</sub>(動脈血酸素飽和度)の計測結果も、体が順調に高所に順応していることを示していた。徹底した口細め呼吸が功を奏し、登降時に特に高度の影響を感じることがなかった。7000mを超えても歩幅を縮めて歩き続け、一度も立ち止まって深呼吸するような苦しい思いもせずに、快調に頂上に立つことができた。

BCには100近くの大小テントが張られ、たくさん登山者がいた。我々は氷河上を終始アイゼンで行動したが、彼らはほとんどが山スキーで登降していた。BCには食堂も開かれ、公募隊によっては全員が食堂で飲食していた。

**2003年夏、バルトロ氷河、ゴンドコロ峠越え** カラコルム

期間…7月18日～8月15日

同行者…8名、G…1名、C K…1名ほか

前年、ムスターグ・アタ登頂時に足指7本が凍傷にやられ、半年後も土踏まず辺りまで血の巡りが悪く冷たかった。そんなことで高所への登山は諦め、念願の一つだったバルトロ氷河トレッキングとゴンドコロ峠越えを実行した。

7月20日、イスラマバードから車でカラコルム・ハイウェイ経由チラスで1泊し、スカルド入り。車でトンガルまで入り、トレッキングが始まった。

ポーター70人、ニッパ・トラベルのスタッフ8人を含む86名の大キャラバンだ。初日はトンガルからアスコレ經由コラホン泊。その後、ジョラ、バルデマル、パイユ(2泊)、ホブツェ、ウルドカス、ゴロ2でそれぞれ幕営し、コンコルディア(4450m)到着。

初日、少し雷雨に遭ったがその後は好天続きで、パイユ後はバルトロならではの景観が続出した。トランゴ・タワー、ユリビアホー、グレート・トランゴ、ネームレス・ピーク、カテドラル、ブロード・ピークが。そして、ホブツェ後はムスターグ・タワー、ロブサン・スパイヤール、ピアンゲ、GⅣ、GⅡ、クリスタル・ピーク、マーブル・ピーク、マッシュブルムが見えてきた。凄い景観に一日の苦勞が報われる。ゴロ2後はK2、ゴドウィン・オースチン氷河が間近に迫り、バルトロ・カンリが氷河の奥に顔を出し

ていた。

コンコルディアで2泊した。半径15km以内に6500m以上の針峰や巨峰が41峰あり、8000m峰が4峰ある。これらの峰々に囲まれ至福の時を過ごした。

9月4日、私たち3人はゴンドコロ峠を越えてフーシェ村に降るべく、ムニール・キャンプに向かった。ほかの5人は往路をアスコレに降った。ムニール・キャンプに到達寸前から1人の動きが鈍った。高所の影響を受けたようだ。呼吸が浅くなった。テント内で夜通し起座呼吸を続け、なんとか翌朝に出発したが、直ちに歩行困難となり意識も鮮明でなくなった。一番大きく、屈強そうなポーターに彼を背負ってもらった。猛吹雪の急斜面の登りで、上部では大きなクレバスが口を開けていたが、暴風雪のゴンドコロ峠(5500m?)に達した。本人の意識はなく、ポーターは心配したが、私が耳元で大声で怒鳴ると少し反応があった。

吹雪の中に目を凝らすと、人がうずくまっている気配があった。数日前から我々の後を追って来たイタリア女性だった。相棒が救援を求めて下山したので待っている、とか細かい声で話す。とにかく立ち上がらせ、フィックス・ロープを絡ませながら降らせた。我がポーターも仲間を背負って

降りるので、私は安全環をロープに通して前後の2人を支えながら降りた。火事場の馬鹿力！よくぞあんな力が出したものだ。長いフィックス・ロープの終点まで来ると、イタリア女性はなんとか一人歩きができた。我が仲間も意識がすっかりしてきた。ゆっくり歩かせながらフュースパン(4485m)にたどり着いた。1999年に幕営した思いの場所だ。

仲間は峠を越える前から意識を失い、失禁して尻から漏れているのが臭いで分かっていた。よくぞ生きていたものだと言ったが、夜半にテントから独りで抜け出し、氷河の中を徘徊していた。不在に気づきテントから飛び出して暗闇を見たところ、真つ暗な氷河上の100mほど先にヘッドライトの灯りが見えた。危険で助けに行けない。誘導のためテントを明るくしたら、随分時間がかったがテントに戻ってきた。太股から下は凍りつくような水にずぶ濡れだった。位置から見ても、何度も氷河表面を流れる水流を渡ったはずだ。一步滑れば、ムーラン(氷の縦穴)から氷河の底に流れ落ちただろうと思うとゾットとした。

1日休養し、翌日サイチョーで幕営後、フーシェ村からジープでカブルーに入り宿泊。そして8月8日、振り出しのスカルドに帰着。直後に往路を下山してきた5人も全

員、元気に下山してきた。

前年にアメリカがアフガニスタンに侵攻したので、ヨーロッパからの登山者やトレカ―は皆無。パキスタンの医療機関に勤務するイタリア人2人に出会っただけの、静かで綺麗なバルト氷河を堪能した。

**2004年秋、シシャパンマ中央峰(8008m)** 中国・チベット自治区

期間…9月1日～10月7日

同行者…大蔵喜福隊長以下7名

2年前にムスタグ・アタ(7546m)を無酸素で登り、特に息切れもなく登頂できた経験から、8000m峰も夢ではないと意欲が湧いた。通い慣れたカラコルムの山、昨年もその鋭鋒を目前に見たGⅡ峰(8035m)を第1候補とした。ニツパ・トラベルを通じて、登山許可を取った隊から1人分をシェアして欲しい旨お願いしていたが、適当な隊が見つからなかった。

この7年間、連続してカラコルム、ヒンズー・クシユ、ムスタグ・アタに、リーダーとしてJACの仲間たちと出かけていた。前年、ゴンドコ口峠を越える際に一人が高度障害で瀕死の重傷に陥り、隊長の重責を痛感し、今後は

単独か、あるいは一隊員として気軽にヒマラヤ登山を満喫したいと考えるようになった。

やっと仕事から解放された。JAC理事時代から大蔵喜福氏に退職後、ヒマラヤに同行させて欲しいとお願いしていた。秋にシシャパンマに行くとのことで、退職翌日から猛特訓し、体力を強化した。主峰は8027mであるが、中央峰(8008m)を目指した。

カトマンズから飛行機でラサ入り。ラサから高所順応を兼ねてチベット高原を西にシガツツェ、ティンリ經由約1000kmをドライブして、10日にTBC(5000m)に到着した。陸路から先行していたガイドたちも元気になり、早速幕営。シシャパンマが次第に全容を現わす。かなりの鋭鋒である。夜半から雪、明け方には数cmの積雪あり。

隊荷運搬用ヤクの手配が付かず、2日の待機。ヤク34頭に荷を積み、中間デポ地に幕営後、14日、ABC(5700m)を設営。ヨーロッパ系登山隊の大小テントが約50張ち並んでいる。各地で大きな氷河を見てきたが、このヤポカンチャロ氷河の整然と並んだ氷の三角錐の幅と奥行きには圧倒される。下部では、三角錐の高さが20mを超えてい

るものも少なくない。

15日、休養日。ソーラー発電で情報を取るべく高いアンテナも設置し、その後上部で活動するシェルパたちとの交信にも役立った。食堂テントには電灯が点され、3人用テントを個人用に使用し、快適だ。

シェルパはルート工作とデポ地へ荷上げ。隊員はC1方面に偵察を兼ね高所順応に務め、酸素マスク使用の講習会、装備の点検とユマール、ビレー用ロープの使用訓練、酸素シリンドラーに接続していないが、酸素マスクを装着したまま就寝した。

安全祈禱を実施。ABCの高度には完全に順応した。一昨日の結婚記念日、昨日のワイフの誕生日に続いて、20日に69歳の誕生日を迎えた。8000m峰の山麓で誕生日とは、なんと贅沢なことか。夕食後、直径30cmを超えるバーンデー・ケーキがテーブルに運び込まれ、隊員、シェルパ、コックのみなどご馳走になり、古希の祝いを受けた。

その後、シェルパは荷上げに勤しみ、隊員は高所順応に務めた。23日、ABCを出発、モレーン最上部近くのデポ地に露営。翌日、氷河上のセラック帯を横断。見た目には非常に綺麗な現象だが、すべてが着水でできた三角錐。凄いい傾斜があり、ルート・ファインディングも難しい。スリッ

プすればセラックの基部まで滑り落ち、そこには氷の融けた冷たい水の流れが待ち受けている。あつという間に、大きく口を開いているムーランからクレバスの底に吸い込まれるであろう。トラバースの幅は直線距離にして数百mだが、1時間半を要した。プラトール上の雪面に設営したC1(6300m)に入った。

25日、快晴。出発から毎分1ℓの酸素を吸う。酸素シリンドラーが満タンで4・7kg、調整器が1kgとして合計5・7kg。テルモス、食料、薄手羽毛服も入れると、ザックは結構嵩張り重くなる。急な氷壁を何度か登り、氷雪上のC2(6700m)に入った。

二重レンズのゴーグルは、酸素マスクから吐き出される呼気が二重になったレンズの間に入り、水滴が付着して凍り付き、前方が全く見えなくなる。また、予備に持参したサングラスも、登っている間や横風が吹いているときには曇らないが、平坦な所では前の人の靴も見えないほど呼気が水滴になり、閉口する。

26日、快晴。重荷を背負うシェルパたちと一緒にイースタン・チームの最奥方向を目指す。酸素毎分1・5ℓで出発したが、この雪・氷・岩がミックスした急斜面の途中で、毎分1ℓに切り替え、稜線までの登りはかなり苦しいもの

となる。北東稜の稜線に登り着いた所にC3(7300m)を設営。日没が迫り、のんびりと景観を楽しんでいることもできない。当夜も6人用テントに6名が入る。明日の好天を祈って寝袋に入る。

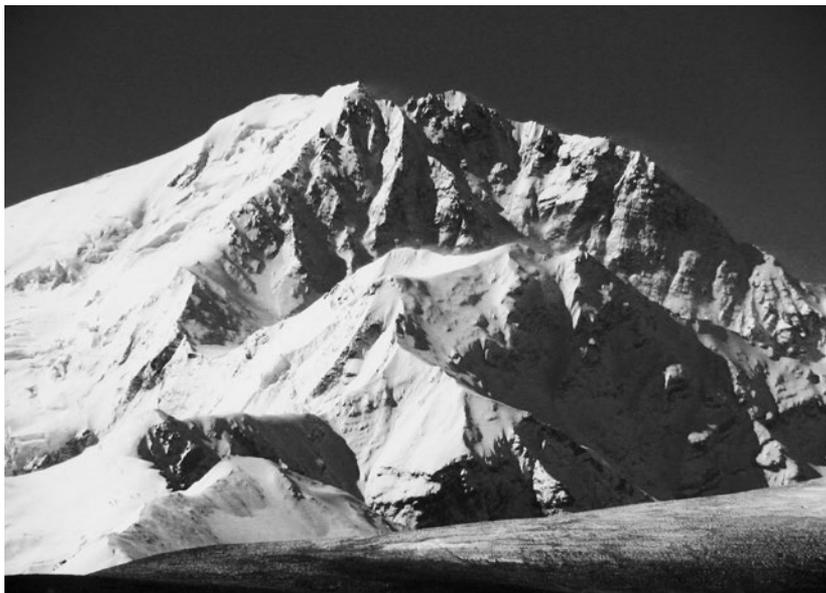
27日、未明1時起床。昨夜は全員毎分0・5ℓの酸素を吸ってシユラフに入ったが、熟睡した仲間はいないようだ。幸い今朝は風もなく、星空が無限に広がっている。暖かいお茶を飲み、多少の食べ物腹を詰めて、テントの中でインナー・シユーズとプラブーツ、中綿入りのオーバー・シユーズを履き、ユマール、8環、カラビナなどガチャ類2kgを着けたハーネスを腰にがちりと取り付けて、テントの外に出る。

アイゼンを着け3時45分出発。ヘッドライトに照らされ、両側が切れ落ちた急傾斜のナイフリッジを先導のシエルパが力強くラッセルしながら登っていく。私たちは酸素を毎分2ℓ吸ったが、登るスピードが速く楽ではない。やがて東の空が白んでくる。北東稜の稜線から東、北、西方面は何も遮るものはない。東方にチョー・オユー、エベレスト、ローツェ、マカルーといった8000m峰が並び、その右にも大きな山塊を見ることが出来る。7700mを超える辺りから、益々傾斜が急になり、積雪も深くなる。

目の前でシエルパたちは腰まで没する新雪のラッセルに苦闘しているが、私たちにはなんの手助けもできない。7800m辺りから岩峰にも奮戦しているが、彼らは嬉々として格闘しているように見える。このラッセルと氷の付いた岩場で、シエルパたちが奮闘する様子を目前に見ることは、感動的で忘れることのできない光景となった。まさに己自身もルート開拓に参加しているような錯覚に陥る、臨場感溢れる体験だった。

凍り付いた岩壁を登っているとき、突然、右足のアイゼン・バンドが緩んだ。足を動かせばアイゼンは岩壁から一気に落下するだろう。体にはハーネスからスリング2本がフィックス・ロープに取り付けてあるが、凍り付いた岩の上を滑り落ち、数m下のフィックス・ロープ末端の垂直に近い岩壁に宙吊りになるのは間違いない。幸い大蔵隊長が数m下から登ってきたので、アイゼンを着け直していただき、ことなきを得た。ルート工作で登攀が滞っている間に東のエベレスト方面、北のチベット高原に散在する雪を頂いた白い山々、西には地球から突き出すようなマナスルなどたくさん的高峰を何度も眺めていた。

隊員はフィックス・ロープにスリングを掛けて11時30分、順次シシヤパンマ中央峰の頂に近づき、ピークが狭いため



BC入り手前から見たシシャパンマ中央峰（尖ったピーク）と本峰（その左）



イースタン・クームのC2から見たシシャパンマ中央峰頂上。その左が北東稜

交代で頂上に立った。

頂上では「やつと登った、とにかく登頂できて良かった。しっかりと気を緩めずに下山しよう。」と冷静に考えていた。嬉しい気持ちはあったが、特別に感激などなかった。ゆっくり休む間もなく、写真を数枚撮って下山にかかる。

ゴーグルやサングラスは、下山を始めると瞬時に曇ってしまう。岩場を懸垂下降中にサングラスが完全に曇り、斜面と足場が全く見えなくなり、手探りの下降となって非常に危険であった。その後、急傾斜の稜線を見えなくなり、腕絡みで下降するときも足場と斜面が見えなくなり、精神的に非常な疲れを覚えた。その後は雪盲覚悟でサングラスを外してC3まで降る。

C3で半時間ほど食事・休憩をとり、体力を回復させ急斜面をイースタン・クームに向かって降る。イースタン・クームに降り立ってから緩傾斜の雪面上に残された長いトレースをC2に向かって、快い疲れと満足感にゆっくりと歩を進める。みんなが同じ調子で歩いていたのは、同じような心境だったのだろう。テントの手前で、最後の残照がイースタン・クームの谷間全体と今日登ってきた北東稜、そして、見覚えのある頂上付近の岩峰群を真っ赤に染めた。18時20分にC2着。隊員全員が寒い中に立ち尽くし、残

照が消えゆくまで余韻を楽しみ、感激していた姿を忘れることができない。初めて8000mの頂上に立ったこの記念すべき日は、69歳と7日。我々は今秋の初登頂隊となった。

10月1日、ABCからTBCに撤収。2日、TBCからマイクロ・バスでザンムーまで下り、3日には国境を越えてカトマンズに帰着した。

**2005年春、マナスル(8163m)** ネパール、ブリ・ガンダキ

期間…4月15日～6月2日

同行者…大蔵喜福隊長以下6名

日本山岳会創立100周年マナスル登山隊に参加した。マナスルは学生時代から憧れの山だ。平素の特訓やまだ公開していない「三浦BC」常圧低酸素室に3度通うなど万全を期した。壮行会が新宿「中村屋」で開催され、私も「なんとか頑張つて、登る先がない所まで行って来ます」と述べた。

チベット仏教寺院で安全祈願。19日、チャーターした大型ヘリコプターでカトマンズから35分でTBC(サマ村、標高3580m)着。TBCに降り立つと、待望のマナスル

ルが迎えてくれた。ヘリコプターの2回の往復で装備・食料など4tと隊員、ガイド1名、クライミング・ガイド6名、コック2名、キッチンボーイ1名が一举にTBCに集結。翌日から隊員は高所順応に、ガイドたちはルート開拓と荷上げに励んだ。

23日、ポーター128人で約4tの荷上げ。標高差1300m余り、結構長い道のりだ。雪上にBC(4900m)を建設。安全祈願を実施後、26日、ガイドたちはC1を建設。

5月17日、朴元総隊長が29日、ヘリコプターでサマ村入りするとメールあり。明日、誕生日を迎える長女に誕生日祝いのメールを発信。

18日、BC入り後、昨日まで毎日悪天候の中、ナイケ・コルに登攀ギア類のデポなど8回の高所順応行を行なった。ガイドたちは10回以上の荷上げをこなし、すでにC2からC3も建設した。快晴に快く出発し、ナイケ・コル着、デポを取り出し、ハーネスを着けている間に吹雪き始め、雷鳴が聞こえ出す。通称黒岩部分に取り付けられた1000m余りのフィックス・ロープを頼りに、雪の急斜面を登り切るとC1サイト(5750m)だ。C1では夕暮れまで大雪と雷鳴が轟き、閃光が走った。テントサイトが稜線上

にあり、落雷に全く無防備な状態で不気味だ。明日、我々とC2に同行するため、2人のガイドが大雪を衝いて上からC1に戻って来た。上は猛烈な吹雪でC3にいる3名の内、2名は軽い凍傷を負っていると報告あり。午前中、スペイン隊など14~15人がC2に向かっているのが良く見えたが、落雷を伴う猛吹雪に遭って、C2手前から暗くなる寸前に全員が打ちひしがれてC1に退散してきた。

19日、快晴下の目覚めだ。C2にいるガイドと無線が通じ、明日C2に上がって来るように連絡あり。早速、テント内で酸素の量などを念入りにチェックし、シリンドーをザック内に固定して明日に備えた。C1から外国人部隊全員が撤退、下山した。今春、最後までマナスルに残ったのは我々のみ。いよいよ気合が入る。

11時、C3の建設に向かった先ほどのガイドから無線連絡あり。「C3にデポした2000mのザイルとアイス・バーがすべて雪崩で流された。C3のドイツ隊のテント群も雪崩が吹雪で飛ばされ、影も形もなくなっている。明日の出発は見合わせて欲しい。昨日、C3からC2に戻る途中で猛吹雪に襲われ、C2が見つからずに5時間も探しあぐね、2名は手の指に凍傷を負っている。昨夜はビバーク状態で3名とも体調は良くない」と。

C2への登路は、このたびの悪天候により大きなダメージを受けた。深雪のラッセルと雪崩、クレバス地帯のフィックス・ロープの張り直し、午後には必ず発生する雷など難問が山積みされ、無理してC2入りはできても先の見通しがないと、急遽下山の決断を下す。我々は晴れている内にと重荷を背負ってフィックス・ロープ辺りまで歩き出したとき、山が荒れ始めた。雲が湧いてマナスルに向かって流れ始める。大雪原を思わせる氷河地帯の緩んだ雪に足を取られながら、逃げるようにして14時、BCに帰着。大粒の雪がテントを叩いていた。

20日、雷と吹雪の中、ガイド5名が重荷を担いでBCに帰幕。翌日、この5名はナイケ・コルまで荷下げに往復し、11時過ぎに大きな荷物を背負ってBCに戻って来た。明日の撤収を聞きつけ、現地人2人が残った食料の買い付けにBCまで登って来た。こんな雪に覆われた氷雪の世界にまで販売人が登ってくるとは、凄いものだ！ワイフから皆さんに「個性の強い夫が大変お世話になったことでしょう。お付き合いありがとうございます」と感謝のメールが届いた。22日、53人のポーターが到着し、1人当り30kgを担いで撤収を開始。サマ村TBCに全員無事下山。

24日、来シーズンの再起を期して、北面からマナスル上

部を観察するために出かけた。サムドと石室に宿泊し、ルキャ峠を往復。ナイケ・コル、C1、マナスル氷河上部、C2、C3、C4予定地、マナスル本峰へのルートを北面から頭に叩き込んだ。

29日、快晴。カッコーの鳴き声で目覚め、大型のヘリに乗って雨や雪に祟られたマナスルに別れを告げた。

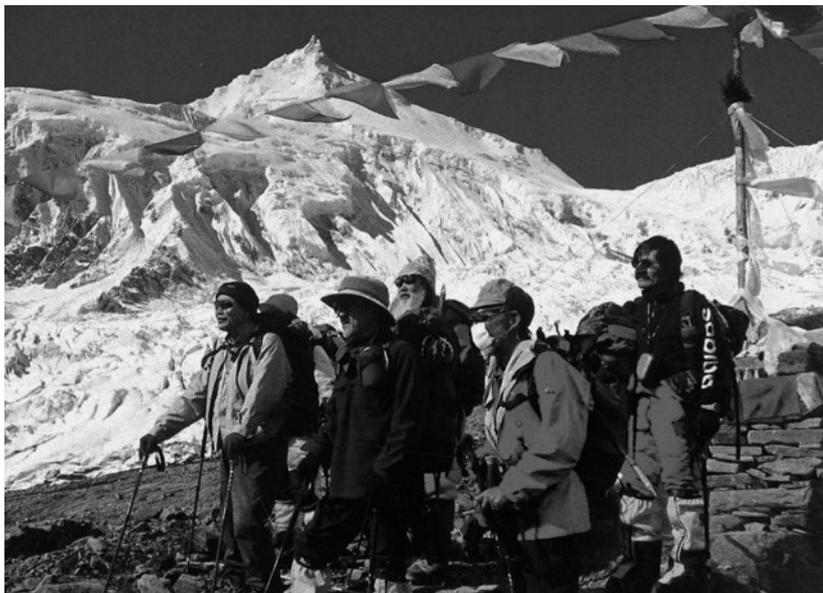
因みに、サマ村に入った日からマナスル登山、そしてサマに帰着までの34日間、快晴と曇天の日はそれぞれ1日、後の32日は、早朝は快晴ながら8時過ぎからガスが上がってきて雨、雪、雷鳴を含む猛吹雪など、最悪の天候だった。

## 2006年秋、マナスル(8163m)登山での大失態

期間…9月8日～10月11日

同行者…大蔵喜福隊長以下6名

マナスル初登頂50年、日本・ネパール国交樹立50年。昨春に続き今年もJACの仲間と出かけた。重荷を担ぎ富士山にスキー登山を含め3回登り、常圧低酸素素で高所順応促進に励んだ。また、近くの東京大学大学院柏キャンパス勤務でオリンピック選手のアドバイザー、大谷勝大学院教授の指導を受け、出発までの4ヶ月間で下腿、上腿はもちろん、腕や胸、腹までしっかりと筋肉ができていたのが



マナスルをバックに BC に集合した登山隊



秋のマナスル氷河はクレバスだらけ。写真は私が落ち込んだクレバス

自覚できた。在カトマンズ・グルカ婦人会主催のマナスル初登頂50年記念歓迎会に招かれた。

このように心身ともに絶好のコンディションでマナスルの山麓に降り立った。平素の生活で塩分は控えめの上、B Cに向かう途中で雨となり、雨具を着て大汗をかいた。夕食前はすごい空腹感があった。夕食を食べ始めたところ、なぜか唾が出てこない。数日間このような状態が続いた。『登山の医学ハンドブック』（杏林書院刊、日本登山医学研究会編）を藁をもつかむ思いで読み返した。電解質の不足が原因らしい。急遽、ポカリスエットを口にした。

翌18日、高所順応のためマナスル氷河を遡行した。ナイケ・コルが見える辺りにあった幅40cm、長さ2mほどのスノー・ブリッジを渡るべく右足を踏み出した瞬間、足下のブリッジの一角が崩れて8mほど落下。山梨氏が止めてくれたが、蒼水の底なしのクレバス内で宙吊りになった。幸い先行仲間が協力して引き上げてくれた。28日、食欲も徐々に快復しアタックに出発したが、B Cを出て数時間後、ナイケ・コルに近づいたときに左膝の後ろから左腰、左尻の後ろにかけて、万力で締め付けられるような衝撃を感じた。異様な衝撃のたびに立ち止まり、貧乏揺すりをしながら痛さが消えるまで待った。意識はすっかりしており、ク

レバスを飛び越えたり、クレバスを大股でまたぐと、腰から膝までどころか左足の指先から左半身全体がガチーンと固まってしまうような気がした。このような衝撃が、C1入りするまで10回ほど起こった。C1（5750m）のテントに入った直後、左足を伸ばそうとした瞬間に、今にも足先から腰にかけて固まりそうな衝動が数分続いた。やがてこの衝撃も自然に消滅した。テント内は狭い上に薄い銀マットが1枚敷いてあるのみ。足腰を温めるどころか、身体を冷やしたまま眠るしかなかった。

このような体調に鑑み、翌日のC2入りは諦め下山の途について。B Cに帰着して、再び『登山の医学ハンドブック』を読み返したところ、この締めつけるような衝撃は「筋肉硬直」と呼ばれるもので、やはり典型的な電解質の不足、特にNa不足が原因であることを知った。

因みに、隊長を含む3人は10月1日、マナスルの頂上に立った。

2007年秋、チヨイ・オユー（8201m）中国・チベット自治区

期間…9月4日～10月12日

同行者…8名



BC から見たチョー・オユー。強風で頂上の笠雲が見事

アドベンチャーガイズ社の公募隊（大蔵喜福隊長）に参加した。

チョー・オユー（8201m）は1974年秋、3年近く勤務したアブダビから帰国の途上、ネパールに立ち寄り、トレッキング先のゴキョから眺めた。新雪に覆われた非常に綺麗な巨峰として、我が目に焼き付いている。まさかこんな山に踏み込むとは夢にも思っていなかった。

なお2006年秋、マナスル登山から帰国後、不整脈に気付き、山仲間のドクターから日本医科大学病院を紹介していただき、循環器系の高山守正先生を訪ねた。種々検査の結果、翌年1月にペース・メーカーを植え込んだ。入院中から筋肉を落とさないように心がけ、主治医の高山先生が一般登頂者を対象に調査（SPO2、脈拍、心エコーなど）する「NPO富士山観測所を活用する会」の高所登山研究にも同行して、富士山頂で2泊するなどトレーニングを重ねた。

カトマンズからラサまで飛行機で移動。車でシガツツェ、ティンリ、南下してTBCシャブラ（4950m）へ。キャラバンで中間キャンプ地バルン幕営後、BC（5700m）入り。チョー・オユーの頂上も見え、ネパールとの国境ナンパ・ラの雪原が目前に開け、BCとしては最

高の場所だ。5日目にはいったんC1(6450m)入り。翌日6700m地点まで登り、首が痛くなるほどC2、C3へのルートを眺め、頂上へのルートを頭に叩き込み、ABCに戻った。

翌日から6日間、一带は猛吹雪に見舞われた。その間、個人用の小さなテントの中で寝袋にくるまるしか仕方がなかった。C1の我が隊のテントはすべて健在だが、ラッセル・ブライス隊など大手公募隊のテント150張は絶滅に近い状態で、登頂活動継続は不可能となり、彼らは撤収を決めた。

10月1日、待ちに待った好天に恵まれ、第2次隊の私も朝食をしっかりとってC1に向かう。急傾斜に入った直後から調子が上がらず、特にデポ地(6050m)から上は、気合を入れても登高スピードが落ちる一方になった。特に呼吸が苦しいのでもなく、体全体に力が入らない感じ。初めての経験だ。18時半にやっとC1に到着した。先月22日の高所順応山行時に苦もなく登った同じルートで、2倍ほどの時間を要した。同行の高齢の一人が、22日は私と同様に順調にC1入りしたが、当日は私と同様につくりとペースが落ちていた。テントに潜り込み、夜は1本の酸素シリランダーからパイプを4本枝分けして、各自毎分0・5

ルの酸素を吸って眠った。

翌日、マイナス気温17℃。起床時のSPO2値も高所には順応している数値だ。安心してC2に向かって出発した。10日前に登頂を確信した地点で立ち止まって、登頂ルートをじっくりと眺めた。後数時間でC2、翌日はC3、そして翌々日は登頂して折り返す。登頂後の疲れた身体で、急な氷の斜面を2日連続下降することができるのか。

登頂のルートを執拗に眺めた。昨夜の嘔吐が気がかりだ。今までにヒマラヤ登山でこのような気分になったことはない。快晴無風で、チョー・オユーは全貌を目前に曝け出しているが、自分自身の気分は明るさを失い、元気に生還できる自信が揺らいでいる。このような気持ちで後4日間、高所での連続行動をするには無理があると判断し、また、氷雪の稜線を独りで引き返すにはこの辺が限度でもあり、下山の決意をした。18時少し前、無事にABCに帰着した。

第1次アタック隊の3人は10月3日に、第2次隊は4日、隊長ほか1名が登頂した。

2008年秋、チュルル最東峰(6038m) ネパール、マルシヤンディ

期間…9月11日～10月15日

同行者…単独行、G…1名、CG…2名、CK…1名

ネパール政府公認の「トレッキング・ピーク」の中で、入山者の少ない山を目標にした。

9月14日、中型バスでカトマンズからガイドや登山用具とともにポカラ方面に向かい、途中、デウムレから北進し、舗装道路の終点ベシシヤハル(760m)へ移動。翌日からキャラバンを開始した。ナデイ、ジャガト、ダラパニ、コト、ピサン、フムデの各ロッジに1泊、そしてカルカで幕営1泊。22日、突然の風雪に見舞われながらもBC(4685m)に入った。

デポ地(5130m)への荷上げ、AC(5370m)の建設後、9月28日、チュルー最東峰に立ち、目前に展開するアンナプルナ山群の神々しい姿に感動した。

カトマンズ出発からカトマンズ帰着までの25日間、日本人に一人も会わない静かな旅だった。9月20日は私の誕生日。キャラバン中だったが、嬉しいことに畑にたわわに実るリンゴを使ってコックが美味しい「リンゴ・パイ」を手作りし、皆で73歳の誕生日を祝ってくれた。

2009年秋、タシ・カン(6386m) ネパール、ドル

ポ

期間…9月10日～10月16日

同行者…単独行、G…1名、CG…1名、CK…1名、アシスタント(以下、ASTと略)…1名

9月13日、カトマンズからジープでポカラ経由、ベニに到着。翌日はカリ・ガンダキ沿いに登山基地となるマルファ村まで入った。

16日から毎日、標高差が1000mを超す登りながら高所にも順応でき、予定より1日早く19日に目的のタシ・カン山麓にBCを設営した。翌20日は私の74歳の誕生日。BCで1日ゆっくりと過ごした。

翌日からガイドたちと一緒にルート偵察とルート開拓に入り、登頂できる確信を得た。22日、タシ・カンI峰とII峰間の鞍部から東に流れ、途中でII峰の基部沿いに南に流下する氷河の舌端部から、彼らとともに氷河上を終日廻行した。コンティニユアスで登り続けて、I峰とII峰の鞍部まで出た。鞍部や稜線上は風が強く、50mほど戻って比較的傾斜の緩い斜面を削りACを設営し、明日のアタックに備えた。1つのテントでガイドと過ごしたので、頻尿ぎみの私の動きに、彼らは睡眠不足だったに違いない。

23日、快晴無風で絶好の夜明けを迎え、ロープで結び合  
い、3人でタシ・カン南稜の末端に出た。稜線の西面は氷  
雪の急斜面で、稜線上には大きな雪庇が頂上まで続いでい  
るのが観察された。前日の偵察で、この発達した雪庇の東  
側に回廊のような雪面が続いているのを確認している。急  
斜面の稜線上を雪崩の発生やスリップ事故を心配し、雪庇  
の崩壊や踏み抜きに神経をすり減らしながら登頂するよ  
り、この回廊の方が登降ルートとして安全と判断した。

回廊の中ほどから全長600mのフィックス・ロープを  
セットしたが、頂上200mほど手前でフィックス・ロー  
プを使い果たし、コンティニューアスで安全を確保しながら  
登った。回廊が狭くなり、ついになくなった。キャップ状  
の氷雪の塊を登り切ると、そこが雪庇の上の頂上そのもの  
だった。

頂上の雪庇の崩壊、陥没の危険性もあり、交代で頂上に  
立った。頂上からはマナスル、ピーク29、ヒマルチュリ、  
その手前に昨年登ったチュルー山塊、アンナプルナの峰々、  
テリリツォ、ニルギリ、ダウラギリ山群、トウクチェ、そ  
して西の奥や西北、北部にも白いヒマラヤの峰々が輝いて  
いた。

マルファア村から50mも登ると住居も全くなし。登山中は

数人の馬方に出会っただけ。まさに人里遠く離れ、登山者  
にも忘れられた山塊だ。

カトマンズ帰着直後に、ヒマラヤ・データ収集家、エリ  
ザベス・ホーリーさんのインタビューを受けた。彼女から  
出発前に「タシ・カン峰は2002年、初登頂以来4登さ  
れているが、その後05年のフランス隊と06年スイス隊は、  
それぞれ1人が死亡するなどでBCも建設できず、06年フ  
ランス隊は山塊にたどり着けず、また、同年ドイツ隊は登  
頂に失敗しているのので、気をつけて登山をするよう」と忠  
告を受けていた。下山後のインタビューでは「よくぞ登っ  
た！ おめでとう」と喜んでくれた。

**2010年秋、タルプ・チュリ(5663m)**   ネパール、  
アンナプルナ・ヒマール内院

期間…9月20日～10月16日

同行者…単独行、G…1名、CG…1名、CK…1名  
アンナプルナ山塊を周辺部から眺めてきた。地図と睨  
めっこしている内に、内院のど真ん中にあるタルプ・チュ  
リに気がついた。

カトマンズに入った翌早朝、ポカラに飛んだ。ガイドた  
ちとポカラ空港で合流。車で2時間、登山出発点になるナ

ヤプール（1070m）着。早速、キャラバンを開始し、シャウリ・バザール、チヨモロン、ドバン、ダウラリのロッジで宿泊後、マチャプチャレBC經由アンナプルナBC（4130m）着、ロッジ泊。各ロッジで毎食タルバートと呼ばれる典型的なネパール式定食を食べたが、美味くて飽きなかった。

翌日、休養。内院の壁、パタール・ヒウンチュリ、アンナプルナ南峰、主峰と主峰群、シンガー・チュリ、マチャプチャレなどがBCを取り巻き、そのど真ん中に出臍のように突っ立っているのが、今回登攀目的のタルプ・チュリだ。

28日、南アンナプルナ氷河を渡り、急峻なゴルジュ帯を登ってAC（4700m）テントを設営。翌日、高所順応と休養。30日、2時40分に出発、氷河を渡り始めると夜が白んできた。タルプ・チュリの肩から連なる稜線へのヒマラヤ巒を呈した蒼氷の壁は、傾斜が50度とも60度とも言われている急斜面だ。この蒼氷に取り付いた直後、左足首に激痛が走った。斜面に足裏を全面フラットに置いても、アイゼンの内側の歯だけで立とうとしても、激痛が走る。試行錯誤の後、足首を曲げずに伸ばし、前爪の2本だけを蒼氷の斜面に蹴り込めば、なんとか登ることができそうだった。



タルプ・チュリ。足首の激痛が治まらず、これだけを残して涙の撤退

ガイドの設置したフィックス・ロープにユマールを掛け、右手はバイルを使い、1ピッチが50m、4ピッチ2000mを登り切り、冷汗ものながら稜線に出た。

タルプ・チュリ頂上まで残りは2000mほど。まだ朝の7時15分だ！ガイドたちは「30分あればゆっくり登れる。少し休んでいる間にルート作業をするので、登ろう」と盛んに勧めてくれた。確かにこのルートの最大の難関である核心部は突破した。後はトレースのない純白のスロープを登るだけだ。時間は十分あったので、1時間ほど足首のマッサージをするなど回復に努めた。しかし、完全な回復には至らず。無理して痛みが悪化した場合、ガイドに確保してもらって下降できるような、生易しい蒼水の斜面ではない。自力で降りるしかない。8時半、そんなことで、主目的のタルプ・チュリ頂上を目前に登頂を断念した。

たどり着いた稜線上の肩から下では見えなかったアンナプルナII、IV峰を望見することができ、目前は内院を取り囲むパタール・ヒウンチュリ、アンナプルナ南峰とその中央峰や北峰、ファング、アンナプルナ主峰（8091m）と主峰山群、ロック・ノアール、足元の稜線の先にはヒマラヤ巒が綺麗で、ピラミダ的な山容のシングー・チュリ、グレーシャー・ドーム、ガンガプルナ、アンナプルナIII、

ガンダルヴァ・チュリ、マチャブチャレなど、内院の壁が屏風のように一段と競り上がった顔を見せ、足元まで含めて全身を見せている。どの峰も下部は懸垂氷河が大小のクレバスを露呈し、荒々しい氷河となっている。凄い景観だ。この景色を独り占めするのは本当に勿体なかった。

蒼水の壁は4回の懸垂下降。左足は前のツアツケ2本だけを使い、足首を庇いながらも降り切った。少しデビエーションして、第2目標のラクシ・ピーク（5200m）に立った。

登頂は叶わなかったが、豪華な内院の壁に囲まれた中で登山活動は、忘れ難い思い出になった。

**2010年、ダーズリン、シンガリラ尾根からカンチェンジュンガ展望** シツキム

期間・11月17日～12月1日

同行者・ワイフを含め5名

山岳部現役時代に読んだ戦前のヒマラヤ遠征記の多くは、ダーズリンから出発し、タイガー・ヒルからカンチェンジュンガを仰ぎ見て感動した様子が書かれていた。「一度は行ってみたい」と五十余年思い続けてきた、同世代のJACの仲間たちと出かけた。

11月17日、デリー到着前に機窓から夕日に輝くヒマラヤが見えた。翌日、国内便でバグドクラへ移動後、クルセオンまで車で入り、19日、トイ・トレインでダージリンへ。翌早朝、タイガー・ヒルに車で移動し、展望台に入る。夜が白み、目前にカンチェンジュンガが全貌を見せた。感激し、至福の時を過ごした。

21日、2台のランド・ローバーに分乗し、マナーバンジャン經由インド・ネパール国境線上のシンガリラ尾根上を走り、ガスが流れるサンダクプー(3636m)に到着、立派なロッジに入った。翌未明、2000mほど石畳の道を歩き、小さなピークに登った。夜が白み出した。午前6時にはご来光が始まった。東北にプータンの山並み、シンガリラ尾根の先にはカブルー、カンチェンジュンガ山塊、ジャヌーなどは鮮明だが、その左の大きなマカルー、エベレスト、ローツェ、チョー・オユーなど8000m峰は頂上のみガスの中。そして、チベットの山並みの最後に、しかと目に焼き付いているシシャパンマが綺麗に見えていた。

いつまで眺めていても飽きない。朝食後、直ちにシンガリラ尾根のトレッキングに出た。余りの豪快な光景に見惚れて立ち止まってはシャッターを切り、また50mも歩けばシャッターを切り、足が進まない。1時間ばかりトレッキ

ングを満喫した。

五十余年來の念願だったタイガー・ヒルからの景観に心底感激したが、サンダクプーからの感激は、その何倍も凄なものだった。

その後、シツキムと旧英国インド政庁の避暑地、シムラを訪ねて旅を締めくくった。

**2011年秋、パルドール(5928m)** ネパール、ガネ

ツシュ・ヒマール

期間…9月23日～10月24日

同行者…単独行、G…1名、CG…1名、CK…1名、

A S T…1名

天気が良ければ、カトマンズ空港から真北に見ることができるとガネツシュ・ヒマール山塊の一番右端に見える綺麗なピークだ。

26日早朝、チャーターした中型バスで出発。雨で車道が崩壊しているが、シャブル・ベンシ2泊後、ゴテン(2560m)着。ソムダン、ラリ鉱山跡でそれぞれ幕営後、10月1日、BC(4280m)入りした。

2日、悪天が続いたが、初めて白く輝くパルドールが見えた。翌日から荷上げとルート工作、高所順応行を開始。



BCに入って初めて見えてきたバルドールの頂上

5日、ガイドとACに向けて出発し、バルドール氷河を少し廻ったとき、ポーターが複雑なクレバス帯の登攀とスノー・ブリッジの通過が怖くなって、荷物を投げ出し逃げてきた。5300mの予定地を2往復するには時間が足りず、クレバス帯の手前にAC(5150m)を建設した。

6日、快晴。一昨日設置したフィックス・ロープにユマールを掛け、迷路のようなスノー・ブリッジの連続登攀だ。ヘッドライトで照らし出されたスノー・ブリッジは浮かぶように見えるが、スノー・ブリッジの下や左右底なしの大クレバスは、不気味なほど透き通った蒼色を呈している。緊張の連続1時間ほどで氷河本流の上、本来のAC予定地点に出た。薄明かりの中にバルドールが手に取るように見えた。ウインディー・コル方面に向かって斜めに登り、途中から岩峰基部のスノー・リッジに取り付き、II峰の基部(5640m)に9時30分に到着。行程の時間読みをした。

II峰(5743m)の頂上までは石ころと氷の混じった急斜面で、お互いロープでの確保は必要だ。標高差は100mほどだが、最低1時間は要する。II峰からいったん降り、2つほどコブを越えて主峰の基部に降り立つ。主峰登頂には氷雪の稜線の登攀が強いられる。II峰基部から3

4時間かかる。降りも急斜面のため、登りの半分は要るだろう。その上、ACからここまでの標高差約500mの登高に、6時間半を要している。

ガイドにここを最終地点とすると提言したが、彼は絶対昼過ぎには登頂できると納得しない。「私も目の前にそびえるパルドールI峰には登頂できると思う。しかし、クレバス帯の危険なスノー・ブリッジの下降は暗くなる。非常に危険だ。疲れた足、踏ん張りの効かないアイゼンで、幅の狭いスノー・ブリッジを下降することは滑落に繋がる。絶対に避けたい」と説得した。彼も時間切れと状況判断に納得した。

ゆつくりと景観を楽しんだ。東方にはランタン・リルン(7225m)をはじめランタンの山々が間近に見え、その左に大きなシシヤパンマ(8027m)とチベットの山並みが見える。悔しさが込み上げてきた。急な斜面で懸垂下降を数回繰り返して下山を続けた。明るい内に危険なクレバス地帯の下降にかかった。右足がスノー・ブリッジを一度踏み抜いたが、フィックス・ロープのお陰で、クレバスに吸い込まれることなくACに帰り着いた。

ソムダンから奥のパンサン峠を訪ねた。谷の向うにマナスル、ピーク29、ヒマルチュリ、バウダの容姿を見ること

ができた。その直後にブリ・ガンダキの南の方からガスが発生し、ガスは北に向かって流れ、尾根を駆け上がってこれらの山々を覆った。2005、06年にマナスル登山で体験したのと同じ現象だ。

#### 〔番外〕 2012年春、ドロミニア イタリア

期間…3月3日～11日

同行者…JACの仲間を含め4名

1日の休養日を挟んで前後5日間、セラロンダ一周を含む豪快なスキーを満喫した。因みに、リフト券カードのデータでは滑走82km、滑降標高差1万7000mとあった。

7月、富士山頂で2日間過ごすなど高所順応に務めたが下山後、駐車場で休憩中に失神、各種検査の結果、ペースメーカーを植え替えた。猛暑で体調整わず、ヒマラヤ登山は中止した。

2013年秋、メラ・ピーク(6654m?) ネパール、

クーンブ・ヒマール

期間…9月23日～10月24日

同行者…単独行、G11人、CG11人、CK11人

10年ほど前から、登れそうなピークで景観も楽しめると

気にしていたが、ルクラ飛行場からキャラバン2日目、4610mのザトルワ・ラ（峠）を越えることが可能か思案し、躊躇していた。近年、国内外でメラ・ピークの公募登山広告を見かけるので現地を調べたところ、峠の手前4000m付近に茶屋が開業しているとの情報を得た。それで意を強くして出かけることにした。

ルクラからチュタンガ2泊、カルカ・テン茶屋（4100m）2泊、チュリー・カルカ、コテ、タンナ2泊後、10月4日、実質BCのカレー・キャンプ（5350m）入り。カレー・キャンプからメラ・ラBC（5350m）に入つたときも雪。入山以来12日間、毎日雨または雪だった。

幸いその夜半から快晴になり、10月8日、ハイ・キャンプ（5780m）を設営。翌未明2時30分にアタックに出発。メラ氷河の広大な雪原状の緩斜面を登る。夜が明けるところには、東の空高くカンチエンジュンガ山群が浮かび上がり、背後にはチョー・オユー、エベレスト、ローツェ、マカールといった巨峰が屏風のように突っ立ち、バルンツェ、チャムラン、カンテガ、アマダブラム、クスムカングル、キャンシャールなど、凄い鋭峰群も目前にそびえている。凄い景観だ！ 平均して膝上くらいのラッセルあり。外国隊の連中と前後して登ったが、頂上を目前にしたとき、

彼らの多くはBCへの帰着時間を考慮したのかいつの間にか下山の途につき、またはや私たち3人が先頭にいた。

頂上直下へのクレバス帯を越すルート・ファインディング中、どこからか大きな男が現れたが、我々が先行し頂上直下へのルートを開いた。頂上からの垂直に近い蒼氷の氷壁にフィックス・ロープを取り付け、10月9日正午に我々は、足跡一つない汚れなき、2013年ポスト・モンストン初のメラ・ピークの頂上に立った。

氷壁の下で我々の登頂を眺めていたカナダ隊の2人と大男も「フィックス・ロープを使用して登頂させて欲しい」とのジェスチャー。大歓迎してお互いの登頂を祝福し合った。登頂時ににわかには強風と濃いガスが湧き上がり、山頂や尾根の風下に雪煙が舞い始めた。楽しみにしていた頂上からの展望は全く利かず、残念の極みだった。

広大な雪原状の斜面のため、下山時にガスや地吹雪になった場合は、GPSにトレースできた往路を頼りに下山する覚悟でいたが、濃霧は頂上を含む山頂付近のみに限られた。ハイ・キャンプまで戻ったのが16時ちょうど。足腰もかなり疲れているし、空腹を感じていた。登りは人並みの速さで登ることはできるが、膝の具合が完全ではないので、降るときは2倍時間がかかる。ここでザックに残った



メラ・ピーク頂上直下の氷壁にルートを拓く

んとしてでも下山しなければならぬ。

夕暮れの雪原をフラフラになりながら歩いた。日が暮れ、暗闇の中を大小岩石の間を縫ってルージュのコースのように凍り付いたツルツルの急斜面を下る辺りから、足腰の力がなくなってきた。一度スリップすれば、大怪我間違いなし。慎重に慎重を重ねて全神経を集中し、一步一步踏み出していた。その内、下の方から2つの灯りが近づいてきた。私たちのポー

食糧を食べ、仮眠をとって、翌早朝にメラ・ラの前進キャンプを飛ばしてカレー・キャンプに帰るよう考えた。が、ポーターが気を利かせて、キャンプ道具一式をすでにカレー・キャンプまで運び下ろしたのこと。こうなれば、な

ターが、私の帰りが余りに遅いので迎えに来てくれたのだ。とにかく彼らに両腕を抱えられて降りたかったが、下山コースが狭いので、片腕を持ってもらうぐらいだった。一度も止まらず、ゆっくりと歩き続けた。手ごろな岩があっ

たので、1分もたれて休む（岩などに一度腰を降ろすと、二度と立ち上がれないと考えていた）と言ったら、ポーター曰く「この窓は、ミナミさんの部屋ですよ！」と。夜中の24時20分だった。嬉しいことに、カレー・キャンプのロッジの横まで下ってきていた！ 彼らはテントを張らずに、部屋まで借りてくれたのだ。

こんなことで、やつのことカレー・キャンプにたどり着き、ポーターたちが広げてくれた寝袋に収まった。温かい紅茶を少しずつ飲んで、陽が昇るまで昏睡。闇夜を含めて連続22時間の行動で、体力と精神力を使い果たした。やはりハイ・キャンプで泊まるべきだった！ 私が明確な指示をしなかったので、彼らは私が順調に登頂したのを知り、善意でハイ・キャンプを撤収してくれたのだ。

翌日は、テントやシユラフなどを日干しにしている横で終日眠りこけた。翌10月11日から下山の途に。空身でゆっくり降るだけの脚力と体力は回復していたが、次のロッジまでが限界。その上、またもや夕方から雪が降り始めた。

往路、ルクラからの峠（4610m）越えは高所順応も順調、急な草付の斜面と連続する石段の山道も、体力を温存していたので問題なかった。しかし、復路も連日の降雪か雨。高所は全面がデブリで埋まっていた。特に往路でも

1時間を要した峠の稜線は2mほどの積雪があり、デブリが4〜5mに盛り上がっている所など無限に続くように思われたが、なんとか明るい内にカルカ・テンの茶屋に転がり込んだ。そして、やつとの思いで翌17日、薄暮迫るルクラ空港にヨタヨタの態で生還した。

英字紙が、ネパール東部は1952年来の悪天候が10月17日まで続き、大きな被害をもたらしたと報じていた。

〈残した課題〉 メラ・ピークの標高は、NMA（ネパール登山協会）発行の登山許可証では、標高は6654mとなっている。市販地図では、北峰は6476m、中央峰は6461mとある。持参したGPSは6500m以下の数値だ。

カレー・キャンプの主人に聞いても、指差すのは北峰のようだ。何回も登頂している同行のガイドたちも、毎回この頂上で登山隊は折り返しているという。頂上に立ったとき、にわかにはガスが湧き上がり、北峰に立っているのか、中央峰か確認できなかった。また、『ヒマラヤ名峰事典』（平凡社）122ページの地図に、メラ・ラの北側稜線上に6654mと、許可証と同じ標高の△ピーク41があり、気がかりだ。

## 終わりに

このようにヒマラヤ詣ができるのは、会員諸氏からのご指導や情報、そして、医療委員会や科学委員会の講演、日本登山医学会の聴講で得た知識と、現地エージェントのニッパ・トラベルとコスモ・トレックの支援が大きい。また、20年以上前から「ダブル・ストック」を登山の武器として駆使し、近隣のウォーキング時にも、高所順応のための「口細め呼吸」が無意識にできるようになっていたことを付記しておきたい。

同行いただいたJACCの仲間（同行年順）…松田政男、飯田進、池谷健、平井吉夫、近藤雅是、田邊潤、大蔵喜福、小川武、荒山孝郎、山梨柁巳、斉藤祐一、三原洋子、大橋晋、越田和男の各氏

## 京大学士山岳会・高橋健治と妻ローゼ・レッサの生涯

——わたしに2本の赤いバラを持たせてください。

1本は健治のために。もう1本は私のために——

〈ローゼ・レッサの遺言から〉

はじめに

私が高橋健治とローゼ夫人のことを知ったのは、信州小谷温泉・山田旅館発行の『小谷温泉讃歌』という本が出てからです。深田久彌ゆかりの宿として知られているこの宿の先々代・山田寛さんは、小谷地方にスキーを広めた先覚者でした。この本は山田旅館の依頼を受けて当時、図書委員だった泉久恵さんが泊まり込みで晩年の寛さんの聞き書きをしたものに、宿の常連だった人々が寄稿した文章を加えて、大森久雄さんが編集したものです。その中には、スキーの指導者だった高橋健治との思い出を綴ったローゼさんの文章もありました。健治の死後もローゼさんを手厚く

もてなした寛さんへの感謝の言葉が述べられていました。ドイツ語で書かれた文章の翻訳をしたのが、今日のシンポジストの一人、坪井靖子さんでした。

私は戦時中、安曇野に疎開して豊科高女（現・豊科高校）に入学したのですが、その後輩が山田旅館に嫁いだと聞いて訪ねて以来、半世紀を通じて女将の美園さんとは親しくしています。ちょうど10年前、寛さんの死後も同じ気持ちでローゼさんを大事にしてきた美園さんから連絡があり、「ローゼさんが亡くなったので、葬儀に上京する。ついては道不案内なので連れて行って欲しい」ということで、一緒にモア・ジョイ・センターに行きました。そこで2本の



山田旅館にて。後列左から山田寛さんとローゼ（『小谷温泉讃歌』より）

バラの花を抱いて棺に横たわるローゼさんと対面し、モア・ジョイ会の方々ともお会いしました。

その後、当時各地で、自然と人間の暮らしをテーマに開催していた集会の一つ「フォーラム・イン・小谷」にモア・ジョイからも参加してくださったのが、吉田理一さんとの出会いとなり、『越後山岳』12号所収『北越雪譜』研究につながりました。斎藤清明さんが取材されておられることも、山田旅館やモア・ジョイの方から聞いておりました。

最近出た松井修著『竹澤長衛物語』の中に、北岳バットレスや京大南樺太探検の記述があつたりして、私としては「高橋健治とローゼ・レッサ」を一緒に語るのに機が熟したと思ひ、吉田さんの研究に目を留められた芳賀孝郎さんにもまずご相談したところ、トントン拍子に話が進んで、今日の日を迎えることができました。斎藤清明さんはじめ京大の関係者、学習院のスキー関連の方々など、すべて芳賀さんのご尽力で実現しましたので、後の進行は芳賀さんにお願ひすることにして、私の挨拶を終わります。

（近藤 緑）

シンポジスト

斎藤 清明（ジャーナリスト・京都大学学士山岳

（会員）

坪井靖子（モア・ジョイ会員）

吉田 理一（日本山岳会越後支部会員）

司 会 芳賀 孝郎（日本山岳会元副会長・学習院大学山

岳部OB・AACCK会員）

ゲスト 福岡 孝昭（高橋健治の友人、福岡孝儔氏長男・

学習院大学山岳部OB）

**司会** 伝説的な高橋健治の足跡とローゼ夫人が遺した「与えることは生きること」というモットーに惹かれて、少しでもお役に立てればと思います、司会を引き受けました。つたない司会ですが、ご協力ください。

ゲストをご紹介します。まず齋藤清明さんは、京都大学山岳部ご出身で、京大学士山岳会（AACCK）会員。毎日新聞編集委員をされました。遠征ではチベットの学術探検隊や南極観測隊。今西錦司編『ヒマラヤへの道』を執筆されました。この本の中に、今西錦司・西堀栄三郎・桑原武夫と並んで高橋健治のことも出てまいります。また、AACCKの機関紙「ニュースレター」に、5回にわたって高橋健治のことを連載しております。

坪井靖子さんは、ローゼ夫人から直接英語やドイツ語を

習ってドイツに留学され、今もローゼさんが創設した非営利団体モア・ジョイの活動をされております。私は緑爽会会報に坪井さんが書かれた、ローゼ夫人の思い出を読んで大変感動いたしました。

吉田理一さんはJAC越後支部の方で、ローゼさんが英訳・独訳された鈴木牧之『北越雪譜』に興味を持って研究され、その論文が『越後山岳』12号に収録されております。それでは、齋藤さんからどうぞ。

#### 高橋健治さんのこと

**齋藤** まず高橋健治さんについて、ざっと話します。高橋さんは、当時の三高（京大）グループの先鋭的なクライマーでした。後に日本山岳会会長を務める今西錦司さんや西堀栄三郎さんと並んで、「三高（京大）の三羽鳥」と称されたといえます。劔岳・チンネ初登攀は、高橋さんをトップに西堀・今西という京大旅行部最強のザイル・パーティで成し遂げました。また、北岳バットレス初登攀も高橋さんがリーダーで成功させました。

大学を卒業すると、植物学研究のためにヨーロッパに留学しますが、実際はアルプスでの登攀とスキー術の習得に明け暮れていたようです。当時、京大グループは日本最初



白頭山遠征時の写真。前列左端が高橋、真中に今西、その右上に西堀

のヒマラヤ遠征を考え、そのための装備などを調査するようになり、京都からドイツの高橋に指令を出していたようです。その計画は満州事変勃発のために潰れてしまい、その代わりに1932年夏、主要メンバーは南樺太に出かけます。ソ連との国境の山を目指して。京都から今西・西堀・高橋さんとスポンサーの田中喜右衛門さん、北大に勤めていた四手井（綱彦）さんと、南アルプスのガイド・竹澤長衛も伴っています。長衛はクマ撃ちの鉄砲を持って。

高橋さんは当時の日本の登山界のリーダーであると同時に、アールベルグ・スキーを日本に導入して、その指導に各地を回ったスキーの先駆者でもありました。スキー技術に関する著書もあります。

しかし、結核のために戦時中から療養生活を余儀なくされ、昭和22年に京都で亡くなりました。そのために「高橋健治」という名前は知る人ぞ知ることになって、いつの間にか忘れられてしまったようです。

私は今西錦司さんから京都大学学士山岳会の歴史を書くように言われて、調べていくうちに高橋さんのことも分かってきました。戦後間もなく亡くなられているから、もちろん私は会ったことはありません。ただ、ローゼさんと知り合ってから、川崎の家を訪ねたりして話を聞かせても

りました。

高橋さんは植物学の研究者であり、京大理学部の講師になるのですが、そのときの研究仲間、私が学生時代に教わった浜田稔先生（京大農学部）がいて、高橋さんのことをいろいろ話してくれました。ローゼさんと最初にお目にかかったのも、京都・北白川の浜田先生宅でした。ですから、高橋さんにはお目にかかったことはなくても、なんとなく身近な人のような気がしています。

高橋さんは1903年4月に京都で生まれました。生家は、御所から少し西に行った上京区堀川丸太町で、古木商とあって、今でいう土建業です。昔は古い建物を解体して、傷んだ部分を除いてまたその材木を使って建てたもので、神社・仏閣はじめ大きな屋敷がすべてそうしていました。高橋さんは、裕福な古木商の次男でした。今西さんや西堀さんの生家は、少し北寄りの西陣にある織物屋さんです。今西さんは長男、西堀さんは末っ子、そして高橋さんも、京の町衆の家に生まれているわけです。今西さんは高橋さんより2年先輩、西堀さんは同じ1903年ですが、1月生まれなので、学年としたら1年先輩。山仲間になる桑原武夫さんは、敦賀出身の京大教授の長男です。

年齢はそれぞれ1〜2年は異なるのですが、第三高等学校への入試や入学後の落第などで、2年生として、なぜか一緒になります（笑い）。そして、ほかの仲間も誘って山岳部を創ったのです。

当時、日本の学生グループでトップを行くのは慶応義塾です。慶応や早稲田など、東京の連中に追いつけ追い越せと、三高（京大）は頑張るのです。その中心的メンバーの一人が、高橋健治さんでした。

高橋さんの家は裕福だったので、家の敷地内に山小屋を建てて寝泊まりしていて、山岳部の友人たちをそこへ泊まらせていたそうです。昭和天皇のご大典を記念して昭和3年、京都大学旅行部は妙高高原にヒュッテを建設します。大学からの建設費用だけでなく、旅行部有志で寄付を募り、家が古木商だった関係で資材を調達するなど、精力的に動いたのが高橋さんでした。そして、登記の名義は高橋健治になっていました。高橋さん没後はローゼさんの名義となりますが、やがて改修する際に、京都大学に移管されます。

高橋さんは農学部農学科を卒業すると同時に渡欧し、ミュンヘンに居を構えて2年ほど留学。戻ってから理学部植物科の大学院を経て、その講師を務めました。とはいっ



笹ヶ峰ヒュッテの改築前に集まった AACK の人々。後列中央右寄りにローゼ

ても、昔の帝国大学講師というのは、無給なのです。常勤扱いで研究室が与えられるだけ。今西錦司さんも無給の講師時代が長かったのです。戦後に、文部省が無給の講師制度を廃止しましたが、それまでは大学に残って研究しようと思つたら、家が裕福でないと言えないと言われていました。特に生物学は厳しくて、教授から「就職の面倒は見られないよ。それでもよかったら」と言われたそうです。西堀さんは理学部化学学科ですが、10年ほど講師を勤め、助教授になって東芝に就職します。そこで、やっと人並みの収入を得られるようになったと聞いています。それが学者の世界でした。また、当時の山登りとか、スキーというのも、余裕のある人たちだけの世界だったと言えます。

高橋さんの家は、岡山を中心に信者を持つ黒住教の京都の総代を務める家柄でした。お母さんは教祖の孫に当たる人でした。それがドイツからやって来た娘さんと結婚したわけですから、いくら次男坊とはいえ、かなりの抵抗があったと思いますね。

戦後、健治さんが病気で苦労したときにも、実家から援助がなくて苦労したと、ローゼさんは話していました。ローゼさんにとって京都の印象は、良くなかったようです。司会 ありがとうございます。後で補足の時間をとりま

す。

続いて坪井靖子さん、どうぞ。

「与えることは生きること」を実践

坪井 今日が高橋健治とローゼ・レッサのためにこのような集まりを開いていただきまして、モア・ジョイ会を代表して心より御礼申し上げます。前から近藤緑さんが「いつか健治とローゼの両方を語れる会を持ちたいわね」と言われていましたが、私は本当にそんなことができるかしらと思っております。それが日本山岳会のお陰で実現して、誰よりもローゼ先生が、そして健治さんがびっくりして、そして喜んでいらつしゃると思います。

本日私は「ローゼ・レッサの生涯とモア・ジョイ運動」についてお話をさせていただきます。これからは敬称なしにローゼ・レッサ、またはローゼと呼ぶことにいたします。

ローゼ・レッサは1908年3月24日、ドイツのベルリンで生まれ、2002年1月22日に永年住み慣れた川崎市小杉御殿町の自宅兼モア・ジョイ・センターで亡くなりました。享年93。その生涯は多くの喜びと多くの悲しみに満ちたものでした。特に彼女の後半生は、人々の相互理解や友好、まさに平和のために捧げられたのでした。亡くなる

7年前に準備されていた遺言状には、こう書かれていました。

「……長い年月の間、皆さんが私に示してくださいましたと誠実に感謝します。皆さんは私の人生を豊かなものにしてくださいました。私が、自分の家に帰る。素晴らしい日がやって来ました。決して「別れ」ではありません。今までどおり私は皆さんのそばにいます。……モア・ジョイは皆さんの中に生き続けます。……」そして、

「私を送る際、私には、深紅のバラの花を2本、手に持たせてください。1本は健治のために、もう1本は私のために。……」

これはローゼからの、後に残された人たちへのメッセージであるとともに、健治に対する心からの思いを表わしたものと思います。

ローゼが来日するまでのことは、彼女が82歳のときに出版した詩集 *Und dann* に収められています。それによると、レッサー家は1913年に、ベルリンからヴェーザー川河畔のハーメルンに移住します。ローゼは物心ともに恵まれた家庭の3人姉妹の末っ子。後に詩を書く文学的資質は家庭教育の中で育まれたと思われませんが、幼いころの彼女は、好奇心旺盛なお転婆娘だったようです。

ハーメルンに転居した翌年、第1次世界大戦が勃発、父親のユリウスは徴兵され、母のシルビアもまた病気になる、3人の娘たちはベルリンの別々の家庭に預けられることになり、再び家族と一緒に暮らすことはありませんでした。15歳のローゼは女学校を中途退学、子だくさんの家庭に住み込み、ハウス・トホター（家族待遇のベビーシッター）の仕事に就きます。

第1次世界大戦に敗れたドイツは、社会的混乱やインフレで若者たちは夢も希望も持てずになりました。1927〜8年ごろ、Drシヨラー微量分析研究所に勤務していたローゼは、ラフカディオ・ハーンの著書を読んだ友人たちから、遙か極東の日本に行ってみないかと誘われます。ところが、直前になって友人たちは計画を断念、ローゼだけが日本へ出発することになってしまいました。1929年10月14日、ローゼは独り日本の貨客船「諏訪丸」でイタリアのナポリを出港、5週間の船旅の後、神戸に上陸します。早速、ドイツの会社に就職して働き始めます。

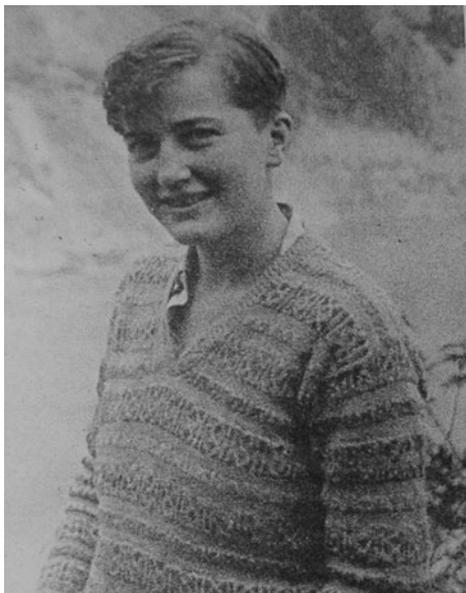
そして1932年のこと、かねてからアイヌ民族に関心のあったローゼは、職場の人々の心配を押し切って単身、北海道に渡ってアイヌ集落を訪ねます。人懐っこいローゼは、アイヌの人たちともすぐに仲良くなりました。

そして、帰りの青函連絡船の中で、高橋健治と運命の出会いをしますのです。健治は京大樺太探検からの帰途。少し前に留学から帰ったばかりの健治にとって、美しいドイツ娘ローゼは、どんなにか魅力的だったことでしょう。

翌年、二人は結婚します。その後は植物生態学の研究者で、登山やスキーのパイオニアでもあった夫とともに、ローゼは日本アルプスの山々、山麓の村々を訪ねて回ります。そして、しばしば信州小谷温泉・山田旅館や蕨平の信濃荘に逗留しました。ローゼが鈴木牧之『北越雪譜』に出会うのもこのころですが、それについては、吉田さんから詳しいお話があると思います。

やがて第2次世界大戦に突入。物資欠乏の中で健治は結核に倒れ、生活を支えるためにローゼは京都の自宅で英語・ドイツ語を教えます。夫の看病と幼い娘の世話をしながら、語学のレッスンは戦時中も戦後も彼女の大事な収入源だったのです。

健治が他界した後、ローゼがようやく得た仕事は、横浜生麦にあった法政女子高の語学教師の口でした。1950年、京都の家を出て上京。戦後の住宅難の時代のことです。学校の教室の半分を住まいとして提供してもらい、生徒に教えながら、夜はその住まいでほかの学生たちにも教えま



健治と出会ったころのローゼ・レッスラ

した。ここで学んだ最初の弟子の一人、寺尾邦夫横浜国大名誉教授によれば、その教室兼住まいは広さ8畳くらいで、そこに2段ベッド、食器棚、本箱、テーブル、椅子などが所狭しと置かれて、住まいというよりはUボート(潜水艦)の中のようなだった(笑い)そうです。

その後、同じ法政の男子高等学校で教えるために、川崎の小杉御殿町に移りました。ここで1955年に、非営利団体モア・ジョイ会を創立するのですが、その動機となつたのは、戦争のために生徒たちの荒んだ心に喜びを分かち

合いたいという強い思いでした。きっと、ドイツでの自らの辛い戦後体験を重ね合わせていたのでしょう。

それ以後ローゼは、平和のために人々の相互理解を助けようというモア・ジョイ運動に、全精力を注ぎ込んでいくのですが、その活動については、後ほどお話することになります。

**司会** ありがとうございます。それでは吉田さん、どうぞ。

#### ローゼさんと『北越雪譜』の世界

**吉田** この春65歳で教職を退きまして、現在は仲間と交替制で深田百名山の一つ、越後駒ヶ岳の九合目にある駒の小屋の管理人をしております。あと尾瀬のガイドもしております。3月に退職して、6月の水芭蕉のシーズンを終えたら4kg痩せていました。普通は仕事を辞めたら太るものです。いかに今まで怠けていたのかと言われました(笑い)。私はローゼさんや高橋健治さんを直接知っているわけはありません。ちょうど11年前(平成14年)に緑爽会支援の「フォーラム・イン・小谷」が山田旅館で開催され、そのときに先ほど話された坪井靖子さんやモア・ジョイの方が見えて、ローゼさんの話をされました。

私は『北越雪譜』という本を知ってはいましたが、越後の人間にとっては雪の中で暮らすのは当たり前のことで、特別に関心を持っていませんでした。たまたま当時、私が勤務していたのが塩沢で、すぐ近くに鈴木牧之記念館がありました。ローゼさんが40年の歳月をかけて『北越雪譜』の英訳・独訳をされたことを聞いて、早速問い合せてたところ、平成3年5月、鈴木牧之記念館3周年記念行事にローゼさんを横浜から招いて、感謝状を贈ったという「しおざわ公民館報」をファックスで送ってくれました。

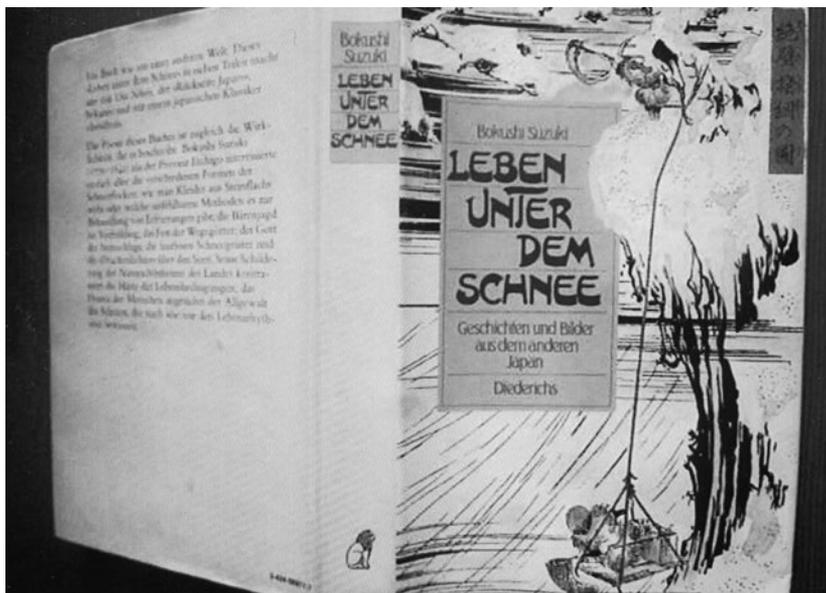
ローゼさんの話を聞いてまず初めに思ったことは、なんと21歳のベルリン娘が日本に来る気になったのかということでした。平成23年の新潟日報「視点」欄にローゼさんの記事が載って、その中に来日の理由をラフカディオ・ハーンが描く「不思議の国日本」に憧れたためであったと紹介されていました。直接メールで記事を書いた編集委員・森澤真理さんに問い合せたところ、今年が日独交流150年に当たるので、ローゼさんを紹介したこと。ドイツ語版の自伝もあるとのことなので、それを読めば来日の経緯が分かるのではないかと、とのことでした。さらにネットで調べているうちに、ローゼさんからドイツ語を習っていたという山田昭彦さんが、ローゼさんの自伝の要約を載せている

ブログがありました。

「ドイツでは第一次世界大戦の悲惨さ、戦後の不況を経験した若者の間に厭世観が漂い、どこか遠くの素朴で良心的な場所に憧れを抱いていた。日本は未知の小さな島国で、国際政治とは無縁で純粹で自然に満ちた人々が暮らししている」とヨーロッパの人々は想像していました。戦争も不況もない国・日本に移ることはとても魅力的なことだったようです（ブログ Rose Lesser in Japan から引用）。

日本山岳会の図書室には1万冊を超える山岳書があつて、洋書もたくさん所蔵しています。図書室司書の田村さんにメールでお願いしたところ、ローゼさんの『北越雪譜』の英語版はあるが、ドイツ語版はないとのこと。ローゼさんが寄贈したときの英語版の献辞のコピーを、メールで送ってくださいました。寄贈の日付は1987（昭和62）年と記されています。山田昭彦氏の翻訳によれば、その献辞は、

永遠に続く苦勞があつても、決してくじけることなく、困難や心配があつても、必ず朝を迎えることができる。そうやって、みな人生の先生となり、その行為



『北越雪譜』ドイツ語版

は決して無駄にはならない。日本アルパインクラブに。

というものだそうです。

昭和7年、ローゼさんは北海道旅行の帰りの青函連絡船の中で高橋健治と出会い、翌年結婚します。新郎30歳、新婦25歳。健治の植物研究やスキー指導のために、二人は日本各地の山々や村々を回ります。なかでも一年の半分近くを雪に覆われる越後の豪雪地帯の人々の生活を知り、「雪の下に正直で、温かな人々の、本当の生活を見た」、「雪国の人たちの生活と心情を世界に紹介しなければ」と思うようになります。

越後湯沢といえば、今でこそ東京から1時間半で行ける至近距離のリゾート地ですが、「トンネルを抜けるとそこは雪国だった」（川端康成『雪国』）の清水トンネルが開通する以前は豪雪地帯の寒村でした。そこに島村勝彦・高橋正夫というロッジや旅館経営者がいて、高橋健治らとともにスキーを広めました。高橋正夫は代々の名は高橋半左エ門、『雪国』や深田久弥の疎開先で知られる「高半旅館」の主です。

健治とたびたびここを訪れるうちに、ローゼ夫人がどこへ行っても、古老からその風習やしきたりや行事を聞き出してノートしているのを知った高橋半左工門は、昭和11年3月、高半旅館の囲炉裏端で、文庫本『北越雪譜』を贈ります。ローゼさんが描こうとしていた雪国の生活がそこに凝縮していました。岩波文庫『北越雪譜』の発行は昭和11年1月です。発行されてすぐに湯沢の高半旅館が手に入っていたというのは驚きです。

高橋半左工門のエッセイ集『苗場山和田小屋和田千代女聞き書き帖』によれば、

昭和14・5年（注・実際は昭和12年）だったろうか、外国の女性は体格のいい人で「和田ヒユツテ日本一、ジサマ日本一」と挨拶するので、面白い人だと思いましたが。夜寝るとき旦那さんと一つの大きい寝袋の中に入ってコトコトと抱かれていますので不思議に思ったテ、ハ、ハ、ハ、ハ。

私達が和田ヒユツテに在る間中吹雪いていたので、高橋健治先生は降りましようと言って湯沢へ帰った。日本一の山スキーの先生に神楽峰まで登って貰えなかったことは痛恨事であったが、和田ヒユツテに三日

も滞在して引き返したことはやはり日本一の安全登山であったと思う。

『半左工門よもやま話』によれば、40年後の昭和52年、ローゼさんが島村氏と二人で訪ねて来た。ローゼさんは私の贈った『北越雪譜』の本を出して「私は健治に死なれてから途方にくれ、また戦争中は外国人ということで白眼視されて幾度も自殺を思い立ちました。しかし私はこの北越雪譜をドイツ語に翻訳しようと思いい立ち、一生懸命翻訳し続けて今日まで生きて来ました。この本を下さったあなたに感謝します」と言われた、とあります。

戦中戦後の苦しい時代にも、昭和22年に健治が亡くなってからも、「本の中の雪に耐えてきた人々に励まされて」翻訳を続けました。英語版は昭和60年に日本で出版されますが、ドイツ語版はドイツでの出版が難航したため平成元年まで待つこととなり、翻訳開始から刊行まで実に半世紀の年月がかかっています。

**司会** ありがとうございます。ひと通りお話しいただいた後、さらに補足がありましたら、斎藤さんから、どうぞ。

## 登山からスキーへ

## 齋藤

今西・西堀さんらが三高に入学した1921(大正10)年、スイスに遊学していた慶応OBの榎有恒さんが、アイガー東山稜の初登攀をしたことが大きく報じられ、今西さんは驚いています。また、この年はイギリスがエベレストを目指して最初の遠征隊を送った年でもありました。

ほどなく結成された三高山岳部でも、それらのニュースに刺激を受け、岩登りや雪山へと初登攀を競うアルピニズムへ突き進んでいきます。三高山岳部の発足は1923(大正12)年、立山スキー登山や木曾御岳、笹ヶ峰スキー合宿などから始まり、主な山行には高橋さんが名を連ねています。

京大に進んでからの高橋さんの活動も、目覚ましいものがありました。大正末期から三高・京大グループは慶応・早稲田など東京勢に負けじと活発に行動していましたが、四高や甲南、神戸高商、大阪医大なども互いに競い合っていました。こうした状況の中で、関西の各校山岳部が情報交換し合って、より意欲的な山行をしようと1929(昭和4)年6月に、関西学生山岳連盟が設立されます。これは東京より早かったです。京大の楽友会館に集まった京阪神10校からの代表を前にして、これからは各校が競争す

るのではなしに、みんなで協力していこう、という基調講演をしたのが高橋さんでした。

高橋さんは人のため、仲間のために献身的に努力する人柄だったようです。山の功績も一人占めしたりはしなかった。そんな高橋さんには、長者の風格があったという話を後輩から聞いたことがあります。

1931(昭和6)年にAACK(京都学士山岳会)が結成されます。最初は、京大学学士山岳会と言わなかったのには、他大学も含めるつもりがあったようです。そして、目標をヒマラヤのカブルー(7338m)に決めて資金集めを始めます。しかし、1932年にヨーロッパから帰国した高橋さんを待っていたのは、戦争勃発によるヒマラヤ計画の挫折でした。そこで、今西・西堀さんと樺太探検に行き、また、白頭山遠征にも行動を共にします。

その後高橋さんは、健康が優れなかったこともあって、次第に登山からは遠のいていき、オーストリアから持ち帰ったアールベルグ・スキー術の指導に傾いていきます。あちこちからコーチに招かれると、労をいとわず出かけて行ったようです。ローゼさんともども雪国を訪ねる、二人にとっては一番幸せな時代だったと思います。

司会 健治とローゼが結婚した昭和8年、日本は国際連盟を脱退しています。急速にローゼさんの夢見た国ではなくなっていくのですね。そして、敗戦国となった日本でのモア・ジョイ運動について、坪井さん、どうぞ。

### モア・ジョイ運動について

坪井 私たちがモア・ジョイ・センターと呼んでいたのは、古びた一軒の貸家でした。それをローゼは自費で手入れをし、家の周りにはいつも花々を絶やしませんでした。

モア・ジョイ会では、喜びを分かち合い、友好を深め、平和を築く手助けをするという趣旨の下に、ローゼを中心として様々な活動を展開していきます。

まず海外に向けた活動としては、「インド子ども親善使節」があります。これは「Share Your Toys Foundation おもちゃを分かち合いましよう会」というインドの団体の呼びかけに応じて、1959年11月、日本各地の子どもから集めたプレゼント付きの手紙1700通をすべて英訳して、インド大使館を通してインドの子どもたちに送りました。そして、この団体からの招きで翌年3月、ローゼは小田幾世さんと荒井正人くんの2人の小学生を伴ってインドに行きました。3人はインドの家庭にホームステイしながら

ら多くの学校を巡り、ネール首相やインディラ・ガンディ夫人を表敬訪問し、日本の子どもへのお土産をたくさん贈られて帰国しました。子ども親善大使というのは前例がなかったので、多くの新聞に取り上げられました。今日は、その荒井君のお兄さんもここに見えています。

1962年3月から約1年間、ローゼは秘書の伊中清子さんを伴って、世界親善講演旅行に出かけます。世界各地のモア・ジョイ会員を訪ねながら19ヶ国を回り、日本や日本人について講演をし、生け花や折り紙などを実演して日本文化を紹介しました。当時は今のような情報社会ではなかったもので、訪問先の人々はローゼの講演に熱心に耳を傾けていたそうです。

1971年には、英国スリムブリッジで開催された第1回野生白鳥国際シンポジウムに参加しています。これは新潟県の瓢湖に飛来する野生白鳥を撮影した本田清氏の写真を英文雑誌に見つけたローゼが、モア・ジョイの機関誌『プラオ』に記事を書いたことから、永年、白鳥の保護をしてきた農家の吉川繁男さんがシンポジウムに招かれることになったのです。ローゼは吉川氏に代わって報告書をまとめ、シンポジウムで講演もして、日本の野生白鳥の実情を世界に紹介しました。このことが後に「日本白鳥の会」の



晩年のローゼとモア・ジョイ会員たち

発足や、日本のラムサール条約批准に繋がり、日本の自然保護活動が盛んになっていくのです。

また、1960～70年代、ローゼは若い女性会員たちの見聞を広めるために、ドイツやアメリカに送り出しました。総計8人の女性たちが、当時はなかなかできなかった外国での長期滞在を体験して、視野を広めました。それを可能にするために、ローゼは夜を徹して各地の友人に依頼状を書きました。私もローゼの紹介で約3年間、ドイツ・イギリス・アメリカと仕事をしながら語学を学び、人々と交流し、見聞を広める機会を与えられました。

国内での活動では「絵の大使」という企画がありました。世界各地から子どもの描いた絵を送ってもらい、デパートや学校で展覧会を開きました。また、週に一度「カードの日」を設けて、世界の国々から送ってもらった使用済みのグリーティング・カードやカレンダーを、子どもたちや学生たちに配りました。「カードの日」には、モア・ジョイ・センターの周りに長蛇の列ができました。戦後の青少年にとっては、欧米文化に直に触れる機会はまた珍しかったのです。

モア・ジョイ・センターでは、進度に合わせて多くのクラスが設けられて、ほとんど毎日レッスンが行なわれていま

した。ローゼのレッスンは、ユニークで密度の高いものでした。最寄り駅からセンターまで徒歩20分の道のりをものともせず、みな長期間、継続的に通っていました。語学クラスに登録された生徒数は、約3000人に及びます。

京都時代から約60年間、戦時中も休むことなく続いてきたのがクリスマス会です。純ドイツ風に飾り付けられた大きなモミの木と、会員が焼くクリスマスの焼き菓子とシュトレの香りが家中に漂って、温かい雰囲気醸し出していました。そのほか健康料理教室、聖書を読む会、来日外国人への宿の提供、ハイキングなど、そのときどきの必要に応じて多くの活動が行なわれました。小さな古い日本家屋のモア・ジョイ・センターが、まるで世界に向けて開かれた小さな窓のようでした。そして1999年3月、間もなく91歳を迎えようとするローゼは、ドイツ連邦共和国より功労勲章功労十字小綬章を授与されました。

ローゼは「平和は私たち一人一人の努力によるものであり、モア・ジョイは平和のための訓練所です」と機関紙『プラオ』に書いています。「私はどこにいても善を探究し、それを見出すことを止めず、すべての人と共に調和と平和を培うことを誓います」というのが『The More Joy Word』、「与えることは生きることです」がモットーでした。今で

こそ、NPOなどの活動が盛んになって、奉仕の精神は広まっているかに見えますが、世界情勢の中でモア・ジョイ精神はますます必要とされていると思います。そのような精神が木霊し合って実現された本日の催しに、ローゼはきつと感謝していることと思います。

**司会** ありがとうございます。吉田さんからも、どうぞ。

### 雪の下の暮らしに学ぶ

**吉田** ローゼさんに『北越雪譜』を贈った湯沢の高橋半左エ門（本名正夫）も島村勝彦も、戦前からの日本山岳会会員です。越後支部は昭和21年に全国で2番目に早く設立された支部ですが、二人ともそれ以前からの会員です。

ローゼさんは「亜熱帯でモンズーン地帯の日本は、雪が降らないと外国人は思っている。私の聞きたいのは珍しい雪に関わる話です」と言い、雪国を訪れることで、「雪の下に正直で、温かな人々の本当の生活がある」「外国の影響を受ける以前の日本の姿」に感動して、これはぜひ『北越雪譜』を翻訳することで世界に紹介しなければ、と思ったそうです。

昭和59年、米山孝志氏が新宿で開いた「越後雪譜展」の写真を見せて欲しいと、新潟県湯之谷村（現・魚沼市）の



『北越雪譜』ドイツ語版に収録されている雪のトンネルの写真。津南町にて。撮影＝米山孝志

米山氏の旅館を訪ねています。

ローゼさんの独語版「Leben unter dem Schnee」には、米山孝志氏撮影による昭和の越後の写真23枚が挿入されています。

一方、英語版「Snow Country Tales」には、米山氏撮影の写真6枚、および中侯正義氏撮影の2枚が挿入されています。

掲載された写真の中で、双方に共通しているのが1点だけあります。津南町の写真で、今では見られない光景です。よほどローゼさんには強烈に映ったのでしょうか。それは、道の両側の屋根から雪下ろしした雪で埋まってしまったところトンネルを掘って、人が行き来している写真で、除雪技術が進んだ現代では、こんなところはありません。でも、昭和に入ってもこんな生活が続いていたのですね。

ローゼさんは「北越雪譜には、日本人とかドイツ人とかいったものを超えた人間そのものが描かれています。世界中の人達が、日本の雪国の人達から、決してあきらめない粘り強さを学ぶとることが出来ると思います」（朝日新聞）と語り、また「いまの若い人、ぜいたくをしている。むかし一粒のお米も大事にしていたのに。都会で暮らす人は、隣の人のことも知らない。でもこの本には、雪の下での人

間と人間のつながりがあり、助け合いがある。その大事さがよくわかります」（毎日新聞）と言っています。

どちらも、ローゼさんの雪国への思いや、人間の生き方への提言が伝わってくる言葉のように思います。

**司会** ここで今日のゲスト、福岡孝昭さんからお話を伺います。孝昭さんのお父さんの孝徳たかともさんは往年のスキーの名手で、おそらく現在では、生前の高橋健治を知る唯一の方かと思えます。99歳のお父さんに代わって古いアルバムを持参、メッセージを伝えてくださいます。

では、どうぞ。

#### 父からのメッセージ

**福岡** 私自身は健治さんを知りません。小谷温泉の山田旅館には、学習院大学時代に合宿に行きましたが、豪雪の中、バスを田中下で降ろされて、重い荷を背負って往生した思い出があります。ちょうど今の女将が結婚したころだったようです。

その後、『小谷温泉讃歌』が出版されて、それに掲載された写真を見て、父が「これが俺だ」と言いました（笑い）。父のアルバムにある写真とは少し違うが、同じ「スキーの寵児」という映画を撮影したときの写真です。

5年くらい前に父を小谷温泉に連れて行き、女将の美園さんから高橋健治夫妻の話を伺いました。そのとき、ぜひ父のアルバムからコピーを取らせて欲しいということ、「また伺います」と答えたまま、忙しかったので約束を果たしていません。今年定年になり、幸い父は元気でいますので、近く連れて行ってやりたいと思っています。

そんなとき、会報「山」のインホームションに緑爽会のシンポの予告が出たので、父に「どうだい?」と言うと「夜だからな、俺は行かない」と。そこで司会が先輩の芳賀さんということもあって、私が代わりに出席した次第です。

昭和12年、越後湯沢で「登山とスキーの会」主催のスキー技術の講習会をやっています。これは当時『登山とスキー』という雑誌の版元だった肥田正次郎氏が仕掛け人で、高橋健治やうちの親父が講師で行きました。「どうして湯沢で?」と聞いたら、「地元で滑れるヤツがいたから」だそうです。講師6人のうち高橋正夫・島村勝彦ら3人が地元の旅館の主人です。

ちょうど同じころにスキー技術普及のために、劇場映画『スキーの寵児』を撮影しています。このときにはみんなお揃いのVネックのセーターを着たのですが、それは親父の姉の福岡紅子が、女子学習院卒業生の会「常盤会」の仲

間に呼び掛けて編んでもらったそうです。

親父の従兄で福岡孝行（元法政大学教授）が、『スキーの寵児』では中心になって活躍しているのに講習会に参加していないのは、当時、彼は陸上競技の選手でもあったからとのことでした。

高橋夫妻の印象はどうだったかと聞いたら、「高橋健治さんは京大の先生だったから、みんなからセンセイ、センセイと呼ばれていた。誰も健治さんとは言っていないかった。スキーの滑り方は、体が大きいこともあって大まか。スキー技術は格段に違った」。どっちが格段に上なのかと聞いたなら「それは俺の方が上だ」（笑い）そうです。「講習会のスラローム大会で優勝したときの記念のスプーンが、まだあるはずだ」と。ローゼさんは「ローゼさん」「ローゼさん」で人気があった。スキーの腕前はソコソコ（笑い）だったと言っていました。

『スキーの寵児』の撮影には苦勞したそうです。新雪のところを滑って撮影するわけですから、転ぶとまた新しい場所を探さなきゃならない。苦勞して撮ったのに、今このフィルムがどこにも残っていないのは残念です。

**司会** 貴重な写真や証言を、ありがとうございます。

会場のみなさんのご発言をいただく前に、今日ご出席の



映画『スキーの寵児』撮影時のスナップ。福岡孝儔さんのアルバムから



越後湯沢で開かれたスキー講習会の講師たち。福岡孝儔さんのアルバムから

何人かの方を指名させていただこうと思います。

最初にモア・ジョイ会会長の山崎さん、どうぞ。

**山崎宗城** 私は寺尾邦夫会長の後、ローゼさんから言われてモア・ジョイを引き継ぎました。ローゼさんとの付き合いはまだ慶応の学生だったころからです。卒論もローゼさんの紹介で、清里の清泉寮にポール・ラッシュのことを調べに行きました。ローゼさんは21歳のときに日本へ来たので、ドイツ語もそこでストップした中から出て来たもの。文章も長いものを書くより、感性が捉えた詩の形が多い。少女時代の素養とともに、日本に住んで母国語をよりシャープに捉えるようになったと思います。彼女から贈られた DASHOHELIED (雅歌) の詩の中から Hochzeit (結婚) の詩を紹介したいと思います。

結 婚

Hochzeit

Rose Lesser

“Geliebte, sag, wann soll die Hochzeit sein?”

“Wenn alle Vöglein jubelnd singen,  
wenn all die vielen Blümelein  
just aus den Knospen springen,  
dann, Liebster, soll die Hochzeit sein!”

“Geliebte, sag, wo soll die Hochzeit sein?”

“Auf grünem Moose weich und fein,  
im tiefverschwiegnen Waldeshain,  
und - Liebster - hör: im Sonnenschein,  
da, da soll die Hochzeit sein!”

(aus: Das Hohe Lied)

愛する人よ、言ってください、結婚式はいつですか？

小鳥たちが歓びで歌うとき

たくさんの花がその蕾から咲きだすとき

そう、愛する人よ、結婚式はその時です

愛する人よ、言ってください、結婚式はどこですか？

柔らかな緑の湿原

そこは深く静かな森の中、

そして、愛する人よ、聴いてください、輝く光の中

そう、結婚式はそこでなければなりません

(山崎訳)

これは、ローゼさんの人生の中で一番瑞々しかった時代の詩だと思えます。ほかにローゼさんは、JAPAN DIE FREMDE-JAPN. DIE HEIMAT「異国の日本・私の日本」Und dann... (それから...)に自叙伝的なものを著していますが、健治との出会いと別れ、美しくも悲しかった思い出の詩集の一節をご紹介します。

**司会** 引き続き会場からの発言をいただきます。

**賢田統亜** 1929年の北岳バットレスですが、高橋健治・酒戸彌二郎・奥貞雄・細野重雄の4人で、今西・西堀は行っていませんね。なぜですか。

**斎藤** たまたまそうだったということでしょう。4年前にこの岩壁に目を付けたのは西堀・高橋でした。そのときは自信がなかった。その後腕を磨いた高橋がリーダーとなつて、後輩たちと登ったのです。

**山田昭彦** 高橋家は裕福な古木商だったのに、ローゼさん

と結婚後はなんの援助もなく苦勞したと聞いています。実家はその後どうなったのでしょうか。

**斎藤** 実家のあつた堀川丸太町の辺りは、今マンションが立ち並んでいます。「高橋」という表札の家もありますが、商売はしていません。娘のエリザベスによると、お父さんの遺産の土地が少しあつて、そこは駐車場にしてあるので収入になっているということですから、特に勘当になつたとは思えません。

高橋さんが病んだのは、戦後のインフレ時代で、みなさん苦勞しています。今西さんのところも西陣の大店だったけれど、復員してから倉の中の物を二足三文で売って食い繋いだと聞いています。

そんな時代、結核だから感染るといけなないと、娘にも会わずに離れて寝ていた。ろくな食糧もないころ、農学部の人友が、ずっと牛乳を届けてくれたのがありがたかった、とローゼさんが言っていました。今なら結核で死ぬことはないのに、惜しいことです。

**司会** 関西支部から来られた杉本さん、ひと言どうぞ。

**杉本秋之介** 今回の企画は、私にとって信じられないくらい時宜を得たものでした。50年近く前に地方から大阪に出て来た私の山は、京都の北山から始まりました。そして、

先人の記録を読むうちに、高橋健治の名前が何度となく出てきました。北山から離れて北アルプス、南アルプスに足を踏み入れても、健治の名前は追いかけてきました。チンネやバットレスに取り付けばなおさらのこと、ゲレンデ・スキーを始めたなら、またまた高橋健治に行き当たりました。いつか消えてしまったこの人のことが、ずつと気にかかっておりました。人間、年をとると気になっていることに決着をつけたくなるものです。その宿題の一つが、今日のシンポジウムでほぼ解決しました。ありがとうございます。

**司会** 一つ坪井さんにお聞きしたい。モア・ジョイ会の設立の経緯ですが、ローゼさんが一人で始められたのですか。  
**坪井** 私の知る限りでは、ローゼ先生が独自で始めたと思います。誰かと共同で始めたとは聞いておりません。

**杉本** 海外にも会員がおられたのですね。

**坪井** すべてローゼさんの伝手です。ローゼ先生はいつも社会に目を向けていて、気が付いたことを新聞に投稿していました。古いクリスマス・カードを集めることも、あるアメリカの友人に手紙を書いたところ、その友人が国際紙に紹介してくれて、世界中からカードが届くようになったのです。伝手というか、人脈を上手に使っています。

**重原美智子** 私はローゼさんの最後の弟子だと思います。

喋れる英語を覚えたいと訪ねたら、すごいお婆さんが出てきて「もう弟子は取らないから」と言われたのです。帰ろうとしたら、「ちょっと待って」と呼びとめて「あなたの趣味は何？」と言うんです。「バード・ウォッチング」と答えたら「オウー」と言っていて「鳥が好きだったら、また来なさい」と、瓢湖の白鳥のことなんか話してくれました。

今日は「日本野鳥の会」で、古い写真の蒐集をしている塚本洋三さんと一緒に来ました。ローゼさんの遺品のアルバムの中に、貴重なものがあるのではないかと思います。これを機会に、モア・ジョイの方々とも協力していけたらと思っています。

**目黒セツ子** ローゼ先生には日大の通信制でお世話になりました。先生のお陰で、人間としての生き方を学びました。先生から「あなたはいつも『やろうと思えます』と言う。『思いますが、思えます』はやめて、行動なさい」と。なるほどと思つて、今日も行動を起こして福島から上京してきました（笑い）。

**樋口みな子** 私は平和や自然保護の市民運動をしていますので、「山」の予告を見てローゼさんの生涯を知りたいと思ひ、北海道から上京しました。お話を聞いて、大いに勇氣

付けられ、明日への糧をいただきました。

**五十嶋一晃** 私は古い文献を丹念に読んでいるほうです。

先ほど齋藤さんが話された劔岳・チンネの三高パーティーの登攀は、ザイルのトップを高橋、ミドル西堀、ラスト今西で登っております。三高で名付けた「チンネ」という岩壁を初登攀したわけですが、未踏の岩場であり、既成ルートザイル・オーダーではなかったと考えられます。昭和4年1月発行の『三高山岳部報告』第6号に「劔岳の東面」と題する岩場の紹介と登攀記録が載っております。そのほかの『三高山岳部報告』を読みましても、これらの記述内容から判断して、高橋健治は三高山岳部の中でも登山の実力が傑出していたと思います。もつと言うなら、このときも彼が事実上のリーダーではなかったか、と。

**齋藤** 高橋さんは背が高かったし、技術も優れていたからトップに向いていたのでしょうか。でも、リーダーはトップをしません。今西錦司さんは何事においてもリーダー（笑い）、リーダー以外はしたことがない人でしたから（笑い）。  
**司会** 三田さん、あなたのお宅は上京したローゼさんが暮らした生麦の法政女子高の近くでしたね。

**三田徹** 当時は順光学園とっていました。昭和24〜25年といえば、私は10歳くらい。学校は家から直線距離にして

100mくらいの所にありました。校庭が広くて、草ぼうぼうだった。そこでバツタを捕ったりしました。もしかしたら、そのころローゼさんとも会っているのではないかと思います（笑い）。

**芳賀淳子** 三田の姉ですけど、順光学園と聞くと懐かしいです。お隣のマリ子ちゃんがそこへ通っていました。今度のことで電話してみたら、ローゼ先生に習ったそうです。英会話ばかりでなく、テーブル・マナーなども教えてもらったと言っていました。

**近藤緑** 今日は見えていませんが、法政大学史センターの古俣達郎さんが、ローゼさんが当時の生活を回想した「魔の山の思い出」という文章を探し出してくださいました。それによると、生麦の丘陵地帯を「ナポレオン丘」とか「喜望峰」とか名付けて散策を楽しんでいたようです。法政での仕事を見つけて上京するように勧めたのが、岩波書店の編集者・布川角左衛門氏で、布川さんとローゼさんが同じ時期、法政大学で講師をされていたことも西谷隆亘・法大名誉教授夫妻からの資料で分かっています。布川さんの子息謙さんにもお会いしましたが、二人を結びつけたのが誰だったかを証拠付けるものは見つかりません。岩波文庫の担当だっただけに、『北越雪譜』の翻訳とも関係があるので

はないかと興味津々ですが、今後の研究に待つことにします。

**福岡孝昭** ローゼさんが晩年、ドイツ政府から勲章をもらっていますが、それは日本人としてなのか、それともドイツ人としてなのか。彼女の国籍はどうなっていましたか。

**坪井** 健治と結婚してからは日本人ですが、後で書面上は離婚しているので、表彰はドイツ人として受賞しています。高橋家を出たローゼさんが永住権を取るまで、3年ごとに大使館に更新に行っていたのを知っています。

**福岡** 亡くなって散骨をしていますね。健治さんのお墓があるのなら、少なくともお骨の一部は高橋家に行ったのですか。

**坪井** いいえ。日本の山で土に還る。それがご本人の希望でしたから。

**司会** 人生は出会いであり、また、人生は死の前奏曲と言われています。ローゼさんは高橋健治と出会い、彼の死後はモア・ジョイの曲を立派に奏でた生涯でした。本日、講師の方々のお話を聞きまして、私は感動しました。

つたない司会でしたが、講師の方々と会場の皆様のご協力に感謝します。

(文責・近藤 緑)



## 若き茨木猪之吉の肉筆絵葉書発見

——16歳から25歳まで、8枚それぞれの物語——

関塚 貞 亨

茨木猪之吉の肉筆絵葉書8枚は、2012年12月に、横浜山下町の骨董市で発見し買い求めたもので、すべて横浜の山手に近い石川中村町に住む山岳会会員、亀谷得太郎（会員番号139番）宛に出されたものである。8枚の絵葉書は、茨木が16歳から25歳までの間に描かれていて、その10年間は茨木がプロの画家を目指して精進し、山の魅力に目覚め、山岳画家になる重要な期間であった。

2002年に茨木作品の展覧会を開催した、長野県北安曇郡の池田町立美術館が作成した年表（注1）によれば、茨木猪之吉は1888（明治21）年5月1日、静岡県富士郡岩松村岩本（現・富士市）に生まれ、1891（明治24）年、3歳のときに神奈川県久良岐郡戸太村東耕地（現・横

浜市西区藤棚）の茨木家の養子となった。

1895（明治28）年に小学校に入学、1903（明治36）年に卒業し、近くの県立第一中学校に入学する。茨木家のあった藤棚は、小島烏水の住んでいた西戸部山王の横浜税関官舎の隣町であり、県立一中（当時の通称は神中<sup>じんちゆう</sup>）には、同時期に高野鷹蔵も上級生として在学していた。

茨木は神中を1年半で退学して、1904（明治37）年2月に、友人明石精一の勧めで京都にある浅井忠の聖護院洋画研究所に入門、画家としての第一歩を踏み出す。そして、京都郊外・八瀬（1949〔昭和24〕年京都市に編入、現・左京区八瀬）の正月風景を絵葉書に描き、亀谷得太郎宛に出す。

亀谷の住所の石川中村町地蔵坂上は、横浜市に編入されるまで、茨木の旧住所と同じ久良岐郡であったが、場所は離れていて現在のJ R根岸線石川町駅に近く、地蔵坂を登り切ると、今は坂上に伊太利庭園、外交官の家などの史跡がある。ウエストンの住んだクライスト・チャーチ牧師館は徒歩10〜15分の所にあり、当時も外人居留地に近く、山手の高級地である。茨木の住んでいた藤棚から徒歩で30〜40分であった。絵葉書の文面から想像すると、亀谷は親しい友人で、スポンサーの一人であったように思われる。

茨木が聖護院洋画研究所に学んだ期間は1年3ヶ月と短い。絵葉書を見ると、十分に浅井の技法を吸収したように思える。そして、家庭の都合で1905（明治38）年5月に、東京の小山正太郎の画塾、不同舎に転ずる。小山も浅井忠が創設し、1901（明治30）年に解散した明治美術会のメンバーであり、この流れを汲み、1902（明治35）年、下谷真島町に創設された太平洋画会研究所のメンバーである。画会の名簿には茨木の名前もあるから、不同舎入門と前後して太平洋画会にも入会したのではないか。茨木が不同舎に入門したときには、太平洋画会の中心人物であった吉田博は渡米中であったが、中村不折、丸山晚霞、大下藤次郎などが会員となっていて、交流があったと思わ

れる。丸山、大下は山岳会の会員であった。

そして、8月に蒲原海岸に行く。富士川下流〜田子の浦（岩本）興津海岸〜三保の松原をスケッチしながら往復する。翌1906（明治39）年11月に、駿河（岩淵、吉田、佐野、沼津、御殿場）〜箱根〜横浜を徒歩旅行している。この旅行中に描いた50号の大作油絵「愛鷹山の夕日」が翌年の東京博覧会に入選し、山岳画家としての一步を踏み出すことになる。18歳だった。

茨木は雑誌『ケルン』35号（1936年5月刊）に「初めて山岳画を世に出した頃」と題して思い出を語っている。要約すると「新聞や美術雑誌の批評は散々で手厳しかった。審査員の巴里じこみの美校きつての先生が、年少の若気の至りで描いたもの、駄目な奴ならそれまで、まあ通過さしてみる〜ということだった。その頃の私は世評など眼中になく長髪気取りで大家ぶっていた。

博覧会には川端昇太郎（龍子）の『岬と海』、山下茂雄の『瓦焼き場』の古典的描写、丸山晚霞の水彩画『麦焼く夕べ』があり、山本森之助の『河口湖から見た夕照の富士山』の描写の綺麗さに驚き、青木繁の神話的画題『わだつみのいろこの宮』は一段と群を抜いて引きつけられた」と述べている。

続いて『愛鷹山の夕日』は郷里富士山麓で画筆に親しんでいた場所、大宮街道の山手に一面の茶畑が多く、道に沿って親戚の一軒家がある。朝夕富士、愛鷹を眺め、駿河湾を隔てて伊豆の山々、背後に甲州境の雪山と眺望としては誠に贅沢な地で、はじめは夕照の富士山を描こうとしたが拙な技術では駄目で、愛鷹山なら変化もあるし、なんてずい考えて夢中に描いた。

それから山の魅力と美しさが印象深く、心に刻まれ、以来猛進して、博覧会が終わった夏に木曾谷に入り、駒ヶ岳支脈（題は『深山の夏』）を描いて、秋の第一回文展に入選した。あまり自慢にもならないが、これからも山岳を主題として描き一生の仕事として歩むつもりになった」と述べている。

この2つの入選もあって、小島烏水は父親同士が税関吏で以前から知り合いだった茨木を、1909（明治42）年7月の南アルプス縦走に誘った。一行は烏水のほか高頭仁兵衛、高野鷹蔵、三枝威之介、中村清太郎で、西山温泉、白根、赤石岳までの大縦走計画であった。残念ながら茨木は新沢峠で体調を崩して、烏水に付き添われて下山し、帰京する。

烏水は再び戻り一行と縦走するのだが、烏水の著書『日

本アルプス』第1巻の西山温泉のスケッチは、このとき描いたもの。そのときの紀行文『山岳』第五年第一号の「白峰及び赤石山脈縦走記」の中の登山者群像の描写に茨木の才能の片鱗が伺える。そして、1912（明治45）年、中村清太郎、高野鷹蔵の推薦で、山岳会に入会する（会員番号262番）。

『愛鷹山の夕日』が入選した1907年7月に『日本名勝紀行』第1巻の挿絵に魅了され、木曾路を旅行し、奈良井に滞在する（絵葉書④参照）。

1910（明治43）年3月に、太平洋画会研究所の友人（丸山晚霞を師とする）を頼り、小諸に行き浅間山の噴煙を初めて見て驚く。友人宅で自炊生活で過ごし、地蔵峠を越えて鹿澤温泉、増屋に泊まる。4月に別所温泉に滞在中の丸山晚霞の勧めで小諸尋常高等小学校の図画教師となり、浅間山の地図、挿絵を描く。6月に荒町海蔵院に移転。9月に小諸滞在中の若山牧水と初めて対面し、続いて中村清太郎、林訓導と浅間山に登山した後に、中村と地蔵峠を越えて鹿澤温泉に泊まっている。

1911（明治44）年1月下旬に浅間山が大爆発して、上州方面に大きな被害があり、2月に地震学の権威、大森房吉一行の調査団が浅間山に登る。その調査団に茨木は地

元小学校の随員として参加している。4月に小諸、妙神池、稲荷山から山路、三水村、久米路、新町村、木曾、鳥居峠を経て大塩、明科、池田、大町の對山館より青木湖を巡って帰宅。8月に再び浅間山に登山、小諸へ頂上へ軽井沢を経て硫黄岳に登る。旧土族屋敷の足柄町に転居する。第5回文展に水彩画「北国街道」が入選する。

1912（明治45）年、先に述べたように中村清太郎、高野鷹蔵の紹介で山岳会に入会、そして太平洋画会展覧会に出品した水彩風景画が、宮内省買い上げとなる。8月に案内人、勝野玉作と大町へ針ノ木峠へ平小屋へ立山へ立山温泉へ富山へ高岡へ七尾へ名古屋へ木曾から御嶽山に登る。12月に同僚の重田、三石、諏訪の三教師とともに小諸から浅間山を往復する。小諸繻糸会社で作品展を開いている。

1913（大正2）年3月に小諸尋常高等小学校を辞任し、上京。7～8月に徳本峠から上高地に入り、槍ヶ岳、前穂高岳に登る（『山岳』第百八年の拙稿「大正2年夏、上高地」参照）。以下、年代順に8枚の絵葉書についてエピソードを交えて解説したい。

（注1） 2002年10月5日から12月8日まで、池田町立美術館で開催された茨木猪之吉展「山旅への憧れ」の図

録の「茨木猪之吉年譜」。年譜は小野幸氏の年譜を参考に、千田敬一氏の協力を得て池田町立美術館が作成した。

#### ① 京都郊外八瀬の正月（1905年—明治38年2月13日）

この絵葉書が、骨董市入口の店のボール箱の一番上にあつて目に入った。ほかの7枚も一括してあつたわけではなく、100枚近い絵葉書の束から探し出したものである。今でもよく見つかった、という思いが強い。

明治の洋画家は、日本画、南画の素養がある人が多く、特に水彩画の緻密で巧みな筆づかいに感嘆させられる。浅井忠、吉田博、丸山晚霞、五百城文哉らの水彩画の技法は素晴らしいものである。茨木は浅井忠の門下生になつて10ヶ月、師匠の技法をほとんど習得したようである。葉書の3分の2の小さいスペースに茅葺きの農家、人物、比叡山と八瀬の正月風景を描いて、16歳にしてすでにプロの画家の風格がある。宛名書きはもちろん、細かい字の文章も達筆である。ふざけて妾と称して、今でいうオネエ言葉を使い、細かい字で年賀状が一通も来なかつたとぼやき、杉田の岡村天神の梅を懐かしみ、絵葉書の交換を提案しているが、後年のペーソスあふれる似顔絵は、この葉書のおふざけ精神が浄化、進歩したもののように思える。

余談ながら、八瀬は壬申の乱で背中に矢傷を負った大海人皇子（天武天皇）が、釜風呂で傷を癒した故事により、「矢背」から「八瀬」となった。以来、皇室との関係は深く、大正まで天皇の棺を御陵まで運ぶのは、八瀬の衆が担っていた。

② 三保の松原遠望（1905年—明治38年旧7月25日）

青一色の濃淡で豊かな色彩を感じさせ、巧みな筆使いで8枚の絵葉書の中の白眉というべき一枚である。波、船、松原の描写も巧みだが、安倍川奥の山々、紙の余白を生かした山巒の描写に感嘆する。

この年は梅雨明けが遅かったのか、雨に閉口と嘆き、その内帰ると言いながら、日露戦争のことにはひと言も触れていないのも、茨木らしい。日付の旧7月というのは気になるが、戦後の日比谷騒動は、9月の出来事である。

③ 岩淵渡船付近（1905年—明治38年8月3日写生）

骨董屋の女主人のお気に入り一枚だったらしく「売らずに仕舞っておくつもりだったのに、主人が出しちゃった」と惜しそうにしていた。私は八瀬や三保の松原の方が上等と思っているが、気の毒なので、女主人には8枚ともカラー

コピーにして進呈した。

骨董屋には商売に徹する人と、江戸時代からの古い店の主人などに多いが、売りたいくない品がある——という2種類がいる。目黒のある店で「買いそうな客には見せない」と言いながら、凶鑑にはない仁清の壺、御殿山の將軍家別邸から出たという重厚な端溪の硯を見せてくれたことがある。余計な話のようだが、この葉書は、そのときの眼福を思い出させてくれる一枚である。

④ 木曾奈良井宿、御嶽山一新講の札（1907年—明治40年7月）

宛先の亀谷の住所が、横浜から東京日本橋本石町3丁目に変わっている。3丁目は三越、日本銀行の裏手で、悪沢岳の発見者、荻野音松が住んでいた日本橋本銀町の甘藷卸商「川越屋」は、大通りを隔てた隣町である。

茨木が滞在した奈良井の「えちごや」は、戦後の高度成長期、旅雑誌に日本一の旅館と紹介されたこともある。文面で面白いものとして、絵葉書に貼った札がどういうものか、宗教登山と講中に不勉強で分からないが、当時は葉書に何かを貼ると1銭5厘では済まず、切手を2枚貼らさずして、茨木もちょっと口惜しい思いをしたのではないか。

⑤ 浅間山の噴煙（1910年—明治43年7月30日）

6月に荒町海応院に転居している。その海応院から湯河原の中西旅館で保養中の亀谷宛に7月30日付で、澄岳石流「鬼押出し」を前面に浅間山の噴煙を描いている。文面は「先日御画はがき有難う。暑くなつたね、體の具合どうだね、追々登山客が舞い込んでくる。是非一度見舞ひ給ひ、僕も八月中旬には上京するかもしれぬ。其れまで自愛したまへ」とあるが、文面からはあまり心配していないように見える。

⑥ 木崎湖と北安曇地方のお内儀さん（1911年—明治44年4月2日）

4月に小諸から妙神池、稲荷山、木曾、鳥居峠から大塩、明科、池田、大町・對山館に滞在、仁科三湖を経て帰宅しているが、そのときの絵葉書であろう。茨木は北安曇では、生涯の友でスポンサーであった烏川の斎藤茂宅、大町の對山館、築場の和泉屋、四ツ谷の山木旅館（のちの白馬館）を常宿としている（注2）。人物は和泉屋のお内儀さんか？……。文面は「本月中旬頃上京する。一週間の豫定でスケッチ旅行する」。この絵葉書から輪郭を線描で描くよう

になっている。山岳画とともに人物の風俗画にも才能が感じられる一枚である。

（注2） 池田町立美術館作成の図鑑7ページ、関悟志氏の解説「茨木猪之吉が見た近代登山の発展」を参照した。

⑦ 官製葉書による富士山（年代不明—スタンプは四十一、八月一日？）

画用紙でないので、絵の具のノリは悪いが、富士山も湧き立つ雲も素晴らしい。画面と表の宛名書きが逆様であった。

⑧ 上高地風景（1913年—大正2年8月6日）

亀谷の住所が日本橋から下谷区上根岸に変わっている。根岸といえ、俳句の下の句を「根岸の里の侘び住まい」とすると様になるといふ、冗談めいた話がある。上の句は「鶯や」でも「木枯らしや」でもよい、というのである。亀谷は隠居の身分になったのであろうか。関東大震災の後、大正13年3月に山岳会を退会している。

絵葉書の上高地は、徳本峠を下って、明神池に近い牛小屋付近の風景ではないか。手前の白樺の左手に切り株が描かれている。国立公園になった現在は、見ることはできな

い光景だ。国立公園に指定される前の上高地は、60年に一度（30年説もある）、白樺を伐採していた。河原にいる赤牛？ はまだら模様があつて、模様が木の陰を映したものでなければ、珍しい種類の牛である。左端の路は野路でなく水落で、牛番が里から持ち込んだものであろう、今も付近にはたくさん生えている。

8月6日付の文面も興味深い。「二三日前槍ヶ岳へ登つて来ました 痛快だった ウェストン夫妻も近々に参へられる様です 中々賑やかです 高村光太郎氏も居ます 小生は本月二十日頃迄滞在してゐま 御便乞」骨董屋の女主人が、絵葉書の所有者から「御便乞」は「金送れ」の意味だと聞いたと言う。この絵葉書が刺激となつて『山岳』第百八年の「大正2年夏、上高地」を書いたのであるが、同時に、明治の画家の多くが恵まれていなかったことを思った。そして「窪田空穂が徳本峠に向かう途中、桂の小屋で上高地から下りてきた近藤茂吉らしき若者に会い、若者から茨木の描いた絵葉書数枚を見せられる場面」を書きながら「茨木は、1ヶ月近い温泉滞在の宿賃の足しにするために、絵葉書を温泉に置いてもらっていたのではないか。大らかな性格の茨木でも、宿の居心地はどうだったのだろうか……」と後年、上高地での常宿が西糸屋になったことと

もに、勝手に想像を巡らしたのである。

### おわりに

山岳会に入会したばかりのころ、図書室で古い会報を見ていて、茨木猪之吉による挿絵が随所にあり、特に新旧役員会の歓送迎会の記事に茨木による役員の似顔絵が並載されていて、楽しく眺めた。そして、若いころの長老の似顔絵も興味深くて、会報の役員歓送迎会の記事を探しては、似顔絵を楽しんだ。

茨木は、敗戦10ヶ月前の1944（昭和19）年10月2日に、穂高岳から槍見温泉に向かつて下る途中で行方不明になるが、同じ年に私は19歳で、9月4日の入営の赤紙をもたらした。死ぬ前に上高地を見ておこうと、8月21日に徳本峠を越えた。広い上高地には滞在者は4人だけ。五千尺旅館に3泊して焼岳には登つたが、涸沢への道は荒れていて危険だと同宿者から止められた。茨木は56歳で、慣れた道とはいえ崖崩れで荒れた寂しい道を、横尾から涸沢を経て穂高に登っている。偉いものだ。

茨木との縁はまだあつて、百年史を仕切っていた南川金一さんから、人物コラムに横浜在住だった小島烏水、岡野金次郎、高野鷹蔵、茨木猪之介を書け、との依頼があり、

私でいいのかな、と思いつながら、図々しく別宮貞俊を入  
れろと注文をつけて、引き受けた。

明治の画家たちは、一部の大家を除けば経済的には恵ま  
れない人が多かった。その中で茨木も楽ではなかったであ  
ろうが、烏川の斎藤茂や山岳会の友人たちに恵まれて、図  
太く自由に明治、大正、昭和の三代を生き抜いた。山岳会  
への理事、評議員としての貢献も大きい、と松方さんも語っ  
ている。

池田町立美術館作成の図鑑は、松本在住の三井嘉雄さん  
が山岳会に大量に送ってくれた。その一冊を手に入れた南  
川さんが会報「山」の絵葉書発見の記事を見て寄贈してく  
れたもので、三井さんとは、1988年に横浜アンデレ教  
会で開かれたウェストン来日百年記念祭以来の付き合い。  
南川さんとは、1988年の『山岳』第八十八年の編集以  
来の付き合いで、雑誌『ケルン』のコピーは、静岡の長田  
義則さんが茨木、窪田空穂の関係資料を大量に送ってくれ  
た中の一冊である。そして、昨年にかけて『山岳』に投稿  
する気になったのは、『山岳』編集で一緒だった児玉茂さん  
が「大正2年夏、上高地」を褒めていただき、次回投稿を  
期待する——との手紙をいただいたのがきっかけで、この  
一文を書き上げられたのも、山岳会の友人たちのお陰であ

る。感謝している。

なお、絵葉書のオリジナルは、日本山岳会に寄贈する予  
定である。

ノ

ト  
十三

由來ニテ



郵便部

八瀬外郷

橋本町  
地蔵  
地蔵  
地蔵  
地蔵

何年何月何日 橋本町 八瀬外郷 郵便局



得ヤシ堪忍シテ復載ナリ其後ハ大妻汚モ汚法シマシタ  
アナタモ不妻ヲステ入ラシヤイマカ妻モ例ノ通りヨダン  
春イテ来マシタ不汚地ニテ、何カ妻ツタリガ在リマスカ  
ソラ(杉田、梅ハ最一見頃デシヤウネー近頃ダイフ画ハ  
ガキガ流行シテイマスネーアオク画ハカネノ交換致シマセ  
ンガ年始ハ三画ハカキタルタロト侍ッテイタシニスヨ  
ガ好妻カラモ来ナイ、テタヨク失望シマシタワ、皆サニ宜  
田舎ノ元旦、何レ又汚治シマシヨネー  
イテヤスカツクニデモマイリマシヨラカネー

此ノ圖ハ八瀬外郷ノ下キナエ

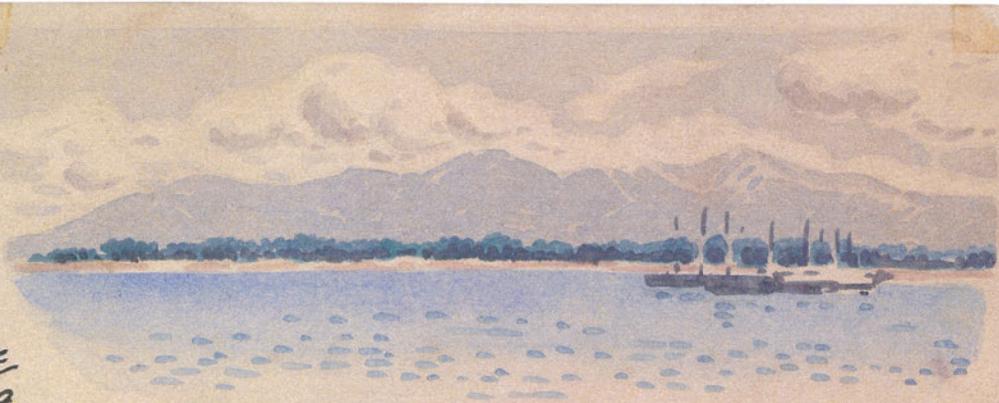
① 京都郊外八瀬の正月 1905(明治38)年2月13日

牛方八便郵

三保の松原遠望  
昭和二十七年七月二十五日  
松原の松原遠望

おはよう

下 155



三保の松原遠望  
昭和二十七年七月二十五日

其後浪不少

決りずいた

皆さん法書

と浪原筆花

毎、雨天て

川の跡て

信ります

法消息が浪原

以せぬねー

如何にさり

何れ其の内ニ

一ります

諸君一画う

侍ちせんは

三保の松原遠望

②三保の松原遠望 1905(明治38)年旧7月25日

まがは便郵



静岡縣富士郡岩淵村  
静岡縣富士郡岩淵村  
早記少作如天



電 岩淵村

掛 岩淵村中村所  
十廿三着地



ino  
此景北の山  
雨降り北  
先皇御一行  
以上  
鎌倉日  
て因台  
兒角  
岩淵  
舟音字  
岩淵渡船所

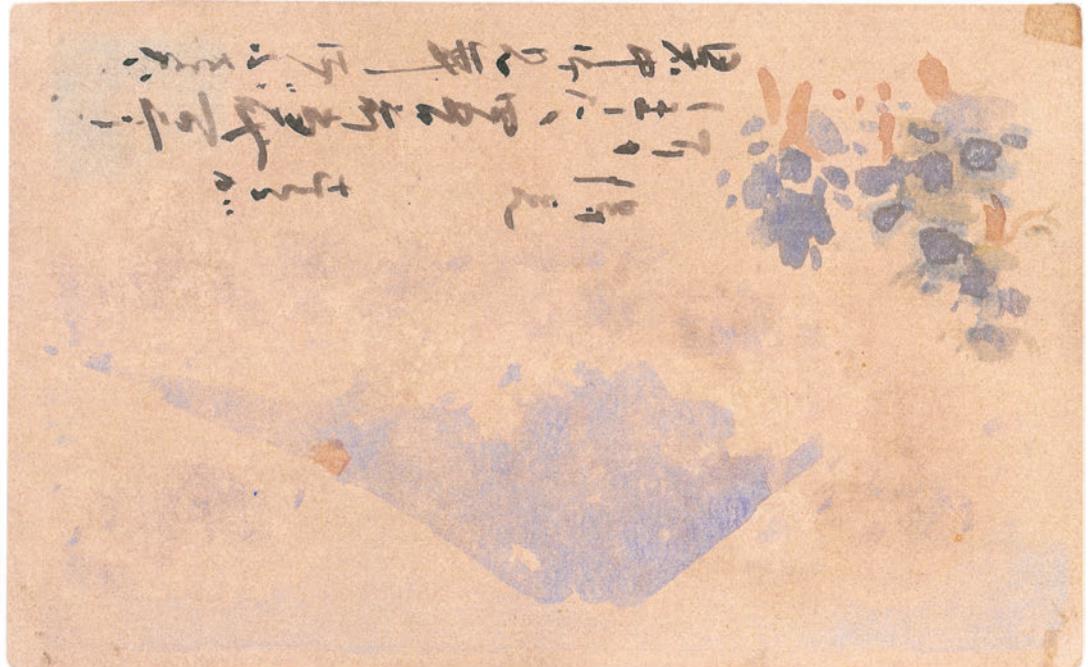
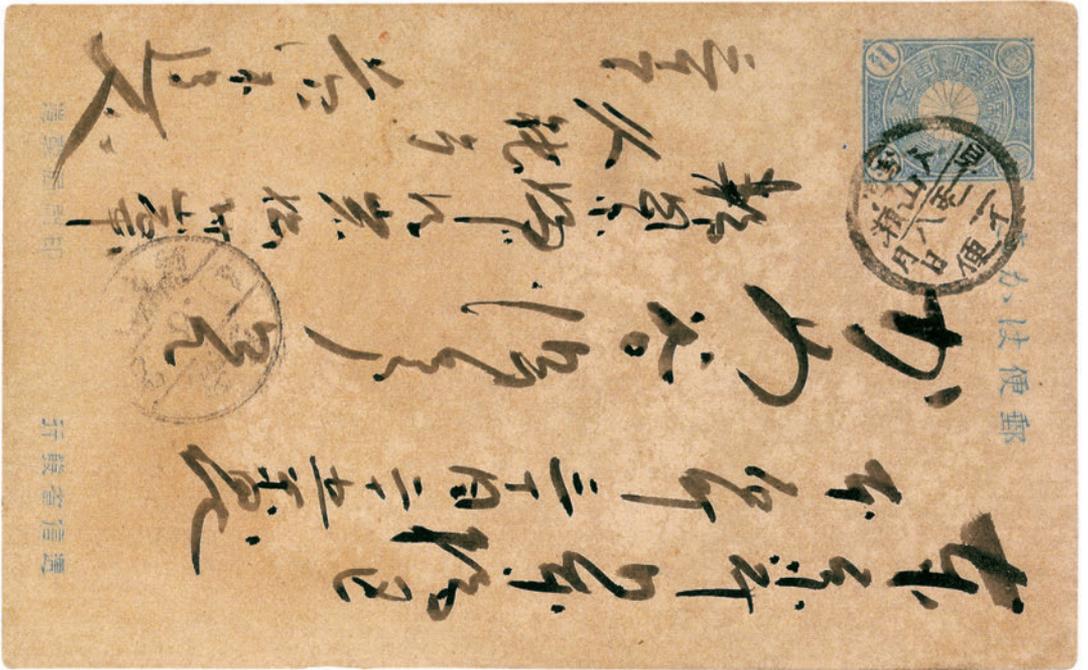
③岩淵渡船付近 1905(明治38)年8月3日写生







⑥木崎湖と北安曇地方のお内儀さん 1911(明治44)年4月2日



⑦官製葉書による富士山 年代不明—スタンプは四十一、八月一日？



云

松本 孫之吉

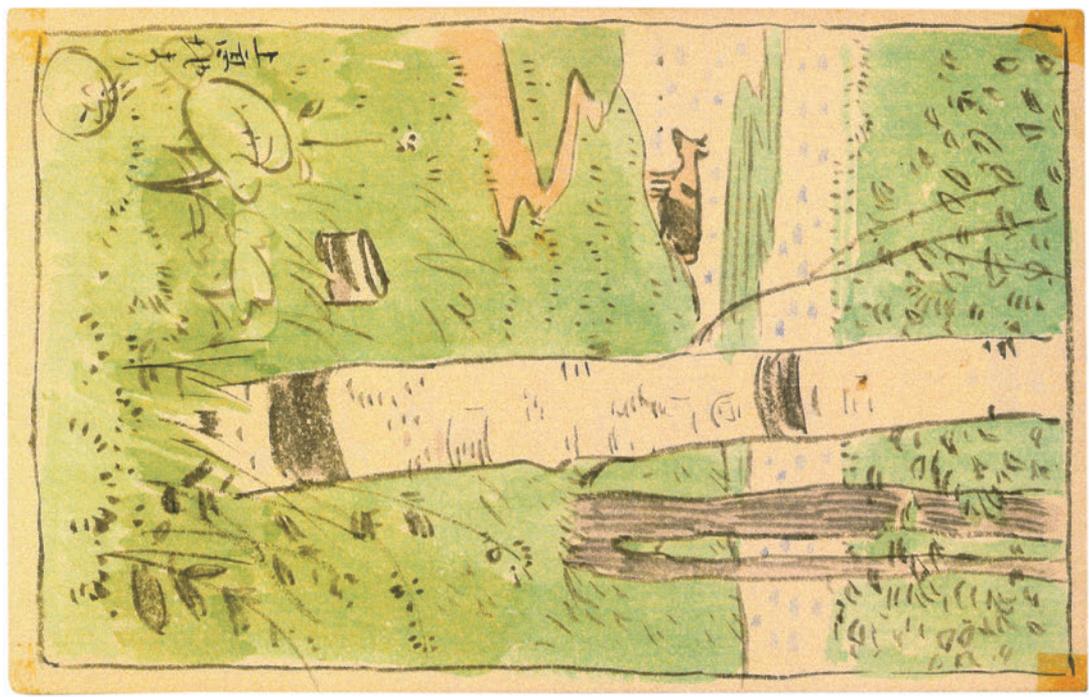
長野県南佐野郡  
上高地温泉清水町

筆名得た紙竹

上極岸竹也

東京市下谷区

其の傍駝ふく騎  
具て味を極む水  
小生ハ使(二)三(一)日  
上高地(一)米(二)り(一)ま(二)た  
製作に  
三日前後(一)舟(二)登(一)り  
て来(一)ま(二)した(一)病(二)状(一)を(三)看  
望(一)せ(二)し(一)ま(二)す(一)此(二)念  
失(一)ふ(二)小(一)し(二)た(一)柳(二)て(一)す  
中(一)ニ(二)銀(一)が(三)て(二)才(一)高(三)菊  
光(一)を(二)个(一)氏(二)に(一)居(三)ま(二)す  
小生(一)は(二)本(一)月(二)十(一)日(三)飲(二)込  
滞在(一)せ(二)る(一)本(二)館(一)に



⑧上高地風景 1913(大正2)年8月6日

## スイス人岳友の自然回帰——その生涯

岡澤 祐吉

「人間のもったいぶった偉そうな姿勢とは逆に、山々は自分の魂（僕はほんのわずかだけれど山の魂というものを信じている）の中に、元々具えている気高さや孤高を誇るようなものを持ってはいないし、僕らに至福感をもたらししてくれる何か（山の背後にある神の無辺際とか万能でも感じさせるのか？）を吐き出しているのでもなさ。〈Wohnt nicht in ihrer Seele (ich glaube ein wenig an die Seele eines Berges) diese stolze Unabhängigkeit und Unbekümmertheit der Wichtigtuerei der Menschen gegenüber; atmen die Berge nicht etwas aus, das uns glücklich macht, weil wir dahinter die göttliche Unendlichkeit und Allmacht spüren?〉と、スイスのベル

ン大学山岳会代表として大学在学中の1958年、25歳のときに書いていた岳友、モーザーが先年、ガンとの折り合いが急速に悪化し、74歳で他界した。

亡くなる1ヶ月前、持ち前のユーモアを交えて新約聖書のパウロの言葉、「私は日々死んでいる。〈Ich sterbe täglich〉」をもじり、「僕は死を待っている。」とか、「僕は自然を待っている。〈Ich warte auf die Natur.〉」と書き、最後の手紙には「自然よ永久に！〈Es lebe die NATUR!〉」とも書いていたから、ある程度予測してはいたものの、彼の娘、ザビネにその実体といえるものを目の前で示されたとき、私は一瞬戸惑いを覚えた。

JAC名誉会員のサムエル・ブラヴァントとは仕事の上



ラウターブルネン・ヴェッターホルン山頂のモーザー。右背後の山はユングフラウ(1986年)

でも知り合いであったスイスのエリートの人、岳友モーザーの一生を改めて思い返す気持ちになった。

モーザーが他界した翌年、私は孫息子と2人でスイスマで彼の墓参りに出かけることにした。

私らが来ていることをモーザー夫人が娘に知らせたこともあって、ザビネは勤めを持つ長男など4人の子どもと、子どもの名前の頭文字だけを並べた「テイパ」と呼ぶラブラドル・レトリバーを連れて、2時間も自動車を走らせて、ビールという街からやって来た。

ザビネや彼女の兄妹がまだ幼かったときから、一緒に食事をしたり遊んだりした思い出の居間で、私は窓越しに見えるバルムホルン・アルテルスの白く光る尾根を眺めながらザビネと話をした。このようなとき、いつも大腿で部屋に入って来るひげ面のモーザーの笑顔が一瞬、私の目の前にちらつき、私は少し感傷的な気分になった。

そんな私の眼つきをすばやく見つけたザビネは、「Nein Nein」(駄目、駄目!)といて私の膝を揺すぶった。

「ベルナルド(モーザーの名前)はここにいるのだ」と言っ  
て、彼女の周りや、外の景色などを指しながら、私にその  
ことを納得させようとした。彼女の子どもたちも今日ここ

に来るとき、ベルナルドに会いに行くと口にしながらやってくるのだ、と言葉を強めた。

今考えると、彼女は自分の個人的な考えを子どもたちに押し付け、その身勝手な強がりや実は虚構でしかないことを、私に知られなくなかったから、と受け取れないこともない。しかし、昨年（2013年）11月、伊勢神宮より古い祭祀があるという、奈良県桜井市にある大神神社の御神体、三輪山に登ることを考え、入山手続きをするため受付に立った。そのとき、立ち会った中年の神職が口にしたら、「三輪山はご神体、ご神体は魂だと思ってる」という言葉を聞いて、モーザーの「死」を改めて思い出した。その神職が口にした「魂」という言葉を使ったときの目付きの強さに、私は軽い気持ちでいた三輪山登りに重いものを感じた。原始神道を代表する日本で最も古い神社だということ、「近代」からは無視されるようなご神体なのに、近代科学を以てしてもなお正体の知れない生物の命と、その死に関わる古代人と現代人の思いに、昔も今も、そして日本も外国も区別はないように思えたのだ。

### ベルン大学山岳会会員として

ここで話の中心になるベルナルド・モーザーのことだが、彼はベルン大学山岳会（以下AACBと表記）の会員で、1957年に山岳会代表にもなった。松方三郎さんが紹介したとおり（『アルプスと日本人』築地書館）、AACBの正会員になるには準会員としての見習い期間があり、入会は簡単でなく、おまけに長い間女性の入会を認めなかったこともあり、会員数が年々減少し、財政的にも苦境となる時期があった。毎年発行する年報も手書きスタイルになり、遅れたりもした。スイス山岳会がスイス女性山岳会と合同したころ、時代の波に乗り遅れないようAACBも女性の入会を認めた。このころから再び100人前後の会員数になった。松方さんがスイスの山に登っていたころ、AACBの会員は100人ぐらいと書いていたから、会員数の実質的変動はあまりないのかもしれない。山岳会所有の山小屋の簡単な補修とか、小屋までの登山道の補修も含め、最近の会運営のほとんどはOB・OGが中心となっているらしい。「いつもスイスの登山界では中堅の指導者のな地位にいるのである。」と松方さんが書くように、AACBの影響力は今も続いているように思える。

数年前に『AACB100年』という創立百年記念誌が

発行されたが、世界の登山史に関わるような出来事があると、日本でも名の知れているOBの名前も見える。何年か前に、私が住む安曇野にザース・フェーの議会代表団が訪ねてきたことがあった。そのときの議員団の中にエヴェレスト登頂者がいた。私がついてきたこの百年誌に、AACBの女性会員がエヴェレスト登頂記を載せていて、そのときの登頂メンバーの中にこの議員の名前が出ていた。そこで彼にこのことを確かめてみた。彼はAACB会員ではなかったもので、この百年誌を持っておらず、これを手にして驚き、同行者たちにそのことを教えていた。私がスイス山岳会25年会員記事の所有者であることを彼は知ってはいしたが、それよりも自分の名前がAACB百年誌に載っていることの方が重要であった。それを知って彼の気分は高揚した。これにより私に対する彼の姿勢が変わった。こちらの方が私を驚かせた。ベルン大学山岳会というのが、スイス国内で今なお知名度が高いことを知らされた。松方さんが書き残された本の価値も改めて感じた。

この百年記念誌の編集委員の一人としてモーザーは参画し、彼が隊長だったAACBグリーンランド遠征隊の報告や彼が関わった会運営の苦労話など、エピソードを交えて書いている。そして、これが会員に配布されて間もなく、

モーザーは他界したことになる。

「この若い人たちに眼を向けてもらいたいのには、山の恐ろしさについてだ。これが分かれば命知らずで、向こう見ずに行動することもなくなるだろう。このことで彼らは山々の美しさに目を留めることにもなるだろうし、これによって彼らが味気なく、打算的で、功名心に駆られた、誇らしげな気持で登りまくることはなくなり、ザイル仲間への責任、友情の大切さといったものに気付くことにもなる。用心深さとか、山への愛、アンザイレンした相手に対する信頼といった人間としての内面的な資質、このようなものがなければ体力的、技術的に立派なJOメンバーも本当のベルクシュタイガーとは言えない。」とモーザーは1976年、30歳のとき、彼の属していたスイス山岳会アルテルス・セクション青年部(JO)メンバーを対象に書いていた。JOメンバーの中には、ナンガ・パルバットで遭難死した者もいた。

これは彼が所属するセクション創立75年記念誌に採録されたものだが、大学卒業後、法曹界に進んだモーザーがベルン州予審判事をしていたころのもの。SACセクション書記の立場で書いているが、この姿勢はAACBにも共通

している。この時期にアルテルス・セクション次席代表だったアドルフ・オギは、後年、スイス連邦大統領にもなっている。オギはカンデルシュテークの著名なガイド一族の出身で、大統領在任中にセクション所有の山小屋を仲間の関係数名と訪ね、カンデルシュテークの自治体代表から、当地域で著名なシルト (Schilt) 鍛造のピッケルを贈呈されている。先年、スイス山岳会創立150年記念の月報「ディ・アルペン」(2013年4月)には、「山々は我々の生まれる前からそこにあっただし、我々がそこにいなくなっても山々は存在し続けることだろう。〈Die Berge waren schon da, bevor wir da waren, und sie werden noch da sein, wenn wir es nicht mehr sind.〉と山を讃えたオギ元大統領の文言を載せている。「僕にとって自然は重要さを増している。スイスが外国人を含めた大勢の人を受け入れて困ることになっても、山は美しいまま残るからだ。」と60歳ごろのモーザーも、存在し続ける山について書いている。

卒業前のモーザーは法曹界に進むための勉強を抱えていたが、AACB代表として、グリーンランド遠征隊長の雑務をこなし、さらに1957年、当時としては先駆的なスキーマラソンをAACBが主宰するとこれに参加するな

ど、多忙な日々を送っていた。それにもかかわらず、何回となく手紙をくれた。

「結論からいえば、山の高さは重要ではない。小さくてあまり知られていない山でも興味ある冒険体験は数多くできる。〈Aber schliesslich ist ja nicht die Höhe der Berge das wichtigste und man erlebt oft auf kleineren, weniger bekannten Gipfeln viel interessantere Abenteuer.〉と書き、「僕は山に行くといつも人間の存在というものを強く感じる。そして、神が身近にあることを感じる。自然の中に入り込むとき、僕は部屋の中、機械的な騒音で取り囲まれた街中にいるよりも強く神の行為を感じる。ゲーテ (Goethe) もかつて「こんな」と言っている。『人間存在という言葉の本当の意味を、我々は氷に覆われた山稜に登っているときに知るのだ。〈Das Sehnen, Mensch zu sein, im vollen Sinne des Wortes, ist es, das uns nach den Firnen und Geräten hinaufzieht.〉と。山で悪天候と闘うとき、自分という人間の存在を強く感じる。』と書いている。似たようなことは別の所でも、「僕にとって山頂に立ったかどうかとか、困難な山だったかどうかということは、心許せる友人と登ったのか、まるで知らない人と登ったかほどにも重要ではない。」とも言っている。「人間に価値があるの

は、言ってみれば神の存在を感じることができただけで、僕は動物や植物にもその能力があるし、石にさえるや信じている。〈Der Mensch ist wertvoll, nämlich nur weil er fähig ist, zu spüren, dass es einen Gott gibt. Ich glaube, auch die Tiere und die Pflanzen und selbst die Steine besitzen diese Fähigkeit.〉と言っている。

しかし、彼らがいつも山登りの意義とか、人生とか、神の存在などについて考えているわけではない。

1960年の富士山雪崩のときは、私の山仲間がいなかったかどうか心配して手紙をくれたし、彼の兵役期間中、一緒に訓練していた友人が事故死すると、そのことを知らせてもきた。また、こちらが所帯を持ったりすると、「山を忘れないように〈Mögest Du die Berge nicht vergessen〉」とも書いてきた。オイル・ショックで世界経済が混乱したときには「日本も石油のことで困っているようだ。これからは少し節約しなければならない。状況は少し厳しくなるだろうが、これは良いことだ。産業に加え、科学分野の進み具合がスローになるのも良いと思う。今の世の中は、どれもこれもスピードが速過ぎる。」と書いている。

AACB年報の個人山行報告欄には、彼がその年に登っ

た数多くの山名が並んでおり、ある年はケニヤ山もあった。エヴェレスト遠征隊長だったエグラールなどは、毎年誰よりも多くの個人山行記録を載せていた。どの記録もここで取り上げるほど大きなものはない。ただ、平凡な山登りの姿勢にもスイスなりのモラルがあり、幼いときからそれを身に付けてきているように思える。この点を考えてと思うが、田口二郎さんから生前、他愛ないと思われるだろうが、一度彼らの様子を『山岳』に書いてみたらどうか、と言われたことがあった。

#### ベルン州「ブント」紙の記事

1957年11月20日に、モーザーが送ってよこしたベルン州「ブント」紙の切り抜き記事がある。一度どこかで「ブント」という新聞がベルン州の主要紙だと書いたとき、この記述を見つけた田口さんから、「『ブント』はスイスで一番の新聞だと書かないと、ベルン州の人に怒られるよ」と注意されたことがある。その土地の人の気風を知らない、何気ない行為も住む人の気持ちに傷つけることになるというのである。マナスル登山のとき、トラブルを起こしたサマ集落首長への対応で、パイプを手にしたまま座っておいでだった榎さんの姿を思った。



新設のテリヒュッテ（ハスリタール・ガイド組合所属）へのルートに登るモーザー（1994年）

この新聞記事というのは、イギリス、アルパインクラブ百年祭に招待された榎さんが、松方さんらと想い出のグリンドルワルトに立ち寄ったときのインタビュ記事である。

「彼（榎）の友人たちはここでザイル、ピッケルの使い方、

さらに岩や氷のテクニクを習熟させただけでなく、それ以上のものを彼に会得させた。それは人間と人間を繋ぐ真の友情によって、この地で生まれた素晴らしい登山者魂が身につけたということだ。」

アイガー東山稜初踏破を成し遂げ、グリンドルワルトの

ガイドや村人たち、さらにはベルン州山域の人々のプライドを高めた日本人として大歓迎を受けた。そして榎さんは、当時の古い友人たちを思い浮かべながら、「外部の様子は大分変わっている。しかし、グリンドルワルトの人々の動じない態度が、昔の美しい姿を保っています」と記者に話している。

「外部の状況は変わり、榎有恒が30年前に

6週間かけてやってきたのに、今では2日2晩で東京からグリンデルワルトに着いてしまう。これは誰の目にも分かることだ。確かに時代は変わった。しかし人間、楨はそのままなのだ。そうでなければ、数十年前に結ばれた古い友情の絆が今なお保たれているだろうか。」と書き、この記事の最後に「楨有恒が特に大切なこととしているのは、日本の登山者が我々のアルプスに少しでも早く戻って来て、経験を積んだガイドから新しいテクニクを学び取り、美しい登山者魂を身に付けることだ」と付け加えている。

この新聞記事を読み、ベルン州の山好きに与えた楨さんの影響力の強さを改めて感じた。モーザーが私との交流を亡くなるまで続けた遠因は、このへんにあったのかもしれない。後日、サムエル・ブラヴァントを通してガイド手帳に記入した日本人の所感文を調べたとき、同席したブラヴァント夫人にも「モーザーと個人的な知り合かどうか。〈Haben Sie ihn persönlich kennen gelernt?〉」聞かれたし、ブラヴァントの孫娘のマルグリットにも、モーザーと登山をしたことがあるのか確かめられたことがある。

楨さんが日本に持ち帰った登山の道具とかテクニクについては、かなり早く普及したわけだが、グリンデルワルト

トなどスイス・アルプス近辺の人々との意思疎通の面は遅れていたように思う。天気予報など基本的なことは、現地の山岳ガイドとの山登りなら、ヨーロッパの気圧配置、現場の天候などは、ラジオや新聞などであらかじめ分かる。これは日本でも基本的なことになる。

「彼らのことは本当に気の毒に思う。しかし、天候や状況などは非常に悪くて、現地スイスでは彼らが岩壁に取り付いたのを見て、みんな不思議に思ったのだ。〈Es tut mir wirklich leid für sie. Aber das Wetter und die Verhältnisse waren so schlecht, daß man sich hier in der Schweiz verwunderte...〉と1965年ごろ、アイガー北壁で起きた日本人の悲劇を、モーザーは控えめに知らせてきた。

そのころは、アルプス三大北壁といわれたアイガーなどに挑戦する外国人が多く、なかでも日本人の数は多かった。登るための順番待ちで、日本人同士ぎくしゃくした関係も生まれた。マナーの面で日本人に好意的なグリンデルワルトでさえ、頭を痛めていた。楨さんが持ち帰った山の道具にしても、地元の登山者なら、氷河や万年雪のあるスイスの山でさえ古いタイプのザックや靴を使っている人が今でもいる。それでもやれる基礎的な力を、スイスでは個人個人が持っているということにもなる。日本の場合、スイス

でいえば前山程度の夏山登山をするときにも、高価な外国製品を身に付けている者が現在でも散見できる。今なお世界トップの座を狙う日本だとすれば、目立たない基礎的なものは高度な道具などでカバーし、早めに仕上げるとか省略する——に通じるのかもしれない。この点、スイスの国民性と日本とは、少しずれがあるのかとも思う。日本では著名なラインホルト・メスナーも、スイス登山界で彼、メスナーに向ける眼は、少し厳しいように思える。

「若者の多くは、山に行くことにより、格闘する喜び、自然に対する愛、仲間との連帯感強化、そして、スポーツの要素を求めている。しかし、ごく少数の『極端な』岩壁登攀をする者がそれをスポーツの一種と理解し、自分たちの精神的コンプレックスを解消する手段としている。」とい

い、「ラテン語の格言に『健全なる精神は健全なる肉体に宿る』(Das lateinische Sprichwort sagt: mens sana in corpore sano)」と、1958年、A A C B 現役時代のモーザーは書き加えている。

楨さんは『わたしの山旅』の最終章で、急速に変化していく時代の「スピード」について、ゆるやかに流れていた、かつてのグリンデルワルトを思い浮かべて書いておいたのだが、楨さんが再訪した1957年のスイスには、まだ自分

たちの山登りを楽しむ若者が、大勢いたことがこの手紙を見ると分かる。

#### ベルナーフューラー日本語版の出版

今から四十数年前の1972年、私がモーザーとブリュムリスアルプホルンに登ったとき、そのルートを確認するため彼がS A C 編集のガイドブックを手にしているのを見て、それまで日本で目にしたことのないそのガイドブックに興味を持ち、このガイドブックの日本語版のことを考えた。そのころのモーザーは、登山と観光と一緒に考えることに批判的で、これは彼が亡くなるまで続いたが、その当時はドイツなど近隣のエキセントリックな登山家がスイスにやって来て、地元では手を焼いていたから、日本からもそのような登山家が来るのではないかと警戒していたように思える。しかし、モーザーは「ブント」の記事にあった楨さんの気持ちを意識していたのだらう、コースの選択もモーザーが行ない、スイス山岳会からガイドブックの翻訳権をもらうため、何回となく文書のやり取りをし、とうとう無償で翻訳権をもらい受けることになった。この抄録本を日本で出版する運びとなった段階で、当時、日本山岳会会長だった今西(錦司)さんにお話しした。今西さんは大

変お喜びになり、推薦文もいただけることになった。推薦文の内容は私らの意向に任せて下さったので、モーザーが危惧した部分も考えに入れて作成し、でき上がった。この本は図書館協会選定図書にもなり、本来のガイドブックとは違った形になったが、アイガーの東山稜だけでなく、シュレックホルン北壁を初登攀した田口一郎・二郎兄弟の名前も、ガイドのS・ブラヴァントなどとともに記録されている部分があり、別の意味で役に立った。

「偕このたび予而より御企画のスイス山岳会編のガイドブック御抄訳完成の御玉書並に右『スイス・ベルナーアルプスの岩場』拝受いたし洵に御日出度およろこび申し上げますと共に忝けなく御礼申し上げます、定めし翻訳についてもまた出版手配についても尋常ならざる御苦心のあったことと拝察いたします、よくも初念お通しになって御完成なされたことと深く敬意を表します、素より遠い外国の山の岩場のこととて需要の範囲もそう広くはないでしょうが、このような御本が出版されるといふそのこと既にわが国登山界現時の水準を示す価値高き御仕事を存じます、御満足のお祝い申し上げ重ねて厚く御礼迄申し上げます、  
Ich habe Ihren Brief erhalten, mit welchem Sie mir mitteilen, dass Sie den Führer durch die Berner Alpen

auszugsweise ins Japanische übersetzt haben. Ich beglickwünsche Sie zu dieser Arbeit und danke Ihnen herzlich für das mir gewidmete Exemplar. Die Übersetzung und die Herausgabe des Führers zeugen von grossen Bemühungen. Für die Art und Weise, in der Sie Ihren langgehegten Wunsch in die Tat umgesetzt haben, spreche ich Ihnen meine Bewunderung und Achtung aus. Da die Berner Alpen weit entfernt im Ausland liegen, wird die Nachfrage nach dem Führer klein sein. Ich glaube aber, dass die Herausgabe für sich selbst dieses japanischen Berner Führers in Japan ein Zeichen für das hohe Niveau der gegenwärtigen japanischen Bergsteiger darstellt. Ich glaube daher, dass Ihr Werk grossen Wert hat. Sie werden damit zufrieden sein. Ich möchte nochmals gratulieren und für Ihr Widmungsexemplar danken.」とある横の手の手紙を、本ができた上がった段階の1974年にいただき、それをモーザーがドイツ語に直した。

スイス登山界の中堅を担うモーザーらが、信頼する横のんからこのような温かな手紙を受け取り、仕事と登山をはっきり区別していたモーザーも、裁判長(Gerichtspräsident)と職名のあるレターヘッド付き便箋

で喜びを伝えてきた。このようなことは初めてで、それ以降もなかった。このため、モーザーの意向も考慮して日本語版のベルナールペン・ガイドブックをサムエル・ブラヴァントやスイス山岳会関係者に寄贈した（この中にはスイス山岳会名誉会員のハント卿もいた）。ブラヴァントについては、仕事の上でもブラヴァントとモーザーは繋がりがあり、ブラヴァントから直接モーザーの家に電話が掛かり、私と会える日取りなどを決めるような関わりができた。ブラヴァントの追悼文を『山岳』に載せることになったとき、スイス・ドイツ語の難解な新聞記事を、モーザーは私に分かるよう説明してくれた。第2次世界大戦のさなか、ナチス・ドイツに対するスイスの姿勢が脅かされるなかで、政治家のブラヴァントは不法行為をする若者に同情的だった。司法畑のモーザーは「僕はブラヴァントのようにやれなかったろう（Ich hätte nicht so gehandelt wie Brawand）」と言っていた。田口さんや高木（正孝）さんらブラヴァントのガイドで山登りをした、枢軸国側にあった日本人がスイスに残り、ブラヴァントの近くにいたから、中立国スイスの政治的な立場の核となるものをブラヴァントは持っていたのかもしれない。

「あなたの国、富士山のある国で、登山の起源が宗教的行

為にありとしたことは極めて説得力のあるものに思えます。仏教徒のやってきたことは、素晴らしいことです。マスター・エックハルトを引き合いに出したとしても、私たちの所と同じ結論を引き出すことはできないと私は信じます。私たちの祖先は、山々には悪霊どもが住んでいると言って恐れていました。勇敢な猟師だけが山へ登ったのです。私たちのアルピニズムは大変若く、そのような美しくもあった伝説に思い及ばなくなった時代に生まれたのです。古代ギリシャという例外はありますが、私たち西洋の国々には、日本のような状況は全くなかったのです。なぜ日本の登山者たちが、私たちとの友情を末長く、動かされることなく忘れずに覚えていてくれるのかは、その素晴らしい仏教の話から分かります。確かに西洋の良い友人たちを私は持っています。しかし、その繋がりは年とともに弱まっています。しかし、私の日本の友人たちの場合はそういうことはないのです。」

とあるブラヴァントの手紙をもらったのは、スイス山岳会会報『ディ・アルペン』の「会員の手紙」欄に送っていただいた私の手紙が掲載されたので、そのコピーを届けたからだ。これは槇さんの『わたしの山旅』に「わが国の山岳については、仏教と古くから深い因縁のあったことも人の知



ワイスホルン山頂からのマッターホルン。撮影＝ベルナルド・モーザー

るところである。役小角は大峰山を、泰澄（たいちよう）は白山を、勝道は二荒山を、最澄は比叡山を、空海は高野山を開き戒律の下に禪定を行なったことは、大きな影響を与えている。例えば釈尊の言葉としてつたえられる、山川草木すべてに仏性を具有するというような自然への慈悲心は、私たちにも深く入っており、また自然の発見も、これら大先達によって、ヨーロッパより、少なくとも五〇〇年は古いと思われる。否、神道をたずねるなら、自然との交渉は更に古にまで遡るであろう。」とあったからで、日本にはヨーロッパのアルピニズムとは違う別の登山があることを、ドイツ語圏の人に知ってもらいたいと思ったからである。

掲載された文の中で私は、禪宗でいう「無」とか「空」、これと中世の神秘主義神学者、エックハルトのいう *Gottheit*（神性）との類似性を説く西谷啓治の解釈を参考にして、このことを知っていたドイツ伝道会の神学者に尋ねながらまとめた。それともう一つ別の理由もあった。私が1982年、JAC会報担当理事としてドイツ大使館の文化活動の一環で、ドイツ山岳連盟（以下DAVと表記）視察を頼まれたときのことである。

DAVの視察では、ナンガ・パルバットに執念を燃やし

たヘルリツヒコツファーにも会った。彼とラインホルト・メスナーとの間のトラブルで訴訟まで起こしたことを知っていたから、DAVとは疎遠だと思っていたが、そんな気配は全く感じなかった。北イタリアで会ったメスナーよりも、銜いもなく恬淡としているヘルリツヒコツファーに親しみを持った。

DAVの理事会を傍聴したとき、会議が終わるとトニ・ヒーペラーが私の所にやって来て、いきなり、なぜ日本人はあんなに大勢ヒマラヤに行くのか、と詰問された。「ヒマラヤがそこにあるから」などと言える雰囲気ではなかった。DAVのどのセクションでも子どもたちに山登りを奨励していたが、彼らが育った何年かのちに、彼らをヒマラヤの未踏峰に誘うことをDAVは望んでいたような気もするのである。ヨーロッパ・アルプスの未踏ルートに執念を燃やした時期の日本登山界、未踏峰、未踏ルートを目指す日本の登り方に思いを巡らした。この時期の『山岳』や会報「山」を開いてみればよく分かる。それともう一つ、バイエルン放送協会で山岳映画監督のブランドラーから彼の作品「モンブラン山群の」フレネイ・ピラーの地獄」を見せられたとき、傷ついた仲間を救おうと苦闘するポナッティの姿に感動し、私ができることを口にする、「東洋人も

同じ感情を持っているのだ」とブランドラーに言われて、なんともやりきれない気分になった。その誤解の一つに、日本山岳会が営業活動をしていると思われるところがあり、これはその場で説明できた。しかし、それ以外にも日本山岳会と日本登山界との関係など誤解を生みそうな部分があった。このような誤解を、私なりに解消しなければならぬ、という思いがあったのである。

国際文化会館の理事長だった松本重治さんは1926年ごろ、榎さんら一行とスイス・アルプスに登っておいでたが、「ある意味で、愛国心ぐらい危ないものはない。軍国主義や偏狭な排他主義から切り離すのがむずかしいからだ」(『国際日本の将来を考えて』1988年 朝日新聞社)と言っておいでだ。登山の面でも「日本は独りよがりの国」だと思われることなく、「無法者の命知らず」といった言葉などに縁のない日本山岳会だと、当時、私は言いたかったのである。

### 榎さんの「無辺際」の精神

「願わくはその行動への意志に燃えるときにも、自然の奥底に秘められた無辺際の精神との交流を忘れないで欲しい。それは自然を真に愛し尊び大切にすることにつながる

道と思う。〈Hoffentlich vergessen Sie nicht die Beziehung zum unendlichen Wesen der Natur in der Tiefe · selbst wenn Sie mit voller Kraft gegen den Berg kämpfen.〉と榎さんは1973年に再版した『山行』の「まえがき」で書いておいでだ。この「無辺際の精神」といった抽象的なお考えをどこで会得なさったか、これについても、拙著『スイス山案内人の手帳より』をドイツ語版に直すとき、前記、ドイツ人神学者と話をした。榎さんは「マナスル登頂前の態勢づくりのとき「百尺竿頭さらに一步を進める」といった文言を『マナスル通信』で使っておいでだし、ご子息、恒治氏からは晩年の榎さんが道元に親しんでおられたとも聞いていた。師家からの印可にかかわらず、分かっている人が見れば分かるのが禅宗という悟りらしいし、そのきつかけは一瞬のものらしい。

榎さんはアイガー東山稜登攀でブラヴァントの「責任感の強いのに激しくうたれた。」とし、「この登攀で最も重要な道具、木製のポールを取り落とした。その瞬間、彼はポールを追って身を投げ、これを取り戻した。彼は自分の身の安全など考えてもいないのだ。私は涙の出るのをこらえきれなかった。人生とは不思議なものだ。我われは何かをする。野望から？ いや絶対にはそうではない。誠実でありた

い。それだけだ。」とブラヴァントのガイド手帳に英文で書いておいた。武士的な心構えの人の流す涙には、重いものがある。その後、「無辺際」の精神」といった表現をなさるまで、榎さんはさらに自己研鑽なさったのかもしれない。

「無辺際の精神」という文言が涅槃の境地を指すものであれば、日本山岳会創設に関わった小島烏水の「空々何々大正覚に達し、宇宙の大趣心源」に徹した状態といえるだろう。しかし、モーザーは「神の無辺際（*göttliche Unendlichkeit*）」という言い方は知っていたが、仏教そのものに入り込むことはなかった。ただ、榎さんがスイスの友人たちから受け継いだであろう心の絆が、共通の理念であることは理解していたように思える。スイスの世界的神学者、カール・バルトは真に「友人であること」を説いているが、スイスの中立国である根底にはそれがあるとして、1970年の大阪万博スイス館では、それについて話すバルトの肉声を流したとのことだ。

バルトはその話の中で、スイス国旗の十字が「話し合いのため、友好のため、世界を私たちの屋根の下に、中立国に招くために」という4つの方向を示している、と言っている。（『人類の知的遺産72バルト』）

しかし、自然を愛するモーザーにとって、他国人であふ

れ返るスイスは、本来のスイスから遠ざかっているという。面と向かって話をするときには見せない彼の胸の内を、老人特有の愚痴だと断りながら書いていた。

「僕にとって自然はますます重要になっている。スイスという国が、外国人を含む多くの人でいっそう悩まされても、山は美しいまま残るからだ」とグローバル化を危惧し、社会主義にも資本主義にも懐疑的で、「若い人々は多様な文化を身に付けている。」「スイスは崩壊している。この国には外国人が多過ぎる。資本主義は良くない。」と書いてもいる。

「仏教は良い宗教だと僕は思う。僕がずっとペシミストでいたいということ、君はよく分かっていると思う——世界はすっかり愚かになってしまった。特に僕らヨーロッパ人、なかでも金持ちのスイス人がそうだ。いちばん良いのは、いつも変わらずにある山々と自然だ。」

「もしどの国もどの民族も別々に自分たちだけで生活できる世の中だったら、どんなにか良いことだろう。小さいというのの良いことだ。大きいというのの良くない。自然は重要だ。しかし、人間は重要ではない。釈迦が言っているとおりだ。生きることは苦である、と。」

「僕は良くないクリスチャンだ、むしろ仏教の方に傾斜

している。聞くところによれば、ブータンの政治は仏教の影響下にあり、住人は善良で親切だという。僕は相変わらずシヨーペンハウアーの、人間は粗悪だという哲学を持っている。この粗悪な遺伝子は、僕らヨーロッパの文明社会でますます正体を鮮明にしている。知識や技術といった悪魔の所有物を信じ、神を信じもしない困った政治だ。」

「僕は哲学者でもないし、宣教師になろうと思ってもいい。僕はコミュニズムも資本主義も悪だと思っっている。人間は世界を変えられると思っっている、しかし、進歩などありはしない。世界が近づこうとしているのは神ではなく、悪魔になろうとする悪い状態なのだ。しかし、僕にはこれを変えることはできない。僕らが生きているのは、変更不能な変革の時代なのだ。人間は神になれるだろうと、みんなが信じているからだ。そんなことはあり得ないのに。」

「政治が抱えるたくさんの厄介な問題に融けていく氷河、広がる老人問題、いつも芳しいといえない若者の新しい考え！ 独りだけの自由、自由と真理が本当に価値あるものだ。しかし、こういうことを言っている人がいる。『虚偽はヨーロッパの偉大なる伝統だ』と。商売の世界、資本主義がやっていることは、真理とはほど遠い——人間がそう

だ。世界に平和はないだろう。それぞれが小さな（家族という）グループの中で平和を守らねばならない。その生活の中で謙虚さと感謝の念を持たねばならない。」

「世界は滅亡へ向かうだろう、しかし、自然は残り、自らを変えてゆくだろう。暖かな気候が勝利の栄冠を抱きながらやって来て、再び氷河期が来るだろう。」

「つい先日、最高齢のスイス人女性が110歳で亡くなった。彼女が言うには、よく眠り、いつもよく食べたからこの歳まで生きたのだと——それもまた自然というものだ。」と書いていた。これは空に浮かぶ雲、風で揺れる草木、流れる川などを色即是空とした仏教の話を私がしたときに「世の中は食ってハコして寝て起きてそのあと問えば死ぬるばかりぞ（Das Leben ist: der Mensch ist: vernichtet seine Notdurft, schläft, steht auf und danach was tut er? er stirbt nur）」という道歌の説明をしたから、覚えていたのかも知れない。世の中の動きに対する彼の悲観的な見方は、老人特有の厭世感かもしれないのだが、それが一層、山を純粹に眺める眼を育てていたのかとも思えた。

### 自然宗教への思い

「君が列車で発つときにくれたメモ、どうもありがとう。」

僕も」の自然宗教〈Natur-Religion〉というものを信じている。つまり、僕らは間もなく『自然へと戻って〈zurück zur Natur〉』いくのだ。(私は「自然回帰居士」と書いたメモを渡した：Suke wollte auf seinen Grabstein den Buchstabe "Ein zur Natur zurückgekehrter Mann" gravieren lassen.)」

横さんがスイス・アルプスに秩父宮殿下一行と登っておいでのころ、登山を終えて戻ってきた一行が元気で、愉快そうに山から下りてくるのを見たウェストンが、日本人の登山はヨーロッパ人の登山とは違う。おそらく禅の影響だと思うと横さんに話し、「私はもとより、失礼ながら宮様も他の仲間も禅に悟りを開いたとは思わないが」と『山の心』(1974年「毎日新聞社」)で書いておいでだ。山岳を「大経典」と表現した小島烏水と親交があったウェストンだから、そのように理解したとも思える。

秩父宮殿下と何度も登山を共になさった横さんは、殿下がお持ちになっていた「理想そのものである宇宙の神に帰一する」といったお考えを、各所で紹介しておいでだ。日本に古くからある「神」はキリスト教などの「神」とは違うと思うのだが、皇室に繋がる「神」を、殿下は正確につかんでおいでだったのかもしれない。本居宣長は『玉勝間』

で、漢籍より『神御典』(記紀)の方に人智の及びもつかないものがある、とさえ書いている。あの雪を載せた山々を越えて、遙か遠くの北国まで帰ってゆく渡り鳥の群れを見ていると、本能という言葉の中には文字で表現できないものを感じたりもする。大昔、大勢の人間が群をなして、大陸から海を越え、島国(倭の国?)に無事に移ってきたのだとすれば、その移動する人間の群れを導く、何かがあったのかもしれないとさえ思うのである。

1991年ごろのモーザーは、「登山にある最高の素晴らしさは、行動を共にする人間が神や自然について同じ思いを持ち、石や氷を越えて天に向かって行動するときだ。」と書いていたが、2001年になると「登山というものは、ますます複雑になっている。世界には大勢の人間がいて、頂上はたくさんルートの登ることができず。僕は相変わらず通常ルートから登るのがベストだ。」として、「クラシックな登山の時代は、ここスイスだけでなく、山のある所はどこでも過ぎ去ろうとしている。若者たちは相変わらず極限に立ち向かっている。氷瀑登攀、頂上のない岩壁を短パンで登るフリー・クライミング、室内競技場にある人工的手懸かりや足懸かりの付いた壁攀り。残念というべき

か、登山は月並みなスポーツになってしまった。魂だの神といったものは、どこかに行ってしまった。」とか、「若者は岩壁で競争し、氷結した滝で氷の出っ張りを攀じ登る。僕に言わせれば、この困った時代にぴったりの錯誤だ。」と書いて、「今も、山と自然がベストだ」と結んでいた。

「アルピニズムは、山岳スポーツに席を譲った。すべてが変化しているのだ。〈der Alpinismus wurde vom Bergsport abgelöst, alles wandelt sich.〉と亡くなる前年の2006年に書いてきた。

これがアルピニズムについて触れた、モーザーの最後の手紙だった。彼の心は、この時点で山から自然へと飛翔したように思える。彼にとって山は、イエス・キリストの十字架代わりだったのかもしれない。

モーザーの葬儀の様相を知らせてきたのは、彼の親戚のゾンマーで、山岳部のないETH（チューリヒ連邦工科大学）出身の技術者だが、山に興味を持ち、日本で学会があったときやって来て、1993年、初冬の富士山（彼は「巡礼の山」〈Der Prozession-Berg〉と呼んでいた）にガイドの松本正城氏とともに風雪の中、頂上まで登っている。

「空には一片の雲もなく、日が照り冷たい風が吹いて、周りの山は新雪で覆われていた。モーザーの知人で、女性の牧師が会衆を墓地へと導いた。葬列の先頭には花が、そして、彼と関係の深い工場の従業員が柩を支え、後に家族や親戚、大勢の友人や住民が続いた。2000人ぐらいたったろうか。柩が墓穴に降ろされ、牧師が祈りを捧げ、参会者たちは柩に近づき静かにお別れをした。埋葬が終わると、教会堂で改革派牧師、ファイトクネヒト夫人の司式で告別式が行なわれた。AACB会員の一人が、会に対するモーザーの貢献、登山への愛、業績を称え、会員たちはイタリア語で山の歌を歌った。牧師はモーザーの人生と、彼がいづも話していた価値あるものについて、神について、山についての哲学を称えた。そして、出席者全員がスイス・ドイツ語で山の歌を歌った。みんなは祈り、牧師は祝福を与えた。葬儀は厳かで、印象的だった。僕らは感動した。葬儀後、モーザーの遺志を汲み、近くの料理屋で参会者に食事が出る舞われた、ベルン・ドイツ語でグレプト〈Gredl〉というもの。大勢の知人や親戚がこの機会を利用して、話し合った。大笑いする者もいた。人々の緊張がほぐれ、元に戻り、普段の生活が始まった。」



モーザー家の窓越しに見えるバルムホルン-アルテルス



モーザーの墓標

この葬儀に出席したゾンマー夫人も、その年にガンで亡くなった。ゾンマーが富士山に登ったとき、夫人は佐藤小屋で夫の帰りを独りで待っていた。亡くなる前、夫人は迷惑をかけないためと遺言して、遺灰を夫妻が住む近くの丘の森に撒かせた。私は後日、その場所に案内され、孫たちが立ち木に結び付けたという、綺麗な形に切り抜いた、色あせた紙の垂れているのをいくつか見た。そこには何か日本の紙垂しでを思わせるものがあった。

この丘からの帰り道、それまでガスっていた南の空が晴れ上がり、ベルナーオーバーラントの青白く輝く峰々が、碧空の下に姿を浮かび上がらせるのを見た。

アルピニストだった教皇、ピオXI世が残した有名な言葉、「私たちが目を向ける高いアルプスの峰々が持つ、限りなく美しい魔力的な姿を眺めていると、私たちの魂は軽やかに、翼をつけて、神へ、自然の創造者、主へと飛んでいく。〈Beim Betrachten der Unendlichkeit und Schönheit der Zauberbilder, die sich von den hohen Gipfeln der Alpen unseren Blicken auftun, erhebt sich unsere Seele leicht geflügelt zu Gott, dem Schöpfer und Herrn der Natur.〉」を思い出した。

この言葉については麻生武治さんからも、ツエルマツト

のガイド、ビネルが亡くなったときの通知状に同じものが載っていた、と聞かされている。スイスでは、山仲間内でよく知られている言葉である。

図 書 紹 介

信州大学山岳科学総合研究所 発行

『山岳科学ブックレット』  
「No.1・登山道の安全を考える」～「No.10・  
山岳に生きる建築」



信州大学山岳科学総合研究所

2009年7月～2013年3月刊

A5判 54～148ページ

オフイスエム発売

各933円＋税

松本、長野、伊那など信州大学のキャンパスは、いずれも日本有数の山岳地帯にある。山国・信州の特徴ある研究として「山岳科学」を打ち立てようと、2002年にヴァーチャルな研究組織として設立された歴史を

経て、研究機関として「信州大学山岳科学総合研究所」が2006年に開設されたものだという。

基本理念は「今後100年間の近未来を見据えた、山岳地域の自然環境と人間活動との持続的な融合の方策を探る」というもの。この理念を実現するために「物質循環機構とその動態」「地表変動と災害発生機構」「生物多様性と各種共存機構」について、地球生物圏科学の視点からきめ細かく解析するという。

山を科学研究のテーマとして十年余、その成果や公開シンポジウムの概要、新聞連載などを編集したこの叢書の刊行が始まって4年目で、「山岳科学ブックレットNo.10」が発行された。

各号のテーマは多岐にわたっている。「No.1」は、白馬大雪溪のたびたびの崩落事故について、観光と登山、防災対策の観点から、自治体、山岳救助、防災事業、環境保全研究者それぞれの立場で、問題点の洗い出しと事故対策が模索されている。

研究フィールドは信州の山に限らない。地球温暖化については「No.2」で極地圏での研究成果の一端が語られ、長野県内の気温、降水の変動を報告して、気候変化を解析しようとする。「No.3」は、山岳地帯や里山、湖沼の生態系と人の生活の繋がりが、アジア各地を含む山と山村の暮らしと伝承文化の紹介。また、室堂（立山）をはじめとして建築史としての「山小屋」を調査研究の対象にした珍しい試みもある。焼岳をはじめとする長野県内の活火山の活動観察にも触れている。

「No.4」は、老人とスポーツ医学専門医師へのインタビュー、題して「人は山をめざす」で始まる。「Q. 中年は山に行きたがるんでしょうか? A. 中年は憧れを失いかけているんです。」「Q. 山登りって人生に似ているところがある? A. 人生そのものです。」など、痛快な問答が展開されていく。能勢博医師は熟年層に「インターバル歩」を指導して、効果を上げているようだ。平均寿命や高齢者就業率が全国的にも高い長野県のランキングを、さらに引き上げるのではないか。また、医療費削減効果にも触れている。

「No.5」では、極地と山岳地帯の雪氷研究について、フィールドワークを中心に、その歴史も含めて興味深く語られている。「No.6」は、厳しい自然環境の中での暮らしについて、長野県での地域医療の取り組みや成果、ヒマラヤ（高地環境）での生活習慣病と老人医療の調査結果を語る。また、山や川を身近に暮らす人たちの宗教観と文化について論考する。

蝶（「No.7」とツキノワグマ（「No.8」）、山岳昆虫（「No.9」）の生態研究から地球環境の変化と生物多様性を見つめようとする、フィールド・ワーカーたちの熱気が伝わる。

最新号「No.10・山岳に生きる建築」では、梅干野氏、成央氏は北アルプスの山小屋の履歴、構造を調査して近代登山の発展に沿って変遷を語っている。建築史の分野に山小屋の調査研究の礎を築くことを目指したという。まさしく山国の大学ならで

はの発想だ。歴史的な岩小屋や懐かしい山小屋の写真と図面が、たくさん掲載されている。多くの山岳建築の作品を残している故吉阪隆正氏（生前、日本山岳会活動でも活躍した）が建設に深く関わった涸沢ヒュッテは、1951年に設計を進めるにあたって、現場で雪氷被害に関する実験が繰り返され、それを踏まえた設計に多くの時間をかけて、石積み身を埋めて地形に擬態し、雪氷被害を最低限に抑えるように建てられたのだという、興味深い調査報告がされている。

山岳科学総合研究所が発信するこれらの「ブックレット」シリーズは、山と人に関わるあらゆる分野について、専門外の者や地域の人たちが、肩肘張らずに読み進める内容と記述になっていて親しみやすい。この研究機関は、最終的には人間を含む生命系の持続的な維持を目指して、自然環境再生・保全・活用および防災を実践できる「山岳地域の自然環境と人間活動との持続的な融合の方策を提言する」という壮大な目標を掲げている。研究者それぞれの専門分野の発表の場としての「山岳科学ブックレット」ではあるが、自然環境の厳しい山国に住む県民や、世界の山岳地域に暮らす人たちのなりわいや環境保全への関心（例えば鉱業、林業や内水面漁業の現状と将来など）を視野に入れたテーマを発掘して研究を継続し、最終目標である「自然環境と人間活動との持続的な融合の方策の提言」を期待したい。

（松澤 節夫）

山本秀峰・編訳／村野克明・訳

『富士山に登った外国人——幕末・明治の山旅』



露蘭堂 2012年12月刊

A5判 247ページ

3570円

富士山は2013年6月、ユネスコの世界遺産に登録された。その前後からこの山には、改めて多様な視線が注がれている。本書は、遺産登録を目指す運動が大きく盛り上がりつつあった2012年12月の刊行である。

書名からは幕末・明治期、「異国」人による我が霊峰への登山状況を考察した、例えば伏見功『富嶽歴史』（1982年刊）に類する論考か、とのイメージを与えられよう。が、著者名ではなく、「編・訳」者名である。帯に記された内容紹介文を読み、さらに目次へ進むと、当時の外国人富士登頂者9人による「山旅の記」集成を主としつつ、多様な資料・解説を周到に補強して編んだ書物だと得心させられる。

本邦初訳3篇と新訳6篇から成る「山旅の記」9篇は、登頂

の年代順に配列、各篇冒頭に「著者紹介と著書の概要」を設けて解説し、肖像・書影などを提示する。また、原書に掲載の写真・挿絵・図版を訳文中に収める（巻頭に「図版目次」あり）とともに、随所に精細な訳注を付す。さらに巻末には、当該の時期に対応する「外国人の主な富士登山年表」「外国人の富士登山に関する主要な文献資料（外国図書）」「参考文献」が加わる。至れり尽くせりの編集で、これらは富士登山を多角的に捉える手がかりとなり、広く他への活用も期待できて有用である。

\*

さて、幕末1860年代の2篇は、イギリス初代駐日公使R・オールコックらと、同国第2代公使H・パークスとその妻フアンニラの行に拠る。万延元年7月26日（新暦1860年9月11日）のオールコックは外国人として、慶応3年9月初め（新暦1867年10月初め）のフアンニは外国人女性として、それぞれ初登頂である。オールコックらは村山口へ頂上を往復して熱海で休養、パークスらは同じ村山口から登るが、吉田口へ下山している（パークス一行の登頂記は同行医師の書信である）。

続くのは1870年代、明治初期の2篇である。まず、アメリカ人理科教師E・クラークは9月、村山口から21時間を要した日帰り登山で、嵐のなかを下山した。イギリス人農芸家A・ジェフリーズは、残雪期の5月、アックスやロープを用いて須走口へ頂上を往復した。意欲的かつ画期的な早期の雪山登山で

あるが、すでに先蹤者があった。巻末の年表にも記される「1871年4月」の「イギリス軍人ベイヤード」である。同年7月に登頂したイギリス人ジャーナリスト、J・ブラックが彼の登頂記に書いている。

そして1880年代、明治前半の1篇は、アメリカ人天文学者D・トッドと妻メイベルによる、天体観測を目的とした9月の登頂。これはドイツ気象学者E・クニツピング、中央氣象台・正戸豹之介との共同観測であった。

後半には1890年代、明治20年代後半の4篇が並び、すべて御殿場口からの登頂である。1878年、箱根に外国人客専用として開業した、富士屋ホテルをベースとする方式が定着したからであろう。まず、イギリス人宣教師W・ウェストン、第1回来日中、残雪期5月の登頂記。そして、同じ年8月、イギリス人画家A・パインズによる登頂と頂上噴火口巡り。女性の巡礼にも会い、多くの風景画を描く。次いで日英混血24歳女性の登頂記。友人7人と登り、船酔い状態で頂上の小屋を探した夜、明けて好天の頂上展望に恵まれた朝を書く。最後はロシア人植物学者A・クラスノフ。9月の登頂記には具体的な地名は登場しないが、風景描写が詩的かつ哲学的で味わい深い。

\*

本書に集められた「山旅の記」の書き手は様々だ。厳密に数えれば9篇10人で、女性は2人だけ、アメリカ人3人、ロシア

人1人、ほかの6人はイギリス人である。職業や社会的地位から見ると、外交官、医師、教師、農芸家、天文学者、編集者、宣教師、画家、植物学者で、バラエティに富む。

登山観や目的、関心事や観察の視点が異なれば、それは各人の「山旅の記」に投影される。また彼らは、山村の風景や生活ぶり、森林や植生、地形や岩石、天候などに関心を寄せる。書き手によって、自然あるいは民情への傾斜に差はあるが、観察も描写も細かい。彼らの許で、地質・植物・天文・気象など、現地に臨んで観測し調査する方法と技術を学んだ日本の若者たちが近代科学進展の一翼を担い、その中から、山岳に親しむようになった者は少なくない。

さて、「山旅の記」のほとんどに「白衣の巡礼」が登場する。この書き手たちは、富士山をたとえ「秀丽にして比類なき山」と見立てても、決して手を合わせて拝みはしない。彼らが、山岳を自然観察あるいは風景鑑賞の対象とする文化を基盤にしてきたからである。

富士山で彼らは、山岳や自然を信仰の対象として登拝し、遭遇した現象に畏怖して祈りを捧げる文化の担い手に、初めて出会ったのだ。そこに、アルピニズムへ連なる近代登山と、この国に伝統的な信仰登山との対比が鮮明に見てとれる。外来の登山観に倣って登山を愛好し、明治前半は過ぎに山岳会を設立した都会の若者たちは、「白衣の巡礼」を迷信だと非難するに至る。

だが、徳川幕府による「慣習的に下層階級の人々に限られる」との侮蔑に重ねられた、この新たな苦難にも折れず、「白衣の巡礼」は現代に続いて、世界文化遺産の要素を形成する。

\*

1854（嘉永7）年、この国が欧米諸国と近代的な外交・通商関係に入つてすぐ、イギリスは世界で初めて山岳会を設立し（1857年）、ウインパーがマッターホルン初登頂（1865年）を果たした。登山はジェントルマンが嗜む、高尚なスポーツとして地歩を固めていた。

そんな「世界に冠たる大英帝国」の外交官オールコック。無理強いに開国させられて政情不安に揺らぐ極東の小国に赴任し（1859年）、翌年初め、公使に昇任して初めて幕府に提出した要求が「富士登山」であった。彼が江戸から眺める富士山に惹かれていたのは確かだが、果たしてそれだけだったのか。その要求に籠められていたのは、いったい何か。

オールコックはまず、日英通商修好条約が外交代表に保障する「国内旅行の自由」の実効性を具体的に確かめようとした。その途次、この国の庶民生活の実情を体感し、さらに庶民の「異人」観、「異人」対応を見極めようとしたのである。

これらは、オールコック自身が明らかにしている。本書編訳者が同じ版元から刊行した『富士登山と熱海の硫黄温泉訪問——1860年日本内地の旅行記録』（2010年刊）である。

解説に記すとおり、本書では、これから富士登山に直接関わる部分を抜粋・再編した。「異人」対応については訳注（16）を。国交を結んだ任地に着いた外交官らは、富士山に初めて接し、まずは、その優美な山容に魅せられたろう。この山を日本人が霊峰と仰ぎ、精神の拠り所としている実態を知るに及んで、関心はさらに膨らむ。その頂に立って自国の存在を誇示しよう、と。そう推測させるように、年表には、オールコック後も、外交官の富士登頂が相次ぐ。66年にはスイス、アメリカ、そしてパークスの直前にはオランダ、69年にはドイツと続く。

\*

周到に配慮された編訳書だが、全く問題なし、とはしない。まず、ウェストン「五月のフジヤマ」について。目次・中扉は「1890年」、解説・年表は「1892年」で一致しない。彼の最初の登頂年は前者だが、収録文の場合は後者。したがってこれは、筆者初の登頂ではない。

次いで、登頂季節の表記について。ベイヤードの1871年4月、ジェフリーズの1874年5月、ウェストンの1892年5月に關して、目次・解説・中扉・年表で「残雪期」と「積雪期」が入り混じる。この国では前者とするのが適切であろう。

いま一つ。E・サトウの初の登頂を、年表では「1868年8月」とするが、参考文献に挙げてある彼の『日本旅行日記』（2）では、「1877年7月」と明記している。（布川 欣二）

深野稔生 著

『銀嶺に向かって歌え——クライマー小川登喜男伝』



みず書房 2013年3月刊

四六判 320ページ

2800円＋税

1908（明治41）年、東京・浅草に生まれ、東北帝国大学山岳部と東京帝国大学山岳部に入学して、穂高岳・屏風岩や谷川岳・一ノ倉沢などで、当時としては驚異的と言える数々の困難な初登攀を成し遂げ、41歳で結核を患い夭折した昭和初期の天才クライマー、小川登喜男の伝記である。

小川は登山に関する記録や著作を公にはほとんど残さなかったため、著者は小川が学生時代に書き残した山岳部の部誌や蔵王ヒュッテの日誌の書き込みなどから丹念に生の言葉を集め、岩登りのみならず、蔵王をはじめ船形山、吾妻連峰など東北地方の深山幽谷をスキーで踏破し、また、エリート学生として時に様々な懊悩を抱いた小川登喜男の一生を、鮮やかにこの一冊に蘇らせた。

小川の登山家としての生涯を語る際に欠かすことのできないものとして、一つはもちろんその卓越したクライマーとしての困難な登攀の記録をたどること（時にアルパイン・スキーヤーとしての記録も）であり、もう一つは当時の（今でもそうであって欲しいと願うが）大学山岳部特有の文化であったのだろう、アカデミズムの実践としての登山活動を背景とした、様々な哲学的思惟の世界が挙げられよう。

まずは本書に従い、小川のカウクライマーとしての足跡の一部をたどる。

- 1929年9月 東北帝国大学・蔵王小屋（通称・蔵王ヒュッテ）建設
- 1930年7月 谷川岳・一ノ倉沢3ルンゼ初登攀
- 1931年7月 谷川岳・幽ノ沢左俣2ルンゼ、右俣、右俣リンネ初登攀、マチガ沢南稜初登攀
- 1931年8月 穂高岳・屏風岩第2ルンゼ、第1ルンゼ初登攀
- 1931年10月 谷川岳・一ノ倉沢4ルンゼ、コップ状右岩壁、右岩稜初登攀
- 1932年1月 穂高岳・岳沢コブ尾根積雪期初登攀
- 1932年4月 劔岳・源治郎尾根積雪期単独初登攀
- 1933年9月 谷川岳・一ノ倉沢衝立岩中央稜初登攀

1933年10月 谷川岳・一ノ倉沢烏帽子岩南稜初登攀

私も大学山岳部現役時代から谷川岳はホームグラウンドであり、小川が開拓したクラシック・ルートを幾つも登ったが、頼りにしていたガイドブックの初登攀者の項目に幾つも出てくる「小川登喜男」の名前が、強く胸に刻み付けられたことを思い出す。クライミング・シューズはおろか、ヘルメットやハーネスのなかった時代、さらにはピトンすら使われた形跡がないという、その登攀とはいかなるものであったのだろうか。しかも、その多くが初見での初登攀である。

クライミングの能力として、天性のバランス感覚と本能的かつ合理的な身のこなしこそが最も重要だと思うが、小川はそれが抜群に長けていたのであるうことは言うまでもない。もちろん、ルートの先を読むセンスと度胸も。

ほとんどのスポーツ競技において、技術革新による道具開発の恩恵を受け、記録は塗り替えられてきたが、登山においては記録の更新以前に、生命の危険を避けるという命題があり、この点では、例えば一ノ倉沢奥壁や穂高岳・屏風岩の記録的価値としての相対的グレードが下がったことは事実としても、墜落したら確実に死ぬという危険性は全く変わっていないのだから、小川の記録は驚異的であるとしか表現のしようがない。戦前の英国山岳会によるエベレスト遠征時の服装が、現代人の冬

の通勤着と大差なかったのと同様、登山の世界では、先人たちの残した記録は現代のものよりも遥かに尊いということ、疑いのない定義だと思うのだ。

次に2つ目のテーマとして、小川のような哲学的思惟の世界に目を向ける。特に小川は哲学を専攻していたがゆえに、東北地方の風土と相まったそのアカデミズムには、ロマンチズムが色濃く窺われるのである。東北帝大卒業間近となった1931年3月の部誌には、4000字詰原稿用紙にして10枚以上の大作となる書き込みがあるので、拾い読みする。

「山へ行くこと、それが芸術と宗教を貫くひとつの文化現象であるということは、自分が信じかつ主張する考えである。それはどういう意味なのか。(中略)

山は我々が登山の対象とする限り、美の仮象を追求する行為以上に、普遍的な絶対者の神と近似するものを持っている。登山は山の美しさの獲得と、強い引力を持つている。山は自然に対する人の感情の、最も鋭く反映されたものといえるだろう。(中略)

山についても、自分は二つの態度の両極を見る。つまり山に登るとき、自分は自分の心のうちに二つの側面を見る。激しい闘争を予期して岩壁にザイルを巻き、生命を賭して新しいルートを拓いてゆくときである。そのとき、強く激

しい心の働きは芸術の創造における態度に近づき、否、それ以上に強い生命の急迫を感じるのである。春の陽光の漏れるブナの森を行くとき、あるいは澄んだ秋空のもとにならかな高原の細道をさまようとき、自分は自然の美に陶醉する以上に、何か大きな自然の魂に触れて自己の浄化を感じるのである。一つの山行において憧憬がやがて行為となり、頂に立ち、自分の考えたコースが完成され、山の下へたどり着いて静かな思いにふけると、そこに二つの態度が認められる。これが創作と鑑賞、自力と他力ともに比すべき、闘争と享受の山特有の態度が存在すると考えられる。(中略)

行為なくして山はない。情熱なくしては、いかなる偉大なことも起こりえない。山への情熱は、山に行くことの中に純化されるだろう。」

著者もこの書き込みについて「まるで登山哲学のテキストのよう」と評しているが、なんとロマンチズム溢れるアカデミズムの発露であろうかと思う。旧制7年制高等学校を母体とする東京・吉祥寺の成蹊学園出身の私は、小川と同時代に活躍した帝大生クライマーの諸先輩方から多くの薫陶を受けてきたのだが、そうした哲学と縁遠い生活に浸っている今の身では、小川の語るこれらの言葉に共感を覚えますとは恐れ多くて言えな

い。がしかし、これらの言葉に触れるとき、なんとも言いようがない心地良さを皮膚感覚として感じる。本書は決して就寝前の睡眠導入剤ではなく、むしろ目を覚ませせ、若かりしころ自分もこうした思いを抱いて山にのめり込み、時に懊悩し、掛け替えない青春時代を過ごしてきた記憶を覚醒させる作用がある。

我が成蹊学園が谷川岳に建設した山小屋「虹芝寮」は一昨年80周年を迎えたが、蔵王ヒュッテ落成3年後の1932年、成蹊高校を卒業し、東北帝大入学後に親交のあった成瀬岩雄(後の日本山岳会副会長)を通じて、竣工間もない虹芝寮を部外者として最初に訪れたという記録が残されており、私にとつての小川は遠い憧れの存在でありながら、親近感も覚えずにはいられない。

小川は1949(昭和24)年12月、当時はまだ死の病であった結核により41歳で早世した。それにしても若いころの写真を見るにつけ、美男子ぶりではない、かのジョージ・マロリーもかくやというほど、端正かつ品のある顔立ちが印象的である。本書に触れることにより、古き良き山の日々をしのびつつ頁をめぐる幸福なひとときを、ぜひ多くの岳兄弟に味わっていただきたい。

〈本稿は2013年6月発行の会報「山」第817号に掲載された図書紹介文を加筆訂正したものである。〉(熊崎 和宏)

英国山岳会、英国王立地理学協会・編／池田常道・監修

## 『世界の山岳大百科』



山と溪谷社 2013年5月刊

B4変型判 360ページ

1万290円

イギリスは伝統的に百科事典の歴史を持っている。世界の代表的な百科事典『エンサイクロペディア・ブリタニカ』が刊行を開始したのは、1768年のことだ。その後版を重ね、世界中に広まっていく。日本でも販売され、かつては応接間のラックに堂々と陳列されていたことも、記憶に残っているかもしれない。『ブリタニカ』は人類が獲得した全知識を要約し、人類の知的活動のフレームワークを提示することによって、いわばあらゆる知識のレファレンスとなるべき世界標準（最近の用語を使えば、グローバル・スタンダード）を設定することを意図していたのだ。『世界の山岳大百科』というタイトルを見て、多くの人がこうした百科事典のイメージを連想したと思う。本書は2011年にイギリスで出版されたものの翻訳だが、日本版を

出した山と溪谷社の編集担当のコメントにも「山に向かう人間の姿を縦軸としてまとめられた登山史で、貴重な写真が満載されています。もちろん登山百科として価値ある本書です」と紹介されていて、そうした趣旨に沿った企画であることが分かる。

原題は《MOUNTAINEERS: Great Tales of Bravery and Conquest》なので、山の征服の歴史を彩った勇氣ある登山者の列伝、といった趣のタイトルが付いている。130人余りの登山家ないし登山にゆかりの人々を取り上げられて、その偉業が描き出されるとともに、編集者曰く「読み進むにつれ、登山史の表舞台の陰に隠されてきた実に興味深いエピソードの数々、登山家たちの人生の軌跡にひきつけられて」いく。アルプスの氷河で遺体が発見された紀元前3000年ごろと推定される「世界最古のアルピニスト《アイスマン》」から始まり、各時代を経て、19世紀のアルピニズム黄金時代を飾るアルピニスト、20世紀に入ればフィールドはヒマラヤや南・北アメリカ大陸にまで広がって、現代のエクストリームな流れにまで続いていく。ヨーロッパ、特にイギリス系の範囲にとどまらず、それ以外の国や地域、様々な階層、科学者、シエルパ、そして女性など、多様な系統の登山者にまで目を向けることによって、できるだけ広い領域をカバーしようとする努力が認められるだろう。そして、最後を締めくくるのが日本のギリギリ・ボーイズだ。

英国山岳会と英国王立地理学協会による共同編集になってお

り、権威と伝統ある2つの団体が所蔵している写真や各種の資料が豊富に掲載されていて、視覚的にも楽しめる。また、関連するトピックや、登山道具・登山技術の変遷、固有の山岳文化の紹介、主要な山のプロフィールなどが、コラムや特集ページの形で解説され、登山全般の理解に役立つ編集になっているし、巻末の「山名一覧」と「索引」も詳細で、山の百科としての本書の機能を高めている。ニュージージーランドの山岳誌《*The Climber*》が本書の書評をしているのだが、それによると、かつて《アルバイン・ジャーナル》の編集者を務めたエド・ダグラスが主に執筆にあたったという。以上のような目配りの利いた編集方針は、彼によるものだろう。

この種の登山史は、これまでもいろいろと書かれてきた。本書によく似た大部のものだと、1956年にフランスで刊行された《*Alpinistes celebres*》が思い浮かぶが、表題どおり「著名なアルピニスト」の足跡をたどりながら登山の可能性の拡大の歴史を描き出している。書かれたのは、まさにヒマラヤでの8000m峰初登頂の時期にあたっており、英国山岳会以来の登頂を競い合うというアルピニズムの正統に支えられ登山の可能性を信じて、各国による征服競争が繰り広げられていた状況であった。そのためであろうけれど、この書の「はじめに」では、あえて「アルピニズムはスポーツか？」との問いかけがなされている。それに対して答える執筆者も、一人に限るのでは

なく、多数の現役のアルピニストたちに協力してもらって、それぞれが自分なりの視点で書いている。だから、そこには一人一人の登山者たち自身の山への関わり方が披露されていたのだし、それこそが、編集責任者アンリ・ド・セゴニーヌのもくろみだった。

これとはむしろ逆に、おのれ一人の経験に即して、自らをかつての挑戦者たちに寄り添わせながら、個人の視点から登山の歴史を受け止めようとしたものとして、クリス・ボントンの《*The Climbers: A History of Mountaineering*》(1992)があるだろう。読むにつれて、先駆者たちの登攀を、それを書くことで追体験しようとするボントンの想いが伝わってくる。日本に限るなら、最近では『目で見る日本登山史』(山と溪谷社、2005年)が意欲的な企画だ。多様な視覚素材を駆使して「山と日本人」をビジュアルでたどることを狙いとしつつ、登山史研究の成果を踏まえて登山史全般の見直しを試みている。

では、21世紀のこの時点で、改めて本書を出すことの狙いとはなんだったのか。そう問いつつ「はじめに」を読むと、そこでは「山に登ることにこれといった効用はない」と書き始められる。それで「そこに山があるから」というマロリーの名言が引かれる。そうした「あまいな目標」のために、極限まで自らの肉体を追い込んでいくのが登山だという。その上で「山に登る理由」を説明するのは難しいかもしれないが、「本書に収録さ

れた写真や物語に目を通せば、登山が与える計り知れない恩恵について、疑う余地はほとんどない」と述べて、「僕たちは楽しんで、また山に登るために生き延びたのさ。それが大事ななんだ」というミック・ファウラーの言葉で結んでいる。

「なぜ山に登るのか？」幾度となく繰り返されてきた、このいわくつきの問いを自ら立てていると思えるのだが、それに明示的な答えを与えているのでもないようだ。ただ、引き合いに出されているマロリーとファウラーの言葉に縁取られた「はじめに」の文章を読み終えたとき、ふと感じたのは、いい知れない無感動さに突き放されたような想いだった。

それは、一つには中立的な立場から客観的な知識の集積に努めることでもって、百科事典の精神に対して忠実に、その分限を守ろうとする姿勢があるためなのかもしれない。それは、それなりにイギリス的伝統に則っているのだといってもよい。タイトルに「征服」の文字が入っているのも、かつて征服的な登山が金科玉条とされていた時代へのノスタルジーではなくして、そうした過去の歴史を振り返る眼差しを表わすものと理解しておきたい。歴史の流れを踏まえつつ、読者自らが、それぞれ登山というものを考えていくための素材を提供する目的で、現在のクライミング・シーン全体の見取り図を示そうとするところが、本書の主眼であったと見られる。

とはいえ、本書の後半ではアルパイン・スタイルが主流となっ

ていく傾向を取り上げて、このような「アプローチの変化には危険が内在しており、多くの登山家が命を落としている。しかし、この新しい方向性こそが登山を再活性化する」との確認がなされ、アルパイン・スタイルに対して肯定的な評価を与えている。こうした評価をする際には、その拠り所として「どんな方法で、どこに、どんな装備で登ったかが、登頂することと同じくらい重要なこととなった」という、アルピニズムの黄金時代に「スポーツとしての登山」が主流になった当初からの基本的な認識が踏襲されていることを指摘しておこう。その上に立って、一方で「正統な手段」として何が認められるかという問題に対しては、現状に即したアルピニズムの基準を改めて提示するとともに、もう一方で「どの程度までのリスクを許容すべきか」という点については、登山が命を懸けた「ギャンブル」になることは断固退ける、という立場を明確にしている。

人工登攀が拡大していったなかで、どこまで人工的な補助手段を認めるかが問われた状況を通過後、その問いを「どういった試みができるかではなく、どういった試みをすべきか」という形で捉え直し、それを「登山倫理」の問題として再定義していることに、本書として一つの主張が表われている。技術の濫用は、技術の力によってどんな困難な山でも登れることになってしまい、結局メスナーが言ったように「不可能の殺人」という結果になるしかない。

現在では、かつて英国山岳会がそうであったような「世界の登山を管理する団体」はなくなっている。となれば、何が許されるのか、あるいは許されないか、という倫理問題に対しては「実践者が自ら、大多数の意見、あるいは意見のないことを考慮した上でルールを決めるしかない」ことになる。これは「安全と便利のために、挑戦の本質をどのくらい変える」のかという点にも関わっていることであって、そうした見方を通して、アルパイン・スタイルに正統性を与えるための理由付けを、ここで本書なりに行なおうとしているようだ。

これらの叙述を受けて、ギリギリ・ボーイズが登場する。ここでは「困難なことを考えだすだけで戦いの半分というようなクライミング」の世界が出現しているとして「クライミングの価値は非合理的なほど増す」のだという、横山勝丘の言葉が紹介されていることは見逃さないでおこう。これは、デナリを巡って「小さすぎたのは、あの山域ではなくて、多くの想像力だった」とのステイヴ・ハウスの告白に逆照射されつつ、アジアのクライマーの試みのなかに、困難の可能性の定義そのものを組み替えていける、想像力の働きを見極めようとしているとも見られるからだ。このようなクライミングへの視点が、今後どのような展開を生むことができるのか注目したい。

本書から了解される登山の理解は、こういったものである。ただし、それはあくまでも登り方の問題であって、人間が、山

ないし自然とどのような関係を持つかという、より根源的な問いとは区別されねばなるまい。確かに本書にも、観光開発からの影響、生物多様性の喪失、氷河の後退といったような自然保護の視点からの記事も含まれてはいるが、問題の指摘の範囲にとどまっている。本書の後半では、登山倫理とか哲学といった言葉が盛んに使われているにせよ、その場合でも、どのように山に登るかという登り方の問題について言われているのであって、自然としての山に登ること自体に対する問いかけとはなっていないことは、指摘され得るだろう。

いざれにしても、英国山岳会が中心となってこれだけの労作を完成させた力量は認められるべきだ。山岳会の役割が問われている今、日本山岳会の在り方に対してもインパクトを与える企画と受け止めておこう。

最後に、本書を推薦するにあたって日本の編集担当は「たまには Arniehair Mountaineer もいいものです」と、その楽しみ方を表現している。確かに中高年登山全盛の日本の昨今を見れば、なかなか言い得て妙だと思う。特に理屈を言わなくても、この本は読んで面白いし、ただ見ているだけでも楽しめる。このような本書の効能を巡っては、先の《The Climber》の評者が、また別の提案をしているので、それも合わせて披露させていた。

よくザックの中に記念の石を入れて持ち帰ったりするが、そ



『登山の哲学 標高8000メートルを生き抜く』

竹内洋岳 著

NHK出版 2013年5月刊

新書判 205ページ

740円＋税

それは荷を重くして、ときには危険を招く行為ともなり得る。そのような観点から見ると、この本の2kgという重さはけつして軽くはない。しかし、と彼は言っている。パーティのギアの中にちよつと本書を忍び込ませておけば、雪洞での一夜を「無限に楽しくしてくれる」に違いない。

(飯田 年穂)



『頂へ、そしてその先へ』

竹内洋岳 著

東京書籍 2013年8月刊

四六判 159ページ

1400円＋税



『登頂 竹内洋岳』

塩野米松 著

筑摩書房 2013年6月刊

四六判 242ページ

1600円＋税

私たちは長い間、8000m峰14座を登る日本人登山家の出現を待望してきた。それが2012年5月に実現した。長く夢見られ、幾多の実力派が挑んで敗れ去った8000m14座を、竹内洋岳がスタイリッシュに登り切ったのである。その竹内の著書が2013年5月、6月、8月と立て続けに3冊刊行された。3冊の内、塩野氏の本は14座登頂のドキュメンタリーであり、竹内自身の2冊は彼の登山に対する哲学と方法論をまとめたものだ。3冊とも一気に読み終えることができるのは、彼の人柄に加え、竹内の魅力を存分に引き出した編集の力によることも大きい。個々の8000m峰については、会員諸氏のよく知るところだろうから、彼の登頂の様子は紹介しない。ここでは彼の登山に対する考え方を、3冊を通して紹介したい。

1冊目、『登山の哲学 標高8000メートルを生き抜く』を書いたのは、「少しでも、高所登山の魅力を知ってもらいたい。そして、本来だれもが持っているはずの、挑戦を続ける喜びをもう一度取り戻してもらいたい。」という思いからだと言う。祖父との山遊びに始まった山登りは、立正大学山岳部を経て、本会のマカルー、K2登山隊にも参加するほどになった。しかし彼は、次第に組織的な登山隊では登頂できなかったことを素直に喜ばなくなる。そして、少人数でチームを組む国際公募隊に参加すると、そこでは登山という非日常的な空間そのものを楽しむことができた。その経験は新鮮な驚きであり、彼の登山は、「組

織」から「個人」へと大きく変わる。登山の世界で生きていく覚悟が決まると、自らをプロの登山家と宣言して、14座完登に挑戦する。彼は並み外れた心肺機能や運動能力を持っていないことを承知で、困難な挑戦を成し遂げようと思ったのだ。だから、彼は自分の体からいかに力を引き出すか、死をいかに避け、安全に頂上にたどり着き下山するか、それをとことん考え抜くのである。最先端のツールを使いこなすことで安全を確保し、新たな能力を発揮させる。より困難で高度な課題に向かっても、経験に頼らない。2度の事故を経験し死の淵をさまよったのだが、その生と死を分けたのは「想像力」だと断言する。第1章「もつとも宇宙に近い場所」から第6章「危険を回避する想像力」まで、8000mという死の地帯で繰り返し広げられた、高所登山に対する新しい方法論を知ることができる。ともに、現代青年の成長の物語としても読むことができる一冊である。

さて、次の一冊『登頂 竹内洋岳』は、塩野米松氏の手になる『初代 竹内洋岳に聞く』（アートオフィスブリズム刊）の続編。14座完全登頂への挑戦と記録達成までを、丹念な聞き取りにより、竹内の魅力をあますところなく伝えるノンフィクションである。また、引用される彼のブログは、竹内の人柄そのものに溢れている。「14座を登りきります」と宣言した「プロ登山家」とアマチュアの違いは、心構えの違い、覚悟の持ち方だ。自分が登れる登れないを自分で確かめ、自分の判断で自分自身

を守る。そして、自分の力で登っていく。今やそれが彼の登山のスタイルだ。14座は、実は14の個性を持った一つ一つの山で、それを登り続けてきただけのことなのだ、とためらうことなく言う。著者は「登山は、自分に対してのスポーツ」なのだ」と、竹内の登山の良き理解者である。

最後の一冊「頂へ、そしてその先へ」は、『登山の哲学』のエピローグ「十四座の先にあるもの―まだまだ伝えきれしていない」ことが、7章63の箴言とも教訓とも言える本文と、14座についてのショート・コラムで語られる。その幾つかを書き出してみよう。

例えば、「誰かから決め方を教わるのではなく、自分で決める」「いままでのやり方が通用しなくなつた時、それはピンチではなくチャンス到来かもしれない」「いいことだけの想像力はただの空想であり夢想です。悪いことだけの想像力はただの怖がり怠惰です」「自由さは自己責任の大きさと表裏一体だ」「挑戦と失敗と悔しさがあるから、発展と進歩がある」――このように本文には何がしかの教訓がある。これは登山の本というより、ちよつと先輩から若者への、仕事を、日常を、人生をどう生きるか、そんなときの激励の本なのか。もちろん「大事なものは本気で楽しんで登ること」であり、「山は非常にフェアで、底知れぬ魅力を持っている」し、「苦しさをはるかに上回る魅力、苦しさを打ち消して余りある面白さがある」と大いに山を語る。

それでは、これは登山の楽しさを伝える啓蒙の書だろうか。いや、彼が一番言いたいことは、登山も生き方も想像力が問題なのだとことだろう。

すべてが日常的に消費されていく現代社会にあつて、山登りもその例外ではない。登山が、行為としてただ消費されていくようなそんな危うい境界を、彼は登っているようでもある。しかし、竹内の行為は決して誰からも消費されはしない。消費はついに、彼に、彼の登山に追いつくことはできないだろう。なぜなら、彼には確固たる登山の哲学があるからである。昔の登山家はそれを少し回りにくい言い方をしたが、彼は明確で、まっすぐに言う。その清々しさがいい。山に対する考え方は明快だが、新しく見える思考はその実、古典的のように思われる。古風な言い方をすれば、彼は醇乎たる高所山岳の、醇なる登山家であると言えよう。好著3冊である。

(絹川 祥夫)

中西健夫 著

## 『山の本をつくる』



ナカニシヤ出版 2013年8月刊  
四六判 282ページ

2800円＋税

「京都大学前の書肆として、先生方の本を約二千冊も世に出してきましたので、一冊だけ自分の本を作りたいとの考えは数年ほど前からありました。……」と、著者が発刊の挨拶文で述べているように、山の本を作ってきた編集者であり、ナカニシヤ出版社長の中西さんが、著者や本との関わりを中心に綴った自伝史である。

将来、物書きを目指す編集者は別として、黒子として本作り  
に徹している編集者が本を出すことは稀である。恐らく著者と  
しても、嬉しいような、照れ臭いような、あるいは過去に本作  
りを手伝った先生方や登山家がどのような目で見るか、いささ  
か不安もあったのではなからうか。かつて同業者であった私  
(山と溪谷社勤務)は、そう推察した次第である。

ナカニシヤ書店は1928(昭和3)年、著者のお父さんが  
吉田神社の近くに開業、4年後に京都大学正門前に移転したも  
の。京大や三高の先生、学生以外の人にはあまり知られていな  
い所にある書店だった。京大出身の作家、野間宏はその著書『わ  
が塔はそこに立つ』の中で、「ナカニシヤの店先で本の立読みを  
しているなかに知った顔があるのをふと見つけ……」と書いて  
いるという。

当初は書店がメインだったが、地の利から京大教養部の広範  
囲な教科書の出版も手がけていた。もちろん、それらは市販す  
るものではなかった。ところが1970(昭和45)年、書店の  
お得意さんだった教養部の先生から紹介され、著者にとって初  
めての山の本となる『京都の秘境 芦生』(渡辺弘之著)が生ま  
れるのである。京都・福井・滋賀3県の県境近く、日本海に注  
ぐ由良川源流にある芦生原生林が、関西電力のダム計画で危な  
いということが出版のきっかけだった。

なお、私事で恐縮だが、実は私もこの渡辺弘之先生の本を1  
979(昭和54)年に出させていたでいる。月刊誌『山と  
溪谷』に連載後単行本化した『登山者のための生態学』である。  
各地で自然保護の大切さが叫ばれ、登山者もエコロジカルな目  
を持ち始めた時代である。

爾来40年、中西さんはその間に約2000点の書物を世に送

り出しているが、山の本はその内の10%にも満たないという。ただ、「山の本をつくる楽しみがあったからこそ出版を続けてこられたようにも思う。それは山が好きで本が好きだったからだ。」という。1990年代に入って書店の方は閉じてしまいが、その前の1982（昭和57）年、ナカニシヤ出版を正式に誕生させている。

「まえがき」に著者が「この本の目次を見ても面白い内容を読んでもらうと、私が山の本を作りながら、そして岳人とききあいながら成長してアイデンティティを構築していく過程が解かってもらえると思う。」と述べているが、目次を列記してみよう。

- I 山の本をつくり始めたころ
- II 京都発の山の本をつくる
- III 関西の山の本から日本の山の本へ
- IV ヒマラヤへの夢を本に
- V ヨーロッパアルプスを愉しむ
- VI 京都に棲息七十七年―こだわりの自分史抄

京都・声生に始まった本作りは、北山、比良から次第にそのテリトリーを広げ、大台ヶ原や鈴鹿、奥美濃、飛騨へと拡散し、関西全域が対象となっていく。著者の意図したとおり、それら

の本が誕生していく過程が、本文や下段の書影、カット写真から感じ取れ、楽しい。

京都には、京都大学学士山岳会のメンバーをはじめ日本の登山史に大きな足跡を刻んだ岳人が多い。それらの人々と編んだ山の名著が次々と登場してくる。編集者の財産は人脈である。今西錦司ら錚々たる顔ぶれとの交流からさらに対象は広がり、ついには「関西発全国区」となる。そして「たどりついた頂上」として、日本山岳会創立百周年記念出版の『新日本山岳誌』が生まれる。その制作過程が綴られ、先ごろ亡くなられた五百澤智也さんのエピソードも語られている。

IV章では海外の山の紀行や翻訳出版について語られる。なかでも特筆すべきは「世界で一番くわしい山の本」として紹介される宮森常雄著『カラコルム・ヒンズークシユ登山地図』で、国内外から高く評価され、2002年、第5回の「秩父宮記念山岳賞」を受賞している。

第V章はカラーページで、還暦以降、毎夏楽しんできたヨーロッパ・アルプスの山と鉄道のグラフィックな紀行および資料編である。本作り同様、アルプスの隅々まで根気良く、丹念に旅された様子が、手に取るように分かる。

そして、最終章は「幼虫の住処―ゆりかごの山・吉田山」と題して、生い立ちから始まって、出版人としての自分史が簡潔にまとめられている。

人は生まれを選べないが、京都に生まれ、山を歩き、京大という文化に接し、そこから人脈を広げ、本という知的生産物をケルンのように積み上げていった著者の人生は、幸運な環境（もちろん、それだけではないが）にあったと思う。次々と展開される山・人・本……。『山が好き、本が好き』と自任する著者の面目躍如たる軌跡を、我々読者も共に楽しみながらたどることができる。

なお、第V章のカラーページは、眺めているだけで大変楽しかったが、これはメインテーマから少し外れるので、巻末に綴じ込み付録のような形で入れた方が良かったのではないかと考える。個人的にはもう1折ページを増やし、じっくり写真を見ただかつたと思うのだが、いかがだろうか。

（節田 重節）

五十嶋一晃 著

『立山ガイド史』



五十嶋商事 2013年8月刊

A5判 779ページ

4515円

日本の登山史において、立山ガイドたちの活躍は輝かしい軌跡を描いている。近代登山の発展とともに、それは日本アルプス探検の時代から積雪期登山へと繋がりが、やがて南極観測やヒマラヤ登山の時代へと、連綿と継続しているのである。著者の五十嶋一晃氏は、日本山岳会会員であれば誰もが知る、北アルプス・薬師岳の南西にある太郎平小屋のオーナーの家に生まれ、法政大学山岳部でアルピニズムを謳歌した後、仕事の傍ら多くの登山史研究に成果を上げておられる。本会の大先輩、田部重治さんに関わる評伝や、近年、『劔岳 点の記』の映画で有名になった、劔岳東面・長次郎雪渓に名を残す、宇治長次郎の評伝や、『日本山岳会百年史』中「続編・資料編」の「日本の山案内人」「学校山岳部の発足」などを執筆され、さらに新しい考察や

著作執筆に意欲的と伺っている。

『立山ガイド史』は、大きな目次項目だけでも14に及び、77ページの大著である。長年の取材・調査・研究の努力もさることながら、郷土の山々と地域社会への愛着なくしては、ここまでの情熱と作業を継続することは困難であろう。

私なりの読後感ではあるが、1. 立山ガイドの特性と起源、7. 立山ガイドの系統と系譜、および13. 立山連峰の地名と標高の特徴、が特に興味深いものであった。特性に関する記述の中で、「中語」と称された立山ガイドの原点に関わる立山講について、主神や本尊が頂にあることにより、安全管理の役割を担う重さが強調されている。加賀藩黒部奥山廻りの杣人の記述でも、安全管理が良く、230年間遭難記録がないとなっている。正に現代の山岳ガイドが模範にしたい職能である。系譜に関しては、現代までに至る各家の変遷が見え、現立山山荘協同組合や立山ガイド協会の皆さんの顔を思い浮かべながら読み続けることができた。山名、地形の表現については、頭(とう、かしら)を「づこ」と読ませることを知ったのも興味深い。本会元会長で、碩学の武田久吉博士もこのことに言及していたことを思い出した。確か平蔵ノ頭を「へいぞうのづこ」という例があった。日本各地でも同様な事例が多く、忘れない内に原典を査査し、残すべきである。著者が強調する、登山史上における先達との関係は膨大で、別に語るべき人がいそぐだ。

宗教登山や修験道における参加者と案内者、または導師の役割は、現代に至るまで存在しており、山岳では富士講、立山講、御嶽講などの全国版から、丹沢の大山講や奥多摩の御岳講のように、地域社会でポピュラーなものもある。修験道でも大峰山や出羽三山などが有名で、そこから派生分化していった集団登山、旅行、宿泊、山案内人(ガイド)等々は、現代の旅行業、山小屋経営、ガイド業などの形態の起源の一端を如実に表している。

本会会員は良くご存じと思うが、日本山岳会の英文名は、Japanese Alpine Clubである。つまり、アルプス的な登山＝アルピニズムを体現することを大きな目的にしている訳で、今から約110年前に発足したときの文化的状況でもあった。本書『立山ガイド史』に貫かれているキーワードは、私の深読みかも知れないがこれであり、本会の多くの先達が、探検や冒険、登山を本邦で行なうにあたっての、案内人・ガイドとしての職業が成立していく過程であった。

立山ガイドの変遷は、一方では、現代に至るまでの日本各地におけるガイドの変遷とも重なり、立山ガイド史を知ることが、同じように日本の山案内人並びに山岳ガイドの歴史を理解することになる。他方で、本会の歴史の中で、立山ガイドがいかに重要な役回りを演じたかを改めて問い直し、国立登山研修所の位置付けまでも含めた、別の価値評価を下すこともできそう

だ。古来の登山とアルピニズムの葛藤から近代登山の発展と変遷まで、『立山ガイド史』を通じて読み取れる。アルピニズムとしての登山は、挑戦であり、冒険であり、究極の遊びであるから、自己責任の体現でもある。それが「文化」であることを本書は語っている。

（磯野 剛太）

山口耀久 著

## 『アルプの時代』



山と溪谷社 2013年10月刊

四六版 355ページ

3300円＋税

『アルプ』という名前を聞いて、すぐに山の文芸誌と分かる登山愛好者は、いったいどれくらいいるのだろう。おそらく、多くはないに違いない。山の本を読む人をほとんど見かけなくなってしまう昨近、山に関する本といえば、ガイドブックかファクションを紹介する本しか営業ベースに乗らないと聞いたことがある。登山と本が蜜月の関係にあった幸せな時代は遠く

流れ去り、そこに泡沫うたかたのように浮かんでいた『アルプ』という類まれな雑誌も、消え去って久しい。

フリー・クライミング、トレイル・ランニングに代表される登山のスポーツ化、百名山ブームや高尾山の現状などに見られる登山のレジャー化。そういった趨勢のなかで、登山から文化的な香りがしなくなったのは、ある意味必然だったのかもしれない。

ただ、そんななかでも山の文芸誌『アルプ』は、細々とだが人々の記憶に残り、今も語り継がれている。

本書は昭和33年から58年までの25年間、文学性、芸術性に富んだ山の文章と絵によって、文化としての登山に大きな影響を与えてきた雑誌『アルプ』の誕生から終刊、その後の時代に残した影響を描いた評伝である。ここで敢えて評伝と言ったのは、著者が本書の中でまるで一人の人物の一生を扱うかのように『アルプ』と向き合っているためである。

『アルプ』が創刊された昭和33年に私はまだ2歳。山を始めたのは中学生のときだが、山の雑誌というともっぱら『山と溪谷』と『岳人』で、ときどき『岩と雪』を買い求めることがある程度。本書の中で「そこまでが『アルプ』の青壮年期であったような気がする。」と位置付けられている「第3回アルプ展」は、昭和45年で私が中学2年生のときだが、ただひたすら山が楽しくて、文芸には見向きもしなかった。

結局、終刊を迎えるまで私が『アルプ』に興味を持ったことは一度もない。もちろん『アルプ』という山の文芸誌があることは知っていたが、軟弱な山の雑誌というイメージが強く、到底読んでみようという気にはならなかった。若い登山者の多くがそうであるように、山を感じ、思索するというより、とにかく山はががつ登るものだと信じ、そこに楽しみを感じていたのである。

そんな山登りに飽きてきたのは、30歳を過ぎたあたりだろうか。誰から勧められることもなく、いつの間にか山の書籍を手に入れ、読みあさるようになっていた。読んだ本の中には『アルプ』から生まれた紀行や画文も数多くあり、否応なく元本としての『アルプ』の存在を意識するようになった。しかし時は遅く、すでに『アルプ』は古書店でしか手に入らなくなっていた。

いわば私は『アルプ』という列車が駅を発ち、姿が見えなくなつてからやつと駅にたどり着いた世代なのである。当然『アルプ』が発行されていたころの時代の雰囲気知らないし、ほとんどの執筆者は会ったことも見たこともない。ただ、『アルプ』出自の本から、それがどのような時代で、どのような人々が文や絵を寄せていたのかを想像するのみである。私にとつて『アルプ』は「記憶」ではなく「歴史」なのである。

そんな私が本書『アルプの時代』を紹介するのは、「アルプの

時代」に身を置いていた先輩方からすると、無責任かつ地に足が着いていないように見えるに違いない。しかし、乗り遅れた世代でも『アルプ』という雑誌に惹かれるのは、「アルプの時代」を生きた先輩たちと同じだと思う。『アルプ』にはその文学性、芸術性によって世代を超えた普遍的な魅力があるのだ。いみじくも長年の間、本や雑誌の編集に携わってきた大森久雄氏が『アルプ』創刊号を手にしたときの印象の中に、その魅力が端的に示されている。「広告とコースガイドの二つを私は二大必要悪だと思っていて、毎月これと取り組まねばならない日が来るとまったく辟易したものです。そういうときに括目すべき雑誌作りをやってくれたのがこの『アルプ』でした。……それは5月の新緑の山のようにすがすがしい印象で、このときの新鮮な感動を私は今でも忘れることができません。」

本書を著したのは山口耀久氏。抒情に満ちた山の紀行や随想で多くのファンを魅了している登山家である。特に『北八ッ彷徨』や『八ヶ岳挽歌』は、抒情に満ちた山の名著として多くの人から愛されている。一方、山口氏はクライマーとして八ヶ岳を中心に数多くのルートを開拓し、獨標登高会の創設者として日本のアルピニズムを牽引してきた。寂しいことだが、山口氏のような文武兼ね備えた登山家はすでにほとんど消え失せ、絶滅危惧種となっている。時代の流れと言ってしまったらそれまでだが、スポーツとレジャーに席卷されている今の登山には、

抒情的な文を紡ぎ出す才能はもはや必要とされていないのだろう。そのようななかで山口氏がまだ健在なのは、文学と芸術を愛する登山愛好家にとって幸せなことである。

山口氏は『アルプ』に深く関わり、執筆や編集で重要な役割を担ってきた。そんな山口氏の存在なくして、『アルプ』という雑誌の評伝が世に出ることはなかったといえよう。

本書では、まず創刊の時代背景が語られ、続いて創刊のいきさつと誕生のエピソードが、創文社の久保井社長と哲学者・串田孫一氏の動きを中心に描かれていく。さらにそれを承けて、本書で多くの紙数を割いているのが筆者たちの作品と人物を語るページである。

創刊から終刊までの25年間、ずっと筆者または編集者としてこの雑誌に携わってきただけあって、一つ一つのエピソードや描写には、山口氏でなければ書けないようなものが多い。そこでは『アルプ』に寄稿された文や絵についての眞頂なしの論評、それらの作者の人間像が愛情のこもった視線で見事に描かれている。山口氏は抒情性に溢れた文章で評価され、多くのファンを得てきた文筆家だが、実は本質を捉えた人物描写と、周囲の雑音に惑わされない的確な論評が眞骨頂なのではないかとも思わされる。

目を惹くエピソードは数多いが、そのなかでは素朴を人にしたような版画家・畦池梅太郎氏について語った一節や、生き様

そのものがポエジーだった自由人・辻まこと氏を描写した文に、いかにも山口氏らしい愛情に溢れた的確な論評と分析が見られる面白い。

「アルプの夕べとその他の催し」について語る章も、そのころの登山者の熱気と時代を余すところなく伝えている。私が知らない時代のことだが、乗り遅れた者としては、そこに立ち会えた人が羨ましくてたまらない。

起承転結の「転」に相当するのが「紀行文における虚と実」という一章。一見、本文の間に挟まれたトピックのようで、本書の本筋からはやや外れている感はあるが、それにしても、あまりにも内容が濃い。この章で山口氏は紀行文の本質を見事にあぶり出しているのだ。おそらくこの章に書かれていることは、著者がどうしても書きたかったテーマなのだろう。そこでは、紀行文を書く者が知らず知らず行なっていることが粗上に載せられ、はらわたを白日の下に曝されている。

「高度な表現をもくろむ場合は体験そのものはあくまでも素材でしかなく、それを再構成した文章はもはや事実そのものではない。」「ある物事にほんとうに感動したら、それはその場では言葉にならない。……あとでそれを言葉に直した文章は、もはやもとの感動そのままでないことは明らかである。」と山口氏は言う。紀行文を書いたことのある人であれば、誰でも思い当たる節があることである。ふだん意識していないが「事

「実」を旨とする紀行文もその実、「虚構」によって「事実」を強調する必要があるのだ。紀行文を書く筆には、狸の毛が混ざっているのである。

本書の結びでは『アルプ』の終刊とその後の時代に残した影響が語られる。

終刊の一番大きな理由は、新しい書き手が現われなくなり、原稿が集まらなくなったことである。「ただ山に登る、頂上を極めるだけが目標で、それを文や絵に残そうとする人たちが少ないのです。」と言う『アルプ』編集長・大洞氏の談話。『アルプ』が終刊を迎えたころ、ただ山に登るだけの登山をしていた私にとっては、耳に痛い言葉である。

終刊にあたって申田孫一氏が語ったひと筋の希望、「山の文芸の復興の兆しがあれば、それは次代の人たちに期待しましょう」という言葉も、フリー・クライミングの流行、「日本百名山」巡りブームや「団体で連れて行ってもらう中高年の登山」が登山の主流になった今としては、ただ虚しい。

しかし、本書はそこで終わらない。『アルプ』が終刊となった後も、その足跡と精神を後世に伝える美術館が現われ、文を寄稿していた作者たちが中心となって山の文化を担っていくのである。

さらにおまけのように掉尾に付け加えられている「補遺として」は、補遺といって片づけるには奥が深過ぎる一文である。

ここでは「すぐれた文章（山の紀行文）」としての主要条件としての感性、描写を『アルプ』に掲載された申田孫一氏と尾崎喜八氏の文を題材にして論じている。「感性は磨かなければ衰えてしまう。ならばどうやって磨いたらいいのか。山についていえば、五感を十二分にはたらかせて、山という大きな自然との交流を深めること」、「だいたいなことは、その山の性状と、それに感応した自分の気持ちにびたりと合致する正確な表現を見つけたことです」。「補遺として」にあるこの言葉は、紀行文を書く者だけではなく、山を歩くすべての人に聞かせたい。もちろん私も例外ではない。

ある一時代、奇跡のように現われて消えた『アルプ』という雑誌。本書はその評伝である。だけでなく、紀行文を書くこととしている人に、大きなヒントを与えてくれる文学書でもある。

構想から15年。いったん『山と溪谷』に連載された題材だが、さらに資料を読み込み、まとめ、文章を書き改めたのは大変な苦労だった、と山口氏は「あとがき」で述懐している。しかし、そのせいか内容がしっかりとまとまっていて、とても読みやすく、消化しやすい本になっている。

本書は「アルプの時代」を知っている世代はもちろんだが、それよりも私のような「アルプの時代」を知らない世代にこそ読んでもらいたい。今から30年ほど前に奇跡のような雑誌が存在し、その影響がどんなものだったかを知ること、いくばく

かでも山に臨む考え方に変化が生じ、山からより多くの恵みを受け取れるようになるはずである。そして、その先にあるのは「五感を十二分にはたらかせて、山という大きな自然との交流を深めた」豊饒な山登りの世界なのである。(近藤 雅幸)

## 静岡大学山岳部紫岳会 編

### 『紫岳』 13号



静岡大学山岳部紫岳会

2013年10月刊

B5判 515ページ 非売品

本書の第1頁を開けると、最初に山岳部員現役15名の集合カラー写真と、さらに重複する17名の個人カラー写真が載せられている。現在、山岳部員は20名(内、女性部員1名)で、休部部員が2名ということである。本書の編者の部員に対する期待、部員の登山に懸ける熱意が強く感じられる。首都圏の多くの大学山岳部では部員の減少に悩まされているが、静岡大学山岳部ではその悩みはない。なぜだろうという質問に対し、山本

良三会長は次のような理由を挙げてくれた。冬になると静岡から連日、富士山も聖岳や赤石岳方面の山々も凜然と姿を見せる。早朝、朝焼けに屹立した富士を見ると、さあ登ろうという気になさせてくれる。その地の利が大きいと思う、ということである。紫岳会といえば、1970年のチューレン・ヒマール(7371m)や1975年のカラコルム、テラム・カンリ(7543m)両峰の初登頂が突出した実績である。これには当時、多くの山岳会が刺激を受けた。

静岡大学山岳部紫岳会は2013年5月に創立80周年を迎え、同年10月に東京八重洲・富士屋ホテルで記念式典が盛大に執り行なわれた。前身の旧制静岡高等学校山岳部紫岳学会が1933年に創立され、旧制17年、新制63年の歴史を刻んできたのである。本書はこれに合わせて発行されている。

紫岳会というのは「紫岳」という山が静岡市の北方にあり、「ダイラボウ」と呼ばれていたが、夕刻にこの山が紫色に染まっ て見える時期があるという。部報に「紫岳」という名が付いた由来らしい、と本文にある(山本会長談)。

本書第1章は山本会長の挨拶、第2章は「年報」で、2003～12年の10年間の記録が載せられている。第3章「報告」には「天山の登山と旅」が記されている、1997年8月12日、第3次遠征で目指すグルグルムスタグ(5250m)の登頂に成功。1995年の第1次偵察から1007年の第5次偵察

とトレッキングの旅までが報告されている。さらに続いてヨセミテのクライミング「2006年アメリカ・クライミング紀行・前後篇」と「2011年のカナダ・ロッククライミング紀行」がある。

「地域研究・南アルプス最南部を歩いて17年」は祐嶋繁一氏の28頁に及ぶ力作である。2011年9月までの17年間で371回登り、登頂ピークは898座、このうち南アルプス深南部が187回(50%)と最も多い。印象に残る山行記の中でも「風イタラズ山(1990・3m)でのピバーク」は2月の厳冬期の登山であるが、下山に時間を費やし、ホースト・ピバークを余儀なくさせられる。「歩いている時の私の思いや感情を感じて頂ければ嬉しい」と同氏は書かれているが、十分に興味深く読ませていただいた。知られざる山々であるので、地図があればもっと面白かったと思う。

第4章「埋もれ木」には12人の会員の人生と山とのかかわり、第5章「記録・紀行」には紫岳会50周年、60周年、70周年の記念祝賀会の様子が記されている。その中でAACKの酒戸弥二郎氏が静岡大の教授に着任され、初代静岡大紫岳会の会長を引き受けられたことが記してある。酒戸さんはAACKのヒンズークシユ、ノジャツク(7490m)初登頂隊の隊長である。今回の記念式典で、このときの初登頂者の岩坪五郎さんが酒戸さんの思い出をユーモアたっぷりに話された。AACKと紫岳

会の関係も、酒戸さんの存在があつて成り立っていることを知った。第6章「報告、考察」と第7章「思い出、その他」には40人の会員の手記がある。第8章「静岡大学山岳部を考える」では5氏の考察が記載されている。激しく急激に変化している価値観の中で若者たちがどう山と関わっていくのか、もっと知りたいとも思った。

最後に私事になるが、驚いたことに2005年から2009年まで角張嘉孝教授(現・名誉教授、新潟大OB)が山岳部の顧問をされていたことである。同氏とは筆者(大阪外語大OB)が商社のモスクワ駐在員であつたとき、ともに協力して交渉し、1974年にソ連山岳連盟に初めてパミール国際キャンプを開催せしめ、レーニン峰に遠征したのである。さらに驚いたことに、この遠征の10年前の1964年、筆者が車でカフカスを横断し、ソ連ヨーロッパ部を縦断したときモスクワに立ち寄つたが、このときのソ連公使が重光晶氏で、パミール遠征のときは同氏が大使であつた。日本食のご馳走にもなり、大変お世話になつた。本書によれば、その重光大使が紫岳会の初代のチーフ・リーダーであり、「私のヒマラヤ」という随想文を本書に載せておられる。また、追悼文には尾崎徳郎氏が「重光晶先輩を偲ぶ」という一文を記しておられる。山という媒体は、山を愛する者を暗黙のうちに通じさせてくれるものだと、感慨深いものがあつた。

最後に、静岡大学山岳部紫岳会の今後益々のユニークな活躍を、心底より期待しています。  
(田村 俊介)

平山善吉 著

## 『我が山と南極の生涯』



茗溪堂 2013年3月刊

〇〇判 363ページ

4000円

垂直と水平の分野で未知の領域を開拓した人は少ない。かつてヒラリーが、エベレスト初登頂に続いて南極初横断に成功したとき、梅棹忠夫さんが「なんと幸福な奴や」とつぶやいておられたことを思い出す。元日本山岳会会長でもある著者は、そのような両分野で活躍してきた数少ない人の一人で、本書はその羨ましい80年の人生が書かれている。

筆者は著者平山さんより3歳年長であり、ほとんど同世代であるので、当時の社会の息吹を共有でき、著者の歩みには共感

するところが多い。筆者が平山さんと知り合ったのは、本書でも述べられている1956（昭和31）年3月、南極観測隊の隊員候補者の乗鞍訓練のときであった。今でこそ「観測」が主であるが、当時は「探検」の色が濃く、南極観測隊に参加を希望する全国の山岳部の連中が多く集まっていた。社会は貧しく、外貨の制約もあり、海外に行き未知の領域に挑むことは若者の夢であった。体の小さかった私は、がっちりした平山さんの体躯に気後れしたことを思い出す。私はその後南極をあきらめ、ヒマラヤへの道を進むことになるが、あの当時の南極への強烈な憧れは、忘れることができない。平山さんは第1次南極観測隊の隊員に選ばれ、その後の南極での活躍の一步を踏み出すのである。再会し、親交を深めたのは50年後のことである。

本書は 第1章 生い立ちの記、第2章 より高き頂、第3章 はてしなき氷原、第4章 日本山岳会会長に就任して 第5章 著書と書評、第6章 惜別、という構成である。要所に関連する新聞などの記事があるのも、本書を読みやすくしている。

当時はどこの大学でも、山岳部は新人で溢れていた。私もそうだが、山岳部に入って人生が変わったという人は多い。平山さんも友人に誘われて入部したというが、それが人生の分岐点

であったことは間違いない。満員の夜行列車で通路に新聞を敷いて仮眠し、劔の合宿では称名坂を登って弘法か追分小屋で1泊、そして、2日目に劔沢に着くという、今では想像できない行程である。装備、食料も貧弱なころ、山行は苦しかったが、未知への探求という大きな夢があった。この夢を語り合う仲間がいた。部屋はこのような雰囲気になっていて、それが人生の柱になり、心の奥底に未知への憧れというマグマを形成した。平山さんの人生も、そのようにして形作られていったことがよく分かる。

垂直の領域で活躍する経過は、第2章で述べられている。まず山岳部での生活、1962（昭和37）年の北西ネパールのムクト・ヒマール登頂成功、そして、圧巻は総隊長を務めた1995（平成7）年のエベレスト東北稜からの登頂成功である。このルートは過去8回の挑戦を退けており、エベレストに唯一残された長大な難ルートである。日大山岳部創部70周年を記念して行なわれるにふさわしいものであるが、リスクも大きく、成功と隊員の安全の狭間で悩む、総隊長としての心労は想像もできないくらい大きいものであったことがよく分かる。登頂日の決定やルートの決定など、決断を迫られる場面場面に對して適確な指示を与えるなど、隊員の心を集中させて成功に導く隊長のあり方は、このような大きなプロジェクトを遂行するとき

に参考になる。

すべてを犠牲にしてもヒマラヤに行きたいと願った時代と違つて、現在はヒマラヤへ隊を出すときに、優れた隊員を集めることは難しい。学術隊を組織することと同時に、多くの優れた隊員を組織できた日大の層の厚さに敬服する。それだけにこの成功は評価されるべきであり、朝日スポーツ賞を授与されたのも、むべなるかなである。

第3章は水平の領域での活躍である。第1次、第2次、第3次南極観測隊員としての経験を書いている。特に第3次では越冬し、その間、秋と春は未知の山を探して大陸への旅行、橇を引いての白瀬氷河の調査など、興味ある話書かれている。さらに1964（昭和39）年に、米科学財団の招待で米国マクマード基地に行き、1ヶ月余、周辺の登山や調査をする。このときにドライバレーで、新鉱物「南極石」を発見している。また、このときの各国の極地経験者との交流など、まことに羨ましい経験が書かれている。

2005年に日大山岳部創部80周年の記念事業として、南極横断を計画したときの話は興味ある。エベレストに次いで南極横断は、もしそれが実現しておれば、我が国の登山探検史に残る画期的なことであったが、若い人がのつてこないために実現しなかったのは残念である。

後の章では、今までの講演や随筆などがまとめられている。特に惜別の章では、先立った登山や南極関係での先輩、同輩などに対する惜別の文でまとめられているが、誰からも好かれ、頼りにされてきた平山さんの人となりが見み出ている。

平山さんは垂直と水平の両分野で未知の領域を開拓してきたが、平山さんにはもう1本の座標軸がある。それは大学教授としての研究と教育の分野である。専門分野である日本建築学会から、極地での基地の設計建設に関する業績によって学会賞を受けておられるように、学問分野でも優れた業績を残しておられる。このことは本書の主たる流れではなく、さりげなく著者紹介でリストアップしておられるのだが、数々の賞とともに、充実した人生を送られていることがよく分かる。この3本の座標軸で目覚ましい活躍をされたことは、環境に恵まれてきたことも幸いするが、いかに大きなエネルギーを必要としたか、種々の重圧に耐えてきたかが想像できる。

いつまでも夢を持ち続け、その実現に懸ける情熱の火を絶やさないことは、若いときに山岳部で鍛えられ、未知への開拓者精神を刷り込まれたおかげであると、本書を読んで大いに共感するところである。

(平井 一正)

Wolfgang Heichel  
Chronik der Erschliessung des NANGA PARBAT  
und seiner näheren Umgebung



私家版 2013

418 pp. 21.5×20cm

表題を直訳すると、「ナンガ・バルバットとその近辺の開拓の年代記」。

購入の注文先は著者 (Wolfgang Heichel, Am Huberg 9, 01917 Kamenz, Tel 3578-309535) になっている。インターネットで調べた情報によれば頒価 39・95€。表紙と扉で表題の一部が違っていたり、誤植がかなり目に付いたりするのが私家版らしいところだが、極めて充実した内容はもとより、よくぞここまで集めたと感嘆する447点の図版を上質紙にちりばめた美麗かつ堅牢な造本は、著者がこの本に懸けた並々ならぬ情熱と執念を感じさせる。

なお、本書の各奇数頁の版面上部の余白に「年代記 第3巻 —ナンガ・バルバット」という柱がなんの説明もなく付いてい

るが、これは著者がすでに「カラコルム開拓年代記 第1巻―西カラコルム」と「カラコルム開拓年代記 第2巻―中央カラコルム」を上梓しているからだろう。著者ヴォルフガンク・ハイヒェルの山岳史家としての評価は高く、昨年7月にミュンヘンのドイツ山岳会ホールで行なわれたナンガ・パルバット登頂60周年記念シンポジウムでは、本書に序文を寄せたH・シエルなどベテラン登山家に伍して講演している。

本書の構成は以下のとおり。

\* 地理的概要（位置、山名の起源、主要ルートと峠、山群の区分、主要氷河など）

\* 1891年までの地域の開拓

1664年のフランス人F・ベルニエのカシミール旅行から、1891年のE・F・ナイトのカシミールラダック―フンザ遠征まで33件

\* 1892年からの主要な遠征

1895年のA・F・ママリーのナンガ・パルバット遠征から、2012年のザクセン隊のチチュエ峰遠征まで20件

\* ナンガ・パルバット山群の開拓

北側（ラキオト面）／1892年のW・M・コンウェイの遠征から、2008年のイタリア隊まで21件  
西側（ディアミール面）／1939年のドイツ隊の遠征か

ら、2011／2012年の国際隊の冬季遠征まで155件

南側（ルパール面）／1896年のC・A・マクマホンのルパール谷の地理調査から、2012年のザクセン隊のルパール・フィンガー登頂まで70件

東側（チョンラ面）／1958年のF・レーヴェの学術調査と1971年の海津正彦隊のチョンラ峰登頂の2件

マゼノ稜からの攻略／1979年のフランス隊の遠征から、2012年のイギリス隊の主峰登頂まで10件

\* 付録（地図、ピークリスト、パノラマ写真など）

この合計311件の記録には、登山のみならず学術探検、測量踏査、初の上空飛行、周遊、スキー遠征、果てはパラグライダー飛行まで含まれ、今日までほぼ2世紀にわたるナンガ・パルバットとその周辺にまつわる遠征は、登頂の成否を問わず、ほとんどすべて収録されている。1980年代から8000m峰の登山は飛躍的に増大しているので、ほかの山に比して困難と危険の度合いが格段に高く、したがって登山者の数が比較的小さいナンガ・パルバットでなければ、このような網羅的な年次記は作れないだろう。

もちろん各件の記述の量はその遠征の重要度、クロニストの価値判断によって異なる。2行で終わる件もあれば、30ページ

近く紙数を割いているものもあるが、少ない記述にもドラマがあり、副隊長が資金を持ち逃げして10人のチームは解散、隊長（K・ヴィエリツキ）が一匹狼になって猛然と登頂した国際遠征隊（1996年）などというエピソードも載っている。

普通「年代記」と聞くと無味乾燥な記述を連想しがちだが、本書の記録は大変読み応えがある。シュラーギントワイトの踏査、ママーリーの挑戦、1930年代のドイツ隊の悲劇、1953年の初登頂、1962年のデアミール面の初登攀、1970年のルパール壁（この件で著者はデアミール側に下降したR・メスナーの主張の矛盾を執拗に追及する）など、著者の解説と当事者のオリジナル報告を織り交ぜた巧みな筆法によって、息遣いが聞こえるような臨場感溢れる読み物になっている。

また、歴史のあるいは古典的な遠征だけでなく、北峰の初登攀、デアミール面の北域の新開拓、2009年の北西面の初登攀、1976年の南西ルパール面の新ルートによる登攀、1982年から2005年にかけてのルパール壁の諸稜の初登攀、1995年の千葉工大隊のジルバーザッテルへの直登、2012年のマゼノ稜と南西稜による初登攀など、新ルートの開拓と結びついた新時代の遠征や、アルパイン・スタイルによる登山も詳しく語られる。

それらの記述を補完するのが、様々な角度から撮影した豊富な写真である。そこにはしばしばルートも書き込まれ、諸遠征

の動向を分かりやすく伝えてくれるだけでなく、付録に掲載された多数のパノラマ写真と相まって、この巨大で複雑な山塊の全貌を鮮明に浮かび上がらせる。

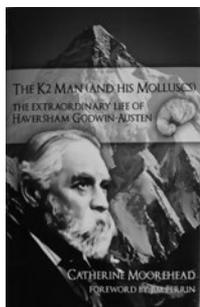
それにしても、これだけの史料を世界中から集めるのは並大抵のことではなかっただろう。著者の前書きには、平井一正氏をはじめ多くの日本人へも謝意が表されている。

（平井 吉夫）

Catherine Moorehead

The K 2 Man (And His Molluscs)

The Extraordinary Life of Haversham Godwin-Austen



Neil Wilson Publishing 2013

279 pp. £24.99

近ごろの英文の山の本の中で目立つのは伝記、評伝であろうか。現在も目覚ましい登山は各所で行なわれているのだが、それが新しさを感じさせる内は本にもなるが、1、2年の内に普通のことになってしまい、話題にさえならなくなる。そうなれば、

著作としての評価も次第に下がってゆくのだろう。過去を振り返る伝記や評伝の中に次の新しさが何か見つかるのかもしれないし、今の人とは違った特徴のある個人が、時間を超えて浮き上がって見えてくるのだろうか。80年も前に活躍したシブトンとティルマンの人気は今も相変わらず高いようで、また新しく伝記が出ている (*Shibton and Tilman*, by Jim Perrin 2013)。あるいは今まで取り上げられたことのない、歴史上名の残る人物が改めて見直され、知られていなかった面がクローズアップされたりもしている。

日本では今のところは考えられないが、欧米では登山史および人物誌に類するこの種の山の本を、女性ライターが執筆する例が目立っている。ネパールの登山クロニクルをまとめているエリザベス・ホーリー、マロリー、アービンのエヴェレスト登山やコーカサスの登山史をまとめたオードリー・ソーケルド、*Freedom Climbers* でボードマン・タスカール賞を取ったバーナデット・マクドナルド、探検家リトルデール夫妻の活動を解明したエリザベス・クリンチなどがある。本書の著者キャサリン・ムアーヘッドもその一人で、RGSのフェローであり、アールパイン・クラブのメンバーでもあるようだ。

題名の *The K2 Man* とは、K2を最初に間近に見て、測量し、位置を固定した人物という意味である。そして、*And His Molluscs* とは、その人物の持つもう一つの面、すなわち軟体動

物研究の第一人者という意味であり、かつ括弧に括られているのは、今までほとんど知られていなかったということであろう。地図によっては、K2をゴッドウィン・オースチン山と記していたり、括弧付きでそう記されたりするが、バルトロ氷河最奥の支流の名は、現在もゴッドウィン・オースチン氷河である。測量されたヒマラヤの山々の名前は、現地名で呼ぶのが原則で、その時点で現地名が不明の場合は、記号名がそのまま山名となった。ただし、例外として世界最高峰にだけ発見者（インド測量局）に関わる名を冠することを認めたわけだが、議論のある見解であり、世界第2の高峰も、ゴッドウィン・オースチン山という名で呼ぶことが認められたことがあった。

ゴッドウィン・オースチンという珍しい苗字は、2つの苗字を合成して1つにしたものである。父方がオースチン、母方がゴッドウィンで、それぞれが由緒正しき名門貴族である。母の父ヘンリー・トーマス・ゴッドウィンが亡くなった後、その名を残すべくヴィクトリア女王に願い出て許され、1854年から合成名が使われることになったという。イギリス貴族の暮らしについては知識が乏しく詳しく説明はできないが、後継ぎの長子以外の男子は、教区牧師や軍人になる例が多いとされる。この書の主人公である *Henry Haversham Godwin-Austen* (著者はハバーシャムと呼んでいるので、ここでもハバーシャムと呼ぶことにする) は、1834年7月6日に、オースチン家の

長子として生まれているが、軍人の道を選んでサンドハースト（陸軍士官学校）へ進み、1851年から26年間軍人として活躍した。母の父が將軍であったからであろう。父親ロバート・アルフレッド・オースチンは地質学者で、ダーウィンやフッカーとも親交があった。

本書は、プライベートな日記などの資料と公的な史料を豊富に用いた本格的な伝記である。章立てが細かく分かれ、活字も小さく引用文も多い。物語るといよりは資料の解説部分が目立つし、巻末の章には「メダルと賞賜」「科学的業績」「画業」「戦時の生活」「晩年」というように箇条書き的なところもあり、重複する部分も多いことから、この人物を一つの構想の下に描き切れていないかもしれない。付録には年譜、探検地域の要約、概念地図、測量地域の解説と文献、資料が付けられている。付録を見る限りは、著者はハバースヤムの探検業績に最初の執筆動機があったかに思われる。しかし、これまでに知られている事柄、特にカラコラムでの活動については、目新しい記述は特にないようである。また、学問的な分野に関する要領を得た説明もほとんど行なわれていない。

全体は大きく5部に分けられている。第1部がゴッドウィン・オースチン家に関する話で、この部分だけでも十分に面白くて興味深い。我々の関心はやはりK2探検などが行なわれた第2部と第3部にあるので、先を急がねば終わらない。なにしろ

ハバースヤムは89歳まで存命であったから、ヴィクトリア時代から第1次世界大戦後までもがその範疇に入る。だから、後半生のハバースヤムの学者として、また領主としての生活を扱う第4部が、これまた相応に長くなっている。ちなみに、ゴッドウィン・オースチン家は世界クラスの長寿一家として知られていて、母のマリア・エリザベス・オースチンは22年間に18人の子を産んだが、その子どもたちの内100歳超えが3人、90歳超えが4人、85歳超えが4人いる。マリア自身も90歳まで生きた。

軍人となったハバースヤムは祖父のH・T・ゴッドウィン將軍に従って、いわゆる第2次ビルマ戦争（1853年）に参加している。軍人といっても工兵であり、ビルマから戻った後は北西インドで軍務に従事した。1857年にインド測量局に配属され、カシミールで測量の実務に就いた。当時のインド測量局長官は、世界最高峰を認定したアンドリユー・ウォードで、その下にT・G・モンゴメリーがいた。モンゴメリーの働きぶりには、D. Wallerの *The Pundits* に詳しいが、インドの大三角測量事業の最後の部分の山岳地帯の測量を担当していた。イギリスとロシアが牽制し合うなかで、英領インドの国境地帯とその先までを地図化して優位に事を進めようとしていた。その最前線の部署がカシミールであり、モンゴメリーを責任者として1855年に活動を開始した。ちなみに、西欧人として最初にホー

タンに達した測量士W・H・ジョンソンはハバーシヤムの同僚で、ラダックの北側地域を担当した。同時期にはプロイセンからやって来たシュラーギントワイト三兄弟も独自に活動していた、チベット国境やクンレン山脈を探っていた。

カラコルムの高峰の測量は、スリナガールの北にある5000mの山、ハラムクーに観測点を置いて行なわれた。1858年にK1からK32までが計測され、その内のK2が、ネパール国境にそびえる第XV峰に次ぐ高度を持つことが判明したが、この遠方にある峰々が、カシミール国境に位置するのかどうかは確定できなかった。このときハバーシヤムは、カシミール盆地やピールパンジャール、ヌン・クン山群の測量に従事していた(JRGS 31, 1861)が、1860年からはカラコルムの測量を命ぜられた。それ以前の1856年にアドルフ・シュラーギントワイトもカラコラムに入り、ザンスカールからインダス川を下り、支流のコンダス谷とフーシエ谷、さらにブラルド川のパンマー氷河を探っている。

この1860年と翌年のカラコルム探検測量については、ハバーシヤム自身がJRGS 34(1864)に地図とともに報告を載せている。この地図に描かれた範囲は、スカルドを中心にしてインダス川の両岸、東にシヤイヨーク川の右岸をタレー谷流域とフーシエ谷流域まで。北から流入するシガール川の西支流バシヤ川はチヨゴルンマ氷河流域まで。東支流ブラルド川は

ピアフォ氷河流域をスノーレイクとヒス、バー氷河の上部までと、パンマー氷河流域、そしてバルトロ氷河流域であり、分水界南側の広大な地域がこのときに測量された。古くからインドとトルキスタンを結ぶ隘路があることが知られており、氷河を詰めて幾つかのそれらしき鞍部を探ってもいる(26年後に、ヤングハズバンドがトルキスタン側からこの鞍部の一つを越すことに成功した)。地図を良く見ると、パンマー氷河上流部やバルトロ氷河下流部を北流する氷河に大きな誤りがあるが、8000mの高峰群と数十kmに及ぶ大氷河群が雲集するカラコルムの中心部を解明した業績は、賞賛されるべきである。

バルトロ氷河を遡ってK2の姿を初めて見たのは、マツシャールブルムから続く尾根の下部、現在ウルドカスと呼ばれるキャンプ地から300mほど登って、測量用の平板を据えたときである。「そこには姿を隠す一点の雲の塊もなく、偉大なるK2がアジアの分水界に聳えていた！」と書いている。地元以外の人間が初めて目にしたK2の全容であった。ハバーシヤムは絵もよく描けたから、このときの展望と測量の様子を描いており、カラーグラビアで見ることができ。さらにバルトロ氷河を遡って、M・コンウェイがコンコルディアと名付けた地点まで達した。そのコンウェイは、1892年のカラコルム探検に先立ちハバーシヤムに会って助言を得ており、K2から流れ下る氷河をゴッドウィン・オースチン氷河と名付けている。

モンゴメリー指揮下の部隊は、測量範囲を英領インド領内カシミールに続いて西部ヒマラヤ地域や、さらにトルキスタン領内とチベットにも広げていった。ハバーシヤムはラダックへと向かい、パンゴンツォ周辺とチャンチェンモ盆地周辺の測量を担当した。このときの報告も J R G S 37 (1867) にある。その後間もなくモンゴメリーの部隊から離れ、アシユレイ・エデンのブータン使節への参加を求められ、ルートの測量および副官としての役割を与えられて、1864年1月、カリンボンからプナカへと向かった。さらに翌年も第2次ブータン使節に加わり、ブータン西部の測量に従事した。このブータンにおける踏査と測量によってハバーシヤムは Mountain Explorer から Jungle Explorer へと変身し、ナチュラリストの道を歩むことに繋がってゆく。また、結果としてヒマラヤの西端から東端までを踏査することとなり、ヒマラヤの地質学や氷河学に対する貢献も大きい。

続いてハバーシヤムは1866年から「第6測量隊」に配属され、アッサム地方の未探検地域カシー山地とナガ山地に入って活動を続ける。この地域での活動報告の多くは Journal of Asiatic Society of Bengal に載せられて、あまり知られていなかった。インド北東隅の国境画定のための測量が任務であるが、地形が険しいばかりでなく、非友好的な少数民族の分布地帯でもあって、活動には多くの制限があった。その一方で、後

に F・M・ベイリーや F・キングドンウォードを狂喜させた動物の宝庫でもある。ハバーシヤムは、百数十篇に及ぶナチュラル・ヒストリー関連の報文を、80歳を過ぎても Annals and Magazine of Natural History などに発表し続けている。

1870年に体調を崩し2年間、本国に帰って療養するが、再びビルマへ戻り、ブラマプトラ川とイラワジ川上流の境界部分の測量に従事した。1872年にはインドへ戻り、アッサム地方の山岳地帯の測量に従事した。インド軍は、反抗的な民族に対してはしばしば軍事的な遠征を行なっているが、そのたびに測量隊を伴い、地理的情報を拡大することができた。ハバーシヤムは、中佐の階位のまま1877年に退役した。43歳である。ハバーシヤムのこれまでの地理的探検と測量活動の実績を見れば、RGSによる賞賜に充分値するはずだが、なぜか評価を受けなかった。H・ローリンソン会長時代の後はアフリカや極地の活動が活発で、アジアにあまり目が向いていなかったのかもしれない。T・Gモンゴメリー、G・W・ヘイワード、R・B・ショウ、W・H・ジョンソンなどが軒並み受賞しているのに、H・H・ゴッドウイン・オースチンの名はない。

RGSのセクレタリーであるクレメンツ・マールカムは、1880年にRGSの「50年誌」をまとめたが、RGSプロパールの探検をその資料にしたために、ゴッドウイン・オースチンのアッサム、ビルマの活動は示されず、モンゴメリー指揮下のカラコ

ルムやラダックが載るばかりである。マークは同時にインド省の地理部門の責任者でもあって、インドの地理情報と測量の歴史をまとめた *A Memoir on the Indian Surveys* を著している。ここにゴッドウィン・オースチンのアッサム、ビルマでの活動がまとめられており、その第2版（1878年）の巻末には、アンドリユー・ウオー、T・G・モンゴメリーと並べてゴッドウィン・オースチンの経歴と業績が改めて載せられた。1910年、すなわち76歳になつてRGSのゴールド・メダリストになることができた。その理由として、「インド北東部境界地域の測量と地理的な数々の発見、特にカラコルムにおける先駆的な探検活動」が挙げられている。

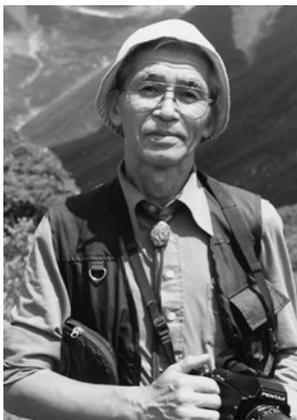
公人としての活動以外の、たとえば結婚についても一風変わったところがある。最初の夫人はバシュトゥーンの有力者の娘であった。したがって、ここに私生児の問題が生じるわけだが、ハバーシャムが死の床に就くまで尾を引いたらしい。この話もなかなか面白いが、なにしろ3度も結婚するので、話はこれだけでは終わらなくなる。そして、所領とシャルフォード・ハウスの主としての暮らしぶりであるが、結果的には破産して財産を売却することになり、この先どうなることかとハラハラするのだが、しかし、探検家としてのゴッドウィン・オースチン像が壊れない、このあたりで紹介を終えることにしたい。

(児玉 茂)



## 追悼

### 羽田 榮治さん



はねだ えいじ  
(1927～2013)  
会員番号 5548

羽田さんは多忙な人でした。

2013年4月5日逝去以来、多くの方々を追悼文で故人の略歴や功績を綴られています。一般社会はもちろん、山岳界や映像界において、情熱そのものを注がれた生涯が窺われます。

私が羽田さんと出会ったのは1975年、日本山岳写真協会に入会したころでした。当時、役員の不祥事があって刷新委員会が立ち上がっていました。新入会員の私は、何も分からぬ内に刷新委員会の会合に参加しましたが、その中にどこかで見た顔がありました。

戦後間もない1950年ごろ、登山者で混み合う土合駅で、また一ノ倉沢出合付近で、瘦せぎすの体躯ながらエネルギーシユな動作で「アイモ」(映画撮影用35mm、ハンデイクメラ)を駆使していたカメラマンがいました。「山の現場に羽田あり」と周囲の人たちに言わしめた男が、刷新委員会の場にいたので

す。

羽田さんとの初対面はひよんな出会いでしたが、私は1982年、風見武秀さん(故人、日本山岳会名誉会員、日本山岳写真協会元会長)の推薦で日本山岳会にも入会、こちらでも羽田さんと一緒にようになりました。

日本山岳会フィルムビデオ委員会には、羽田さんのほか内田耕作、渡辺正臣氏など著名な諸先輩が所属しておられ、お誘いを受け、私も委員に加わりました。委員会活動では、お互い映

生来の筆無精で、原稿書きなぞ縁のない私に、羽田さんの追悼文を書くよう依頼がありました。40年余のお付き合いのなかでは、山岳写真関係の事柄が多いのですが、その思い出を断片的に綴ってみたいと思います。

日本山岳会評議員、同資料映像委員長、アルパインフォトビデオクラブ代表、75年の歴史を誇る日本山岳写真協会会長など、

像という観点から写真に関する事柄が多く、事業の一環としてフィルムビデオ委員会と集会委員会の共催で撮影会を計画、奥秩父・西沢溪谷にて実施しました。

そのときの参加者から要望があり、これを契機に羽田さんを中心に山口俊輔さん（故人）や私など数人が発起人となり、羽田さんを代表として、日本山岳会アルパインフォトビデオクラブが発足しました。当時の会報「山」563号に会員募集を掲載、わずかの間に三十数名になりました。その後、2000年には100名を超す状態になりましたが、これも羽田さんの人柄や指導力の賜物だと思います。

因みに羽田栄治代表の名言で、「写真には撮る楽しみ、作品にする楽しみ、観てもらう楽しみがある」があり、度々口にしていました。この楽しみを原点に、「心に映る山々」というタイトルで第1回山岳写真展を西新宿の三省堂文化会館1Fエントランスホールで開催することになりました。

そのホールは大理石の壁に囲まれた広々とした空間で、写真を飾り付けるには疑問がありました。羽田さんのアイデアで建築用金物や電気機材などを利用、試行錯誤の末に手作りのギャラリィが完成しました。飾り付けを終わったときには、展示者一同、改めて羽田さんに感謝したことでした。

2003年、日本山岳会の各委員会の組織変更があり、資料委員会とフィルムビデオ委員会が統合、資料映像委員会となり、

羽田さんが委員長に就任しました。「俺は映像屋で、資料関係は弱い」と言いながらも、あのバイタリテイで2003～09年の間、委員長の任を果たしてこられました。

委員長として2005年、日本山岳会創立100年の歴史と足跡を語る「写真で見る日本山岳会の100年」という冊子を編集されました。計画立案から編集作業における、資料映像委員長としての努力は凄まじいものでした。当然私たち委員も協力しましたが、羽田さん自身は編集作業で連日、自宅とルームを往復、早朝から夜まで続いた日もありました。

本の内容や仕上がりは最高でした。日本山岳会の歴史に残るこの冊子は全会員に配布され好評を博しました。編集後記には、編集責任者としての羽田さんの苦勞と努力が如実に表現されています。

「写真で見る日本山岳会の100年」の出版が終わって、体力的にも少し休養を、と思う間もなく「語り継ぐ黎明期の登山、それぞれの山」をテーマに、往時活躍された諸先輩の話を伺い、これを記録し後世の資料として保存する計画を実施しました。すでに堀田弥一、渡辺兵力、坂倉登喜子、村山雅美、松丸秀夫各名誉会員の講演会の映像が収録されています。

続いて2009年、「語り継ぐ日本山岳会の歴史」を企画。歴代会長に「あの頃、そして未来へのメッセージを語る」と題して、山田二郎、村木潤次郎、齋藤惇生、大塚博美、平山善吉各

元会長の講演を収録するなど、資料映像委員長としてこの事業を進めながらも、「次は俺の番か」と笑っていたのが印象に残っています。

ジャーナリストとしての羽田さんは、仕事として常に鋭く時代を追いかけ、現実を切り取り、豊かな感性で取材し、映像を撮り続けていました。状況判断が的確で早く、即、文章にまとめられていました。それは仕事上の習性なのか、才能なのか、いずれにせよ素早い反応であったことは確かです。

羽田さんの文才を感じる文章は、日本山岳会アルパインフォトビデオクラブの月報「JAPVCニュース」に見られます。1992年の創立以来、2012年のNo. 223号までの20年間、A4判1ページの巻頭言を書き続け、冊子にすると約200ページになる大作です。絶筆となった会報No. 223号のタイトルは「潮時に来た『巻頭言』」でした。

2012年の秋に検査入院、12月、原発性不明癌と診断。ご自身、完治は「？」であることをさりげなく書かれているのですが、「拙文『巻頭言』も、いよいよ潮時が来た……」で始まる結びの一文に、何か覚悟ができたという思いが伝わってきて、胸が詰まってしまいました。

日本山岳会の年次晩餐会に、アルパインフォトビデオクラブの写真展を開催できたのは、羽田さんの存在があったことでした。もちろん映像委員会および総務委員会の協力もありまし

た。晩餐会に皇太子殿下がご臨席の折には、写真展をご覧いただく機会がありました。そのとき、ご案内役を務められたのが羽田さんで、緊張と誇らしさの両面を感じておられる姿が、思えば浮かばれます。

2013年4月5日、羽田さん逝去のあの日、私は早朝から日光方面に撮影に行っておりましたが、夜帰宅して、ご子息登志男さんからの留守電で訃報を知り、愕然としました。

ご葬儀はご親族で済ませましたので、早速ご家族とご長男に相談、「羽田栄治さんお別れの会」の事務局を日本山岳写真協会に置くことを決めました。そして、日本山岳会の関係諸氏のご協力を得て、主に山岳、映像関係各位、各社に連絡の結果、7月3日、ヒルトン東京新宿での開催が決定しました。

当日、羽田さんを偲ぶ各関係者が、250余名が参集されました。羽田さんの人柄や人望がいかに篤く、交友関係の広さを感じました。多くの供花が飾られた会場正面の祭壇の中央には皇太子殿下・妃殿下より賜った白菊の花籠が置かれていましたが、参集の皆さんはさぞ驚嘆されたことと思います。写真のお好きな殿下が、映像（写真）に関していかに羽田さんを信頼しておられたかが、お分りいただけると思います。

多数の方々から弔辞をいただき、施主羽田夫人からは「山と写真、人間関係を大切にした生涯でした」とのお言葉がありました。また、ご子息登志男さんの「4月2日容体急変し再入院、

3日意識不明、4日突然『カメラ、カメラ』と声を出し、体を動かした」とのお話には、最後の最後まで映像に対する執念を覚え、感じ入りました。

記録映画制作と映像ジャーナリズムを貫徹、映像一筋、職人肌の仕事人でした。撮影現場では痩せた体に重いカメラをぶら下げ、眼光鋭く動き回る羽田さん。仕事を離れると穏やかで優しく、物事を冷静に判断し、お洒落で実在感のある、魅力いっぱいのおじさんでした。

素晴らしいご生涯を過ごされ、逝った羽田さん。あなたの人生は羨ましい限りです。たくさん思い出をありがとうございます。  
合掌

〈略歴〉

1927(昭和2)年9月…東京生まれ

1951年…中央大学法学部卒業、同大学山岳部OB

1954年…中日映画社入社。ニュース映画カメラマンとして

活躍

1960年…中日新聞社出向。報道特派員としてヒマラヤ遠征

報道やニュース映画取材、山岳記録映画制作、山

岳遭難取材などで活躍

1963年…日本山岳会入会(会員番号5548)

1977～2007年…日本山岳写真協会副会長

1981年…フリー映像制作プロデューサー・映画カメラマ

ンに

2003～2009年…日本山岳会資料映像委員会委員長

2008年…日本山岳写真協会会長就任

2009～2012年…日本山岳会評議員

2013年4月5日…逝去。享年85

文部省登山研修所の教材映画『岩登り技術』や記録映画『未踏の水壁』などを制作。『東京オリンピック』『札幌冬季オリンピック』など公式記録映画制作に参加、後に制作ディレクター、チーフ・プロデューサーを務める。

映像作品に『交響詩立山』『南アルプス』『奥秩父』『富士山』などがあり、著書に『山岳映像』『ロッククライミング』(共著)『立山・剣』(共著)があり、山岳雑誌などへの写真や記事の寄稿多数。

日本映画テレビ技術協会会友、映画テレビ技術賞審査委員、日本山岳会フィルム・ビデオ委員会委員長、同アルパインフォトビデオクラブ設立並びに代表、日本ネパール協会理事、日本山岳文化学会理事などを歴任。

(川嶋 新太郎)

## 平野 明さん



ひらの あきら  
(1934~2013)  
会員番号 5368

平野明さんとの初めての出会いは昭和35年12月、僕が提起して創立した帯広エーデルワイス山岳会の第1号の会員として入会してきたときに始まる。

そのころ平野さんは、北海道放送（HBC）帯広放送局に勤務していらした。早速会の発起人の一人になっていただき、会務を担当してもらった。3年先輩の彼とは、決して馬が合った訳ではなかったが、彼の独特の発想力と、僕のいささかの行動力とが、奇妙にマッチした。

帯広エーデルワイス山岳会は素人集団ではあったが、二人はいろいろなことに挑戦した。会を組織した以上は、自分たちの楽しみのためだけに時間を裂くのではなく、何か人のためになることもやろうということが、二人の一致した意見となった。

手始めは、子どもたちを山の空気に触れさせたい。

帯広に平原学園という、親のいない子どもたちを学ばせている学園がある。大きな組織であるように思った。園長先生にお会いしてお話をすると、ぜひにということになり話はすぐ決まった。会への取り付け、山の選定、バス会社との折衝、後援団体巡りなど、二人は手分けをして走り回り、無事「平原学園園児招待登山」が走り出した。

日高山脈の最北に位置する剣山をベースに第1回の登山会を行ない、その後芽室岳や雌阿寒岳にまで足を延ばしながら、そ

平成25年5月28日早朝、平野明さんの奥さんから「実は主人が悪いです」というお電話があり、すぐに新さつぼろの病院へ飛んで行った。僕が着いたころはすでに意識がなく（少し前までは声掛けに反応されていたというが）、頑健な身体をベッドに横たえていた。何度か声を掛けたが駄目だった。

前年の暮れから帯状疱疹に罹り治療中に敗血症を患い、全力で完治を目指したが薬石効なく、最後は腎不全が悪化し、その日の夕方天に召された。6ヶ月余りの闘病生活であったと聞く。享年79。

の後、年に1回の定例行事として続いていくこととなる。

平野さんとはたびたび日高へ入った。札内岳に入ったときは、女性会員がいたため予想以上に時間がかかり、頂上に着いたのが夕方になっていて、頂上で一夜を過ごす羽目に陥った。盛夏とはいえ夜の帳が降りるとさすがに肌寒く、僕らはハイマツの中に潜って暖を取ったが、平野さんは一晩中火を起こして、石を温めて暖を取るようになってくれた。なんでも独自のアイデアを駆使して、コツコツと行動する人だった。

戸蔦別川を遡って戸蔦別岳から日高幌尻岳を目指したときは食事係を担当し、いつも美味しい物を提供してくれたが、食器洗いなどもこまめにこなしてくれた。いつもピカピカのコッヘルなどを見て「随分きれいだね」と感心すると、ニヤツと笑って「コレコレ」と随分使い古したワラジを差出し「食器洗いはワラジに限る」と僕らを嘔然とさせた。

このことを、平野さんの結婚式でテールスピーチを求められた僕が咄嗟に披露すると、それが大いを受けて「山男善哉（よきかな）」と参会者を感じさせた。奥さんはびっくりされていらしたが、平野さんの満更でもないお顔を懐かしく思い出す。奥さんはやはり北海道放送帯広放送局の人気アナウンサーで、才色兼備の方であり、よくご自宅へ遊びに伺ったが、公務員の僕らとはちよっと生活レベルが違うかな、と思ったりした。す

でにマイカーはライトブルーのコンテッサなどを駆っていた。家族ともども仲良くしていただいた。

僕らの行動力の極め付けは、昭和39年、深田久弥の『日本百名山』が世に出たことに始まる。

『日本百名山』の中に北海道からは9山の選定。その選定に不満がない訳ではなかったが、僕らの憧れのニペソツ山が入っていないのは、絶対に承服できるものではなかった。「登っていない山を風聞だけで百名山に入れるわけには行かない」とのコメントを読み、じゃあ登っていたかどうかではないか、ということになったのである。二人はまた走り出すこととなった。

旅費の工面や滞在費などを捻出しなければならない。帯広市にお願いして文化講演会を計画。旅費は日本国内航空（現・ANA）にお願いするしかない。僕は東京の日本国内航空本社を訪れ、後援のお願いをした。折しもこの年、同社が東京―帯広間に定期航路を開設するというチャンスにも恵まれた。まんまとそれに便乗した訳だ。深田久弥先生のご自宅にも伺い、打ち合わせを終えた。

「お宅も良くやるね」と平野さんは独特のアクセントで、僕の肩をポンと叩いてくれた。それが彼の癖でもあったなあと、懐かしく思い出す。広尾町豊似在住の山岳画家・坂本直行さんも深田久弥先生に会いに出て来て下さったり、講演会の後は十勝

の岳人との会合、ニベソツ登山と、目まぐるしい数日間を過ごした。しばらくは、「深田ボケ」と称して、二人ともだらけ切つて過ごした記憶がある。

深田久弥先生来帯を機に、僕は深田先生と平野さんの紹介で日本山岳会に入会させていただいた。平野明さんはすでに会員であった(1962年入会、会員番号5368、平成24年に永年会員になられた)。

僕の転勤をきっかけに、平野さんとは頻繁にお会いすることはなくなつた。

平野さんはその後、持ち前の発想力、行動力で日本山岳会北海道支部の取りまとめ役となり、今西錦司先生来道のお世話役をされたり、しばらくは初代の事務局長としてのお仕事をされていた。後年「僕が一番辛い思いをしていたときに、滝さんは何も手伝つてくれなかつた」と散々愚痴を言われたのを覚えてる。

今西先生には相当傾倒されていたようで、久しぶりに会うと、いつも今西先生との山行の話がされた。その口調も今西流とでも言うのか関西弁が混じり、これはいよいよ本物だと思つたりした。お亡くなりになつた後ご自宅へ何うと、今西先生の本がたくさんあつたところを見ると、この出会いを大切になさつていたことが窺える。平野さんはまた「僕は全国区」と称して、

交流の場を全国支部懇談会や年次晩餐会に求め、北海道支部の名を高めてくださった。

平野さんとの最後の山登りになつたのは、平成13年のニベソツ登山である。

この年、NHK北海道でNHKスペシャルという番組があり、その枠で「とつておきの大雪山」という番組が制作された。昭和40年に深田久弥先生を招待して登つた山として、ニベソツ山が紹介されることとなつたのだ。その話が僕のところへ来た。当然のごとく快諾し、平野さんと二人で出演した。

思えばなんと不思議な縁であろうか。当時の深田先生の年齢を超えた二人が、最後の締めくくりの登山をするのである。楽しかつた。前日、糠平温泉で一泊。翌朝、快晴のなかニベソツへ。撮影も順調。若く健脚であつたころのことを思い出しながら登つた。登山後、層雲峡温泉に回り一泊。楽しい語らいのなかでの2泊3日の旅であつた。

それからお会いするのは本部主催の年次晩餐会のみとなつたが、いつもニコニコと平野さんの顔があつた。僕の席を捜して来てくれたときもあつたけれど、また、遠くの席に座っていることもあり、まさに変幻自在の方だつた。

弔辞(平成25年5月31日の告別式にて)

平野さん、あまりにも突然のお別れではないでしょうか。今は正直お別れの言葉もあります。

お亡くなりになる日の朝、病院でお会いいたしました。お話をすることは叶いませんでしたが、足をさすって差し上げたらピョンピョンと動かしてくれたような気がして、平野さんらしいご挨拶だなぁ、と少し安心をした矢先の出来事でありました。お会いする機会はたびたびあったわけではありませんでしたが、節目時にはなんとなくお互い誘われるようにお会いしていたような気がいたします。私が留萌へ行けば留萌へ、函館へ行けば函館へ気楽に来ていただきました。

思えば五十数年前、帯広の地で初めてお会いして以来、長い長いお付き合いとなります。私たちが作った帯広エーデルワイス山岳会を舞台に、ただ山に登るだけの山の会にはしないぞと、二人でいろいろ企画を出し合いました。

山のレコードコンサート、恵まれない子どもたちへの山への誘い、そして、今日の登山ブームのきっかけを作った名著『日本百名山』の著者、深田久弥先生まで帯広の地呼び寄せ、ニペツ登山を果たしたりいたしました。

私は東大雪や日高で育てられました。また平野さんからいただいた多くの薫陶も、どれほど大きかったか、後年、身に染みて感じるがありました。

2015年、日本山岳会北海道支部は50周年を迎えます。ま

だ誰も支部会務を敬遠していたころ、平野さんは初代の事務局長として、本当に孤軍奮闘されていました。今思えば本当に良くやられたものと、そのご苦労を思わずにはいられません。「あのころ滝さんは、何も手伝ってくれなかった」と会うたびに愚痴を言われました。今日の北海道支部の基礎を築いて下さったのは、間違いなく平野さんです。50周年にはそのことを、若い会員にきちんと報告させていただきます。

平野さん、僕は今つくづく思うのです。しょっちゅうお会いしてなくても、平野明がどこかで元気でいるということだけで、僕の心は安寧でいられました。平野明は、僕にとって心のよりどころであつたのかもしれませんが。今日から僕も、生き方を上手に軌道修正をしなくてはならなくなりました。

平野さん、来世があるなら、また重いキスリングを背負って日高の沢へ入りましょう。そして、そのときも食器洗いは、やはりワラジにいたしましょう。

さようなら平野さん、平野明さん。

安らかに眠りください。（友人代表として）

〈略歴〉

昭和9年・宮城県栗原郡長岡村に生まれる

昭和27年3月・県立古川工業高等学校電気科卒業

昭和27年4月・母校で教員助手として勤務

2013年9月28日、四谷の主婦会館ブラザエフで「故山下康成さんお別れ会」が、東京農薬大学山岳会主催で開催された



やました やすなり  
(1939~2013)  
会員番号 12960

## 山下 康成さん

昭和31年9月…北海道放送株式会社に入社。以後、帯広放送局、本社総務部、事業局調査放送実施部、テレビ送信部副部長を歴任  
平成5年2月…定年退職  
平成25年5月28日…逝去。享年79

(滝本 幸夫)

が、主催者の想定をはるかに超える大勢の方々のご参会をいただき、会場に入り切れず、現役員や若い会員たちはロビーや階下で待機するありさまだった。「お別れ会」というのに、熱氣溢れる会になったその会の閉会にあたって、山岳部同期OBとして私が「閉会の挨拶」を申し上げる役目になった。その挨拶の要旨をここに再録し、「お別れ会」の雰囲気的一端をお伝えするとともに、これまで山下君にご交誼いただいた大勢の方々に対する、お礼の言葉に代えさせていただきたい。

本日は「山下康成君のお別れ会」に、各大学山岳会、メトロ会、山岳団体などの方々、チヨロバザール関係者の方々、そしてご遺族、ご親類の方々など200名を超える、錚々たる方々にご参会いただき、故山下康成君の遺徳を偲んで、しめやかな内にも盛大に「お別れ」をすることができました。皆様、本当にありがとうございました。衷心より篤くお礼申し上げます。

山下康成君は、74年間のこの世での人生を終えて、今ではもう曼荼羅の世界の住人になっていることでしょう。曼荼羅界は宇宙的生命の縮図ともいわれています。それはヒマラヤ山脈を含む地界も、その遙か上空の天界も一つの宇宙であると表現しているように私には思えてなりません。そうであれば、生前に足繁くその方面に通っていた山

下君にとつては、馴染みのない場所ではないでしょう。その曼荼羅界では、精神は肉体に束縛されることなく、時間と空間を超えて自在に飛翔することができるといわれていますから、彼の孤高な精神は飽くことなく、自由奔放な旅を続けていることでしょうし、さしずめ今日は「お別れ会」の様子を見に、この場所に来ているに違いないと私は思います。そして、この会にお集りいただいた皆様一人一人に、親しみを込めた無言のご挨拶を申し上げていることでしょうか。

また、来賓としてご挨拶いただいた竹内哲夫さんや堂本暁子さんからの「饒の言葉」に耳を傾け、フムフムと頷きながら、俺の人生もまんざらではなかったなあ、得心していることだろうと思います。

「人の品格はその交友で分かる」ともいわれていますが、今日ここにお集りいただいた皆様方をはじめ、山下康成君の生前に彼と交友を持っていたいただいた方々の厚い人脈を思いますと、彼の生涯がどれほど中身の濃いものであったか、容易に想像がつかます。

皆様からこれまでに永年にわたっていたいただいたご厚誼に、心から感謝申し上げる次第であります。

また、お別れ会には出席されなかったが、彼の無二の親友で

あった宮原巍さんからいただいた丁重な弔文には、「俺、お前以上の付き合いだったが、友人の死を悼みはしても、なお深いつながりがあったことに思いを至らせて、生と死を一つの線上に置き、すべてを甘受しなければならぬのかも知れない」と記されていた。まさに生と死は一線上にあるもの。それは断絶のない宇宙の中の存在「梵我一如」だと教えてくれているという思いを一層強くした。

次に、山下康成君が自ら起業し、ゼロから業界のトップ企業に成長させた「チョロバザール」について記しておかなければならない。巷では、登山家・山下康成を知らない人があっても、「チョロバザール」とその商品を知らない人はいないだろう。特に若者たちにとっては大変な人気であり、その販売網は日本全国にまで広がる。それも、創業以来40年に余って人気と成長を持続しているのだから驚く。

彼は山岳部の現役時代から近視眼が強く、「名物ドンチャン・メガネ」を雨や雪に曇らせて、大変苦労をしていた様子だったが、それでも登攀ルートを見定める眼力は確かなものであったし、世の中の動きや情勢の変化はしっかりその目に捉えていたのである。1973年に、六本木のビルの一室を借りて始めたエスニック衣料・雑貨の輸入販売の事業が、その「チョロバザール」だ。インド、ネパール、アフガニスタン、パキスタン、

タイなど、特に高地山岳民族たちの民芸品を自分の脚で歩き、その目で確かめて蒐集し、それを輸入した。インドのデリーにも事務所を開設して調達に努めたが、事業が拡大すると民芸品の蒐集だけでは足りず、自らのアイディアで現地の工場で生産させた。彼はバンカラの多い山岳部員の中では珍しい、意外なおシャレ・センスも持っていたようだ。

「チヨロバザール」の成功にしても、彼が組織して挑んだ数々のヒマラヤ・ジャイアンツの登山隊にしても、彼の企画を成功に導いた最大の特質は「人が好き」という彼の感性だろう。売り手も人、買い手も人、もの造りも人、山に登るのも人、結局は人がその基盤にある。その真理を、彼は理屈ではなく肌で感じたのだろう。後輩山岳部員を育成し、鍛えることに心血を注いだし、国際色豊かな「チヨロバザール」の社員たちも、手塩にかけて育てた。「瞬間湯沸かし器」と若い部員や社員たちから恐れられながらも、一人前の人間になるまでとことん面倒を見た。就職先の見つからない山岳部員がいれば、自分の会社に入れて、彼らを立派な社会人に育成した。山で遭難した後輩やその遺族の人たちに対する細やかな気遣いや、思いやりも抜群だった。捜索隊の先頭に立って、何度も何度も遭難現場に赴いた。法要日も忘れずに墓参に出かけた。

あるインタビューで彼は語っている。——僕はまず外国が好きだったんだな。山だけじゃなくて町も村も、そこに住んでい

る人も好きだよ。だから、外国には行かずにいられないんだ。最初から惹かれたのは、やっぱりアフガニスタンとかインドだな。彼らはとにかく素材で、すぐ友だちになるんだよ。彼らで作るいろんな物を見るのも好きだよ。織物なんかもね。民族ごとに柄があったり、共通のルーツが見えたり、そういう目は大事だと思うよ。それでなければ、ただの品物になってしまふからね——と。国境と民族と宗教の違いを超えて、彼の「人間好き感性」は広く世界に及んだ。民族紛争の絶えないどこかの国や、隣国との諍いの好きな人たちに、山下流異民族共存精神を見習ってもらいたいものだと思う。

彼のように、何十年にもわたって世界の僻地を歩き、世界の山に登り、ビジネスを立ち上げ、交友との人脈を築き、若者を育成し成長させてきた人間は、その家庭ではどういう存在であつたのだろうか？ 美恵子夫人は物静かで多くを語る人ではないが、彼の後輩たちは散々夫人のお世話になっている。彼の外での無茶苦茶な生き様をじっと見守り、心底理解していたのはやはり美恵子夫人であつたと思う。弔問に訪れた私に「とにかく難しい人でしたから」とポツリと漏らされたひと言が、強く印象に残っている。医学界の研究に役立ちたいと大事なご遺体を献体されたり、後日、農大山岳会のためにと大変多額の寄付金を下されたりした。飛び回っていた孫悟空も、結局は釈尊

の掌の内であったのだという思いがしてならない。

最後に、山下康成君の略歴と主な山行歴は左記のとおりであるが、山行歴の大半は正式な記録として発刊されているので、ここでは論評抜きで掲げるに留めたい。彼は半世紀にわたって農大山岳部の面倒を見続けた。遭難事故の発生や現役部員の減少など幾多のハザードに直面しながらも、それらを乗り越えて、一流のクライマーたちを続々と排出し、幾多の成功記録を打ち立てた。そして、ずっとその中心にあったのが山下康成君であった。まさに「農大の山下康成」の半世紀であった。その功績に対し、彼は2012年12月、織内信彦、森泰、加藤和夫に続き4人目の東京農業大学山岳会名誉会員に推挙され、名誉会員章を受賞した。

#### 〈略歴〉

- 1939年1月18日…東京都杉並区に生まれる
- 1957年4月…東京農業大学林学部入学、山岳部入部
- 1960年…山岳部チーフ・リーダーに就任。厳冬期槍ヶ岳北鎌尾根から奥穂高岳登攀に成功
- 1961年3月…同大学卒業
- 1973年4月…㈱チヨロバザールを設立、代表取締役社長に就任
- 1993年…東京農業大学ガッシャープルムII峰(8035m)

#### 登山隊隊長(登頂成功)

- 1995年…東京農業大学・ネパール警察ギヴェラ峰(トウインズ7350m)合同登山隊隊長(登頂成功)
- 1999年1月…日本山岳会入会、会員番号12960、紹介者⇨織内信彦、宮崎絃一
- 2003年…東京農業大学エヴェレスト・ローツエ環境登山隊隊長(両峰とも登頂成功)
- その他、チベット・カイルス、ネパール・ヒマラヤの各地、シッキム、梅里雪山、四川省各地、カムチャツカ、間宮海峡横断、パタゴニア、フンザ、アラスカ、楼蘭、シルクロードの踏破などに多くの足跡を残している
- 2013年5月31日…逝去(享年74)

(菰田 快)

## 室賀 輝男さん



むろが てるお  
(1928~2013)  
会員番号 3925

日本山岳会名誉会員、地方の雄、室賀輝男さんが、平成25年7月27日午前7時24分、多方面で思う存分活躍され、精一杯駆け抜けた86年の生涯を閉じられました。

法名 諦巖院傑岳徳輝居士  
抜さん出て山を愛し、その徳が輝いているという、室賀さんの生きざまそのものです。

昭和38年11月23〜24日、長岡市郊外の八方台で、日本山岳会・長岡現地小集会が開催され、日高信六郎元会長、渡辺公平副会長、神谷恭さん、木下是雄さん、野口末延さん、小島六郎さん、

村井米子さんなど、全国から錚々たるメンバー191名が参加されました。初日、日本山岳会設立発起人の一人である高頭仁兵衛さんを菩提寺の正林寺墓所で偲んだこと、豊富な山菜料理と地酒での歓待など大盛況だった様子などを、『天の夕顔』で著名な作家で、日本山岳会員でもある中河与一さんが会報231号昭和39年2月25日）にお書きになられ、渡辺公平副会長も、この小集会の大成功だったこと、こんな会を今後も持ちたいことなどを追記しておられます。

このとき、室賀さんは藤島玄支部長の下で委員として企画立案と実行にあたられましたが、この催しは室賀さんでなければできなかった、というのが大方の感想でありました。

当日朝、準備のため室賀さん宅にいたとき、ちょうど武田久吉元会長から行けなくなったとの電話が入り、電話口で室賀さんが「そうですか、駄目ですか」と絶句。受話器を置いて「武田さんが見えられなくなった」と落胆されていた様子が、今でも目に浮かびます。当時の参加者名簿には当初、榎有恒さん、松方三郎さん両元会長のお名前もあつたのですが、都合がつかず不参加となられたこともあって、なおがっかりされたのだと思います。

また、平成9年9月20〜21日、第14回全国支部懇談会が越後支部主管で新潟県東頸城郡松代町（現・十日町市）の芝峠温泉で開催されました。松代町長の歓迎挨拶、地元婦人連の踊りな

ど町を挙げての歓迎ぶり。田舎料理に舌鼓を打ち、地酒で歓談。翌日はブナの新緑映えるなかの刈羽黒姫山登山に、齋藤惇生会長はじめ全国111名の参加者から大好評をいただき、盛況裏に終了することができました。

この企画、設営も室賀さんによるもので、当時、室賀さんの高校の同級生が松代町商工会長で、町の有力者だったことから芝峠山頂に一軒しかない宿泊施設を借り切ったのです。ところが、あまりの多人数に級友が「客室が少ないがどうしたらよいか」と聞いたところ、室賀さんから「心配するな、みんな山岳会員だから。部屋に寝られなければ寝袋を持って来ているから、どこでも寝られるので心配はいらないよ」と言われて、なるほど山岳会とはすごいものだと思嘆した、との級友の後日談もありました。

室賀さんは、若いころから谷川岳をホームグラウンドとして活躍されて岩登り技術に長け、東面の一ノ倉沢などでは数多くの遭難者の救出や遺体搬出に携わり、その手際の良さで「長岡に室賀あり」と勇名を馳せていました。また、越後側でも「ヒゲさん」こと高波吾策さんと一緒に長岡ハイキングクラブ員の私設パトロール隊を組織し、長年にわたり遭難防止活動、遭難救助活動、登山道整備にあたったことは、特記すべきことでしょう。

室賀さんは、昭和30年代初期から『山と溪谷』『岳人』などの

山岳雑誌、その他各方面の出版物に山岳関係記事を多数執筆され、日地出版からは登山地図やガイドブックも出版されました。地道な踏査や調査に基づく正確な記述と、高い見識に裏打ちされた内容は極めて好評で、全国各地の登山者、関係者からの照会や、遭難発生時には中央、地方マスコミの取材がしょっちゅうあったことも仄聞していました。

一方で新潟県の登山史にも目を向けられ、越後支部創立60周年記念発行（平成19年5月25日）の『越後山岳』第11号に寄稿された「越後支部草創期を支えた山岳会と人々」は、緻密な資料収集や聞き取りなどによる詳細な記述で、『新潟県体育史』中の「新潟県登山史概観」をより掘り下げ、広げた内容です。

その「資料・1」日本山岳会創草期の「新潟県会員」では、「山岳会会則及び会員名簿」（明治40年2月20日現在）により全国会員総数418名、内新潟県関係の110名を追跡調査、検証され、その中で日本山岳会女性会員第1号は、日本女性登山史によれば「東京の野口幽香」とされているが、全国創草期会員の中で女性として最初の名前は、「長岡市の音楽教師・植村くに」で、三代目が長岡在住であることも指摘されています。

また、『新潟県山岳協会創立50周年記念誌』（平成10年1月18日）には、新潟県山岳協会と新潟県山岳連盟の組織一体化について、中央の動きとともに県内組織一体化の経緯を詳細に記述され、時系列に整理された年譜とともに貴重な文献であります。

室賀さんは、昭和35年以来日本山岳会越後支部の委員、副支部長、支部長を務める傍ら、昭和46年から24年間、新潟県山岳協会会長として、県内岳界発展のために、亡き藤島玄名誉会員（初代支部長）が提唱された「県山岳協会と越後支部の表裏一体化」を強力に推進され、現在は双方の役員とともに兼務という方も多く、ほかでは例を見ないほど両者の融和が図られ、これがさらに後輩の育成にも繋がっています。

また、室賀さんが中心となって母校山岳部支援の「長工OB山の会」を組織し、毎年2月に3年生の卒業を祝う会を途切れることなく催しています。本年も2月21日、7人の壮途を祝い激励しました。地道な活動ですが、稀有な例でありましょう。

この母校同窓会では17年間の長きにわたり会長を務め、文字どおり先頭に立って、90周年記念事業、同窓会館建設を含む多彩な100周年記念事業などを立派に成し遂げられ、まさに長岡工業高校同窓会中興の祖と言っても過言ではありません。

山岳界や同窓会では押しも押されもしない大御所の室賀さんですが、他方で、長岡出身で昭和18年、パプア・ニューギニア国、ブーゲンビル島で散華された山本五十六元帥を景仰する会の理事としても活躍されました。政情不安の現地を持ち前の粘りと説得力を駆使して、現地有力者との人脈を築き、長岡市民待望の「山本長官機、翼の里帰り」を実現させています。また、長岡市国際交流協会メンバーとして長岡市と米国フォートワ

ス市との姉妹都市交流や、ボーイスカウトの育成にも尽力され、さらに永年、保護司として社会貢献活動にも従事されました。

このように、多方面で数多くの業績を挙げられ、人に頼られ、人から褒められても自慢するようなことはひと言も口にされず、人のために尽くす行動の自然さ、何事も一生懸命に、そして曲がったことの大嫌いな実直な生き方をされました。

新潟県の生んだ詩人・評論家の相馬御風が「謙虚な心こそ、まことの指導者の心であらねばならぬ」と詠んでいます。

地に足のついた多彩な活躍ぶりと謙虚さ、誰もが認める偉大な指導者の室賀さん、まさに「地方の雄」であります。

〈山岳関係略歴〉

昭和26年…日本山岳会入会（会員番号3925）

昭和35年…厚生省並びに環境省自然公園指導員

昭和44～45年…新潟県山岳協会会長

昭和50～平成7年…新潟県山岳協会会長

平成7年…尾瀬保護財団評議員

平成8～16年…新潟県山岳協会名誉会長

平成13年…日本山岳会永年会員

平成13～15年…日本山岳会越後支部長

平成17年…新潟県山岳協会最高顧問、名誉会長

平成23年…日本山岳会名誉会員

（土田 幸雄）

## 早川 瑠璃子さん



はやかわ るりこ  
(1930~2013)  
会員番号 4719

1981年8月のある日、徳沢の明るい陽光の中で撮った1枚の写真がある。

大森ドクター・バラサーブの一隊が、槍平から槍を越え、槍沢を下ってくるのを、私は槍沢小屋で待っていた。両親の介護の日々を送っていた私は同行できず、せめて、と夜行日帰りの槍沢待ち伏せとなったのだ。

夏山の楽しさを十二分に味わい満ち足りた表情の一行から、その楽しさを分けてもらった一日だった。皆輝いていた。義母上の介護が終り、山へ戻ってきた瑠璃子さんも新製品を身にま

とい、幸せいっぱい輝いていた。

瑠璃子さんの訃報は、ガン！と頭を殴られたようなものだった。予感はその1週間前にいただいた葉書にあった。筆まめの彼女は、いつも筆ペンの慣れた字で葉書をくれるのだが、その葉書に私は衝撃を受けていた。行が乱れ、文字も躍っていて、いつもと全く違っていたのだ。驚いて、私はよっぽど電話してみようかと思ったが、迷った揚句、電話はしなかった。夜中まで紀行文を書き、書き上げてすぐ倒れてしまったらしい、とのご主人のお話である。なんとも取り返しつかない、あつという間のできごとだったのだ。

1981年初冬の富士では、「見て見て！これ新製品よ！」と、たくさんの新調した装備を見せて、古色蒼然の私たちを羨ましがらせた。その後、会津の山の会にも所属して、珍しい山々をたくさん登っているし、婦人懇談会の山スキー山行、スケッチクラブ、カメラなど多趣味なところを見せていた。

1988年、北インド・ヒマラヤのシバ峰は、婦人懇談会の海外登山の最後となったが、田部井隊長を補佐して大活躍した。インドまで同行して下さった佐藤テルさんや、参加した大勢の新しいメンバーとの間で、様々な心配りと面倒を見事に果たしていた。

元々心配りは身に付いている。村井米子さん、川森左智子さ

ん、小原晴子さんなど女性会員の長老はもちろん、仲間内のお見舞いなど、忙しい合間を縫って来てくれた。私も大手術後の療養中、何回も手料理を持って来てくれたのを忘れることができない。

お料理は得意で、しかもおいしいものを手早く作ってしまう。おまけに飛び切りの美人で、素敵な奥さんだったから、残されたご主人のお気持ちは思うに余りある。

いつも電話は留守電で、手帳のスケジュールはぎつしり詰まっっていて、一緒に出かけることはかなり難しい、という多忙の人だった。やりたいことはかなりやりおかせていたとは思いますが、それでも本人にしてみれば、まだまだやり残したことがあったに違いない。

近年は川崎精雄さんのお勧めで俳句にのめり込み、吟行が多かった。きつと自然にも人間にも優しい、美しい句を詠んでいたと思う。

麻生武治さんは「宗匠」と、小原勝郎さんは「瑠璃さん」と美しく呼んでいらした。誰とでも壁のない温かいお付き合いをしていた瑠璃子さん。川の向こうで会うのを楽しみにしています。

2013年9月19日没。

(山口 節子)

合掌

## 大野 栄二さん



おおの えいじ  
(1930~2013)  
会員番号 6867

大野栄二先輩は、都立江北高校山岳部で登山の基礎を習得し、中央大学山岳部在籍中(昭和24~28年)は、3年部員でリーダーとなり、常に中大山岳部の中心的存在でした。大きな体躯で、いつも温厚な口ぶりです。我々後輩を指導してくださいました。それは、卒業後も変わらず、大野先輩の心温まる励ましに助けられた後輩たちは、数限りありません。

いまから64年前、昭和25年の冬山合宿は、大野先輩は2年部員でしたが、明神岳から奥穂高岳への登頂隊の支援隊として、前穂高岳の最終キャンプ設営まで活躍されました。当時から、

大きな身体から溢れる体力と気力、卓越した登攀技術が上級生からも信頼されていた証です。

その後の昭和26年の冬山合宿は、岳沢から天狗のコルを経て奥穂高岳に挑みました。天狗沢の登りは胸までのラッセルで困難を極め、やつとの思いで天狗のコルにテントを設営し、ジャンダルムにフィックスド・ロープを設置しましたが、その後猛吹雪に遭い、7日間停滞させられました。昼夜1時間おきの除雪を強いられる、厳冬の稜線での1週間となつてしまいました。コルに設営してから8日目、強風の合間を縫って奥穂高岳を目指し、ジャンダルムからロバの耳を通過し、もうわずかで奥穂の頂上という地点で悪天候に阻まれ、登頂は成りませんでした。前年の明神岳から奥穂高岳登頂では、支援隊として登頂隊を見送り、自分がリーダーとして挑んだこのときも悪天候であきらめざるを得なかったわけですから、さぞや大野先輩はくやしかったと思います。

翌昭和27年の冬山合宿は、将来のヒマラヤを夢見て、ポーラー・メソッドで横尾尾根末端より奥穂高岳を目指しました。大キレットにC4、北穂高岳山頂にアタック・キャンプとしてC5を出し、前進キャンプを重ねました。現代では想像もできないような装備とタクティクスです。大野先輩は北穂高岳から登頂隊の先頭に立ち、雪交じりの烈風が滝谷から吹き付けるなか、念願の厳冬期奥穂高岳山頂に立ちました。登頂後、その日

のうちに5つのキャンプを通過して、深夜に横尾のベースキャンプに下山したのです。

その横尾では、ちょうど慶応尾根を下つてきた慶応義塾大学山岳部パーティと出くわしたのです。そこで宮下秀樹さん（日本山岳会元会長）、大野先輩、私の3人で、両校の山行結果を話し合つたことが懐かしい思い出として浮かびます。

大野先輩は卒業後、昭和33年4月から39年3月まで、長い間山岳部の監督を務められました。その後、平成9年4月から12年3月まで、中央大学OB山岳会会長を務められました。

近年は、中央大学学員体育会の理事を長く努め、セレクション（運動選手優先入学制度）と無関係である、山岳部出身理事として各部門の意見調整でもご苦労されたと聞いております。また、首都圏の13大学（発足時は8大学）の山岳部出身者の集まりである「メトロ会」の幹事役として、発足時から活躍されました。いずれも温厚な語り口で頼りがいのある、大野さんならではの役回りだったのでないでしょうか。ほんとうにお疲れさまでした。

大野先輩が活躍され、私も共有させてもらった、昭和20年代中期の中央大学山岳部の活動を思い起こしながら、亡き大野栄二先輩を偲んでおります。

心より大野栄二先輩のご冥福をお祈りしております。合掌

（小林 敏）

## 阿部 和行さん



あべ かずゆき  
(1926~2013)  
会員番号 4498

阿部さんは、前任の今西壽雄さんが日本山岳会会長に就任されたのを機に、1986年に関西支部長となりました。それまでも、委員長のような立場で支部委員会に関わっておられたので、すんなりと支部長交代がなされたものと感じていますが、そのころはまだ、戦中戦後の混乱期の関西支部を支えた方々が数多くご健在だったので、支部長候補はほかにもおられたのでしようが、今西さんの信頼が特に篤く、自らの後継者と指名されたものと思っています。その後、2005年まで19年の長きにわたって関西支部長を務められ、その年に開催された日本山

岳会創立100周年、関西支部設立70周年の記念行事を迎えるのを花道に、重廣恒夫・現支部長にバトンタッチされました。

阿部さんと私は20歳ほど歳が離れているのですが、私にとっては兄貴分のような存在で、結構馬が合いました。阿部さんも私が若くて使い勝手が良かったのか、何かにつけ用事を託してくれました。私が関西支部に入入りし出したのは、今から遙か40年以上前のことですが、そのころの支部は、大阪市西区の大阪スポーツマンクラブの一室の事務机一つでした。合会はその机の周りを取り囲んで話し合い、発送などの事務作業はその机の上でやっていました。高名な海外登山経験者の錚々たる顔ぶれが、黙々と事務作業に汗を流す姿を見て、20代半ばの私はいたく感動したものです。阿部さんもそんな中におられました。阿部さんもまた、鹿島槍北壁や奥鐘山西壁などにおける輝かしい初登攀記録の持ち主のクライマーでした。あるとき、猪名川上流の屏風岩の料亭で、牡丹鍋の忘年会という洒落た催しがありました。阿部さんはリュックに三つ道具を入れてきて、一人で岩登りを楽しむという茶目つ気もありました。

関西支部では、集会や山行行事に加えて、1994年からスケッチの会が始まっています。毎月のようにスケッチ山行が、近くの六甲山を中心に京都北山、柳生、室生辺りで開催され、ときには作品展なども催されましたが、阿部さんはほぼ皆勤で参加されていました。日帰りでは物足りないというので、安曇

野、奥美濃、熊野古道辺りまで2、3泊のスケッチ旅行も実施されました。参加者の絵の流儀はそれぞれでしたが、山は景色がすぐ変わるので、スケッチ10分、彩色10分程度で、一つの作品は30分以内に描き上げました。阿部さんの作品は鉛筆かサインペンで軽くスケッチして、淡い独特の配色で仕上げる透明白彩画で、メルヘンチックな雰囲気醸し出すものでした。

阿部さんとの山行で忘れられないのは、1999年4月の、チロル・エッツタールでのスキー山行です。支部の仲間5人でフェントからフェルナクトヒュッテに入って、ヴァルトシュピッツェ(3768m)を目指しましたが、残念ながらフルヒトコーゲル(3497m)止まりになりました。4泊のヒュッテでの滞在時間が長くなり、ヨーロッパ各地からの登山者と交流できました。ドイツ語教育で有名な六甲学院出身の阿部さんは、片言のドイツ語が話せたので会話は盛り上がり、また、沈殿の時間を利用して何枚かのスケッチを描き上げていたので、これらの品表会でさらに一段と盛り上がり、実に楽しい日々を過ごしました。なお、後日談ながら私を除くほかのメンバーは、2年後にお隣のエッツタールに入って、阿部さんとともにヴァルトシュピッツェの登頂を果たしました。

阿部さんは、登山やスキーのほか自転車やパラグライダーをもこなす、いわばアウトドアならなんでもやるという、精神的

な人でした。特に自転車は、1995年から10年ほどかけて、ドナウ、ラインのヨーロッパを貫流する大河を源流から河口までをたどる、自転車の旅を単独で挙行されました。これらの川は多くの国々を通過するので、英語やドイツ語さえも通じない地域も多く、コミュニケーションを図るのに大変苦労されたようですが、持ち前のバイオニア・スピリッツでこれら難題を解決して、見事に完走を果たされました。そればかりか、阿部さんの優れたところは、これらの旅行記すべてを、数冊の本にまとめられたことです。Windows 95が発売されたばかりのころですが、パソコンを駆使しての労作です。ご自分自身の文章と写真、それにスケッチの何枚かを加えたお手製の出版物で、阿部さんは、これらの本を「自費出版」ではなく「自己出版」と称されました。

阿部さんを語る上で欠かせないのは、1990年6月に、皇太子殿下のお供で大峰山脈の山上ヶ岳と八経ヶ岳に登られたことです。梅雨の季節の2泊3日の山行でしたが、脚もアルコールもお強い殿下のお供は、緊張の中でも結構楽しかったようで、下山後は話が弾んだのか、切符も持たずに京都までご一緒されたのです。ただ、お供のことは今西支部長以外には誰にも知られていなかったし、阿部さんもまた、お供の前も後もこのことを吹聴されることはなかったたので、阿部さんが支部報に報告記事を掲載されるまでは、関西支部員は全く誰も知らなかった

のです。その後の、殿下ご出席の日本山岳会年次晩餐会では、殿下は必ず阿部さんにお声をかけられたと聞き及んでいます。阿部さんのお人柄が窺える一場面だと思っています。

私の山での偉大な師であり、兄貴分であった阿部さんのご冥福をお祈りします。

〈略歴〉

1926(大正15)年…神戸市生まれ。愛媛農林専門学校(現・愛媛大学)卒業後、大阪通産局に勤務

1967年…田淵製作所に入社、日本水道協会に貢献

1956年…鹿島槍北壁・直接尾根積雪期初登攀をはじめ剋岳・

八ツ峰東面、爺ヶ岳東面の未開拓ルートを拓き、黒部奥鐘山・西壁紫岳会ルート開拓など多数の登攀歴を持つ

1957年…紫岳会創設

1971年…大阪府山岳連盟西ネパール・カンジロバ山群登山

隊長

1976年…ランタン・ヒマール

2004年…日本山岳会関西支部西チベット学術登山隊総隊長

1986～2005年…日本山岳会関西支部長

2007年…日本山岳会評議員

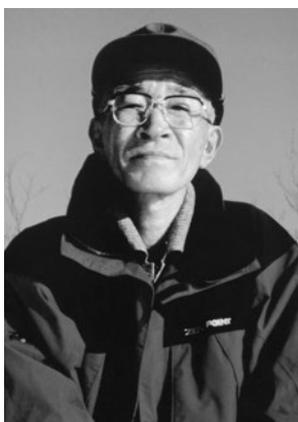
2013(平成25)年11月11日…逝去

著書に『岩登り技術』(1964年、東京中日新聞出版)、『新・

岩登り技術』(1971年、東京新聞出版)があり、ほかに水道関係の出版物が多い

(金井 良碩)

湯口 康雄さん



ゆぐち やすお  
(1936～2013)  
会員番号 6523

昨年11月27日、新聞のおくやみ欄に「湯口康雄」の名を見て、あまりにも唐突なことではびつくりした。

それというのも、10日ほど前に電話で話していたばかりである。それは、富山県山岳連盟が富山100山を選定しそのガイドブックを出版するにあたり、私も編集委員として携わってい

て、掲載する登山コースに関わりのある人物の伝記を載せることになっていった。そのうちの一人、塚本繁松の執筆を彼に依頼したのである。彼は快諾してくれた。ただ現在、家をリフォームしている最中で、山の資料はすべて別の場所に移してあるので、年末または年明けになるだろうという返答であった。あまり知られていない塚本繁松について、どのように書いてくれるだろうと楽しみにしていたのである。

彼と知り合ったのはいつどこであったか、半世紀近くも前のことであり、正確には思い出せない。彼は、大学を修了した最初の任地が魚津市立片貝小学校であった。そこは、剱岳北方稜線の毛勝三山から僧ヶ岳に連なる山域を源とする片貝川のひとつにあって、山好きは彼にとっては好都合な勤務地であった。4年間務める間に、発電所水番の人たちとも親しい関係を築いていたようである。

彼は『とやま山歩き』というガイドブックに「初雪山断章」という短いコラムを書いている。それによると、小川温泉の下流1kmぐらいの所に相又谷という支流があり、高校時代、ふた夏歩荷稼業のアルバイトを行なったとある。それは昭和27（1952）年6月30日から7月1日にかけて、猛烈な豪雨があった。富山県下各地の河川が氾濫して大きな被害をもたらし、山の林道などは至る所で崩壊し、災害救助法が適用された。土木機械のない時代であり、当時の土木作業は多くの人手を必要とした。

セメントを担ぎ、土木作業を手伝い、山への思慕をこのころに培ったものと思われる。

昭和39（1964）年、朝日町や入善町の山好きな人を集めて、黒檜山岳会を創立している。会の名は黒部川の名に由来する黒檜で、彼の発案だったと聞く。若い仲間を得て足繁く山に通う。まずは、概念を得ていた片貝川上流部の毛勝三山を歩き、積雪期には大明神尾根、西北尾根、東芦見尾根など主なルートすべてを登っている。それに加えて、黒部川支流のサンナビキ谷や餓鬼谷などを廻行し、その記録を『岳人』に多く投稿していた。加えて、山案内人や登山史に名を残す人物など、足をつけて綿密に取材した文章も載せている。昭和48（1973）年には、それらをまとめ『黒部雑記』として北日本出版社から1000部限定で上梓した。私も毛筆で丁寧署名されたものももらっている。

一途な性格で、容易に妥協しない面があり、一緒に登った黒檜山岳会の仲間とも袂を分かつことになり、その後は古い記録や人物伝を調べることに傾倒していった。

黒部にまつわる人物として、近代登山の草分けである吉澤庄作について多くのことを調べていた。吉澤庄作は黒部保勝会を創設し、営林署に折衝して、祖母谷温泉から白馬岳への登山コースを開設した人物である。宇奈月から立山や剱岳への登山のため北仙人尾根にコースも開き、途中に坊主小屋と呼ぶ避難小屋

まで造っていたということが、彼の著書によって明らかにされている。さらに昨年の『山岳』には、吉澤庄作と武田久吉博士の間で高山植物について交わされた書簡についても取り上げている。

なお、塚本繁松については、本人の著書もなく情報は少ないが、生家が近いことから断片的ながらいろいろなことを示唆していた。また、黒部の案内人・佐々木助七、瀬川栄吉、野村伊太郎、此川新作、柳沢虎松といった人たちについては、彼の著書『黒部奥山史談』や『山岳』（第六十九年）による発表なくして、世に知られることがなかったであろう。

彼は容易に胸襟を開くタイプではない。それが10年ほど前から、年末に私が作っていた山のカレンダーを持って彼の家を訪ね、近況や四方山の話をして半日も暇潰しすることが続いていた。こんなことで、しばらくだが交誼を持てたのは幸いであった。もともと長生きし、埋もれた情報に光を当てていただきたかった。

（佐伯 郁夫）

合掌。

## 五百澤 智也さん



いおざわ ともや  
(1933~2013)  
会員番号 9277

山の地図といえは、5万分の1地形図が主流だったころ親しまれた『登山者のための地形図読本』の著者、五百澤智也さんが亡くなった。2002年に房総の大福山で心筋梗塞から昏倒されたことがあったが、その折は幸いにも循環器系の専門病院がちょうどその山の麓に所在していて、数時間後には辛くも蘇生し、「地獄の入口まで行ってきましたよ」と後で苦笑さされていた。その後は高血圧や軽い脳内出血などに不安があったものの、各地でご自身の山の絵と図などの作品展をもたれるなどの活動を続けられた。昨年（2013年）11月2日に突然の

脳溢血で入院され、わずかに意識を保っていたが、最後は呼  
吸困難となり12月14日に永眠。1933（昭和8）年生まれで、  
享年81。

五百澤さんを語るには、まずは次の主要な著書5冊を挙げな  
くてはならない。

『登山者のための地形図読本』（山と溪谷社、1967年）

『ヒマラヤトレッキング』（山と溪谷社、1976年）

『鳥瞰図譜 日本アルプス』（講談社、1979年）

『地図を読む』（岩波書店、1989年）

『山と氷河の図譜』（ナカニシヤ出版、2007年）

いずれも大作で、山の地図、地形、地誌などを五百澤さん流  
に究めたものだ。これらの本は、まさしく五百澤さんのライフ  
ワークとして記録されるべき業績である。

五百澤さんは、1957年に国土地理院の前身の建設省地理  
調査所に入所、以降1970年まで空中写真測量による地形図  
作成に携わり、地図制作者として各地の山を歩かっていた。地  
形図の専門職へ就かれたこのへんの動機を伺う機会は生前に得  
られなかったが、山形東高校で山岳部員、東京教育大学で地理  
学を専攻したという流れから、山や地図に関する仕事を選ばれ  
たのは想像に難くない。『登山者のための地形図読本』は、登山  
を熟知した地図制作者が、地図の解説にとどめず、地図表現や  
読図のこと、山のことなどを丹念に書き上げた本である。冒頭

に深田久弥による賛辞が載っている。

1954年から独標登高会に属され、鹿島槍・北岳などの登  
攀に活躍。そうした傍らで、五百澤さんによる日本アルプスの  
氷河地形の調査が実施され、極めて画期的な研究報告が日本地  
理学会で発表された。それ以前は、氷河地形は山稜部周辺の  
カールを中心とした所に限定されていたが、より古い氷期には  
氷河は遙か下流まで流下し、U字谷やモレーンを形成したとい  
う見解である。この報告の詳細は、1964年の『岳人』8月  
号（上高地周辺特集）に「横尾岩小屋と涸沢の氷期」としてま  
とめられている。屏風岩がU字谷壁で、横尾岩小屋の周辺はそ  
こを流れた氷河が岩屑を運んだモレーン「最低位堆石堤」とい  
うセットであり、そこまで氷河が拡大した時代を「横尾氷期」  
と名付けられた（その後、伊藤真人氏らにより横尾氷期の年代  
が6万年以前ということが分かってきた）。横尾山荘から1km  
ほどの所にあつた由緒ある岩小舎は1989年に崩れてしま  
い、今では凝灰角礫岩の岩塊が道端にあるだけで、登山者の大  
半は何も知らずに通り過ぎてしまう。この岩塊こそが、日本の  
氷河地形研究史上で欠くことのできない重要な証拠（モレーン  
の礫）なので、それを最初に見出した五百澤さんの名前入りの  
解説板が、ぜひ欲しい場所である。

日本アルプスでの氷河地形研究は、『鳥瞰図譜 日本アルプ  
ス』の出版で結実した。最近の氷河地形研究のベースはこの本

にある、と言っても過言ではなからう。筆者が当時の山形市本町のご自宅に初めて伺ったとき、『鳥瞰図譜 日本アルプス』のゲラをチェックされていたことを想い出す。それまで『岳人』に折り込みで連載されていた「氷の山・火の山」をB4判の同サイズで出版することと、これはすごい本が出るなと思っただものだ。

五百澤さんのもう一つの日本アルプスでの重要な成果が、1955年からの鹿島槍・カクネリの氷塊の確認である。1930年に今西錦司が注目して以来の報告で、雪溪の氷の中に汚れの年層を確認し「氷河の残党」と表現している。最近、立山カルデラ砂防博物館の飯田・福井両氏により劔岳の三ノ窓雪溪や小窓雪溪などが公式に氷河と認定されたが、五百澤さんの見たカクネリの氷塊も、劔岳周辺と同様に氷河の可能性が高いものだろう。それを半世紀以上も前に、すでに観察し解釈していたことは、大いに評価されるべきである。

五百澤さんは国土地理院在職中に南極観測隊員候補に上がったが、Rtという血液型から選に漏れ、かなり落胆されたようだ。「このまま地理院にいたのでは、本物の氷河を見る機会はない。氷河を見たことのない氷河地形学者では駄目だ」ということで、1970年に退職、以後、ヒマラヤに没頭された。ヒマラヤ研究の成果は、言うまでもなく『ヒマラヤトレッキング』やその後の『岳人』の連載に集約されている。『ヒマラヤトレッキング』

は現地ガイドブックとしても好評で、当時、類書もなかったのが英語版やフランス語版の訳本もある。ただしこれらは、著者が全くあずかり知らぬうちに翻訳・プリントされたらしい。

1971年、寒冷地形談話会という任意の集まりが発足し、五百澤さんも会の発起人9人の内の一人として名を連ねている。この会は山の地形や植生を調べる学生・大学院生・教員らによるインター・カレッジな研究グループで、現在も継続している。談話会の発足については、五百澤さんと小野有五さんが日高山脈・幌尻岳へ氷河地形調査のために入山し、長雨で糠平川の避難小屋に停滞中、山の地形を調査する人たちの集まりが持てないかという話題がきっかけとなった、との小野さんの弁を聞いた（ほかの説もあるらしいが）。大学で地理学専攻ともなれば、調査や実習で山へ登ることも多いと思われがちだが、実際には各大学でも山で調査をする人は教員・学生とも少数派なので、この会はそうした横の繋がりと情報交換を目的としている。1981年の寒冷地形談話会創立10周年の折に、五百澤さんが名誉会員に推された。さらに1983年には、それまでの日本アルプスやヒマラヤでの地形・地誌研究に対し、第19回秩父宮記念学術賞受賞という栄誉を得られた。

その後、1990年に山形から外房の茂原に移られ、翌年、上総一ノ宮の丘陵地に新居を持たれた。そのころに出たのが、岩波の自然景観の読み方シリーズの『地図を読む』で、立体的

に見えるステレオ空中写真も多用されており、見るだけでも愉しい本だ。1990年、国土地理院の山の高さ委員会委員長に五百澤さんが就かれることになった。野に降った五百澤さんをあえて抜擢するという稀に見るいい人事で、まさに適材適所。その大きな功績が、日本最高峰・富士山の標高の再確認である。国民共有認識の3776mの数値がもし異なると、いろいろ問題が生じるだろうが、富士山・剣ヶ峰の三角点標高3775・63m（四捨五入で3776m）に対し、五百澤委員長らによる現地調査と実測によって、三角点の北側にある岩脈の出っ張り（日本最高の地表であり、そこが3776・24m（こちらも四捨五入で3776m）という成果が得られた。この顛末は『地図を読む』に載っている。

1994年からの『日本の自然 地域編』（全8巻（岩波書店）に、表紙カバーを飾る各地方の地貌図がある。五百澤さんによる細密ペン画で、水系や地形の資料なども加えて、各地域の地形の特徴が分かるように工夫されている。各図それぞれ制作に1〜2ヶ月を要したという力作である。夏の暑いさなか、暗幕で暗くした室内でライト・テーブルに向かう作業は、体調を崩さないかと奥様もハラハラされたそうだ。表紙カバーは金色の大地となっていて、まるで金屏風のようなものである。また、同シリーズの『東北』の巻に「奥の細道と東北の大河」という章があり、これは五百澤さんが執筆している。松尾芭蕉の奥の細道を手掛

かりとして北上川・最上川の地誌を論じたもので、本文のみならず脚注にもいろいろな文化論がびっしりと書かれた濃い内容を持つものだ。

日本山岳会創立百周年で企画された『新日本山岳誌』の「総論―日本山岳概説」は、当初、五百澤さんの執筆予定だったが、健康上の理由から中途で辞退されることになり、替わりに寒冷地形談話会の小疇尚・岩田修二・小泉武栄各氏と清水が分担執筆することになった。ただ、目次の前にある「日本の山地山脈」の図は五百澤さんの原図による。見た目はシンプルながら、公的な山地・山脈名とその位置を図上に決めるのは、そう簡単ではなかったようだ。また、氷河地形の解説にある日高山脈と日本アルプスの氷河地形分布図のオリジナルは五百澤さんの作で、地形図上にプロットした図として初めて印刷されたものである。そうしたこともあって、『新日本山岳誌』発行元のナカニシヤ出版との縁を得て、最後の大作『山と氷河の図譜』へと繋がった。

それまでの五百澤さんの作製した図類を一堂に展示しようという企画が、安曇村資料館（当時）の山本信雄氏（上高地自然史研究会事務局）によって提案され、2004年夏の登山シーズンに開催された。これを皮切りに、各地で次のような作品展示会が続くことになった。

安曇村資料館（2004年7〜8月）

千葉県立中央博物館（2007年3～5月）

立山カルデラ砂防博物館（2007年9～10月）

山形大学附属博物館・山形県郷土館「文翔館」（2007年12月、2008年10～12月）

産業総合研究所地質標本館（2009年4～7月）

千葉中央博物館の特別展の折に図録も兼ねて刊行されたのが『山と氷河の図譜』で、これぞ五百澤さんの集大成と言うべき本である。ナカニシヤ出版へのいきがかりから『山と氷河の図譜』の編集をお手伝いすることになり、複数回ご自宅へ伺って検討を重ねた。話しているうちに「こんなものもあるよ」と貴重な図が現われ、あわてて紙面に組み込んだこともあった。最初に挙げた5冊の本の内、ほかは絶版・品切れになっており、今でも購入できるのはこの本だけである。

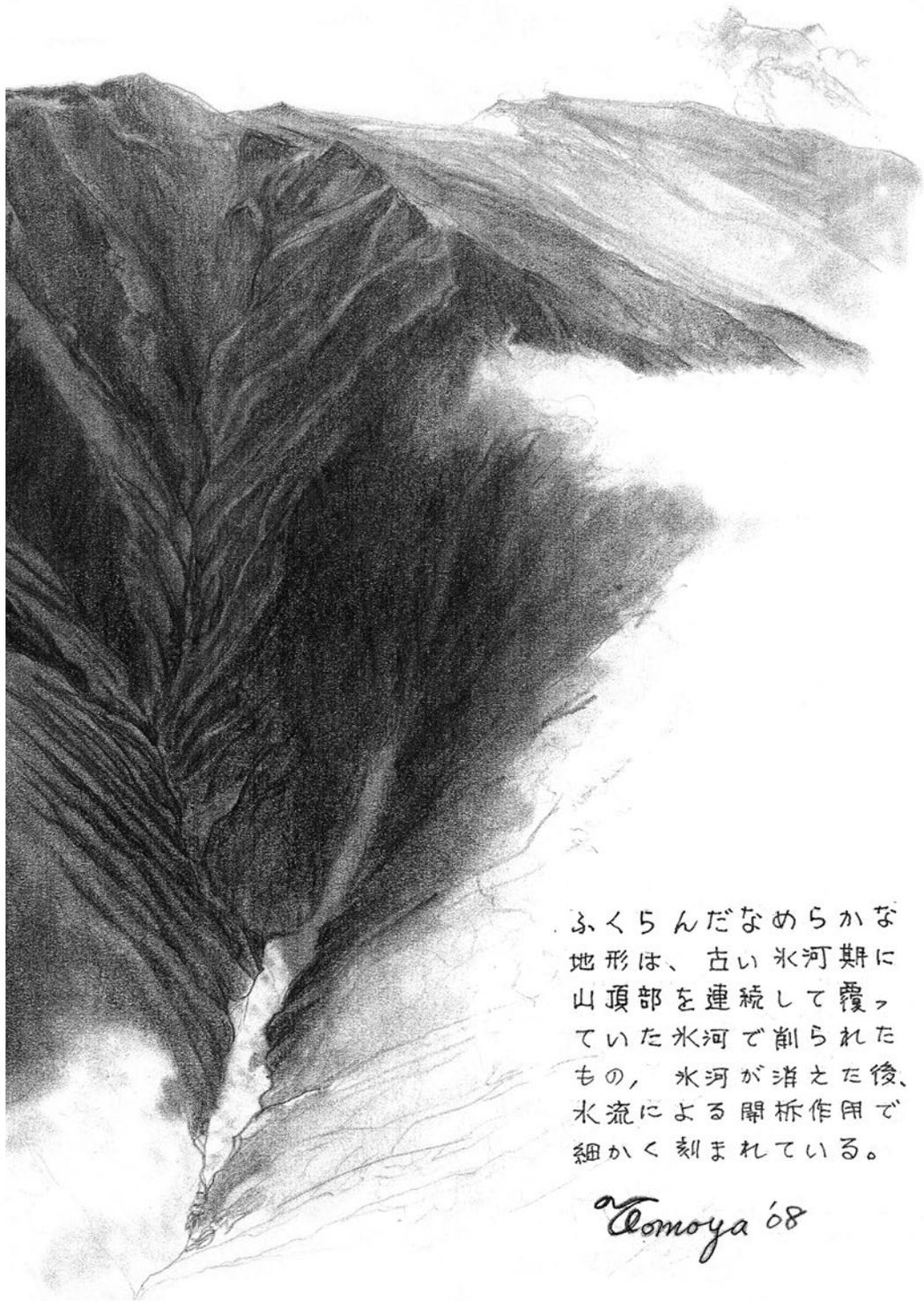
それぞれの展示会では、併せて講演会も開かれ、いずれも好評を博したようだ。講演の最後になったのが、おそらく2007年11月30日の山形大学で、講演後に血圧が急上昇、周囲の方々も心配したと聞いている。いつどこでのことか忘れたが、海外の長期登山中の標高と、ご自信の血圧測定結果を克明に記録し、それを診療時に持参したところ、主治医が、これは珍しいデータと感嘆し、コピーをもらいたいと言われたそうだ。

五百澤さんの山行へ筆者が同行した回数は少なく、寒冷地形談話会の月山と上高地のエクスカージョンのほかは、蔵王、国

師岳・金峰山くらいである。幸いにも1995年6月、奥様とともものヨーロッパ・アルプスへの氷河巡礼にお供させていただいた。その折のスケッチは『山と氷河の図譜』に掲載されていて、いい思い出となった。その後も年に一度くらいはご自宅へ押しかけたが、最後に伺ったのは2012年だったと思う。甘いものはお好きだったようで、知人の製館屋からキロ単位の生館をよく持参した。これで1ヶ月は食べられると奥様が言われたが、実のところ数日で平らげられたそうだ。

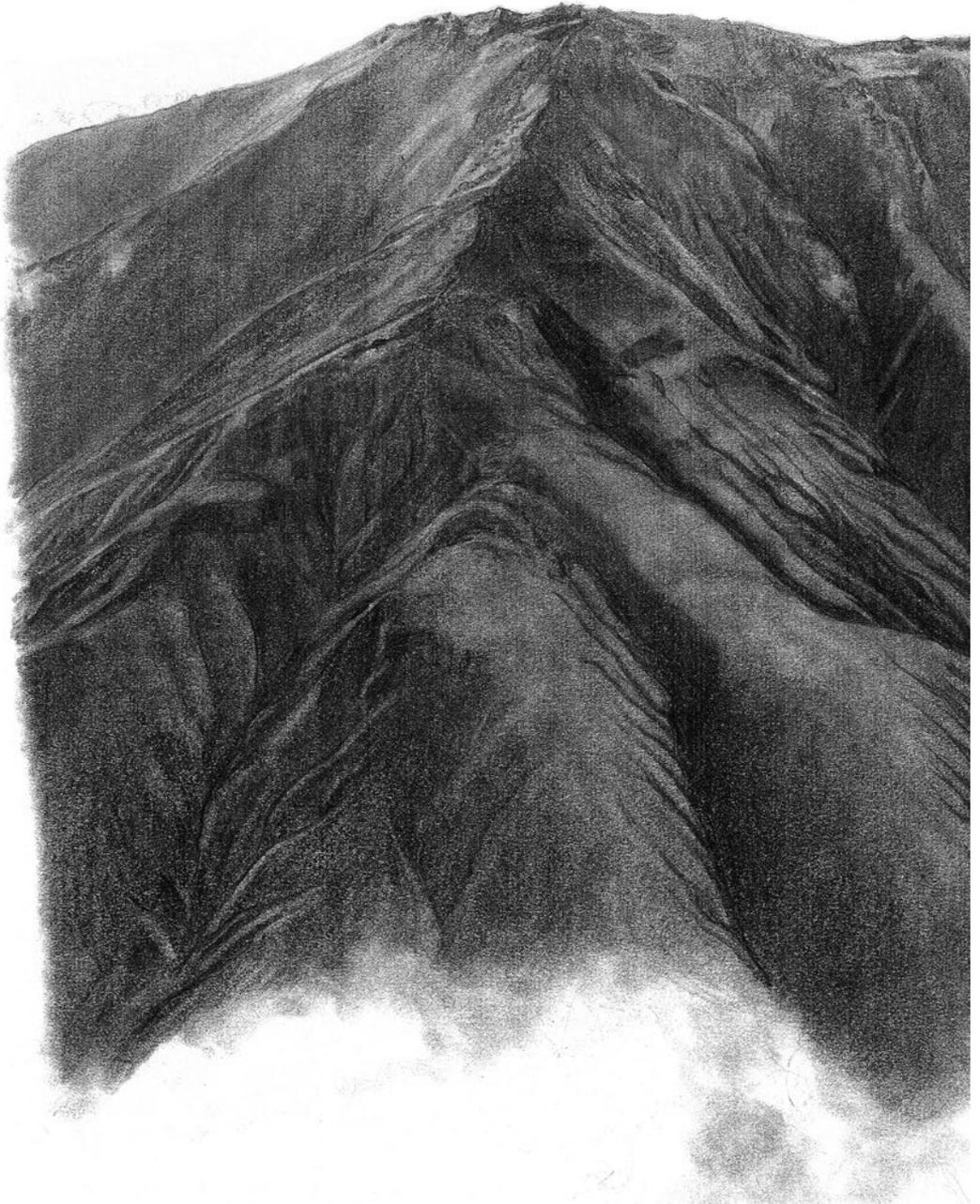
2008年の山形での展示会が終わったところ、新作として飯豊山北面の鳥瞰図のコピーが送られてきた。寒冷地形談話会で配布してもらいたいとのこと、五百澤さんが古くから注目していた飯豊山の氷河地形を描き、解説したものだ。文翔館が発行した図録集には載っているが、部数が少なく今後印刷される機会もないだろうから、ここに再録したい。五百澤さんが描いた最後の、そして地形学的にも意味深い鳥瞰図である。

（清水 長正）



ふくらんだなめらかな  
地形は、古い氷河期に  
山頂部を連続して覆っ  
ていた氷河で削られた  
もの、氷河が消えた後、  
水流による開拓作用で  
細かく刻まれている。

Tomoya '08



飯豊本山北北東面・大岩沢 (1972, Oct. 3rd)

## 一力 英夫さん



いちりき ひでお  
(1934~2013)  
会員番号 6648

1月7日の朝刊各紙に「一力英夫氏肺炎のため死去」の記事が載った。

去年は数多くの山仲間の計報に接し寂しい思いでいたが、とうとう一力も逝っちゃったか……順序が違うじゃないか、という想いである。

私は典型的な東北人を知らない。しかし彼は、いかにも東北を感じさせる一面を持っていた。仙台出身、父は河北新報社主で、仙台では指折りの名家の出身とのことだった。

当時、我々は劔の合宿の後、富山の駅に素泊まりするのが常

だったが、入部後初めて参加した彼は、私が3日間の所用を終えて駅に戻ってもまだそこにいた。友人に会えなかったからと毎晩、駅で寝ていたと言う。結局、連続4日間駅で寝泊まりしていたことになるが、彼にとつてこんなことは序の口だった。合宿の撤収のとき、残った食料をきれいに持ち帰ってくれると評判になったが、彼の場合、それが必要だったからである。

仙台出身子弟のための仙台育英会の寮に寄宿していたが、あるとき、歯から血が出ると訴えたので学校のそばの歯医者に連れて行ったところ、診察した医者に「これは栄養失調のせいですよ」と言われてびっくり。早速、親元に手紙を書くと言ったら、それだけは勘弁してくれと言う。事情を聞くと、兄一夫氏（前河北新報社主）の存在が大きかった。一夫氏は、東大在学中に本を出版したり、一切親の援助を必要とせず、自立して大学生活を送られたとか。すべからく男児はこのくらいの気概を持つべし、との厳しい父上の考えで、寮生の最低レベルの仕送りで生活するよう決められたそうだ。毎日、朝食はコッペパン1個と味噌汁だけ、昼飯は山へ行く費用に充てるため食べない、との返事だった。当時、山食（慶応義塾大学三田キャンパスの学生食堂）で40円のハムライスや1本20円のクリームパンにもなかなか手が出せなかったと言う。そんなことを続けていたら身体を壊してしまうと思ひ、仕方なく、母に頼んで一力の方と二人分の弁当を作ってもらって学校へ行った。普通は皆、山に

行く痩せて帰ったが、一力だけは山から帰ると太ってきた。

高校時代、友人を山で失くした彼は、登り方は慎重というより、むしろ鈍重といえるだろう。冬の北鎌尾根で、私は彼の落とした岩で頭に傷を負ったことがあった。そのお陰といつてはなんだが、家人に説明するのが嫌で、怪我が目立たなくなるまで松本の山仲間の所に潜り込んでいたことがある。懐かしい思い出の一つである。

一力は、学生時代は全くお酒が飲めず、周りの人が飲んでいゝる酒の匂いだけで赤い顔になっていた。ルームの飲み会などで盃にビールをつがれて吐いて、からかわれていた。その彼が卒業して1年後、我が家に来て一升も飲んだ後、もつと飲みたい、と言ったときは驚いた。新聞社とはなんとひどい所だと思ったが、彼の場合、仕事の担当が東北の販売店相手だったからだろう。東北の販売店主には底抜けの酒豪が多いから、お酒が飲めなくて全く話にならなかつたわけである。それこそ、血を吐く思いで大酒を飲む修行を重ねたと、苦笑しながら話してくれた。なんとも飲兵衛には羨ましい話だが、彼にとつてはさぞかし大変だったことだろう。

その後、一力から仲人の依頼を受けたときはびっくりした。私自身、結婚してまだ数年だったし、その結婚式の規模の大きさと派手さに驚いたのだ。奥方の家も一力家に勝るとも劣らぬ立派な家柄で、仲人を決めるのも大変だったと聞いた。仙台の

習わしとかで、仲人は正、副と二組立てるのだそうだ。正仲人は山梨勝之進ご夫妻。仙台藩士出身、海軍大将、学習院長、後に学習院名誉院長、仙台育英会会長という肩書きの硬骨の方である。そして、副が私たち夫婦であった。帝国ホテルの一番大きな宴会場で、バンドの生演奏付きだった。そして、正仲人の山梨ご夫妻はなにもご高齢だったので、それにも気を遣わなければならなかつた。披露宴が始まって正面の雛壇に6人が並んで座り、目の前のメインテーブルに目をやると、そこにはルームの大先輩の横有恒、三田幸夫、早川種三、佐藤久一朗さん……等々がずらりと座っておられた。早速、種さんから「宮下、なんでお前が俺たちの上座にいるんだよ！」と笑いながらヤジを飛ばされた。最高級のお料理の味も、あまり覚えていなかったような気がする。

その後しばらくの間、山登りは棚上げにして仕事に打ち込んでいた一力と、自分の生活のなかで山との関わりの方に重点を置いていた私とは、お互いあまり接点のない生活を送っていた。むしろ仲人という立場の私たちにいろいろ気を遣った、祐子夫人と会う方が多かつたと思う。しかし、私が胃癌を患って国立がんセンター中央病院で手術を受けたときは、手術の日から退院する日まで12日間、毎日、夕方になると一力は私の顔を見に来てくれた。「悪いね」と言うと、「隣ですから気にしないでください」と言う。がんセンターは朝日新聞社の向かい側にある。

ベッドの脇に立って少しだけ話をして「頑張ってください」と言って帰っていく。私を気遣ってくれているのが、よく分かった。

後日、朝日旅行会（現・朝日旅行）の社長になってからはメトロ会（首都圏の大学山岳部OB・OGの集まり）にも顔を出すようになって、他校の山仲間を誘ってトレッキングを主催したりしていた。私も声を掛けられたが、なかなかタイミングが合わず実現しなかった。今になって思えば、少し無理をしても一度くらい一緒に行けば良かった……と思っている。入域が難しいと言われる変わった辺地に行くので評判だった。高い所は諦めて、入り難い所を盛んに探していた。鬱勃たる彼の山への想いのせいだったんだろう。

〈略歴・山歴〉

昭和9（1934）年…仙台に生まれる

昭和27（1952）年…慶應義塾大学文学部入学とともに山岳部に入学

昭和31（1956）年…同大文学部卒業、法学部政治学科に学士入学

昭和32（1957）年…チーフリーダーとして厳冬期笠ヶ岳、奥穂高岳の極地法登山に成功。そのほか6年間に厳冬期前穂高岳・北尾根の極地法登山、針ノ木岳、前穂高岳縦走、

北鎌尾根からの槍ヶ岳、遠見尾根からの鹿島槍ヶ岳などの記録を残す。

昭和33（1958）年…同大法学部政治学科卒業後、朝日新聞社に入社。以後、東京販売局次長、名古屋営業局長、北海道支社長、取締役事業開発本部長、名古屋本社代表などを歴任。この間、冬の「札幌50峰」をすべて登る

平成8（1996）年…東京本社顧問および朝日旅行会社長に就任

平成12（2000）年…東京本社顧問および朝日旅行会社長を退任。この間、ニューギニア・ウイヘルム山、モンゴル・ファイティン山、中国・四姑娘山と梅里雪山、カムチャツカ・クリチエフスカヤ峰などの登山、トレッキングを楽しむ

平成25（2013）年…12月30日病没。享年79

（宮下 秀樹）

## 藤井 信さん



ふじい まこと  
(1932~2014)  
会員番号 4468

2014年1月11日、雪の降りしきる寒い一日の始まりでした。

玄関先には雪が40〜50cmほど積もり、車庫前の除雪も一段落、ホツとしていた矢先、藤井先生ご逝去の訃報が入りました。もはや二度と警咳に接すること叶わず、誠に痛恨の極みであります。昨年よりご体調も思わしくないとお聞きいたしており、一喜一憂していた矢先のことであり、この日を迎えることは少なからず覚悟はしていたものの、突然のことでありただただ驚き、ご冥福をお祈りすることしかできません。享年83の生涯を山に

懸けた熱き思いを、今さらながら思い出しているところです。しかも昨年の7月には、室賀輝男・日本山岳会名誉会員もお亡くなりになったばかりだというのに……。巨星墜つるがごとき両先輩のご逝去は大きな衝撃で、言葉にならず、改めて一つの大きな時代が終わったな、という思いが拭えません。

藤井先生は真摯なお人柄に加え、チャレンジ精神とそのバイタリテイは常に私ども後輩の道標でした。長岡工業高校在任中は山岳部の指導育成に尽力され、また、長岡ハイキングクラブの牽引者としての存在は計り知れないものでした。私ども高田ハイキングクラブの名前の由来も、将来、長岡ハイキングクラブのような山岳会になりたいという願いを込めて命名したものです。新潟県山岳協会会長を務められた後は顧問として、また日本山岳会の永年会員、そして越後支部名誉会員としてのご指導は私たち後輩の力の源であり、爾来折に触れ故室賀、藤井両先輩を目標とし、研鑽してきました。藤井先生が新潟県山岳協会会長を務められたときは副会長のご下命をいただき、その下で多々ご指導いただきましたことは、いまだ忘れることはできません。新潟県山岳協会の活性化について、国民体育大会への取り組み、またクライミング競技には早くから注目され、その対応の早さはまさに先見の明と、その造詣の深さを窺い知るものでした。

その他数々の業績について語り尽くすこと叶いませんが、新

湯県山岳協会会長並びに日本山岳会越後支部名誉会員として比類なきご指導の下、1992年11月16日、中国青海省登山協会との兄弟協定を締結されました。遡ること5ヶ月前の6月には、中国・青海省、崑崙山脈のケイコウシャン峰(5334m)に新湯県山岳協会と青海省登山協会の合同登山隊で登頂。1993年、中国・青海省共和県の青海南山(4472m)は第1回高校生訪中交流登山の引率で。1994年、中国・青海省の野牛山(4898・3m)は経済不況のなか、生徒の参加希望者2名で実施が危ぶまれたところ、藤井先生と当時の柏崎工業高校登山部顧問の小杉克彦先生の努力とご尽力で実施されたと聞いております。1997年、曲阿加吉瑪峰Ⅱ峰(5890m)は新湯県山岳協会50周年の記念行事の一環として企画され、登山隊長として。2000年、托木爾堤峰(4888m)は藤井先生が新疆ウイグル自治区を旅行中に、哈密市郊外より北東190kmに位置する托木爾堤峰を紹介され、それが起因とお聞きしております。このときの総隊長が元日本山岳協会会長の坂口三郎氏、副総隊長が故室賀輝男氏、隊長が藤井先生でした。2002年、ガンシカ峰(5425m)は新湯県山岳協会と中国青海省登山協会との兄弟友好協会締結10周年記念行事の一環として総隊長として参加されておられます。2004年、曲阿加吉瑪峰Ⅰ峰(5930m)は当時資料、写真などの全くない地図の空白部であり、そのため故小倉厚氏(日本山岳会No570

9)、藤井先生の両氏が偵察山行に入っておられます。

中国・青海省との友好交流の過程のなかで青海省の青海信越山荘建設事業にも携わり、そのときの発起人、勝野順先生、伊沢利幸先生と精力的に活動されておられました。藤井先生が残された多くの業績のなかから青海信越山荘建設の経緯と顛末について、発起人のお一人である勝野順先生からいただいた全文を、そのままご紹介させていただきたいと思えます。この青海信越山荘については『長野県山岳協会創立50周年記念誌』の77ページに、6行を割いて掲載されております。以下、勝野先生の記述全文です。

青海省に山小屋を作ろうという話は、1998年から信濃高等学校教職員山岳会(以下下信高山岳会)が主催してきた「高校生訪中登山交流会」の第3回隊(1991年達理加山)第4回隊(1992年野牛山)を青海省登山協会のご協力で実施した中で始まりました。そして91年、92年の2回にわたる青海省登山協会の訪日団との協議で具体化。93年7月、有志15名が集まって「青海信州山荘をつくる会」を発足させ、同8月には杉山昭久以下4名で建設地を探る「青海省山岳視察団」を派遣しました。その秋にはかつて親交のあった当時新湯県山岳協会副会長の藤井信先生も賛同されて共に進めることとなり、名称を「青海信越

山莊をつくる会」としたのです。翌94年2月、藤井信、伊沢利幸、勝野順の3名が青海省西寧市に於いて青海省登山協会秘書、長延義氏との間で「青海信越山莊建設契約書」を交わしました。

藤井先生は、7月26日からの新潟県高校生訪中隊長として忙しい最中の訪中で、その外交的かつ情熱的な取り組み方には全く脱帽でした。翌1995年4月27日～5月9日には「青海信越山莊完成記念ツアー」を組んで会員30人が参加、29日には山莊前で除幕式を行いました。また、5月2日には青海湖西方に連なる青海南山の一峰に登ったのですが、協会員が「ここは無名峰です」と言うので、藤井さんの発案で「青海信越峰」と命名、地形図に記入するという話でしたが、未確認です。標高も未確認ですが、3900m前後でしょう。しかし、広大な青海湖と山莊の一角を一望できる絶好の展望台で、ゆつくり登って2～3時間のハイキング・コースです。その後は清蔵公路・敦煌トレッキングから湖周騎馬トレッキングなど、「青海信越山莊」を利用したツアーから個人的な旅行まで、数多く実施されました。藤井信先生が「青海信越山莊」に関わられた事業は、中国登山協会なканずく青海省登山協会との数多い友好事業の一端かもしれませんが、間違いなく日中友好の一時期を画したものでした。次は、そのときの信濃毎日新聞（1994年

3月5日付）の記事です。

「長野・新潟の高校教師ら中国に友好の山小屋 青海省登山協会と建設契約」

中国青海省に山小屋を建設しようと訪中していた長野、新潟両県の高校教師らの「青海信越山莊をつくる会」が4日までに、同省登山協会と山小屋建設の正式契約を結んだ。建設地は西寧市の西約150kmの高原と決まり、今月中に工事を始め、来春からの利用を目指す。西寧市での調印には、県山岳協会副会長で梓川高教諭の勝野順さんから会員3人と同省副省長らが出席。日本側が建設費の1千万円を拠出、不足分を同省登山協会が補う。会員や家族、友人5人までは無料で山莊に滞在できる。完成後の不動産権、使用权は同省登山協会が所有する等を約束した。同省政府も力添えすると挨拶した。勝野さんによると、山莊の名称は「青海信越山莊」。建設予定地は穂高連峰に匹敵する標高3195mで、冬は全面氷結する青海湖のほとりにある。周辺では放牧や菜種栽培が盛んだ。敷地は約0・3ha、煉瓦つくり2階建て延べ約400平方mの中国様式(約40人収容)にする。山莊を拠点に、5000m級の登山、トレッキング、パラグライダー、サイクリングやチベット自治区に通じる道路のドライブ、黄河源流域の探検などを予定してい

る。県山協等の県高校生訪中登山交流事業に参加した勝野さんらが昨年7月つくる会を設立し、準備を進めてきた。会員はこれまでで約50人(グループ会員を含む)、建設資金は400万円集まった。引き続き一口10万円で会員を募る。

その後の青海信越山荘は、中国側の事情により消滅したとのことです。

昨年の7月25日、高頭祭も無事終わり、翌26日、日本山岳協会会長神崎忠男氏と八木原罔明副会長を、高頭仁兵衛翁の墓前にご案内する前に藤井先生宅を訪れました。そのときは大変喜ばれ、嬉しそうにお話をされておられた顔が目には浮かびます。藤井先生にはよく飲ませていただきました。県山協会議の帰路の新潟から長岡の間で。新潟へ移られた後、ご自宅の近くの居酒屋で。また、ご自宅の囲炉裏を囲んで痛飲し、挙句の果て隣室の座敷に布団を敷いていただいて泊まったり、2階のベッドでも泊まらせていただいたりもしました。いつだったかご自宅に寄ったとき、「俺にはもう不要だから」と言われ、山スキー、シール、プラブーツの山スキー一式をいただきました。新品同様で、藤井先輩の技術の高さを窺い知るに足るものでした。藤井先生の形見と思い、今も愛用しています。今思うに、所属山岳会が異なるにもかかわらず、大変可愛がっていただいたこと

に心から感謝しています。

2014年2月22日、「ホテルニューオータニ長岡」において、長岡ハイキングクラブ主催の「室賀輝男さん・藤井信さんを偲んで」の会が行なわれました。室賀・藤井ご両家のご遺族の皆様をはじめ、新潟県山岳協会、日本山岳会越後支部、長岡工業高等学校、山本元帥景仰会、ボーイスカウトの各界から所縁のある大勢の皆様が参加され、しめやかに行なわれました。

流水落花、変転定めなき世とは申しながら、在りし日の藤井先生を偲び、心からの哀悼を捧げ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

(この追悼文は、新潟県山岳協会ニュース並びに日本山岳会越後支部報に掲載済みのもです。)

(橋本 正巳)

## 小野 健さん



おの けん  
(1932~2014)  
会員番号 5704

と綴られており、一気に読んだことや、奥様の内助の功に感嘆したことを覚えている。その後、新潟県山岳協会や日本山岳会越後支部の会合や行事でお会いし、一緒に山にも登るようになって、小野ご夫妻には公私にわたりお世話になった。

小野さんは福島県いわき市の出身。就職で糸魚川市の工場に配属になった。そして、初めて登った黒姫山からの眺望に感激、北アルプスと日本海を繋ぐ、まさに夢の縦走路開拓の想いに駆り立てられ、梅海新道を開通させたのである。0 mから3000 m級に至る高低差、貴重な動植物の数々……。小野さんが仲間とともに半世紀以上、やぶ刈りを続けてきた梅海新道は、ようやく朝日岳から親不知までのルートが登山地図に記載され、岳人憧れの屈指の人気ルートとなって、その魅力を全国に発信し続けている。

北アルプス・朝日岳と新潟県糸魚川市の親不知を繋ぐ登山道「梅海新道」を開拓した小野健さんが亡くなった。常に次の目標に向かって多岐多彩に実力を発揮し、リーダーであった小野さん。病と戦っておられたとはいえ、早過ぎる、残念、の一言であった。

私が小野さんを知ったのは、1971年に山と溪谷社から出版された著書『山族野郎の青春』を読んだのがきっかけだった。1961年に職場の仲間7人で「さわがに山岳会」を結成。10年かけて全長27 kmに及ぶ梅海新道を開拓した苦楽が、生き生き

小野さんは稀有な登山家だった。工場勤務の傍らか、やぶ刈りの傍らか、多数の著書や写真集を出版している。地元博物館の岩石展示のアドバイザーを務めるほど鉱物、地層、植生に造詣が深く、新潟日報紙上をはじめ山岳雑誌にも寄稿して、登山道沿線の自然の豊かさを紹介している。

小野さんは「継続は力なり」ではなく、「継続は成果なり」と常々言っていたが、1962年より元旦登山を続けていて、誕生日が12月31日だったこともあり、地元の山であったり、燕岳や槍ヶ岳など、年末年始は山へ出かけていた。同行者がいなく

れば単独行で、49年間も続けられた。

26回を数えるイベント「海のウェストン祭」も、北陸自動車道開通に合わせて、日本アルプスの日本海側の起点となる親不知に誕生した記念の広場に、小野さんが行政に働きかけて、1988年にウェストンの全身像が建立され、その前で毎年行なわれている。上高地が「山のウェストン祭」なら、親不知は「海のウェストン祭」と自負されておられた。

「海のウェストン祭」のセレモニーが終わると、坂田峠登山口へ移動して、北アルプス最北の1000m峰・白鳥山へ登るが、梅海新道の稜線や犬ヶ岳の肩に梅海山荘が望まれる頂で行われる、小野さんのミニ講演会が楽しみであった。その講演料が、地元カタクリクラブ会員のお世話で肉汁とお汁粉に化けて振舞われていた。材料を前日から担ぎ上げて準備していると強調しておられたが、その心は、カタクリクラブ会員への労いだったのではないかと思う。

2008年、第20回の「海のウェストン祭」で、1回目より連続参加ということで、小野さん直筆の感謝状と群体珊瑚の化石を記念に贈られたが、世界で一枚の感謝状だけに、そのときの感激は忘れられない。元気でいる間は、とその後も参加させていたideている。

ほかにも小野さんの継続がもたらし、大勢のファンが毎年楽しみにしていたもの一つに、ふるさとカレンダーがある。

「フォッサマグナの山と石と植物」と称して、四季折々に撮り貯めた写真の中から制作、発行されている。27年分が手元にあるが、素晴らしい写真集でもある。2009年に糸魚川市が世界ジオパークに認定されたが、このカレンダーのふるさとの自然が大半入っっていて、「梅海新道は世界ジオパークなんだよ」と言っていたときの、笑顔の小野さんが思い出される。

追悼文を書かせていただくことになり、小野さんの足跡の大きさに、何を書いてよいかしばらく迷っていた。小野さんは、スポーツやレジャーとしての山登りだけではなく、地域の文化振興を担う登山家として尽力された文化人でもあったと思う。

現在の梅海新道は、山歩きを楽しむ人、草刈りなどの維持管理に汗を流す人、写真を撮る人等々、様々な人が小野さんを慕って集う。雲上の縦走路で生まれた縁に、どれほど多くの方々感謝していることか計り知れない。「継続は成果なり」を信条に、自然を愛し、人を大切に、やぶ刈り人生を全うした小野健さん。お好きだった「いつかある日」を唄う山仲間へ送られて旅立ったが、これからは千の風となって、梅海新道を見守っていただくさと思う。

#### 〈略歴〉

1961年～さわがに山岳会会長

1962～1971年…北アルプス・朝日岳から親不知までの

梅海新道開拓

- 1964年…日本山岳会入会（会員番号5704）
- 1966～2006年…厚生省並びに環境省自然公園指導員
- 1968年…日本山岳協会指導員
- 1970年…岩手国体山岳部門ブロック優勝（監督）
- ？～1997年…新潟県山岳協合理事
- 1989年…カタクリクラブ会長
- 2013年…日本山岳会永年会員
- 〈山岳関係の著書〉
- 1971年…『山族野郎の青春——梅海新道の開拓』（山と溪谷社）
- 1981年…『ふるさとの自然 青海の石と花』（青海町教育委員会）
- 1984年…『ふるさとの自然 黒姫山』（青海町教育委員会）
- 1988年…写真集『梅海新道その自然』（さわがに山岳会）
- 1996年…『青海四億年の大地 博物館ガイド』（青海町教育委員会）
- 2001年…『梅海新道開拓四十周年の回想』（さわがに山岳会）
- 2007年…地元密着型ガイドブック『糸魚川の自然を歩く』（株ウエイツ）
- 2010年…『梅海新道ものがたり その自然と人々』（考古堂書店）
- 2010年…『梅海新道を拓く——夢の縦走路にかけた青春』（山と溪谷社）
- 1972年…第12回山と溪谷社・山溪山岳賞（梅海新道開設）
- 1985年…新潟日報社文化賞（梅海新道開拓整備）
- 2000年…環境庁長官賞（自然公園指導員）
- 2003年…第1回山と溪谷社・山岳環境賞（梅海新道維持管理）
- 2004年…第9回NHK地域放送文化賞（梅海新道と放送出演）
- 2005年…藍綬褒章（自然公園指導員）
- （山田 智子）



# 会 務 報 告

2013年(平成25年) 4月～2014年(平成26年) 3月

(◎総会 □理事会 ◇人事 ☆事業)

## ◇2013年度役員・評議員・支部長

会 長 森 武昭

副 会 長 節田重節、黒川 恵、古野 淳

常務理事 高原三平、吉川正幸、佐藤 守

理 事 勝山康雄、山田和人、野口いづみ、大槻利行、落合正治、  
川瀬恵一、山賀純一、直江俊武

監 事 吉永英明、浜崎一成

委員会の担当理事

【総務】 高原、佐藤

【公益法人】 直江

【財務】 吉川

【デジタルメディア】 佐藤

【図書】 節田

【資料映像】 勝山

報 告

【山岳編集、会報編集、JAN】 節田

【海外】 川瀬

【YOUTH CLUB】 古野、落合

【遭難対策】 川瀬

【自然保護】 山田

【科学】 野口

【医療】 野口

【山岳研究】 大槻

【集会】 勝山

評 議 員 \*田邊 壽、村井龍一、宮崎絃一、山本良三、成川隆顕、

尾上 昇、神崎忠男、橋本 清、小川 武、贅田統亜、

今村千秋、内田 博、重廣恒夫、大谷 亮、南井英弘

支 部 長 (北海道) 西山泰正・(青森) 大久保勉・(岩手) 菅原敏

夫・(宮城) 佐藤昭次郎・(秋田) 佐々木民秀・(山形) 粕

谷俊矩・(福島) 小林正彦・(茨木) 星埜由尚・(栃木) 山

野井武夫・(群馬) 田中壮倍・(埼玉) 大久保春美・(千葉)

諏訪吉春・(東京多摩) 竹中 彰・(越後) 橋本正巳・(富

山) 山田信明・(石川) 中川博人・(福井) 森田信人・(山

梨) 遠藤靖彦・(信濃) 飯村富彦・(岐阜) 高木基揚・(静

岡) 大島康弘・(東海) 小川 務・(京都・滋賀) 田中昌

二郎・(関西) 重廣恒夫・(山陰) 中井俊一・(広島) 兼森

志郎・(四国)尾野益大・(福岡)中馬蓮人・(北九州)伊藤久次郎・(熊本)工藤文昭・(東九州)加藤英彦・(宮崎)末永軍朗

□平成25年度第1回(4月度)理事会 4月10日 集会室

出席者 尾上会長、吉永・西村各副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・萩原・節田・川瀬・古野各理事、平井・浜崎各監事

【審議事項】

1. 太陽A S G有限責任監査法人との業務契約継続について(小林)  
別添に示すとおり、財務に関する指導・助言および内部監査の補助事務を行なうことで契約を継続する。ただし、契約期間を平成25年4月1日より平成26年5月31日とした。(承認)
2. 会報「山」、『山岳』編集に係わる編集業務委嘱について(小林)  
別添に示すとおり、業務委嘱をする。(承認)
3. 山研管理人雇用の継続について(森)  
別添に示すとおり雇用の継続する。(承認)
4. 寄付金等受入れについて(小林)  
高尾の森づくりに100万円の寄付があったほか、5件190万7000円の助成金受入れ申請があった。(承認)
5. 会員管理システムの対応(保守・運用支援等業務委託契約)について(高原)

別添に示すとおり、未契約だった過去2年分(平成23、24年度)および平成25年度分の標記契約を結び、精算する。(承認)

6. 規程類(職員就業規程ほか)の改正について(高原)

別添に示すとおり、組織変更に伴い名称等を変更する。また、職員就業規程を現状に合わせた改正をする。(承認)

7. 支部長の交代について(高原)

・宮城支部・新支部長 佐藤昭次郎(11830)、退任 高橋二義(7885)

・広島支部・新支部長 兼森志郎(11958)、退任 杉村功(12672)(承認)

8. 次期(平成25年度～平成26年度)役員について(尾上)

以下のとおり候補者案が提案された。(50音順)

- |    |              |    |
|----|--------------|----|
| 理事 | 大概利行(13019)  | 新任 |
| 理事 | 落合正治(13517)  | 新任 |
| 理事 | 勝山康雄(8772)   | 新任 |
| 理事 | 川瀬恵一(14424)  | 再任 |
| 理事 | 黒川 恵(7547)   | 新任 |
| 理事 | 佐藤 守(13431)  | 新任 |
| 理事 | 節田重節(6720)   | 再任 |
| 理事 | 高原三平(7949)   | 再任 |
| 理事 | 直江俊式(14775)  | 新任 |
| 理事 | 野口いづみ(12105) | 新任 |

理事 古野 淳 (12194) 再任  
理事 森 武昭 (9620) 再任  
理事 山賀純一 (14660) 新任  
理事 山田和人 (9909) 新任  
理事 吉川正幸 (7345) 新任  
監事 浜崎一成 (11248) 再任  
監事 吉永英明 (7045) 新任

9. 入会希望者について(高原)  
28名の入会希望者があった。(承認)

(承認)

1. 第7回日中韓三国学生交流登山の日程変更について(高原)  
8月16日～21日(以前は、24日～29日だった)に実施する。

2. マッキンリー気象観測について(森)

大蔵喜福会員、アラスカ大学より別添に示す実施提案があり、常務理事会で了承した。今後、大蔵会員から支払請求があった場合、内容をチェックした上で、支払いに応じることとする。今後の当会の対応窓口は、常務理事会とする。

3. 奇石博物館の記事について(高原、節田)

奇石博物館の記事について(高原、節田)  
会報(2013年3月号)掲載の奇石博物館の記事内容で不適切箇所があった。今後、掲載記事の内容については事前に精査する等一層の配慮が必要との確認をした。指摘のあった会員に

対して、別添に示す文面を提出する。

4. 3月28日、内閣府への平成25年度事業計画、収支予算書提出の手続きが完了した。(高原)

5. 報告事項2に関する、電源開発(Ｊパワー)の寄付金125万円を受領した。(小林)

6. 平成25年度子どもゆめ基金助成金(内定)について(永田)

ウェブ教材「親子で楽しむ山登り」が内定した(交付限度額886万1000円)。実行に当たってリスク、課題もあり、ワーキング・グループによる管理組織を設置して臨みたい。

7. 寄付金等受入れについて(小林)

四国支部、北海道支部、本部、高尾の森づくりの会から、寄付金を受け入れた旨の報告があった。

合計592万4000円。山梨、信濃、北海道、東海各支部から助成金を受入れた旨の報告があった。

合計190万7000円。なお、今年度の寄付金・助成金の受入れ額は、約2200万円になる。

8. 第7回日本山岳会森づくり連絡協議会の開催について(吉永)

3月30日(土)高槻森林観光センター(高槻市)に8支部41名が参加して行なわれた。各支部の活動報告、研究発表があり、ペレット工場を見学した。

9. 旅行業法に基づく「募集の手引き」について(高原)

「募集の手引き」が完成したので、会の関係各団体などに通知し、

HPで広報したい。

10. 国有林野(上高地山研)の使用許可書を受領した。(高原)
11. ログマーク使用許可申請(山梨支部)があり、了承した(高原)
12. Trans Japan Alps Race 2014の名義後援について要請があり、了承した。ただし、自然環境保全や登山者マナーの遵守にはより一層留意してもらいたい旨を申し入れる。(高原)
13. 「山の日」制定関連の動きについて(西村・萩原)  
「山の日」制定協議会は発展的に再構築する。新組織のために「世話人会」をつくり「連合事務局」を置く。4月10日に超党派「山の日」議員連盟がスタートした。山の日を制定し祝日とすることを目的とし、会長に衛藤征士郎衆議院議員、幹事長に丸川珠代参議院議員などが就任した。  
また、高尾山で「山の日」集会を行なうなど、「山の日」制定に向けた動きが活発化している。
14. 平成25年度(第15回)「秩父宮記念山岳賞」推薦募集をホームページ、会報で広報する。(西村)
15. 『山岳』第百八年(2013年)について(節田)  
新しく各委員会の活動報告を掲載するほか、海外登山の記録や調査・研究などを掲載する。
16. 国土地理院「電子国土賞2013」の推薦募集がホームページで公開された。推薦募集期間は8月1日から9月20日。(高原)
17. 群馬県から谷川岳危険地区での登山禁止(3月22日~4月30日)

の連絡があった。(高原)

18. 株プラネットライツより『男の隠れ家』別冊『日本山岳史』(仮)への写真資料貸出について依頼があり、了承した。(高原)
  19. キャシヤール峰南ビラー初登攀に成功したキャシヤール登山隊2012(花谷泰広、馬目弘仁、青木達哉)が、ピオレドールを受賞した。(萩原)
  20. 会報「山」4月号について(節田)  
「放射線と登山道」(浦添嘉徳)、「絵本『アルバータ山のピッケルものがたり』出版にあたって」(芳賀淳子)などを掲載。
- 【今後の予定】
1. 小島烏水祭(4月13日~14日) 四国支部
  2. 高尾山「山の日」の集い(6月2日)、「山の日」制定協議会
  3. 第29回全国支部懇談会(10月20日(日)~21日(月)) 静岡支部
  4. 監事監査(5月13日)、常務理事会(5月13日)、理事会(5月15日)
  5. 支部長会議・総会・臨時理事会(6月15日)
  6. 富士山測候所を活用する会総会(5月26日)
  7. 国立登山研修所の事業計画(別紙)
  8. 『世界の山岳大百科』(山と溪谷社)を会員に割引販売の予定
- 平成25年度第2回(5月度)理事会 5月15日 集会室  
出席者 尾上会長、吉永・西村各副会長、高原・森・小林各常務理

事、野澤・中山・永田・萩原・節田・川瀬・古野各理事、平井監事

欠席者 浜崎監事

【審議事項】

1. 平成24年度事業報告(案)および収支決算報告(案)について(高

原・小林)

別添資料により担当常務理事が説明し、詳細に検討された。(承認)

2. 平成25・26年度役員(案)等について(高原)

別添資料に示す役員案(4月度に承認)を再確認。(承認)

3. 支部長の交代について(高原)

・北海道支部・新支部長 西山泰正(13345)、退任 滝本幸夫(5993)

・静岡支部・新支部長 大島康弘(9379)、退任 久保田保雄(6270)

・岐阜支部・新支部長 高木基揚(8016)、退任 早田道治(5626)

・福島支部・新支部長 小林正彦(12649)、退任 大谷司(9269)(承認)

4. 大ネパール展(在日ネパール大使館主催)協賛について(高原)

協賛金5万円を支出する。(承認)

5. グーグル(株)よりのグーグル・ストリートビュー「山」編の制作協

力依頼について(高原)

無償ボランティアでの協力は困難。(否決)

6. 入会希望者について(高原)

19名の入会希望者があった。(承認)

【報告事項】

1. 監事監査が5月13日に実施された。特に指摘はなかった。(小林、高原)

2. 支部長会議を6月15日(土)10時30分より当会ルームで開催する。(高原)

3. 寄付金報告について(小林)

遭難した遺族から10万円の寄付があった。

4. 群馬支部設立準備について(西村)

5月24日に設立準備会を開催し、夏に設立を予定。

5. 平成25年度子どもゆめ基金への対応について(永田)

5月14日、関係者が打ち合わせを実施。今後は、理事会直轄で「子どもゆめ基金プロジェクトチーム」(リーダー永田)を発足、

サイト「親子で楽しむ山登り」制作の会計や制作チームを管理する予定。

6. 旅行業法に基づく「募集の手引き」について(高原)

別添に示す小冊子を、支部、委員会、同好会へ配信し、会員にはホームページに掲載し、メルマガで告知した。

7. 賠償責任保険加入を継続した(高原)

8. YOUTH CLUBの活動について(森)
- 3年間で39歳以下の会員が倍増し、59歳以下の新入会員も増加している。
9. 4月27日に山研の開所作業を行ない、補修すべき箇所などが確認された。(森)
10. 日本山岳ガイド協会から公開講座「百万人の山と自然安全のための知識と技術講座」の名義後援の依頼があり、了承した(高原)
11. 非会員から、自費出版制作にあたり、「山岳」の表紙の掲載許可願いがあり、了承した。(高原)
12. 出版発行予定の『白馬ブック』に、『山岳』の表紙および写真の掲載許可願いがあり、了承した。(高原)
13. 4月14日、第1回小島烏水祭が四国支部で開催され、関係者約120人が参列して、成功裏に終わった。(高原)
14. 宮崎支部より、同支部員が4月20日玄武山で滑落(死亡)した事故の書面報告があった。(高原)
15. 国土地理院の生菓地名情報課長、小澤課長補佐が来室し、今後の協力事項などを確認した。(吉永)
16. 松原都民の森管理事務所より、同園の「冒険の森」長期閉鎖について連絡があった。(高原)
17. 残雪期の至仏山登山道閉鎖について、尾瀬保護財団から連絡があった。(高原)
18. 会報『山』5月号について。(節田)

19. 小島烏水祭の記事などの紹介があった。
  19. メトロ会に、日中韓三国学生交流登山に対して寄付を依頼する。(吉永)
  20. 5月18日、海外委員会で行なう「海外交流登山 富士山」には米口の2名が参加の予定。(川瀬)
  - 【今後の予定】
  1. 6月1日(土)～2日(日)、第67回ウエストン祭開催(尾上会長出席)
  2. 5月14日(火)、日本山岳ガイド協会の懇親会を開催(西村副会長出席)
  3. 6月2日(日)「山の日をつくろう! 栃木集会」開催(萩原出席)
  4. 5月20日(月)、加賀市長来室
  5. 5月28日(火)第2回梅棹忠夫・山と探検文学賞授賞式(中村保氏)(長野市)
  6. 昨秋発売したカシオ腕時計を5月20日より発送する。
  7. 6月27日(木)「山はみんなの宝」憲章」制定発表大会
  8. 5月28日(火)「山の自然と文化を語る会」セミナー開催
  9. 7月6日(土)～7日(日)自然保護全国集会(於立山)自然保護委員会、富山支部
  10. 6月2日(日)第56回針ノ木岳慎太郎祭
- 平成25年度第3回(6月度)理事会 6月12日 集會室
- 出席者 尾上会長、吉永・西村各副会長、高原・森・小林各常務理

事、野澤・中山・永田・萩原・節田・川瀬・古野各理事、平井監事

欠席者 浜崎監事

オブザーバー 柏編集人

【審議事項】

1. 当会主催の全国安全登山実技講習会実施に伴う、日本スポーツ振

興センター国立登山研修所の名義後援依頼について(森)

9月に釧路夏山前線基地、26年3月に国立登山研修所で全国規模の講習会を行なうため。(承認)

2. 高松観光コンベンション・ビューローからの助成金があり、受入

れたい(四国支部)。(小林)(承認)

3. 支部長の交代について(高原)

・千葉支部・新支部長 諏訪吉春(14255)、退任 篠寄仁(7343)

・山形支部・新支部長 粕谷俊矩(9595)、退任 渡辺誠(1

2190)

・山陰支部・新支部長 中井俊一(9772)、退任 白根一(8

228)

・越後支部・新支部長 橋本正巳(7758)、退任 山崎幸和

(5403)

(承認)

報告

4. 国土地理院の登山道調査依頼などに対応するため、ワーキンググ

ループ(国土地理院対応WGリーダー…宮崎紘一会員)を新設する。また、5月に発足した「子どもゆめ基金プロジェクト」の名称を変更し、「家族登山普及ワーキンググループ」とする。(高原)(承認)

5. 入会希望者について

28名の入会希望者があった。(承認)

【報告事項】

1. 平成25年度通常総会返信状況について(高原)

現会員数5177名、6月11日現在、出席予定者および委任が3566名あり、過半数を満たし、定足数に達している。

2. 平成25年度支部への運営交付金、事業補助金について(小林)

運営交付金1000円、事業補助金1500円(上限)を支部の会員数に応じて支払う。

3. 寄付金、助成金受入れについて(小林)

高尾の森づくりへの寄付金4件35万円があり、2名の永年会員から寄付があった。

また高松観光コンベンション・ビューローから助成金が25万円あった。

四国支部の小島鳥水顕彰碑建設への募金は、6月12日時点で392万円になった。

4. 「山の日」制定PT報告(西村、萩原)

超党派「山の日」制定議員連盟が発足し、6月11日現在で99名

が加盟している。

山岳5団体による「山の日」制定協議会を発展的解消し、全国的な「山の日」制定協会を設立する。また、高尾山で「山の日」アピールの集いがあつたほか、広島や栃木、宮城、富山、山梨、名古屋などでイベントの開催が予定されている。

5. 平成25年度子どもゆめ基金助成金交付決定について（永田）

ウェブサイトを「親子で楽しむ山登り」作成に対し、国立青少年教育振興機構からの交付額88万1千円（上限）が決定した。

6. 2013年度自然保護全国集会（7月6日～7日）が予定され、節田理事が出席予定。（高原）

7. 国土地理院から「国土電子賞2013」推薦団体および推薦案件募集について依頼があり、「山」およびホームページで募集をする。また本件の担当は、国土地理院対応WG（宮崎絃一リーダー）とする。（森）

8. 群馬支部設立の準備会が行なわれ、7月13日、設立総会を予定している。（高原）

9. 5月1日に北九州支部が、支部ルームを開設した。（高原）

10. 日本山岳博物館（仮称）構想について（森）  
ルーム検討PTは、山本リーダー、神崎日山協会長と森で、東京都幹部と面会をし、構想の打診をした。

11. 大ネパール展（在日ネパール大使館主催）が行なわれた。盛会だった。（高原）

12. 5月20日に寺前加賀市長が来室し、吉永、西村両副会長、高原理事が、「日本百名山」発刊50周年および「山の日」について会談した。（高原）

13. 東京都山岳連盟から公益社団法人の認証を受けた旨の通知があつた。（高原）

14. 富士山登山について、山梨・静岡県から「弾丸登山」自粛を周知させるよう依頼があつた。（高原）

15. 日本山岳協会から役員改選の通知があつた。（高原）

16. 会報「山」6月号について、「ロングトレイル・ウォークのススメ」、羽田評議員の追悼などの紹介があつた。（柏）

17. 本会のホームページに対してサイバー攻撃があり、ホームページアドレスを変更した。またYahooドメインのスパムメールが多かつたため、一時的に遮断してある。（永田）

#### 【今後の予定】

1. 支部長会議 6月15日

2. 臨時理事会 6月15日総会終了後

3. 内閣府へ平成24年度事業、決算報告 6月末まで

4. PT、WGリーダー会議 6月27日18時30分

5. 委員長会議 6月28日18時30分

6. 同好会連絡会 7月1日18時30分

7. 常務理事会 7月3日19時、理事会 7月10日19時

8. 役員新旧懇談会 7月25日18時30分

9. 第9回山の博覧会（山梨支部） 6月29日10時
10. 第1回夏山フェスタ名古屋（「山の日」制定協議会ほか） 6月29日（土）30日（日）
11. 樺平ビクターセンター開館式（黒部市、環境省） 6月30日（日）（山田富山支部長出席）
12. 九州五支部懇談会（主管 福岡支部） 9月28日（土）29日（日）
13. 山岳4団体懇談会 7月17日（水）19時

◎平成25年度通常総会

6月15日（土）午後2時

東京都千代田区六番町 主婦会館「プラザエフ」

出席者 136名、委任状出席者名3480（会員数5083名）

議案

1. 平成24年度事業報告案
2. 平成24年度収支決算報告案
3. 平成24・25年度役員（理事・監事）承認案

冒頭、尾上会長は4年間の任期を振り返り、「会の復興と復権、日本山岳会が日本の登山界のリーダーシップを取り戻すべく努力した。道半ばではあるが、暗いトンネルから脱しつつある。新執行部には路線を継承し、トンネルを脱してほしい。会には高い能力を有する会員が多く、力を感じる」と、注文とエールを送った。

報告 ついで議案審議が開始され、いずれも原案通り可決承認された。総会終了後、臨時理事会が開かれ、森武昭理事を会長に選任した。

□平成25年度6月度 臨時理事会 6月15日（土）15時50分～16時15分

プラザエフ会議室

出席者 理事 森武昭、節田重節、黒川恵、古野淳、高原三平、吉川正幸、佐藤守、川瀬恵一、大槻利行、勝山康雄、直江俊式、野口いづみ、山賀純一、山田和人 監事 浜崎一成、吉永英明  
欠席者 落合理事

【審議事項】

1. 会長の選任

互選の結果、会長に森理事を選任した。（承認）

2. 副会長、常務理事の選任（会長）

互選の結果、副会長に節田、黒川そして古野各理事、常務理事に高原、吉川および佐藤各理事を選任した。（承認）  
（会長所信表明）

以下の審議に先立ち、森新会長より別添のとおり所信表明があった。

3. 理事の委員会担務について（会長）

①委員会担当理事

- ・ 公益法人運営委員会 直江
- ・ 財務委員会 吉川
- ・ 総務委員会 高原・佐藤
- ・ デジタルメディア委員会 佐藤

- ・山岳編集委員会 節田
  - ・会報編集委員会 節田
  - ・英文ジャーナル委員会 節田
  - ・図書委員会 節田
  - ・YOUTH CLUB (学生部、青年部、WV部) 古野、落合
  - ・集委員会 勝山
  - ・遭難対策委員会 川瀬
  - ・海外委員会 川瀬
  - ・医療委員会 野口
  - ・科学委員会 野口
  - ・自然保護委員会 山田
  - ・資料映像委員会 勝山
  - ・山岳研究所運営委員会 大槻
- (承認)
4. 理事のPT、WG担務等およびリーダーの選任(会長)
- ◎ 担当理事 ○ リーダー
  - ・ 110周年記念事業実行委員会
  - ◎ 黒川 ○ 尾上
  - ・ 会員増強・財政基盤検討PT
  - ◎ 黒川
  - ・ 山の日制定PT

- ◎ 山賀 ○ 萩原
  - ・ 会員サービスPT
  - ◎ 節田 ○ 節田
  - ・ 支部活性化PT ◎ 森 ○ 宮崎
  - ・ 家族登山普及WG ◎ 吉川 ○ 永田
  - ・ ルーム検討WG ◎ 高原 ○ 山本
  - ・ 国土地理院対応WG ◎ 佐藤 ○ 宮崎
  - ・ マッキンリーWG ◎ 吉川 ○ 大蔵
  - ・ 森づくり協議会・高尾の森
  - ◎ 吉川 ○ 河西
5. 副会長の序列 (会長)
- 会長不在等の場合における会務の円滑な執行を図るため、副会長の序列を名簿登載の順位の節田、黒川そして古野各副会長とする。(承認)
6. 理事会の付託事項 (高原)
- 常務理事会(構成員・会長、副会長および常務理事の7名は次の事項について専決承認し、理事会に報告する。(承認)
- ① 後援依頼・名義使用依頼

- ② J A C ロゴマーク使用許可
- ③ 図書・資料の引用、貸出許可
- ④ 関係団体、支部等の開催行事への派遣役員の選任

⑤ 職員の人事、給与

#### 7. 事務委嘱（高原）

吉川理事に日本山岳会本部所在の千代田区四番町5番4の「サ  
ンビュウハイツ四番町」の管理組合の理事を向こう2年間委嘱  
する。（承認）

#### 8. 理事会への出席（高原）

柏会報編集委員長（編集人）のオブザーバー出席。（承認）

#### 【今後の日程】

基本的に月1回、常務理事会（第1水曜18時）、理事会（第2水曜19時）  
開催

- 1. 7月度常務理事会7月3日(水)19時（変則）
- 2. 7月度理事会7月10日(水)19時

#### □平成25年度第4回（7月度）理事会 7月10日 集會室

出席者 森会長、節田・黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各

常務理事、川瀬・大槻・落合・勝山・直江・野口・山賀・

山田各理事、浜崎監事、

欠席者 吉永監事

報告  
オブザーバー 柏編集人、萩原「山の日」制定PTリーダー

議事に先立ち、森会長より挨拶があった。また、理事会の議事運営に  
ついて確認があった。

#### 【審議事項】

- 1. 評議員の選任について（森）

以下のとおり15名の候補者案が提案された。

田邊壽・村井龍一・宮崎紘一・山本良三・尾上昇・橋本清・成  
川隆顕・神崎忠男・小川武・豊田統亜・今村千秋・内田博・重  
廣恒夫・大谷亮・南井英弘（承認）

- 2. 秩父宮記念山岳賞審査委員会の委員の選任について（黒川）

9名の候補者案が提案された。（承認）

- 3. 海外登山助成金審査委員会の委員の選任について（古野）

10名の候補者案が提案された。（承認）

- 4. 群馬支部設立申請について（高原）

「支部に関する規程」第5条による必要書類により申請された。  
（32番目の支部）

- 5. 支部活性化の提案（支部所属新入会員入会金の一部支部への還元  
（設立月日）平成25年7月13日、（支部長）田中壮信（承認）

について（森）

別添資料により、平成25～26年度入会者を対象として、提案が  
あった。2年間の試行とする。（承認）

- 6. 入会希望者について（高原）

19名の入会希望者があった。（承認）

【協議事項】

1. 支部活性化の提案（支部企画に対する援助）について（森）内容を具体化し、次回（9月度）理事会で審議することとなった。

【報告事項】

1. 平成24年度事業報告書について、公益法人としてのすべての条件をクリアし、報告書を内閣府へ提出した。（吉川）
2. 平成25年度中に税額控除の認定を得られるよう申請を行なう予定（吉川）
3. 「山の日」制定協議会の活動状況について報告があった。（萩原）
4. 全国安全登山実技指導講習会（9月、3月実施）への参加を希望する学生に対しては、入会することを条件に、交通費の一部を会が負担することにした。（森、古野）
5. PT、WG、委員会の各メンバーを選任し事務局に報告する（7月末まで）。（高原）
6. PT、WGリーダー会議（6月27日）の開催状況を報告（高原）
7. 委員長会議（6月28日）の開催状況を報告（高原）
8. 同好会連絡会（7月1日）の開催状況を報告（高原）
9. 当会の組織図について見直しを行なった。（高原）
10. 「山」7月号は総会の報告があるため4ページ増え24ページとなる。（柏）
11. 岩橋崇至会員の写真展「大地の貌」名義後援申請があり、了承し

た。（高原）

12. 日本テレビより、「皇室日記」へ「山」よりの転載願いがあり、了承した。（高原）
  13. あづみ野ロータリークラブより「山の日」制定に関する当会HP等の転載願があり、了承した。（高原）
  14. 日本スポーツ振興センターから「安全登山ハンドブック2013」の配布依頼があった。（高原）
  15. 埼玉支部より、支部山行における事故（7月6日）報告があった。（高原）
  16. 黒部・樺平ビクターセンターが6月30日に開館した。（山田富山支部長出席）（高原）
- 【今後の予定】
1. 群馬支部設立総会 7月13日(土)
  2. 山岳4団体懇談会 7月17日(水)
  3. 新旧役員・評議員懇談会 7月25日(木)
  4. 日中韓三国学生交流登山 8月16日(金)～21日(水)
  5. 評議員懇談会 9月27日(金) 6. 全国支部懇談会（静岡支部）  
月20日(日)～22日(月)

■8月の理事会は夏休みのため休会。

□平成25年度第5回（9月度）理事会 9月11日 集会室

出席者 森会長、節田・黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各  
常務理事、川瀬・大槻・落合・直江・野口・山賀・山田各  
理事、浜崎・吉永各監事

欠席 勝山理事

オブザーバー 柏編集人

【審議事項】

1. 支部事業への助成金制度について（森）

支部活性化のため、平成25～27年度の支部事業（新規申請）への助成金制度が資料により提案された。（承認）

2. 「プロジェクトチーム等規程」制定について（高原）

会長が指示する特命事項を遂行するため必要に応じて設置するプロジェクトチーム及びワーキンググループの効率的な活動に資するため規程を制定する。（承認）

3. 小島烏水祭（四国支部）の管轄について（高原）

小島烏水祭は、平成26年度より日本山岳協会主催、四国支部主管とする。（承認）

4. 入会希望者について（高原）

33名の入会希望者があった。（承認）

【協議事項】

1. 日本山岳協会・東京都山岳連盟との関係について（森）

日本山岳協会からの団体加盟要請及び現在加盟している東京都

山岳連盟との関係の見直しについて、今までの経緯を含め今後の方向について、資料に基づき協議した。評議員懇談会での意見を踏まえて次回10月度理事会において審議事項としたい。

2. 上高地山研における水の確保について（大槻）

上高地山研の水源となっている善六沢からの飲用水等の確保が困難となっておりことから、水確保対策として、上高地右岸水道組合への加入による水道の利用等について具体化を検討することとした。

【報告事項】

1. 第4回（7月度）理事会（平成25年7月10日開催）議事録に記述

漏れがあり以下の追加があった。（高原）

「審議事項5・海外登山助成金について、次の2隊に対し助成金を交付する。①登高会（慶応大学山岳部OB会）による四川省横断山脈②ギリギリボーイズによるパタゴニア・フィッツロイ山群」

2. 「理事・理事会の職務と責任」について、監事から資料により説明

があった。（吉永）

3. 各PT・WGからの報告

①110周年記念事業（黒川）

8月29日、第3回準備会を開催した。第1次答申を10月常務理事会に行ないたいが、内容は山を含めてあまり絞り込まないようになりたい。国内事業、式典などについては1年前に決

めたいが、幅広く話を深めていきたい。骨子案を示す。

② 国土地理院対応WG (佐藤)

- ・ 国土地理院から、2万5千分の1地形図の見直しに伴う登山道情報の提供について協力要請があった。
  - ・ 電子国土賞2013 (国土地理院主催) は、現在までのところソフトウェア等の推薦がない。当会の締切りは過ぎているが推薦があれば、便宜を図りたい。
4. 第7回日中韓三国学生交流登山の実施状況等について資料により報告があった。(古野)
  5. 支部等における本年度の寄付金受け入れ状況について報告があった。(吉川)
  6. 税額控除申請の手続きを9月中に実施することについて報告があった。(吉川)
  7. 評議員及び理事による名誉会員推薦についての説明があった。(高原)
  8. 評議員懇談会を9月27日に開催する。(高原)
  9. 上高地山研テラスの手摺が腐食し危険なため、本年度予算に基づき改修工事の発注をした。(大槻)
  10. 福島支部からの設立年月日のHP記載の訂正依頼があり、確認の結果以下のとおり訂正した。「福島支部設立年月日・昭和22年12月7日」(高原)
  11. 102号室で保管の資料等保全のため、事務局において、空調管
12. 理と専用ノート設置によるセキュリティ対策を行なうこととした。(高原)
  12. 当会入会案内パンフを改訂した。(高原)
  13. 当会ルーム空調工事(今秋工事予定)は、現在、複数社から見積を取っている。(高原)
  14. 会費請求書式を来年度より改定する(払込先をゆうちょ銀行とする)。(高原)
  15. 本年度の役員名簿は9月中に発行予定である。(高原)
  16. 当会の理事会開催通知は、前月議事録に開催日・議題等記載して行なう。(高原)
  17. 樺平ビクターセンターにおける当会所蔵物展示の際の使用許可条件を変更した。(高原)
  18. 立山博物館より当会所蔵16ミリ「別宮貞俊の立山・黒部」の借用依頼があり承諾(高原)
  19. (株)日本郵趣出版より、当会所蔵書籍掲載許可申請があり承諾(高原)
  20. 小田原市より当会所蔵の辻村伊助に関する資料等の貸出依頼があり承諾(高原)
  21. (株)山と溪谷社より当会所蔵『山岳』よりの写真掲載願いがあり承諾(高原)
  22. エクアドル大使館・ヒマラヤ観光開発(株)よりの講演会等の名義後援依頼があり、営業行為部分を除く講演会について承諾。(高

原)

23. (一財) 日本山岳スポーツ協会等よりの第21回日本山岳耐久レースへの名義後援依頼があったが、自然保護、安全登山等の観点から検討を要するため、関連団体との意見等も踏まえて対応する。(高原)

24. 本年度、内閣府による立入検査が予定される。別添に示す検査内容につき、各委員会それぞれ担当理事に協力をお願いしたい。(高原)

25. 各支部に事業計画、報告に関する日程を通知する。(高原)

26. 長野県山岳遭難対策協会より山岳ヘルメット着用奨励山域の指定等があった。(高原)

27. 「山」9月号の案内及び広告掲載社募集について説明があった。(柏)

【今後の予定】

1. 第50回学生部マラソン大会 11月9日(土)

2. 平成25年度安全登山及指導者中央研修会 11月8日(金)～10日(日)

3. 第1回アジア国立公園会議(環境省)(基調講演 11月13日(水)於仙台)

4. 田淵行男記念館・3人による写真展 9月3日～3月23日

5. 次回理事会開催案内

□平成25年度第6回(10月度)理事会 10月9日 集会室

出席者 森会長、節田・黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各  
常務理事、大槻・落合・勝山・川瀬・直江・野口・山賀・  
山田各理事

欠席者 浜崎監事・吉永監事

オブザーバー 柏編集人

【審議事項】

1. 名誉会員の推薦について(森)

2名の候補者について推薦があったが、本年度については該当者なしとした。(承認)

2. 日本山岳協会・東京都山岳連盟との関係について(森)

9月理事会での協議および評議員懇談会の意見を踏まえ、現時点では日本山岳協会への加盟は見送ることとする。ただし、日本の登山界が抱える問題を検討する連絡協議会(仮称)構想には積極的に参画し、必要に応じて他の山岳団体と共に実行組織を設けることに賛同する。

東京都山岳連盟については、公益法人制度改革等状況が大きく変わったこと、また支部との重複加盟となることも考慮し、退会することとした。(承認)

3. 広島支部への重複図書寄託について(高原)

広島支部の図書室充実に協力し、本部所蔵の重複図書を寄託することとした。(承認)

4. 空調工事業者について（佐藤）

本部事務室等の空調工事に関して複数社から提出のあった見積書等を検討し、適切と思われる業者（三菱電機システムサービス㈱）を選定した。（承認）

5. 入会希望者について（高原）

12名の入会希望者があった。（承認）

【協議事項】

当会の安全登山対策・事故対策について（黒川）

遭難対策委員会にて年内に具体案を作成することとし、前提となる基本的方向性について協議した。

【報告事項】

1. 各PT・WGについて

(1) 110周年記念事業（黒川）

第一次答申（骨子）を資料に基づき報告があった。

(2) 山の日制定PT（山賀）

「山の日」制定協議会の最近の動向について報告があった。

(3) 家族登山普及WG（吉川）

教材開発の進捗状況等について報告があった。

(4) 国土地理院対応WG（佐藤）

国土地理院から登山道調査への協力要請があり、東海支部が調査を実施した。

(5) マッキンリーWG（吉川）

マッキンリーにおける気象観測の経緯と今後の予定について報告があった。

2. 当会への9月度寄付について（吉川）

2件の寄付金受け入れ報告があった。

3. 当会への個人寄付の税制優遇措置について（吉川）

9月27日、内閣府に申請した。またその概要についての説明があった。今後は会員向けに説明資料を作成するとの報告があった。

4. 平成25年度秩父宮記念山岳賞の推薦状況について報告があった。（黒川）

5. YOUTH CLUB 全国安全登山実技指導者講習会について（古野）

実施状況については、「山」10月号に掲載する。

6. 平成25年度評議員懇談会を9月27日(金)、評議員12名と常務理事会メンバー6名の18名が出席し開催した。（高原）

7. 電子国土賞の応募状況について（佐藤）

第2回電子国土賞について、当会からの推薦はなかった。

8. プラハ国際アルピニズム・フェスティバル開催について

11月21日(木)～24日(日)プラハにおいて開催され、中村保名誉会員が講演する。また、その資料内容の報告があった。

9. 東京都写真美術館より当会所蔵資料の借用願いがあり許可した。（高原）

10. 日本山岳遺産基金より第4回日本山岳遺産サミットへの名義後援依頼があり、承諾した。(高原)

11. (株)TBSビジョンより横有恒氏のアルバータ登山の写真使用願いがあり許可した。(高原)

12. 日本山岳スポーツ協会等よりの第21回日本山岳耐久レースへの名義後援について(高原)

本年度は、登山マナー、山岳環境保全に配慮すること、また、実施報告書を受領することを条件として名義後援を承認した。来年度以降については、今年度の実施報告を受けて改めて検討することとした。

【今後の予定】

1. 当会創立記念日10月14日(月)
2. 新入会員オリエンテーション10月26日(土)13時30分～
3. 晩餐会12月7日(土)
4. 支部長会議12月7日(土)10時30分～
5. 第4回日本山岳遺産サミット10月16日(水)
6. 第14回ライチョウ会議 11月3日(日)～5日(火)於：南アルプス市
7. 屋久島世界自然遺産登録20周年記念シンポジウム in 東京10月20日(日)

□平成25年度第7回(11月度)理事会 11月13日 集会室

出席者 森会長、黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理

事、大槻・落合・勝山・川瀬・直江・野口・山田各理事、  
浜崎・吉永各監事

欠席者 節田副会長・山賀理事  
オブザーバー 柏編集人

【審議事項】

1. 平成25年度秩父宮記念山岳賞推薦について(黒川)  
10月25日に開催された秩父宮記念山岳賞審査委員会で2件(3名)が推薦された。(承認)  
・立山連峰における越年性雪渓研究及び日本初の現存氷河の発見

飯田肇(当会会員)・福井幸太郎(非会員)  
・日本人初8000メートル峰14座完全登頂  
竹内洋岳(元会員)

2. 旅費等の寄付に関する取扱いについて(吉川)  
日本山岳会会員が会の事業のため個人が負担して支出する旅費等を会への寄付金とする場合の取り扱いについて定めた(会員からの旅費等の寄付に関する要領)。(承認)
3. 入会希望者について(高原)  
14名の入会希望者があった。(承認)

【協議事項】

1. 上高地山研水対策について(大槻)  
水道導入に伴う上高地右岸水道組合、工事業者、関係省庁との

打合せ等について協議した。

【報告事項】

1. 各PT・WGから、現在までの進捗状況等についての報告
  - (1) 110周年記念事業（佐藤）
  - (2) 山の日制定PT（森）
  - (3) 会員増強・財政基盤検討PT（黒川）
  - (4) ルーム検討WG（高原）
  - (5) 支部活性化PT（森）
2. 財務関係の報告（吉川）
  - (1) 家族登山普及WG
  - (2) YOUTHCLUB関係
  - (3) 高尾の森づくりの会の会計
  - (4) 中間の内部監査の実施（12月13日予定）
  - (5) 平成26年度事業計画と予算
3. 「当会への寄付の税制優遇措置」について（吉川）

内閣府から10月15日付で要件を満たしていることの証明通知があった。
4. 日本山岳協会と、今後の連絡協議に関して（高原）

11月19日に打合せを行なう。
5. 新入会員オリエンテーションについて（高原）

新入会員26名が参加し、10月26日開催された。
6. 青森支部創立20周年記念式典について（高原）

東北・北海道地区集会在、10月12～13日にむつ市で開催され、約1000人が参加した。

7. 第29回全国支部懇談会について（佐藤）

10月20～21日に静岡市で開催され、約200名が参加した。
8. 「沢登り同好会」を同好会に登録（代表者直江俊式）した。（高原）
9. パソコンプロジェクトの購入を決めた（高原）
10. 日本山書の会から『山岳』掲載画のコピー転載許可願いがあり承諾した（高原）
11. 長野県遭難防止対策協会から「山岳遭難防止アドバイザー」設置の通知があった（高原）
12. 日本山岳会山岳保険について（吉川）

会報『山』の広告面を拡大するなど広報を強化する。
13. 海外登山基金による助成を受けた慶応大学の中国四川省横断山脈登攀隊が4つの未踏峰に初登頂した（吉川）
14. 2013・2014年役員・委員会名簿を発刊した（高原）
15. 平成25年度の新永年会員は46名となる（高原）
16. 学生部主催の第50回マラソン大会について（古野）

11月9日に皇居周辺で開催され、約1200人が参加した。
17. 第17回全国山岳博物館連絡会議について（勝山）

11月9日に開催され、全国から7博物館が参加した。
18. 『山』11月号について報告があった（柏）

【今後の予定】

1. 年次晩餐会12月7日(土)
2. 支部長会議12月7日(土)10時30分
3. 日本山岳文化学会11月16日(土)～17日(日)
4. 植村冒險館展示「冒險家の押入れ」10月25日(金)～1月19日(日)
5. 日本ヒマラヤ協会2013年華甲望年会12月14日(土)18時
6. 日本勤労者山岳連盟望年会12月7日(土)18時

☆平成25年度年次晩餐会

12月7日(土)

東京・品川プリンスホテル・アネックスタワー

出席者 466名

皇太子さまが出席されたのをはじめ、参加者は昨年に比べ40人近く増加した。冒頭、森武昭新会長は挨拶で皇太子さまご出席を喜ぶとともに、会員増強とリーダー育成の必要性、創立100周年記念の海外登山・学術調査登山の実施、「山の日」制定へ向けての法案上程活動などを語った。会は、物故会員への黙祷、新永年会員の会員章授与と挨拶、第15回秩父宮記念山岳賞受賞の飯田会員(学術分野・福井幸太郎さんと共同業績)と竹内洋岳さん(登山分野)の受賞挨拶、新人会員紹介と挨拶、全国32支部紹介などがとり行われ、盛況のうちにお開きとなった。また、写真展・図書交換会も同時に開催され、会場には皇太子さま撮影の「黎明の富士」が飾られた。翌日は平塚市の湘南平にて懇親山行が行われ、森会長をはじめ総勢70名が参加した。

□平成25年度第8回(12月度)理事会 12月11日 集会室

出席者 森会長、節田・黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理事、大槻・落合・勝山・川瀬・直江・野口・山賀・山田各理事、吉永監事  
欠席者 浜崎監事

【審議事項】

1. 全国「山の日」制定協議会への団体加入について(森)  
全国「山の日」制定協議会(会長 谷垣禎一)が設立され、当会に団体会員として加入要請があり応じることとする。なお、会費は3口(1口3万円)9万円を支払うこととする。(承認)
2. 寄付の申込みについて(吉川)  
独立行政法人青少年育成機構および公益社団法人国土緑化推進機構から寄付の申し出について事前申請があり、それに応諾したい。(承認)
3. 入会希望者について(高原)  
11名の入会希望者があった。(承認)

【協議事項】

1. 当会主催山行に係わる登山計画書等の提出について(川瀬)  
標記について、遭難対策委員会が作成した別添資料に基づき協議し、さらに検討することとした。
2. 委員会規程改正について(高原)  
当会の目的に沿った委員会活動に資するため、委員会の業務内

答案が提示された。その案について各委員会で検討し、平成26年2月度の理事会に提案することとした。

【報告事項】

1. 各P.T・WGから現在までの検討状況・進捗状況について報告があった。

(1) 110周年記念事業(佐藤)

海外登山について集中的に検討しているとの報告があった。

(2) 山の日制定P.T(山賀)

超党派国会議員連盟が8月11日を国民祝日「山の日」とするため、次期通常国会に祝日法改正法案を上提する準備を進めていること、全国「山の日」制定協議会において個人会員を募集していることについて報告があった。

(3) 収益事業・会員サービス検討P.T(節田)

三百名山の編集進捗状況について報告があった(平成26年5月末発刊予定)。

2. 平成26年度事業計画と予算について(高原)

今後のスケジュールについて説明があった。

3. 寄付の受入について(吉川)

寄付金の受入5件および寄付金の事前申請6件について別添資料により報告があった。

4. 税額控除法人としてのまとめについて(吉川)

税額控除適用法人の税額控除に関する仕組み、旅費等の自己負

担額を日本山岳会に寄付する場合の取り扱い等について別添資料により説明があった。

5. 日本山岳協会との打合せについて(森)

10月度理事会での審議結果に基づき、11月19日、日本山岳協会と今後の協力態勢について話し合った。それらの経緯は、別添に示す内容で会報「山」1月号で報告する予定である(8ページ参照)。

6. 都岳連退会届について(高原)

10月度理事会での審議結果に基づき、本年度限りで退会する旨、届を提出した。

7. 110周年記念企画における海外遠征隊および募集型海外山行に

ついての留意点について別添資料により説明があった。(黒川)

8. 冬山天気予報について(古野)

JAC冬山天気予報(北アルプス北部・北アルプス南部・八ヶ岳)を12月19日～1月18日の間、配信することとした。

9. 支部長会議について(高原)

12月7日に開催した支部長会議の概要について報告があった。

10. 平成25年度年次晩餐会について(高原)

12月7日開催の平成25年度年次晩餐会は、会員約460名が参加し盛況であったとの報告があった。

11. 北区飛鳥山博物館からの冠松次郎に係る資料借用等の依頼があり

承諾した。(高原)

12. 土田幸雄会員（越後支部）からの会報「山」231号の記事転載願いがあり承諾した。（高原）

13. ㈱日展からの志賀重昂に係る図書等の使用申請があり承諾した。（高原）

14. 会報「山」12月号の発行について報告があった（節田）

【今後の予定】

1. 支部事務局会議 平成26年1月25日(土)～26日(日)
2. 海外登山基金助成登山計画締切 平成25年12月31日
3. 日本山岳協会 平成26年新春懇談会 平成26年1月18日(土)13時～

□平成25年度第9回（1月度）理事会 1月15日 集会室

【出席者】 森会長、節田・黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤・各

常務理事、大槻・落合・勝山・川瀬・直江・野口・山賀・

山田各理事、浜崎・吉永各監事

オブザーバー 柏編集人

議事に先立ち森会長より「新執行部で7ヶ月経過した。会員増強については、若い会員が増えつつある。なお一層強化すると同時に、110周年記念事業を実行に移していくときである。皆さんの協力をよろしく」との挨拶があった。

【審議事項】

1. ㈱エイジスの資料管理システム使用中止について（勝山）

資料映像委員会で使用している資料管理用システムは、経年に

伴いシステムの改善等が難しいことから、同委員会からの申請により使用を中止する。（承認）

2. 入会希望者について（高原）

11人の入会希望者があった。（承認）

【協議事項】

1. 会計・財務などの改善提案について（吉川）

稟議書の導入、会費の銀行口座引き落とし制度の導入、準会員（仮称）制度の導入、年度途中入会者の年会費の割引制度の導入などについて協議し、関係委員会等において検討することとした。

2. JAC主催山行における山行連絡および事故連絡フローについて

（川瀬）

遭難対策委員会において作成した別添フロー案について協議を行なった。

【報告事項】

1. 各PT、WGについて

(1) 110周年記念事業準備委員会（黒川）

海外登山を軸に検討を進めており、「110周年記念事業における海外遠征隊及び募集型海外山行についての留意点」、ブータンの登山に関連し有識者を招いて懇話会を開催すること等の報告があった。

(2) 会員増強・財政基盤検討PT（黒川）

会費の銀行口座引き落とし制度の導入、準会員（仮称）制度の導入、年度途中入会者の年会費の割引き制度の導入などについて検討を開始したとの報告があった。

(3) 支部活性化PT（森）

支部から申請のあった事業補助、支部リーダー育成のための講習会等について検討しているとの報告があった。

(4) ルーム検討WG（高原）

ルーム検討の状況について、またメンバーに河西瑛一郎（4502）と村井龍一（5091）の2会員を追加するとの報告があった。

(5) 家族登山普及WG（吉川）

HPに掲載予定の「親子で楽しむ山登り」について、概要の説明があった。

2. 公益社団法人国土緑化推進機構他3件の寄付金・助成金受入にかかわる事前申請報告および7件の寄付金受入があった。（吉川）
3. 2013年度期中往査報告（平成25年12月13日）について（吉永）

職務権限規程、会員管理システム、販売用物品の収支管理・在庫管理、ユースクラブ、親子登山等、幅広い観点から、監査状況についての報告があった。（吉永）

4. 今後の支部長、支部事務局会議の開催について、6月の支部会議は行なわず、9月に事務局会議を開催し、支部長にも出席してもらおう方向で検討しているとの報告があった。（高原）

5. 海外委員会から「2014年度富士山国際交流登山」実施計画の

概要について報告があった。（川瀬）

6. 2014年度晩餐会会場について京王プラザホテル（新宿）で検討しているとの報告があった。（高原）

7. 上高地山岳研究所内野管理人から退職願が提出されたことについて報告があった。（大槻）

8. 越後支部から第57回高頭祭への本部からの参加・講演について依頼があり、承諾するとの報告があった。（高原）

9. 国際山岳年プラス10シンポジウム2012の報告書が送付されたので、配布することについて報告があった。（高原）

10. 「富士山における適正利用推進協議会」から、冬山遭難防止に関する要望書が送付されたことについて報告があった。（高原）

11. 会報「山」1月号について（柏）

1月号の概要説明があった。その他、編集協力の奈良千佐子会員（12078）が退任し、後任に原邦三会員（9080）が  
あたる旨の報告があった。

【今後の予定】

1. 支部事務局会議1月25日(土)～26日(日)

2. 平成25年度事業・会計報告書提出依頼（支部・委員会等）1月24日

3. 同上提出期限 事業報告2月28日、会計報告3月31日（出来る限り早い提出）

4. ブータンの登山に関する第1回懇話会2月15日(土)14時～18時10  
4号室

5. 第8回森づくり連絡協議会の開催(広島) 3月21日～22日予定  
6. NPO富士山測候所を活用する会第7回成果報告会1月26日(日)

平成26年度第10回(2月度)理事会案内

日時 平成26年2月12日(水)19時より

場所 日本山岳会集會室

議題

1. 平成26年度事業計画予算案について
2. 海外登山助成金審査委員会からの提案について
3. その他

□平成25年度第10回(2月度)理事会 2月12日 集會室

出席者 森会長、黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理

事、大槻・落合・勝山・川瀬・直江・野口・山田各理事、

吉永監事

欠席者 節田副会長、山賀理事、浜崎監事

【審議事項】

1. 110周年記念事業推進体制について(黒川)

110周年記念事業実行委員会から実施予定事業および担当者が  
提示され、今後、各プロジェクトリーダーの下で内容を詰めて

いく。(承認)

2. 支部事業補助申請(広島支部)について(森)

標記に付き、支部活性化PT経由で申請があり、初年度分20万  
円を補助する。次年度以降の補助については、実績等を見て改  
めて検討する。(承認)

3. マッキンリー気象観測機材の購入資金の送金について(吉川)

一時中断していたマッキンリー気象観測を再開できることと  
なったので、指定寄付を受けていた気象観測機材の購入資金を  
アラスカ大学に送金する。(承認)

4. 第8回日本山岳会森づくり連絡協議会開催について(高原)

第8回日本山岳会森づくり連絡協議会を、本年3月21～22日に  
東広島市で開催する。(承認)

5. 入会希望者について(高原)

15人の入会希望者があった。(承認)

【協議事項】

1. 平成26年度事業計画書・予算書骨子案について(高原・吉川)

標記に付き、別添資料の説明を受け協議し、次回理事会におい  
て審議することとした。

2. 当会主催山行における山行連絡および事故連絡フローについて

(川瀬)

重大事故発生時の本部への連絡方法を盛り込んだフロー図を、  
遭難対策委員会において作成することとなった。

3. 理事職務権限規程について(吉川)

監査法人より2013年度期中往査で指摘があった、稟議書の作成・意思決定のプロセス明確化等について協議した。

4. 委員会規程について（高原）

第8回（12月度）に提案した各委員会の役割について、3月の理事会で審議したい。については各委員会において内容、表現等について検討依頼があった（2月末まで）。

【報告事項】

1. 資料映像委員会から、茨木猪之吉の絵画等の寄託先を、池田町立美術館からより活用が期待できる大町山岳博物館に変更する。

（勝山）

2. 寄付金・助成金受入れ事前申請2件および受入れ実績4件があつた（別紙）。（吉川）

た（別紙）。（吉川）

3. 会計・財務の改善提案に関し、会費の銀行口座引き落とし制度の導入、年度途中入会者の年会費割引制度の導入などについて、検討の途中経過報告があつた。（吉川）

4. 「山の日」制定議員連盟および「山の日」制定協議会の最近の動向について報告があつた。（森）

5. 日本登山医学会学術集会后援依頼があり、日本山岳会として後援する。（高原）

6. 集会委員会が企画する海外登山ツアーについて、会報「山」に掲載する参加者募集原稿を修正した。（勝山）

7. 海外登山助成金の募集（12月締め）について、今期は応募がなかつた。

次回以降の募集広報のあり方等について検討を要する。

（古野）

8. 岸田恵理氏（長野県信濃美術館学芸係長）から、「心に響く信州の風景画名作選」図録（1993年発行、長野県信濃美術館）に収蔵の辻村伊助、高野鷹蔵の写真作品を著作に転載したいとの許可申請があり承諾した。（高原）

9. 日本山岳ガイド協会から、当会が名義後援した「百万人の山と自然 安全のための知識と技術公開講座」について、実施報告があつた。（高原）

10. 中国登山協会を当会が訪問することについて検討している。（高原）

11. 会報「山」2月号について報告があつた。（高原）

【今後の予定】

1. 第2回小島鳥水祭（当会主催・四国支部主管）4月13日（日）

2. 第34回日本登山医学会学術集会5月31日（土）～6月1日（日）

3. 日本勤労者山岳連盟第31回総会2月15日（土）～16日（日）

4. 都岳連主催「高所順応研究会」2月16日（日）

平成26年度第11回（3月度）理事会案内

日時 平成26年3月12日（水）19時より

場所 日本山岳会集会所

議題 1. 平成26年度事業計画書・予算書案について

2. その他

□平成25年度第11回(3月度)理事会 3月12日 集会室

出席者 森会長、節田・黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各  
常務理事、大槻・落合・勝山・川瀬・直江・野口・山賀・  
山田各理事、吉永・浜崎各監事

【審議事項】

1. 平成26年度事業計画書・予算書(案)について(高原・吉川)  
別添資料により担当理事が説明し、詳細に検討した。(承認)
2. 埼玉支部5周年記念チュール最東峰登頂とトレッキング遠征事業  
について(吉川)  
別添資料により担当理事が説明し、当会110周年記念事業の一環として実施すること及び参加隊員の旅費自己負担分について詳細に検討した。(承認)
3. 入会希望者について(高原)  
27人の入会希望者があった。(承認)

【協議事項】

1. 当会主催山行における山行連絡及び事後連絡フローについて(川瀬)

別添資料により支部・委員会等への周知を経てから実施する。  
また当資料の位置づけ等について協議した。

2. 委員会規定について(高原)

内容をさらに検討し、次回理事会において審議することとした。

3. 秩父宮記念山岳賞実施規程について(黒川)

今年度は従来通りとし、来年度以降に規程の見直しを検討することにした。

【報告事項】

1. PT、WG(110周年、「山の日」制定、家族登山、ルーム検討)から、その後の進捗状況について報告があった。(黒川、山賀、吉川、高原)
2. 関西支部からの支部事業補助申請について、補助の目的に沿った内容での再提出を要請した。(森)
3. 一般財団法人白神山地財団からの助成金受入れについて報告があった。(吉川)
4. 山研水道工事に関する関係省庁との調整状況・工事日程等について報告があった。(大槻)
5. 本部役員派遣依頼があった北九州支部、広島支部の行事に、会長が参加することとした。(高原)
6. 稟議書の導入、会費の銀行口座引き落とし制度の導入、理事の職務権限規程、理事会運営方法の改善等について、検討状況の報告があった。(吉川)
7. 平成26年度新永年会員該当者は49名であるとの報告があった。(高原)
8. 除籍予定者が52名(平成26年3月末会費滞納の場合)との報告が

あった。(高原)

9. 会員名簿発行は、所要経費・個人情報等の取扱い等の問題があるため、全会員配布用の会員名簿は発行せず、支部・本部委員会等、事務上必要な場合に限定して、会員番号・氏名・連絡先のデータを提供すると報告があった。(佐藤)

10. 新入会員オリエンテーションを支部において随時実施できるように、本部作成の資料を支部に提供する。本部においては、7月5日(土)に実施する。(佐藤)

11. 会員管理システムのシステム管理者を変更するとの報告があった。(高原)

12. 当会所蔵の図書を、東京都写真美術館において展示するため貸出した。(節田)

13. 事務局職員の平成26年度職員給与について報告があった。(高原)

14. 新コピー機を導入したことについて報告があった。(高原)

15. 山岳関係者を招いてネパール大使レセプションが開催され、当会から役員4名参加した。(高原)

16. 日本勤労者山岳連盟から第31期役員名簿が送付された。(高原)

17. ネパール山岳協会から新役員の名簿が送付された。(高原)

18. 尾瀬を守る会から環境大臣に提出した提言が送付された。(高原)

19. 会報2月号訂正及び3月号の発行について報告があった(節田)

【今後の予定】

1. 日山協との連絡会3月17日(月)

2. 檀有恒氏記念碑説明文看板除幕式(北九州支部) 3月21日(金)

3. 内閣府への平成26年度事業計画書、予算書提出 3月28日(金)

4. 全国支部会議(支部事務局会議) 9月20(土)～21日(日)

平成26年度第1回(4月度) 理事会案内

日時 平成26年4月9日(水) 19時より

場所 日本山岳会集會室

議題 1. 寄付金等事前申請について

2. その他



















# 支部の活動報告

## 北海道支部

2013年度の活動は、公益事業としては残りわずかとなった「オホーツク分水嶺踏査」をはじめ、「第14回自然児学校」や高山植物の盗掘防止パトロール、四季を通しての登山教室などを実施した。一方、共益事業では支部会員の登山技術向上や会員・会友の同志の交流を深めるため雪崩講習会、定例山行、沢登りおよび岩登りの登山技術研修、山スキーなどの活動を展開した。また、年7回の支部通信、会報「ヌプリ」の発行、親睦のための集会の開催などの事業・行事を企画、実施した。

### 《会議》

\*4月13日(土) 支部総会 2012年度事業報告、会計報告、2013年度事業計画、予算案、支部役員改選などについて審議、議案すべてを承認。出席110名(当日出席48名 委任状62名)。

\*定例の常任委員会 4月～3月毎月1回開催。10名～14名の常任委員出席。前月の活動報告と翌月以降の事業計画等の協議。

### 《山行・野外活動》

#### \*雪崩講習会

《ヒーコン操作講習会》(札幌地区) 12月13日(金) 札幌・中島公園スポーツセンター 12名参加(内講師4名)(函館地区) 2014年1月24日(金)～25日(土) 森町道立森少年自然の家/駒ヶ岳周辺 17名参加(内講師3名 会員外参加者8名)  
《札幌地区》2014年2月1日(土)～2日(日) 札幌・りんゆうホール/藻岩山スキー場 参加者29名(内講師8名 会員外参加者2名)(帯広・北網地区) 2014年2月15日(土)～16日(日) 芽室町・新嵐山荘&新嵐山スキー場周辺 参加者12名(内講師、オブザーバー3名 会員外参加者3名)。

#### \*岩登り研修会

5月15日(水) 小樽・高谷クライミングジム 14名、6月5日(水) 小樽赤岩 14名 9月11日(水) 小樽赤岩 9名、10月9日(水) 小樽赤岩 11名。

#### \*沢登り研修会

8月7日(水)～8日(木) ニベソツ山音更川16の沢 11名、

9月6日(金) 無意根山白水沢 9名。

\* 定例山行

「夏山山行」 7月10日(水)～11日(木) 新冠富士 5名、8月7日(水)～8日(木) ニベソツ山7名、8月17日(水)～18日(木) オプタテシケ山 9名、9月18日(水)～19日(木) 西別岳↓摩周岳 16名、10月26日(土)～27日(日) 「お月見山行」七飯岳、八幡岳↓笹山↓元山 35名、「山スキー山行」2014年1月18日(土) ルスツ貫気別山 16名、2014年1月28日(火) 朝里岳東尾根 18名、2014年2月8日(土)～9日(日) ぴっぶスキー場・チトカニウシ山 8名、2014年2月25日(火) 塩谷丸山 10名、2014年3月1日(火) 日勝ヒーク11名 「スノーシュー山行」2014年1月18日(土) 禪山 5名。

\* 同好会活動

「山スキー山行」 6月15日(土)～16日(日) 大雪山・北鎮岳 6名。

\* NHK登山教室

・4月～10月「日曜ゆつくり教室」カムイヌプリ、富良野岳、旭岳↓黒岳、サホロ岳、余市岳 シヤクナゲ岳 ・5月～10月「水曜ゆつくり教室」音江山、オロフレ山、オダツシユ山 ↓伏美岳、ペンケヌーシ岳、カムイヌプリ、空沼岳 ・5月～10月「週末は山ガール教室」塩谷丸山、オロフレ山、雨竜

沼湿原、空沼岳、黒岳、イワオヌプリ↓大沼・2014年1月～3月「スノーシュー教室」馬追山、利根別休養林、野牛山、中山峠、当別丸山、熊見山。

※毎回4～6名の支部会員が講師、スタッフとして参加。

《プロジェクト・地域振興活動》

\* オホーツク分水嶺踏査

①4月13日(土) 海別岳↓1193m 3・3km、2名 ②4月27日(土)～5月1日(水) ウィー

ヌプリ↓知床岬 6・8km、3名 ③2014年3月21日(金)

～24日(月) 知床別岳3名(補3名) ④2014年3月21日

(金)～24日(月) 知床峠↓羅臼岳 0・9km、2名(補3名)。

※③と④は悪天のため途中で踏査断念。

\* 第14回自然児学校

2013年7月26日(金)～28日(日) 国立日高青少年自然の家からまつキャンプ場で参加児童9名、支部会員、会友、自治体関係者や関連講師等30名で実施。主な活動内容はツリー・クライミング、星座の座学、北日高岳(751m)登山、キャンプ・ファイヤー。少人数だったが充実した自然を楽しむ生活を体験。

\* 高山植物盗掘防止パトロール

5月23日(木) 自然保護研修会 札幌エルプラザ 支部会員22名参加、6月1日～10月10日 大雪山系・十勝連峰 延べ

32名で158回実施、6月29日(土) 官民合同パトロール  
上川総合振興局 大雪山系ニベソツ山。

\*日高山脈幌尻岳清掃登山／幌尻山荘排泄物人力運搬事業(地元団体の事業に協力)

9月21日(土)～23日(月) 総勢41名参加、内3名が支部会員。

\*支笏湖復興の森づくり(NPO法人に協力)

6月25日(火) 下草刈り 支部会員3名参加、10月6日(日) 生長観察会 支部会員5名参加。

《広報・出版活動》

\*支部通信 年7回発行 会員・会友および日本山岳会本部・各支部などにメールまたは郵便で約300部配信・発送。

\*北海道支部会報『スプリ』4月1日発行 山に関する紀行文、エッセー、山の歴史、評論などを掲載。

《その他行事・集会》

\*各種集会 「夏季交流会」8月31日(土) 41名参加 オホーツク分水嶺報告スライド上映 「支部年次晩餐会」12月14日(土)

58名参加 自然児学校記録ビデオ上映 「新年交流会」2014年1月15日(水) 36名参加 「北海道山岳団体交流会」

10月3日(木) 札幌市内で開催 北海道山岳連盟、日本山岳会北海道支部、札幌山岳連盟、北海道山岳ガイド協会、日本

ヒマラヤ協会、HAT-J北海道支部、北海道道央地区勤労

者山岳連盟、北海道勤労者山岳連盟の8団体参加、北海道支部からは6名参加。

(藤木 俊三)

## 青 森 支 部

平成25年度の青森支部は、支部創立20周年を迎え、記念事業である県境踏査と10月の記念式典に向け、支部会員が結集して取り組んだ一年であった。記念式典においては、森会長をはじめ全国各支部から合わせて13名の参加者があり、盛大に行なうことができた。

また、地域社会に貢献できる活動として、白神山地ブナ林再生事業を継続して行なうと共に、北八甲田山登山道整備、八甲田山遭難防止スキューコース・ポール立てなどにも参加した。事故もなく、無事終了できたことを関係各位に感謝したい。

《会議》

\*5月18日(土) 通常総会(平成24年度事業・決算報告・会計監査報告、平成25年度事業計画・予算案) 青森市アラスカ会館 出席32名(当日出席14名、委任状数18名)。

\*10月6日(日) 青森支部20周年記念式典打ち合わせ会議 青森市ホテルチトセ 出席11名。

\*10月12日(土)～13日(日) 支部20周年記念式典、東北・北海

道地区集会（プラザホテルむつ） 参加113名。

《山行・野外活動》

\* 4月27日（土）～4月29日（月） 支部春山山行 南八甲田連峰  
（酸ヶ湯駐車場上テント設営） 参加2名。

\* 4月29日（月） 20周年記念青森県境踏査（矢立峠～坂梨峠）  
参加5名。

\* 5月6日（月） 20周年記念青森県境踏査（小舟戸～寺下県道）  
参加3名。

\* 6月22日（土） 20周年記念青森県境踏査（四角岳山頂尾根）  
参加4名。

\* 7月7日（日） 青森ウエストン祭（新郷村） 参加3名。

\* 7月20日（土） 20周年記念青森県境踏査（久吉温泉～白地山）  
～大川岱分岐） 参加3名。

\* 8月3日（土）～4日（日） 20周年記念青森県境踏査（十和田  
湖県境～カヤック） 参加3名。

\* 11月22日（金） 20周年記念青森県境踏査（目時～田子茶屋）  
参加4名。

\* 11月23日（土）～24日（日） 支部晩秋山行 北八甲田（仙人  
岱小屋） 参加7名。

\* 12月29日（日）～1月2日（木） 支部冬山山行 北八甲田（仙  
人岱小屋） 参加4名。

\* 1月11日（土）～12日（日） 山岳スキー研修 竹越会員山荘

参加12名。

《プロジェクト・地域振興活動》

\* 6月29日（土）～30日（日） 白神山地ブナ林再生事業 参加  
7名。

\* 7月6日（土） 北八甲田山登山道維持活動 参加4名。

\* 7月7日（日） 高山植物盗掘防止パトロール 八甲田連峰  
参加3名。

\* 8月25日（日） 北八甲田山登山道維持活動 参加11名。

\* 9月2日（月） 北八甲田山登山道維持活動 参加8名

\* 2月25日（火）～26日（水） 八甲田山スキーコース・ポール  
立て 参加8名。

\* 3月27日（木）～28日（金） 八甲田山スキーコース・ポール  
立て 参加5名。

《その他の行事、懇親会》

\* 11月16日（土） 支部年次晩餐会 青森市ワシントンホテル  
参加13名。

（須々田 秀美）

岩手支部

当支部の会員数は67名（内県外在住者15名）、会友が6名であ  
る。県外会員・会友は、東北をはじめ北海道、関東、近畿圏に

も及んでおり、こうした遠方の方々との交流は、支部通信への寄稿や晩餐会でお会いした折に、親しくご交誼を願っている。

当支部は支部結成当初から県山岳協会と連携を密にし、県山岳協会長をはじめ事務局や指導員など、主要な役職を担当してきた。現協会長も支部会員である。

7月1日の岩手山山開きにはJACの特大支部旗を高らかに掲げて山頂を一周し、他団体の旗を圧倒した。夏季岩手山小屋管理および荷上げにも参加している。また、裏岩手連峰開山祭では、地元支部会員が実行委員として開山祭を運営しており、岩手支部は後援団体として協力している。

#### 《会議》

\* 4月8日(日) 支部総会・24年度事業報告・決算報告、25年度事業計画・予算案などを審議(出席者18名、委任状40名)。

\* 12月14日(土) 支部全員協議会 26年度山行計画 参加11名。

\* 支部事務局会議 3回実施、委員会 1回実施。

#### 《山行・野外活動》

\* 4月27日(土) 「石上山」 4月例会山行 参加8名。

\* 5月18日(土) 「田代山清掃登山」 5月例会山行・公益 参加2名。

\* 6月8日(土) 「三ツ石山パトロール」 6月例会山行・公益 参加5名。

\* 6月17日(土) 「残雪裏岩手連峰開山祭」後援・公益 参加5

名。

\* 7月1日(火) 「岩手山山開き」参加2名。

\* 7月13日(土)～14日(日) 「秋田駒ヶ岳自然観察会」7月例会山行・公益 参加10名。

\* 7月20日(土) 「三ツ石山パトロール」公益 参加6名。

\* 8月3日(土)～4日(日) 「岩手山八合目避難小屋管理」参加2名。

\* 8月10日(土) 「三ツ石山パトロール」公益 参加2名。

\* 9月14日(土) 「安比岳清掃登山」9月例会山行・公益 参加6名。

\* 9月27日(金) 「三ツ石山パトロール」公益 参加2名。

\* 10月12日(土) 「毛せん峠(湯の沢コース)」10月例会山行 参加3名。

\* 10月12日(土)～13日(日) 「29回東北・北海道集会」(青森県むつ市) 参加2名。

\* 11月2日(土) 「駒ヶ岳(金ヶ崎)」11月例会山行 参加4名。

\* 12月15日(日) 「国見山」忘年山行 参加11名。

\* 1月11日(土) 「朝島山」1月例会山行 参加6名。

\* 3月15日(土) 「岩神山」3月例会山行 参加3名。

#### 《広報・出版活動》

\* 支部通信 9月・3月の2回発行。

《その他の行事・懇親会》

- \* 4月6日(土) 支部懇親会 参加16名。
- \* 12月14日(土) 支部晩餐会(忘年会) 参加11名。  
(菅原 敏夫)

## 宮城支部

今年度は役員改選の年に当たり、総会で承認された新しい執行体制でスタートした。支部活動の活性化と会員増を目指して3年前から実施してきた一般公募登山が定着し、会員と公募登山経験者との交流山行を行ないながら「支部友」制度のあり方について時間をかけて検討した。この結果、26年4月から「支部友会」が発足する運びとなっている。また、従来の支部報「宮城山岳」を隔年発行とし、これを補完する情報誌「宮城山岳通信」の年2回発行をスタートし、情報共有の迅速化に努めた。さらに、公益に資する事業として、宮城県の協力を得て登山道などの空間放射線量測定を行ない、東日本大震災で発生した福島第一原子力発電所事故による、宮城県内山岳地域の放射能汚染実態を把握した。

- 《会議》
- \* 4月6日(土) 通常総会 KKRホテル仙台 事業報告・計画、決算・予算、役員改選案などを審議。出席49名(当日出席12名、委任状37名)。その後懇親会。

- \* 定例役員会 4月18日(金) 4月定例役員会 仙台市シルバーセンター 支部長、副支部長、各種委員会委員長、委員、事務局などの新役員20名中11名出席。以降、毎月原則第3金曜日に、午後6時半から同一会場で開催 延べ129名出席。
- \* 3月4日(火) 臨時役員会 支部友制度のあり方についての議論を総括 7名出席。

\* 山行・集会委員会、会報・編集出版委員会などを随時開催 山行・集会委員会は「支部友制度」の検討を精力的に実施。会報・編集出版委員会は新しい試みである情報誌「宮城山岳通信」の創刊号、第2号を編集・発行。

### 《山行・野外活動》

- \* 一般公募登山(公益事業) 5回実施 延べ95名(会員を含む)参加。
- ・ 5月18日(土) 戸神山 28名参加、6月2日(日) 文字三山 24名参加 「山の日」制定記念山行を兼ねる。11月10日(日) 面白山(北) 16名参加、11月24日(日) 西大森山 18名参加、2月22日(土) 南面白山 9名参加。
- \* 月例山行 5月、6月、11月および2月は一般公募登山を兼ねて実施。8月18日(日) 夏山山行 蔵王連峰 放射線量測定を兼ねる 10名参加、9月22日(日) 初秋山行 深山・疣石山 放射線量測定を兼ねる 8名参加、10月15日(火) 中秋山行 栗駒山 放射線量測定を兼ねる 5名参加。

\*沢登り 8月4日(日) 柳小屋沢 5名参加

\*元旦登山 1月1日(水) 泉ヶ岳 有志13名参加

\*世界各地湿原保全対策事業(公益事業) 8月2日(金) 宮城

県環境生活部が主催する事業に会員6名を派遣。

\*仙台市立愛子小学校5年生の泉ヶ岳登山支援(公益事業)

9月4日(水) 仙台市立愛子小学校から5年生の校外活動で

ある泉ヶ岳登山の支援要請があり、登山の専門家として会員

3名を派遣。

#### 《プロジェクト・地域振興活動》

\*宮城県内山岳地域の空間放射線量測定事業(公益事業) 2

011年3月11日の東日本大震災により発生した、東京電力

福島第1原子力発電所の重大事故の影響を受け、宮城県内山

岳地域においても高レベルの空間放射線量が長期間継続する

ことが懸念された。このため当支部では、登山者の安全を確

保する観点から県内山岳地域の空間放射線量を測定すること

を役員会で決議し、宮城県の環境行政当局と協議した結果、

宮城県から測定器材の貸与を受け、測定業務を当支部が行な

うことで合意した。宮城県からは、6月27日付文書「登山道

の空間放射線量測定について」で正式に依頼された。測定は

蔵王連峰・熊野岳

などの主要観光登山道やその他の登山道計101座、261地

点(対照地点を含む)で、6月から2月まで実施した。測定

結果は9月3日と3月4日の2回に分けて宮城県に報告し  
た。

\*東北薬科大学ワンダーフォーゲル部勉強会支援(公益事業)

9月8日(日) 5名の部員に地図の見方、使い方などを講義

するため、会員1名を派遣。

\*『日本三百名山登山ガイド』編纂事業 本部から同書の改訂

版出版への協力要請があり、当支部は船形山(春季)、泉ヶ岳

(冬季)、蔵王山(夏季)、栗駒山(秋季)を担当し、原稿執筆、

写真撮影などを行なった。

\*親子登山おすすめコース作成事業 本部からウェブサイト

『親子で楽しむ山登り(平成25年度版)』制作への協力要請が

あり、当支部は「親子登山おすすめコース作成」を担した。

コースとしては山元町の「深山と少年の森」を選定し、7月

から8月にかけて紹介記事の執筆、地図作成、写真撮影など

を行なった。

#### 《広報・出版活動》

\*「宮城山岳通信」の発行 従来、毎年冊子形態で発行してき

た支部機関紙(支部報)『宮城山岳』を隔年発行に改め、これ

を補完する情報誌として「宮城山岳通信」を毎年2回5月と

12月に発行することとした。今年度は5月27日に創刊号を、

12月1日に第2号を発行。

\*ホームページの掲載 本部のウェブサイトを活用してホーム

ページを掲載しているが、その内容の充実・強化と情報発信の迅速化に努めた。

《その他の行事、懇親会》

\* ビールパーティ 8月1日(木) ホテルJALシティ仙台 12名参加。

\* 忘年会 12月1日(日) 茂庭荘 21名(支部会員15名、その他6名) 参加。

(須藤 幸蔵)

## 秋 田 支 部

秋田支部の会員は現在62名、平均年齢は72歳弱となっており、山行などの行事への参加者も固定化してきている。そのような状況での公益的事業は、楽しみながら登山道の刈り払いやベンチの設置など、できる範囲内のことを行なうこと。

また、山行時に会員外の友人などを誘い合うことで、支部の活性化を図っていききたいと考えている。

《会議》

\* 4月6日(土) 通常総会 24年度事業報告、決算の承認。25年度事業計画、25年度予算案の審議。出席54名(当日出席22名、委任状32名)。

\* 11月6日(土) 三役員会 26年度の役員改選について協議。

4名出席。

\* 12月4日(土) 役員会 秋田支部組織案および26年度の役員改選について協議。14名出席。

\* 3月1日(土) 26年度通常総会に提出する議案の審議。13名出席。

《山行・野外活動》

\* 5月26日(日) 春の里山山行 岩谷山(366m)、筑紫森(92m) 参加者21名(内会員外8名)

\* 10月二十七日(日) 秋の里山山行 高尾山(高尾神社383m)、大平薬師(424m) 参加者20名(会員12名 会員外8名)

《プロジェクト》

\* 6月9日(日) 太平山山開市民登山に協力・公益(登山振興) 秋田市からの一般参加者30名をサポート。支部会員参加者11名。

\* 11月9日(土) 太平山・二手ノ又登山口にベンチの設置と中岳までの歩道刈り払い・公益(登山振興) 参加者11名(会員10名 太平山県立自然公園管理員1名)。

\* 「自然学習センターまんだらめ」で行なう自然観察会などに協力。4月～10月。

《広報・出版活動》

\* 支部会報「秋田山岳」第90号～92号三回発行。広報活動とし

て、支部会員および各支部、他山岳会や公民館などに配布。

\*平成24年度までの支部保存文書製本。

《その他の行事、懇親会》

\*4月6日(土) 通常総会終了後、懇親会を開催。出席者23名。

\*10月12日(土)～13日(日) 第29回東北・北海道地区集會に14

名参加(内会員外2名)

\*10月20日(土)～21日(日) 全国支部懇談会静岡大会に2名参

加

\*12月7日(土) 年次晩餐會に4名参加

\*12月8日(日) 記念山行に3名参加

(鈴木 裕子)

## 山形支部

平成25年度の主な支部活動は会員山行5回、一般公募登山2回、『日本三百名山登山ガイド』調査登山3回であった。どの山行も無事故で、初期の目的を達成できたことは喜ばしいことである。また、今年度は支部会員を講師として2回の研修会を開催した。それぞれ興味深いテーマであった。支部会員は60名であるが、会員の高齢化と共に山行活動する会員の固定化が目立ってきた。また、残念ながら会報の発行は、今年度も見送らざるを得なかった。当支部にとって大きな課題である。

《総会および役員会》

\*総会 4月20日 山形ビッグ・ウイング 会員60名中出席20名、委任状26名。

\*役員会 4回開催 6月1日、7月15日、11月4日、3月22日。

《研修会》

\*「東北地区における雪崩の実例について」

高村真司会員が山形県内の雪崩発生映像を紹介しながら、雪崩のメカニズムを解説した。

\*「やまびこの謎を追う」

野掘嘉裕会員が「やまびこ」現象に注目してきた日本文化の豊かさを紹介。「やまびこ」とエコーの違い、「やまびこ」の発生しやすい季節、地形と周波数などユニークで興味深い研究成果を発表した。野掘氏は「やまびこ」を世界共通語にしよう」と提案した。

《会員山行》

\*6月29日 摩耶山・関川コースを往復。晴天に恵まれ6名参加。三百名山の調査登山を兼ねる。標高(1020m)の割に険しく、事故も多い山である。

\*9月14～15日 朝日連峰・古寺コース。参加者12名。古寺鉾泉泊。小朝日岳から鳥原山を経由して古寺鉾泉に戻る。

\*10月5～6日 祝瓶山 小国町五味沢から鈴振り尾根往復。

山頂付近の紅葉を楽しんだ。

三百名山調査を兼ねる。会員6名、ゲスト1名の参加。

\*11月9日 鎧ヶ峰 鶴岡市金峰山の南に位置する山。快晴に恵まれ紅葉を楽しんだ。会員17名参加。

\*1月17～19日 蔵王樹氷原を滑る会。蔵王温泉泊。会員9名、青森支部5名、アルパインスキークラブ3名参加。青森支部・木村会員の指導でスキー技術の向上を図った。

18日、ワールドカップ女子ジャンプ競技を観戦。

\*3月15～17日 鳥海山スキー登山 山雪荘をベースに活動。16日は天気にも恵まれ、河原宿まで登り大滑降を楽しむ。午後には遭難者の雪上搬送の実技講習。会員6名参加。

#### 《他支部との交流》

\*10月12～13日 東北・北海道地区集会 青森県むつ市 山形支部から7名参加。大尽山登山。

#### 《一般公募登山（公益事業）》

\*第1回 6月23日 月山旧六十里街道 田麦俣から湯殿山。快晴。一般27名、支部会員12名参加。

\*第2回 10月20日 月山旧六十里街道 湯殿山から志津までのコース。全行程雨天であったが、全員無事行動。一般31名、支部会員7名参加。

#### 《会員募集》

年度末に2名の新入会員を迎えた。

(粕谷 俊矩)

## 福島支部

平成25年度は、東日本大震災・原発事故から3年目となることから、前年に引き続き公益的事業に軸足を置き、山岳地域放射線測定や登山道整備事業を重点に取り組んだ。特に山岳地域放射線測定は、大震災発生の直後から今日まで継続して実施、記録化しており、将来に向けての貴重なデータとなり得ると確信している。

その一方、活動参加が一部会員に限られ、会員拡大など支部強化と活性化面で克服すべき課題も多い。今後は各種講習会や県外山行などを積極的に展開させ、魅力ある支部づくりに努める方針である。

#### 《会議》

\*4月14日(日) 支部総会 事業報告、計画、決算、予算、役員改選案など原案どおり満場一致で可決。出席59名(当日出席21名、委任状38名)

\*11月15日(金) 役員会 平成26年度事業計画案などを協議。出席8名。

#### 《山行・野外活動》

\*5月上旬から『日本三百名山登山ガイド』調査登山開始、11

月までに県内13座を完了。参加延べ50名。

\* 7月1日(月) 雄国沼調査登山 平成26年7月開催の「第30回東北・北海道地区集会」記念山行場所調査。参加7名。

\* 8月18日(金) 「山の日」広報・清掃登山 吾妻連峰・一切経山域で他山岳会員の参加を得て実施。広報資料200部配布。参加20名。

\* 9月上旬～10月上旬 親子登山おすすめコース調査 安達太良山を選定、参加延べ4名。

\* 9月7日(土) 納涼登山 支部恒例行事として吾妻小舎泊納涼会を兼ねた山行。参加13名。

\* 10月1日(火)～3日(木) 上高地、焼岳登山 山岳研究所2泊。参加4名。

\* 11月22日(金)～24日(日) 冬山山行 合戦尾根より燕岳往復。燕山荘泊。参加5名。

\* 3月12日(水) 春山スキーツアー 雄国沼、雄子沢コース往復。参加8名。

#### 《プロジェクト・地域振興活動》

\* 4月上旬～11月 山岳地域放射線測定・公益 吾妻、安達太良、那須甲子の3ヶ所について定点測定実施。参加延べ50名。

\* 6月9日(日) 登山道復元・公益 吾妻山・天狗岳コースの復元作業を3年連続実施し開通。参加12名。

\* 6月23日(日)、9月28日(土) 吾妻山・姥ヶ原湿原の復元

作業を支援・公益。2日間実施。参加6名。

\* 7月8日(月) 登山道整備・公益(東吾妻山一般道保全) 参加5名。

#### 《広報、出版》

\* 12月末 支部機関誌「やまなみ」第3号発行。

#### 《その他の行事、懇親会》

\* 2月1日(土) 支部新年会 福島市内。参加26名(内支部友会員1名)。

(渡部 展雄)

## 茨城支部

当支部は2007年6月に全国で27番目の支部として、21名の会員で発

足したが、現在36名となり、ほぼ隔月の講演会および山行などを中心に意欲的にクラブライフを盛り上げてきている。

2012年4月1日より我が日本山岳会は、公益社団法人として発足したが、当支部は特に公益性の高い自閉症者への登山支援などに数年前より取り組んでいる。今年度は創立6周年を迎え、5回の講演会と6回の支部山行、および野外研修会を1回実施した。また、特別山行として第11～12回の自閉症者協会への登山支援を行なった。さらに栃木支部主催の第7回4支部

合同懇親山行に12名の当支部会員が参加し、交流を深めた。

《会議》

\* 6月22日(土) 通常総会 土浦県南生涯学習センター 自閉症者への協

力登山計画、『茨城の山事典』発行の件、第6号支部報発行の件、および4支部合同懇親山行参加の件などの審議。出席会員17名、委任状10名。

《講演会》

\* 4月20日(土) 第30回「シルクロードをめぐる旅」茨城支部・西川元嬉会員。会員14名、一般18名参加。

\* 6月22日(土) 第31回「プレートテクトニクスとその周辺」元気象大学校長・河村博士氏。会員17名、一般19名参加。

\* 9月14日(土) 第32回「私の定年後の過ごし方―音楽と山歩き―」茨城支部・山田茂則会員。会員14名、一般17名参加。

\* 11月23日(土) 第33回「インカトレイルを歩く」茨城県山岳連盟海外委員長・椎名正明氏。会員13名、一般14名参加。

\* 1月11日(土) 第34回「ロシア・カムチャツカの自然と登山」茨城支部・長岡正利会員。会員15名、一般20名参加。

《支部山行》

\* 4月13日(土)～14(日) 第36回 八ヶ岳・赤岳 山田会員  
L、星埜会員。

\* 6月29日(土)～7月1日(月) 第37回 早池峰山 山田会

員L、星埜、長岡会員。

\* 8月9日(金)～10日(土) 第38回 吾妻富士ほか 長岡会員L、星埜、奥井、高木会員。

\* 8月22日(木)～24日(土) 第39回 劔岳 山田会員L、星埜、山本、斉藤、会員ほか一般3名。

\* 10月17日(木)～18日(金) 第40回 大博多山 山田明会員L、星埜、山田茂則、三井、西川、杉山会員。

\* 12月11日(水)～12日(木) 第41回久慈男体山・白木山(忘年山行) 酒井会員L、浅野、奥井、富田、山本、荒木、諏訪、高木、斉藤、大竹、山田明、山田茂則各会員。

《特別山行》

\* 6月15日(土)～16日(日) 第11回 茨城県自閉症協会協力登山 平標山、下見登山。諏訪会員L、奥井、斉藤、山田明各会員。

\* 7月20日(土)～21日(日) 第12回 茨城県自閉症協会協力登山 平標山 諏訪会員L、星埜、奥井、浅野、柳、高木、斉藤、山田明各会員。

《野外研修会》

\* 10月18日(金) 第13回 南会津の紅葉とキノコ狩り体験教室 講師ニきのこアドバイザー・杉山会員、奥井、西川、斉藤、山田茂則会員、他一般3名参加。

《第7回 4支部合同懇親山行》

\*2月1日(土)～2日(日) 栃木県日光市足尾町・足尾歴史館、銅山観光。長井一雄歴史館長による「足尾銅山の歴史―光と陰―」と題する講演に続く歴史館見学。当夜の国民宿舎「かじか荘」での夕食・懇親会で盛り上がった。翌日は予定の備前橋山への登山が、雪崩の危険が予想されるため取りやめとなり、松木溪谷へのトレッキングとなった。その後、銅山観光の山田功氏の解説により銅山坑内に入坑し、当時の採鉱の雰囲気を実感することができた。当支部より星埜支部長ら12名が参加し、総参加者は47名であった。

(浅野 勝巳)

## 栃木支部

栃木支部は設立して7年目を迎え、設立当時34名で始まった会員数は現在51名である。このところ会員増の取り組みもなかなか功を奏しないているが、若手会員が入会する気運があり、今年度からY o u t h 栃木を立ち上げ、冬山登山から活動を始めた。今年度は公益事業の参加者が増え、公益社団法人としての使命を十分に果たしつつあると評価している。特に昨年からの登山の振興と安全登山教育を目的にして開催している「親子登山教室」は2年目を迎え、充実した活動として本会のHPにも紹介されており、ジュニア登山者の育成も兼ねて、今後も継続

して実施していきたい。以下は、平成25年度の当支部の主な活動報告である。

《会議》

\*5月18日(土) 通常総会 事業報告・計画、決算・予算など原案どおり満場一致で可決、その後懇親会を実施。出席22名

\*4月14日(日) 第1回役員会、5月18日(土) 第2回役員会、6月2日(日) 第3回役員会、6月29日(土) 第4回役員会、8月24日(土) 第5回役員会、11月3日(日) 第6回役員会、12月1日(日) 第7回役員会、1月26日(日) 第8回役員会を開催、支部役員11名と事業委員7名が集まり、支部運営や事業について協議。

《山行・野外活動》

\*4月14日(日) 春山山行・尾出山 参加18名  
 \*8月24日(土)～25日(日) 夏山山行と懇親会  
 奥鬼怒・奥日光・加仁湯温泉 参加12名  
 \*11月4日(月) 秋山山行・会津荒海山 参加14名  
 \*12月15日(日) Y o u t h 栃木冬山山行・日光白根山 Y o u t h 会員2名

\*2月1日(土)～2(日) 4支部合同懇談会(栃木・千葉・茨城・群馬)を森会長臨席にて足尾で開催。参加47名。  
 《プロジェクト・地域振興活動》

\* 7月7日(日) 日光清掃登山 栃木県山岳連盟との共催  
参加約250名(内当支部10名)。

\* 8月3日(土)～4日(日) 親子登山教室 奥日光の光徳・  
男体山で開催。公募による登山教室で、学習院山桜会や栃木  
県立博物館などの協力を得て実施。参加親子16名。

\* 9月1日(日) 那須岳クリーンキャンペーン 栃木県山岳  
連盟との共催。参加約100名(内当支部12名)。

《広報・出版活動》

\* 4月1日(日) 『栃木支部報』6号を発行。

《講演会》

\* 6月29日(土) 第6回山岳映画の夕べ 「エヴェレスト征服」  
(1953イギリス隊)の映画を鑑賞し、講師山本篤氏による  
「8千メートル峰の魅力」の講演会を開催、講演会後に講師を  
囲んでの懇親会を実施。参加55名(故羽田栄治氏の追悼行事  
として実施)。

\* 11月3日(日) 第5回山ヒマラヤの集い「2013年夏K2  
登山とカラコルムの世界」講師北村誠一氏 講演会後に  
講師を囲んでの懇親会を実施。参加95名。

\* 12月1日(日) 第7回「山」の講演会(旧秋季講演会)「山  
岳気象の基礎と遭難事例から学ぶこと」講師猪熊隆之氏  
講演会後に講師を囲んでの懇親会を実施。参加144名。

《その他》

\* 6月2日(日)に「山の日をつくろう栃木集会」(JAC栃木  
支部ほか2団体による)を開催。参加者約300名。これが  
母体となって、栃木県に「山の日」をつくろう栃木県連絡協  
議会が設立された。

(渡邊 雄二)

群馬支部

群馬支部は平成25年7月、32番目、20会員という最小支部とし  
て設立された。周りには、ご多分に漏れずそれなりの山登りを  
続ける中高年者はたくさんいるが、苦勞を買ってでも組織の中  
で下働きをしたいという奇特な人がそんなにいるはずもなく、  
あちらこちらから「支部の結成を」と声がかかっても、関東圏  
の気楽さもあり、会員数も少なくその気運は高まらず、やり過  
ごしてきた。

そこへ、県内在住会員に対して『新版 日本三百名山登山ガ  
イド』の取材・執筆依頼の話があり、それに絡めて支部を結成  
させようとの、本部の支部活性化プロジェクト・チームの賢策に乗せられての発足となったも  
のである。

大体こういったものは外圧がないと駄目なものであり、タイ  
ミングが合えば実を結ぶという、実例かも知れない。

### 《会議》

\* 7月13日(金) 支部設立総会 本部の森武昭会長、節田副会長、吉永監事、宮崎支部活性化PTリーダー、東京多摩支部のPTメンバー高橋さんと9会員

(入会予定者2名を含む)の14人による総会と懇親会を開催。設立へこぎ着けたことへの互いのねぎらいと感謝が述べられる。

\* 11月15日(金) 第1回例会、1月24日(金) 第2回例会(兼新年会)、3月19日(水) 第3回例会を開催。26会員からさらに会員増を図り、活動の活性化への筋道を協議。この第3回例会より「シヨートスピーチ」と称して、山に関係すればテーマは会員個人で決めれば良い講演を持ち回りで実施することとした。今回は、25年10月に公募登山でマナスルに登頂した吉田恭一会員が行なった。

### 《活動》

\* 9月7日(土) 群馬県山岳連盟の少年少女登山教室「チャレンジキッズプロジェクト at 一ノ倉沢」に協力。谷川岳・一ノ倉沢を湯檜曹川から廻行し、危険地区の始まる地点までの沢登り体験をさせるもの。

\* 9月29日(日) 第3回上州武尊山スカイビュートレイル(山田昇杯)への協力。

\* 3月15日(土)～16日(日) 群馬県山岳連盟の少年少女登山

教室「スノーシュー in 谷川」に協力。15日は谷川岳山岳資料館前で雪洞掘りを体験後、資料館泊。翌日、湯檜曹川沿いの緩やかな雪原をスノーシューで歩き、一ノ倉沢出合を往復する。

### 《その他》

\* 『新版 日本三百名山登山ガイド』への執筆。景鶴山、上州武尊山、朝日岳(谷川連峰)、仙ノ倉山、浅間隠山、妙義山(相馬山)の6山。

(八木原 園明)

## 埼玉支部

埼玉支部は設立4年を経過し、公益社団法人としての支部活動の活性化を図るために、委員会活動に力を注いだ。特に社会貢献委員会は、障がい者支援として障がい者とその家族との登山活動に多くの支部会員を派遣した。

安全登山委員会は、山行時の安全確保のために県岳連の協力を得て、山行中の事故において現場から安全な場所への移動を、手持ちの登山用具で対応する研修と実技を行なったが、今後の山行でのレスキューに役立つものと思う。講演では、支部会員や一般市民に参加の呼びかけをして、山岳気象、埼玉県山岳救助隊による事例報告などの講演会で、多くの一般参加を得た。

自然保護委員会は、森づくり、シカ害調査、埼玉の自然を知るためのシンポジウムや、大高取山自然観察会では、越生町教育委員会の後援を得て、町民も参加して実施できた。山行・集會委員会は、四季の山行および埼玉50山踏破を目指し、毎月山行を実施、さらに埼玉100山に拡大して実施する予定である。来年の支部設立5周年記念事業に向けては、ヒマラヤ遠征の準備と実地の訓練を行なっている。

《総会》

\* 4月20日(土) 平成25年度総会 現在、会員121名中出席者41名、委任状58名で開催。大久保支部長を議長に選出し、平成24年度事業報告および収支決算報告、平成25年事業計画および収支予算案、並びに役員人事が承認された。

《支部委員会》

\* 毎月開催 支部長・支部委員・会計・監査・事務局が出席して、各委員会の事業報告や計画の立案と推進を行なった。

《行事・講演会・講習会・シンポジウム・支部新年懇談会》

\* 4月14日 ふれあい登山 官ノ倉山・石尊山で実施した。参加者は障がい者28名、家族24名、山岳関係者26名、スポーツ協会2名、総計80名。

\* 6月8日 小川げんきプラザ 埼玉県山岳連盟・遭難対策委員長の瀬藤武さんを講師に「ハイキング・レスキュー」を9名の参加で実施した。講演と現場での指導で、危険な事故現

場から安全な場

所へり救出場所への移動を、手持ちの登山用具で実施する研修で、今後の山行でのレスキューに有効と思われる。

\* 6月22日～27日 シカ害と絶滅危惧種の調査。

\* 10月13日(日) 山岳気象「秋・冬山の気象」講演会を実施した。(株)ヤマテン代表取締役・猪熊隆之氏を講師に迎え、4時間の講演だった。参加者は41名で、参加費500円を徴収し、40名で2万円の収入。

\* 11月17日 越生町教育委員会後援の大高取山自然観察会 参加者43名で、好天で実施された。アンケートでは自然保護委員会の活動に興味ありが100%で、その他いろいろ意見があった。

\* 1月25日 第9回安全登山講習会「埼玉県山岳救助隊による事例報告」参加者74名(会員30名 一般参加44名)。アンケート結果から来年も同様の講演会を実施する。

\* 1月15日 「第3回埼玉の自然を知ろう!シンポジウム」30名の会員、森林サポータークラブ、高尾の森づくりの会、一般の参加があった。

\* 2月23日 心肺蘇生法およびAED使用方法についての講習会を実施。

\* 1月4日(日) 埼玉支部新年支部懇談会を荒幡富士に22名、徳樹庵の懇談会に26名が参加。支部長挨拶および各委員会の

新年の抱負があり、盛大に開催された。

### 《山行・集会》

\* 6月8～9日 「四季の山」春の和名倉山を大洞側ゲートでテント泊して、仁田尾根ルートで10名が登頂した。

\* 7月6日 埼玉50山山行の二子山における事故に対する原因究明と今後の対応を図るため、支部単独の山行企画は当分行なわない。他支部との合同山行は実施する。

\* 7月13日 山行・集会委員会、安全登山委員会、事務局で二子山の事故現場を訪れ、事故者の救助でお世話になった小鹿野町警察・消防および川島町の防災ヘリにお礼に伺う。

\* 8月6日 山行・集会委員会、安全登山委員会の合同打ち合わせを実施、事故報告の取りまとめと今後の対応を協議した。

\* 9月12日 二子山滑落事故を教訓とした安全登山対策について委員会の了解を得る。

\* 9月1日 「親子で楽しむ山登り」の候補地と内容の企画。当支部では長瀬の宝登山を候補に選び、8名が参加して調査した。

\* 9月14日～15日 25年度3支部合同懇親山行 当支部の参加者は13名で、主催の東京多摩支部は25名、山梨支部は3名。

\* 11月9日～10日 「四季の山」秋の八海山は、12名参加で実施した。翌10日の新潟県は暴風雨が予想されたので、赤城山・黒檜山に変更して全員が登山した。

\* 2月8日～9日 「四季の山」冬山は、学習院光徳小屋および周辺のスノーハイクと、山王峠および日光白根山を実施した。

\* 「埼玉50山」の山行で今年度は有間山、大築山、二子山、矢岳、二ノ宮山、物見山、荒幡富士、大久保山、大高取山を登山した。4年間の累計で45座を完了した。

### 《支部創立5周年記念事業》

2014年に当支部は、記念事業としてヒマラヤ登山およびトレッキング隊を企画する。

\* 6月12日 山行・集会委員会で検討した資料が提出された。登山候補はネパールの6000m峰5座の内どれかの登頂を試みる。

\* 8月23日 第1回説明会を開催、チュルル最東峰した。

\* 11月15日 野村クリニック会議室で雪上技術の机上講習を受け、11月23日～24日に富士山で雪上訓練を行ない、続いて雪の谷川岳を経験した。参加者は登山隊9名、トレッキング隊5名。

\* 3月12日 本部理事会で日本山岳会110周年記念事業の一環として実施することが承認された。

### 《日本三百名山登山ガイド》

当支部の担当山岳は至仏山・谷川岳・両神山・武甲山・白砂山で、現地調査・写真撮影が終了したので、原稿執筆要領に従っ

て報告した。

《全国支部懇談会》

2014年10月18日（19日開催の全国支部懇談会の準備を進め、開催案内状作成および講演会・展示会・記念山行などの企画を推進する。

《埼玉支部報》の発行およびホームページ》

7月に9号、11月に10号、3月に11号を広報委員会で発行した。また、ホームページの更新と支部委員会短信を掲載した。

（富樫 信樹）

千葉支部

2013年5月18日、千葉市において定例総会を開催し、13年度の事業報告および決算報告、14年度の事業計画案および予算案が提案どおり承認された。今年度も支部の基盤づくりを最優先と考え、会員・会友同士の親睦を第一義とした諸山行や懇親会を実施した。公益事業活動としては房総半島分水嶺踏査の継続実施、児童養護施設の児童引率登山活動支援、各種講演会や自然観察会を実施した。年度末会員数は186名（含む会友〇名）。主な活動は次のとおりである。

\*5月18日（土）平成25年度千葉支部総会 京葉銀行文化バ

ラザ（千葉市）。

\*役員会議 毎月第4火曜日に市川市公共施設「アイリンク」会議室にて開催。

\*各委員会代表者会議を適時開催。

《山行》

\*4月20日（土）鹿野山 参加10名。

\*5月3日（金）三百名山取材山行① 大山（丹沢） 参加13名。

\*5月19日（日）支部総会記念山行 船塚山、浅間山、壬申山 参加17名。

\*6月8日（土）三百名山取材山行② 赤城山 参加13名。

\*6月30日（日）晴香園（児童養護施設）引率山行① 筑波山 参加24名（児童7名、施設引率者2名、支部会員15名）。

\*7月7日（日）～12日（金）海外山行 雪山（台湾） 参加11名。

\*9月22日（日）晴香園（児童養護施設）引率山行② 金時山 参加20名（児童6名、施設引率者2名、支部会員12名）。

\*11月1日（金）～2日（土）三百名山取材山行③ 諏訪山 参加3名。

\*11月9日（土）大菩薩嶺・北尾根 参加6名。

\*11月17日（日）晴香園（児童養護施設）引率山行③ 高水三山 参加17名（児童7名、施設引率者2名、支部会員8名）。

\* 11月23日(土)～24日(日) 房総半島分水嶺踏査ファイナレ山行 参加29名(一般11名、支部会員18名)。

\* 11月30日(土) 三百名山取材山行④ 荒船山 参加2名(担当者個人山行)。

\* 12月14日(土)～15日(日) 三百名山取材山行⑤兼忘年山行 搭ノ岳 参加7名。

\* 1月18日(土) 冬の手賀沼ハイキング 参加11名。

\* 1月26日(日) 新年山行 富山西尾根 参加10名。

\* 2月1日(土)～2日(日) 四支部合同懇談会 参加15名。

《講演会ほか》

\* 5月18日(土) 総会記念講演会「ボルネオの自然と魅力について」講師 安間繁樹会員 京葉銀行文化プラザ(千葉市)。

12月7日(土) 千葉支部主催「富士山と房総の自然を語る集い」

千葉県立中央博物館(千葉市)

そのほか自然観察会を行なっている。

《広報活動》

「千葉支部だより」を年4回(3、6、9、12月)発行、PDF版を千葉支部ホームページに掲載。

《対外行事などへの参加》

支部長会議、事務局担当者会議、全国支部懇談会、自然保護全国集会、年次晩餐会などへの参加。

《その他》

\* 8月10日(土) 夏季ビールパーティと南極砕氷船「しらせ」見学会 参加20名。

その他、支部内の親睦を図るため千葉支部域を3つのエリアに分け、それぞれサテライト親睦会を随時開催している。

(諏訪 吉春)

## 東京多摩支部

若年会員増強と会員サービスの充実が大きな課題となるなか、初心者登山教室と初級登山教室を推進し、3月末に2年間にわたる第1期初級登山教室を終え、無事24名の修了生を送り出した。修了生数名が即入会の手続きをとった。会員向けには、安全登山講習会・安全登山基礎講座を集中的に行なった。山行・観察会・講演会などのイベント回数の増加にも力を注いだ。同好会もクライミング、海外登山、沢登り、スキートの4同好会が設置された。平成27年2月に5周年を迎えるにあたり、5周年記念事業プロジェクトチーム(PT)での検討の中から多摩百山選定PT、記念誌PT、記念山行、記念品などの担当が選任された。年度末には、日本山岳会が東京都岳連を退会するにあたり、東京多摩支部がそれを引き継ぐ形で加盟手続きを完了した。

《会議》

\*5月11日(土) 通常総会 24年度事業報告・収支決算案、25年度事業計画・予算案などを審議。出席171名(当日出席59名、委任状112名)。

\*幹事会 毎月第3火曜日開催 幹事・委員長が延べ196名出席。予算・決算・プロジェクト事業などの審議・活動報告。  
\*総務、山行、集会など8つの委員会、5つのPTが毎月委員会を開催。

《山行・野外活動》

\*定例山行 7回実施 延べ69名参加。

・5月25日(土) 檜洞丸 8名参加。・7月13日(土) 高山 7名参加。・8月31日～9月1日(土・日) 黒斑山 14名参加。・10月5日～6日(土・日) 苗場山 15名参加。

・11月2日 荒船山 7名参加。11月30日(土) 上州三峰山 7名参加。・3月23日(日) 滝子山11名 参加。

\*平日山行 毎月第3木曜日実施。7回実施、延べ69名参加。

・4月18日 大羽根山1 1名参加。・5月16日 奥多摩鍋割山 7名参加。・6月20日 花咲山5名参加。・7月18日 西沢溪谷 11名参加。・9月19日 甲州高尾山 9名参加。・11月21日 倉戸山 9名参加。・1月16日 石老山 17名参加。

・4月7日(日) 奥多摩山開き・奥多摩むかし道散策 11名参加。・4月21日(日) 六万騎山・坂戸山カタクリ観察会

25名参加。・4月23日(火) 刈寄山ノラボウ菜収穫 17名参加。・5月15日～16日(水・木) 雲取山石積み登山道整備 23名参加。・6月20日～21日(木・金) 三ツ峠アツモリソウ保護活動 13名参加。・6月2日(日) 高尾山山の日「の日の集い」 会員30名参加。・8月20日(火) 御岳山レンゲショウマ観察会 一般36名参加。・11月13日(水) 奥多摩七ツ石山清掃活動 19名参加。・3月29日(土) 国立四小高尾山自然観察ハイキング 22名参加(生徒6名、保護者2名、先生3名、育成会6名、会員5名)

《プロジェクト・地域振興活動》

\*4月～3月 第1期初級登山教室 受講生24名。

\*4月～6月 立川市と共催による若い人向け登山教室 受講生25名。

\*10月～3月 第2期初級登山教室 受講生14名。

\*5周年記念事業PTの検討結果により、多摩百山PT、記念誌PTが設置された。

《広報・出版活動》

\*支部報 4月、7月、10月、1月の4回発行。7月、平成25

年度版アニュアルレポート発行。

\*ホームページ100回以上更新、メールマガジン55回配信。

\*10月 都県境分境嶺踏査報告書作成。

《その他の行事、懇親会》

\* 5月31日(金) 「金邦夫さんを囲む会」 69名参加。

\* 7月～8月 安全登山基礎講座を4回開催 105名参加。

\* 9月14日～15日(土・日) 御岳山 三支部合同懇親会 40名参加。

\* 10月～11月 安全登山講習会を3回開催 47名参加。

\* 10月27日(日) 講演会 渡邊玉枝の「高峰登山体験」一般49名、会員39名、計88名参加。

\* 1月26日(日) 年始晩餐会 ネパール大使夫妻を含めて99名出席。年始晩餐会記念講演会 神崎忠男氏「日大山岳部北極圏グリーンランド登山隊」 92名参加。

\* 2月25日(火) 講演会 山口耀久氏「『アルプ』とその時代」 104名参加(一般40名、会員64名)。

\* 同好会の設立 クライミング同好会、海外登山研究同好会、沢登り同好会、スキー同好会が相次いで設立された。

\* 4地区サテライト・サロン 延べ15回開催、219名参加。  
(山本 憲一)

## 越 後 支 部

公益社団法人への移行に伴い、昨年度の活動を反省し、公益・共益事業の強化を念頭に改善を進めてきたが、大きな盛り上がりを感じており、越後支部が動き出したと思っっている。

公益事業については、高頭祭は過去最高の70名以上の参加者があった。「山コン」という若者の出会いの場を、登山指導で協力する企画への参加を行なった。公募登山では今年度が準備期間となったが、来年度、年3回実施に向けて具体的日程も決まり、詳細計画や手配を進めている。さらに5月第4日曜に行なわれる「海のウエスタン祭」(糸魚川カタクリクラブ主催)は、来年度から6月第1日曜日の「森の日」行事としての開催を進めてきたものの、その後の行政主導による「森の日」の日程変更を余儀なくされているが、後援団体として側面支援をしたい。

公益事業について、「越後スノートレッキング同好会」と「越後フォト・スケッチ同好会」の2つの支部同好会が設立され、活動を始めている。5月の支部総会・記念講演・懇親会・親睦登山、12月の支部年次晩餐会・記念講演などにも多くの参加者が集うようになってきたと思う。

越後支部会員の減少や高齢化が進むため、将来への組織体制固めと基盤確立の対策として、会員勧誘強化運動を展開してきた。今年度は新入会員10名と編入会員1名の合計11名が加わり、長らく続いていた会員減少に歯止めがかかってきており、今後も支部会員増加を継続強化していくつもりである。そのためには、魅力ある越後支部としての活動を展開していきたいと考えている。

《会議》

- \* 4月20日(土) 平成24年度支部会計監査 出席者…本間副支部長、森監事、遠藤(後) 監事、桐生事務局長
- \* 5月25日(土) 11:00～13:00 第1回支部役員会 東蒲原郡阿賀町広谷「みかぐら荘」 出席者20人。平成24年度事業報告・会計報告、平成25年度事業計画・予算計画などを説明。14:00～16:00 平成25年度支部年次総会 同所 出席者175名(当日出席40名、委任状137名、有効議決率82%)。平成24年度事業報告・会計報告、平成25年度事業計画・予算計画、支部新規約および内規などを審議、可決された。
- \* 6月30日(日) 第1回三役・委員長会議 長岡市中央公民館 出席者7名。
- \* 9月28日(土) 第2回三役・委員長会議 長岡市中央公民館 出席者11名。
- \* 11月15日(金) 事業委員会 新潟市成海宅 出席者3名。
- \* 11月24日(日) 総務委員会 新潟市東映ホテル 出席者8名。
- \* 12月14日(土) 第2回役員会 新潟市東映ホテル 出席者21名。
- \* 2月25日(火) 事業委員会 新潟市成海宅 出席者3名。
- \* 3月8日(土) 県山協委員会 長岡市 出席者4名。
- \* 3月15日(土) 第3回三役・委員長会議 長岡市中央公民館

出席者10名。

《山行・野外活動》

- \* 5月19日(日)～20日(月) 中部ブロック4支部交流会(山梨支部主催、富士山北麓で開催)に参加。支部参加者8名。
- \* 5月26日(日) 支部親睦登山 会越国境・九才坂峠および目指岳(650・3m)を実施。支部参加者30名(会報「山」No.818に報告掲載)
- \* 5月26日(日) 協力事業として海のウェストン祭に支部参加者約10名。
- \* 7月25日(木) 第56回高頭祭 参加者は過去最高の70名で、寿像前で玉櫛奉奠などの神事を行なった。来賓として日本山岳協会・神崎忠男会長をお迎えし、講演会・親睦会を行なった。終了後、弥彦山頂奥之院までの登山道ゴミ拾いを実施した。ここで新潟県登山祭に参加し、その後、山頂からの松明登山祭に参加して、弥彦駅までの市中行進を行なった。なお、松明登山祭60周年を記念して、弥彦神社より越後支部に感謝状が授与された(会報「山」No.820に報告掲載)。
- \* 10月13日(日) 「山コン at 南葉山」(上越プレス社主催、新潟県共催)に対し、現地の登山コース・リーダーとして協力した(会報「山」No.823に報告掲載)。
- \* 5月26日(日) 九才坂峠および目指岳(650・3m)の清

掃登山 支部参加者30名。

\* 5月27日(日) 海のウエストン祭(糸魚川市) および白倉山 支部参加者15名。

\* 7月6日(土)～7月7日(日) JAC自然保護全国集会(立山) 支部参加者8名。

\* 7月25日(木) 弥彦山の清掃登山 支部参加者50名。

\* 11月17日(日) 新潟県山岳協会自然保護集会(アオーレ長岡) 支部参加者30名。

\* 2月22日(土)～23日(日) 新潟県山岳協会冬山講習会 妙高関山温泉 支部参加者5名。

\* 3月30日(日) 弥彦山雪割草パトロール(妻戸尾根～弥彦山～雨乞尾根) 悪天候のため中止。

《広報・出版活動》

\* 5月20日 「越後支部報」第7号発行。

\* 9月1日 「越後支部報」第8号発行。

\* 1月25日 「越後支部報」第6号発行。

《その他の行事、懇親会》

\* 4月13日(土) 新潟県山岳協会評議員会および懇親会出席(新潟市) 参加者…目崎県山協委員長、桐生事務局長

\* 5月19日(日)～20日(月) 中部ブロック4支部交流会(山梨支部主催) 富士山北麓で実施。越後支部より8名参加。

\* 5月25日(土) ①講演会…山口冬人氏(新潟県写真家協会理

事、阿賀町津川在住) が「奥阿賀の四季」と題して、四季を通じて精力的に撮影された奥阿賀の山々や阿賀野川、津川の街並みや風景について、作品を展示、講演を行なった。参加者40名。②支部懇談会(みかぐら荘) 参加者35名。

\* 6月15日(土) 支部長会議・本部総会に橋本支部長出席。

\* 7月6日(土)～7日(日) 日本山岳会自然保護全国集会(富山県立山町) 支部参加者8名。

\* 7月25日(水) 講演会(弥彦山大平園地)「日本および世界の登山界」と題し、日本山岳協会会長(元日本山岳会副会長)の神崎忠男氏から講演していただいた。支部参加者70名。

\* 10月20日(日)～21日(月) 全国支部懇談会(静岡支部主催)に越後支部より7名参加。

\* 12月7日(土) 全国支部長会議に橋本支部長出席。本部分年次晩餐会に越後支部より16名参加。永年会員として越後支部

より5名(筑木力、本間宏之、南雲克良、太田邦介、小野健)が発表された。

\* 12月14日(土) ①記念講演会(新潟市東映ホテル) 日本山

岳会・節田重節副会長が「植村直己——その人と冒険」と題し講演を行なった。節田副会長は新潟県佐渡市の出身で越後支部とも深い関係があり、また明治大学山岳部では故植村氏の1年後輩であった。故植村氏の冒険の軌跡を略年譜に従い、スクリーン映像を通して紹介していただき、数々のエピソード

ソードを含めて語っていただいた。参加者86名。②支部年次晚餐会(新潟市東映ホテル) 本部より節田重節副会長を来賓として迎え、毎年恒例の越後支部岳人の交流サロンとして開催した。今年度は、山田智子支部会員の旭日単光章受章、遠山實支部会員の藍綬褒章受章、田邊信行支部会員の環境大臣賞受賞のお祝いを兼ねて盛大に行なわれた。参加者85名(公報「山」No.825に報告掲載)。

\* 1月25日(土)～26日(日) 全国事務局担当者会議に桐生事務局長が参加。

\* 3月25日(火) 26年年度支部総会場所視察(胎内市)と藤島山岳文庫の保管状況確認(関川村) 参加者・五十嵐力図書委員長、石山政雄支部会員、桐生恒治事務局長

(桐生 恒治)

## 富山支部

平成25年度は富山支部創立65周年の年であり、記念事業が支部活動の大きな割合を占めた。公益事業としての恒例の播隆祭は、式典と共に講演会、播隆遺品の見学会、関係者交流会なども集中して行ない、広く播隆上人顕頌に努めた。また、自然保護全国集会を本部自然保護委員会と共催し、立山山麓に全国の支部の方々を迎えた。全国規模の行事で現地支部としての役割

を担い、自然保護のあり方を共に考えた。

記念山行として、国内は北海道山行、国外ではネパール・トレッキングを行なった。年末には飯田肇会員が平成25年度秩父宮記念山岳賞を受賞、記念の年に花を添えた。このほか東北山行、雪山ハイク、『日本三百名山登山ガイド』取材山行(12コース)などの山行を行なったが、会員以外からの参加が定着してきた。今年度は節目としての行事が主であったが、今後の支部活動のさらなる活性化へと繋がる契機としたい。

《公議》

\* 4月20日(土) 支部総会 事業・収支決算報告、事業計画・予算・役員案を承認 記念講演「富山支部の歩み」木戸前支部長 富山電気ビル、出席23名。

\* 7月6日(土) 自然保護全国集会(自然保護委員会と共催) テーマ「立山・弥陀ヶ原の自然に学ぶ」基調講演「立山連峰の積雪と氷河」飯田会員、「弥陀ヶ原 自然と歴史の今昔」佐藤会員 グループ討議①湿原の自然と保護 ②ライチョウの生態と保護 ③信仰登山について ④持続可能な自然環境の管理について 立山国際ホテル、参加1200名。

\* 7月7日(日) フィールド・スタディ①弥陀ヶ原散策 ②室堂散策 ③立山博物館、立山カルデラ砂防博物館見学。

\* 1月26日(日) 親睦会総会、新年会 高岡保養所まんよう荘 出席15名。

\*その他役員会 6回(5月、6月、8月、12月、2月、3月)

《山行・野外活動》

\*5月10日(金)～11日(土) 例会山行 室堂～一ノ越スキー  
参加4名(宿泊はアルパインズスキークラブに合流)。

\*8月28日(水)～9月3日(火) 65周年記念国内山行「北海道  
道さいはての山と湿原の旅」北海道道東 参加6名。

\*9月28日(土)～30日(月) 例会山行 八幡平、岩手山、鞍  
掛山 参加6名。

\*10月6日(日) 谷村会員追悼登山 大乘悟山 参加13名。

\*10月20日(土)～21日(日) 全国支部懇談会 静岡支部担当  
富士山 参加2名。

\*1月16日(土) 17日(日) 5支部合同懇親山行 京都・滋賀  
支部担当 金勝山 参加5名。

\*11月23日(土)～12月5日(水) 65周年記念国外山行「エベ  
レスト展望トレッキング」参加5名。

\*1月27日(月) 例会山行 二上山 参加13名。  
\*3月1日(金)～3日(日) 5支部合同スキー山行 関西支  
部担当 戸隠山系・飯縄山 参加4名。

《プロジェクト・地域振興活動》

\*5月25日(土) 高頭山登山道整備(公益) 参加7名。

\*6月2日(日) 第28回播隆祭(公益) 式典参加46名、記念  
登山(高頭山)参加12名。

《広報・出版活動》

\*5月12日 「富山支部会報」第93号。

\*10月16日 「富山支部会報」第94号。

\*1月30日 「富山支部会報」第95号。

《その他の行事、懇親会》

\*6月1日(土) 「山の日」講演会(公益) 黒野こうき氏「槍ヶ  
岳開山 播隆上人の人と生涯」富山県民会館 参加80名。  
交流会 白樺ハイツ 参加21名。

\*8月8日(木) 例会 鍛冶会員講話「風景と生物多様性」と  
やま市民交流館。懇親会 リコ・モンテ 参加20名。

\*12月10日(火) 例会 金尾事務局長「65周年記念事業報告」  
とやま市民

交流館。懇親会 魚民 参加24名。

(金尾 誠二)

石川支部

当支部は創立66周年で、現在会員数は44名、60歳以上が40名  
である。若手の育成が急務であり、本年度はYOUTH CL  
UBの事業に若手を積極的に参加させた。主な公益事業では、  
深田久弥氏との笹ヶ岳登山をテーマとした「山岳講演会」や、  
支部が復活させた登山道「浅犀みくまりの道」の新たな周回コー

スの開設などがある。他方、主な共益事業では「紅葉の涸沢散策」や、早月川右岸の山で剱岳を望む残雪のカンジキ山行などがある。その他、『日本三百名山登山ガイド』や「親子登山」の調査・執筆協力などがある。以下は、平成25年度の当支部の活動状況である。

《会議》

\* 4月20日(土) 支部定期総会 出席39名(当日出席23名 委任状16名) 事業報告・計画案および会計報告・予算案などを満場一致で可決。その後、場所を移し懇親会実施。

\* 3月27日(木) 役員会議 出席17名 平成26年度事業計画案・役員改選案・親子

登山追加2コース案の選考。出席15名。

《山行・野外活動》

\* 4月13日(土) 春山雪上訓練 医王山 参加7名。

\* 10月5日(土)～6日 紅葉の涸沢散策(錦秋の涸沢カールからパノラマ・コースに一同大満足) 参加8名。

\* 11月16日(土)～17日 5支部合同懇親山行(湖南アルプス・金勝山)主催・京都滋賀支部 参加8名。

\* 3月16日(日) カンジキ山行(大倉山～土倉山)悪天候の中、本年度最後の山行行事 参加4名。

《プロジェクト・地域振興活動》

\* 4月6日(土)(公益) 登山道整備事前踏査(桃の木谷) 急

斜面には残雪が多く、スリリングな踏査となる 参加4名以降、西嶋鍊太郎会員による地主らとの折衝や幾多の刈払いなど、献身的な努力で周回コースとして完成。

\* 5月18日(土)(公益) 登山道整備(浅塚みくまりの道) 参加11名。

\* 6月15日(土)(公益) 登山道整備(杉峠道) 参加10名。

\* 6月23日(日)(公益) ロープワーク・クライミングギア講習会(ムンターミュールノットなど安全登攀の基本を習得。技術・道具の進展を改めて痛感する)。講師 田中康典会員  
白山市舟岡山スポーツ施設 参加10名。

\* 8月3日(土)～4日 上高地散策(ひょうたん池・岳沢) 参加12名

\* 11月9日(土)(公益) 自然観察会・秋山紅葉山行 大庭会員夫妻を中心に開設した「不惑新道」で実施。参加者は自然解説員の長清幸子会員から植生などの解説を受ける参加6名。

《広報・出版活動》

\* 支部会報「峰」を季刊(6月、9月、12月、3月)で年4回発行。

その他随時、山岳関連情報を会員宛にメールもしくは郵送にて周知。

《その他の行事・懇親会》

\* 5月18日(土) (公益) 山岳講演会(追憶の笈ヶ岳―深田久

弥氏の思い出・深田久弥山の文化館) 45年ほど前、若き中川  
支部長が深田久弥氏と同行登山した際の思い出話などを紹介  
参加32名。

\* 11月29日(土)〜30日 山まつり(実質支部の忘年会で、お互  
い一年の山行やイベントなどの話題で盛り上がる) 小松市  
粟津温泉 参加17名。

#### (前川 陽)

### 福井支部

平成25年度は若干名の入会者もあり、支部の平均年齢が少し上  
向きになり、充実した  
山行ができたように思う。

#### 《会議》

\* 4月14日(日) 通常総会 福井県自治会館 24年度事業報  
告決算報告および監査報告が承認され、25年度事業計画案・  
予算案が提案され承認される。出席者52名(当日出席者27名、  
委任状25名)。

\* 2月5日(水) 泰澄塾との合同会議 8名、泰澄塾 3名参  
加。

\* 3月26日(水) 役員会 12名参加。24年度の事業計画や活

動などの意見交換を行なった。

#### 《野外活動》

\* 5月3日(金) 森づくりおよび散策路の整備 11名参加。

\* 5月25〜26日(土・日) 泰澄祭・越知山募集登山(泰澄塾と  
共催) 一般約100名参加

\* 7月7日(日) 全国自然保護集会(立山) 4名参加。

\* 11月10日(日) 森づくりおよび散策路の整備 12名参加。

#### 《支部山行》

\* 4月28日(日) 赤坂山・寒風山・大谷山 4名参加。

\* 6月1日(土)〜2日(日) 富山支部創立60周年記念事業  
1名参加。

\* 6月2日(日) 荒島岳 7名 オブザーバー1名参加

\* 6月23日(日) 経ヶ岳 10名 オブザーバー3名参加

\* 6月〜11月 夜叉ヶ池水質調査 2名参加。

\* 7月25日(木)〜28日(土) 檜ヶ岳 7名、オブザーバー1  
名参加。

\* 8月10日(土) 冠山 8名、オブザーバー2名参加。

\* 9月7日(土)〜8日(日) 白馬岳 6名参加。

\* 9月29日(日) 能郷白山(能郷谷コース) 7名参加。

\* 10月20日(日)〜21日(月) 全国支部懇談会(千葉支部主管)  
3名参加。

\* 10月27日(日) 赤兎山・鳩ヶ湯 9名、オブザーバー2名参

加。

\* 11月16日(土)～17日(日) 5支部懇親山行 アークしが(滋賀県青少年会館) 湖南アルプス(竜王山) 11名参加。

\* 11月24日(日) 八ヶ峰 8名参加。

\* 12月7日(土)～8日(日) 本部晚餐会・高水三山 4名参加。

\* 12月23日(月)～24日(火) 文殊山・支部晚餐会 21名参加。

\* 1月26日(日) 岩籠山 5名、オプザーバー4名参加。

\* 2月16日(日) 取立山 9名参加。

\* 月1日(土)～2日(日) 5支部山スキー(飯縄山) 9名参加。

\* 3月16日(日) 越前大日岳 9名参加。

《出版活動》

\* 平成26年1月に「支部報」No.27を発行。

(松田 洋子)

## 山 梨 支 部

公益事業の内、登山振興事業として第32回深田祭、第9回山の博覧会(富士山特集)、第54回木暮祭、機関誌『甲斐山岳』第6号発行、山岳環境保全事業として山岳レインジャー活動を行った。公益事業として支部山行、第3回中部ブロック(越後・

信濃・山梨・静岡支部)交流会、第2回3支部(東京多摩・埼玉・山梨支部)交流登山、「山梨二百山」選考事業などを実施した。なお、昨年度を含め物故会員が5名、入会は2名であるので、今後活動できる若手の新規会員募集に尽力して、支部活動の活性化を図っていきたい。

《会議》

\* 4月～2014年3月 毎月1回役員会 甲府市・田原屋。

\* 4月6日(土) 定時総会 事業報告・決算、事業計画・予算ほか承認 出席60名(当日出席30名、委任状30名)。

\* 6月～7月 「山梨二百山」選考委員会4回 山梨県が平成8年に選定した「山梨百名山」に加えて、新たに踏査済みの141山の中から100山を選定し「山梨二百山」とした。また、今後の出版計画を協議した。

《山行・野外活動》

\* 4月6日(土) 定例支部山行 笛吹市・兜山(雨天中止)。

\* 5月19日(日)～20日(月) 第3回中部ブロック交流会(山梨支部担当) 富士山麓緑の休暇村・青木ヶ原樹海散策 参加全50名。

\* 6月～8月 山梨県山岳レインジャー活動 1泊2日4回 金峰山、甲斐駒ヶ岳、仙丈ヶ岳、北岳、鳳凰三山 参加延べ9名。

\* 9月14日(土)～15日(日) 第2回3支部交流会(東京多摩

支部担当 奥多摩・御岳山 山梨支部参加3名。

\*10月20日(日) 定例支部山行 北杜市・斑山 参加2名。

\*12月1日(日) 定例支部山行 大月市・菊花山 参加10名。

\*1月22日(水) 定例支部山行 笛吹市・兜山 参加6名。

《プロジェクト・地域振興活動》

\*4月21日(日) 第32回深田祭 葦崎市・茅ヶ岳および深田記念公園 参加全200名 深田久弥氏の遺徳を偲ぶ。

\*6月29日(土) 第9回山の博覧会・富士山特集 甲府市・山梨学院メモリアルホール 参加330名(会員30名、一般300名) 6月22日の富士山世界文化遺産登録(信仰の対象、

芸術の源泉としての富士山)を記念し、また、山の日関連プロジェクトとして探検家・角幡唯介氏ほかの講演会を実施した。

\*10月20日(日) 第54回木暮祭 北杜市・金山平 参加25名(会員15名、一般20名) 当会第3代会長・木暮理太郎氏の遺徳を

偲ぶ。木暮理太郎の生地・群馬県太田市から「木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会」服部佳郎会長をはじめ会員も雨中、駆けつけてくれた。

《広報・出版活動》

\*3月31日(月) 機関誌『甲斐山岳』第6号、150部発行。

《その他行事、懇親会》

\*5月17日(土) 山菜バーベキュー大会 山梨市・万力公園

参加16名。年齢的に普段定例山行に参加できない会員との野

外懇親を深めるため、初めて実施したが好評であった。

\*9月15日(日) 秋山泉会員 山梨県体育功労賞受賞。

\*9月 鈴木勝彦会員「全日本山岳写真展」(池袋・東京芸術劇場)に出展。

\*9月 北原孝浩会員「アルパインフォトクラブ写真展」(四谷・ポートレートギャラリー)に出展。

\*11月19日(火) 鈴木勝彦会員 日本の山岳切手シリーズ3集に冬の「甲斐駒ヶ岳」採用される。

\*12月11日(水) 忘年会 甲府市・田原屋 参加17名。

\*3月～5月 望月阿香実会員 「日本南画院展」(六本木・国立新美術館、京都市美術館、大阪市立美術館)に出展。

(古屋 寿隆

信濃支部

信濃支部最大の行事である上高地ウエスタン祭は、記念山行の事前調査をはじめとする事前準備のほか、協賛団体との打ち合わせ、調整など、関係する役員や会員の多大な尽力により催行された。この催しは山岳観光、登山振興、安全啓発など地域でも欠かすことのできないイベントとなっていて、本年度67回目を迎えた。また、岳都松本・山岳フォーラムの実行委員とし

信濃支部

て、地域の登山振興、自然保護などの活動にも積極的に参加した。

しかし、残念ながら新会員の加入は減少に追いつかず、課題を残すこととなった。

支部山行としては年間10回の山行を計画したが、天候などにより7回の実施となった。例年続けてきた海外山行も、インドネシア・スマトラ島、クリンチ山(3805m)で実施され、悪路の中、全員無事登頂した。

《会議》

\* 4月21日(日) 役員会 松本東急イン。

\* 4月21日(日) 通常総会 松本東急イン 事業並びに収支の報告と新年度計画の承認について 本人出席28名、委任状出席76名 計104名。

\* 1月19日(日) 役員会 松本東急イン 支部長会議、事務局会議の報告。

会員増強対策、新入会員対策、各委員報告など。出席17名。

《主幹行事》

\* 6月1日(土) ウェストン祭記念山行 鳥々谷より徳本峠越え。

\* 6月2日(日) 第67回ウェストン祭 上高地ウェストン広場・安曇小学校児童の合唱など。記念講演・渡辺玉枝氏。支部会員参加32名。

《その他参加行事》

\* 5月19日(日)～20日(月) 中部ブロック4支部交流会 富士山麓 当支部参加8名。

\* 11月16日(土)～17日(日) 岳都松本・山岳フォーラム 松本市民芸術館 シンポジウム、各種展示、コンサート、安全登山セミナーなど。

《支部懇親ほか》

\* 1月19日(日) 支部新年会 松本東急イン 山の日制定議員連盟報告など。出席者39名。

《広報・出版》

\* 26年1月 「信濃支部報」第60号発行。

《支部山行》

\* 7月21日(日) 黒姫山 参加3名。

\* 9月22日(日) 錫杖岳 参加4名。

\* 11月10日(日) 鳥甲山 参加1名。

\* 12月8日(日) 七面山 参加1名。

\* 2月7日(金)～13日(木) インドネシア・スマトラ島、クリンチ山 参加9名。

\* 3月8日(土)～9日(日) 八ヶ岳・赤岳 参加2名。

\* 3月23日(土)～24日(日) スキー合宿 コルチナスキー場 参加4名。

(米倉 逸生)

岐 阜 支 部

当会の会員は広範囲から参集しているため、県内の各地で総会を開催してきたが、今回の総会は新宮の方にお願いで、紀北町紀伊長島で開催した。支部の山行は雨に祟られ、幾つもの止の憂き目に遭った。毎年、翌年の山行希望がなかなか出てこない状況が続き、各人がどこに登っているか発表する「山情報交換会」を開催した。今後、継続して実施していきたい。以下は25年度の主な活動報告である。

《会議》

- \* 4月13日(土) 定時総会 事業報告・計画、決算・予算など 原案どおり満場一致で可決、その後懇親会を実施。出席24名。
- \* 5月～2014年3月 毎月第2木曜日に役員会を11回開催。支部役員14名ほどが集まり、支部運営や事業について協議。

《支部山行》

- \* 4月14日(日) 春期懇親山行／姫越山 参加16名、周辺散策 参加9名。
- \* 10月13日(日)～14日(月) 秋期懇親山行・三百名山踏査／鷺ヶ岳・大日ヶ岳 参加12名。

- \* 11月2日(土) 秋期現地小集会 三の宿 参加6名。
- \* 11月16日(土)～17日(日) 5支部合同懇親山行／湖南アルプス・金勝山 参加7名。
- \* 1月25日(土) 1月例会／大平山・裕向山 参加15名。
- \* 3月1日(土)～2日(日) 5支部スキー山行／戸隠・飯縄山 参加3名。

《三百名山踏査》

- \* 5月12日(日) 三百名山踏査／小秀山 参加3名。
- \* 5月25日(土) 三百名山踏査／奥三界岳 参加2名。
- \* 6月23日(日) 三百名山踏査／恵那山 参加5名。
- \* 8月16日(金)～17日(土) 三百名山踏査／笠ヶ岳 参加2名。
- \* 9月21日(土)～23日(月) 三百名山踏査／鷺羽岳・三俣蓮華岳 参加2名。
- \* 9月29日(日) 三百名山踏査／猿ヶ馬場山 参加5名。
- \* 10月19日(土) 三百名山踏査／御獄山 参加2名。

《講習会》

- \* 5月26日(日) 初級岩歩き技術講習会／伊木の森 参加9名。
- \* 2月23日(日) 積雪期登山／野田平・鮭ヶ洞・熊ヶ岳 参加8名。
- \* 3月23日(日) 積雪期登山／徳平山・県境 参加4名。

《海外山行》

\* 3月2日(日)～7日(金) 太古の島ハワイ島ハイキング  
参加12名。

《講演会》

\* 11月7日(木) 「山と播隆 槍ヶ岳を開山した念仏行者・播隆の生涯」(ネットワーク播隆代表・黒野こうき氏) 聴講者106名。

《権現の森林づくり》

\* 4月21日(日)～12月8日(日) 10回 延べ参加93名。主な作業内容は植栽地全域の下刈り、育苗作業、林床の手入れと歩道の整備。

《自然環境保全》

\* 5月12日(日)～12月8日(日) 森林パトロール 6回 参加15名。

\* 12月8日(日) 金華山山麓登山道補修 参加2名。

《写真展》

\* 12月1日(日)～28日(土) 岐阜市長良 喫茶パウゼ 作品27点 9名出展。

\* 1月4日(土)～30日(木) 山県市 香り会館。

《山情報交換会》

\* 11月14日(木) 岐阜駅「ハートフルスクエア1G」 参加16名。

《懇親会》

\* 12月12日(木) 理事会・忘年会 参加15名。  
\* 1月18日(土) 新春懇談会 参加28名。

《会報》

\* 9月、3月 『岐阜山岳』第74号、75号発行。

(今峰 正利)

静岡支部

2013年は、全国支部懇談会静岡大会の開催準備とその後始末に、支部をあげて多忙かつ充実した1年であった。支部山行は年に3～4回、ハイキング・セミナーが年3回程度。月例会には20名ほどが集う、どちらかと言えばサロンの雰囲気。支部であるが、支部懇談会には支部会員の半数近い60名の支部会員が参画し、25支部190名の皆さんとの交流を楽しんだ。今年は中部4支部ブロック交流会(5月17～18日)が、静岡支部主管で伊豆の伊東温泉にて開催される。懇親会と天城山登山の準備が、東部地区の会員を中心に進行中である。

《会議》

\* 4月17日(水) 通常総会 出席者数45名。支部長…大島康弘、事務局…有元利通、会報…熊岡達雄、ハイキング・セミナー…有元利通、山行…廣澤和嘉、自然保護…近藤浩之を選出。

\* 2水会(定例会) 5月15日、6月12日、7月10日、9月12日、

10月9日、11月13日、12月11日、2月12日、3月12日に実施。

《山行・野外活動》

\* 4月21日(日) 愛鷹山・呼子岳(1313m) 参加者6名

\* 5月26日(日) 富士山・富士宮口↓御殿場口 参加者19名

全国支部懇談会の下見も兼ねた山行。このほかにも高鉢コース、日本平コースを含めて10回前後、下見山行を実施した。

\* 12月1日(日) 熊伏山(1653m) 参加者6名

\* 2月2日(日) 富士山・双子山(1920m) 参加者12名

雨天につき富士山資料館見学に変更。

\* 2月8日(土・日) 根子岳(2128m) スキー登山

参加者11名。

《プロジェクト・地域振興活動》

\* ハイキング・セミナー

・ 5月19日(日) 八高山(832m) 受講生22名

・ 6月9日(日) 思親山(1031m) 受講生12名

・ 11月10日(日) 真富士山(1343m) 受講生15名

《広報・出版活動》

\* 5月 支部会報「不盡」73号発行。

\* 12月 同74号発行。

《その他の行事・懇親会》

\* 5月19日(土・日) 第3回中部ブロック交流会(山梨

支部主催) 富士山緑の休暇村 9名参加。

\* 8月7日(水) 納涼懇親会 参加者19名。

\* 10月20日(日・月) 第29回全国支部懇談会 ホテルア

ソシア 参加者189名。21日(月) ハイキング…A富士宮

口コース、Bブナ樹林散策コース、C日本平コース 参加者

合計171名。

\* 1月5日(日) 新年会 参加者43名。今年100歳になる

荻野恭一会員も出席され、挨拶をいただいた。

(有元 利通

東海支部

東海支部は平成25年度(2013年度)に支部設立52周年を迎えたが、50周年の平成23年度前後からいろいろな改革が進められており、支部の活性化も一層図られつつある。折しも日本山岳会も平成24年4月1日から公益社団法人として再出発しており、支部全体も新たな気持ちで、若い世代の活躍、ボランティア活動や登山教室の充実など積極的な活動を続ける中で、新しい流れへの対応なども進められた。

《会議》

\* 5月18日(土) 支部通常総会 平成25年度通常総会が東海支部ルームに隣接する高砂殿で開催された。委任状を含めた

179名が出席。総会に先立ち、総務委員会により新たに支部へ入会した会員を対象に、支部で作成した映像資料を用いてオリエンテーションが行われた。

\*常務委員会 毎月第4水曜日に支部長、副支部長、各委員長が参加して開催され、支部運営の基本事項について審議が行われた。

\*各委員会 支部活動の基本的組織である委員会が毎月開催され、活発な意見交換がなされた。

#### 《山行・野外活動》

\*クスムカングル登山隊の派遣

ヒマラヤのクスムカングル峰（6369m）を、南東壁からアルパイン・スタイルで登攀する東海学生連盟の東海支部登山隊は、平成25年3月19日、南東壁を完登し頂上まで40mの地点まで到達した。

\*登山教室の充実

登山教室は従来から中日新聞、朝日新聞、NHKの各文化センターに設置され、誰でも入会できる講座を設け、講師を派遣していた。このようななかで、最近の山ガールと呼ばれる若い女性の入会希望も多くなり、前年度から中日教室に山ガール講座を設けたが、希望者も多く順調に活動している。

\*東海Youthの活躍

山ガール講座の発足に伴い、その卒業生の受け皿として、

さらに東海学生山岳連盟の活発な活動に伴い、若手の育成を組織的に行なう必要があるとの観点から「東海Youth」が活動している。入会資格は、向上心のある40歳未満の登山初心者で、男女を問わず、東海支部が関係する登山教室で一定期間受講した者、もしくは登山教室委員会で承認された者、としている。在籍期間は2年間とした。

\*支部友会の改革

東海支部独自の制度である支部友会は、登山教室の卒業生の受け皿として発足して20年以上が経過した。組織活性化の一環として、在籍期間を3年間として、その間に日本山岳会に入会するか、自らの責任で活動するかの選択をすることとした。現在、組織変更に伴う諸問題への対応を進めている。

\*ボランティア活動

従来から知的発達障害児の集まりであるスペース・オリンピックス（SO）愛知の支援登山を行なってきたが、本年も鈴鹿・朝明渓谷にて1泊登山を行なった。さらに視覚障害者支援登山にも取り組んだ。

\*同好会の活躍

同好会とは、東海支部会員が同好の士と当支部の事業目的に沿った多様な活動を通じて有意義なクラブライフを享受しようとする集りで、現在8組織があり、活発に活動している。

\*猿投の森づくりの会

猿投の森づくりは継続的に進めているが、猿投の森の隣接地、約1万5000㎡の山林の寄贈を受けることができた(「JAC猿投の森」と命名)。この森の林床に十分陽が入るように整備して、ヤマザクラをはじめとする落葉樹の種類を増やし、それらに依存する昆虫や動物が生息する多様性のある森づくりを目指す。この活動は、猿投の森づくりの会と名古屋大須ロータリークラブの協働プロジェクトとして展開している。

#### 《プロジェクト・地域振興活動》

##### \*第1回夏山フェスタの開催

6月29日～30日、名古屋ウイंकあいち8階にて開催された。主催者である中部経済新聞社より東海支部に協力依頼があり、それに応じて全面的に支援した。15の山小屋をはじめ、登山用具メーカー、自治体など多数の出展者を得て開催され、2日間で4600名の参加を得た。

##### \*遭難事故多発緊急集会

近年、鈴鹿をはじめ低・中級山岳で遭難事故が多発している。支部の山行も遭難事故が起さる危険性をはらんでいる。その実態の認識と事故防止対策を学習する集会を開催した。日時・26年2月23日午後7～9時 場所・OMCビル講堂 講師・居村年男氏(三重岳遭難対策委員長) 小古真也氏(三重県警四日市西警察署) 参加者・130名(内一般20名)。

#### 京都・滋賀支部

年初予定どおり、雨天中止を除き全計画を実施した。海外山行はスイス、ベルナー・オーバーラントの登山とトレッキングを実施、グリンデルワルト村、ツェルマット村で歓迎会を催していただき感激した。京丹後市教育委員会から依頼された「初心者トレッキング講習会」は予定外であった。総会では『梅棹忠夫』(中公新書)の著者・山本紀夫氏に今西錦司賞が授与された。また、南極越冬隊員・横山宏太郎氏による講演「南極とヒマラヤで学んだこと」が行なわれ、懇親会では南極の水でオンザロックを楽しんだ。

#### 《会議》

\*4月6日(土) 通常総会 京都大学薬友会館 出席32名。

平成24年度事業・収支決算報告。25年度事業・予算案承認。

今西錦司賞授与、講演会、懇親会。

\*役員会 毎月第1水曜日(第2水曜日) 事業報告・計画確認。

\*自然保護部会 5月16日(木)、8月26日(月)、11月25日(月)、

2月27日(木) 事業報告と計画確認。参加5～7名。

\*山行・海外部会 2月17日(月)に「ベトナム最高峰ファンシーパンと世界遺産ハロン湾クルーズ」2014年11月22日

(土)～29日(土)と決定。参加9名。

《山行・野外活動》

\*支部山行 6月2日(土) 今西錦司レリーフを守る会、参加

20名。7月13日(土)～15日(月) 夏山／御嶽山、参加6名。

7月27日(土) 納涼山行／大文字山、参加17名。8月3日

(土) 沢登り／奥飛騨・ソウレイダニ、参加3名。9月14日

(土)～16日(月) お月見山行／米山・戸倉山、参加4名。10

月12日(土)～14日(月) 秋山／嶽ノ峰・金山・天狗、参加

3名。12月21日(土)～23日(月) スキー講習会／妙高、4

名。1月5日(日) 初詣山行／三上山、参加11名。2月15日

(土)～16日(日) スキー／野麦峠、参加6名。

\*海外山行 5月30日(木) 懇親山行／愛宕山。6月9日(日)

岩登り訓練／金比羅山、参加9名。7月19日(金)～21日(日)

餓鬼岳、参加3名。8月29日(木)～9月9日(月) スイス、

ベルナー・オーバーラントの山・登山とトレッキング、参加

8名。

\*平日例会山行

4月25日(木) 己高山、参加5名。5月16日(木) 横山岳、

参加9名。6月13日(木) 大黒山／妙理山、参加7名。7月

11日(木) 音波山、参加8名。9月26日(木) 安蔵山／谷

山、参加6名。10月24日(木) 椿坂峠／柳ヶ瀬山、参加7名。

11月21日(木) 椿坂峠／長野屋峠、参加7名。12月19日(木)

松尾山・烏ヶ岳、参加12名。2月13日(木) 行者山、参加7名。

\*山歩会

4月23日(火) 鶏冠山／竜王山、参加8名。5月28日(火)

沢山、参加6名。6月25日(火) 赤坂山、参加8名、7月23

日(火) 小野村割岳、参加13名。9月24日(火) 明智越え、

参加7名。10月22日(火) 三上山、参加8名。11月26日(火)

交野山、参加7名。3月25日(火) 蓬萊山・権現山、参加7

名。

\*他支部との合同山行 9月21日(土)～23日(月) 広島支部

／御在所岳、参加(京滋16名、広島17名)。11月16日(土)～17

日(日) 5支部懇親山行 金勝アルプス、参加(京滋13名、

他支部31名)。3月1日(土)～2日(日) 5支部スキー山行

飯縄山、参加(京滋6名、他支部28名)。

\*自然観察会 10月5日(土)～6日(日) 森の勉強会／三田・

有馬・六甲山、参加2名。

\*歴史と文化の山旅 6月16日(日) 大阪船巡りと天保山、参

加3名。11月10日(日) 近つ飛鳥古墳巡り、参加5名。3月

8日(土) 備中松山城・足守・高松城址、参加6名。

《プロジェクト・地域振興活動》

\*自然保護環境保全事業 4月30日(火)、5月21日(火)、8

月25日(日)、10月14日(日)、12月15日(日) 比良・八雲ヶ

原を守る会（スキー場跡地八雲ヶ原の崩壊を防止するための作業）

\*地域貢献事業 1月28日（火）、2月4日（火）、2月22日（土）、3月11日（火）、3月25日（火） 京丹後市教育委員会主催の「平成25年度初心者トレッキング講習会」全5回の講師を依頼されたので実施した。

《その他の行事、懇親会》

\*小島烏水祭 4月13日（土）～14日（日） 四国支部 参加1名。

\*自然保護全国集会 7月6日（土）～7日（日） 立山室堂、参加4名。

\*全国支部懇談会 10月20日（日）～21日（月） 静岡支部／富士山、参加3名。

\*新年会 1月15日（水） 京都平安ホテル 参加54名。

\*森づくり連絡協議会 3月21日（金）～22日（土） 広島、参加1名。

（酒井 展弘）

## 関西支部

関西支部は、平成27年（2015年）に支部設立80周年を迎える。記念事業を充実したものにするため、記念行事・80年史

編集・海外登山などのプロジェクト・チーム（PJ）を立ち上げると共に、委員会やPJなどの集会の利便性を図るため、昨年11月に大阪駅近くに事務所を移転した。

また、会員の連帯感を深めるために、近畿分水嶺踏査に続いて「関西支部県境縦走」を昨年1月から開始した。兵庫県・岡山県、兵庫県・鳥取県、兵庫県・京都府、京都府・大阪府、大阪府・奈良県、奈良県・和歌山県の県境を踏査する約800kmに及ぶ大縦走は、本年2月に前半の瀬戸内海から日本海への縦走を終了し、3月より日本海から太平洋に向けての縦走を始めた。

公益目的の登山教室は初級・中級に上級コースを加え、安全登山啓発の充実を図った。自然保護関連では、「本山寺の森林づくり」を中心に自然環境の保全、回復を目指した活動を行なった。

《会議》

\*4月17日（水） 通常総会 事業報告・計画、決算報告・予算などの原案を満場一致で可決。終了後懇親会実施（当日参加者42名）。

\*委員会 5月、7月、9月、11月、12月、2月、3月の7回実施し、延べ129名が出席。

\*総務委員会 6月、8月、10月、1月に開催。

\*山行委員会 4月、2月に開催。

\*自然保護委員会 4月、7月に開催。

\*支部報編集委員会 4月、5月、8月、11月、2月に開催。

\*80年史編集会議 4月、5月、7月、9月、10月、11月、2月、3月に開催、1月30日(木)に「80年史座談会」を行なった。

\*80周年記念行事PJ 12月に開催。

\*80周年記念海外登山PJ 6回開催。

### 《山行》

\*関西支部県境縦走 瀬戸内海側・真尾鼻から始めた県境縦走は、本年2月に日本海側・汐吹岬に到達して、250kmの縦走を終了した。延べ日数24日、延べ238名(会友23名、会員外38名、サポート7名)。

\*4000山グランプリ(テント山行) 延べ日数24日、延べ122名(会友4名、会員外6名)。

\*ゆるやか山行(里山探訪Ⅱ歴史と文化を訪ねる) 8回実施、延べ180名(会友45名、会員外20名)

\*山の日関連行事「わんぱく探検」 6月2日(日)有馬富士公園、参加13名。

\*海外登山 7月27日(土)～8月3日(土) パプア・ニューギニア、ウイルヘルム山(4508m)、参加5名(会員外4名)。

\*沢登り 8月31日(土) 四国・白猪谷、参加13名(四国支部

5名、会員外3名)。

\*5支部合同スキー 3月1日～2日 飯縄山、参加12名。

\*レスキュー講座 座学2回、雪上研修／3月15日(土)琵琶湖バレー、参加延べ16名。

### 《安全登山啓発》

\*登山教室／初級 座学3回、実技9回(北摂の藪山) 実施、参加延べ55名。

中級 座学3回、実技9回(六甲山系の沢歩き) 実施、参加延べ53名。

上級 座学3回、実技9回(岩登りの初歩Ⅱ蓬萊

峡、百丈岩、不動岩、沢登りの初歩Ⅱ金剛山・妙見谷、京都北山・毘沙門谷、滝畑上山谷、積雪期Ⅱ比良・蓬萊山2回、比良・堂満岳1ルンゼ) 実施、参加延べ42名。

### 《プロジェクト》

\*本山寺の森林づくり

4月2日(火) 理事会 参加5名。4月12日(金) 総会 参加11名。9月5日(木) 納涼懇話会 参加10名。12月15日(日) 納山会 参加9名。4月～3月まで15回、間伐・植生調査を実施。参加延べ120名。12月～2月まで9回の打ち合わせを実施。参加延べ53名。

\*東お多福山草原復元活動 東お多福山草原保全・再生研究会

(8団体の協働活動)

5月～3月までの5回、植生調査と整備作業を実施。参加延べ11名。

《観察会ほか》

- \*5月5日～6日 自然観察会 神鍋・大杉山 鹿被害状況観察、参加7名。7月6日～7日 全国自然保護集会 参加2名。8月21日(水) 大台ヶ原・三津河落山 夏の冷温帯樹林観察、参加3名。10月5日～6日 第17回森の勉強会(京都・東海・関西支部共催) 参加19名。3月21日～24日 第8回森づくり協議会 参加5名。

\*9月29日(日) 第24回藤木祭 芦屋高座の滝前(大阪府・兵庫県山岳連盟共催) 参加130名。

《広報》

\*「支部報」151号、「別冊支部報51-100号総目次」(6月)、152号(9月)、153号(12月)、154号(3月) 発行。

《講演会など》

- \*1月29日(水) 新年会 梅田大東洋 参加47名。
- \*8月29日(木) 夏季懇談会「世界の沢を巡って」 講師 茂木完治会員(海外週行同人代表) 大阪凌霜クラブ 参加50名(公友1名、一般5名)。

\*11月16日(土) 著者と語る会「関西支部県境踏査と峠たち」 講師 須磨岡輯会員 大阪府立図書館 参加44名(一般13

名)。

《支部ルーム移転》

11月17日(日)、〒53000015 大阪市北区中崎西1丁目4番22号 東梅田ビル3F304号室に移転した。

(重廣 恒夫)

山陰支部

当支部は2010年に創立60年となり、この間10年を区切りとして記念誌の発行や記念事業を実施してきた。それらの経過から、次の2020年の創立70周年に向けて、島根県東部の出雲地方と鳥取県西部の伯耆地方の山々を、古事記に絡めて調査を行ない『雲伯の山々』(仮称)を発行することや、その昔、出雲の国から大和の国への伝達手段とされた狼煙ルートの調査を企画している。このため平成25年度は、『日本三百名山登山ガイド』の踏査と合わせ、月例山行などで取り組んできた。また、公益事業の一環として、支部で発行している「大山概念図」を現状に合わせて改訂版を作成し、関係機関に配布するなど実施した。

ご多分に漏れず高齢化の進む当支部にあつて、その目標達成が危ぶまれる状況にあるが、その打開策として会員の意志疎通を密にし、登山の啓蒙啓発、情報発信を積極的に展開し、若手

会員の入会促進に努め、支部の活性化を図ることが恪勤の課題となつてゐる。

《会議》

\* 4月27日(土) 通常総会 米子市文化センター 出席22名  
平成24年度事業報告・同事業計画、役員改選を議題としたが、執行部提案を全会一致で承認した。特に25年度事業計画については、支部70周年記念事業で取り組む『雲伯の山々』(仮称)発刊と、出雲と大和を結ぶ狼煙ルートの調査に重点的に取り組むことを決議した。また、公益社団法人としての支部独自の事業計画を立案して、実行することとした。役員改選については、白根一氏(会員番号8228番)に代わり中井俊一氏(会員番号9772番)を支部長候補として本部に推薦することとした。総会終了後、会場を米子駅前ラホールに移し、盛大に懇親会を開催した。

\* 12月14日(土) 山陰支部年次晩餐会 米子ワシントンホテル 出席17名。自転車で世界一周に挑戦した「自転車野郎アキラ」こと加藤彰さんをゲストに、盛会裏に終わった。加藤さんは、通算7回の旅で111ヶ国、14万261kmの轍を刻み、6月14日に故郷、米子市にゴールした人。

《山行・野外活動》

\* 5月4日(土) 大山の概念図調査、大山・檜尾根のキリン峠位置確認 参加3名。

\* 5月14日(火)～16日(木) 干支の山登山／長野県下伊賀郡阿智村・蛇峠山(1664m) 参加3名。

\* 6月9日(日) 『日本三百名山登山ガイド』調査山行／中国山地・那岐山 サラサドウダンが満開で、快適な調査山行となる。参加5名。

\* 7月15日(月) 『日本三百名山登山ガイド』調査山行／中国山地・扇ノ山 道中大雨が登山口に着いて雨がやみ、涼しいなか順調に調査を終える。参加3名。

\* 9月14日(土)～15(日) 『日本三百名山登山ガイド』調査山行／三瓶山 参加5名。

\* 10月20日(日)～21日(月) 第29回全国支部懇談会出席 富士の新五合目より宝永火口を回り、二合目の御殿場駐車場まで行動する。参加4名。

\* 11月22日(金) 月例山行／中国山地・琴引山 参加4名。

\* 11月22日(金) 広島支部、四国支部、山陰支部交流事業打合わせ 広島支部ルーム 参加2名。

《プロジェクト地域振興活動》

\* 1月18日(土)～19日(日) 「大山冬山パトロール」冬山安全登山指導・公益 参加4名。

\* 3月22日(土)～23日(日) 「大山冬山パトロール」冬山安全登山指導・公益 参加3名。

\* 9月8日(日) 大山汚泥キャリアダウンするボランティア

## 大山頂上小屋の循環型浄化

槽のエコトイレ汚泥を容器に詰めて登山口まで降ろす作業・公益 参加4名(平成20年から始まり、今年で6年目を迎える。延べ参加者数1815名、延べ排出量4・1t 主催・鳥取県生活環境局)

## 《広報・出版活動》

- \*11月22日(木) 会報「きやらぼく」第11号発刊。
- \*10月15日(火) 「大山の概念図」7号改訂版発刊。

(中井 俊一)

## 広島支部

5代目支部長に兼森志郎副支部長が就任。新体制の重点施策として安全登山推進本部、ジュニア・ユース育成本部、総務本部を委員会から本部に改組した。前年9月に開設した支部ルームの活用が盛んになり、ルーム内の書棚には本部や会員から寄せられた山岳図書770冊が、4月からの貸出しを待っている。

会員数は期首151名。入会17名(個人16名、団体1名)退会4名、期末22名。支部友会員・会友を含む総数は197名。

## 《会議》

\*通常総会 4月6日(土) ホテルJALシティ広島 事案は支部新組織、役員改選ほか 出席110名(当日出席64名、

委任状46名)。

\*役員会 6月20日(木)、1月23日(木)、3月13日(木) 拡  
大役員会 10月17日(木) 支部ルーム。

\*総務本部役員会 13回 支部ルーム。

\*名誉役員会議 11月3日(水) 4名の顧問出席。支部ル  
ム。

\*新入会員オリエンテーション 5月20日(月) 新入会員20  
名出席 支部ルーム。

\*諸規程類の改正 ①支部ルーム管理運営規程に「ルームメイ  
ト制の導入」②自動車同乗者の燃料代金などの利用負担に「負  
担金額の改正」③登山計画書などの作成要領に「計画書、報  
告書の提出ルートと報告体制の改正」④会員への連絡体制の  
整備に関する申し合わせに「郵送料の節約と事務簡素化のた  
めの改正」。

\*支部ルームの活用 4月～2月(11ヶ月間) 387件(35・  
2件/月)、2402名(186名/月)、前年度後期763名  
↓今年度前期1162名(152%)。

## 《山行・野外活動》

\*第1山行委員会例会山行 20回 延べ参加者375名。主に  
県内。県外では白馬岳、木曾駒ヶ岳、阿蘇山、三嶺、氷ノ山。

\*第2山行委員会例会山行 11回 延べ参加者163名。ネ  
パール・ヒマラヤ(ロブチェ・イースト)5名、エベレスト街

道トレッキング12名)、大山、立山、後立山連峰、白馬岳、常念岳、石鎚山など。

\*広島支部アルパインクラミングチーム(HAT) 年間40回例会・自主訓練 延べ約300名。

\*支部友委員会例会山行 年4回(2回は雨天中止) 延べ参加者34名。古道・街道巡り2回 延べ参加者33名。

\*第10回京都・滋賀支部交流会 9月21日(土)〜23日(月)御在所岳 参加者(広島支部17名、京都・滋賀支部16名)。

\*第5回北九州支部交流会 10月26日(金)〜28日(月)三瓶山参加者(広島支部16名、北九州支部13名)。

\*第29回全国支部懇談会 10月20日(土)〜21日(日)ホテルアソシア静岡、富士山 当支部3名参加。

\*年次晩餐会 12月6日(土) 7日(日)東京・品川プリンスホテル 当支部6名参加。

《プロジェクト・地域振興活動》

\*10年目の中国新聞文化センター登山講座(公益事業)

講師派遣(広島・呉・福山・岩国の4地区5教室で「里山ハイキング」「初級登山講座」「中級登山講座」「ユース登山講座」「ジュニア自然学校」計11クラスを運営) 受講者数延べ1363名、派遣講師数280名。

\*第11回ひろしま「山の日」県民の集い(公益事業)「八幡高原・霧ヶ谷湿原再生化事業」 6月1日(土)当支部参加28名。高

岳/竜王山の「初心者のための登山教室」講師 6月2日(日)。

\*西中国山地・高岳山頂の景観回復および環境整備(公益事業)「分水嶺新道整備(聖分かれ・野田の百本松)」 11月12日(火)、13日(水) 参加者延べ26名。「聖山山頂周辺整備」 11月27日(水) 参加者13名。「高岳山頂周辺整備」 12月7日(土) 参加者17名。

\*第8回JAC森づくり連絡協議会(東広島市西条町) 3月21日(金) 基調講演「里山資本主義」NHK・井上恭介チーフプロデューサー「各支部活動報告」など。 3月22日(土)「龍王山登山と憩いの森視察」参加者総勢各41名(内広島支部18名)。

\*ジュニア・ユースの育成(公益事業) 4つのクラブ立ち上げを決定。①ジュニアクラブ(小学生) ②中・高クラブ(中学生) ③学生クラブ(大学生) ④ユースクラブ(成人39才以下)。

学生クラブ(広島市内の大学山岳部およびワンダーフォーゲル部に対する技術支援)は実施中。

《広報・文化活動》

\*広島支部報「JAC Hiroshima」1/1、4/1、7/1、10/1号(通巻50号)の発行。

\*山楽(さんがく)サロンの開催 ⑤4月24日(水)「地図の読み方」佐藤建 ⑥6月12日(水)「山で蝶を楽しむ」澤野邦彦

⑦9月19日(木)「西中国山地の魅力」野間弘 ⑧「ロコモティ

ブ・シンドロームとは」杉村功 ⑨1月16日(木)「雪山登山の魅力」尾道憲二 ⑩3月26日(水)「アンデスの巨大電波望

遠鏡」牟田泰三 6回開催、参加者延べ120名。

《その他の行事・懇親会》

\*忘年会12月7日(土) 齋山荘 参加者17名。

\*新年会1月4日(土) 支部ルーム 参加者25名。

(国枝 忠幹)

## 四 国 支 部

四国支部は発足2年目にあたる平成25年4月14日、高松市・

峰山公園で第1回小島烏水祭を開催した。小島烏水顕彰碑は全国の会員や地元有志、企業からの寄付金により建立した。これにより香川県で日本山岳会四国支部の活動が知られ、新入会員獲得に繋がった。26年3月には、支部会員が所有する事務所を無償で利用させてもらう形で、念願の支部ルームを開設した。2年間の公益活動、支部活動の結果、発足時には34名であった会員は、今年度末には52名に増加した。

《会議》

\*5月25日(土) 通常総会 松山市「にきたつ会館」24年度の事業・決算報告、25年度の事業・予算計画を審議。出席者47

名(当日出席21名、委任状26名)。

\*毎月1回 会員有志の情報交換会 徳島市 延べ参加108名。

\*11月23日(土) 3支部(山陰、広島、四国) 交流登山打合せ 広島支部ルーム 参加12名。

《山行、野外活動》

\*5月12日(日) 下兜山↘上兜山(愛媛県) 参加10名。

\*6月9日(日) 今宮道↘石鏡山(愛媛県) 参加10名。

\*7月6日(土) 明神山(愛媛県) 関西支部と合同 参加8名。

\*7月7日(日) 東三方ヶ森(愛媛県) 関西支部と合同 参加8名。

\*7月14日(日) 一の谷↘笹ヶ峰(高知県) 参加8名。

\*8月31日(土) 白猪谷↘瓶ヶ森(高知県) 関西支部と合同 沢登り 参加11名。

\*9月1日(日) 稲叢山↘西門山(高知県) 参加10名。

\*10月13日(日) 高滝↘二の森(愛媛県) 参加10名。

\*11月30日(土) 鈴ヶ森(高知県) 関西支部と合同 参加16名。

\*12月1日(日) 蟠蛇ヶ森(高知県) 関西支部と合同 参加11名。

\*12月15日(日) 菅生↘塔の丸(徳島県) 参加11名。

\* 1月19日(日) 鞍掛山他(香川県) 参加7名。

\* 3月9日(日) 八面山(大佐古峰(徳島県)) 参加14名。

《広報・出版活動》

\* 3月28日(金) 徳島新聞社・愛媛新聞社・高知新聞社発行「四国の山歩きベスト50」の監修。

《プロジェクト・地域振興活動》

\* 4月14日(日) 第1回小島烏水祭 高松市・峰山公園 小島烏水顕彰碑の除幕式、記念式典後、高松城内の「披雲閣」で記念講演会。参加110名。

\* 毎月1回(6月～3月) 初心者対象の登山教室 読図、ロープワーク、雪山の野外講習を実施。参加延べ28名。

\* 8月18日(日) 国定公園監視活動(丸石登山道ゴミ收拾) 参加5名。

\* 9月14日(土)～15日(日) 子ども登山学校 徳島県ボーイスカウト連盟との共催行事。14日は菅生ロッジでキャンプ、15日は剣山登山。参加40名。

《その他の行事・懇親会》

\* 4月13日(土) 小島烏水祭前夜祭 高松市「花樹海」 参加103名。

\* 12月14日(土) 菅生ロッジで忘年会 参加13名。

\* 3月3日(月) 支部ルーム(徳島市) お披露目会 参加14名。

\* 3月23日(日) 登山教室記念講演会 徳島市「千秋閣」 節

田重節副会長による「植村

直己さんの思い出」「コンビニ登山の危険」と題する講演を実施。参加74名。講演会後懇親会 参加15名。

(小林 京子)

## 福岡支部

《会議》

\* 5月19日(日) 平成25年度通常総会 福岡市中央区・中央市民センター 出席23名、委任状37名、計60名。中馬重人支部長の挨拶に続き、平成24年度事業報告・会計報告、平成25年度事業計画・会計予算などが審議され承認された。総会後、記念講演として渡部秀樹会員による「ブータン横断の旅と幸福度」を開催した。懇親会は会場を赤坂の「みくに」に移して開催され、24名が出席した。

\* 9月28日(土)～29日(日) 九州5支部懇談会(福岡支部主催) 太宰府市ホテル・グランティア 5支部から約70名の会員が参加。森武昭会長をはじめ各支部長より活動の現状が報告され、記念講演は小西信二氏(太宰府市文化ふれあい館館長)による「宝満山の国史跡指定について」が行われた。懇親会も同会場にて。翌日は記念山行として①四王子山歴史

ハイキングコース(21名)、②宝満山登山コース(24名)、③自由散策コース(4名)の3つに分かれて実施した。

\*支部役員会 例年どおり毎月第2火曜日に開催。

#### 《山行・野外活動》

\*南アルプス・聖岳・光岳縦走山行 8月2日(金)～6日(火) 会員4名が参加した。【コース】樫島→聖平→聖岳→聖平→上河内岳→茶臼山→易老岳→易老渡。

\*山研を利用し上高地・北アルプスへ 8月28日(水)～9月1日(日) 会員9名が参加。【コース】妻籠→南木曾→松本→上高地→焼岳往復→上高地→徳本峠往復→上高地→信濃大町。

\*支部忘年登山会／十坊山 12月14日(土) 会員20名が参加。

【コース】福吉駅→十坊山→まむしの湯→福吉海岸カキ小屋(忘年会)。

#### 《プロジェクト・地域振興活動》

\*パハルフエスタ in 九重 4月28日(土)～29日(日)九重山・法華院温泉山荘にて開催。主催：パハルフエスタ実行委員会、後援：日本山岳会福岡支部、東九州支部ほか。参加者50名(当支部会員7名)。当支部は登山教室、自然観察山行に講師派遣などで協力した。

\*岳人のつどい・山の講演会 2月9日(日) 太宰府市・太宰府館まほろばホールで開催。講演「世界の山々を歩いて」渡

部秀樹会員によるスライドとトーク。参加者約160名。また同会場にて懇親会を開催した(参加者56名)。

\*自然観察登山／福万山と由布岳→自然を守り育む野焼きの風景を訪ねて→ 3月8日(土)～9日(日) 18名が参加し、福岡支部が講師役として案内した。

#### 《広報・出版活動》

\*3月10日「支部報」No.27を発行。主な内容…1. 「2012・13年度日本山岳会福岡支部の動き(支部長・中馬董人)」、2. 特集「多彩な顔ぶれの九州の岳人たち」として「福岡岳人史異聞：日本の登山界を引っ張った男たち」(松尾良彦)、「国史跡・宝満山(小西信二)」「プータンの幸福度について(渡部秀樹)」「書籍紹介・『屋久島山岳大系』(未来への提言) 太田五雄著(渡部秀樹)」3. 海外山行報告「南パタゴニア(風の大地)旅行(中馬董人)」、「北イタリアのドロミテ山群とオーストリア最高峰展望(山川万里子)」4. 福岡支部活動・山行報告ほか。

(渡部 秀樹)

## 北九州支部

特筆すべきは、平成25年5月1日付にて、思いもかけずルームを持つことができたことである。今後はこのルームを発信場

所として、会員同志の融和と新規会員の獲得に結びつけていきたいと思う。

《会議》

- \* 4月20日(土) 第14回通常総会 ホテルニュータガワ 出席者39人、委任状22人、計61人。伊藤支部長が議長となり、平成24年度の事業報告と収支決算報告、監査報告が承認され、引き続き平成25年度の役員改選(案)、事業計画(案)、収支予算(案)、支部規約改正(案)、ルーム開設(案)が審議され、可決承認された。続いて「山口県西部に飛来するアサギマダラ」の演題で記念講演会が行なわれた。講師〓当支部会員・福村拓己氏(支部友「北九425」)

- \* 臨時役員会 4月2日(火)、7月29日(月)
- \* 定例役員会 5月15日(水)、7月3日(水)、9月4日(水)、11月6日(水)、1月8日(水)、3月5日(水)

《行事》

- \* 4月7日(日) 英彦山清掃登山 参加35人。ゴミ23袋を回収。
- \* 4月13日(土)～14日(日) 小島烏水祭(四国支部主管) 出席5人。
- \* 5月1日(水) 当支部ルーム開設披露 来賓6人のほか当支部会員出席27人。
- \* 5月21日(火)・23日(木) 門司区の幸幼稚園の風師山遠足

登山をサポート参加12人。

- \* 5月26日(日) 第48回英彦山山開き 出席20人。
- \* 6月23日(日) 山のトイレ福岡協議会総会 出席3人。
- \* 7月6日(土)～7日(日) 自然保護全国集会(富山市) 出席1人。
- \* 9月28日(土)～29日(日) 九州5支部集会(福岡支部主管) 出席13人。
- \* 10月11日(金)～13日(日) 日本山岳協会主催「安全登山指導者講習会」(阿蘇) 出席2人。
- \* 10月20日(日)～21日(月) 第29回全国支部懇談会(静岡支部主管) 出席6人。
- \* 10月26日(土)～28日(月) 広島支部との交流登山 島根県・三瓶山 参加者…広島支部16人 当支部13人。
- \* 11月2日(土) 第29回宮崎ウェストン祭 出席14人。
- \* 11月7日(土) 年次晩餐会 品川プリンスホテル 出席7人。
- \* 12月13日(金) 「年忘れの集い」福岡サンヒルズホテル 出席37人。

《山行》

- \* 4月6日(土) 皿倉山での山岳技術専科 参加13人。
- \* 4月27日(土) 平尾台で岩登り教室 参加14人。
- \* 5月5日(日) 脊振山(『日本三百名山登山ガイド』取材)

参加4人。

\* 5月7日(火)～8日(水) 五葉岳・夏木山 参加11人。

\* 5月11日(土) 皿倉山での山岳技術専科 参加10人。

\* 6月8日(土)～9日(日) 尾鈴山(雨天により観光に変更)  
参加15人。

\* 6月15日(土) 福智山・七重の滝沢登り 参加5人。

\* 7月13日(土) 皿倉山での山岳技術専科 参加16人。

\* 7月17日(水)～21日(日) 荒川三山～赤石岳縦走 参加14人。

\* 7月27日(土) 脊振山(『日本三百名山登山ガイド』取材)  
参加7人。

\* 8月10日(土) 皿倉山での山岳技術専科 参加19人。

\* 8月11日(日) 平尾台・貫山(「親子登山」の取材) 参加5人。

\* 8月22日(木) 平尾台・貫山(「親子登山」の取材) 参加5人。

\* 9月7日(土) 皿倉山での山岳技術専科 参加20人。

\* 9月21日(土) 平尾台で岩登り教室 参加11人。

\* 10月21日(月)～23日(水) 雨飾山 参加5人。

\* 11月3日(日) 清栄山 参加12人。

\* 11月3日(日) 祖母山 参加2人。

\* 11月27日(水) 田原山 参加10人。

\* 12月8日(日)～9日(月) 天城山 参加5人。

\* 1月18日(土) 妙見岳・普賢岳 参加4人。

\* 3月15日(土)～16日(日) 大佐スキー場 参加6人。

\* 3月16日(日) 米神山 参加13人。

《自然環境保全事業》

\* 九州森林管理局より委嘱を受けた森林保全巡視員27人が巡視活動を行なった。また、登山路の清掃など自然環境保全事業を行なった。

《広報活動》

\* 会員相互の情報伝達メディアとして支部報を活用するため、年4回「JAC北九だより」を発行した。

《地域貢献事業》

\* 従来より進めてきた、市民センターなど公共の場をベースにした登山教室と共に、地元の幼稚園の遠足登山のサポートを行なった。

(伊藤 久次郎)

## 熊 本 支 部

平成25年度も支部会員相互連携よろしく、大きな成果を残すことができたように思う。特に、今年度から取り組み始めた「森づくり」では、これまで山に入りながら気付かなかった自然の

摂理が理解でき、自然に関わりながら、自然を守る心も芽生えてきたようだ。熊本支部の1年間の活動をまとめてみた。

《会議》

\* 4月21日(日) 支部総会 熊本交通センターホテル 58名  
(内委任状28名)。

\* 支部役員会 毎月第2火曜日(役員9名) 支部事業の企画、実施、報告、反省。

《山行》

\* 5月12日(日) 阿蘇の野の花観察会 杵島岳・往生岳 参加27名。イワカガミが満開。

\* 6月23日(日) 第10回登山教室 霧島韓国岳〜大浪池縦走 参加47名。

\* 8月4日(日) 第9回登山研修会 菊池水源原流域で沢登り研修 参加10名。

\* 9月8日(日) 第11回登山教室 南阿蘇外輪山・地藏峠〜俵山峠 参加30名。秋の花が満開。

\* 2月2日(日) 第10回登山研修会 九重山群で冬山訓練を予定するも雪なし 参加33名。

\* 2月15(土)〜16日(日) 第7回宮崎支部との交流登山 天草の山 冬でも緑豊かな照葉樹林と観海アルプスの縦走登山で両支部の交流を深めた 参加33名。

\* 3月16日(日) 千支の山／福岡県・馬見山 参加30名。巨大

な石灰岩の山に感動。

《プロジェクト・地域振興活動》

\* 4月27日(土) 第9回森林保全巡視登山／阿蘇・高岳(ミヤマキリシマ保護活動) 参加9名。

\* 7月7日(日) 熊本市水の森づくりボランティア育成活動 下草刈り、間伐、枝打ち、補植の研修。9月、11月、3月と年4回、延べ32名が参加。森づくりについて学ぶ。

\* 7月21日(日) 熊本市勤労青少年ホーム健康づくり支援講座 小岱山 前週に半日の座学を行ない、この日実技登山。参加23名。新入会者も出た。

\* 8月9日(日) 知的障害者支援登山／阿蘇・大矢岳 大雨で延期、日程調整できず。

\* 11月16日(土) 第10回森林保全巡視登山／阿蘇・高岳 清掃、山頂水場整備 参加12名

《会報・広報活動》

\* 「熊本支部報」を3回発行、現在32号まで。支部活動の連絡、実施報告用に「支部通信」を年間5回前後発行して、支部活動の連絡徹底に努めている。

《その他の事業》

\* 8月31日(土) 夏季例会ビールパーティー 会員・会友の親睦交流ができた。参加26名

\* 1月18日 新年晩餐会 参加27名。

\* 9月28日(土)～29日 九州5支部福岡大宰府集会 宝満山、四王子山登山 参加者が多く、「九州は一つ」の下、支部間交流ができた集会であった。本支部から参加8名。

\* 12月7日～21日(2週間) 「山の写真展 シェルパ」(会員撮影) 入場者約500名。出品者が多く、馬場会員のエベレスト遠征の貴重な作品も紹介された。

\* 12月15日(日) 「海外登山報告会」 安場会員のモンブラン一周の山旅は、あまり見たことのない角度からの写真や、可憐なアルプスの花々が見事だった。参加27名。

\* このほか、次のリーダー養成のために日本山岳協会の研修会(3日間)に3名派遣した。今年度は、高齢者、体調不良会員の支部退会が12名にもなった。支部の事業は大幅に増加しているのに、それに協力できない体調から退会を決定されるようだ。今までは登山だけで支部運営を続けてきたが、支部にもサロンのな活動の場を考えねばならない時期になったように思う。

(工藤 文昭)

## 東九州支部

平成25年度の東九州支部の活動は、4月13日の定期総会からスタートした。公益社団法人の支部として2年目の当支部の公

益事業は、前年に引き続いて一般初心者を対象とした座学講座4回、実践講座2回で構成する「登山入門教室」の開講をはじめ、12回目を数える、小・中学校生から一般初心者までを対象とした「青少年体験登山大会」の実施など、地域での登山普及に力を置く活動を重視した。また、スズタケ枯死とシカの食害実態調査や清掃登山など、環境面の活動にも取り組んだ。共益事業では月例山行や合宿山行、研修山行、忘年山行と忘年会など、会員・会友相互の交流と親睦とを中心にした登山活動を展開した。また、長年続けている韓国山岳会蔚山支部との相互訪問交流は、今年度は当方が韓国を訪問して雪岳山に登った。長年、当支部の支部長を務められた梅木秀徳氏が前年末に他界され、支部では氏が愛し続けた九重山で、多くの支部会員が参加して追悼登山も実施した。

### 《会議》

\* 4月13日(土) 定期総会 大分市・コンパルホール 会員・会友81名出席(内委任状41名)。平成24年度事業報告・会計決算報告・監査報告、平成25年度事業計画・会計予算などを承認。

\* 5月7日(水) 第1回役員会 コンパルホール 平成25年度事業の実施計画ほか。

\* 6月28日(金) 第2回役員会 コンパルホール 登山入門教室実施計画ほか。

\* 8月19日(月) 第3回役員会 コンパルホール 登山入門  
教室実施計画、青少年体験登山大会、韓国山岳会蔚山支部と  
の交流登山計画ほか。

\* 10月23日(水) 第4回役員会 コンパルホール 登山入門  
教室実践講座、忘年登山と忘年会ほか。

\* 1月17日(金) 第5回役員会 コンパルホール 平成26年  
度事業計画(本部提出)ほか。

\* 3月12日(水) 第6回役員会 コンパルホール 平成25年  
度事業報告・決算報告、平成26年度事業計画(案)・会計予算  
(案) など定期総会の議案審議ほか。

《公益事業》

\* 第12回青少年登山大会 9月22日(日) 牧ノ戸峠から久住  
山 71名参加。

\* 登山入門教室 一般対象受講者29名 座学…4回8講座(8  
月28日(水)、9月11日(水)、9月25日(水)、10月9日(水))  
場所…大分市・ホルトホール 実践講座…第1回 11月16日  
(土)～17日(日) 横岳キャンプ場と鋸山 第2回12月21日  
(土)～22日(日) 九重ヒュッテと泉水山、三俣山

\* 清掃登山 10月19日(土)～20日(日) 九重山(くたみ分か  
れ)～佐渡窪～坊ヶツル、鉾立峠～白口岳～本山道～展望台)  
参加10名。

\* 山の安全を祈る集い 8月4日(日) 荒天のため会場を法

華院の観音堂に移して実施。

\* スズタケ枯死とシカの食害調査 第1回6月8日(土) 第  
2回10月5日(土) 本谷山の西稜線の定点観測場所(大分植  
物研究会と共同作業)

\* 『大分百山』寄贈 12月25日(水) 高等学校での登山普及を  
目的に『大分百山』(改訂版・2002年4月発行)を県教育  
委員会を通じて県下の高等学校(県立49校、私立14校)の図  
書館および登山クラブに寄贈(寄贈部数 計24冊)。

《公益事業》

\* 月例山行 テーマ「九州の名山を登る」

4月27日(日) 祖母山(1756・4m) 6名参加。  
5月19日(日) 夏木山(1386・0m) 8名参加。  
6月22日(土)～23日(日) 大崩山(1643・3m) 15名  
参加。

7月27日～28日(日) 白髪岳(1416・7m)、市房山(1  
720・9m) 8名参加。

8月18日(日) 黒髪山(516m) 5名参加。

9月29日(日) 宝満山(九州5支部集会) 10名参加。

10月27日(日) 尾鈴山(1405・2m) 14名参加。

11月30日(日) 経ヶ岳、多良岳(996m) 10名参加。

12月14日(土) 15日(日) 忘年登山(犬ヶ岳、雁股山、木ノ  
子岳) 25名参加。

1月19日(日) 阿蘇・高岳(1592・3m) 17名参加。

2月8日(金)～10日(日) 大鏡柄岳(1236・4m) 御

岳(1181・6m) 12名参加。

3月24日(日) 行藤山(829・9m) 20名参加。

\*韓国山岳会蔚山支部との交流登山

10月11日(金)～14日(月) 韓国・雪岳山(13日夜、蔚山で  
交流・懇親会) 10名参加。

\*忘年山行および忘年会 12月14日(土)～15日(日) 山行／

14日・犬ヶ岳、15日・雁股山・木ノ子岳 忘年会／本耶馬溪

西谷「西谷温泉」参加29名。

\*登山技術・技能向上研修

積雪期登山訓練 5月2日(木)～7日(火) 立山・奥大日

岳 参加11名。

クライミング基礎講習 5月18日(土)・5月25日(土) 星

生崎 参加者6名。

\*合宿交歓会 10月19日(土) 九重・坊ヶツル「あせび小屋」

参加者11名。

\*新入会員オリエンテーション 6月28日(金) 大分市・コン

パルホール 参加新入会員・会友8名。

\*梅木秀徳前支部長追悼登山 4月14日(日) 九重・坊ヶツル

「あせび小屋」参加者32名。

\*喜寿お祝い登山 5月26日(日) 稲積山 該当者2名、参加

者14名。

《支部協賛事業》

\*ツール・ド・モンテローザ・トレッキング 7月23日(火)

～8月6日(火) 参加者6名。

《広報活動》

\*「支部報」の発行 4月25日／61号、7月25日／62号、10月  
25日／63号、12月25日／号外、1月25日／64号。

(飯田 勝之)

## 宮崎支部

当支部においては、年度当初の定例山行時に、過去に経験した  
ことのない重大滑落事故が発生し、会員の山行の萎縮や支部活  
動へ意欲の低下が懸念された。

このため早急に臨時総会を開催し、事故の反省と教訓を踏ま  
え、登山の原点に返り、一致結束して事故再発防止に努め、支  
部活動を推進することを誓い合った。3ヶ月の自粛期間後は、  
年間行事計画に基づく定例山行、こども登山教室、水源の森づ  
くり、および支部創立30周年に向けた諸準備活動など、順調に  
進めることができた。

さらに中央公民館まつり、および市民活動のパネル展の地域  
振興活動に積極的参加し、充実した支部活動が図られ、公益法

人として所期の目的を達成することができた。

《会議》

\* 4月13日(土) 通常総会 24年度事業・収支報告並びに25年度事業計画・収支予算案など 出席69名(当日出席43名、委任状26名)。

\* 6月8日(土) 臨時総会 滑落死亡事故報告および事故防止対策 出席66名(当日出席59名、委任状7名)。

\* 毎月第1木曜日 役員・委員長等会議(出席延べ120名)。

\* 毎月第1木曜日 定例登山研究会(出席延べ379人)。

\* 9月12日(土)・1月16日(木) 支部30周年記念事業準備委員会(出席21名)。

《山行》

\* 4月20日(土) 定例山行/玄武山 参加11名。

\* 9月14日(土) 定例山行/傾山 参加16名。

\* 10月20日(日) 定例山行/加江田溪谷 参加9名。

\* 10月20(日)~21日(月) 第29回全国支部懇談会 参加12名。

\* 11月2日(土) 第29回宮崎ウエストン祭(公益)/赤川浦岳 参加19名。

\* 11月11日(月) 玄武山登山道整備(公益) 参加5名(地元有志15名)。

\* 12月14日(土) 登山道点検・清掃登山(公益)/双石山 参加19名。

\* 1月12日(日) 定例山行/小松山 参加19名。

\* 2月8日(土) 定例山行/釈迦ヶ岳 参加18名。

\* 2月22日(土)~23日(日) 第7回熊本・宮崎支部交流登山(熊本支部主管)/次郎丸嶽・龍ヶ岳・念珠岳 参加18名。

\* 3月2日(日) 定例山行/諸塚山山開き 参加13名(一般参加700名)。

\* 支部30周年に向けての記念事業(県内神話にゆかりのある30座の踏査) 参加82名。

《自然保護環境保全事業(公益)》

\* 5月25日(土) わくわくの森づくりⅢ下草払い 参加5名(支部団体会員)

\* 7月21日(日) 田野の森下草払い 参加9名。

\* 9月8日(日) 田野の森下草払い 参加11名。

\* 9月29日(日) わくわくの森づくりⅢ(支部団体会員)下草払い 参加3名。

\* 3月9日(日) わくわくの森づくりⅢ(支部団体会員)補植 参加4名。

\* 3月16日(日) 野尻の森枝打ち 参加11名。

《地域貢献事業(公益)》

\* 11月23日(土)~24日 第19回宮崎市中央公民館まつり(支部活動写真、パネル作品出展) 参加35名(一般参加1600名)。

\* 2月22日(土) 宮崎市市民プラザ地域と市民活動の元氣創

出活性化事業「来てみないよ！みんなで輪っしよい！みやぎ  
き」（支部活動写真パネル作品出展）参加10名（一般参加2  
500名）。

《出版》

\* 「宮崎支部報」 4回発行

4月1日／44号、7月1日／45号、10月1日／46号、1月1  
日／47号（A4判、各8ページ、200部印刷）

（末永 軍朗）

# 委員会の活動報告

## 公益法人運営委員会

平成24年4月1日、社団法人日本山岳会の解散登記および公益社団法人日本山岳会の設立登記を行なった。

新制度に関する諸問題を、民間公益活動の視点から検討を行なうと共に、円滑な新制度への移行に向けた活動に、全力を挙げて取り組んでいる。コンプライアンスの徹底とガバナンスの確立に邁進するため各種規程類の整備を進めると共に、新法人では全国32支部が従来とは異なり、公益社団法人日本山岳会と一体の組織であると位置付けられたので、会計処理の一体化をはじめコミュニケーションの円滑化を図るため、総務委員会と協力して支部長会議、支部事務局長会議の充実を図っている。さらに公益法人化に伴い会計処理の確実化、各種寄付の増加に対応するため、必要な規程類の制定に努めている。

これらの課題に加え、内閣府へ報告する事業計画、事業報告の精緻化、決算書類の複雑化に継続的に対応するため、24年下期からは従来「法人運営適正化プロジェクトチーム」を常設の「公益法人運営委員会」に改組し、毎月2回程度の検討会を開催している。

### 【平成25年度の活動】

平成24年度事業報告書を作成し、平成25年度総会を経て、平成25年6月28日、内閣府へ提出した。また、平成26年度事業計画書を作成し、平成26年3月28日、内閣府へ提出した。同計画書は平成26年度総会に報告される。

それぞれの資料を作成するため、各支部、各委員会へ作成要請を行なうなかで、適切な公益法人活動を行なうための検討を重ねた。

### 【寄付の取り扱い】

公益社団法人への寄付は税制面で優遇措置があり、新法人移行後は寄付の増加が予想されると同時に、受け入れた寄付の取り扱いにも注意を払う必要があるため「寄付受入及び管理取扱規程」について、各支部にも周知を図っている。さらに金銭以外の土地、建物などを公益法人に寄付した場合で、一定の要件を満たした場合に寄付者は非課税の扱いを受けることができる旨、租税特別措置法40条に定められている。これについても各支部に周知を図っている。

日本山岳会は特定公益増進法人として公益法人移行後、税制上の優遇措置を受けてきたが、加えて平成25年10月15日、長期間の検討を経て、厳しい条件をクリアし、個人が本会に寄付をした場合の税額控除制度の適用に関わる証明を内閣総理大臣から受けることができた。こ

の税額控除の対象法人は、平成25年9月末現在684法人のみであるが、これにより本会は、寄付金に関して公益法人に認められているすべての税制優遇措置の適用法人となることができた。今後、充実した山岳会活動には収入の確保が組織運営上の課題となるなかで、一般社団法人等では得ることのできない、継続的な組織運営の大きな足掛かりを得ることができた。

#### 【今後の対応】

新法人への移行はこれまでのところ、関係者の努力で乗り切ることができたが、全国規模で活動している本会は、新法人として対応すべき課題は山積しており、引き続き公益法人として適正な運営を進めるための活動を続けていく。

(佐野 忠則)

### 総務委員会

本年度、日本山岳会は公益社団法人として2年目を迎え、総務委員会は、本会の運営と管理部門を担当する部門として、個々の事業に対応しつつも、組織の質的充実と円滑化を図るために、存在するいくつかの問題に対し、根本的な解決を目指して取り組んだ。

特に曖昧だった総務委員会と本部事務局の役割分担を明確にしたことが挙げられる。これまで総務委員会の役割は、本部事務局と重複する部分も多く、従来、その役割分担が不明瞭なため円滑な事務運営が妨げられ、会員からも混同されて問題が生じることもあった。本年度

は事務局との役割分担を明確にして、円滑な事務運営を行なえるようにした。また、事務局と総務委員会の役割分担について支部事務局会議で説明を行なうと共に「会員のしおり」にも掲載し、会員に周知した。

日本山岳会も新たな組織となり、適切な計画・予算に基づいた運営を行なうことがより強く求められる。総務委員会においても、従来行なわれている各種行事や会議についての運営方法の見直しが求められている。緻密な計画と予算に基づいて効果的・効率的な運用ができるよう、仕組みや進め方の見直しを進めている。

現在、総務委員会の委員数は15名で、毎月2回、定例の委員会を行なっている。そのほかに、各種行事の打合せや事前準備のために年十数回、臨時の委員会や作業日を設けている。総務委員会が担当する主な行事や取り組みを以下に示す。

1 第1回支部長会議（6月15日）

通常総会に先立って日本山岳会104号室で開催し、全国31支部が参加した。各支部の現況と事業計画を各支部が報告、支部活性化PTが活動状況などを紹介し、その後、意見交換を行なった。

2 平成25年度通常総会（6月15日）

主婦会館プラザエフで開催し、136名の会員が出席した。執行部により示された平成24年度事業報告案と平成24年度収支決算報告案が審議され、いずれも原案どおり可決承認された。その後、平成25/26年度役員（理事・監事）承認案が原案どおり可決承認

した。総会の終了後に懇親会が開催された。

3 同好会連絡会議（7月1日）

日本山岳会104号室で開催し、19の同好会の代表が出席した。各同好会の活動報告を中心に、その後、ルームの利用方法に関するルールや諸手続について説明を行なった。

4 新入会員オリエンテーション（10月26日）

日本山岳会104号室で開催し、28名の新入会員が参加した。昨年よりも若年会員の出席が目立った。会長と各担当理事が日本山岳会の沿革や会の活動方針、仕組みについて説明した。その後、各委員会の代表が委員会の役割について、同好会の担当者が同好会の活動の紹介を行なった。終了後、写真撮影を行ない、その後、集會室に会場を移して懇親会を開いた。新入会員同士や既存会員との交流が深まり、このオリエンテーションが委員会や同好会に所属するきっかけとなった会員も多い。首都圏からの参加は多いが、地方の会員にとっては出席が難しい。地方の会員に対するフォローが今後の課題である。

5 第2回支部長会議（12月7日）

品川プリンスホテル・アネックスタワーで年次晚餐会に先立つて開催し、全国31支部の支部長が参加した。従来は各支部の活動報告の説明が中心で、形式的な報告になりがちであったが、今回は各支部の活動報告を最小限にとどめ、「支部活性化」をテーマとして先進的な取り組みを行なっている支部に事例の報告をしても

らい、その後、若手会員増強と次期リーダー育成の具体策について話し合いを持った。短い時間であったが、充実した議論が展開された。

6 年次晚餐会（12月7日）

品川プリンスホテル・アネックスタワーで開催した。併催行事も盛況で、海外登山報告と秩父宮記念山岳賞受賞者による記念講演会は昨年よりも広い会場を確保し、昨年よりも多くの聴講者が訪れた。図書交換会、写真展も盛況であった。会場通路ではオリジナル・グッズの販売も行なった。晚餐会には466名が参加した。近年は決算が予算に対して赤字になる傾向があるので、精密な予算を立案できるようにすると共に、実施場所や方法についても見直しを行なう予定である。

7 全国事務局会議（1月25～26日）

全国32支部の事務局担当者と本部執行部の52名が出席した。1日目は日本山岳会104号室で、2日目は主婦会館プラザエフに会場を移し開催した。本部執行部による会務報告と各支部の事業報告、会計処理の方法と会計報告書の提出方法についての説明、寄付金の取扱いに関する説明などが行なわれた。本部執行部からは、新入会員数に応じて交付される交付金、支部の活性化に向けた取り組みに対する助成金など、「支部活性化」を実現するための施策の説明がなされた。支部同士の情報交換では、支部の実施する登山教室や各支部の会友・支部友制度などが紹介され、支部活

性化に向けて活発な議論がなされた。1日目の終了後に懇親会が開催され、その場でも活発な交流や情報交換、意見交換がなされた。

支部活性化のための充実した議論をするために、次年度に向けて支部長会議と支部事務局会議の実施方法の見直しを進めている。

## 8 「会員のしおり」の作成（3月）

従来の「新入会員のためのしおり」の対象者を全会員に広げた「会員のしおり」を事務局と協力し、制作中である。ホームページで見られるようにするほか新入会員、各支部などには冊子を配布する予定である。

## 9 オリジナル・グッズの販売

ダウンジャケット、ダウンベストを新たにラインアップに加え、ツートンシャツ、バンダナには新色を加えた。総会、年次晚餐会、新入会員オリエンテーションの会場や本部ルームで直接販売を行う。また、ホームページを通じて通信販売を行っている。

（今田 明子）

## デジタルメディア委員会

DM委員会は、インターネット利用による当会の広報、事務連絡の支援活動としてホームページ運用、メールマガジンの発行、および会務に関わるメールシステムの運用管理を行なっている。

ホームページでは当会の組織や歴史、委員会、支部、同好会および特定プロジェクトなどの活動についてイベントの案内や報告、出版物などを掲載して、当会の内外に紹介している。また、デジタル社会に対応すべく会員専用ページを設け、活動に関わる規程や活動要領、各種の事務書類の書式を掲載し、会務運営の利便を図っている。

メールマガジンは、タイムリーな情報提供を図るためホームページでの委員会、支部などのイベント紹介にリンクして掲載された最新情報と共に、当会が協賛するイベントや登山関連の有用なニュース・情報提供のヘッドライン記事を適時発行し、配信先は約15000に上っている。

メールシステムは、電子情報処理で会務を進めるため委員会、支部、同好会、プロジェクト・チームやワーキング・グループにメールアカウントを準備すると共に、同報サービスなどのメールリング・システムが提供されている。また、当会が実施した過去の事業などの記録、資料をデータベース化して公開をしている。特に海外への情報発信として評価されているJAN (Japanese Alpine News) の記事掲載を進めることをはじめとして当会の業績を周知すべく、データベース作業に今後注力する心算である。

当会は歴史ある会であるが故に高齢会員が多く、電子情報対応が社会一般の組織に比べ難しく、遅れた点も多いが、組織として電子情報授受を強力に進めることを、当会の運営および当委員会のこれからの課題としたい。

（多田 真弘）

## YOUTH CLUB

YOUTH CLUBは、日本山岳会が意欲的に登山を実施する集団として再生することを目標に活動している。「登らない山岳会」として歴史の中に埋もれる前に、若手を中心に会員の力量を高め、安全を確保しながら創造性に富んだ登山を展開することを目指したい。活動は「青年部」「学生部」「ワンダーフォーゲル部」の3つの枠組みで進めている。

### 【青年部】(39歳以下)

本部青年部には35人が所属している。かつての青年部と異なり、大雪山岳部の出身者ではないメンバーが多く在籍している。日本山岳会の歴史と伝統を踏まえながら、新しい社会人山岳会をゼロから創造するようなイメージを持って、登山の技量と判断力、責任感を具えた若手登山者の育成を進めている。

## 委員会の活動報告

2013年度の新しい試みとして、国立登山研修所の後援を得て実施した「全国安全登山普及講習会」(9月19〜23日)がある。本部と支部から集まった若手・中堅の会員が剣岳東面のバリエーション・ルートに登った。本部青年部は10人、東海支部8人、四国支部4人、石川支部1人、北九州支部1人が参加した。ガイドやスタッフをリーダーとして岩壁登攀を経験し、ロープワークやルート・ファインディング、コミュニケーションの取り方を総合的に学んだ。登山の技術や経験の面だけでなく、普段は距離が離れているために会うのが難しい、意欲

ある若手同士が交流を深めたのも、大きな意義があったと思う。今回は岩壁登攀だったが、今後も様々な登山形式を検討しながら、ぜひとも続けていきたい企画である。まだ発展途上の青年部が力をつけるには、プロガイドの協力が欠かせない。ガイド側とこれまで以上に緊密で、良好な関係を築くことも課題の一つである。

### 【学生部】

大雪山岳部を中心に約20の団体が参加している。主な活動としては、神奈川大学の施設を拠点に「第7回日中韓三国学生交流登山」(8月16〜21日)を実施した。学生は日本13人、中国10人、韓国10人が参加し、富士登山や東京・箱根見物を通じて交流を深めた。交流登山の一環として、8月17日には「第2回学生部クライミング大会」も開いた。男子はリード部門で神奈川大の山内誠さん、トップロープ部門で鍋田拓洋さん、女子リード部門は神奈川大の安田あとりさんが、それぞれ優勝した。

11月9日には、第50回学生部マラソン大会が皇居周回コースで開かれ、団体戦で優勝したのは男子が早稲田大Aチーム、女子が武蔵野大Cチームだった。

セルフ・レスキュー講習会(6月29日、三ツ峠)、アイス・クライミング講習会(2月12〜13日、八ヶ岳)も開催された。

### 【ワンダーフォーゲル部】(59歳以下)

40〜50代の会員の獲得を目標として、ハイキングや講習会を実施している。部への参加者は50人を超えた。三浦アルプスや両神山など首

都圏の身近な山域に加え、北海道や上高地にも足を延ばした。講習会では「登山計画の作り方」をはじめ医療、気象といった、安全に登山を実践するための基礎となるテーマを取り上げた。(野澤 誠司)

## 『山岳』編集委員会

日本山岳会の機関誌『山岳』第百八年(2013年)は、岡島成行委員長(会員番号8631)の下、専門出版社勤務の経験がある担当理事の節田重節(同6720)と編集者・原邦三会員(同9080)が中心となって編集作業を進めた。

表紙は前号に引き続き、ネパールの女性たちをモチーフとした塚本晴雄氏の版画を使用、紙の選択と相まって好評を博している。また、中高年会員が多いという近年のJAC事情に鑑み、「記録」「調査・研究」「読物」各欄の文字のポイントを若干大きく、読みやすくした。

「記録」欄には「海外登山助成金」を受けて活動した3隊の報告を掲載した。中でも「キャシヤール南ビラー初登攀」は、各国登山隊の挑戦を退けてきた難壁で、2012年度(第21回)のピオレドール(金のピッケル)賞を受賞している。

「調査・研究」欄では、「日本にも氷河があった!」という、登山者にとって大変夢のある研究成果を、立山カルデラ砂防博物館のお二人にレポートしていただいた。なお、この研究は2013年度(第15回)の秩父宮記念山岳賞を学術分野で受賞している。

「読物」欄で特筆すべきは、藤本慶光会員がまとめられた「河口慧海を支えた財界人とその時代」である。実は藤本さんは2011年に病を得て入院を繰り返されており、あの原稿はご体調不良を押してのご執筆であった。それだけに『山岳』への掲載をことのほか喜ばれていた。しかしながら、真に残念なことに2014年6月8日、藤本慶光会員はご逝去された。最後の執念と覚悟を持って、あの原稿をご執筆されたかと想像すると、真に頭の下がる思いである。慧海に負けない情熱を持って長文の原稿をまとめられた同会員に、改めて敬意を表したいと思う。

そのほか、「支部の活動報告」の後に2013年号から「委員会の活動報告」を追加した。支部の活性化と共に委員会活動の充実は、「元氣なJAC」の活力源である。各委員会の活動ぶりをご覧いただき、多くの会員が参加、あるいは協力されることを期待したい。

なお、昨年度の製作費総額は354万4343円(前年比25万253円のコストダウン)であった。内訳は製作費252万3600円、発送費37万7699円、封筒代19万3650円、編集費31万5000円、その他経費13万4394円。印刷部数は5600部である。

(節田 重節)

## 会報編集委員会

毎月20日に会報「山」(20ページ、1色)を発行。7月号については

総会の報告があるため増ページして、24ページとなる。編集を担当しているスタッフは、2名の会員と担当理事1名(校正を担当)。2014年1月号で、9年間担当してくださった奈良千佐子会員(会員番号12078)が辞め、新スタッフの原邦三会員(同9080)に交代した。

会報として日本山岳会内部の情報を網羅し、さらにはJACが持つ長い歴史を反映させた内容、JACだからこそ掲載できるトピックス、現在の登山界のニュース、若手登山家の動向なども掲載できるように努めてきた。

しかしながら、実務スタッフ2名は本業をこなしながらの企画・編集作業のため十分な時間が取れず、まだまだ改善すべき課題が残されていると思う。今以上に多くの会員の皆さんのご意見やご投稿、アドバイスを頂戴しながら、より高みを目指していきたいと考えている。

会報編集委員会は12月に開催。委員全員が出席した。今後毎年1回程度の開催を考えている。

なお、昨年度の製作費総額は812万9643円(前年度比87万7285円のコストダウン)であった。内訳は製作費329万2722円、発送費347万1451円、発送作業費72万8831円、帯封代4万3170円、編集費57万円、その他経費2万3469円。毎月平均印刷部数は5600部である。収入としては、記事の中と裏表紙の合計13枠程度の広告収入がある。

(柏 澄子)

## 図書委員会

図書委員会と図書管理委員会を統合し、新しい図書委員会として活動を始めて1年。事務局の協力を得ながら、まずは委員の足並みを一歩ずつ揃えることから始めた1年であった。

月例の委員会では、以下の点が主な議題である。

1. 図書室や蔵書についての事務局からの報告
2. 行事の企画・検討
3. 会報「山」の「図書紹介」図書の選定

13年度の図書委員会の行事は「第31回図書交換会」と、「シユラギントホワイト・アトラス」展示」の2企画。

「図書交換会」は、昨年と同様に年次晩餐会で開催。日ごろは本部関係の行事に馴染みがない支部からの参加者に好評だった。開催する委員会としても、じかに手応えを感じられことが継続する力になっている。14年度も年次晩餐会での開催を予定している。

また「シユラギントホワイト・アトラス」展示」も、年次晩餐会で披露することで、その魅力や貴重さを会員に理解してもらう良い機会になった。今回の展示は一部分だけだったが、その全貌についての整理や保全(場合によっては公開)については、これからの大きな課題であろう。なお、皇太子殿下にもご覧いただく機会を得たことは幸いだった。

開催日当日よりも準備作業に手間がかかるのは、どの委員会でもど

んな企画でも同じことであろう。図書交換会には過去最高の700冊の出品があり、データ処理や会場への運搬にてこずった。シユラギントワイト展示では、大判の石版画の展示方法に苦慮したが、植村冒險館から協力を得て、透明展示額を拝借することができた。

一方、年次晩餐会で2企画の同時開催というハードルをクリアしたことで、思わぬ収穫もあった。委員会を統一したことで機動力が増したことが確認でき、今後の活動への自信に繋がったことである。

そのほか13年度は外部の企画展への資料提供に積極的に関わった。小田原文学館「辻村伊助 アルプスに挑んだ小田原の登山家」(2013年10月19日～12月8日開催)には、辻村伊助手稿(外部では初公開)などを貸出。東京都写真美術館「黒部と槍 冠松次郎と穂苅三寿雄」(2014年3月4日～5月6日開催)には冠松次郎の著書などを貸出した。

公益法人になったこともあり、外部から蔵書の貸出や転載についての協力依頼が増えている。管理や保全と手続きについての早急の体制作りが求められている。また、旧図書管理委員会からの持越し企画である「JAC図書館 蔵書目録」作成も、新年度には取り掛かる予定である。

手探りの委員会統合と新しいスタートで積み残しも多く、反省材料は山積みだが、見通しは明るいと信じている。しばらく開催できなかった「山岳史懇談会」「山岳図書を語る夕べ」などの、山の本にまつわる講演会も新年度は再開したい。

(三好 まき子)

当委員会では年度初めに年間計画表(事業項目、担当者、および事業別予算)を作成し、活動をスタートさせている。事業内容は継続性の見地から変化は少ないが、年度ごとに事業の見直し、新たな追加、重点事業の設定を行なっている。主たる担当事業範囲は、過去から引き継がれている貴重な山岳文化資料(絵画・映像を含む)の適切な保存と管理、および活用(借用依頼機関への貸出しや会報「山」での会員への公開)、また、本会内の保存環境やスペースを考慮し、外部博物館などに寄託している資料の管理を行なっている。これら事業の進捗を確認し、重要事項を審議するために月例会議を実施し、議事録に残している。以下に今年度の主要事業の実施概要を記す。

#### 1 全国山岳博物館等連絡会議(第17回)

11月9日、参加7館(8名)と当委員会委員で実施。これは毎年行なっている全国の山岳関連博物館・美術館との情報交換会議である。ここでの情報や討議が、各館の抱える問題点解決のヒントや企画展など行事の相互連携の場にもなっている。

#### 2 絵画・資料・映像資料の保存と貸出し、および寄託管理

\* 収納資料の交換と点検・記録、デジタル画像化を実施し、保存環境改善と資料データの充実を進めた。博物館・報道・出版などの外部、当会の支部・同好会への貸出しと使用許可は合計16件(有償貸出しを含む)。

\*本会資料室に保管しきれない絵画・資料については、適切な保管や管理ができ、さらに展示・研究などに活用していただける山岳関連博物館や美術館に寄託している。これらの組織からの年度末棚卸しと、寄託継続などの管理手続きを実施した。

### 3 既存資料管理システムの見直し

資産棚卸管理システム会社のソフトを使って平成20年以降、管理データのデジタル化と改善を進めてきたが、費用対効果が悪い。ため将来の費用負担も考慮して、今年度末の使用中止を決定した。汎用ソフトを使った新システムに次年度から移行する準備を整えた。

### 4 所蔵資料の会報「山」での紹介

当委員会で保管管理または外部寄託している所蔵資料から、会員に広く紹介する価値があり、かつ興味を持ってもらえる資料を選定し、写真入りで会報に紹介した。4月号から翌年1月号まで全10回掲載し、好評であった。併せて委員会ホームページにも詳細データを掲載した。次年度も継続予定。

### 5 アーカイブ映画会「アэндスの氷壁に挑む」映画会と講演会

10月3日、ルームにて実施、参加者40名。この映画は1963年、早稲田大学山岳部ペルーアэндス登山隊の記録映画で、同行撮影した近藤隆治会員（資料映像委員）の撮影裏話を含む解説と、早大OBで同遠征隊隊員の方々の興味深いお話があり、楽しくまた有意義な一夜になった。講演の内容は映像収録し、DVDとして

残した。

次年度の重点課題としては、新資料管理システムの立ち上げ（ハード・ソフト）と、個別所蔵資料の細かい調査を予定している。

（荒井 真二）

## 科学委員会

### 1 委員会内の役割分担の交代と委員の増強

6月に野口いづみ理事を担当理事に迎え、委員長が米倉久邦委員から福岡孝昭委員に交代した。また、事務局長が平野裕也委員から下田俊幸委員に交代した。さらに井上希夫委員の逝去に伴い、箕岡三穂委員に交代した。役割分担の交代にあたり、委員の老齢化が問題になり、委員の増強に努力した結果、若い方を中心に5名の方が新たに委員に就任され、委員会に活気が生まれた。

### 2 科学委員会ホームページ（ウェブサイト）の更新・強化

委員の老齢化、すなわち新委員が増えない原因の一つとして、山岳会会員への委員会活動の広報不足が指摘された。休眠状態にあった科学委員会ホームページ（ウェブサイト）の更新・強化に取り掛かった。本委員会の目的である科学的登山（山の多面的理解とそれによる安全登山）の啓蒙に結び付けば、と願っている。

### 3 共益事業としての活動

#### ①例会

年間の通常活動としては月1回第3木曜日にルームで例会を行なっている。内容は委員会の課題、事業内容の準備・反省、本部からの要請などの検討を中心として、時に委員を中心に登山の科学についてセミナーも行なった。

#### ②「暑気払いの会」および「新年会」

8月の例会は、「暑気払いの会」として学習院大学内の施設で開催。会に先立って学習院大学内にある「血洗いの池」とその周辺の森の観察を行なった。池の湧水、植生、江戸時代の街道の存在などについて説明を受けた。

1月には「新年会」を行なった。新委員の出席もあつて盛り上がった。

#### ③研修山行（忘年山行）

12月21日（土）に箱根・大涌谷から桃源台まで雪上山行を行なった。科学委員会の山行は単なる山歩きではなく、今回は（i）大涌谷地区噴気地帯の近年の変遷の見学、（ii）硫黄泉温泉造成地の見学、（iii）明礬泉が湯漕脇の岩盤から湧出する姥子温泉の見学と入浴、（iv）「流れ山」の見学、（v）フナ林の見学、（vi）新しい箱根火山形成モデルの理解などを課題として行なった。

### 4 公益目的事業

#### ①探索山行

6月22～23日（土・日）に「霧ヶ峰に黒曜石の産地と歴史を訪ねる」として実施。一般参加者を含め42名が参加。今回の目的は

石器の原石・黒曜石の産地である霧ヶ峰を訪ね、黒曜石はどのようにして生じ、どのようにして石器に加工され、流通したのかを理解すると共に、歴史を秘めた草山「霧ヶ峰」を探索することであった。23日には鷲ヶ峰に登頂し、参加者からは大好評を得た。この山行を実施するにあたっては明治大学黒曜石研究センター、長野県長和町立「黒曜石体験ミュージアム」、ヒュッテジャヴェルに大変お世話になった。

山行の詳細は会報「山」2013年8月号に掲載の報告を参照されたい。

#### ②フォーラム「登山を楽しくする科学（VI）」

3月15日（土）にフォーラム「登山を楽しくする科学（VI）」を立正大学大崎校舎で開催。石沢賢二氏（国立極地研）の「南極探検と観測の歴史と成果」、油井直子氏（聖マリアンナ医科大学）の「登山時の疲労対策として―サポートタイツの使用効果について―」、小崎尚委員の「山の姿を読む―谷川岳と大雪山」の3つの話題に一般参加者を含め130名が聴き入った。今回は同日に山岳関係のほかの行事と重なったことなどもあつて、昨年に比べ参加者が少なかったのは残念であったが、参加者には好評であった。

### 5 その他

上記の活動により今後、委員の増強が進み、山岳会の会員増にも寄与できることを期待している。

科学委員会では、今後の活動として支部活動における登山の科

学に関連する講演会などに講師の派遣協力を考えている。遠慮なくご相談賜りたい。  
(福岡 孝昭)

## 医療委員会

医療委員会の目的は、医学の知識不足から起こる遭難について啓発活動を行ない、遭難を未然に防ぐことである。

楽しく安全な山登りをするためには、山ではどのように身体に負担がかかるか、どのような病気やケガが起こるか、どのようにそれらに対処したらよいかを知る必要がある。委員会のメンバーは、日本登山医学会や日本山岳文化学会山岳医学医療分科会の会員である。

委員会の主な活動は、一般社団法人日本登山医学会の支援、日本山岳文化学会山岳医学医療分科会支援、会報「山」の医療コラム(Climbing&Medicine)の執筆であり、山岳会員の山登りを医学的にサポートする。

### 1 第33回一般社団法人日本登山医学会学術集会報告

平成25年6月15日～16日、京都大学紫蘭会館で奥宮清人・学術会長の下で開催された。学術集会の内容は、「グローバル社会と登山医学などをテーマに」として、浜口欣一委員長が会報「山」9月号(No.820)に報告した。

### 2 第11回日本山岳文化学会山岳医療分科会支援

日本山岳文化学会の大会長は野口いづみ会員で、学術集会の内

容は、「20もの研究発表、『防虫』と『身体と心』の講演が好評だった研究大会」として野口会員が会報「山」2月号(No.825)に報告した。

### 3 第34回日本登山医学会学術集会支援

学会長・夏井正明氏(自由学園)の下で、会期は平成26年5月31日～6月1日、テーマを「登山者の安全・安心を支えるービギナーからトップクライマーまでー」として開催される。学術集会の内容は、次年度に報告する。

### 4 会報Climbing&Medicineに関する

1) 会報Climbing&Medicine・59 ただ高所にいるだけで肥満や糖尿病が改善するかもしれない 大野秀樹 会報「山」11月号(No.822)

2) 会報Climbing&Medicine・60 スポーツドクター受診のお勧め 浜口欣一 会報「山」1月号(No.824)

3) 会報Climbing&Medicine・61 最近の初期う蝕治療の考えと山岳環境 藤枝和夫 会報「山」3月号(No.826)

### 5 その他

\* 医療委員会開催 平成26年2月1日

テーマ…1. 医療委員会活動報告、2. 会報コラムに関して、3. 今期医療委員会の活動方針、4. 公益社団法人日本山岳会としての「医療委員会」のありかた

### 6 今期の委員

担当理事…野口いづみ、委員長…浜口欣一、委員…大野秀樹、稲村道子、神尾重則、藤枝和夫、村上和子、小清水昌、秦和寿、上小牧憲寛、梶谷博、斎藤繁、角田元、植木貞一郎（浜口欣一）

## 集會委員會

### 1 委員會の使命について

日本山岳会は取り組む事業として、周知のとおり定款第4条第6項に、「国内及び海外における登山の企画並びに実施」を掲げている。当たり前といえば当たり前だが、日本山岳会は所定の目的を達成すべく、国内外の山に登ることをその事業の大きな柱としている。

集會委員會の使命は理事会の指導の下、この「国内外の登山の企画、実施」を行なうことにあると考えており、日本山岳会の本部委員會にあつて、最も日本山岳会らしい委員會の一つであると自負している。

具体的な活動としては、会員相互の交流、懇親、その中での登山技術の習得、向上を目的に、「会員のお役に立つ、会員のためになる委員會」を目指し、国内・海外の山行、講習会、懇話会などの企画、運営、実施に取り組んでいる。

### 2 活動方針

上記使命と会員ニーズを踏まえ、当面の活動方針を以下のとおり定めている。

(1) 全国の会員が自由に参加できるユニークな山行を企画する。山行にあたっては、何よりも「安全」に最大限配慮する。

(2) 会員の圧倒的多数は、60〜70歳代の会員である。その大多数の中老年会員を主な対象とした山行を実施する。山行以外にも安全登山に資する講習会などを企画する。

(3) 軽いハイキングから日本アルプス縦走までの幅広い山行を行なう。会員ニーズに応えた、日本山岳会らしいユニークな海外トレッキング・ツアーを企画する。

(4) 何よりも「山を楽しむ」ことを最優先し、単に山に登るだけに留まらない、楽しい「プラスワン（植物、地形、文化、温泉など）の山行」を目指す。

(5) 行事内容によつては、全国の支部、委員会なども可能な限りコラボレーションを図っていきたい。

### 3 活動内容

昨年度の活動内容は以下のとおりである。なお、本年度の年間計画については、すでに日本山岳会のホームページに3月末にアップしているので、参考にしてみらいたい。

5月 奥秩父の岩峰を歩く「町田市自然休暇村をベースにして、好天気の下、林岳・五郎山・天狗山・男山の岩峰を踏破。クリンソウ・フタリシズカ・レンゲツツジなどの林床の花々を楽しむ」2泊3日、参加者13名

6月 登山リーダーのための救急救助講習会 「恵会員を講師に迎えて、登山リーダーに求められるレスキュー技術の実技講習を

実施」参加者17名

6月 海外山行「キルギス天山展望トレッキングとトルガルト峠越えー天空の楽園を行く」

中央アジアのスイスと呼ばれるキルギスの美しい山並みと氷河や湖を巡り、その広大な自然と質朴な人々の人情に大満足の山行 11泊12日、参加者14名

9月 北アルプス縦走第4回「室堂く雄山く五色ヶ原く薬師岳く太郎兵衛平く折立」(雨のため、黒部五郎岳・双六岳を断念) 4泊5日、参加者10名

9月 南アルプス縦走第1回「二軒小屋く千枚岳く荒川三山く赤石岳く樫島」天候に恵まれ、南アルプス南部の雄大な山々を堪能 3泊4日、参加者8名

10月 北八ヶ岳紅葉山行「麦草峠く縞枯山、雨池・双子池」(雨天のため蓼科山は断念) 1泊2日、参加者8名

12月 晩餐会記念懇親山行「高麗山く湘南平を歩く、相模湾と富士山を望む陽だまりハイク」湘南平の日本山岳会創立の恩人・岡野金次郎の顕彰碑を前に、氏について砂田委員より解説 バス利用日帰り、参加者74名

1月 スキー懇親会 安比高原スキー場で実施。雪質にも恵まれ、長大なゲレンデを思う存分楽しむ 2泊3日、参加者22名  
上記の月次山行などのほか、毎月第1水曜日、ルームにて月例ミーティングを担当理事列席の下、実施している。なお、各行事の詳細

については、日本山岳会ホームページの「集会委員会」の項をご覧ください。  
(清登 緑郎)

### 山岳研究所運営委員会

厳しい規制の北アルプスの中心である上高地にあつて、特別に建築を許された上高地山岳研究所。山研運営委員会は、日本山岳会の貴重な財産であるこの施設を会員が有効かつ末永く活用できるよう、委員並びに関係者のボランティア精神の下、運営・維持管理を行なっている。

しかしながら、標高1500mの厳しい自然環境の中、築後20年を超えた建物・設備は随所に傷みが目立ち始め、特に風雪に曝されている外構部の老朽化は、外観上の問題だけでなく、利用者の安全確保の観点からも改修が喫緊の課題となっている。

今回は2013年度に実施した外構部の保全工事について報告する。建物外壁の塗装、テラスの柵(木製)の腐食、石畳や外壁化粧石の剥離など改修が必要な箇所は多数あるが、予算と危険度の兼ね合いからテラスの柵を優先して改修することとした。ただし、予算の都合により2013年度は利用者が触れる(寄り掛かる)頻度の高い東側(表側)のみの改修とし、残りは2014年度の計画とした。なお、外灯器具の交換など簡単な作業は委員会関係者(有資格者)が実施、出費を材料費のみに抑えている。



真新しくなったテラスの柵

工事自体は柵を構成している木材の交換が主な作業で、事前の調査を含め2日程度の小規模なものであるが、国立公園内という特殊な立地条件がゆえに、作業日の設定や使用材料の選定に際しても注意が必要であった。実際、材料については、耐久性の面から自然木を模したプラ擬木への変更も検討したが、環境省との協議の結果、断念した経緯がある。また、施工に際しても車両通行許可の申請手続きや周辺環境に配慮した作業が必要となるため、上高地での工事に精通した地元業者に依頼することとした。

工事は観光客が少なくなる10月下旬に実施。平日作業となるため、立会いは管理人の内野氏に対応をお願いした。綿密な事前調査と準備により現地での加工作业はほとんどなく、1日で完了。材料は従来と同じ自然木を使用しているが、防腐剤を加圧注入した上、表面にも防腐処理を施しているため、定期的なメンテナンスにより20年は持つとのことである。

2014年度以降も、残りの柵の改修を含め保全仕事を進めていく予定であるが、経費節減のため資格などの問題がなく、かつ業者でなくとも対応可能な作業は、委員会関係者で実施していく。

(柴山 信夫)





ロングトレイルを歩く 【わ】	加藤則芳	PHP 研究所	1200 四六判	135p
私の場合は、山でした！	鈴木みき	平凡社	1200 A5	159p

山ごはんの基本とレシピ	山と溪谷社ワンダー フォーゲル編集部/ 編	山と溪谷社	1000	四六判	128p
山小屋からの贈りもの一飯豊連 峰門内小屋	高桑信一	つり人社	1600	四六判	255p
山里に描き暮らす	渡辺隆次	みすず書房	2800	四六判	227p
山師入門	成谷俊明	知支舎	1400	四六判	191p
山スキールートガイド 105	酒井正裕	本の泉社	2300	A5	262p
山旅句 エッセー集	高澤光雄	北海道出版企画 センター	1800	四六判	225p
山旅 100 ルート	樫出版社/編	樫出版社	1200	B5	139p
山で正しく道に迷う本	昆 正和	日刊工業新聞社	1600	四六判	237p
山道具一選び方、使い方	高橋庄太郎	樫出版社	1700	A5	334p
山と溪に遊んで	高桑信一	みすず書房	2800	四六判	323p
山に咲く花 ※増補改訂新版	永田芳男	山と溪谷社	4200	A5	616p
山に入る日	細田 弘	白山書房	1800	四六判	471p
山のこと ※絵本	キャスリン・シル/ 文 ジョン・シル/ 絵	玉川大学出版部	1700	230 × 260	43p
山の雑学百科	岳人/編	東京新聞	1400	A5	319p
山の信仰	田中久夫	岩田書院	9500	A5	420p
山登りの基本 ※改訂 2 版	樫出版社/編	樫出版社	900	260	128p
山の本をつくる	中西健夫	ナカニシヤ出版	2800	A5	288p
山の履歴簿—第 1 巻・北海道南 西部	渡辺 隆	北海道出版企画 センター	4500	A5	456p
山は学校 僕の細道	藤原優太郎	無明舎出版	1600	A5	136p
山道を楽しむ	中村 堯	風詠社	1333	四六判	367p
山用具の基本	山と溪谷社ワンダー フォーゲル編集部/ 編	山と溪谷社	1000	四六判	127p
山用具メンテナンス	山と溪谷社ワンダー フォーゲル編集部/ 編	山と溪谷社	1000	四六判	127p
槍穂高 空と雲のあいだに ※写真集	佐々木信一	信濃毎日新聞社	2000	220 × 290	192p
雪男は向こうからやって来た	角幡唯介	集英社	620	文庫判	358p
由布岳	九州高等学校/編	海鳥社	1600	A5	177p
遥照山・御嶽山沙美アルプス登 山詳細図	道広静子	吉備人出版	500	230 × 112	1p
ヨーロッパアルプス登山・ハイ キング	金原富士子	本の泉社	1900	A5	343p
【ら】					
陸地測量部沿革史 復刻版	陸地測量部/編輯	不二出版	28000	A5	570p
リヒトホーフェン日本滞在記— ドイツ人地理学者の観た幕末明 治	フェルディナンド・ フォン・リヒトホー フェン/著 上村直 己/訳	九州大学出版会	3400	A5	246p
レンズが撮らえた幕末明治の富 士山	小澤健志・高橋則英 /監	山川出版社	1600	A5	205p
LONG TRAIL HIKING	ユーフォリア ファ クトリー/編	ユーフォリア ファクトリー	1000	B5	130p

冒険の遺伝子は天頂へ		三浦雄一郎・三浦豪太	祥伝社	1300	四六判	195p
房総のやまあるき※増補改訂版		内田栄一・川崎勝丸	新ハイキング社	1800	A5	275p
北摂山物語		鈴木 望	風詠社	1500	四六判	313p
北海道キャンプ場ガイド		亜璃西社	亜璃西社	1300	四六判	351p
北海道夏山ガイド1 道央の山々	※最新第3版	梅沢 俊	北海道新聞社	2300	四六判	331p
北海道夏山ガイド2 表大雪の山々	※最新版	梅沢 俊	北海道新聞社	2300	四六判	273p
北海道の山 大雪山・十勝連峰		伊藤健次	山と溪谷社	2500	A5	256p
一ヤマケイアルペンガイド						
<b>【ま】</b>						
松浦武四郎自伝	※新版	笹木義友/編	北海道出版企画センター	3800	A5	355p
まほろばの山と高原		みず森ひろ史	白山書房	1400	四六判	235p
マンボウ思い出の昆虫記一虫と山と信州と		北 杜夫	信濃毎日新聞社	1700	四六判	211p
三浦家のDNA		三浦雄一郎・三浦敬三・三浦豪太	実業之日本社	530	文庫判	267p
名峰・日本縦断	※写真集	白旗史朗	新日本出版社	9000	312 × 266	238p
藻岩山・円山		さっぽろ自然調査館	北海道新聞社	1400	A5	143p
<b>【や】</b>						
蕨岩魂		打田鉄一	山と溪谷社	2200	四六判	271p
山男と仙人猫		保田明恵/著 大野久/監	源	1200	A5	173p
山が大好きになる練習帖		KIKI	雷鳥社	1500	四六判	251p
山靴の画文や 辻まことのこと		駒村吉重	山川出版社	1800	四六判	286p
ヤマケイ文庫 単独行者・上		谷 甲州	山と溪谷社	950	文庫判	405p
ヤマケイ文庫 単独行者・下		谷 甲州	山と溪谷社	900	文庫判	365p
ヤマケイ文庫 狼は帰らず		佐瀬 稔	山と溪谷社	880	文庫判	333p
ヤマケイ文庫 サハラに死す		上温湯 隆	山と溪谷社	880	文庫判	298p
ヤマケイ文庫 精鋭たちの挽歌		長尾三郎	山と溪谷社	880	文庫判	349p
ヤマケイ文庫 空へ		ジョン・クラカワー/著 海津正彦/訳	山と溪谷社	1300	文庫判	509p
ヤマケイ文庫 ドキュメント滑落遭難		羽根田 治	山と溪谷社	800	文庫判	253p
ヤマケイ文庫 ドキュメント気象遭難		羽根田 治	山と溪谷社	800	文庫判	286p
ヤマケイ文庫 ヘビーデューティーの本		小林泰彦	山と溪谷社	850	文庫判	301p
ヤマケイ文庫 マッターホルン北壁		小西政継	山と溪谷社	880	文庫判	283p
ヤマケイ文庫 山からの絵本		辻 まこと	山と溪谷社	1000	文庫判	225p
ヤマケイ文庫 山の仕事、山の暮らし		高桑信一	山と溪谷社	940	文庫判	381p
ヤマケイ文庫 山のパンセ		串田孫一	山と溪谷社	1100	文庫判	509p
ヤマケイ文庫 山の眼玉		畦地梅太郎	山と溪谷社	950	文庫判	237p
山ごはん		チーム山ゴハン!	日東書院本社	1200	A5	95p

花の山歩き 関東 低山ハイキングガイド	ばらむ	メイツ出版	1600	A5	144p
遙かなる山5—閑良屋会結成35周年記念	閑良屋会	遊人工房	2500	240 × 250	71p
日帰り名山詳細ルートガイド	樫出版社/編	樫出版社	1200	B5	143p
東ヒマラヤ探検史 ※新版	金子民雄	連合出版	2200	四六判	285p
ヒマラヤ・トレッキング紀行	坂大トキエ	白山書房	1800	A5	336p
百年前の山を旅する	服部文祥	新潮社	630	文庫判	236p
白夜の大岩壁に挑む—クライマー山野井夫妻	NHK 取材班	新潮社	630	文庫判	308p
ビューポイント志賀高原	中村至伸	ほおずき書籍 星雲社/発売	1290	170 × 190	108p
琵琶湖周辺の山を歩く	長宗清司	サンライズ出版	1800	A5	221p
風土 ※写真集	佐伯邦夫	桂書房	1800	200 × 220	127p
富士山	千野帽子/編	角川書店	666	文庫判	332p
富士山 ※写真集	大山行男	クレブリス	1600	200 × 230	108p
富士山 ※写真集	山下茂樹	青菁社	1500	150 × 210	95p
富士山 ※写真集	竹内敏信	出版芸術社	8000	300 × 310	107p
富士山—宇宙への連なり ※写真集	大山行男	毎日新聞社	1900	190 × 260	104p
富士山—極上の撮影術※写真集	三好和義	小学館	1800	190 × 190	135p
富士山—大自然への道案内	小山真人	岩波書店	900	新書判	236p
富士山構成資産ガイドブック	富士山世界文化遺産 登録推進両県合同会 議/編集協力	山梨日日新聞社	930	A5	77p
富士山構成資産ガイドブック 中国語版	牛鑫/中国語訳	山梨日日新聞社	1200	A5	77p
富士山構成資産ガイドブック 英語版	ジョーンズ晃代/英 語訳	山梨日日新聞社	1200	A5	77p
富士山のオキテ	工藤隆雄	新潮社	550	文庫判	308p
富士山の単語帳	佐野 充/編・著 田 部井淳子/監 富士 学会/企画	世界文化社	1800	A5	191p
富士山の文学	久保田 淳	角川学芸出版	820	文庫判	285p
富士山百画	富士山百画選定委員 会/編	美術出版社	1200	190 × 250	93p
富士山文化—その信仰遺跡を歩 く	竹内靱負	祥伝社	840	新書判	308p
富士山・村山古道を歩く 新版	畠堀操八	風濤社	1300	四六判	255p
富士山を語る	静岡新聞社/編	静岡新聞社	1500	四六判	196p
富士山を眺める山ハイクベスト 36	JTB パブリッシン グ/編	JTB パブリッ シング	950	B5	95p
ふたりの山スタイル	樫出版社/編	樫出版社	900	A4	143p
ブナの息吹、森の記憶—世界自 然遺産白神山地	根深 誠	七つ森書館	1600	164 × 132	206p
フリークライミングはじけまし た。	ハヤシユウキ	誠文堂新光社	1600	A5	175p
ふるさと兵庫 100 山	兵庫県山岳連盟/編	神戸新聞総合出 版センター	1800	A5	215p

テント山行	宮川 哲	山と溪谷社	1980	A5	239p
テント泊登山の基本	高橋庄太郎	山と溪谷社	1000	四六判	127p
東海登山口情報 300	全国登山口調査会/ 編	風媒社	1800	A5	272p
東京の里山 100 選	石原裕一郎	本の泉社	1400	A5	197p
冬人庵書房一山岳書蒐集家の 60 年	野口冬人	山と溪谷社	2000	四六判	268p
登頂竹内洋岳	塩野米松	筑摩書房	1600	四六判	242p
登山の哲学	竹内洋岳	N H K 出版	740	新書判	205p
登山・ハイキングを安全に楽し むためのよくわかる山の天気	平井史生	誠文堂新光社	1600	A5	189p
登山ボディのつくり方	芳須 勲	山と溪谷社	1000	四六判	128p
栃木の山 150	宇都宮ハイキングク ラブ/編	随想舎	1800	A5	335p
<b>【な】</b>					
南極と氷河の旅	成瀬廉二	新風書房	800	新書判	239p
西丹沢登山詳細図	守屋益男	吉備人出版	857	230 × 112	1p
西富士 100 の素顔	東京農大西富士 100 の素顔編集委員会/ 編	東京農業大学出 版会	1600	四六判	164p
日本アルプス詳細ルートガイド	榎出版社/編	榎出版社	1200	B5	141p
日本山岳紀行—ドイツ人が見た 明治末の信州	W. シュタイニッ ツァー/著 安藤 勉/訳	信濃毎日新聞社	1400	四六判	305p
日本人はなぜ富士山を求めると か	島田裕巳	徳間書店	950	新書判	223p
日本のスキー・スケート—明治 ・大正期の長野県	白田 明	信毎書籍出版セ ンター	2500	A5	415p
日本の屋根—北・南・中央アル プスと日本列島の大分水嶺	栗田貞多男/写真・ 編 田部井淳子/監	世界文化社	2200	220 × 280	127p
日本のロングトレイル	榎出版社/編	榎出版社	1200	B5	144p
日本 100 低名山を歩く	低い山を歩く会/監	角川マガジズ	840	新書判	251p
日本百富士	敷島悦朗	三一書房	1900	四六判	319p
ネイチャーハイク入門	松倉一夫	JTB パブリッ シング	1300	A5	159p
野に咲く花—写真検索 ※増補改訂新版	林 弥栄/監	山と溪谷社	4200	A5	664p
のんびり行こう！中国・四国山 歩きガイド	山歩きの会・遊道山	メイツ出版	1600	A5	128p
<b>【は】</b>					
ハイキング・ハンドブック	村上宜寛	新曜社	2600	四六判	295p
箱根登山鉄道 125 年のあゆみ	生方良雄	JTB パブリッ シング	1800	A5	175p
はじめてのヒマラヤ登山 ※写真集	「目指せ、ネパール」 登山チーム	誠文堂新光社	1800	A5	223p
始める！スノーシュー	石丸哲也	山と溪谷社	1600	A5	111p
始める！山歩き	佐々木 亨	山と溪谷社	1500	A5	111p
バックカントリー スキー&ス ノーボード	伊藤フミヒロ	山と溪谷社	1980	A5	239p

新訳日本奥地紀行	イザベラ・バード/ 著 金坂清則/訳	平凡社	3200	四六判	537p
皇海山と足尾山塊 ※改訂版 図解ひも&ロープの結び方	増田 宏 羽根田 治/監	白山書房 日本文芸社	2800 900	A5 四六判	281p 223p
鈴木みきの山の足あと	鈴木みき	山と溪谷社	1200	A5	127p
ステップアップ山登り 第1巻	角谷道弘	小学館	840	B5	65p
ステップアップ山登り 第2巻	角谷道弘	小学館	840	B5	65p
ステップアップ山登り 第3巻	角谷道弘	小学館	840	B5	65p
ステップアップ山登り 第4巻	角谷道弘	小学館	880	B5	65p
ステップアップ山登り 第5巻	角谷道弘	小学館	880	B5	60p
静山巡歴	松崎中正	白山書房	1700	四六判	263p
聖地チベットの旅ーカイラス・ マナサロワール紀行	金子民雄	連合出版	2500	四六判	319p
世界遺産春日山原始林	前迫ゆり・他	ナカニシヤ出版	2500	A5	275p
世界遺産「熊野古道」	伊勢・熊野巡礼部	メイツ出版	1600	A5	128p
世界遺産富士山 ※写真集	白旗史朗	新日本出版社	8000	310 × 310	179p
世界の山岳大百科	ドーリング・キンダ スリー社/編	山と溪谷社	9800	A4	360p
世界文化遺産 富士山のすごい ひみつ 100	グループ・コロンブ ス/編	主婦と生活社	960	A5	115p
絶景富士山と日本百名山	洋泉社/編	洋泉社	1700	A4	110p
相州大山 今昔史跡めぐり	宮崎武雄	風人社	1800	四六判	222p
宙富士 ※写真集	森 光伸	光村推古書院	2400	A5	191p
それでもわたしは山に登る 【た】	田部井淳子	文藝春秋	1400	四六判	206p
高尾山の花名さがし	遠藤 進・佐藤美知 男	揺籃社	1000	新書判	71p
高尾山 花のブチ歩き	ふうか	アルファ	800	B6	63p
高尾山 花のブチ歩き2	ふうか	アルファ	800	B6	64p
高く遠い夢ふたたび	三浦雄一郎	双葉社	1500	四六判	247p
立山一風の記憶 ※写真集	柳木昭信	山と溪谷社	3200	220 × 300	95p
田中澄江が歩いた北海道の山	滝本幸夫	北海道新聞社	1400	四六判	244p
谷川岳・越後・上信越の山ーヤ マケイアルペンガイド	西田省三・堀金 裕	山と溪谷社	2400	A5	208p
旅とチベットと僕	棚瀬慈郎	講談社	2000	四六判	272p
丹沢夢風景 ※写真集	石原永昌	山と溪谷社	2500	190 × 270	80p
地形図を読む技術	山岡光治	ソフトバンクク リエイティブ	1300	新書判	285p
地図の楽しみ方	洋泉社/編	洋泉社	1800	A4	127p
地図の読み方ー地図アプリの使 い方	JTB パブリッシン グ/編	JTB パブリッ シング	1300	A5	159p
秩父・奥秩父の山塊 ※写真集	高橋 正	幹書房	3500	230 × 260	160p
チベット人の中で	イザベラ・バード/ 著 高畑美代子・長 尾史郎/訳	中央公論事業出 版	1600	四六判	165p
月更紗 山	谷田川 武	講談社ビジネス パートナーズ	1600	四六判	409p
月に咲えるオオカミー写真をめ ぐるエッセー	水越 武	岩波書店	1900	四六判	152p
鉄馬登山家	廣澤誠吉	風詠社	1800	A5	172p

GREENLAND 海と山10年の軌跡	なまら癖-Xグリーンランド遠征隊	エイチエス	2000	B5	151p
グレートジャーニー探検記	関野吉晴	徳間書店	1200	A5	79p
群馬の県境を歩く	椋澤初男	上毛新聞社	1500	A5	189p
激走!日本アルプス大縦走	NHK スペシャル取材班	集英社	1500	四六判	315p
古賀志山の花	五十嵐征治・五十嵐史子	下野新聞社	1000	四六判	99p
子どもと登るはじめての富士山	関 良一	旬報社	1400	A5	119p
こどもと始める家族で山登り	CSP/編	阪急コミュニケーションズ	1500	A5	143p
コン・ティキ号探検記	トール・ハイエルダール/著 水口志計夫/訳	河出書房新社	850	文庫判	389p
<b>【さ】</b>					
沢登り	手嶋亨と童人トマの風	山と溪谷社	1980	A5	247p
山岳・音楽・文学	川島由夫	朝日出版社	1720	四六判	399p
山岳気象予報士で恩返し	猪熊隆之	三五館	1500	四六判	238p
山岳に生きる建築—日本の近代	梅干野成央/編	信州大学山岳科学総合研究所	940	A5	79p
登山と山小屋の建築史					
山想つれづれ	江口敬一/文 高橋暁子/絵	中日メディアブレーン	1200	150 × 210	117p
山頂駅からの山歩き 西日本	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	1400	A5	175p
山頂駅からの山歩き 東日本	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	1400	A5	175p
四季 山への想い ※写真集	中山禮子	日本写真企画	2500	267 × 247	96p
湿原力	辻井達一	北海道新聞社	1400	四六判	183p
実例から学べる!山の病気とケガ	野口いづみ	山と溪谷社	1600	A5	111p
憧憬の山々—労山の歴史のなかで	安田一郎	本の泉社	1300	四六判	206p
上州中山道の地形散歩	熊原康博	上毛新聞社	460	A5	93p
初代竹内洋岳に聞く	塩野米松	筑摩書房	1100	文庫判	528p
白神学 第3巻	山下祐介	企画集団プリズム	1500	A5	191p
知られざる富士山	上村信太郎	山と溪谷社	1200	四六判	255p
白馬オールトレイルガイド	樞出版社/編	樞出版社	1000	A4	144p
信州観光パノラマ絵図—鳥瞰図でたどる大正~昭和初期の鉄道・山岳・温泉	信濃毎日新聞社出版部/編 今尾恵介/監	信濃毎日新聞社	1700	A5	239p
信州高原トレッキングガイド ※増補改訂版	日野 東	信濃毎日新聞社	1600	A5	223p
信州の山 中信・南信 221山	宮坂七郎	信毎書籍出版センター	2000	A4	193p
信州の山 北信・東信 209山	宮坂七郎	信毎書籍出版センター	2000	A4	185p
信州山歩き地図 北信編・東信編	中嶋 豊	信濃毎日新聞社	1800	A4	159p

一歩ずつの山歩き入門	四角友里	榎出版社	1200	A5	205p
一歩を越える勇氣	栗城史多	サンマーク出版	600	文庫判	237p
岩手山 ※第3版	岩手日報社企画出版部/編	岩手日報社	1200	A5	79p
ウォーターウォーキング2	丹沢ネットワーク	白山書房	1900	A5	165p
海を渡った白山信仰	前田速夫	現代書館	2000	四六判	222p
ウルトラライトハイカー	山と溪谷社アウトドア出版部/編	山と溪谷社	1500	A5	143p
雲南省ハニ族の生活誌	須藤 護	ミネルヴァ書房	4500	四六判	280p
永遠の日本	白川義員	小学館	95000	A3	516p
尾瀬と周辺の山をあらく	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	1400	A5	159p
大人の男のこだわり野遊び術	本山賢司・細田 充・真木 隆	山と溪谷社	930	文庫判	349p
斧・熊・ロッキー山脈 ※増補新版	クリスティーン・バイル/著 三木直子/訳	築地書館	2400	四六判	318p
オホーツクの生態系とその保全	桜井泰憲・大島慶一郎・大泰司紀之	北海道大学出版会	12000	B5	484p
<b>【か】</b>					
活火山 桜島 ※写真集	西井上剛資	南方新社	2500	198 × 228	119p
神々への道—米国人天文学者の見た神秘の国・日本	パーシヴァル・ローエル/著 平岡 厚・上村和也/訳	国書刊行会	3400	四六判	297p
カメラが撮らえた富士山の明治・大正・昭和	石津伸子	中経出版	1800	140 × 160	255p
関西の山をあそぶ本	京阪神エルマガジン社/編	京阪神エルマガジン社	840	B5	112p
感應の霊峰七面山	鹿野貴司	平凡社	2800	B5	74p
北東北ほろ酔い溪流釣り紀行	根深 誠	無明舎出版	1700	四六判	239p
北に生きるシカたち	高槻成紀	丸善出版	2400	四六判	267p
北の山河抄	新谷暁生	東京新聞	1700	A5	263p
吉備路の山 登山詳細図	成友 博	吉備人出版	500	230 × 114	1p
吉備の中山を歩く	熊代哲士・熊代建治	日本文教出版	860	文庫判	164p
Q & A 登山の基本	山と溪谷社ワンダーフォーゲル編集部/編	山と溪谷社	1000	四六判	127p
九州の山—ヤマケイアルペンガイド	山と溪谷社/編	山と溪谷社	2500	A5	240p
九州の山歩き 北部編	福岡山の会/編	海鳥社	1800	A5	207p
九州山歩きガイド	月刊九州王国編集部	メイツ出版	1600	A5	144p
極限への挑戦者	ラインホルト・メスナー/著 ライフ・ペーター・メルティン/編 スラニー京子/訳	東京新聞	1800	A5	319p
銀嶺に向かって歌え—クライマー小川登喜男伝	深野稔生	みすず書房	2800	四六判	311p
久住昌之のこんどは山かい!? 関東編	久住昌之	山と溪谷社	1200	四六判	191p
クライマー魂	木本 哲	東京新聞	1900	A5	455p

# 山岳図書目録 (2013年)

日本山岳会図書委員会

2013年の特徴は、富士山の世界遺産登録に伴った富士山関連本の出版点数に顕著に現われました。登山以外でも、観光資源として、宗教的立場から、地形学から、また災害対策なども含めて、様々な分野の富士山本が出版されました。その多様性を感じてもらうために主な本をリストアップしましたが、まだまだたくさん出版されているをご理解下さい。また、これまで登山の分野を扱わなかった出版社が、富士山登山のガイドブックに参入したため、ムック形式のガイドブックが書店の雑誌コーナーを賑わせました。すべてを確認できないため、一部を除いて目録への掲載を控えました。

また、昨今の本の世界の大きな変化としては、電子書籍の出現が挙げられます。地図や植物図鑑などの分野での活用は進んでいますが、山の本の世界ではまだ少なく、既刊書籍の一部デジタル化という段階のようです。今後の注目が必要と考えています。

\*判型が数字で表示されているものの単位はmm(天地×左右)、価格は原則として本体価格ですが、ごく一部税込みになっています。

## 山岳図書目録

書名	著者名	発行所	価格	判型	ページ数
【あ】					
赤ちゃんから始めました親子登山	新井和也	東京新聞	1600	A5	159p
秋田駒ヶ岳	岩手日報社/編	岩手日報社	1200	A5	79p
あこがれの名山ルート&スーパーデータBOOK	中田真二	学研パブリッシング	1700	B5	159p
あこがれの山登り100の基本	学研パブリッシング/編	学研パブリッシング	1200	B5	111p
浅間山信仰の歴史	岡村知彦	信濃毎日新聞社	1200	四六判	244p
アララト一舟伝説と僕	フランク・ヴェスターマン/著 下村由一/訳	現代書館	2300	四六判	326p
歩いてみよう房総の自然	う沢喜久雄	崙書房	1300	新書判	218p
歩く旅をしよう	若菜晃子・他	NHK出版	1000	B5	113p
アルプスを越えろ! 激走100マイル	籾木 毅	新潮社	1300	四六判	205p
「アルプ」の時代	山口耀久	山と溪谷社	3300	A5	352p
イザベラ・バード一旅に生きた英国婦人	バット・バー/著 小野崎晶裕/訳	講談社	1250	文庫判	419p
頂きへ、そしてその先へ	竹内洋岳	東京書籍	1400	四六判	175p
一等三角点全国ガイド 続	一等三角点研究会	ナカニシヤ出版	1800	A5	189p



— 掲載広告一覧 —

カモシカスポーツ（表2）

山と溪谷社

(株)モンベル

アルパインツアーサービス(株)

アライテント

雷鳥沢ヒュッテ・ロッジ立山連峰

早月小屋

立山室堂山荘

槍ヶ岳山荘ほか

(株)好日山荘

カシオ< PRO TREK >

キャラバン

(株)アトラストレック（表3）

# ヤマケイ文庫

不朽の名著から話題のドキュメンタリーまで  
登山者必読の山の本が文庫で登場

加藤文太郎 新編 単独行

松濤明 新編 風雪のピヴァーク

松田宏也 ミニヤコンカ奇跡の生還

山野井泰史 垂直の記憶 岩と雪の7章

佐瀬稔 残された山靴

小林高礼 梅里雪山 十七人の友を探して

ラインホルト・メスナー ナンガ・パールバート単独行

深田久弥 わが愛する山々

ガストン・レビュファ 星と嵐 6つの北壁登行

羽根田治 空飛ぶ山岳救助隊

不破哲三 私の南アルプス

大倉崇裕 生還 山岳捜査官・釜谷亮二

堀公俊 日本の分水嶺

山と溪谷社編 【覆刻】山と溪谷 1・2・3 撰集

田部重治 山と溪谷 田部重治選集

市毛長枝 山なんて嫌いだった

田部井淳子 タベイさん、頂上だよ

羽根田治 ドキュメント 生還

本多勝一 日本人の冒険と「創造的な登山」

モリス・エルゾグ 処女峰アンナプルナ

新田次郎 新田次郎 山の歳時記



丸山直樹 ソロ 単独登攀者・山野井泰史

羽根田治 飯田肇 金田正嘉 山本正嘉 トムラウシ山遭難はなぜ起きたのか

船木上総 凍る体 低体温症の恐怖

佐瀬稔 狼は帰らず

高桑信一 山の仕事、山の暮らし

小西政継 マッターホルン北壁

谷甲州 単独行者 加藤文太郎伝 上・下

ジョン・クラカワー 空へ 悪夢のエヴェレスト1966年5月10日

長尾三郎 精鋭たちの挽歌 運命のエベレスト

羽根田治 ドキュメント 気象遭難

羽根田治 ドキュメント 滑落遭難

串田孫一 山のパンセ

畦地梅太郎 山の眼玉

辻まこと 山からの絵本

植村直己 北極圏1万2000キロ

本田靖春 K2に憑かれた男たち

原山智・山本明 「槍・穂高」名峰誕生のミステリー

奥山章 ザイルを結ぶとき

平塚昂人 ふたりのアキラ

高田直樹 なんて山登るねん

白石勝彦 大イワナの滝壺



山と溪谷社

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-11 住友不動産九段北ビル8階  
カスタマーセンター ☎03-5275-9064 / <http://www.yamakei.co.jp>

SINCE 1975  
**mont-bell**

世界最軽量\*

205g



雨の日を快適に

## トレントフライヤージャケット

世界最軽量・最小収納サイズ\*を実現した全天候型ウエア。徹底的に軽量化にこだわり、205gという驚異的な製品重量を達成しました。雨の多い日本のアウトドア・フィールドで快適に行動するために妥協を許さず作り込んだまさに究極の一着。

\*ゴアテックス®メンブレンを使用したレインウエアにおいて。2014年1月モンベル調べ。



#1128336 トレントフライヤージャケットMen's 税抜き価格 ¥19,500(+税) サイズ:S・M・L・XL / 収納サイズ:7×7×16cm(Mサイズ) / 重量:205g(Mサイズ)

株式会社 **モンベル**

【お問い合わせ】モンベル・カスタマー・サービス ☎0088-22-0031 / TEL.06-6536-5740  
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

[www.montbell.jp](http://www.montbell.jp)

# 登山とトレッキングの 専門旅行会社です。



アンナプルナ内院からのぞむアンナプルナI峰南壁

## オリジナルツアーを企画してみませんか。

山岳会、ハイキング・クラブ、山のお仲間などで企画するオーダーメイドの山旅を承ります。ぜひ、お気軽にお申し付けください。

## 山旅の出張説明会も承ります。

山のお仲間がお集まりの時に、世界の山旅に精通したスタッフが資料や映像をお持ちして皆さまの元へご説明にお伺いします。

## ツアーカタログをご請求ください。

世界中の山旅を掲載したカタログを無料でお送りいたします。お電話またはEメールにてお気軽にお申し付けください。ホームページでも最新のツアー情報をご覧いただけます。

## 世界の山旅・辺境の旅を手がけて45年の実績



日帰りハイキング



トレッキング



登頂ツアー



ネイチャリングツアー

旅行企画・実施



観光庁長官登録旅行業第490号/一般社団法人 日本旅行業協会 正会員

**アルパインツアーサービス株式会社**

本社/〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 (第7東洋海事ビル4階)

東京/☎03(3503)1911 大阪/☎06(6444)3033

名古屋/☎052(581)3211 福岡/☎092(715)1557

札幌/☎011(711)7106 仙台/☎022(265)4611 (転送)

(株)りんゆう観光 広島/☎082(542)1660 (転送)

アルパインツアー

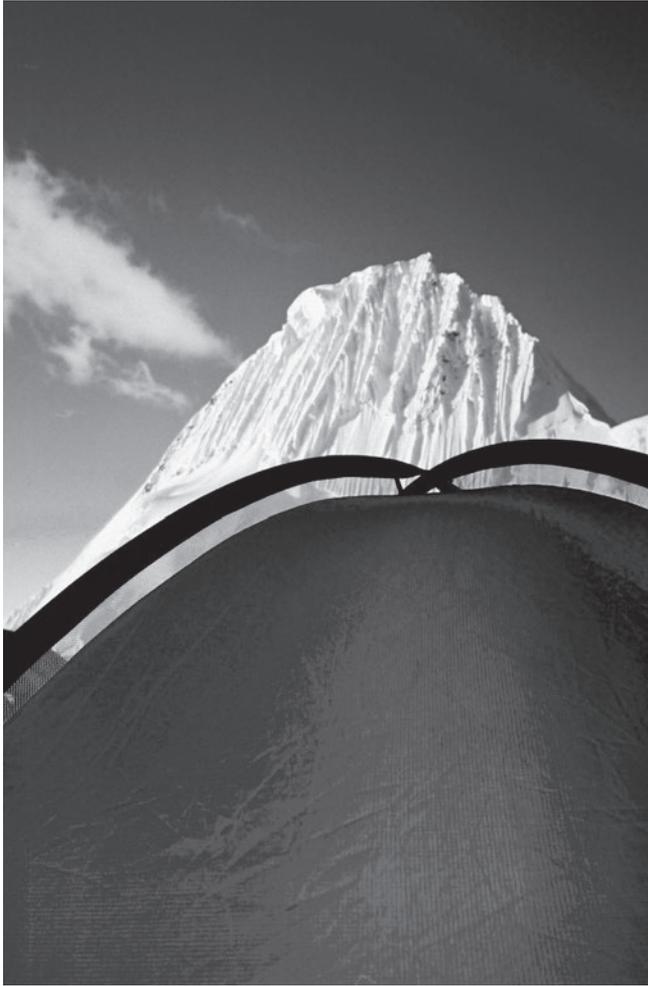
検索

ツアーカタログをご請求ください。

●営業時間・平日9:30~18:30 土日祝/定休

HP [www.alpine-tour.com](http://www.alpine-tour.com)

✉ [info@alpine-tour.com](mailto:info@alpine-tour.com)



アルパマヨ西南壁 佐藤嘉彦

ウラヤマでも、ヒマラヤでも

Made in JAPAN

**ARAI TENT**

[www.arai-tent.co.jp](http://www.arai-tent.co.jp) | 04-2944-5855

**\*立山・剣岳・大日岳の行き帰りにご利用ください。**



奥大日岳をバックに隣接するヒュッテ(左)とロッジ

雷鳥沢温泉 ◆ 湯量豊富な登山とハイキングの宿

**雷鳥沢ヒュッテ**

[シーズン中] TEL.076-463-1753

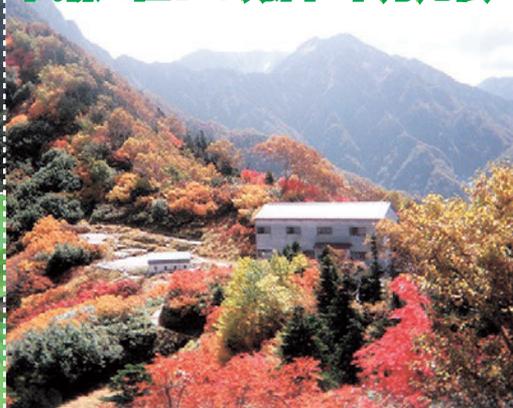
**ロッジ立山連峰**

[シーズン中] TEL.076-463-6004

事務所 TEL.076-482-1617 (FAX兼) <http://www.raichoza.net>



**試練と憧れの剣岳・早月尾根!**



◆ 馬場島から一直線 早月尾根は立派な立山杉や多くのお花も楽しめる尾根で、花の百名山にも載っています。

**早月小屋**

[シーズン中] TEL.090-7740-9233

[メール予約可] [hayatsuki@ma.net3-tv.net](mailto:hayatsuki@ma.net3-tv.net)

<http://www.net3-tv.net/~hayatsuki/> 〒930-1406 富山県中新川郡立山町芦崎寺63-2 佐伯謙一



残雪、花、そして新雪まで  
立山を楽しむベースキャンプとして  
ご利用下さい。

◆ バスターミナルより徒歩10分

**立山室堂山荘**

TEL 076-463-1228

<http://www.murodou.co.jp>

**槍ヶ岳山荘**

☎090-2641-1911

**槍沢ロッヂ**

☎0263-95-2626

**南岳小屋**

☎090-4524-9448

**大天井ヒュッテ**

☎090-1401-7884

**岳沢小屋**

☎090-2546-2100

[事務所]

〒390-0813

長野県松本市埋橋 1-7-2

TEL. (0263) 35-7200

FAX. (0263) 35-0637

あこがれの  
槍ヶ岳。



<http://www.yarigatake.co.jp/>

無料ARアプリ「COCOAR」をダウンロードしてこの広告にスマートフォンをかざすとAR特選動画が見られます。



CLIMBING GYM  
GRAVITY RESEARCH  
KOBE

みんなのクライミングが  
ここにある!

あなたの街の登山口

次に登る日を、もっと好い日に。

好日山荘

好日山荘店舗

●北海道	イオンモール東久留米店：042-497-4101	京都店：075-708-5178
サッポロファクトリー店：011-522-5513	ららぽーと横浜店：045-933-9100	北大路ビブレ店：075-366-6552
グラビティリサーチ札幌：011-206-1323	横浜西口店：045-317-1049	グランフロント大阪店：06-6485-7230
●関東・甲信越エリア	さいか屋川崎店：044-281-6036	なんば店：06-6645-0630
新潟亀田店：025-378-5123	さいか屋横須賀店：046-854-5501	ならファミリー近鉄百貨店奈良店：0742-93-4555
白馬店：0261-85-2560	さいか屋藤沢店：0466-24-1977	紀三井寺店：073-448-2001
松本パルコ店：0263-31-0580	ロックラズ店：03-5659-0808	川西店：072-744-0315
ララスクエア宇都宮店：028-678-2940	●東海・北陸エリア	神戸本店：078-265-2045
LALA ガーデンつくば店：029-850-1265	静岡パルコ店：054-275-0018	明石大久保店：078-938-2010
浦和パルコ店：048-764-9701	浜松メイワン店：053-482-7805	イオンタウン姫路店：079-280-5520
千葉パルコ店：043-301-2380	名古屋栄店：052-269-1821	●中国・四国エリア
伊勢丹松戸店：047-710-3552	名古屋駅前店：052-414-7100	岡山駅前店：086-801-3133
ららぽーと TOKYO-BAY 店：047-402-2590	春日井店：0568-86-0051	広島ゼロゲート店：082-569-6031
銀座 好日山荘：03-6228-5018	イオンモール各務原店：058-380-0014	●九州エリア
新宿東口店：03-6380-1515	四日市店：059-329-7500	アイム小倉店：093-512-3455
池袋西口店：03-5958-4315	富山豊田東店：076-426-1001	福岡パルコ店：092-791-6654
町田店：042-739-7017	金沢西インター大通り店：076-292-8020	Mt GEAR 大名：092-406-7850
玉川ガーデンアイランド店：03-3700-2550	福井北四ツ居店：0776-52-7015	太宰府インター店：092-513-0030
調布パルコ店：042-426-8055	●近畿エリア	熊本パルコ店：096-288-3652
瑞穂店：042-568-7913	大津パルコ店：077-514-8758	マルヤガーデンズ鹿児島店：099-805-0124

常圧低酸素室稼動中

グランフロント大阪店 瑞穂店

※詳しくは直接店舗までお問い合わせください。

クライミングジム

【GRAVITY RESEARCH KOBE】TEL：078-855-8043  
兵庫県神戸市中央区磯上通 4-3-10 IPSX EAST 1F  
【GRAVITY RESEARCH UMEDA】TEL：06-6485-7363  
大阪府大阪市北区大深町 3-1 グランフロント大阪ナレッジキャピタル 6F  
【GRAVITY RESEARCH NAMBA】TEL：06-6645-0631  
大阪府大阪市中央区難波千日前 12-35 スイングヨシモトビル 3F、4F  
【GRAVITY RESEARCH MIE】TEL：059-329-7777  
三重県四日市市諏訪栄町 6-4 スターアイランド 3F  
【GRAVITY RESEARCH UMEDA】TEL：06-6485-7363  
大阪府大阪市北区大深町 3-1 グランフロント大阪ナレッジキャピタル 6F

【GRAVITY RESEARCH TOKYO-BAY】TEL：047-404-8961  
千葉県船橋市浜町 2-1-1 ららぽーと TOKYO-BAY 南館 3F  
【GRAVITY RESEARCH SAPPORO】TEL：011-206-1323  
北海道札幌市中央区北二条東 4 丁目 サッポロファクトリー 1 条館 1F  
【GRAVITY RESEARCH NIIGATA】TEL：025-378-5123  
新潟県新潟市江南区五月町 2-7-22  
【GRAVITY RESEARCH OKAYAMA】TEL：086-801-3133  
岡山県岡山市北区本町 6-36 第一セントラルビル 1・2F



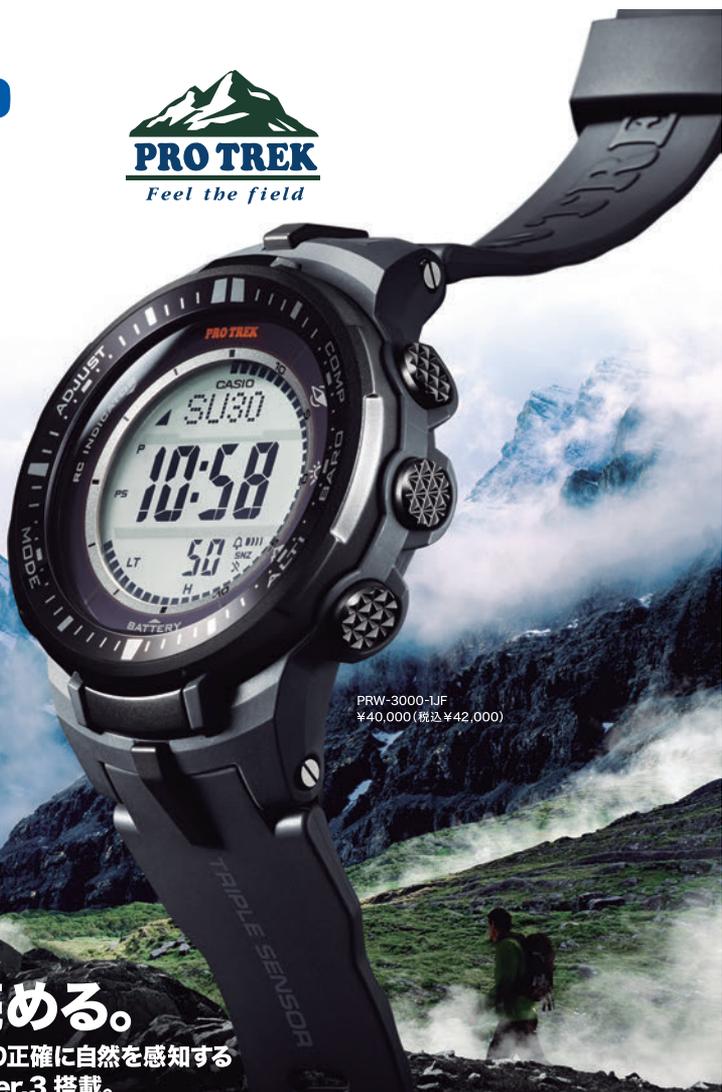
CLIMBING GYM  
GRAVITY RESEARCH

好日山荘ウェブサイト

好日山荘ホームページ <http://www.kojitusanso.jp/>

株式会社 好日山荘 本社/兵庫県神戸市中央区浜辺通 2 丁目 1-30 三宮国際ビル 6F

# CASIO



PRW-3000-1JF  
¥40,000(税込¥42,000)

## 自然は読める。

より速く、より長く、より正確に自然を感知する  
トリプルセンサー Ver.3 搭載。

高度 1秒間隔※/  
1m単位で計測



方位 60秒間  
連続計測



気圧 急激な変化を  
アラーム通知



[大型ダイレクトボタン]



※高度計測を開始してから3分間は1秒計測、  
その後は2分/5秒間隔(切替可能)で計測します。

## 電波ソーラープロトレックPRW-3000誕生。

- タフソーラー
- マルチバンド6(世界6局の標準電波に対応)
- 10気圧防水
- 気圧傾向インフォメーションアラーム
- 日の出・日の入り時刻表示
- フルオート高輝度LEDライト
- ソフトフレーションバンド

protrek.jp

Caravan®



# キャラバンシューズで 山へ行こう。

一歩一歩、大地を感じながら、足場を確かめながら、ゆっくりと頂を目指していく。  
1954年以来、キャラバンが歩んで来た歴史も、そんな山登りと似ている。  
一足の登山靴から始まり、クラフトマンシップを受け継ぎながら、  
急がず、流されず、すべての人が満足する登山靴を追求し続けて今年で60年。  
これからも、本物だけを目指す私たちのモノづくりの姿勢に変わりはない。

**C1\_02S** ¥14,800 (税抜価格) [0010106]

重 量：約590g (26.0cm片足標準)  
ワ イ ズ：3E  
ア ッ パー：メッシュナイロン/合成皮革  
(トゥガード/TPU補強)  
ライニング：ゴアテックス®メンブレン  
ソ ー ル：キャラバントレックソール (ミッドソール：EVA)  
フレックス：ライトフレーム (EVAラミネート)  
インソール：EVAインソール  
オプション：ハーフィンソール

カラー/サイズ  
100グレー/24.5~29.0・30.0cm  
220レッド/22.5~26.0cm  
440ブラウン/22.5~29.0・30.0cm  
670ネイビー/24.5~29.0・30.0cm  
[全4色]



株式会社 **キャラバン**

東 京 本 社 〒170-0002 東京都豊島区巢鴨1-25-7 TEL (03) 3944-2331 (代) FAX (03) 3944-6540

大 阪 営 業 所 〒564-0051 大阪府吹田市豊津町15-11 江坂石周ビル5階A TEL (06) 6338-3557 (代) FAX (06) 6338-3564

<http://www.caravan-web.com/>



公益社団法人 日本山岳会  
The Japanese Alpine Club

—1905(明治38)年設立—

住所：〒102-0081 東京都千代田区四番町5-4 サンビューハイツ四番町

2013 年度役員・評議員・支部長名簿

会 長	森 武昭			
副 会 長	節田 重節	黒川 恵	古野 淳	
常務理事	高原 三平	吉川 正幸	佐藤 守	
理 事	勝山 康雄	山田 和人	野口 いづみ	
	大槻 利行	落合 正治	川瀬 恵一	
	山賀 純一	直江 俊式		
監 事	吉永 英明	浜崎 一成		

評 議 員	田邊 壽	村井 龍一	宮崎 紘一	
	山本 良三	成川 隆顕	尾上 昇	
	神崎 忠男	橋本 清	小川 武	
	贄田 統亜	今村 千秋	内田 博	
	重廣 恒夫	大谷 亮	南井 英弘	

支部長	北海道 = 西山 泰正	青 森 = 大久保 勉	岩 手 = 菅原 敏夫
	宮 城 = 佐藤昭次郎	秋 田 = 佐々木民秀	山 形 = 粕谷 敏矩
	福 島 = 小林 正彦	茨 城 = 星埜 由尚	栃 木 = 山野井武夫
	群 馬 = 田中 壮吉	埼 玉 = 大久保春美	千 葉 = 諏訪 吉春
	東京多摩 = 竹中 彰	越 後 = 橋本 正巳	富 山 = 山田 信明
	石 川 = 中川 博人	福 井 = 森田 信人	山 梨 = 遠藤 靖彦
	信 濃 = 飯村 富彦	岐 阜 = 高木 基揚	静 岡 = 大島 康弘
	東 海 = 小川 務	京 都・滋 賀 = 田中昌二郎	関 西 = 重廣 恒夫
	山 陰 = 中井 俊一	広 島 = 兼森 志郎	四 国 = 尾野 益大
	福 岡 = 中馬 董人	北九州 = 伊藤久次郎	熊 本 = 工藤 文昭
	東九州 = 加藤 英彦	宮 崎 = 末永 軍朗	

## 編集後記

『山岳』第百九年（2014年）号をお届けします。今年度号は6月末の刊行予定でしたが1ヶ月ほど遅れてしまい、ご迷惑をおかけしました。遅れた分、読み応えのあるラインナップになっていくかと思えます。お楽しみいただければ幸いです。

「記録」欄は、久しぶりに未踏峰の初登頂記録が届きました。青山学院大学山岳部隊によるアウトライアー（ジャナク・チュリ）南西壁からの初登頂です。この山域は同大学隊が1965年から狙っていた、いわば因縁の山で、その執念が実った素晴らしい記録です。

一方、海外登山助成金を交付されて中国四川省・横断山脈の双橋溝大溝周辺の未踏の岩峰群に挑んだのは、慶應義塾大学山岳部の3つのクライミング・チーム。かつてザイルを組んだ山仲間たちが、休暇をやりくりして、それぞれの想いを持ってクライミングを楽しんだ様子が、行間から伝わってきます。過去に同大が送り出した登山隊とは少々趣が異なりますが、今後の大学山岳部の遠征隊の一つの形を示していると思います。

「調査・研究」欄では、昨年10月20日、静岡で開催された「第29回全国支部懇談会」で特別講演をしてくださった安間社会員に、改めて富士山におけるスラッシュ・雪崩と積雪のスラッシュ化に起因する山岳遭難事故の恐ろしさについて、現場写真と共にまとめていただきました。スラッシュ・アバランチ（融雪雪崩）にスラッシュ・フロー（融雪流）が加わって、雪崩そのものだけでなく低体温症も含め計24名もの命が奪われた真相が明らかにされています。

児玉茂・元「山岳」編集長には、70ページもの労作を発表していただきました。機関誌である『山岳』は、日本山岳会の歴史そのもので、日本の近代登山史を映す鏡です。本稿から時代の流れ

や登山の変遷、編集人の交代と共に『山岳』の表紙デザインをはじめ内容が変化していく様子が良く分かります。特に創刊号から昨年度号までの表紙を俯瞰したとき、その時代時代の登山界の流れが表れているように感じ、興味を惹かれます。

「読物」欄では、本会会員の平均年齢を超えながら、いまだ青春時代の情熱を抱いてヒマラヤに挑んでおられる南井英弘会員に、定年退職後の足跡を綴っていただきました。昨年モメラ・ピークに登頂されていますが、まさに「中高年登山者の鑑」と呼ぶにふさわしい活躍ぶりです。

AACKの高橋健治さんのお名前は、剣岳・チンネの初登攀者であり、命名者であるとして古くから知られていますが、奥様のローゼ・レッサさんのことを知る人は少ないでしょう。「高橋健治とローゼ・レッサのことは、永年、気になっていたテーマでしたので、お陰さまで記録を残すことができて、嬉しく思います」というお手紙を添えられて、近藤緑会員から緑爽会シンポジウムの原稿が届きました。激動の時代に花開いた2本の赤いバラのようなお二人の人生ドラマを、じっくりと味わっていただきたいと思えます。

\*  
表紙の版面をご提供いただいた塚本晴雄さんが、本年6月、ご逝去されました。3回だけのご登場でしたが、心より御礼を申し上げます。

（節田 重節）

『山岳』編集委員会

担当理事／委員長 節田重節

委員 成川隆顕、永田弘太郎、萩原浩司、小泉弘

山岳 第百九年（通卷一六七号）

二〇一四年八月十五日発行

価三五〇〇円

発行所 公益社 日本山岳会

東京都千代田区四番町五―四  
サンビュールハイツ四番町

（〒一〇〇二一〇〇八一）

電話 〇三―三三二六一―四四三三三  
振替口座 〇〇二三〇一―四八二九

発行人 森 武昭

編集人 節 田 重 節

印刷所 株式会社 東京印刷

発売所 株式会社 茗 溪 堂

東京都千代田区三崎町三二―一三  
電話 〇三―三三二一―一八七〇

振替口座 〇〇一八〇一―二四七三三

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載  
を禁じます。